
魔法先生ネギま！～最果てを紡ぐモノ～

Wolke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜最果てを紡ぐモノ〜

【Nコード】

N6741M

【作者名】

Wolke

【あらすじ】

「頼りにしてるえ、お兄様」そう言つて、からからと笑いながら抱きついてくるマイスター。気付けば俺も答えるように妹の背に手を回しており、……おや？ 周囲から諦観に近い視線が送られてくる。何だよ、見せ付けてやるぞコノヤロー。

これは、妹と一線を超えそうになったり、超えなかつたりしながら、色んな事件に首を突っ込んで、当事者たちの意思なんて関係なく解決してしまう、そんな物語。

ではここで命題を一つ。「俺の妹は誰よりも可愛い」

プロローグ（前書き）

この作品は処女作で至らない点が多くあると思いますがご容赦ください。

プロローグ

あーあ。死んじやったよ。

なんか第一声から重くてゴメンね。でもしょうがないじゃん。死んじやったんだもん。

しかも死に様がなあ。道路に飛び出した幼女庇って轢かれるとかならまだしも、銃持った銀行強盗に人質にされてその逮捕劇の流れ弾に当たって即死という、運が悪いとしか言いようがない。

選択の余地がなく流され主義の俺としてはびったりな死に方だが遺言ぐらいは言い残して置きたかった。

「で、アンタ誰よ？」

しかし、俺は特にこれといって過去をグダグダと考える性格でもないし（例えそれが自分の死であっても）、今現在目の前で起こっていることのほうが重要でしょ。

という訳で俺はこの白い殺風景の部屋で向かい合っている女性に話しかける。

女性というか美女と言った方が相応しいと思う。優雅に結い上げた陽の光のような金の髪と、晴れ渡る冬空のような色の瞳。

とても人とは思えない美しさ。

「この度は部下の職務怠慢のせいで死なせてしまい、大変申し訳ご

「ごめんでした」

そして唐突に深々と頭を下げられた。

「うん。で、アンタ誰よ？」

俺はその行動を完全に無視しさつきと全く同じ質問をする。

謝るのはそっちの勝手だけど、こっちの質問にはちゃんと答えて欲しいよね。

「私はこの世界の神と呼ばれる存在で、あなたを手違いで」

「あーはいはい。大体読めた。ま、あそこで死ぬはずじゃない運命の俺が間違いで殺されちゃったと」

「すみませんでしたっ！」

「まあいいさ。過ぎちゃったことをとやかく言っても無駄でしょう。別に責めたりしないから頭を上げて」

ポカーンと呆然する女神様。うん。女神ならこんなに綺麗なのも納得だ。

「は？ えっ!?!? あの、今回はこちらの不手際で何を言われても仕方がないというか、普通もつと怒ったりしますよ？」

最後疑問系になってますよ。ていうか俺ってそんなにおかしいかなあ。今日日最近の若者で後悔しながら生きて死んだとき未練残すやつって少数派のような気がするんだが。

で、俺は大多数派になる訳で明日死のうと来年死のうと結果も過程もほとんど一緒でしょ、と割り切れる人間なんだよな。

「なんだか調子狂うなあ」

と女神に言わせるくらいだからやはり俺はレアケースなんだろう。

「えっと、それじゃあ貴方にはこれから天国に行ってもらうことに

」

「おいおい。おいおいおいおい。責めはしないが、いつ許すと言った？」

固まる女神。オーケー。前言撤回。俺はかなり珍しいタイプの人間のようだ。

「勝手に殺しといて天国なんて曖昧なモンに招待されてもねえ。俺無神論者だからそういうのは一切信じてないんだよ」

「いや、でも、ここに神様がいるし、天国だってありますよ」

「じゃあお前が神だと証明してみせるよ。俺を生き返らせてくれたら一発で信じてあげよう」

「それはちょっと……。運命の方も貴方が死んだ後修正されてしまいましたし」

「今俺の中で貴女の存在価値と道端の石ころの存在価値がちょうど同じくらいですね」

責めないって言うておきながらちゃっかり責めてるじゃないかって？ さつき言っただでしょ前言撤回だと。前言撤回は俺の十八番だ。

「まあ、仮に運命を定義するなら俺にはまだ余生が残ってるはずでその分生きられないってのは納得できないねえ」

「な、なら！ こういうのはどうでしょう！ 別の世界に転生して新しい人生を歩むというのは」

大体テンプレ通りの展開に持ち込めたな。強気に出れるのは被害者の特権だ。最近はカルシウム不足の加害者もいたりするが。

「マンガや小説の世界でも可？」

「はい。できる限りご要望にはお答えします。なんなら特殊能力でも」

「そう。じゃあ世界は『魔法先生ネギま！』で。能力も三つ四つ頼むけどいいかい？」

「世界の方は大丈夫です。能力は無理難題でなければ」

「まず、多少精度落ちていいから妖精眼グラム・サイトと直死の魔眼を足して二で割ったような魔眼を。発動は任意。頭痛とかは消してくれると嬉しい」

「いきなりチートですか」

チートですよ。原作ブレイクに決まってるじゃないですか。

「二つ目。これも一応眼になるのかな。鑢家家長、鑢七実と同じくらしいの見稽古のスキルを」

『刀語』より。

「ええ。もう突っ込みませんよ」

それは許可すると捉えていいんですよ。自分で言っというて何だが魔力の流れを見切る妖精眼と見稽古ってチートだな。

どんな魔法だろうと習得し放題。

「三つ目。超一流の曲弦師と音使いの技術を」

はい。『戲言シリーズ』です。この二つは自分の中で最強だと思ってる。さっきからの注文で分かると思うが私は西尾維新先生が大好きです。

「サービスで絶対音感とガンダールヴの楽器版のような能力も付けてあげます」

マジ？ それはつまり触るだけでどんな楽器も演奏できるってことですね。それに絶対音感とは純粹に嬉しい。

「それじゃあ送ってください」

「え？ もういいですか？ 魔力や気の量、それに生まれる時代なんかは決めてませんけど」

「ああ。そういうのは貴女に任せるよ。生まれは原作キャラとの絡みがあればいい」

「欲があるのか無いのか分からない人ですね」

注文をした内容を見るならかなりの強欲だと思っが。

いや、王の財宝や無限の剣製なんかを頼むのに比べたらマシンな方になるのか？

「では、送りますよ」

「お願いします」

俺の足元が光りだす。

「ああそうだ」

ふと思いついたので『戯言シリーズ』の台詞をリスペクト。

「それでは、縁があつたらまた会いましょう」

ここで俺の意識はブラックアウトした。

第一話：幼少期

転生ね。一応成功したよ。生まれた先がちょっと予想外すぎたけど。

じゃ、この場を借りて自己紹介しておこうか。俺の名前は近衛^{サイキ}彩輝。
近衛木乃香の双子の兄です。本当にありがとうございます。

1/2の確率で性転換は覚悟してたんだけどね。今度も男で良かったよ。

しかし本音を言えば大戦に参加したかった。暴れたかったなあ。中二な二つ名欲しかったなあ。

あと少し気になっていた魔力と気の量は平均の倍あるかないかくらいかな。

まあ、双子だからね。極東随一の魔力保有量の木乃香と何かと比べられることもあるが、基本そついうことを言っているヤツは五歳の俺でも三秒あれば解体できるような雑魚なので相手にするほうが無駄だろう。

魔力や気なんて後天的なもので人を測ってる時点で器の小ささ露呈してるし、裏技使えば木乃香の保有量簡単に抜けるよ。

と、周りの風評なんかは燃えるゴミなんかと一緒に捨てておいて、俺は今珍しく真剣に狐の仮面を作っている。

なんか最近ネットでコメントが流れる動画サイトが出来たらしいんだが、演奏してみたでうpしたくて。

それでどうせやるなら徹底的に拘ろうと作っているのさ。

必要な機材なんかは詠春に頼み込んで買ってもらおう。アレは親馬鹿だから多分買ってもらえるはず。」

そうそう。詠春といえば、さっき俺の制作作業を見に来たんだが何故か遠い目をして一声かけた後立ち去ってしまった。なんだったんだ？

そんなこんなを考えているうちに、仕上げのニスを塗り終わって、

「出来たあああああああああ！！！」

ようやく完成。

ふう。我ながら完璧な出来だ。職人のしていることを一から十まで完全に理解できてそれを実行出来るって素晴らしいね。

今度暇つぶしに神鳴流にも手を出してみるか。

「あ、やっと終わったん？」

ちょうど部屋の外を通りかかった木乃香が声をかけてきた。

「ああ！ 終わったよ！ 嬉しくて抱きしめるけどいいよね？ 答えは聞いてないっ！」

少々古いネタを口走りながら部屋に入ってきた木乃香を押し倒しかねない勢いで抱きしめる。

「もう。しゃあないなあ」

こんなことを続けていたせいか兄からの過度なスキンシップも軽く流せるようになってしまった。

頬に軽くキスするぐらいで顔を真っ赤にしていた頃が懐かしい。

「それで後ろの娘は？」

木乃香の後ろをついて来ていた娘について尋ねる。

この屋敷無駄にでかい割りに同年代の子が全くいないからな。

部屋余ってるんだから使用人の家族住まわせればいいのに。そして木乃香の遊び相手になってくれよと常々考えていたので全く問題は無いんだが。

「さつき神鳴流師範の人が来はってな、その人と一緒に来たんや」

「は、初めまして彩輝様！ 私は桜咲刹那といいましゅ！」

噛んだ。やべえ。めっちゃ可愛い。噛んであわあ言ってるのがまた。……お持ち帰りしてもいいですか？

「俺は近衛彩輝。かたっくるしいから様付けなんてしなくてもいいぜ」

「ほつやで〜。ウチのことも名前で呼んでーな」

「い、いえ、そういうわけには」

固いね。偉いのは詠春であって俺は何もしてないんだからそんな
畏まらなくても。

「まあ風評とかがらみとか掟とかくだらないことは気にせず木乃
香をよろしく」

「お任せください。必ずお嬢様をお守りしてみせます」

大袈裟だなあ。俺のように適当にやれとまでは言わないからもっと
気楽にやればいいのに。

「あ、そうや兄さま。せつちゃんになんか弾いてあげて」

「オーケー。ちょっと待ってね」

楽器は……そうだな、屋敷のどっかから無断で拝借した琴でいいか。

「それでは、刹那との出会いを祝して」

「そんな。お気遣い無く」

「いいからいいから。兄さますっごい上手なんやで〜」

「作曲 近衛彩輝」

爪を指にはめ、琴の前に座る。

「作曲？1 『邂逅』」

爪で弦を弾き、音を紡ぐ。

ちなみに？1とかって言うてるけどこれは今即興で弾いているだけであって作曲なんてやったことは無い。

前世で聞いたボーカロイドなんかの影響が大きく出ているのが自覚できる。

弾き終わりぱちぱちぱち、と木乃香と刹那が拍手をしてくれる。こ
ういうのは素直に嬉しい。

「それじゃ、今後ともよろしくね」

「はいっ！」

あれから数ヶ月経ち、刹那も段々俺の扱いに慣れてきた。嬉しいよ
うな哀しいような。

刹那も剣道やってるし俺もノリで神鳴流齧ったんだが三週間で飽き
てしまった。詠春たちには悪いと思っっている。

あと、某動画サイトに投稿した演奏動画は結構好評だ。そろそろ初
投稿の作品が三十万再生される。ちなみにサイト内ではアドニスと
名乗ってる。

でも一番苦勞するのが楽器の入手なんだよね。安くないし、そんな
に買っただろうするんだ的な視線を最近感じるようになってきた。

木管、金管、鍵盤、打楽器、弦楽器、東西問わず節操無しに弾いている所為でタグに『一人オーケストラ』とか付けられたのは嬉しいんだけどさ。

次の演奏の準備しているうちに木乃香がやってきた。

「兄さま。これからせつちゃんと川に行くんやけど、一緒に行かへん？」

「先行つてて。あと一曲録り終ったら俺も行くわ」

「うん。分かった」

そしてヴァイオリンで完全に瀟洒なメイドのテーマ曲を弾き終わったときふと思いついた。

川って木乃香と刹那溺れるようなことがなかったっけ。

思いついたときには絃と手袋を持って気で身体強化をしつつ川に向かって走り出していた。

「このちゃん！ このちゃん！」

川辺を下流から上流に向かって走っていると刹那の叫び声が聞こえてきた。

クソ。なんのための原作知識だよ。これは回避できたはずだろ。

「刹那！」

「さいきくん！ このちゃんが！」

すぐさま木乃香にむかって糸を投げる。俺もずっと楽器ばかり弾いてたわけじゃない。気で糸の強度を上げ簡単には切れないようにする。

周りの木々にも糸を引っ掛けて力を分散させながら、すぐに木乃香を引き上げる。

「木乃香！」

「このちゃん！」

「ケホツ、ケホツ」

良かった。息はしている。

「刹那、俺は木乃香背負って行くからお前少し先に戻って大人に知らせる」

「は、はい」

すぐに屋敷に向かって走り出す刹那。鍛えてるだけあって流石に速いな。

俺も軽い現実逃避はここまでにして木乃香を背負って走り出す。

「ゴメンな兄さま。心配かけて」

「気にすんな。確かに心配はしたが迷惑だなんて思っちゃいない」

「ん。ありがとーな」

前は一人っ子だったから兄弟がいるってのがよくわからなかったが、
こういうのは悪くない。

「お嬢様っ!!」

と、前方から使用人が来た。刹那のヤツいくらなんでも速すぎだろ。

「後は任せるよ。体が冷えてるから何か温かいものを」

木乃香を使用人に渡す。

「分かりました」

使用人は木乃香を背負い迅速に屋敷へと運ぶ。

みんな速いな。これは一度鍛え直した方が良さそうな気がしてきた。
あ、そうだ絃の回収……は、もういいや。面倒くさい。

その前にまずは刹那にフォローいれとかないな。

原作のように壁を作って接するのは見たくない。

「刹那。今いいか？」

部屋に籠ってた刹那を見つけて問いかける。

「彩輝様。私がついていながらお嬢様を危険な目に遭わせてしまい申し訳ありませんでした」

俺に謝られてもねえ。木乃香だつてもうとつくに許して いや、許す以前に刹那が無事で良かったとか考えてるんだろうな。

「ちょっと気負い過ぎだと思つぞ。木乃香が無事だつたんだ。それでいいじゃないか」

「しかし、私は目の前でお嬢様が溺れているのに何も出来ませんでした」

話しながら悲痛に顔を歪める刹那。

「お前はまだ五歳なんだ。出来ることよりも出来ないことのほうが多い。一人でしようとせずにもっと周りを頼れって」

自分のことは自分でやる主義の俺が言つても説得力ゼロな台詞だな。はあ、こういう時にもっと気の利いたことを言える人間になりたい。

「ええい。大体俺はシリアスなのを語るキャラじゃねえんだよ」

なりたいたと言つたそばから前言撤回。

「とりあえず、今は休んどけつて。作曲 近衛彩輝」

持ってきたフルートを構える。

「作曲？3 『時計』」

これは完全なヒーリングミュージック。1/f ゆらぎの法則を取り入れてみた。

タイトルはその場で適当に決めているからあんまり意味は無い。

と、気付いたら刹那が舟を漕いでいる。一旦演奏を止め、布団を取り出して寝巻きに着替えさせて刹那を寝かせる。

別にやましいことはしてないよ。刹那は寝入っちゃったけど中途半端は嫌なので枕元で演奏再開。

起こすようなへまはしない。

そして演奏が終わり俺も自分の部屋に戻った。

で、結局まだ若干のわだかまりを残したまま木乃香は麻帆良に行ってしまった。

それ以来、刹那も剣の修行に専念して最近はめっきり会っていない。

このままだと原作通りになってしまいそうだとちょっと心配だ。

それにしても、

「はあ。暇だなあ」

あと七・八年もこの状態ってのはキツイぜ。

刹那のように鍛錬？ 音と糸とを併用すれば大抵のヤツなら触れることすらさせない自信がある。

魔眼使えば基本一撃死だしな。

気と魔力の錬度もそこそこ高いと思うんだが、比較対象がないから良く分からん。

あ、そうそう。俺実力隠して何も知らないフリしてるから。理由は単純。働きたくないでござる！

気や魔力を練るときは人気の無い山の中でやってる。

それで今現在も山の中にいるんだが、あまりにも暇なので常々考えていたことを実行してみようと思う。

霊脈、まあつまり、世界とパスを繋ぐ。

皆は倫理の授業を受けたことがあるだろうか。

ヒンドゥー教に梵我一如という考えがあっただな、宇宙を支配する原理と個人を支配する原理が同一という考えだ。

有体に言えば俺の本質と生命の本質は同じということ、ここで宇宙を一つの生命と仮定すれば俺＝宇宙となる。

つまり原理が同じ。実在原理と呼ばれるものにアルケーというものがあつて意味は『はじめ・原初・根源』。

妖精眼は裏の裏、奥の奥、底の底まで余すところ無く全てを看破す

る魔眼。それに直死も混ざってるから自分を死から理解していくことで根源を理解することが出来るはず。

付け加えれば原作のこの眼の持ち主の主人公は幼少のころ竜の欠片を見たことで竜の卵とパスが繋がった。これと同じで世界ともパスを繋げられると予想している。

グダグダと説明したが授業は話半分に聞いていたから大方間違っているだろう。

その時のテストの点が半分も無かったので六割方間違っている説明だと思うがこまけえこたあいいんだよ！

結局、中途半端な論理武装までして何がしたいのかと言うと、空想具現化やってみたいなあって思ってる。

という訳で魔眼を発動。自分を完膚なきまでに理解する。

そして、そこで意識を失った。

第一話：幼少期（後書き）

最後色々書きましたが作者自身十全には理解していません。深いツッコミをされても答えられないと思います。

90年代にそんな整ったネット環境もありませんよね。なら書くなよって話ですが、ほとんど勢いで書いた物なので。

第二話：武力介入

「バカですか貴方は！」

突然の大声で目が覚めた。

いきなり人をバカ呼ばわりするとはどこのどいつだ。

と、目を開けると眼前には女神様がいた。

「やほー。久しぶり。縁が合ったね」

起き上がり、出来る限りフレンドリーに話しかける。ここは六年前の白い殺風景な部屋。若干懐かしい感情が。

「バカは死んでも治らないと聞きますがその通りですね」

辛辣な言葉を『言葉のキャッチボールって何？』と言わんばかりに剛速球で投げられた。

俺が一体何をしたと。ちょっと根源に至ろうとただけじゃないか。

『空の境界』の荒耶宗蓮が悉く抑止力に邪魔されて辿り着けなかったのに俺に出来るわけないだろ。

本音を言えば霊脈のお零れを少し貰おうとただけなのに。

「何が何だか分からないって顔ですね」

「はい。申し訳ありませんが差し支えなければ理由をお聞かせ願いますでしょうか」

「率直に言います。貴方運命からも輪廻からも外れましたよ」

……Why? え? 何? ひよっとして成功しちゃった?

「……えっと、俗に言う解脱というヤツで?」

「まあ、そうとも言いますね」

「待ってくれ。それだと先人たちが何人もいる筈だ。何で俺だけこんな待遇なんだ」

「先人? そんなの勘違いか何かに決まってるでしょ。しかし、貴方は本当に成功してしまった」

え? それじゃ俺のネギまライフは? 原作始まってすらないんだけど。

「参考までに聞くけどこの後俺ってどうなるの?」

「世界と一つになる。つまり消滅するのを待つだけです。今は私の方で留めてますが長くは続きません」

なん……だと……!

「あの、何で俺を留めてくれてるんですか?」

こればかりは自業自得。消えてしまっても仕方が無い。

「後味が悪いんですよ。まだ貴方は前世の生きれなかった分を生きていない。それに正直このまま消滅させるのは惜しい」

「惜しいとは？」

「抑止力を無視して簡単に根源に至った貴方がです」

そんなに珍しいか。裏を返せば神に目を付けられるぐらいヤバイことをやってしまったんだな。

「この状況。貴方ならどうしますか？」

ちよ、何でそんな試すようなことを。俺はつまらない人間ですよ。断言できます。

と言っても、ネギマライフは充実させたい。

「確認ですが、俺は運命・輪廻から外れたのが原因で世界から消されそうだと」

「ええ」

ならば正攻法としては、また流れに戻して貰うってのがあがるが、多分うっかりで同じことを繰り返しそうだ。

抑止力が働かないってのはきついな。

となると……

「俺と仮契約してもらってもいいですか？」

「は？」

一瞬呆然とする女神。

「あははははは！ やっぱり貴方面面白いわ！」

いや、だから俺はつまらない人間だって。

「いいわ。してあげる。その前に一応理由を聞かせて貰えるかしら」

「運命つてヤツを設計図だと仮定すれば設計者がいる筈ですよね。

根源の話に戻りますが唯心論における根源は神になる。とすると設計者＝神として、神は運命に書かれていない期間が存在する。

それで貴女と仮契約することで俺も末端中の末端、異端中の異端でもいいから眷属になって例外的存在になれたらなあと思ひまして」

まあ、戯言ですけどね。と忘れずに最後に付け足す。

「今即興で考えたにしては悪くないですね」

そりやどうも。俺のような小心者はこうして論理武装しないと重大な決断なんて出来ませんからね。

「本当に俺みたいない人間なんかと仮契約してもいいんですか？」

「構いませんよ。どうもさっきから貴方は自分のことを過小評価し過ぎのよう感じますね」

「貴女が過大評価のし過ぎなんですよ」

なんでここまで俺にこだわるのかが謎だ。いや、生きれるんだからそれでいいし、神様に気に入られるのも悪くないんだけどさ。

「つと。そろそろ時間ね」

そう呟きだんだんと俺に近づいて来る女神様。

そして目の前に立ち俺の背丈に合わせるように屈んでくれる。

自分でもたまに忘れそうになるが俺って年齢がまだ一桁なんだよな。つまり背が低いという訳だ。

成長期前で双子だからか木乃香と瓜二つとまでは言わないが割りと似ている。

それに今まで描写しなかっただけで初対面の人には結構な頻度で女の子と間違えられたり。

まあ、何故今になってこんなことを考えているのかというと、女神様が屈んだことによって顔との距離が数センチ程しか無いわけだよ。

神様だからかその美貌は人間離れしていてもう綺麗だなあと感嘆するしかないわけで。

鏡なんか見なくなつて顔が真っ赤になっているのが分かる。

軽く現実逃避して精神を落ち着かせてくれ。お願いだ。

「ふふ。意外と初心なのね」

「貴女が綺麗すぎる　んっ!？」

言い終える前に口を口で塞がれた。

まだ台詞の途中なのになんの前置きも躊躇いも矯めも無く唐突に唇と唇を重ねてきた。

いきなりすることに驚いて体を引こうとするが、両手を頭と背中に回され抱き締められる形になり逃げられない。

「……………!」

なっ!？　こいつ舌入れてきやがった!　口を閉じて抵抗しようとするが舌が別の生き物のようにうねって閉じれない。

「ぶはっ」

もう何分経っただろうか。唾液を飲まされ、舌を絡みつかされ、口の中を蹂躪され、ようやく解放された。

「あ、間違えた」

そして開口一番に言われた言葉がこれだ。

「間違えたってなんだ!　っーか舌入れる必要性がどこにあった!」

「舌を入れたのは気分。よかったね。女神様とディーブなキスが出

来るなんて」

……もういいや。減るもんじゃないし。

「間違えたってというのは仮契約じゃなくて本契約しちゃった。はい、カード」

と、なんでもないようにパクティオーカードを手渡される。

「本契約って……そんな簡単に流していいのかよ」

「人間一人と本契約したところでメリットもデメリットも無いし」

そんなもんか。本人がいいって言うてるならそれでいいや。

だんだん投げやりになってきた気がする。

「それじゃ、元の世界に戻しますよ」

「あ、待って待って。一つお願い。俺を大戦時に送って木乃香たちが中一になったら元の時代に戻して貰ってもいいですかね？」

ちよつと軽く暴れたい気分。

「オツケー。じゃあ送るよー」

軽い。軽すぎる。でも時間跳躍は原作キャラの超がやってるからいいのか？

「後ろの扉を開けたら大戦時に行くことが出来ます」

後ろを振り返るといつからあったのかは知らないが確かに白い扉が存在していた。

扉の前に移動して手をかける。

後ろで女神様がフフ、と笑い、

「縁があつたらまた会いましょうね」

と、続けた。

「じゃあ、行ってきます」

そして、扉を開け過去へと一步を踏み出した。

扉をくぐるとそこは戦場だった。

いきなりすぎるだろ。なんでこんな両軍がぶつかり合ってるド真ん中に。

戻ろうかと思っても既に扉は消えてるし。

とか考えてるうちにこっちに向かって魔法の射手が。

即座に魔眼を発動。軌道を完全に見切りかわす。

かわした拍子に頭に違和感を覚え触ってみると俺が作った狐の仮面

があった。

……意味が分からない。

いや、自分で作っただけあってかなり愛着あるんだけどさ。

まあ、兎に角。今はこの戦場を切り抜けるのが先決だ。

そしてこんな困った状況にこそアーティファクト。

さっき貰ったパクティオーカードを見ると、黒いコートに黒い手袋して二本のソードブレイカーを持っている俺が描かれていた。

これなんてDTBの黒？

でもって名前が『ハウリングミラージュ共鳴流転』。

あれ？ 『二つ名メーカー』というサイトで試しにやってみたときこんな名前だったような。

もうどこから突っ込んでいいのか分からない。しかし背に腹は変えられないし。

「アデアット！」

どうにでもなれ。

カードに描かれた通りの姿になる。

魔眼で視て装備の能力を理解する。

お、この手袋魔力系を出せるぞ。

一応当初の予定通り霊脈とパスを繋ぐことには成功しているので魔力は無限に近い。

同時に梵も吸収しているので生命力（気）も無限に近く、神様と本契約したから通力もちよっと流れてる。

うわー。

現実逃避するために現実（戦場）に目を向けることになるなんて。

周囲のヤツから手当たり次第に死の線、首、胴体に糸を張り巡らせ、手を振り上げ、振り下ろす。

この一回の作業で半径十メートル以内の人間はバラバラになってしまった。

そして十五分程経っただろうか。

もうこの近くで五体満足で立ち上がってるのが俺一人になっていた。

敵も味方も関係なく暴力と暴虐と殺戮を繰り返した結果がこれだよ。

あ、どっちかが紅き翼陣営だから虐殺は不味かったかも。

ていうか巻き込まれてないよね？

あれ？ おかしいな？　なんだか自分のチートっぷりに泣けてきた。

ここまで強くなるつもりは無かったのに。

「おい！ そのガキ！」

まだ生き残りがいたことに吃驚だ。そしてその渦中の人間に話しかけるなんて。

声のした方を霞む視界で見ると、赤毛、優男、俺と同じぐらいの子供、若い頃のうちの父親にそっくりな奴等がいた。

ていつか紅き翼だった。

大戦の英雄が流れ弾（糸？）に当たって死んだじゃ笑い話にもならないからよかったけど。

ん？ 待てよ。これはあの有名な過去に戻って親を殺したら自分はどうなるのかといったタイムパラドックスの実験が出来るんじゃない。

まあやらないけどさ。

「お前泣いてるのか？」

ナギに問われ即座に頭の横に被ってた狐面を顔を隠すように被りなおす。

ヤベエ。めっちゃ恥ずい。自分の強さに呆れて涙が出てきましたとか。

……コイツ等との出会いの記憶消しとこうかな。

「お前名前は？」

名前？ 馬鹿正直に近衛彩輝なんて名乗るわけにもいかないし、
うだな

名字変えて名前に『し』を入れて彩の読みを変えれば。

「零崎。ゼロザキアヤシキ 零崎彩識だ」

異論も文句も抗議すら一切受け付けないし認めない。

SIDEナギ

よう。俺の名前はナギ・スプリングフィールド。

今連合と帝国の戦争真っ只中にいるんだが、ついさっき軍がぶつかり合ってる激戦区から馬鹿でかい魔力が迸ってそこに詠春たちと向かっているところだ。

連合にはこんなデタラメな魔力を持っている奴はいなかったしそんな作戦もなかった。

これが帝国の連中の仕業なら少しマズイことになりそうだからな。

そして魔力の近くまで来たんだが。

「これは……」

アルが呟く。詠春やゼクトも同じような反応だな。

目の前には手や足、首、胴体とバラバラになった死体が死屍累々と転がっている。

連合も帝国も関係なく無差別にだ。

「おい！ あそこ！」

詠春が指を指した方を見ると、まだ年端もいかない子供が死体と血の海の中に立っている。

「気をつける。あの魔力、これをやったのは恐らくあやつじゃ」

あんなガキがこの惨状を作ったっていうのか。

「へっ！ おもしれえ！ お前ら手え出すなよ！」

「あ、バカ！」

詠春が止めようとするがそんなこと聞くわけねえだろ。

「おい！ そのガキ！」

ある程度近づいてガキに呼びかける。

こちらに気付いたガキが俺達の方を向くが、その頬には涙が流れていた。

「お前泣いてるのか？」

俺に指摘されたからか頭の横に付けていた仮面を顔を隠すように心を閉ざすように被りなおし、臨戦態勢をとる。

あゝクソ。何かやりづれえな。

「お前名前は？」

「零崎。零崎彩識だ」

「これは本当にお前がやったのか？」

「俺以外にこんな芸当出来る殺人鬼がいるのなら会ってみたいな」

殺人鬼ねえ。自分のことを躊躇いも無くそう告げる。こんなガキがどんだけの間人間殺してんだよ。

「あなたの目的は何ですか？」

いつの間にか俺の横に移動していたアルが訊ねる。

「無いよ。これは正当な過剰防衛の結果だ」

過剰防衛って流石にこれはやりすぎだろ。軍が二つ壊滅的なダメージを被ってるんだぞ。

だが、十数分で軍を壊滅させるコイツの強さは本物だ。

「なあ。目的が無いなら俺達と一緒に来ないか？」

仲間全員から白い目で見られた。

「いいよ。暇だし」

彩識のヤツもあっさり臨戦態勢を解き、仲間になることを了承した。

「どうせ言っても聞かんのだろ」

「あなたが決めたことなら深くは問いただしませんけどね」

「しょうがないヤツじゃのう」

なんだかんだでお前らだって歓迎ムードじゃねえか。

「よろしくね〜」

この自称殺人鬼もなんだかすぐに馴染みそうな気がしてきた。

第三話：ジャック参戦。そして反逆者に

俺が紅き翼に加入にて一週間。

アルが俺に女装またはコスプレをさせようとしてきたが断固として拒否した。

アーティファクトが既にコスプレなんだからいいだろ。

そしてよく考えると魔法とか一切使えないことに気付いてゼクトに魔法を教えてもらった。

一度見れば大抵のことは覚えられます。二度見れば磐石。といったチートスペックで次々と覚えていき、『お主もバグか』と呆れられた。

その後アルとゼクトに根源の渦をチラツと覗いて、霊脈とパス繋いで、梵を吸収してるって言ったら遠い目をされた。

霊脈の直接操作って7アダプタス・イグゼンタプス4、肉体を持つ人間としては最上位の魔法使いだよな。

自分でも異常だと自覚している。

そして現在。

「ナギ。おまつ、何肉を先に入れてるんだよ！」

「いいじゃねえか。旨いもんから先だよ」

「トカゲ肉でも旨いのかのう?」

みんなで鍋パーティーをやっている。

「フフ……詠春、知っていますよ。日本では貴方のような者を『鍋將軍』と呼び習わすそうですね」

「ナベ・シヨーゲン!？」

「つ、強そうじゃな」

奉行じゃね? という俺の呟きはスルーされた。

「姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃんって誰よ?」

確かアスナのことだよな。

「ああ、オスティアの姫御子のことじゃな?」

「まあ……戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるやも……です」

「その戦だが……やはりどうにも不自然に思えてならん」

「詠春よお。食事時に仕事の話はやめようぜ」

元々俺は食事は黙って食べる派なんだよ。そこに仕事の話なんてよ

してくれ。

「スマン。食事中にするような話じゃなかったな」

分かってくれればいいんだよ。と思った矢先、俺の真後ろから大剣が飛んできて鍋が空を飛んだ。

真後ろだよ。風を切る音が聞こえて振り返ろうとしたら視界に突然剣が。めっちゃビビったわ。

おかげで初動が遅れて宙を舞った肉たちはナギ、アル、ゼクトに全て回収された。

「食事中失礼ッ。俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ！！」

まだ少ししか食べてなかったのに。この恨み晴らさでおくべきかああああ。

「ハハハ……殺して解して並べて揃えて」

「フフ……食べ物を粗末にする者は……」

肉を奪われた俺と鍋を頭から被った詠春が縮地・瞬動でラカンの前後に。食べ物の恨みを舐めるなよ。

「晒してやんよ」

「斬る」

「うおおっ!」

同時に三つの斬閃。

チツ。流石バグキャラ。俺と詠春の連携プレーを掻い潜りやがった。だが間を空けず左右からお互いをカバーしながらラカンを確実に追い詰めていく。

「ちよっ、タンマタンマ。お前らマジで強いな。ちよい待たね？」

「ふざけるなっ! やる気なら本気を出せ!」

軽口叩きながらこっちの攻撃ちゃんと避けてるところは驚嘆に値すると思うけどね。

「へっ、ソースか。だがあんた達の情報はリサーチ済みだぜっ!？」

こちらに向かって四つのカプセルを投げってくる。

「情報その一。生真面目剣士はお色気に弱い」

かなり際どい格好をした半人半霊を喚ばれ動揺した詠春が気絶させられる。

俺ん中で父親の株急降下中。

「おっさん。俺と遊ぼうぜ」

手を顔を隠すようにかざし某死神バトル漫画のように狐面を出す。

この仮面を出した瞬間に霊脈や梵から魔力と気を吸収し、スイッチの役割する術式を創るのに苦労した。

一連の茶番がやりたいが為だけに二日無駄にしたのは内緒だ。

「情報その五。狐面の殺人鬼。弱点なし。特徴、最強」

「俺なんてあの赤色に比べれば最強にや程遠いさ」

念のために言っておくがナギではなく『死色の真紅』のことだからな。俺はナギより強いよ。

「おいおい。随分謙虚じゃねえか。ガキなんだからもっと威張れよ」

「アンタ程度倒して威張ったところで品性疑われるだけだしな」

「言ってくれるじゃないの。それでも南じゃ無敵と滅法噂の男だぜ」

「それで無敵か。程度が知れたな。仕込みは既に終わってるしどっからでもかかって来な。もうアンタは『動けない』だろうがな」

「ハッ、ガキだからって手加減しねえぞ！」

と俺に殴りかかろうとでもしたのだろう。

「何だ！？ 体が動かねえ」

「『平伏せ』」

ラカンが俺に頭を垂れる。Sに目覚めそうさ。

ちなみにナギがおとなしくしているのと同じ理由だったり。

「テ、テメエ……一体何を」

「お前の情報な一つ間違ってる。俺は一流の殺人鬼である前に超一流の音楽家だ」

「音楽家……？ まさかテメエ、音使いか！」

「ご名答。っと音楽なんて聴いてねえって顔だな。周りをちゃんと見てみるよ」

言われるがまま視線を左右に。

「ごいつは……系？」

「お前が逃げ回ってる間この辺り一帯に張り巡らせた糸が風を切る音をずっと聞いてたぜ」

こうやって会話中にも俺の『声』を聞かしてるしな。

それを聞いてラカンは引き攣った笑みを浮かべる。

「おいおい。たった五、六歳のガキが到達出来るレベルじゃねえぞ」

「そりゃあ、俺は天才だから（主に神様のおかげで）」

とか言いつつ結構ヤバイ。完全に掌握出来ねえ。これがバグキャラ

か。

動かれる前に糸を使って嚴重に縛らせてもらって、頸動脈を圧迫して落ちてもらう。殺しちゃいけないよ。

さあ、逃げよう。すぐ逃げよう。俺が言うのもなんだがバグキャラの相手ほど不毛なことはない。

まあ後日、原作通りに十三時間にも及ぶ激闘をナギとラカンが繰り広げたりしている内にラカンが仲間になった。

俺にもリベンジ挑んできたが糸と音と剣と魔法をフルに使って負かしてやりました。

それから数ヶ月。

一時はアルギユレーの辺境に追いやられたこともあったが、前線に復帰するなり大活躍。

特にあの『グレートブリッジ奪還作戦』では俺も少し、否、かなり羽目を外し零崎の名に恥じない戦い方をしたら敵からは相当恐れられた。味方からも若干引かれた。

その時に『ハウリングミラー共鳴流転』、『黒狐』、『レクイエム』、『旋律の殺人鬼』など欲しかった厨二な二つ名が付けられた。

やっぱ武器の名前が自分の異名になるのは嬉しいね。

あと自分でも不思議なことに何故かファンクラブも作られたらしい。このロリシヨタコン共め。

そして原作通りガトウとタカミチが仲間になり、居合い拳と咸卦法を初見で得とく。

さらに魔力と気と通力とを混ぜて新しい咸卦法の形を作ってみた。通力混ぜたから通卦法とでも呼んどくか。

ガトウからも『このバグキャラめ』と言われっちゃったぜ。

で、今はそのガトウに呼ばれて本国首都に来ている。

なんでも協力者に会って欲しいからだそうだ。

「で？ 協力者って誰よ？」

質問すると実にいいタイミングで一人の男が近づいてきた。

「マクギル元老院議員！」

「いや、主賓はあちらのお方だ」

そこに登場したのは、ウエスペルタティア王国アリカ王女。

綺麗っちゃ綺麗なんだがやっぱりあの神に比べると数段見劣りしてしまうよね。

ジャック（呼び方変えた）が話しかけているが、『気安く話しかけるな下郎』と一刀両断。

ナギのヤツは見惚れてるし、リア充滅べ。

話し合いの内容は要約すると戦争を終わらせたいから力を貸してくれって感じた。

その後ナギは見惚れてたことをネタにされジャックに弄られている。あーあ、リア充早く滅ばねえかな。

そしてようやく『完全なる世界』の存在が明るみになり、俺達は休暇中『完全なる世界』についての独自の内定を開始。

さらに俺は単独で網を張り巡らし、零崎を始めてた。いやー結構派手にやったけど魔法攻撃主体でやったからか正体はバレていない。

まあナギだつてアリカ王女と一緒に敵本拠地を壊滅させてたし。まさか現場で鉢合わせするとは夢にも思わなかったが。

その後はナギと一緒に詠春に説教されたさ。

ちゃんとメガロセンブリアのナンバー2の執政官が奴らの手先だという証拠を見つけてきたのにあんなに怒らなくてもいいと思うんだが。

で、現在。俺、ナギ、ジャック、ガトウの面々で執政官の弾劾手続きをするためにマクギル元老院議員と法務官に会いに来ている。

「法務官はまだいらっしやいませんか」

しかし、法務官が未だに現れない。

「法務官は……来られぬことになった」

「ハ……？」

「……あれから少し考えたのだがね、せっかくの勝ち戦だ。ここに来て……慌てて水を差すのもやはりどうかと思ってね」

「ハア」

「私の意見ではない。そう考える者も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ。今回は手を引いてだな……」

「待ちな。あんたマクギル議員じゃねえな。何もんだ？」

はい。こいつは偽者ですね。ナギが仕掛けるはずなので俺もそれに合わせて準備する。

ボン！ とナギが相手の頭を燃やすと同時に俺も心臓目掛けてソーブレイカーを投擲。

「ちよっ！？ ナギおまつ……元老院議員の頭いきなり燃やして……ハウル、お前も躊躇いも無く心臓に剣を刺すな！！」

かなりテンパってるガトウ。あ、ハウルってのは俺の愛称ね。ハウリングミラージュだからハウル。

某動く城の魔法使いと同じ名前で最高の格好いだろ。

「バーカ。よく見てみなおっさん」

「そうだぜガトウ。観察眼が全然足りてねーぞ」

「何っ……」

炎の中から出てきたのはマクギル議員ではなく白髪の……えっと、
一番目だっけ？

「……よくわかったね。千の呪文の男、ハウリングミラージュ。こ
んな簡単に見」

ついでにヤツの身体に付けておいた糸で解体。この俺がソードブレ
イカーを投げるだけで終わらすとでも？

「全く、まだ喋ってる途中なんだけど。やはり君が一番危険だね。
悉く組織の手足を潰してくれて対処に追われたよ」

チツ。糸が身体を刻む前に転移魔法で逃げてまた戻ってきたな。避
けるのだけは無駄に上手いヤツだ。

「じっちゃじっちゃうるせえ！」

ナギが一人突っ込むが、

「通しませんよ」

「くらえ」

と、一番目の仲間の登場で攻撃が阻まれる。

「強えぞやつら！」

「ハツハ。だが生身の敵だ。政治家は何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ、万倍！！ 戦いやすいぜツ！！」

「同感だ。では、零崎を始めようか」

意気揚々と敵を潰しにかかるうとする俺達だったが、

「わしだ！ マクギル議員だ。スプリングフィールド、ゼロザキ、ラカン、ヴァンデンバーグ。奴らは帝国のスパイだった！ 奴らの仲間もだ！ 今も狙われている。軍に連絡をッ……」

「げ」

「やられたな」

「君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

「ハッ！ その前にテメエの人生の幕引きが先だろ」

ナギとジャックとで飛び掛ったが、結局仕留めることは出来ず、その後軍の介入により、首都、そして連合を追われることになった。

「タカミチ君たちは脱出できたかな」

「昨日までの英雄呼ばわりが一転、反逆者か。ヌッフフ、いいねえ。人生は波乱万丈でなくっちゃな」

「かはは。傑作だぜ。やっぱ退屈しない人生ってのは最高だな」

俺達は辺境を転戦しながら隠れ家を目指した。

第四話・見たり貰ったり造ったり（前書き）

XXXHOLIC17巻に触発されて書いた。
後悔はしていない。

第四話：見たり貰ったり造ったり

そしてなんやかんやで『夜の迷宮』に捕らわれていたアリカ王女を救出。

いや、俺このとき外敵の相手してたから救出のときの詳しい話は知らないんだわ。

それで今はタルシス大陸極西部オリンポス山にある紅き翼の隠れ家にいる。

「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！　どんな所かと思えば、掘立小屋ではないか！」

と、ウチの隠れ家を貶しているのはヘラス帝国第三皇女。ていうか隠れ家が派手で目立つたら意味が無いと思うんだが。

「俺ら逃亡者に何期待してんだこのジャリはよ」

「おお！　珍しくジャックと全面的に意見が一致した」

「何だ貴様ら、無礼であろう！」

オマエモナーのAAが脳裏をよぎったが気にしないことにする。

「へっへ〜ん。生憎ヘラス皇族にや貸しはあっても借りはないんでね」

「俺は……これといって貸しも無ければ借りも無いな。特筆すれば

軍を壊滅させたぐらいか」

「何い？ 貴様ら何者だ」

「俺は伝説の傭兵剣士ジャック・ラカンだ」

「俺の名前は零崎彩識。気軽にハウルって呼んでくれ」

ていつかジャック。自分で伝説とか言うのはどうかと思う。

それを言い始めたらナギの『千の呪文の男』とか俺の『共鳴流転』ハウリングミラージも自分で流行らした感があるが。

「ふん。下手な嘘を吐くな。お前のような子供がああ『旋律の殺人鬼』のはずなかるうが」

信じてもらえなかったたので、とりあえず狐面被ってハウリングミラージユを装備してみた。

「え……ひ、ひよっとして……本……物……？」

めちゃくちゃ後ずされながら聞き返された。

その反応は流石の俺も結構傷つくぞ。

一応本物と証明できたので狐面と『共鳴流転』を外す。

「そんなビビんなよ。老若男女容赦無しって訳でもないんだから。殺人鬼って呼ばれてるだけで本当に趣味が殺しなはずないだろう」

ま、殺人鬼って一番最初に呼んだのは俺自身だけだな！

「ほ、本当か？」

「本当だ。零崎は身内には優しいんだ。お前俺達の共犯者だろ。共犯者なんて家族みたいなもんじゃねーか」

「家族かの……」

むう。しかしここまで怖がられるとは。ちょっと自重したほうがいかな。

うん。なるべく派手で結果よりも過程を重視してしまうような方法を考えよう。一喰^{イテイケンクワン}いの的な。

糸じゃ目立たずにバラバラになった死体だけが残ってしまうからな。

「じゃが……主と主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

『鋼殻のレギオス』から引用できそうな技を思い出していたらアリカ女王とナギの話し声が聞こえてきた。

「世界全てが敵 良いではないか。こちらの兵はたったの八人。だが最強の八人じゃ」

これは原作でも名場面に数えられるシーンじゃなかるうか。そこに立ち会えるとは何か感動してきた。

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ。我が盾となり、剣となれ」

「やれやれ。相変わらずおっかねえ姫さんだぜ」

ここでナギが跪いてアリカ王女がナギの肩に剣を当てる。

「いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」

BGMは任せるとばかりに皆の無意識に訴える感じで頑張ってみました。

あれから一ヶ月。今更になってだがある事実気付いてしまった。

実家が呪術協会なのに一度も陰陽道や妖怪を使役していないことに

本当に今更だよな。

思い立ったが吉日。というわけで現在呪符製作中。筆なんて持つの久しぶりだぜ。

作り方と手順はある程度詠春から教わったから大丈夫……のはずだ。多分。

詠春は剣士であって術士じゃないから畑違いで基礎的なことしか教えてくれなかったが、それでもなんとかなるだろ。

いざとなったら前世の知識総動員だ。

「何をやっておるのじゃ？」

「ん？ テオか。旧世界の極東の島国に伝わる魔法をちょっと試してみようと思ってるな」

初対面じゃめちゃうちゃ怖がられたけどそれ以降は良好な関係を築いてるよ。」

「なんでいきなりそんなマイナーな魔法に手を出すんじゃ」

「詠春の実家でやってるな。興味が湧いて」

俺の実家でもあるのに今まで完全に忘れてたのが不思議なくらいだ。

「妾も見ていいかの？」

「いいぞ。と言っても俺もやるのは初めてだから上手くいくかはわかんないけど」

とりあえず呪符を作り終えたが、楔ぎとかした方がいいのかな？ いや、相手が妖怪なら嫌がらせにしかないか。

もういつかこのままで。面倒だし。

呪符に魔力を馬鹿みたいに籠めて五芒星を描きながら、

「オンキリキリヴァジャラウンハッタ」

祝詞を詠み、符を投げる。投げた符が爆ぜ辺りに煙が満ちる。

「ところでこれはどういった魔法なのじゃ？」

「一応こっちで言うところの悪魔召喚みたいな感じだ」

「……安全なのかの」

「爵位級悪魔を瞬殺できる俺と一緒にいるんだから大丈夫だろ」

「実はハウルが一番危険というオチがしてきたぞ」

「なんだ今頃気付いたのか」

お。煙が晴れてきたな。

「にははは。呼ばれるなんて随分久しぶりやなあ」

煙が晴れたさきに居たのは、着物にネコミミ、身長は150cmぐらいの可愛い女の子。ただ後ろに屋台みたいなのを引いてるのが非常に気になる。

「ハウル。あれは何じゃ？」

「えーっと、猫娘？」

「ちやうちやう。尻尾の先が二つに分かれてるやろ。ウチは猫又や」
そう言っつて尻尾の先を見せてくれる。うん。確かに猫又だわ。

「で、自分がウチを呼んだんかいな？ 正直まだちょっと早いと思
うで」

「早いつて何が？」

「なんや。知らずに呼んだんか。ウチ羅宇屋やってん」

「……不勉強なもので、羅宇屋つて何です？」

「あゝ、一言で言うならキセルの清掃と修理やな」

キセルかあ。高杉とか月詠とか侑子さんとか四月一日とかが吸ってるアレね。

買うしかないだろ。常識的に考えて。

「キセル自体も売ってるの？」

「うん？ 置いとるけど買うつもりかいな。ウチが言うのもなんやけど身体に悪いで」

「キセルが健康に悪いんじゃない。健康がキセルに悪いのだよ」

流石天才は言うことが違う。

「にはははは。自分おもしろいこと言うなあ。気に入ったで。初回サ
ービスや。一本プレゼントしたる」

すいません。他人の台詞丸パクリです。だが、くれると言うなら貰
うよ。

「色はどうする？」

色ねえ。好きな色でいいか。

「藍色で」

「はいよ」

渡されたときに吸い方と手入れの仕方を教えてもらった。

早速吸ってみたら当然のことながら噎せてテオと二人でめっちゃ笑われた。

「ほなな〜。ヤニ溜まったらキレイにしたるさかい定期的に呼ぶんやでー」

「どうもありがとうございました」

そして羅宇屋の猫又は帰って行った。次呼んだときはなにか演奏してやろうかな。

「中々面白い奴じゃったのう」

「ああ。これはいい買い物が出来た。可愛い娘とも知り合えて一石二鳥だな」

と、なぜかテオが頬をむうと膨らませる。

「そうじゃ。妾もハウルに何かプレゼントしてやろつ」

「と、言われても別に今欲しい物は無いかな」

「なにおう!?! 初対面の女からは受け取るのに妾からの必要らぬと申すか!」

「別に要らないとは言っていないが、うん? 何? ひょっとして妬いてるのか?」

「なっ!?! ち、違うわ! ただのほんの気まぐれじゃ。深い意味は無いぞ!」

はっはっは。顔を真っ赤にして可愛いなあ。あまりにも可愛いのでテオの頭を撫でる。

「……んっ。本当に欲しい物はないのかの?」

欲しい物が。これと違ってないんだよな。困ってることなら楽器が大量に運べないみたいなのといったところか。

あ。そうだ。

「中と外とで時間の流れが違う魔法球って持つてるか?」

「別荘のことじゃな。持っておるぞ」

「オーケー。じゃあ見せてもらってもいいか?」

「見せるだけでよいのか?」

「自分で造りたいからな」

「っ、造るのかの。別荘ならこっちの部屋にあるぞ」

テオに部屋まで案内してもらおう。

「これじゃ」

テオに指された別荘を魔眼で見る。はい。構造も理論も術式も完全に把握しました。

「ありがとうございます。テオ。そんじゃ、造るか」

「って、どこへ行くのじゃ」

「外」

はあ？ といった感じのテオと一緒にキセルを吹かしながら屋外へ出る。段々ハマってきたかも。

「外に出て何をするつもりじゃ？」

「出来るだけ濃い影が欲しくてな」

「影かの？」

来る途中にチヨークみたいな物を勝手に拝借し、自分の影に魔法陣を描き込んでいく。

「別荘を造るのではなかったのか？」

「基本的な構造は別荘と一緒にだけど、これは『倉庫』と言った方がいいかもな。これでつと、完成」

魔法陣を描き終わり、術式を展開、発動させる。

そして服のポケットに入れっぱなしで存在を忘れかけていたハーモニカを影の上に落とす。

だがハーモニカは地面にぶつかることなく影の中に沈んでいく。

「一体なにをしたのじゃ？ そろそろちゃんと教えてくれ」

「そんな変わったことはやってないぞ。まず時間という概念と三次元の法則を取っ払って出入り口を俺の影の設定する。で、最後にこの中に入れるのを無生物のみにすれば、四次元ポケットの完成だ」

「成程。これをバグキャラの犯行というのか。大体四次元とかありえんじやろ。随分簡単にやっておったが普通なら研究と製作で年単位はかかるぞ」

そんなにかかるもんなのか。カップラーメンを作るノリで三分ほどで造ってしまったぞ。

あとバグキャラの犯行とか名付けた奴誰だ。まあ大方アルだとは思うが。

第五話：最終決戦（前書き）

今回主人公が初めて魔法を使った

第五話：最終決戦

そしてさらに五ヶ月もの月日が経過した。

俺達は武装マフィアや武装商人、私服を肥やしている役人なんかを潰しながら『完全なる世界』の足取りを追った。

映画なら三部作。単行本なら十四巻分ぐらいはいく大活躍。タイトルは『零崎彩識の人間解体』だな。

そして死闘を繰り広げた末、遂に奴らの本拠地、世界最古の都。王都オステイア、空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』にまで追い詰めた。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「《嵐の前の静けさ、ただし超音波兵器》みたいなのっ！」

……さて、いよいよ最終決戦だ。

「ナギ殿！ 帝国・連合・アリアドネー混成部隊準備完了しました」

若いころのセラスが準備が整ったことを報告しにきた。

「それで、あの……ナギ殿、彩識殿」

「ん？」

「俺に何か？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか」

「おあ？ ああ、いいぜ。それくらい」

「俺も書けばいいの？」

「いえ……あの、抱きしめてもいいですか？」

このシヨタコンめ！ とは一切顔に出さず「良いよお」と、笑顔で軽く返す。

「……可愛い」

思い切り抱きしめられた。最終決戦前なのに締まらないな。

そしてたった今ガトウから連絡が入った。

連合・帝国の正規軍の説得は間に合わないらしい。

「既にタイムリミットだ」

「ええ。彼らはもう始めています……『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵『黄昏の姫御子』は今彼らの手にあるのです」

「ああ。よおしっ、野郎ども。行く「まあ待てって」「ぐえっ」

首に糸を引っ掛けてナギの初動を阻害する。強く引きすぎたかな？

ナギが咽てる。

「おいハウル！ 何すんだ！」

「ん？ 久しぶりに本気出そうと思うからちょっと下がってるって言うのが面倒で」

「面倒がらずにちゃんと言えっつての。ったく、そんなじゃ任せたぞ」

「おう。任せられた」

顔を手で覆い、狐面を出す。この動作も随分様になってきたと思う。前方十キロに通卦法製の糸を張り巡らせる。

「細工は流々、小細工は無用。では 零崎を始めよう」

SIDEセラス

零崎彩識。

弱冠六歳にして紅き翼の中でもずば抜けた天才児。戦闘に関してはナギ殿も凌駕すると言われている鬼才。

初めて直に会った感想は本人には悪いが意外と普通のどこにでもいる子供。

感じる魔力量も子供にしてはやや多いほうだが、それでも取り立てて言うほどでもない。

なぜこんな可愛い子供に殺人鬼などと物騒な名が付いたのか不思議で仕方が無かった。

でも、『黒狐』と呼ばれる由縁の狐面を被った瞬間理解した。分かりすぎるぐらいに理解出来た。

一瞬で数十倍にも数百倍にも跳ね上がった魔力。それこそナギ殿を越すような。

しかし、違う。魔力も驚嘆に値する量だが、もっと凄まじいのは殺気。

まるで世界を呪うかのような熾烈で苛烈で過激な殺意の塊がそこにあった。

足が竦む。自分に向けられたわけでもないのに身動き一つ出来なくなる。

「細工は流々、小細工は無用。では 零崎を始めよう」

「どつちだよ」

と、ナギ殿とラカン殿が突っ込むがこの殺気の中軽口を叩ける彼らの凄さを改めて実感する。

「作曲 零崎彩識」

彩識殿は二人の言葉を意に返さず、手を大きく振り上げる。

「欠番」
?4444

「キリングオルガン
殺戮音響」

そのまま手を交差させるように勢いよく振り下ろす。

たったそれだけの動作。

だが、変化はすぐに現れた。

敵の超弩級戦艦が空中空母が駆逐艦が何の前触れも無く破壊される。

真つ二つに、バラバラに、粉々に。完膚なきまでに破壊されていく。

「あ、やべ。障壁張れッ！」

言われるがまま軍に指示を出し自分も障壁を張る。

直後。障壁全てを破りながら何かが轟音と共に通り過ぎた。被害が大して出なかったのが奇跡のようだ。

SIDE彩輝

ヤベーヤベー。焦ったぜ。

まさか事前には張った俺の最も強固な結界を破ってしまうなんて。

こっちの軍にはあまり被害出たなさそうであんな良かった良かった。

「残党は俺に任せてお前らはさっさとラスボス倒して来い」

呆然としているナギたちに仮面を消しながら声をかける。

「ええ。分かってましたよ。あなたがバグキャラの中のバグキャラだと」

「……もう何も言わん」

そんな悟ったような目で見てくるなよ。

「ハウルは来ないのか？」

「俺は一对一よりも一対軍の方が得意なんだよ」

気兼ね無くやれるしね。つーか楽しい学園ライフが待ってるのに『造物主』に殺されかけてたまるか。

「そうか。よし。気を取り直して、行くぜ！」

と、なんとかモチベーションを上げて『墓守り人の宮殿』へと向かうナギたち。

「いってら〜。……一時間以内に終わらせなかったらさっきの宮殿囲ってやる」

果たしてこの咳きは宮殿に向かう一行に聞こえただろうか。

さて、俺は俺の仕事をしますか。サボタージユという名の仕事をね！ 久しぶりの前言撤回発言だ！

「じゃあセラスさん。一緒にお茶でも飲みませんか？」

倉庫からテーブルと椅子を二脚取り出して座る。

ついでにキセルも取り出す。もうすっかりハマってしまったよ。

一度詠春に取り上げられかけたが『酔って俺に無理矢理度数の高い酒飲ませたの誰よ?』と強引に言い込みました。

ちなみに酒は結構強い方らしい。酒場の店主にザルとか言われた。あれかな? 梵を吸収してる所為かな。

「は? いえ、あの。今最終決戦でナギ殿たちも戦って……」

「もうさっきので敵軍残り二割切ってるし。それにさ、これが本当に世界とか人類の危機なら抑止が働いてないわけがない」

「抑止?」

やっぱりこの考えは『ネギま!』の世界にはありませんよね。説明はダルいので省かせてもらう。

「つまりナギが負けるはずないってことさ。紅茶とコーヒーどっちがいい? 緑茶にジュースもあるよ」

くつろぐ気満々ですが何か? ちゃんと戦況が傾いたり危なくなったら戦うつもりだから大目に見てくれ。

それに俺一人で終わらしちゃったらこっちの兵士が「何のためにここにいるんだろう」とか絶対虚無感に襲われると思う。

結局セラスも椅子に座って紅茶を注文した。

「一つ聞いていいですか？」

「どうぞ」

「さっきのアレは何をやったんですか？」

アレ？ ああ。『殺戮音響』ね。

「まず、魔力系を回路に見立てて三次元の魔法陣を描くだろ。それで内側の物を外に出さない強固な結界を張る」

ここで難しいのが回路の組み合わせが無敵なんだよな。下手をすれば『エンゼルフォール御使墮し』が発動してもおかしくない。俺の魔眼がなければ出来ない芸当だ。

「それで結界を張った系で大音量の音の衝撃波を掻き鳴らす。あとは衝撃波と衝撃波がぶつかって新たな衝撃波を生みながら威力を上げていくという訳だよ」

『鋼殻のレギオス』のリンテンスが使ってた技だね。ちなみに科学的には定在波と呼ぶらしい。あとルッケンス秘奥義とかもやるうと思えば出来る。

「では我々の障壁を破ったのはあの轟音そのものですか？」

「そういつことになるね」

説明も終わり、ふう、と口に含んだ煙を吐き出す。

その際『アンタどう見ても未成年だろ』みたいな目でセラスが見てくるが無視だ。無視。

さつき倉庫から取り出したジュースを飲む。

飲み切ってしまったのでグラスに炭酸入り葡萄ジュースを注ごうとしたとき破壊音と共にこちらの戦艦が一隻沈んだ。

「彩識殿！！」

はいはい。わかってますって。

霊脈から魔力を補給。そして敵軍を指差し、

「『千の雷』」

迸る電流が敵軍を蹂躪する。

「なっ！！ 電撃系最大規模の古代語呪文を無詠唱！？」

そりゃそうでしょ。今更だが俺は極地まで辿り着いた人間だぜ。謂わば魔法になつた魔法使いだ。

大体始動キーとか呪文なんてもんは精霊に力を貸してくださいとお願いしているようなものだろ。

俺その上位の神様と契約してるし世界とも繋がってるから余程手加減が必要なときくらいしか詠唱なんていらぬ。なにより覚えるのが面倒だ。

何か最近人間やめてる気がしてきた。だからこそ躊躇いなく飲酒と喫煙を楽しめるんだが。

そしていい感じに手持ち無沙汰になったところで『墓守り人の宮殿』から一際大きい爆発が。

「一体何が？」

「気にするな。ナギが勝つたんだろ」

爆発に続き『墓守り人の宮殿』から光球が膨れ上がっていく。

「彩識殿。あれもナギ殿が？」

「ん？ あれは敵さんの儀式が完成したんだろ」

「それではっ！」

「こつちの準備も整ったみたいだぜ」

ついで現れたのはメガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦・帝国軍北方艦隊。

三つの艦隊が光球を取り囲み反転封印術式を大規模展開。

俺はこのとき巨大隕石に立ち向かうアメリカとロシアみたいなもんか、と他人事極まりないことを考えていた。

やはり原作通りゼクトはそのまま帰ってくることはなかった。

はあ。面倒がらずに俺が行っていたらまた変わっていたのかもな。

そして俺、ナギ、詠春、ジャックは式典に参加し、『紅き翼』は世界に知らぬ者なしの英雄となった。

ちなみにアルはサボった。ガトウは仕事だつてさ。

で、式典が終わった今。俺は全力でスラムに向かっている。

あそこつて避難作業が難航するんだろ。魔法が十全に使えるうちに手を打っておきたい。

到着した俺は島全体を覆うように『陣』を張る。離宮島には式典中に張っている。

『陣』を完成させ、このままスラムの人間を転移させる算段だ。

「大規模転移 発動！」

俺も含めスラムにいた大多数の人間が一瞬で離宮島に移動した。

突然のことだったので軽く騒ぎになっていたが、国中がお祭り騒ぎみたいな状況だ。それ程大きな被害は出なかった。

その後ナギたちと合流。そして本格的に始まった王都の崩落。

結果的に犠牲者数は人口の一パーセントを下回った。俺はたった二

パーセントしか救えなかったと思うとなんだかやり切れないな。

そしてアリカ女王は重戦争犯罪人として逮捕拘束され即座に処刑が決定した。

第六話・出会い？いいえ出遭いです（前書き）

やり過ぎたかも

第六話：出会い？いいえ出遭いです

アリカ王女の処刑が決まった四ヶ月後。最近殺気だけで狙撃をかわせるようになってきた。

俺はナギたちとは完全に別行動を取り、未だにしぶとく生き残ってる武装マフィアや議論の余地なく『不合格』の奴隷商なんかを潰しながら一人で紛争地域を回っていた。

途中で引き取った戦災孤児の子達はある程度身を守る術と最低限の教養を身につけさせ、テオを頼み倒して生活の保障と学校に通えるようにしてもらった。

金？俺は英雄ですよ。金には困りません。賞金稼ぎ紛いのこともやってそっちに送ってるし。

何より軍に適当に創った魔法や魔法具、論文なんかを高値で買ってもらっているのが大きいな。伊達に根源は覗いていない。

そして今日も戦争を食い物にしている組織を潰そうと思っていたんだが、なんかこう落ち着かないというか虫の知らせというか焦燥感みたいなのがあってスッキリしない。

ハッキリしないので忘れてることもあるのか考えながら彷徨っているといつの間にか市街地に入り込んでいた。

市街地と言ってもつい先日まで紛争をしてたんだ。人気はほとんど無い。

無いと言っても家の中に気配は感じるから居ることには居るんだろ
う。

でも街並みがなあ。

家の壁には所々穴が開き、中には全壊しているものもある。辺りには
血痕もちらほら見え、遠くのほうには死肉に群がってる鴉まで。

……うん。死体埋めてこんなとこさっさと出よう。

そう決めて動いた瞬間に、「いやあああああつ！！」と、空虚
な街に悲鳴が木霊した。

そこ角をを曲がった家からか。声からして女の子だな。

嫌な予感しかしないので急いで駆けつける。

扉をブチ破り、家に入ると血の臭いが充満していた。

入ってすぐの部屋には成人男性の亡骸が。死後から時間が経ってい
ない。ついさっき殺されただろう。

ゴトツ。

天井から物音が響く。

「二階か」

時間が惜しいので階段は探さず、そのまま二階に転移する。

近くの部屋から手当たり次第にドアを開け、三部屋目で人と人だったものを発見。

四人の男の死体。そして右足を太股あたりで切断され血塗れで気絶している少女。

何故かはわからないが確信した。この娘が殺ったんだと。だが詳しいことは後だ。

魔法で麻酔をかけ、糸で血管を神経を筋肉を繋ぎ合わせる。

そして全力で治癒魔法をかける。骨を繋ぎ、細胞を活性化させ、傷跡を残さないように細心の注意を払いながら治療する。

「ふう〜」

繋がった。あとは血か。倉庫に造血剤がまだあったな。

造血剤を注射して後は目覚めるまで待つだけ。起きる前に死体を埋葬しておくか。

そして埋葬を終え、あの娘が寝ている部屋に戻って来た。

さて、これからどうするかな。今まで通り学校に送るのは自分でもよく分からないがダメな気がするんだよ。

とりあえず起きるのを待つしかないか。

四時間程経過したかな。麻酔強くかけすぎたかも。

「……………んっ」

「お？ 起きたか？」

改めて見ると、きめの細かい白い陶器のような肌と、肩まである髪は艶やかな黒。大きな目の中心で動く瞳はサファイアを連想させる深く澄んだ青。紛うことなき美少女だ。

「……………えつと、あなた誰？」

何の変哲もない当然の疑問。実にありふれた会話のはずなんだが、今現在の体勢がおかしい。

俺が声をかけた瞬間、床に転がっていた何かの破片を手に取り常人離れた速さで俺目掛けて刺してきた。

俺じゃなかったら死んでるぞ。

刺される直前に腕を掴んで今は膠着状態なんだがそこで『あなたは誰ですか？』と世間話みたいな感じで聞いてくる。

お前はどこの殺人鬼だ。呼吸するように人を殺すとか零崎っかついの。

……………あれ？ ちょっと待て。自分で言ってる意外と的を射ているよ
うな気がしてきた。

「俺は零崎彩識っていうんだけどさ。あ、家族の方々は弔っておい

だから」

「……ありがとうございます。私の名前は……」

躊躇い、言いよどみ、そこから先が続かない。

「自分のはずなのにまるで自分の構造全てが変わってしまっているかのような、作り変えられてしまったかのような気分かな？ うん。自分が自分であると証明するのは不可能だからね。今の自分になる前の名を名乗っていいのか分からないのかい？」

「……………」

返答は無し。だが腕に籠る力は強くなった。

突然ですが、ここで零崎一賊についての簡単な説明。

零崎は『共振』という家族の位置が大まかに分かる勘みたいなのがある。

そして家族が危なくなると必ず誰かが助けにかけつける。

ということはだ。俺はこの娘が危なくなつたから引き寄せられるようにこの家に来た。

来る前から虫の知らせみたいのはあつたし、殺害現場を見たときこの娘がやったと直感で感じるものがあつた。

そしてこの娘の意味不明さは零崎に通じるものがある。彼女零崎。イコール俺も零崎。

おいおい。いつからだ？ いつ零崎化した？ 戦争ばっかだったから全く気付かなかった。いや、あるいは最初からか。

零崎なんて格好つけて名乗っていただけなのにまさか本当に自分になるなんて。

まあ、俺のことはこの際いい。望んでいた節も確かにあったし、僥倖程度に思っておこう。

まずはこの娘だ。

しかしこの展開些か予想外すぎるぞ。否、夢想すらしていなかった。

事実は小説よりも奇なり。まさしくその通りだよ。

はあ、家族の勧誘なんてもう少し人生経験積んでからしたかったね。

「まあ何だ。そんなに身構えないでくれ。俺もちよつと戸惑っててね、何分初めてのことだから何を言っているのかわからない。なので簡潔に言わせてもらおうよ」

一旦区切り、続く言葉を紡ぐ。

「俺の妹にならないかい？」

SIDE???

訳がわからなかった。

わかっているのは突如として家に侵入してきた三人の男たち。

そして私と兄さんを逃がすために盾になったお父さんとお母さん。

部屋に逃げ込んで私を庇って目の前で殺された兄さん。

必死に抵抗して右足を斬られ床に倒れている私。

痛い。痛い痛い痛い。

痛いの熱い。熱い熱い。

熱いの寒い。寒い寒い寒い。

そして何よりも辛い。悲しい。寂しい。

もう誰もいない。私独りだ。

下卑た笑い声が段々近づいてくる。

もういいや。諦めた。観念した。達観する。ギブアップです。

死を受け入れて、運命を甘受して、生を断念して、生きることが放棄する。

そして世界が反転した。

意識が朦朧とする中、最後に見たのは地に伏せた男たち。最後に聞いたのは扉が開く音。

首を回す余力すらなく私はそのままブラックアウトした。

心地よい夢を見ていた気がする。

「……………んっ」

意識が段々覚醒してきた。どうして私はまだ生きているんだろう。右足が……………繋がってる？

「お？ 起きたか？」

声をしたほうを見ると私と同じくらいの歳の男の子がいた。

黒髪黒眼。整った顔立ちをしていて声を聞かなければ女の子のようにも見える。

「……………えっと、あなた誰？」

ただ普通に問い掛けただけなのに、気付いたら何かの破片を男の子に刺すところだった。

怖い。

何も考えず当たり前のように無意識で人を殺そうとした自分が怖い。

本当に私なのか。こんな思考は私のものじゃない。こんな嗜好は私のモノじゃない。

「俺の名前は零崎彩識っていうんだけどさ。あ、家族の方々は弔っておいたから」

「……………ありがとうございます。私の名前は……………」

戸惑った。今自分を殺そうとした人間に自己紹介する男の子に面食らった。

今だって破片を持った私の腕は掴まれたままで膠着状態なのに。

だけどそれ以上に、

「自分のはずなのにまるで自分の構造全てが変わってしまったているかのような、作り変えられてしまったかのような気分かな？ うん。自分が自分であると証明するのは不可能だからね。今の自分に変わる前の名を名乗っていいのか分からないのかい？」

「……………」

凶星だった。この人は何か知っているのだろうか。

「まあ何だ。そんなに身構えないでくれ。俺も何分初めてのことだからちょっと戸惑っててね、何を言っているのか分からない。なので簡潔に言わせてもらうよ」

一旦区切り、そして言葉はこう続いた。

「俺の妹にならないかい？」

お願いです。これ以上混乱させないで下さい。

「朱里です」

「ん？」

「私の名前」

なんでもいいからとりあえず落ち着こう。入れっ放しだった手の力を抜く。

「シユリね。朱、アカ。アカリ。うん。そうだな」

一人頷いて納得している。今の私の状態について何か知っているなら教えて欲しいんですけど。

「零崎朱織^{アカオリ}。これからはそう名乗ればいい」

妹になることは決定しているようだった。

でも、何故かしっくりする。まるで始めから私の名前のように。

「えっと、彩識さん」

あれ？ 零崎彩識？ ……え！？ ひょっとして『紅き翼』の！？

「何かな？」

「『紅き翼』の零崎彩識さんですか？」

「そうだよ。ていうかそれを一番に聞くのか」

だって大戦の英雄ですよ。そっちの方が気になります！

「じゃあ私は一体どうなったんですか？」

「殺人鬼になりました」

.....は？

「レベルでいうなら俺よりも上だ。いや／＼さっきの手際の良さは惚れ惚れするよ」

否定できない。確かに私は無意識に人を殺そうと.....いや、あの男三人は？

「私を助けてくれたのはあなたですか？」

「傷を治したのは俺だけど、俺がここに来たときは全部終わってたよ。この家で生きていたのは朱織だけだった」

名前定着ですか。それじゃあやっぱりあの三人を殺したのは

「まあ、気にするようなことじゃないさ。そんなことはどっちにしたらって同じなんだから」

そんなこと。この人に言われて納得してしまう自分がいる。この人だからか？ 目の前で家族が殺され自分で人の命を奪っているのに。

これで否応なく理解出来てしまった。私はもうヒトじゃない。鬼だ。

「それで英雄の彩識さんは私をどうするつもりなんですか？」

「別にどうもしないけど。まあ強いて言うならチカラの押さえ方を覚えようか」

「……私を殺さないの？」

正義の味方の英雄が私みたいな殺人鬼を生かしておく理由なんてない。

「何か盛大に勘違いしてるよ。第一、妹を殺す兄がどこにいますか？」

「でも貴方は英雄でしょ。正義の味方が殺人鬼を助け」

私の言葉を遮るように彩識さんが話す。

「そこが勘違いだ。英雄なんてナギたちと馬鹿やってたら言われるようになっただけだし、クラスでいうなら俺も殺人鬼だよ」

今日は何だか驚きの連続で思考が全く追いつかない。

あ、そっか。でも一つだけわかった。殺人鬼の兄は殺人鬼だ。

「独りっつーのはキツイだろ？ 人とまともに関われない殺人鬼なら尚更だ。だから俺は家族を作りたいと思ってる。それで家族で馬鹿やって笑って死ねたら最高だろ？ だからさ」

俺の妹にならないかい？

最後はこの言葉で締めくくられた。

そんなの

「彩識さん。一つだけ聞きたいことがあります」

「ん？ 何かな？」

「私の兄になつてみませんか？」

断れるはずがない。

第六話・出会い？いいえ出遭いです（後書き）

一 応長男長女ということでも名前がAから始まっているという微妙な設定

第七話：女王奪還

朱織と出遭ってから一年と六ヶ月。

なぜか流れでいつの間にか仮契約をしていたり。あそこまで流されたのは前世でも類を見ないな。

英雄の仕事を利用し、まずは朱織の殺人衝動を慣らしながら抑えていった。

このために一体いくつもの組織が、どれだけの人間・魔獣・悪魔が犠牲になったのだろうか。

そしてさらに三人の弟が出来ました。

いや、俺より年上だから弟という表現はあってない気もするが、零崎の長男という触れ込みなのでそこは勘弁していただきたい。

三人の零崎の覚醒に立ち会ってわかったことが一つ。覚醒したらジヤックの強さ表でいうところの値が千くらい跳ね上がるということだ。

その三人は覚醒したてでもある程度衝動を抑えていたから俺特製ギミック満載の魔導具を渡し、魔法を教えてそれ以来会っていないけど、どこかで零崎を始めていることだろう。

そして俺と朱織は現在別行動中だ。

あいつも十全に自分を律せれるようになったし多分大丈夫だろ。

別行動をしようと言ったのは俺なんだが、理由はアリカ王女の処刑の日が近づいてきたから。

これは完全に俺個人の問題だから家族を巻き込むのは気が引けるし、何より今回殺しは無しだからな。

で、一人で隠れ家に辿り着いたわけだが、

「もう一週間切ってるっつーにあのバカはまだ決心がつかないでいるのか？」

「そう言うな。万が一失敗すれば良くて元老院、最悪世界を敵に回すかもしれん。そうなってはアリカ王女を救出しても意味がない」

俺の問いかけに詠春が答えてくれるが、世界を敵にとかそれこそ今更だろ。

一旦キセルを銜え煙を口の中に。煙を吐き出す。

「おいナギ！ テメーいつまでグダグダ悩んでるつもりだア？」

椅子に座りだんまりを決め込んでいるナギに発破をかける。

「…………ハウル…………オレは…………」

ええい！ グダグダと鬱陶しい。

「『汝、口を閉じるべからず』」

「オレだって助けに行きたいに決まってるだろうがッ!!」

自分の発言にハツとするナギ。今確実に俺の口元は緩んでいるだろう。

「フフ。全く、貴方も人が悪いですね。言霊で本音を吐かせるなんて」

横で聞いていたアルが口を挿んでくる。

「お前に人が悪いとか言われたくねえよ」

それに俺は『口を閉じるな』と言っただけだ。まさかあんな大声で返してくるなんて。よくまあそこまで自分に嘘がつけたな。

「ナギ。これは俺がこの世で最も尊敬する人の言葉なんだがな、嫌なことは嫌々やれ。好きなことは好きにやれ」

「好きにやれ、か。そうだな！ オレはアリカを助けたい。頼む。力を貸してくれ」

「ハッ。今更何言ってるやがる」

「そうですよ。ナギ」

「皆アリカ王女を助けたいと思ってここにいるんだ。断るはずがないだろ」

「お前ら……ありがとう」

三人称視点

処刑執行日当日。

「魔獣うごめくケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとってまさに『死の谷』」

元老院議員の一人がこれから行われる処刑法を説明する。

内容はこの処刑法が如何に残虐かを語り、目的は死刑囚に恐怖を与えることのようなのだ。

と言ってもこのような処刑法を行われる重罪人は狂うなり壊れるなりしているので一々説明するのは無駄だと思うのだが。

そしてその説明も終わり、ついに処刑の時刻がやってきた。

「歩け」

「触れるな下郎。言われずとも歩け」

アリカ王女は一步一步と自らの足で死に向かって着実に歩いて行く。

そして最後の一步というところで目元にうつすらと涙を浮かべ、

「さらばじゃ。ナギ……」

最愛の者の名を口にし、足を踏み出し重力に身をゆだねる。

直後。

谷底から響く魔獣の咆哮が辺り一帯を支配し、処刑の完了を知らしめる。

「よろし……」

「よおーっし。こんなモンだろ」

何か指示を出そうとした元老院議員の台詞に一人の兵士の言葉が重なる。

「無礼者！ 何者だ貴様。名を……」

「おっさん」

再び台詞を遮り兵士は元老院議員の頭をアイアンクローのように掴み、そして告げる。

「録画はここで終わりだ。で、今からここで起こることは『なかった』ことになる。わかるな？」

最後の一言を強調し、認めないならば実力行使も辞さないといった不遜な態度。

元老院議員に対しこのような態度を取る者。尚且つこのタイミングで現れる者。

頭を掴まれた議員は一人の男の姿が脳裏をよぎった。

「貴様はッ」

「ぬんっ」

と、掛け声と同時に兵士の鎧が弾け飛ぶ。

「千の刃の……ジャ、ジャック・ラカンッ!!」

議員の予想は的中した。それも考えうる限り最悪の形で。

そして処刑場にはまた新たななどよめきが生まれる。

ラカンに続き詠春・アルビレオ・ガトウと大戦の英雄が集結したのだから。

「バカなっ！ いかなサウザンドマスターとはいえあの谷底から生きては……」

「それはどうかな？」

再三に渡りこの議員の台詞はまたしてもラカンに阻まれることとなった。

「ウチの面子で足りないのがあるだろ？ アイツもナギと一緒に谷底にいるからな。二人の安全は保障されてんだよ」

「ハウリングミラージュか！ しかし、同じことだ。どれほどの天才だろうと魔法が使えなければ……」

「ハッ。それがどうした？ 魔法が使えない？ そんなものアイツにとつては些細な問題だ」

四回目。どうやらこの議員は最後まで台詞を言えない星の下に生まれてきてしまったようだ。

「なんせハウルは 殺人鬼だからな」

SIDE彩輝

今上で派手な爆発音がしたな。

どうやら詠春たちも戦い始めたようだ。

こっちは自由落下してきたアリカさんをナギがキャッチし、桃色の空間を作り上げちゃってる。

正直言おう。ウゼエ。

原作だと谷底から出るために必死に走っていたナギだが、俺の介入により歩くことすらなくその場で惚気てやがる。

あーあ。もう殺すの止めよっかなあ。もうそろそろ魔獣の死体も三ヶタに突入とばかりに増えている。

昔あったYahooきつずのポケモン投票でコイルを一位にしようぜの投票率くらいの勢いで増えているだろう。

この程度の魔獣ワイヤー一本あれば解体できるぜ！ と豪語して挑

んだんだが、調べてみるとこの谷底魔力と気が使えないってだけだった。

つまり通力は使えるということだよ。

純度100%混じりつけなしの神様の力で出来た糸を谷中に展開。近くにいたヤツは死の線斬ってるけど、ほとんど何もしなくても自滅してくれてる。

そして五分後。

ヤベーよ。終わったよ。終わっちゃったよ。魔獣全滅だよ。

血の匂いとか濃すぎ。この大量の肉塊と多量の血は誰が片付けるんだろうな。

「なあ。俺詠春たちの方行っついていいかな？」

手持ち無沙汰になったんでナギとアリカさんに問いかけたんだが、『あれ？ お前いたの？』とか『邪魔するな』みたいな目で見られた。

……キレていいよね。

糸を繋いだまま詠春たちのところへ転移。これも勿論通力で。

そうすると一瞬で糸に莫大なベクトルがかかり、糸を引っ掛けていた谷の壁の岩が崩れだす。

リア充なんて滅んでしまえ！

まだ晴れぬ鬱憤を敵軍で消化していたらいつの間にか日が暮れていた。

おかしい。感動の救出劇のはずだったのに。

現在京都

あの後崩落から逃げ延びたナギとアリカに軽くフルボッコにされて、
どろろという流れか『京都に行こう！』ってなった。

もう少し詳しく説明したら前々からナギが姫つちと一緒に連れて行ってやるってアリカさんと約束してたみたい。

既に手遅れだが、新婚旅行に俺たち（紅き翼全員）ついて来て良かったのか？

「ここが清水寺だ」

とは詠春の説明。すっかり観光モードになって『お前の地元だろ。案内しろよ』みたいなことが起こって案内役をやらされている。

「《人類最強》と《人喰い》が激突した場所ですね。わかります」

「何言ってるんだ？」

「フツ。戯」

「戯言ですか？」

「……………」

おのれアル。ちょっと格好つけて『戯言だよ』と言おうと思ったのに。ていつかなぜ知っている。

だがそれならば。

「傑さ」

「傑作ですよ」

意地の悪い笑みを浮かべているアルの顔をジト目で睨む。一度ならず二度までも。

「日本には清水の舞台から飛び降りるといって格言があっただな、突き落としてやるのか」

「いえいえ。ご遠慮しておきますよ」

「いやいや、遠慮すんなって。うまくいったら天使に囲まれてハレムな余生を過ごせるかもしれないぜ」

「そんな素晴らしい楽園への片道切符があるならハウルにお譲りしますよ」

俺とアルの間で殺気という成分を含んだ魔力が展開される。

「おい！ コラ、そこ。何重要文化財で暴れようとしてるんだ。あ

とナギにジャック。本当に飛び降りようとするな!」

案内役。それは言い方を変えれば引率の先生役とも言つ。

こんなカオスな面々のストッパーだなんて俺は死んでもやりたくない。

「大変ですね」

「タカミチも少しは手伝ってくれ」

タカミチにまで同情されているよ。だが俺は自重しない。

その後も京都の名所を巡って（鴨川公園ではテンションが上がりすぎてヤバかった）今は詠春の家、つまり俺の実家で酒飲んで騒いでる。

「ガハハ。タカミチお前も飲めよ」

「ちよ、僕未成年ですから」

「ああ？ ハウルを見ている」

「焼酎持って来たぞー」

「芋か？ 麦か？」

「芋だ」

「やつぶっー」

「いやいやいやいや。アレと一緒にしないで下さい」

「む。何だタカミチ。お前今スゲー失礼なことを言わなかったか？」

「気のせいです！」

「んーそっかー。とりあえずお前も飲もうぜ」

「だから僕未成年ですって！」

そんなこんなで時間はどんどん過ぎていき、そろそろ寝るかと思っていた頃。

「大変だ！ 封印されていた鬼神が復活して暴れてる！」

ああ。そういえばあったなそんなイベント。

全員で現場に向かう。

「コイツが鬼神か？」

「ハッ。意外と大したことねエな」

この状況で忘れてはいけないことが一つ。

さつきまで騒いでて全員が酔っているためテンションが異様におかしい。

そして始まった鬼神フルボッコタイム。

あまりにもスクナが惨めだったため俺は一切手を出さず、それを肴に酒を飲んでいた。

無事に封印も終了し今日はこれで解散となった。

第八話：未来に向けての準備

馬鹿騒ぎの後日。

不死の酒を巡って騒いだわけじゃないのにほとんどのメンバーがダ
ウン。

理由は二日酔いだから別に気にしなくてもいい。

つーかお前ら弱すぎだろ。特にナギ。お前一応新婚旅行だろ。何酔
い潰れてんの。

まあアリカさんも軽度の二日酔いだが。

酷いのが詠春とガトウだな。昨日の鬼神騒ぎを覚えていない。

そんな状態であそこまで戦ったのかと呆れるしかなかった。

「全く最近の若いモンは碌に酒も飲めんのか」

「この中で一番若いのは貴方ですよ。ハウル」

「何だかんだで一番飲んだたのお前じゃなかったか？ 何で平気な
んだよ」

無事なのはアルとジャックぐらいだ。

「……はあ」

と、ため息を吐きながらタカミチがこっちにやってきた。

「どうした？ 結局昨日一滴も酒を飲まなかったタカミチ君」

「未成年なんだから飲まないのは当たり前でしょ！ はあ……。師匠が咸卦法教えてくれるって言うってたんですけど」

「まあ無理でしょうね。あの体調じゃ」

「だな」

何か酔った勢いで承諾しちゃった感があるぞ。原作でも青年になつてから教えてたよな。

まあ例え体調が良好でもあの調子なら忘れていそつだがな。

「なら俺が教えてやろうか？」

「え！？ いいんですか!？」

原作通り？ 何ソレ？ おいしいの？

「いーよいーよ。行きたい所は昨日行つたし。ついでに戦い方というのをその身に焼き付けてあげよう」

そして始まったタカミチの修業という名の俺の暇つぶし。

……やるからにはちゃんとやるよ。

「まあ始める前に一つ約束だ」

「何ですか？」

「これから毎日最低でも一時間は本気で居合い拳を打ち続ける」
わからないといった風に首を傾げる。

「ちょっと辛辣なことを言うが今のお前は魔法が使えないゆえに周
りよりもスタートダッシュが遅れてる」

はい、とタカミチは顔を俯かせる。

「だが、それは悪いことか？」

「え？」

「魔法と言っても色々ある。周りが攻撃、防御、補助、治癒とよそ
見をしている間タカミチは唯ひたすらに一点を目指して突っ走れば
いいんだ」

そんな生き方は俺には出来ない。

「戦いなんて所詮突き詰めればカードゲームと一緒だよ」

「カードゲーム、ですか？」

「要は手札の数と相性で決まるってことだ。数なんて俺ぐらいの量
じゃなきゃ殆ど意味が無い」

半端な手札を揃えたところで最後に詰めを誤るのが落ちだ。

「だからこそ、お前はどんな戦況でもひっくり返せる最強の一枚を
持て。一日も欠かさずやり続けたら、お前絶対化けるぜ」

今度は「はいっ！」と力強く頷いた。

「さて、それじゃ咸卦法教えるぞ。まず自分を無にしてだな、左腕
に魔力、右腕に気っと。ほれ。やってみ」

「左腕に魔力……右腕に……うわっ」

魔力と気が反発して弾けたか。

「今のは魔力が多すぎ。合成する前に一旦止める。指摘してやるか
ら」

「はい」

再び両手に力を集める。

「気の量を多く。あー多い多い。ちょい下げ、違っ、魔力も下がっ
てんぞ」

こんな感じで大体三十分後。

「よし。それだ。それで同量。その感覚ちゃんと覚えとけよ」

「今更ですけど、何で正確に量がわかるんですか？」

「あれ？ 言ってなかったっけ？ 俺魔眼持ちっ子だから魔力とか

流れが視えるんだよね」

「初めて聞きましたよ！ やっぱすごいんですか？ 魔眼って」

「そりやすごいぜ。情報量が半端なくてな。俺でも視すぎたら脳がパンクして死ぬ」

「……………」

まあ制御は完全に掌握してるし、視たい情報のみ絞ってるからそんなことは起きないけどね。

「ノーリスクで強くなるうなんておこがましいというわけだよ。で、ここからが本番なんだが」

姿勢を正すタカミチ。

「自分を無にするって言うてる意味わかるか？」

「え？ 何も考えないってことですか？」

「まあそんな感じなんだけどさ、俺は逆だと思っ」

「逆ですか」

「ああ。極限まで集中して限界まで集中して臨界点越えるまで集中していける境地みたいなのだと思っんだよね」

「境地……………」

「体験すればわかるさ。意識が宙に浮くような、時間を止めている気分になる」

『結界師』読んでて助かった。あれのおかげでなんとなくだが前世からなんとなく理解はできていたからな。

「ま、数と時間かければ形にはなるだろ。ってことでやれ」

「やっぱりそうなりますよね」

苦笑しながらも次々と魔力と気を反発させていく。

こればかりは感覚と慣れだから教えようがない。

同量にするって時点で結構省略してるけどな。

「お。短時間の割には結構出来上ってんじゃないか」

ジャックが様子を見に来たようだ。

「なんだ暇なのか？」

「まあな」

「ふん。ならちょうどいいや。タカミチ。一応居合い拳は使えるな」

「え？ 射程も威力も全然ですけど一応は」

「上等上等。それじゃ、今からジャックと模擬戦な」

「は？」

流石の俺もいきなり崖から突き落とすような真似はしませんよ。

回復系の陣を張って筋肉の断裂とか疲労とかすぐ治るようにしてやる。

そして倉庫から取り出すのはクラリネット。音で操って身体に力の使い方を刻み込む。

「ジャックどうせ暇なんだろ？ ちょっと付き合え」

「いいぜ。じゃあタカミチ、やるか」

「え………ちよっ………」

「大丈夫大丈夫。タカミチは感覚を研ぎ澄ませておけばいいから」というわけで演奏開始。

ジャックも俺が操ってるからって加減はするけど遠慮なく攻撃してくる。

その後タカミチの精神に限界が来て気絶してから一時間ほど模擬戦は続いた。

体力は常に全快だからほぼ休み無しで九時間近くやっちまった。流石にやりすぎたと反省している。

後にタカミチは『たった九時間だったけど体感時間は五年近く感じた』と言っていた。

次の日。

タカミチは死んだように眠り続けた。

一撃死に近い攻撃を紙一重で避け続けるという極限状態で九時間近く苛め抜いたからなあ。

タカミチが起きて廊下ですれ違うときにいきなり正拳突きしてみたらちゃんと捌いて反射的に反撃してきた。

居合い拳の方も無駄の無い理想的な動きを身体に覚え込ませたからか射程も威力もキレも最初に比べれば格段に良くなったな。

さらに無心というのが少しは分かったのか咸卦法もいいところまでいくようになってたし。

ガトウがめっちゃ驚いていたのは言うまでもない。

と言っても基礎固めが出来ただけで単純な強さは修学旅行のネギぐらいだが。咸卦法だってここから先が難しいだろうしな。

ついでに俺との修業はもう二度と絶対にしないと誓ったらしい。

「よお詠春。二日酔いはもう醒めたか？」

「ああ。まだ少し気分が悪いが昨日よりはずっとマシだ」

「そいつは重畳」

色々と考えたんだが俺はあと三年ぐらいで俺は未来に戻るようになる。

それで今の内にこう盛大な伏線を張っておきたいんだよね。

どうせなら俺が確実にタイムスリップしていたという痕跡を残して帰りたい。

というわけで、

「詠春さあ。後四・五年したらお前に双子が生まれると思うんだよね」

「なんだそれ。予言か？」

「予言だ。それでだ。長男には十二歳がきたらこれを渡してやってくれ」

俺のパクティオカードを渡す。

「別に構わないが、私の子供に渡しても何の意味もないだろ」

「意味は無くてもいいんだ。いいか。約束だぞ。絶対渡せよ」

「ああ。分かった分かった。十二歳だな。必ず渡すよ」

「よし。それじゃ俺はこれから全国放浪しながら失踪する予定だから達者で暮らせよ」

「はぁ。そういうところは相変わらずだな。……ハウルツ！！このカードの名」

詠春が言い切る前に長距離転移で逃げた。

ふっふっふ。未来に帰った時が楽しみだぜ。

さて、とりあえず麻帆良にも行きますか。

はい。やってきました。麻帆良学園。

霊脈を使った転移は座標指定が難しいけど霊脈上へはどこへでも行けるから楽でいいね。

そして学園長室へと殴りこむ。

「こんにちはー。零崎彩識っていいいます。アポ無しだけど固いこと言うなよ」

「フオフオ。『紅き翼』の零崎君がワシに何か用かの？」

英雄の名前はこういうとき便利だよね。

「大したことじゃないんだが、近い将来安定した生活を送りたくて（生徒として）この学校に通おうと思うんだ」

「フオツ！ この学園に（教師として）通ってくれるのかの」

認識の齟齬があることは自覚している。英雄に自分の職場で働きたいなんて言われたら断るヤツはまずいないよね。

「それで一つお願いがあるんだよね」

「まあそんなとこじゃろうと思ったわい。それで条件とはなんじゃ？」

「この学園内に俺の家、つまりは工房を建てたいんだがいいかな？」

「それぐらいなら別に構わんが、何が目的じゃ？」

「裏は無い。強いて言うならちょっとドタバタしそうだから念のための隠れ家が欲しい。勿論学園側には迷惑はかけないようにするが」
本音は寮の管理人とかいう面倒な役職を押しつけられそうなんだもの。

「……ふむ。まあいいじゃろ。許可するぞい」

「サンキユ」

そしてこれから二ヶ月程かけてログハウスを建てた。

ちょっとエヴァのログハウスに憧れて。

この二ヶ月間することが無くて霊脈の補強とか大魔術の仕込みとか

をずっとやってた。結界の維持に神木とか霊脈の魔力を使うのはいい。俺もやってるし。

でもその後の処理が杜撰すぎるだろ。霊脈のデカさに物を言わせて強引な術式組んでるから学園の外で魔力が枯渇している地域があるだぞ。下手したら雑草一本生えない不毛の大地になるわ！

同じ様に霊脈を利用する者として何だか異様にムカついたので、使用魔力の大半を電力で賄い、しかし結界の強度は20%アップと新しい術式を開発してやった。

それでわかったんだが、この時代から既に麻帆良の技術力は異常だ。

ログハウスと言っても俺が要求したのは地下室ありの二階建てだ。それを二ヶ月って……。俺が素粒子並みに細かく注文しなかったら一ヶ月もかかっていないだろう。

ちなみに家は竜穴の上に。壁は東西南北に一度の狂いもなく正確に。神道・陰陽道・ルーン・カバラ・ソロモン・魔女術……etc.etc.どれをとっても遜色ない魔法使いにとって夢のような城が完成した。

「でだ、学園長。なにかとヤバい仕掛けとか呪物があるから誰も住まわせないでくれよ」

現在学園長室。

「しかしそれならお主が戻ってくる間ずっと放置しておくのも危険ではないかのう？」

「あ。管理者なら一応いる。それでも心配なら、俺の知り合いが殺人鬼。このどちらかの条件を満たしていれば住んでいいことしよう」

「誰も住めそうにない条件じゃな」

すくなくともタカミチが来るはずだから心配するようなことじゃないだろう。

「ついでに言うところの学園の三流魔法使いは近付けるな。興味本位で侵入して学園が地図から消えても俺は一切の責任は取らないから」

ああいう妄信した連中って大嫌いだからね。

学園が地図から消えるってくだりは流石に嘘だ。やろうと思えば出来るけど。

「なんて厄介な家を建ててくれるんじゃ」

頭を抱えながら深くため息をついている。

俺の戦い方を知っていればそれぐらいはして当然みたいに思っても不思議じゃない。

「それじゃあこれから世界放浪してくるから。帰ってきたらよろしく頼むわ」

「いつ頃戻ってくるんじゃ？」

「そっだね？……予定は未定って感じ？」

「随分と気の遠くなる話じゃのお」

「まあそう言わずに。俺の物語ではこの学園に通うのは決定事項なんだから」

「帰ってきたら馬車馬のように働かしてやるぞい」

「うわっ。帰ってきたくねえ」

軽く下らない応酬をしたあと俺は麻帆良を去った。

さてと風の向くまま気の向くまま 零崎を始めますか。

第九話：また……鬼か……

SIDEエヴァンジェリン

はあ。全く、最近『紅き翼』だか何だか知らんがそいつらが英雄になつて正義を名乗る馬鹿共が多くなりかなりウザつたい。

中には正義は必ず勝つなどと本気で信じている奴もいるから本当に性質が悪い。

「もう逃がさんぞ『闇の福音』！！」

そして現在進行形でそんな馬鹿共に追われているところだ。

「先日のロンドンで起こつた連続殺人事件も貴様の仕業だな！」

はあ？ そんなもの知るか。そういえば百年くらい前にも切り裂きジャックなんてのがいたな。結局迷宮入りしたんだつたか。

大方その模倣犯だろ。変な因縁をつけるな。

相手にするのが面倒なぐらい力量差が開きすぎているので適当にあしらっていたが逆にどんどんつけ上がつて。鬱陶しい。

そろそろ殺すか。

「チャチャゼロ」

「オ、ヨウヤク暴レテモイイノカ」

相手は大体三十から四十人程度。そしてその全員が不死殺しの武器を持っている。

五百年前の私なら苦戦したろうが今となっては道端の石ころを蹴るのと同じようなものだ。

「『魔法の射手 連弾・闇の144矢』」

私の放った『魔法の射手』とチャチャゼロのナイフが奴らの肢体を奪っていく。

「ギヤアアア」

「う、腕があああああ」

チツ。この程度でこの私に挑んでくるとは。

ああ、だんだんイラついてきた。

見せしめになるべく派手に殺してやるう。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライ」

呪文を唱え始めた瞬間、私の左胸から剣が生えた。

「ゴフツ」

「御主人！」

クソツ。心臓と肺をよりにもよって不死殺しの剣で貫かれた。

即座に剣を押し折り、振り向きざまに爪で薙ぐ。手応えは無し。

そこにいたのはローブを纏って顔を隠している体格からして男。

なんだコイツは。気配が無い。

いや、存在自体が希薄すぎる。目の前にいるのに次の瞬間には見失ってしまいそうだ。まだ幽霊の方が存在感あるぞ。

油断していなかったと言えば嘘になる。成程な。この男一人のための四十人か。

吸血鬼にとって血は命のようなものだ。それを全身に送り出す器官が潰されては。この男相手では少しキツいかもしれん。

そう思った矢先。ソイツは突然現れた。

「やあやあ御兩人。元気いいねえ。何か良いことでもあったのかい？」

見た目は十歳ぐらいのガキだ。

それがコマ落ちしたかのように前触れもなく現れた。まるで初めからここに居たかのような自然さで。

勘が告げる。コイツはただ者じゃない。

達人クラスに二人も会うなんて今日は厄日だ。毒つかずにはいられない。

「一つ聞きたいんだが」

ガキが口を開く。

「こつから一番近い町ってどつち？」

は？

この状況がわからないのか？ そんなことを聞ける空気じゃないだろ。

「ガキは帰ってさっさと寝てろ」

気に食わない正義気取りの魔法使い共だが今回ばかりは同意する。

「だからあ、お前が帰れと言う町がどの方向にあるか聞いているのよ。

……はあ、これだからゆとりは」

ゆとりというのにどんな意味が込められているかは知らんが、とても馬鹿にされたということだけはわかったぞ。

このガキ。この場にいる全員に喧嘩を売っているのか。

「邪魔だからさっさと消えろつってんだよッ！ 『魔法の射手 連

弾・光の7矢』」

ガキに向けて魔法を放つ。

錬度は低いし、構成は稚拙だし、大した威力もなさそうだが、それ

でも子供一人殺すには十分すぎる力だ。

七本の光の筋がガキへ殺到する。

結論を言つとガキは一步も動かなかつた。動く必要がなかつた。

直撃する弾のみを見極め手刀で斬つたからだ。

『なっ!?!』

奴らの顔が驚愕の色に染まる。

「『邪魔だからさっさと消えろつってんだよッ!』ふん。この俺と敵対するか。面白い。では、零崎を始めよう」

そして次は私が驚く番だつた。

「零崎彩識が命じるッ!。『死ね』」

瞬間、空気が変わった。

ナイフで、剣で、槍で、自らの喉を貫く者、隣の人間と首を刎ね合う者、魔法を使って他者を巻き込み自害する者もいる。

私に一撃を与えた異様に存在が希薄な男も同様にだ。

私の討伐隊は年端もいかぬガキにたつた一言で全滅させられた。

SIDE彩輝

実は俺、絶対遵守の王の力を持っていたんだ。

……嘘です。ごめんなさい。いつも通り、音で操作しました。口笛吹いて俺を認識させないようにしてずっと音を聞かせてたんです。

しかし麻帆良を去って二年と半年。請負人紛いのことをし、各地の結社に恩を売りながら旅をしていたら、

こんな森の中で原作キャラ、しかもエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルに出遭えるなんて運が良い。

最初はこの金髪の美女どこかで見たようなと思っていたら幻術使ったエヴァでした。

「零崎彩識だとツ!? 貴様『紅き翼』の『ハウリングミラージユ』か!?!」

「失踪予定のハウリングミラージユです」

エヴァに言われると有名になったなあと実感する。

「何故助けた」

いや、俺に喧嘩を売ったらどうなるかその身に教えてやっただけで特に理由は無いんだが。

よし。ここは登場と同じく忍野調でいこう。

「助ける? 勘違いすんなよ。君が一人で勝手に助かっただけさ」

「まさか私が誰か知らないとか言うんじゃないだろうな」

知ってるに決まってるじゃないですか。

「『闇の福音』だろ？ てか、ホントに町ってどの方角にあるの？
ちよつと急いでるんだけど」

悲しいことに道に迷ったのはマジなんだよね。追記すると追われていたり。

「ふざけるな！ ならば何故私を殺そう　ゴホッゴホッ」

「って、胸に穴開いてんじゃない。ちよつと診せる」

あー。そういうえば刺されてたな。回復しないところを見ると不死殺しの類か。

魔眼発動させてなかったから気付かなかった。

『倉庫』から軟膏を取り出し、傷口に塗る。

「なっ！　お、おい！」

フヒヒ。大義名分ありで背中とか胸とか堂々と触れるぜ。

……ちよつ、待っ、110をプッシュしないで！！　俺はロリコン
じゃない！　信じてくれよおおお！

と、おふざけはこの辺にして、

「『我は乞う。霊樹の生命と月の加護をもって、かのものの肉と魂を癒せ』」

エヴァの傷口に清涼な魔力が集まる。

「傷が……塞がった……。不死殺しでつけられた傷だぞ。何をした」

「大したことはしてないって。森の魔力で不死殺しの効力を押し流した。塞がったのは単純に吸血鬼の再生力だろ」

「森の魔力だと。そんな魔法は」

「ケルト魔術。既に廃れた魔術だが、つい先日イギリス中を駆け回り現代に復活させてみました」

ありえない。そうエヴァの顔が雄弁に物語っている。

でもなあ。この二年でかなり進んだぜ、俺の研究。ホムンクルス作ったり、ソロモンの魔神七十二柱使役したり。

今までの固定観念ぶち壊すような論文や開発に改良を重ねた魔法具はかなりの高値で軍が買い取ってくれるし。魔法具はデチューンして売ってるけどね。オリジナルを使えるのは一賊だけだ。

「だが、何故だ。私の傷を治す道理などお前には無いはずだ」

万が一にも原作前に死なれたら困る。などとは勿論言わず、そうだ。ちよっと格好つけて、

「人を助けるのに理由が必要か？」

「それが数分前四十人近くの人間を殺した男の台詞でなければ私も少し感動していたかもな」

ぐっ。正論だ。なら俺は原作知識に頼る。

「けどお前の見た目からして真祖には実験台としてされてしまった感じだろ」

エヴァの顔が驚きを表す。

「なっ！？ 幻術が」

「御主人。幻術ナラサクキノ治療ノトキニ解ケテタゼ」

「ふふん。俺は魔性を見抜く魔眼を持っていてその程度の幻術簡単に破れるんだよ」

誇らしげに語る俺の発言にまたも驚くエヴァ。もう何回驚いてるんだろうな。

「ああそつだ。私は自分の意思で吸血鬼になつた訳ではない。だがそれがどうした。私はこの六百年間人を殺し続けてきたぞ」

「それもあくまで自衛だろ。お前は何も悪くない。人殺しなら俺だつてお前の目の前でやったぞ」

それも理由なく人を殺す我々殺人鬼に比べれば可愛いものだ。

「だが私はッ」

「知ってるか？ 世界は優しくはないが、救いっつーのは結構あるもんだぜ」

右手を差し出し笑いかける。

「俺も巷じゃ殺人鬼と呼ばれていてな。同じ鬼どうし仲良くしよーぜ」

「う、うわあああああ」

「おっと」

エヴァが差し出した右手を無視し俺の胸に飛び込んで恥も外聞もなく泣きじゃくっている。

俺は何も言わずにエヴァが泣きやむまで待った。

数分後。

「ぐす……ス、スマン。少し取り乱した」

まあ仕方ないことだろうよ。

俺ですら家族を作ったというのにエヴァは一人の眷属も造らずに六百年間ずっと独りだったんだろ。

さっき俺がやった傷を治すなんてちっばけな親切心すら数百年ぶりに感じた可能性だってある。

俺なら多分狂う。既に壊れてはいるかもしれないが。

「じゃあ町に移動したいんだけど……どっちに行けばいいのか教えてください。お願いします」

「ちょうど私もそっちに用があるからな。案内してやるう」

エヴァとの旅が始まった。

エヴァと行動を共にして三ヶ月ほど経っただろうか。

「エヴァ。もっと急げ。走れ」

「もうちょっとゆっくり旅をすることが出来んのか」

現在全速力で逃亡中。ちなみにチャチャゼロは俺の頭の上。

俺だってゆっくりしたいよ。でもさあ。

「来たッ」

エヴァを抱えて横に跳ぶ。

さっきまで走っていた場所には一本の魔力で形成された矢が。

「なっ！？ おいハウル、追われていたのか？」

「ああ。エヴァと会う前ぐらいから。撒けたと思ったんだけどなあ」
「そんなに前からか。第一お前が一度も戦わずに逃げるとか追っ手はどんな化け物だ」

「妹だ」

共振作用を少し甘く見ていたぜ。身内と鬼ごっこするのがこんなに厄介だったとは。

殺人鬼どうしの鬼ごっこ。まさにリアル鬼ごっこだな。捕まれば死ぬことまでそっくりだ。

「……なんで妹に追われてるんだ。というかお前の妹の執念が怖い」

「ケケ。愛サレテンジャネエカ」

隣で走りながら呆れた表情のエヴァが聞いてくる。

愛されてるってのには同意したいね。まさか三ヶ月も追いかけるるとは俺も思っていなかったさ。

「俺が暴れた事後処理を偶々近くにいた妹に丸投げしたんだが、思いのほか大事になって大変だったらしい」

おかげで二つか三つほどの組織を皆殺しにする破目になったそうだ。

「全面的にお前が悪いという点だけは分かったよ」

うん。そこを分かってくれたなら充分だ。

「ナラサツサト謝ツチマエヨ」

「あんな殺気込めまくった矢を射てくる奴に話が通じると？」

「アア。ハウルノ家族トハ全員イイ酒ガ飲メソウダ」

そりゃ殺人鬼とキリングドールとじゃ趣味が合うだろうよ。

そう思った矢先、第二射が。

「来るぞッ！」

今度は迎撃しようとして立ち止り振り返るが、矢が無数に弾け散弾となつて降り注ぐ。

これはマズイ。

「跳べっ」

エヴァに指示を出したが、既に障壁で受け止める体勢に入っていた。矢が当たる直前エヴァを突き飛ばすように飛び込む。

「痛っ。おい！ なんだあの矢は！ 障壁をすり抜けたぞ。それに矢で射られた傷が治らん」

よりによって足を射られたか。

「ちょっと見ない間に随分多芸になっちゃって。あれは多分鳴弦だ

な。特性は魔を退ける。吸血鬼にとつちや不死殺し並みに厄介な相手だ」

「そういうことは早く言え!!」

俺だつてここまで完璧に会得しているとは思わなかつたんだよ。

「仕方ない。死なないようにお話してくる。ほら、この間の軟膏だ。傷口に塗っておけ」

「……大丈夫なのか？」

「お。心配してくれるの？」

「だ、誰が貴様の心配なぞするか！」

「そりゃ残念。んじゃ、縁があつたらまた会おう」

『倉庫』からナイフを取り出し飛んで来る矢の死の線を斬りながら進む。

「よお。久しぶりだな朱織」

「キャハハハ。久しぶり彩兄。よくも私にダルい仕事押しつけて一人で逃げてくれやがったね」

矢をつがえて俺に向けてくる。ハハハ、怒ってますよね。

ていつかなぜそんなテンション高いんだよ。初期とキャラ変わりすぎだ。

そして唐突に俺の背後で起きた異変。

朱織が驚く顔。

まあ、そろそろだとは思っていたが。

「残念ながら時間切れだよ。それでは十五年後にまた会おう」

振り返ると案の定懐かしの白い扉が俺を待ち構えていた。

扉までの五メートルをダッシュで詰める。

ドアノブに手をかけ、扉をくぐるうとした瞬間。

「逃がすかあつ！」

「ぐほあ」

朱織のフライングボディアタックが直撃し、兄妹共々扉をくぐる。

世界はいつだってこんなはずじゃなかったことばかりだ。とはクロノの台詞だったかな。

第十話・私は帰ってきた！（前書き）

修学旅行編でやりたいことが出来たので少し強引ですが朱織を修業に出して制限を付けようと思います。

第十話：私は帰ってきた！

扉をくぐるとそこは京都だった。ていうか実家の入り口だった。

ありがとう。女神様。気を利かせてくれたんだね。

でも、ただでさえ面倒な状況が朱織の介入によって更に面倒になったよ。

まずは一服だ。キセルを取り出す。

「じいじい？」

「……ふう。日本。京都。俺の実家。とりあえず弓をしまえ」

「やだ」

至近距離で矢を射てくる。

「おわっ！」

それを紙一重で避ける。これがゲーム実況ならタグに神回避が付くであろう。

「『断魔の弦』」

さらに追撃。

これは矢ではなく、無数の真空刃が俺に殺到する。

真空刃だから音の威力は激減だろう。ならば。

「『汝は氷 止め イーサ』」

バックステップで後退しながらナイフで地面にルーン文字を刻む。

突如として目の前に氷の壁が出来上りギロチンさながらの真空刃を相殺する。

それから徐々に戦いは熾烈を増し、傍迷惑な兄妹喧嘩は三時間程続いた。

「おい。そろそろ飽きてきたんだが」

「だね。気分も晴れたし。アベアット」

弓がカードに変わる。

ああ。そういえばパクってたな。オリジナルカードそのまま渡して終わりだったから忘れてた。

アーティファクトは『弓張月』か。

「とりあえず、歩きながら話すぞ」

「えー。ダルいなあ」

ふあゝ、と欠伸をし、すげー眠たげな眼差しで歩き始める朱織。

突然のローテンション。誰だコイツ。二重人格者か？ そう思わずにはいられないほどの変貌ぶりだった。

まあそんなことはどうでもいいや。一応『タイムスリップをしたんだ』と冷やかに見られながらも大まかな説明をし、実家に到着。

「ただいま〜」

紫煙をくゆらせながら門をくぐる。

えっと六年ぶりか？ ちなみに死亡宣告が失踪して七年だった気がする。

石畳をどンドン進んでいくと庭を掃除している巫女と目が合った。

「ただいま」

普通に挨拶したただけなんだが巫女はその場で停止してしまった。

目を見開き、口をぱくぱくさせながら手に持っていた箒を落とす。それがカラン、と乾いた音を立てる。

「ん」

「ん？」「ん」

俺と朱織の声が重なる。

「彩輝様がお戻りになられたあああああっ！！！」

そして屋敷に激震が走る。

一瞬で十人強の使用人に取り囲まれしまった。どっから沸いた。別に逃げやしねえよ。

「今までどこに行っておられたのですか!？」

「詠春様や木乃香お嬢様がどれだけ心配したと」

「詠春様は本殿においでです。早くお会いになって下さい!」

「そちらの方とはどういったご関係で？」

「朱織といます。彩輝さんとは永遠を誓い合った仲で。ふつつか者ですがよろしく願います」

「赤飯だ。赤飯を炊けえ!」

カオス。この一言に尽きる。もしくは混沌。

とりあえず朱織だけは『倉庫』からハリセンを出してしばいておく。

……なんでハリセンなんて入れたんだろう？

「父さんは本殿にいるんだな」

「はい」

「行くぞ。朱織」

「はあい」

一度歩きだしたが、やっぱり一旦振り返り、もう二度目になるけど「ただいま」と告げる。

皆は一瞬キョトンとするがすぐに笑顔で、

「お帰りなさいませ。彩輝様」

と、返してくれた。

今度こそ朱織と共に詠春のもとへ向かう。

「アヤニイ彩兄、サイキ彩輝つて名前だったんだね」

「その名で呼ばれるのは随分久しぶりだよ。正直忘れかけてた」

「ついでに金持ちだったんだね」

「ついでをついでで青山詠春の息子だったり」

「え！？ サムライマスターの！？」

「そうなんだよねえ」

そんなこんなで本殿到着。

「ただいま。父さん」

「お帰り。彩輝」

六年ぶりの親子の再会。俺は三年ぐらいだが。

そんな中空気の読めない娘が。

「本物だ！ 本物のサムライマスターだよっ！ ファンです。ダルいけど殺し合いをしてください！」

「お前ちよつと黙ってる」

引き攣った笑みを浮かべる詠春。殺し合いの部分に反応しちゃったんだろう。

「そちらの方は？」

「零崎一賊が長女。零崎朱織といます。彩兄何か私も異名付けてよ」

ありゃ？ 俺の『共鳴流転』みたいな二つ名なかったっけ？ まあ、後々考えるところ。

「ついでに聞くけど零崎一賊の知名度ってどうなってるの？」

「余程深いところにいる人じゃなきゃ存在も知らないだろう。私が聞いた内容もあやふやだし、本気で信じてる人はまずいないと思うな」

「はあ。皆頑張ってますね」

「むしろ世界で一番頑張っちゃダメな集団だけだな」

この十五年近くでどれだけ人数が増えたのかは気になるな。新旧世
界があるから原作よりは人数は多いと思うんだが。

誰か一人ぐらいと接触したいが、都合良くこの辺に観光に来てくれ
るだろうか？

まあ、その辺は運任せだな。

「じゃあ父さん。そろそろ答え合わせ編といこうか」

掌を上にして右手を突き出す。

「やはりハウルと彩輝は同一人物なんですね」

懐から俺のパクティオカードを取り出し、手渡してくれる。

「ちなみに疑念が確信に変わったのはいつぐらい？」

「狐の仮面を作り始めたときとか楽器の扱いが異様に上手かったの
もあるが、一番は木乃香が川で溺れた時かな」

なんか特定出来るようなものってあったっけ？

「糸の回収をしなかっただろ」

あゝ、納得。そういえば。面倒になってそのまま放置して帰ったな。

「今も昔も曲絃師なんてそうそういないからなあ」

「全くどこで覚えて来たんだか」

神様から。とは勿論言わないけどね。

「ところで木乃香と刹那って今中一だよな」

「ええ。そうですよ」

「来年から俺と朱織も麻帆良行くから下準備よろしく」

「……は？」

「え？ 私も？」

念のため原作介入まで一年ほど余裕を持たせておいて良かった。

「で、ここらにコネが有って神道を修めれる所ってない？ コイツにちゃんと学ばせたいんだけど」

京都なんだから一ヶ所ぐらいはあるだろう。

「え〜。嫌だよ。ダルいよ。彩兄が教えてくれるじゃん」

「俺のはかなり自己流なの。ちゃんと歴史ある神社で学んで来い」と、朱織を嗜めている内に、詠春が心当たりのある場所を述べる。

「そうだな。日吉大社ならいいか？」

京都の鬼門にあたる北東に位置し、王城鎮護の山とされる比叡山の

山麓にある日吉大社か。

うん。十分過ぎるんだが、ちゃんとこういうコネとか持ってたんだな。

なんか安心したわ。

「どうしたんです、彩輝。そんな意外そうな顔をして」

ちょっと顔に出てしまっていたらしい。

「いやいや、近隣結社との付き合いもちゃんとあったんだなあ」と

隠す気も無いので正直に言つと、詠春は苦笑する。

「当然ですよ。結社自体は 比叡山 と一纏めにされてますが、あそこは一つの山に寺と神社がありますからね。首領の代替わりの時に少々ゴタゴタがありまして。その仲裁に入ったことがあるんです」

ちなみに今の首領は日吉大社の出です、と詠春が補足を入れる。

へー。流石日本。神仏混合の度合いがすげえ。

俺もそのうち日本各地にコネとかパイプとか作つといた方がいいのかねえ。

まあ、急ぎじゃないし、朱織が帰って来るまでの一年間は自堕落に過ごさせて貰うけど。……この選択が後々後悔することになりそうなのがするが、面倒だし、いいや。

「そういうわけで、朱織。ちょっと行って神道修めてこい」

「ダルいなあ。でも行かなかつたらもつとダルいことやらされそうだし。……はあ。行けばいいんでしょ。行けば」

と、思ったよりも簡単に折れてくれた。

その後詠春からの問いにも適当に答えて、懐かしの自室へ戻る。

朱織には軽く本殿の案内をするよう使用人に頼んでおいた。

部屋に入りパソコンを見てふと思いついた。あの動画サイトどうなつたんだろつと。

すぐにパソコンを立ち上げサイトを覗く。すると初投稿の動画の再生数が五〇〇万を軽く越していた。マジで嬉しい。

これで一気にハイテンションになり一曲弾いて生存・帰還報告も兼ねて勢いですぐ投稿したよ。

そしてそれから一週間が経過した辺りで、朱織が 比叡山 へ修業に行った。

詠春の推薦もあつてか何の問題もなく驚くほどスムーズに 比叡山 に受け入れられた。

零崎姓で行っちゃったけどまあ大丈夫だろ。

さらに時間は経過して、俺は相も変わらず演奏動画を投稿しながら、魔術の研究。家の仕事も気が向いたらごくたまに手伝ったりしている。勿論金は貰うけど。

最近では神鳴流師範を実験台にしながらとある流派を再現している。

よく考えるとゼロからのスタートは人生初めてなのでちょっと挫けそうになったりもしたが何とか人前で披露できるぐらいの形は整った。

途中、未完成の技に負かされる師範代が自信を喪失したりして大変だったぜ。

こんな感じでかなり行雲流水、自由奔放にやっているように見られるが、一応気は進まないが勉強だつてやっている。

覚える作業ではなく思い出す作業なのですでに中学の課程は修了したが。

時間つぶしの最終手段、勉強すら終わってしまい、やりたいことは全てやりきってしまった。

言うならばテストが終わったあの時間の浪費感に近い何か体が体内で渦巻いている。

「なので何か恰好の暇つぶしってないかな？」

「って急に言われてもなあ〜」

今話しているのは羅宇屋の猫又。ヤニが溜まってきたのでキセルの清掃を頼んでいる。

十五年ぶりの呼び出しなので死んだと思われていたらしいが、軽く経緯を話し以降よく酒を飲む間柄に。その際名前は燐リンと教えてもらった。

リンは慣れた手つきでキセルを分解し羅宇車で吸い口を洗っている。

「ほな。お姉さんとえっちいこ」

「却下」

「……そない即答やなくても。今のはちよつと傷付くで」
なら言っつな。

「じゃあアレは？ えーつと、いんたあねつとか言よつたヤツ」
慣れないカタカナ発音を言う様にちよつと萌えた。

だが、ネトゲ廃人になるつもりは毛頭ないし、それに文化レベルで言ったら前世の方がまだ上なんだよな。

古い方が劣ってるって訳じゃないんだが、やっぱり少し見劣りはしてしまつて実行に移すのに悩んでしまふ。

他にネットでもやることって言つたら、ブログ……は面倒。音楽は自分で弾く。動画は投稿してるし、そついや株とか一時期流行つたな。

……株？ それだ！

「ありがとう。隣の字。暇つぶしで一財産稼げる方法を思いついた」

「それは重畳。あとで美味しいもん奢ってな」

「おう。任せとけ」

そして実家に帰ってきて一年近くが経過した。

このころには俺の口座の金額は軽く億を超えるくらいに。

一言だけ言うと、未来視って便利だね。

朱織も 比叡山 から修業を終えて帰ってきたし。ローテンションに更に磨きがかかった。

位階は6アダプタス・メジャー5あたり。肉体を持つ身としては二番目に高位な存在だ。

さて、準備は万端。いよいよ来週から麻帆良学園だ。

第十一話：初登校と初授業と初邂逅と（前書き）

ストックがあるのに休日は一度も投稿出来ずにすみません。

決して友人に借りた白銀のポートレートをずっとやってたわけではないんです。ええ、はい。

第十一話：初登校と初授業と初邂逅と

「いい土地だね」

それが麻帆良学園に来て朱織の第一声であった。

確かに活気があって人の流れに滞りが無い。普通の人が見ればそこまでだが一流の魔法使いが見ればそれは違った意味合いを持つ。

その土地の人の状態は霊脈の状態と比例する。

霊脈が良ければそこに居る人たちも活気に溢れ、逆に霊脈が何らかの異常をきたせば風邪や熱中症など理由は様々だが健康を害する人が増えるだろう。

「霊脈の良し悪しが分かるようになったのかい。お兄ちゃんは嬉しいよ」

関東魔法協会と関西呪術協会。日本を仕切っている二大勢力なだけあって本拠地に流れる霊脈は中々のものだ。その所為か桜が綺麗だなあ。

「盗みとか攫いに入ってくる人や妖怪しか殺せなくて大変だったんだだけ」

「正直、お前が帰ってくるときは比叡山が滅ぶときと思ってたんだけど。我慢してたの？」

「するわけないじゃん。あそこの守りの堅さが異常なんだよ。集団

で動くのに慣れてるのがあそこまで厄介だとは思わなかった」

よく五体満足で帰ってこれたな。詠春の方には恨み言が行ってるのかねえ。」

「彩兄が何か企んでるっぽいのに、それを見る前に死ぬのもねえ」

悪いけどそんな大それたことは何も企んでない。

「じゃ、とりあえず学園長室に行きますか」

「あいさ〜」

というわけでやってきました。麻帆良学園女子中等部学園長室。

いやー懐かしいな。ここに来るのも時系列順で十八年ぶりか。

「ようジジイ。約束通り学園に通いに来てやったぜ」

「詠春から聞いておるぞ、彩輝。零崎彩識と同一人物なんじゃってな」

うん。話が早くて助かる。ついでに説明する手間が省けて尚助かる。

「そのことを知っているのは？」

「今のところワシだけじゃ。タイムスリップなどとてもじゃないがウチの頭の固い教師たちは信じんじやろって」

「その前にボケたかと思われるだけだと思うがな」

「うぐっ」

え？ 何その反応。ひよっとしてこの前疑われたりしたのか？

「ねー彩兄。ダルいから聞きたくないんだけどお。アレって人間？
ぬらりひよんな妖怪じゃなく？」

まあ、初見だとその反応が普通だろうな。前世から知っていたこと
もあり、ずつとスルーしてきたがこのジジイ後頭部の長さが人間の
ものじゃない。

「アレでも一応人間だ。ていうかアレと血が繋がってるって考えた
らゾツとしてきた」

「あー何か御愁傷さまあ」

「せめて目の前でそんなに堂々と言うのは勘弁して。ワシ実の祖父
なのにアレ扱いもやめてくれんかのう」

若干涙目なつて抗議してくるジジイ。ジジイが涙目になつたって何
の需要も無いんだよ。

「あ、そうそう俺らってどこに通うの？ 詳しいことは何も聞いて
なかったから」

「このこの2-Aじゃ。木乃香もおるぞ」

「ほう。朱織はともかく俺は男なんだが。女子中に通えと？」

「えー……………」

そんな流れを変えるかのように実にいいタイミングでコンコンと扉をノックする音が部屋に響く。

「フオ。ちょうど担任の先生が来たようじゃの。高畑先生入ってくれ」

チツ。逃げやがったな。と言っても、まあそうなるだろうなあと思はしていたから別にいいが。

「失礼しま……ハウル!？」

「どちら様で？」

入ってきたのは案の定タカミチだった。にしても老けたな。

とりあえず面白そうだから他人のフリをしておこう。

「ああ、いや。すまない。僕の行方不明になった友人に似ていてね。僕の名前は高畑・T・タカミチ。今日から君たちの担任になることになった」

「初めまして。近衛彩輝といます。日頃、木乃香がお世話になっているようで、ありがとうございます」

「私は零崎朱織です。ウチの兄が大変ご迷惑をお掛けしたようで。その節は誠に申し訳ありませんでしたあ」

朱織さんや。何か俺に恨みでもあるのかい？ ていうかその節ってどの節だよ。

「零崎！？ それじゃあ今ハウルがどこにいるか知ってるかい」

「ええ。知ってますよお。ていうかこれです」

と云って俺を指さす朱織。ツマンネ。もっと誤解させとこつぜ。

「は？」

しょうがない。分かってないタカミチ君にネタばらししてあげよう。

縮地で背後にまわり、足払いで倒れさせる。その際に『倉庫』からナイフを取り出し、倒れたタカミチの首に突き付けチェックメイト。

「やあ。久しぶりだねタカミチ。突然のところで放心したからといって気を抜きすぎだよ」

「ハウル……なのかい？」

まだ疑うようなので狐面を出す。

「フオッフオ。そうじゃ。紛れもない本人だとワシが保障しよう」

「いや、でも、学園長のお孫さんだと」

「タカミチ。俺と彩織を別に考えちゃいけない。有体に言ってしまうえば俺は六歳ごろに二十年前にタイムスリップしてね。信じられな

いなら今すぐ十七の肉塊に変えてやるっか」

軽く殺気をぶつけてみる。

「あー、ハウルならタイムスリップぐらいしても不思議じゃないかなあ」

いつから俺は非常識の代名詞になった。……最初からか。

とりあえず起き上がりタカミチに手を貸す。

「あ。そうじゃった彩輝。今日から警備員の仕事をもらうっからの」

……………。

「タカミチ、お前代われよ」

「無茶言わないで下さい。僕にも仕事があるんですから」

「じゃあ朱織。代わってくれないか？」

「ダルいんで拒否しますっ」

「ですよー」。

「ていうか何で俺がやるの前提で話が進んでるんだよ」

「ワシは言ったぞ。帰ってきたら馬車馬のように働かしてやるぞっ」

あ。そういえばそんなことも言っていたような気がしてきた。

「まあいいか。二つ頼みを聞いてくれるなら請け負ってやんよ」

「ふむ。その内容は？」

「一つ、仕事の金は一切要らない代わりに俺が指定する呪物を必ず用意すること。俺が昔から懇意にしている呪物商があるからそこに頼んで」

「フオフオ。それくらいなら安いものじゃ」

安い？ いいえ、全然馬鹿にならないぐらい高いですよ。俺は拘ることにとはとことん拘る人間です。それに俺が全ての魔法に精通しているということを忘れてるな。

「二つ、飲酒と喫煙を認める。これが絶対条件だ」

「いや……しかし、ここは教育機関じゃからその条件は流石に……」

「おいおい。よく考えようぜ。ほんの少し生徒の素行を黙認するだけで、普通に人を雇う何十分の一の金で英雄の一人が雇えるんだ。こんな旨い話はないだろう」

実際には数倍はかかるけどね。

「うむ。分かったぞい。じゃが人前で吸ったりするでないぞ。それは庇いきれん」

やっぱり英雄のネームバリューは便利でいい。

「今日の深夜0時に顔合わせをするから世界樹前の広場に来てくれ」
世界樹ってあの神木だよな。蟠桃だっけか？

ていつか深夜0時って生徒の都合とか考えろよ。

「そろそろSHRの時間だから教室に行こうか」

お。そっぴや木乃香と刹那とエヴァに会うのも随分久しぶりだな。

結局あのまま放置だったエヴァが殴りかかってこないか心配だ。

「待ってくれんかの。最後に一つだけ約束してほしい。そちらの朱織君も」

ん？ 朱織にまで？

「この学園に在学中は決して人を殺さないでくれんかのう」

流石に零崎一賊のことは知ってるか。

カツ。何かと思えば殺人鬼に人を殺すなどが。一体どこの死色の真紅だよ。

「俺はともかく朱織がねえ」

「そんなの出来るわけないでしょ」

「そこをどうにかならんかの？」

「無理だつて。俺らは三大欲求の中に殺人欲が組み込まれちゃった人でなしだぜ。せめて家賊の敵は殺させてくれないか？ 欲求を溜め過ぎて一つの学校皆殺しになるよりかはマシだと思っただが」

「……一般人には絶対に手を出さないこと。これが最大限の譲歩じゃ」

うん。十分だ。簡単に条件出したあたり、割りと深く零崎一賊について知ってるんじゃないか？

まあ最大の理由は俺だろうがな。ネギが来るまで一年切ってるし、着々と英雄の息子育成計画を練っているんだろう。

俺から学べることは海の体積ぐらい多いから実の孫をも利用しようという打算的考えが無いとは言わせない。

まあ、いざとなったら学園の外で適当にフリーの魔法使いに喧嘩売ればストレス解消ぐらいにはなるだろ。

「よし。話も終わったなら行こうぜタカミチ。時間ヤバいんじゃない？」

「ああ、そうだね。それじゃあ行こうか」

そうして三人で学園長室を去った。

途中でクラス名簿なんかを見せてもらいながら来た教室前。

「なあ。黒板消しのトラップなんて漫画の中だけだと思ってたよ」
まあ漫画の中の世界だが。

「本当にやる人いるんですねえ」

「ハハハ……」

俺と朱織が変な所に感心しているとタカミチが乾いた笑みを浮かべている。

「それじゃあ僕がまず入るから呼んだら入ってきてくれ」

「いやいや。それだと面白くないだろ」

「誰も登場に面白さなんて求めてないよ」

求めてるだろ。畏なんか張ってるんだぜ。ちなみに朱織は。

「もうダルいんで勝手にしててください」

まあいつも通りだな。

「いいじゃないか。俺が一番に入っても」

「はあ。仕方ないなあ」

あっさりと折れてくれるタカミチ。昔の経験からだろうな。俺と張り合っても無駄だということが骨身に沁みているんだろう。

さて、タカミチの許可も得たことだし。

扉を開けて落ちてくる黒板消し、床に張ってあるロープ、飛んで来る玩具の矢を右手の五指につけた糸で六等分する。

水の入ったバケツは別の糸を通し落ちてこないようにしてトラップ制覇。啞然としている教室内。

だがそんなことはお構いなしに、バンツ！ と教卓を叩く。

「世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実 is 適当か？ 安心しろ。それでも、生きることは劇的だ！」

某生徒会長の言葉をリスペクト。

「そんなわけで本日付でこのクラスに転こ」

「兄様っ！」

「ふいっお」

最も再起動の早かった木乃香が全力で飛びついてきたので台詞を最後まで言うことは出来なかった。

勿論最後まで言えるとは思ってなかったけどね。

数瞬遅れて、

「彩輝様!?!」

と刹那も声を上げた。

そして、教室の奥からそんなに強くはないが殺気が。勿論エヴァからだ。多分今は他人の空似、『昔あんな顔のム力つく奴がいたなあ』ぐらいに思ってるんだろう。

「おー。木乃香久しぶりー。元気だった？」

「元気だったやあらへん。一体今までどこ行ってたんや！」

さて、何て言い訳をしようか。……助けてタカミチ！ と視線をタカミチに投げかける。

「木乃香君落ち着いて。一旦席に着こうか」

しびしびといった感じで自分の席に戻っていく木乃香。が、その後は睨むと言っても過言じゃないくらいの眼力で俺を見てくる。

「高畑先生。その人たちは？」

「今日からこのクラスで一緒に学ぶことになった」

タカミチが後は自分で言えといった感じで視線を向ける。

「人類最悪の遊び人こと近衛彩輝です。よろしく」

「零崎朱織。よろしくお願いします」

教室内は『え！？ 二人も！？』と言った声から、さっきの曲絃系

を見てか好戦的な目で見てくる者。

零崎の名を聞いて明らかに表情を変えたのが二人。エヴァと龍宮さんだね。

エヴァはともかく龍宮さんはいろんな戦場を渡り歩いたと原作で言っていただけあって、ウチの噂はご存知のようだ。

「えー、それじゃあ質問は朝倉君に任せるよ」

待ってましたと言わんばかりに一人の女生徒が立ち上がる。麻帆良のパパラッチだったか？

自然に隣の席に目が行ってしまう。そういえばいたね。幽霊。

「えーっと、では彩輝さんの方から。なぜ女子中？」

「知らん。ジジイ 学園長の所為だ」

クラスの大半が苦笑とともに納得する。あのジジイは普段からこんなことをしてるのか。

「このクラスの近衛木乃香さんとはどういう関係で？」

「兄妹だ。追記するなら双子」

「さっきの人類最悪の遊び人っていうのは」

「その場のノリで何となく言ってみただけだから意味はない」

「趣味は？」

「他人の人生に干渉して観賞すること。……待て待て。ホントに最悪じゃねえかみたいな顔するな。冗談だ。趣味は楽器の演奏」

「へえ〜。ちなみにどんな楽器を弾くのかな」

「木管、金管、鍵盤、打楽器、弦楽器、東西問わずのオールラウンダーって感じだな」

流石にこの回答には引き攣った笑みを浮かべる。

「最後に。このクラスで気になる人は？」

「六年ぶりに会った木乃香と刹那。あとは、マクダウエルさん、龍宮さん、絡繰さん、相坂さんかな」

言ったそばから「見えるんですか！？ 見えますよね！！」と俺の周りを飛び始める相坂さん。

ええい！ これ以上飛び回るなら自縛霊から浮遊霊に変えてやるぞ。

「じゃあ次は朱織さんに質問」

「ダルいんでパス。詳しいことは彩兄に」

予想通りすぎる回答をありがとう。お前なら絶対にそう言うと思った。

「え？ アヤニイって……」

「コレの」とお

と言つて俺を指さしてくる朱織。あれ？ 何かデジャブ。

「二人は前から知り合いなの？ てつきり今日初対面なのかと思つてただけど」

「ええ。ていつか恋人？」

可愛らしく小首を傾げて言つが、

「適当言つな」

と頭を軽く小突きながら即座に突っ込む。

朱織が恋人発言をした瞬間殺気を出したのが木乃香と刹那じゃないことを祈りたい。

「ならダルいので簡潔にやりましょう。誕生日十二月十五日。血液型O。身長百五十六センチ。体重は測つてない。趣味は無趣味。特技は弓。好きな色は赤」

お前が好きな色は赤とか言つと血の色しか連想できないんだが。

「えー、二人の関係は？」

「「兄妹さ（です）」」

見事に声が揃つたな。

「高畑先生。質問終了です」

「二人の席は……ハウル、あ、いや、彩輝君がエヴァの隣でその隣が朱織君だ」

タカミチよ。今の言い間違いは俺の死に直結しそうで怖いんだが。隣の席になった金髪幼女吸血鬼さんがすごく不敵に笑ってるし。

とりあえず席について笑顔でなるべくフレンドリーに話しかけてみる。

「よろしく。ハートアンダーブレードさん」

「縁が合ったな零崎彩識」

無視ですか。スルーですか。シカトですか。

「零崎彩識？ 誰ですかそれ？」

「貴様のことだよ、ハウル」

むう。誤魔化せそうにないなあ。ていうかボールペンを突き付けてくるのやめて。地味に痛い。

「はあ。じゃあ積もる話もあるだろう。屋上で待ってるよ。エヴァ」

作曲 近衛彩輝

作曲？ 12 怪火

口笛を吹き始める。朱織じゃないが自己紹介なんてダルいモノに逐一答えたのは効果を早くする為だ。

この曲演奏中は誰にも俺を認識できない。と言っても、例外はいるが。

こちらを茫然と見つめている相坂さんを手招きして呼ぶ。

意図はすぐに通じてゆっくり話せるように屋上へと向かう。

第十二話：初サボりと歓迎会と

屋上へと続く扉を開ける。

今は授業中なので当然の如く誰もいない。

ひよっとしたら俺と同じ様に授業をサボってる人もいるんじゃないかと思ったがその心配は杞憂だった。

しかし休み時間に誰か来るとも限らないので人払いの結界を張る。

これで漸くゆっくり話せる環境が整った。

「じゃ、改めて。近衛彩輝だ。名字だと木乃香と被るんで呼び方は彩輝で」

「あ、初めまして。相坂さよです。私のこともさよって呼んでください。って、やっぱり見えてるんですよね!!」

今更な質問だなあ。

「ちゃんと見えてるし聞こえてるよ」

「今までどんなお払い師や霊能者にも見えなかったのに」

心外な。その辺の三流と俺と一緒にしないでもらいたい。っと、刹那たちでも見えなかったんだっただな。

「まあ、昔の俺はこの業界じゃ有名人だったからね。ちなみに何年

「ぐらい幽霊やってるの?」

「えっと、六十年程」

「はあ!？」

思わず声を上げてしまった。もう原作の細かいところまでは覚えてないし、何より六十年で。

いくら魔法使いの本拠地だからといって、学校は元々閉鎖的空間で気が澱みやすいし、霊脈が変調をきたしたら生身のエーテル体が真っ先に当てられるだろうに。

それを魔性化も成仏もせず在り続けるって。

「や、やっぱり私ってダメな幽霊ですよね」

「いや、ダメって言うよりすごいと思うよ。むしろダメな幽霊って何さ?」

と、話を聞くと、なんでも存在感が無くて誰にも気付いてもらえなかったり、怖がりや夜の学校に耐えられなくて最近コンビニやファミレスで過ごしているらしい。

まだ人を殺さない殺人鬼よりはまともな存在だと思っただけだなあ。

そして、さよちゃんにとっては六十年ぶりの世間話を楽しむ。六十年も幽霊やってるからか魔法使いのことは少し知ってたよ。

俺のことも軽く話して成仏しなくなったらいつでも言ってくれとは

言っておいたが、そんなことはまず無いだろうな。

唐突に鳴り響く一時間目終了のチャイム。

「話しこんじやいましたけど転校して初めての授業をサボって大丈夫なんですか？」

「ん〜。いいんじゃない？ タカミチの授業だろ」

本人が聞いたら泣きそうだな。まあ俺がサボるくらい予想の範囲内だろう。

それにタカミチの授業が終わったということは、もうすぐ

バンツ！

勢いよく扉を開き人払いの結界を超えて吸血鬼とロボットが現れた。

「貴様。何を堂々と認識阻害の魔法をかけて授業サボってるんだ」

「誤解だつて。俺は魔法なんか使ってない。あれはこの十三年間磨きあげた音使いのスキルさ」

魔力を一切使わないただの音だから対物・対魔・魔法障壁すり抜けでレジストもされないから楽でいい。

「ああそうだったな。貴様というヤツはバグで構成されてるんだつた」

その言い方は流石に酷くね？

「で、何でエヴァはこんな極東の島国で学生やってんの？」

「サウザンドマスターに呪いをかけられたんだよ！ 最初は三年経ったらハウルが解きに来ると言っていたが、十五年も経って現れるとはいい度胸だな」

えー。俺そんなの知らねえ。ナギの奴も会える可能性ゼロなのに何勝手な約束をしてくれてるんだ。

「マスター。十五年前は彩輝さんはまだ生まれておりませんよ」

冷静なツツコミだ。普通はそう思うだろう。

「茶々丸。コイツに私たちの一般常識は通用しない」

「だから人を非常識の代名詞みたいに呼ぶなつての」
エヴァといいタカミチといい失礼な奴らだが、自分でも否定しきれないのが悲しい。

「あの、二人はお知り合いなんですか？」

「そつだよさよちゃん。キティとは旧知の仲だ」

「その名で呼ぶなっ！」

別に呼び名なんて何でもいいと思うんだが。俺だって名前二つあるし。

「それで貴様ならこの呪い解けるんだろっな」「解けるよ」

改行すら要らないほどの速さで即答してやった。

「やはりそうか。如何にハウルといえども初めて見る呪いを何の準備も無く解くのは　って解けるのか!？」

だからそう言ってるだろうに。

「なら解け！　今すぐに!」

「面倒な正攻法と簡単な俺流の解き方の二種類あるが。どうする?」

「速い方だ」

じゃあ簡単な方だな。

あー何か魔眼使うの久しぶりな気がする。

魔眼でエヴァを縛っている呪いを、呪いの精霊を視る。

視るとは意味づけること。俺が認識することによって、精霊に意味を持たせアツシャー界へと引き摺り下ろす。

「おい！　なんだコイツは!？」

「マスターッ!」

「さ、彩輝さん。大丈夫なんですか?」

三者三様のリアクションを取ってくれる。驚かす側っていうのはどんな時でも気分が良いね。

「大丈夫大丈夫。そいつが呪いの精霊だよ。十五年間無害だったんだろ？」

精霊は一言で表すならクラゲと言った方がいいかな。傘のような部分から触手が伸びてそれがエヴァに巻きついてる。

いきなりこんなのが現れたら驚くのも無理はないか。

「こんなのに十五年も憑かれてたのか」

エヴァがつんざりしたように心境を吐露する。こればかりは同情するよ。

「それでこの後どうするんだ？」

「うん。どうする。アデアット」

このアーティファクトを使うのも懐かしいな。だいたい三年ぶりか。

そしていまいち使用の場が無いソードブレイカーでクラゲの死の点目掛けて投擲。

クラゲは煙が晴れるように、霧が晴れるように、初めから居なかったかのように消え失せた。

そっぴや、精霊を殺すのは初めてかも。

「ククク、アハハハハ！ やったぞ！ ついに、ついにこの忌々しい呪いから解放された！」

ハイテンションだなあ。さて、これで正義主義の輩は全員敵に回りましたと。まあ、居ても居なくても同じ様な雑魚だし別にいいか。

「盛り上がっているとこ悪いけど流石に学園結界の方は解かなかったぞ」

「呪いが解けた今、学園を出れば全盛期に近い状態に戻るんだろう？ 今でも全盛期の五割ほどの魔力が戻ってるんだ。これで十分だよ」

そいつは重畳。

これでこの一件は終わりだな。

P r r r r

ん？ 電話か。……画面を見るとジジイからだったので電源を切るといっつか番号教えただけ？

「マスター。彩輝さんは一体？」

「ああ。言っただけだったか。ハウルは大戦の英雄、『紅き翼』の零崎彩識だ」

「マスター。十三歳の彩輝さんが二十年前の大戦に参加するのは不可能ですよ」

と、茶々丸が玩具売り場で駄々を捏ねる子供を説得するように優しく分かりやすく語りかける。

「そんな残念な子を見るような眼で見えるなあつ。おいハウル。詳しいことは私も聞いていないからちゃんと説明しろ」

「えー。自分の失敗談語るのは嫌なんだけど。まあ、あえて言うなら、近衛詠春の息子がとある実験に成功し過ぎてしまつて過去に飛ばされました。かはは。成功のし過ぎが失敗に繋がるとは傑作だぜ」
全然説明になつてないわあ！ とエヴァが文句を言ってくるが、いちいち説明するの面倒だしな。

「あ。そういえば」

と、唐突に茶々丸からの話題提供。

「木乃香さんと桜咲さんが血眼になつて探しておられましたよ」

.....。

「ねえ。吸つていい？」

キセルを取り出し、風下に移動する。

未成年が吸つちゃダメですよ、と止めよつとするさよちゃんと茶々丸。

逃避する前に言い訳の一つでも考えたらどうだ、とエヴァ。

とりあえず結界を張ったままだと刹那に勘づかれる可能性があるの
で、その上に隠蔽用の結界を重ね掛け。

「よし。籠城するよ」

「なんつー魔法の無駄遣いだ。……よくよく考えるとなぜ貴様はい
つも妹から逃げ回ってるんだ？」

そういえば初めて会ったときも朱織から逃亡中でしたね。

「だってさあ。六年間音信不通でほったらかしだったんだぜ」

絶対ただじゃ済まないって。

「お前。意外と身内同士のごたごたに弱いな」

否定できん。ん？ あれ、待って。一つ気付いた。

「十五年待たされたエヴァの怒りがこのくらいなら、金槌で頭殴ら
れて太刀で斬られる程度の覚悟をしておけばいいだけか。うん。少
し気が楽になった」

どっちも致命傷ですよ。と言ったのはさよちゃんか茶々丸か。

「じゃ、放課後にでも訪ねるよ」

「今すぐ行け」

「授業中じゃん。ちゃんとゆっくり話したいのさ」

そういつわけて転校初日だが一日中サボることにした。

意識を闇へとゆだね、深く暗くずっと奥へともっと底へと沈んでいく。

「……っ！ ……………、……………」

どこを見ても果てが無い。どこを見渡しても何も無い。

何も無いなら沈んでいようが、墜ちていようが、浮かんでいようが、漂っていようが、そんなものどちらにしたって同じじゃないか。

「せ……っ！ ……………ない。…たき…こそっ」

一片の光も届かない、一切の音も聞こえない、まるで死に包まれたような空間。

その世界が崩壊した。

「「起きろー！ー！ーっ！！」」

声という砲撃と共に頭部と腹部に衝撃が。

「ぎゃあああああ！ 耳が頭が腹があ！ 何この三連コンボ！？ 人の眠りを妨げて楽しいかあっ！！」

痛みが引くまでその場をのた打ち回る。狙撃なら例え二キロメートル

ル先からでも避けられるが、逆に言うところという殺気が全く籠って無い攻撃には対処出来ないんです。

無警戒で無防備のところを容赦なく殴るなんて一体どこの血も涙もない悪魔だ。

と、顔を上げると、

「朝からずっと屋上で寝てて楽しそうやなあ」

「今までどこに行っていたのかちゃんと説明していただきます」

オーケー。居たのは悪魔じゃなかった。修羅（妹）だ。

「ちなみに俺がここにいるって誰に聞いたの？」

「エヴァンジェリンさん」

辺りを見回すと俺が張った結果がご丁寧に消されている。

あのロリババア。快気祝いのなノリでブチ破りやがったな。

いきなり恩を仇で返しやがって。

「久しぶり。元気良いね、木乃香に刹那。何かいいことでもあったのかい？」

エヴァめ、覚えてるよ。とはおくびも出さずに話を進める。

「うん。七年も行方不明だった兄様が帰ってきてな」

「それは重畳……って、俺が実家に帰ったのは去年だから失踪期間は六年だけど」

擬音語がつかなら『ぴたあっ』といった表現が一番しっくりくるぐらいに二人ともが固まる。

「ジジイは知ってたけど、もしかして聞いてないのか？」

反応を見る限りどうやら本当に知らなかったらしい。

あのジジイは一体何を考えてるんだ。このあと確実にお仕置きだとか折檻だとか拷問みたいな目に遭うのが分かるだろうに。

「で？　今までどこ行っとなん？」

「ん」

「お嬢様。皆待ってますのでクラスに向かった方が。話は後でゆっくり聞かせて貰いましょう」

「そつやな。後でゆっくりお話しよう」

……OHANASHIの方じゃないですよね。

「今放課後だよな。クラスに行く理由は？」

「彩輝様たちの歓迎会です」

お。嬉しいことをしてくれるじゃないか。

人の金で食う飯は最高だよな。

「薄っぺらい六年だから行くまでに語れると思うけどな」

と、クラスの道すがら話すことにした。

聞くも涙、語るも涙の戯言をね！

今更だが戯言と音使いの同時使用はチートだと思う。

真実の半分を嘘で固めて不明瞭で曖昧なモノにすればそれは戯言と呼べるだろう。

いや、実の妹に心身操作なんて鬼畜なことはやらないけどな。

しかし、この五年ぐらいで一番頭使ったと思う。おかげで朱織のことも怪しまれずすんなり信じてくれました。

「うう。まさか朱織ちゃんにそんな事情があって兄様が兄代わりになって二人で苦労してたなんて」

木乃香が感慨に耽っている。進路希望に詐欺師を視野に入れておくか。

「……あの彩輝様。ひよつとして裏の世界のことは」

刹那は木乃香に魔法のことが聞こえないよう小声で尋ねてくる。

「……知ってるよ。割と深いところまで潜ったからね」

「すみません。あのときは一緒にいたのに彩輝様を」

「何だ。まだ直ってなかったのか。その何でも自分の所為にする癖。木乃香と仲良くやってるからてつきり矯正したのかと思ってたが。今回のことは誰も悪くないさ。強いて言うなら俺の運が悪かっただけだ」

ところで十割十本当の話はいつになったら語られるんだろうな。

と、そんなこんなでクラスに到着。

「兄様連れて来たえ〜」

『ようこそ！ 2 - A へ！』

パンパンパーン

と、クラッカーまで用意してある。

そしてなによりテンション高かいなこのクラス。

「よおタカミチ。初日から全ての授業をサボってみたけど固いこと言うなよ」

比較的静かなタカミチのところへ避難。朱織にはあのハイテンションの犠牲になってもらおう。

「授業には出て欲しいなあ。それにしても一体いつ出て行ったんだい？ 全く気付かなかったよ」

「お前の授業が始まってすぐだ」

「そんなに早くかい!？」

「ああ全くだ。私でさえタカミチの授業は受けているというのに」

エヴァ参入。

「テメエ俺の張った結界ブチ壊して行きやがったな」

「ハッハッハ。何のことかわからんな」

白々しい。目が明らかに笑ってるんだよ。

「そうそう。エヴァの呪いを解いたから後で来いって学園長先生が」

「却下だ。エヴァが行け。説明くらい出来るだろ？ 六百年生きてるからって痴呆症じゃないんだから」

「今は力の半分が取り戻せて気分がいいんだ。手始めに目の前の男子中学生をボコボコにしたいくらいにな」

「奇遇だな。俺も目の前にいる死に損ないの憐れな吸血鬼に引導を渡してやりたいと思っていたところだ」

アッハッハと笑いながら互いの間に殺気が凝縮されていく。

「二人ともそろそろやめてくれないかなあ」

苦笑しながらタカミチまでも俺たちを止めるために一応戦闘準備をあれ？ これって学校の原型留めるのか？

「マスター、自重してください」

「兄様！ 久しぶりに兄様の曲が聞きたい」

これで第一回麻帆帆良中吸血鬼VS殺人鬼は中止となった。

「楽器は何がいい？」

「何でもええよー」

うーん。何でもって一番困るよね。晩御飯何がいいって聞いた世のお母さんの気持ちがよくわかる。

逆に考えれば何でも美味しいということであの演奏もそれくらいの信頼と信用と定評があると思いたい。

ではまずサククスを取り出し。

「どっから出したん？」

「手品だよ」

しかしこのハイテンションに合わせてるとかなり疲れそうだな。

ノリのいい曲というと、手始めに『BACCANO!』のOP『G

u n · s & a m p · R o s e s 『 』 から。

演奏開始

第十三話：歓迎会と初帰宅と

演奏終了

ぐわー。疲れた。

たかが二十分程度弾き続けただけなのに精神的に疲労困憊ですよ。

まあ好評だったけど。

それにこのテンションには絶対についていけないということが初日から分かって良かったということにしておこう。

「お疲れ様。僕もハウルの曲が久しぶりに聞けて嬉しいよ」

「相変わらず上手いじゃないか」

「彩輝さんジュースをどうぞ」

「ありがとう」

タカミチとエヴァと茶々丸さんがいる席に避難。

「ていうか主役がBGM担当ってどうよ？」

そこ、目を逸らすな。

「まあいいや。ところでここに百五十年ものビンテージワインがあったりするんだが。飲むか？」

『倉庫』からとっておきの一本を取り出す。

「百五十……！　なんでそんなものハウルが持つてるんだ!？」

「ん？　知らない？　ちょっと前沈没船から引き上げられたらしいんだけど」

「茶々丸君はわかるかな？」

「はい。この銘柄ですと1983年にバルト海から引き上げられた沈没船かと思われれます」

「何でそれをお前が持つてるんだ」

「イギリスの魔法協会には多大な貸しがあつてな報酬として引っ手繰った」

「詐欺じゃないか」

「いやいやこれでも少ない方だよ。俺がいなかったときの被害とか考えたら。」

ちなみにこれが後処理を朱織に丸投げした事件だったり、エヴァと出遭うきっかけになってたりする。

「で？　飲むの？　飲まないの？」

「飲む」

エヴァは即答だった。

「本当に僕も貰っていいのかい？」

「いらぬなら別にいいが」

「飲ませて貰うよ」

うん。自分に正直でよろしい。

「茶々丸さんもどうだい？」

「いえ。私はガイノイドですので」

「まあそう言わずに百五十年ものをただで飲めるなんて普通に生きてたらありえないことなんだし」

と、強引に言いこんで飲ませました。

ワインはめっちゃ旨かった。

その後昔話に花を咲かせていると古菲や長瀬といった武闘派に手合わせたいと頼まれたり、いつの間にかほぼ全員の携帯のアドレスが登録されていたりした。

携帯を奪っていた木乃香が主な原因だろう。

「なあ。アンタ」

漸く落ち着いてきたから一人酒と洒落込もうと思った途端にこれだ

よ。

「何ですか？ 長谷川さん」

この人こういう馬鹿騒ぎ嫌いじゃなかったっけ？

「あーいや、そんな大した用じゃないんだが、動画投稿サイトでアドニスっていう人を知ってるか？」

やっぱりネット関連か。知ってるも何も本人なんだが。まさかそれを確認したいが為に参加したのか？

「こんな狐面被った人かな。ちうちゃん？」

と、長年愛用の狐面を取り出す。

「なっ！？ じゃあやっぱり。いや、その前に私のことも知ってるのか！？」

「そりゃまあ。？1ネットアイドルとか知名度は俺より上でしょ。人に言ったりとかはしないから安心してくれ」

「あのサイトが出来た初期からいる古参者が自分の知名度分かってないのか？」

ゴメン。あんまりわかってない。趣味でやってるようなものだし。大体六年近く失踪してたし。

「はあ。人がトップを維持するのにどれだけの苦勞を……」

などなど何故か延々と愚痴を聞かされる破目に。

「ちうちちゃんも一杯飲むかい？」

今度は日本酒だよ。

「ああ。サンキユ　ってこれ酒じゃねえか！」

「人生が潤うよ。あと飲まないならくれ」

「堂々と未成年が飲酒してんじゃねえ！」

「この物語では未成年が飲酒・喫煙している場面が多々ありますが、本来は法律で固く禁じられています。良い子はマネしないでね。お兄さんとの約束だよ。よし」

「よし、じゃねえよ。それで自分が無罪になると思ってるのか！」

「バレなきゃいいんだ。まさか中学生の歓迎会で飲んでいる物が酒と考える人はいまい」

「ダメだコイツ。早くなんとかしないと」

「そのふざけた妄言をぶち殺す」

ここからはネタの往来になった。

ちうちちゃんとはいい友達になれそうだ。

いつの間にか時間も結構経っていて今日はこのままお開きとなった。

「なあ朱織。お前住むとこどうするの？」

歓迎会からの帰り道すっかり忘れていたがコイツの住む場所決めてなかった。

「ああ。大丈夫ですよ。さっき高畑先生が明日から寮の一人部屋用意してくれるって言ってましたあ」

もう言葉に覇気が無いよ。いや、いつもこんな感じか。ていうかそれじゃ今日は大丈夫じゃないってことだろ。

仕方ない。家に泊めるか。十五年近く放置してることになるが、まあ大丈夫だろ。

「おい朱織。とりあえず今日は俺の家に泊まることになるがそれでもいいよな」

「うん。それでいい」

では、懐かしの自宅へ向けて。

……どこに建てたっけ？ 霊脈沿いに歩けばその内着くか。

そして歩き続けて三十分。漸く着いた。着いて分かったがめっちゃくちゃ遠回りしたよ。

本来なら十分ぐらいで着く道のりだった。

「ねえ彩兄。電気が点いて誰か住んでるようにしか見えないんだけど。ホントにここなの？」

「ここのはずなんだけどねえ。」

「ジジイは俺の家に誰か住んでるなんて言っただけでなかったし、不法侵入出来るほどこの家のセキュリティは甘くないぞ。」

「まあ行くしかないだろ。いざとなれば追い出せばいいし」

「所有権とかはこっちにあるんだから。」

「扉まで移動して呼び鈴を鳴らす。」

「扉が開き、出て来たのは、」

「どちら様ですか？」

「茶々丸さんだった。」

「彩輝さんに朱織さんでしたか。マスターに何か御用で？」

「ん？ ああ。用ね。うん。用なら今出来たよ」

「ではマスターを呼んできますので、お上がりになって下さい」

「うん。ありがとうね」

「家の中へと足を踏み入れると人形とかが所狭しと置かれていてす」

くファンシーな感じになっていた。

あるえ〜。ここ俺の家だよな？

とりあえず椅子に座る。朱織なんて机に突っ伏してるし。あのハイテンションはそんなに堪えたか。

「何だハウル。私に用とは」

そして二階へ続く階段から乗っ取りの御本人登場。

「何故お前がここに住んでいるのかから話を聞こうか」

「……………ああ。そういえばこの家はハウルの家という設定があったな」

設定じゃねえよ。紛れもない現実であって事実だ。

何より最初の数秒本気でわからないといった仕草がイラつく。

「『世界樹は理解の座より、ヘルメスの小径を辿り、栄光の座に接
続』』
零崎一賊が長男、零崎彩識が命ずる』」

部屋の中に声が響く。反響した声がぶつかり合い、目に見えぬ音色は絡み合う。まるで歌の結界を成すように。

変化はすぐに表れた。

《呪歌を認識。お帰りなさいませ彩識様》

床から一体の半透明の動物、具体的に言うならば豹に似ているモノが現れ、その思念が頭に響く。

「あそこの吸血鬼を住ませた理由は？」

《彩識様と既知の間柄であり血の匂いがしましたので》

あー思い出してきた。そういやそんな設定をしたなあ。確か、俺の知り合いが鬼なら住んでよしみみたいな。

うん。その条件ならエヴァは両方満たしているな。

《排除しますか？》

「しなくていい。呼び出して悪かったな」

それを境に豹は霧の如く消え去った。

「一応管理人の許可を得ているようなので所有者としても許可を出してあげよう」

「ちょっと待て。なんださっきのは」

「この管理人に決まってるだろ。居候」

「あれが管理人か！？ いや、それよりもあの存在自体が何なんだ」

「俺が作った人工精霊。土足で入り込んで人の研究成果荒らしてくれるような屑がいる学園でこの程度のセキュリティも無いと思っただのか？」

困ったことに強さはタカミチよりも少し弱いぐらいで不法侵入者は容赦なく殺すように仕込んであるからなあ。……どうでもいいけど死人出てないよな。

「最近、と言っても十年ほど前からだが『最果ての魔法使い』なんて呼ばれ始めたの知ってるか」

「いや、初めて聞いた」

「お前のやってることが意味不明すぎて時代が追いついていないからだとさ」

そこまで意味不明か？ それに時代が追いついてないっていうよりも、時代の遺産を発掘しているだけなんだが。

「まあそんなことより。俺も今日からここに住むからよろしく。朱織は今日だけ泊まることになってる」

「それでは私は晩御飯の支度をしてきます」

「お願いします」

突然二人増えた食卓にすぐに対応できるんて。どう見てもプロだろ。

そつえば人形に囲まれて思い出したが、

「なあ、チャチャゼロは？」

「ん？ 確か その辺に居たはずだ」

雑多に人形が並べられている一角を指さす。

「呪い解けたんだから動けるようにしてやれよ」

人形の山の中からチャチャゼロを発掘する作業を 思ったよりも早く見つけた。

「ちゃんと魔力供給してやれって」

と、エヴァに投げつける。

「言っておくがハウルに言われたからじゃないぞ。ちゃんとこの後供給するつもりだったんだ。決して自分の従者を忘れていたわけではないからな」

忘れてたんですね。

「嘘ツケ。スツカリ忘レテタジャネエカ」

お。チャチャゼロ復活。

「よっ。久しぶり」

「オ。ハウルジャネエカ。テツキリ死ンダカト思ッテタゼ」

公式記録じゃばっちり死んでるはずだけどな。

「ハッ。おいチャチャゼロ。コイツの死に様が想像できるなんてまともな神経しているとは思えんぞ」

「俺だってベースは人間だぞ。将来多分きつとその内死ぬはずだと思っよ?」

「自分で言っつといて最後疑問形じゃないか」

そう改まって言われると死ぬる自信が無い。

「御飯出来ましたよ」

早っ!

まだ部屋を出て数分だろ。

「あれ? 朱織さんは?」

「ああ。何か静かだと思ったら、寝てるわ。おい、起きろー。飯だ」

「うん……」

朱織を手早く起こして配膳ぐらいはさすがに手伝っよ。

そして食卓に並んだものはどれも絶品だったと言っておっつ。

忘れかけていたが深夜0時に呼び出されてたんだっつた。

危ない危ない。すっぱかすところだっつた。

現在23時10分。十分間に合う時間帯だろう。

制服から実家から持ってきた和服へと着替えてエヴァから道を聞く。

「世界樹前の広場ってどこにあるんだ？」

「なんだこんな時間に」

「警備員の顔合わせがあるとかで呼び出し」

「そついえばジジイから連絡があったな。ハウルの顔合わせだったのか」

今思い出したってことは確実にサボるつもりだったろ。

「私も着いて行ってやろう。面白そうだからな」

「ただの顔合わせだろ。面白い要素がどこにある」

「あのジジイのことだ。タカミチと模擬戦なんかをするよう言っんじゃないか」

確かにそれはありそうだな。

「それに私の呪いを解いたことで一混乱ありそうだしな」

と、笑いながら言うのが結局ジジイに報告とかしてないのかよ。人のこと言えないけど。

「茶々丸。世界樹の広場に行くぞ」

「わかりました」

行く気満々だよ。

「そついや、呪い解けたのに学園から出て行かないのか？」

「ん？ ああ。当ても無く放浪するよりハウルと居た方が面白そうだからな」

冬になれば俺もよりも、もっと面白い奴が来るよ。

「彩兄どこか行くの？」

二階の部屋にいたはずの朱織まで降りて来た。

「朝話したろ。警備員の顔合わせだ」

「ふ〜ん。面白そうだから私も行く」

「いや、ダルいだろ？ 寝てるよ」

「ダルいのと面白いの別ですよお」

朱織、お前もか。

こんな面子が揃ったら何か起きるのは決定事項じゃねえか。

そして時間は経って、広場に向けて移動し始めた。

何事にも不運な事故はあるからな。初日から死人出さないように気をつけよう。

第十四話：初戦闘と

広場に到着すると既に結構な人数が集まっている。

「……フォツ。ちょうど来よったわい」

ジジイがこっちを見てそれにつられるように全員が俺たちを見る。

お。刹那とか龍宮とかもちゃんといるね。

そんなことを思っていたら隣にいた朱織が、

「わー。殺し甲斐の無さそうな人たちばかりですねえ」

何てことを突然言っただもんね。ちょっとまわりの警戒心やらが強く
なったよ。

「分かっていると思うが零崎に明確に敵対するまで殺っちゃダメだか
らな」

念のために釘を刺しておく。本当に明日の朝ここが殺人現場として
発見されそうで怖い。

「わかってますよ。それくらい」

「お前らのその物騒な思考回路は何とかならんのか」

エヴァまで口を出してくるが俺はまだまともな方だよ？

まあ全員が注目してくれてちょうどいいやと思ひ簡潔に自己紹介。

「今日から警備のすることになったそのジジイの孫の近衛彩輝だ。よろしくしないでいいよ」

このまますぐに帰れるという淡い期待を込めてUターン。

「待つんじゃ彩輝。お前の実力を知りたがっている者もおるじゃろう。ここはタカミチと手合わせしてくれんかの」

……うん。分かってるよ。多少でもそんな期待をした方が馬鹿だということとは。

家を出てから道中ずっと吸っていたキセルの煙を口に含み、十分に味わい吐き出す。

「待つて下さい学園長。大体君はまだ未成年だろ！ 何を吸っているのか分かってているのか！」

「朱織代わってやるよ。タカミチはそこそこ強いよ」

どんな反応が返ってくるかは予想出来るが、朱織がどれだけ出来るようになったのかは興味あるしな。

「嫌だよ。ダルいよ。何で私が。別に警備になんてするつもり無いし」

「ですよー」。

「全くだ。今更実力云々はいいだろ。それなら私の呪いを解いたと

きに証明されている」

そしてここでエヴァが爆弾投下。一気にぎわめく広場。

「なっ!? 君は自分が何をしたか分かっているのか!」

「あ。そうそう朱織。お前もちゃんと自己紹介はしとけよ。一般人に間違われて変に絡まれたら危ないから」

主に相手の命が。

「別に危なくは無いと思うけど、彩兄がそういうなら」

そう言っつて一度姿勢を正す。

「零崎朱織です。仲良くするつもりは一ナノグラムもありません。むしろ私と敵対してください」

と、120%スマイルで告げる。敵対してくれって殺す気満々じゃねえか。

「人の話を聞けえーっ!」

さて、話を元に戻して。

タカミチとは最後に会って十八年ぶりか。それじゃどれだけ強くなつたか確かめてやるとしますかね。

「それじゃあタカミチ。そろそろ始めるか」

「ちょっとは彼の話聞いてあげてくれないかなあ」

苦笑しながらそんなことを言うが誰か喋ってたっけ？

「何なんだ君たちは！」

「「兄妹さ」」

俺と朱織の声が揃った。

「そういうことを言ってるんじゃない！ 未成年の喫煙にサウザンドマスターが封じた『闇の福音』の解放。君はそれでも正義の魔法使いか！」

うわー。くだらねえ。

「そっちの君もだ。零崎なんて珍しい名字はあの零崎彩識の血縁者がそれに近い者だろう。何故悪の魔法使いのような発言をするんだ！」

その言い方だと俺が一度でも正義を語ったかのように聞こえるからやめて欲しい。

「エヴァ、茶々丸。ちょっと離れてろ。あと茶々丸には解説役をお願い」

「はい。わかりました」

「やはり着いて来て正解だったな」

笑いながら刹那たちのいる方へ移動するエヴァと一步下がってそれに続く茶々丸。

「もう少し責任感と自分が誰の名を背負っているのか自覚したらどうなんだ！ その浅はかな言動が家族に迷惑を」

「あーあー。ウゼエな。ウゼエよ。お前らの思想を押しつけるな！ テメエらの妄執を押しつけんな！ 自己陶醉に他人を巻き込んでんじゃねえよ！ この世から悪が消えればいいとでも思ってたのか！ 太極図見直して来い馬鹿野郎！ 世界が正義イチが悪かゼロで出来てるとか思ってたんじゃねえぞ！ そんなくだらない理論は捨てちまえ！ 出来ないなら小学一年生の算数の教科書でも読んでろ！」

正義だとか悪だとかそんなもんは所詮他人の評価だろうが。他人の目が気になるなら山奥にでも引き籠ってる！ 大した経験トラウマ積んでねえガキがギャーギャー吠えてんじゃねえ！ 吠えんな叫ぶな咽びんな。鬱陶しい。負け犬かてめーら！」

以上、人類最強の請負人の台詞を多大にリスペクトさせていただきました。

そして時間稼ぎと油断・動揺作りは十全だ。

「『衝魔の弦』」

俺の後ろから偉そうに説教していた教師に向けて圧縮された風の塊が放たれる。

無論避けれるはずもなくそのまま後ろに吹き飛んだ。

「何も知らないくせに何私たちの家族を語ろうとしちゃってくれて

るんですか」

奇遇だな。あんな奴は心底どうでもいいが俺もその一点だけが気に入らなかった。

教師の中で最も再起動の速かったのはグラサンかけた奴。

即座に風の無詠唱で仕掛けてくるが、

パンツ！ と朱織が柏手を打ち祝詞を紡ぐ。

「『はらいたまい、清めたまう』」

俺の眼前に不可視の壁ができ、魔法を防ぐ。

次に動いたのは二人。ガングロと野太刀を持った女。

さて、じゃあ俺も。

左手で服に仕込んでおいたフラスコを投擲。右手ではキセルの煙に魔力を流し空中にルーン文字を書く。

「『封印術式七番、開封。キーワード 第五元素の夢は全てを溶かせ』」

「『汝は松明の炎！ されば燃やせ、カノ！』」

銃を構えたガングロがフラスコを撃ち落とすがそんな行為は無駄。

中の液体が霧状になり、それが獅子を模ってガングロを襲う。

その間にグラサンは炎に包まれもがいてる。

そして最後。刀を抜き既にこちらに向かって飛びかかっている女教師には。

「刹那！ 夕凧借りるぞ！」

夕凧をいつでも抜けるように腰のあたりで構える。

「神鳴流奥義『斬岩』」

今。

「秘剣、零閃」

抜刀。

斬撃は直撃し後ろへ吹き飛ぶ。碌に受け身も取れずに地面へ激突した。

「安心しろ。峰打ちだ」

居合いだからノリで零閃って言うてみたけど、いまいちな速度だった。言うんじゃなかったと少し後悔。やっぱり斬刀『鈍』が欲しいところだな。

経過した時間は二十秒ぐらいかな。

SIDE 刹那

七年か。過ぎ去ってみれば短いけれど、思い返せば長い時間だな。

あの頃に比べて私はちゃんと成長しているんだろうか。

彩輝様とお嬢様をお守りできるほどに強くなれているんだろうか。

七年ぶりに会った彩輝様は何も変わってないようで、記憶の中の彩輝様と同じで少し安心した。

変わってないと言っても容姿は見目麗しい木乃香お嬢様のお兄様なだけあってすごくカッコよくなっている。

あんな方と生涯添い遂げることが出来たら幸せなんだろうな。

でも彩輝様は私のことを異性というよりも妹としてしか見ていないし……ハア。

いや、私は何を。人並みの幸せなどお嬢様たちを守ればそれでいいではないか。

……話を戻そう。あの教室に入るときに見たあの技と気配無く教室を抜け出していた技術。

どちらも驚嘆に値するものだ。あれには龍宮と楓も驚かされていた。

逆に言えばあれ程の技術がなければ生き残れなかったということだ。一体どれ程の修羅場を潜ってきたのだろうか。

「学園長。この集会の理由は何なのでしょうか」

おっと、いけない。少し思考に没頭していた。

今世界樹前の広場には今日当直でない者のほぼ全員が集められている。日頃多忙である学園長先生や高畑先生までも。

「フォッフオ。皆に集まってもらったのは、今日新しく警備の仕事に就く者があるのだな。その顔合わせじゃ」

このタイミングからして彩輝様以外に考えられない。……なぜだろう？ 何だか嫌な予感がする。

「それでその新しい警備の者とは？」

「もう少し待ってくれんかの。何分今日学園に来たばかりで土地勘が……フォッフ。ちょうど来よったわい」

学園長先生の見ている方向を見ると、こちらに歩いて来ている人影が四つ。

制服姿のエヴァンジェリンさん、絡繰さん、今日転校した零崎さんに平安風の羽織にキセルを吹かしている彩輝様。

「わー。殺し甲斐の無さそうな人たちばかりですねえ」

「分かっていると思うが零崎に敵対するまで殺つちゃダメだからな」

「わかっていますよ。それくらい」

「お前らのその物騒な思考回路は何とかならんのか」

……どこから突っ込んでいいのかわからない。

「今日から警備のすることになったそのジジイの孫の近衛彩？だ。よろしくしないでいいよ」

じゃ帰るか。

と、そのままUターンして帰ろうとする。ちよっ、本当に顔を合わせるだけですか。

「待つんじゃ彩輝。お前の実力を知りたがっている者もおるじゃろう。ここはタカミチと手合わせしてくれんかの」

確かに彩輝様の力は私も知りたいがいくらなんでも相手が高畑先生というのはやりすぎじゃないだろうか。

「待つて下さい学園長。大体君はまだ未成年だろ！何を吸っているのか分かっているのか！」

「朱織代わってやるよ。タカミチはそこそこ強いよ」

え？ 無視？ それにそこそこって。

「嫌だよ。ダルいよ。何で私が。別に警備になんてするつもり無いし」

じゃあなんでここに来たんですか。

「全くだ。今更実力云々はいいだろ。それなら私の呪いを解いたときに証明されている」

と、エヴァンジェリンさんが口を開いたが、それってあのサウザンドマスターがかけて誰も解けないはずの呪いじゃ。

ざわめく人たちを無視して、彩輝様は零崎さんにも挨拶するように勧める。

「零崎朱織です。仲良くするつもりは一ナノグラムもありません。むしろ私と敵対してください」

そんなことを満面の笑みで言う。この人は授業中も休み時間もほとんど寝てたから力量がよくわからない。

……あれ？ この二人初日から全授業受けてなくて不味いんじゃないだろうか。

「刹那。彼は本当に何者なんだい？」

隣にいる龍宮が話しかけてくる。

「さつきも話したと思うが、私の兄代わりのような人で剣の腕はすでに達人の域だ。随分彩輝様に拘るな」

「私が気になっているのは彼ではなく零崎と名乗る彼女の方だよ。だからこそ零崎と普通に関われる彼も気になっているんだが」

零崎？ あの『紅き翼』の零崎彩識と偶々同じ姓なだけじゃないのか？

そんな特筆するようなことじゃと思っていたら、

「ほう。龍宮は零崎一賊について知っているのか」

こちらに移動して来たエヴァンジェリンさんが話しかけてきた。

「ああ。前に一度だけ偶然利害が一致して共闘したことがある。あの時はまだまだ未熟な子供でね、初めて人間が恐いと心の底から思ったよ」

「龍宮。さっきから言ってる零崎一賊とは何なんだ？」

「一言で言うなら正体不明の殺人鬼集団。関わった人間は基本皆殺しだから噂が広まることもない。私が生きているのも奇跡のようなものだ」

殺人鬼！？ それでは木乃香お嬢様が。いや、それよりも何でそんな人と関わってるんだ彩輝様は。

「まあ、朱織は入学の際に何か約束したようだから無駄な殺しはしないだろうがな」

私の心を読んだかのようにエヴァンジェリンさんが補足してくれる。

一応安全ということだが警戒しておくに越したことは無いだろう。

「お。漸く始まるか」

あ、そうだった。高畑先生と手合わせするんだった。ここはしっか

り見ておかないと。

意識をそちらに向けると先生方に啖呵を切っていた。

なぜ？　と思う間もなく零崎さんが彩輝様の後ろから弓の弦を放す。

矢をつがえてるわけでもないのに先生の一人が後ろへ吹き飛んだ。

さらに反撃に出た別の先生の風の無詠唱魔法も完璧に防いでみせる。

「あれは一体？」

「あの弓の技はおそらく鳴弦でしょう。空気を圧縮しそれをぶつけたものかと。壁の方は神道の楔ぎですね。一切の魔を祓うこの世で最も苛烈な魔法と言われています」

私の呟きに今までずっと黙っていた茶々丸さんが答えてくれた。

あの強度の結界を簡単に張るなんてやはり只者ではないようだ。

そして次に動いたのは三人。

ガンドルフィーニ先生が銃を刀子さん刀を抜く。

それを迎え撃つように彩輝様がフラスコを投げ、キセルの煙で何かを宙に描く。

直後さっきの無詠唱魔法を放った神多羅木先生が炎に包まれる。

投げたフラスコはガンドルフィーニ先生に撃ち落とされたが、そ

ここから獅子の形をした霧状の何かが出てきて先生を襲う。

「刹那！ 夕凧借りるぞ！」

突然名前を呼ばれ驚いたが、いつの間にか夕凧は私の手から彩輝様の手へ渡っていた。いつ取れたのか全く分からない。

そして神鳴流の奥義を決めようとする刀子さんが後方へと吹き飛ばされる。あの刀子さんが受け身も取れずに地面に激突した。

何をしたのかどころか、いつ刀を抜いて鞘に収めたのかも全く見えなかった。

「茶々丸。アイツは何をしたんだ？」

エヴァンジェリンさんまでも全てを分かっているはいないようだ。

「最初のフラスコは錬金術で作られる水の元素エレメントを使って物質もエーテル体も関係なく全てを溶かす人工精霊。次に宙に書かれたのはルーン文字『カノ』。意味は松明、炎です」

「ちよつと待て。今となつては使い手など残っていないからうる覚えだが、確かルーンは文字を対象に直接刻むことにより発現する魔法のはずだ。それを障壁を無視した文字の投影によって人一人火達磨にするなど」

え？ それって達人とかそんな範疇にいないってことじゃ。

「…………最後の剣術ですが」

茶々丸さんまで流した。

「桜咲さんから刀を取ったのは縮地でここまで移動して無刀取りをしたかと。後は単なる居合い抜きですね」

簡単に言いますが私からも隣にいた龍宮からも全く気配を感じさせずに一瞬で刀を取って、その上野太刀で居合いつて。

しかも刀身どころか納刀の瞬間も見えなかった。

「なるほどね。そこまで規格外ならあの一賊とも付き合えるわけだ」

龍宮は納得しているがその一賊の人もここまで規格外だったのか。じゃあ零崎さんも本気を出せばこのくらいは出来るんだろうか。

「それにしても茶々丸さんは何でも知っているね」

「そう言うようにここに来る道中予め指示をされていただけですか
ら」

……それって計画犯じゃないですよね？

「ところで誰も触れませんがやられた教師の方々は大丈夫なんですよ
うつか？」

SIDE 彩輝

「さて。やるうぜ、タカミチ」

「流石にやり過ぎじゃないかなあ。それより後遺症とか残らないよね？」

今現在進行形で治癒魔法をかけられている四人の教師を見ながら言ってくる。

「大丈夫じゃね？ 手抜きなく手を抜いて、加減無く手加減をし、容赦も情けもかけてやったんだから」

むしろあの程度で駄目になるなら記憶消して普通の教師として生きていくことを推奨するよ。……ただ朱織にやられた最初の教師の安全は保証しない。

「というかもう既に僕と手合わせする意味無くなってると思うんだけど」

「おいおい。ここは『よくも僕の同僚をつ！』みたいな感じでテンション上げてかかってくるどこじゃね？ そうじゃなきゃかませ犬よろしく引き立て役として前座にもならず散って逝ったA B C Dはどうなるんだ」

「死人に鞭打つようなことは言わないでくれよ」

いや、死んでないよ。

さらりと俺より酷いこと言ってね？ 他にもっと言いようはあるだろ。

「あまり思い出したくはないことだけど、僕の基礎固めをやってくれたのはハウルだったね」

ああ。そうだな。

「あれから僕がどれだけ強くなったのか確かめたいし見てもらいたい」

「手合わせする意味ちゃんとおあるじゃねえか」

「僕個人の私情だけだね。」

と、苦笑しながら付け加える。

靴と靴下を脱いで素足になり、キセルも『倉庫』に入れる。

「私情でいいじゃん。虚刀流、近衛彩輝 推して参る」

左足は前に、右足を後ろに開き、腰を深く落とす。

左手を上、右手を下に、壁を作るように平手で構える。

「虚刀流一の構え 『鈴蘭』」

俺が構えると同時にタカミチもポケットに手を入れ戦闘体勢を取る。

「キョトウリユウ？ 聞かない流派だね」

「虚しい刀の流れと書いて虚刀流。刀を使わない最強の剣法とでも思ってくれ」

「剣法？ 拳法ではなく？」

「剣法だ。拳法ではなくな」

これで会話はお終い。

「行きますッ！」

「来い。そのころにはお前は八つ裂きになっているだろうけどな」

タカミチが居合い拳を放ってくるが、それを左手の手刀のみで全て叩き斬る。

数が四十を越した辺りで次はこちらから攻める。

一度横に跳び、そこから縮地でタカミチの眼前まで移動する。

「ッ！」

手刀、足刀と交互に繰り出す首筋を掠めるだけで終わる。

タカミチは瞬動で大きく距離を開ける。深追いはあえてしない。

「左腕に魔力。右腕に気。合成！」

「へえ。居合い拳の射程も威力も威卦の密度もどれをとっても一流レベルじゃないか」

和服で来たのはミスったな。居合い拳の打ち合いも中々楽しそうだ。

「ここからだよ。『豪殺居合い拳』」

「虚刀流 『百合』」

飛んで来る大砲並みの威力をもった豪殺居合い拳を、全身をあますところなく駆動させた胴回し回転蹴りで軌道を逸らす。

「唯の身体強化で軌道を逸らすなんて」

タカミチは半ば啞然としている。

だが、

「この程度なわけないよな？」

こんなものはガトウの模倣だ。俺も一度見れば出来る。

「ええ。貴方に言われてから毎日欠かさず愚直なまでに居合い拳をし続けた結果です」

一目見てわかる。これの直撃はヤバイ。

余裕ぶってる場合じゃないな。こちらも咸卦法を使い横に跳ぶ。

ただの『豪殺』が大砲だとすれば今のはマシンガンと言ったところか。

秒間およそ二十発程度をただ一点のみに打ち込む。貫通力が半端ない。

本当に毎日欠かさなかったみたいだな。あの連射力がそれを物語っ

ている。

縮地、虚空瞬動を駆使し、もう一度接近戦に持ち込もうとするが、

「このっ！」

「チッ！」

マシンガンの次は散弾銃か。点ではなく面で。攻撃と防御を同時に
行うか。

咸卦の気を右足に集中。

「虚刀流 『薔薇』」

散弾の壁に穴を開けるが、そこを、連射で狙ってくる。

うん。十分過ぎるな。原作よりもかなり強いんじゃないか？ こころ
までとは嬉しい誤算だ。

流石に縛りプレイのままじゃ勝てん。

では、魔眼を発動。

身体を十五センチ程擦る。

それだけの動きで一点集中のマシンガンを完全に避ける。

あとは悠然とタカミチに向かって歩いて行くだけ。

「ッ！」

散弾で近付けまいとするが、左前にトン、とステップを踏むように飛び出し、一発一発の隙間に身を入れる。

タカミチの頬が引き攣る。先刻のように瞬動で距離を取ろうとするが、今度はそんなことさせないよ。

タカミチが動くより先に俺が縮地で懐に入り、掌底を打ち込み空中に打ち上げる。その際気を流し咸卦法を強制キャンセルするのを忘れない。

「驚いたぞタカミチ。お前の技術は驚嘆に値する。敬意を表し、この技で終わらしてやる。虚刀流最終奥義」

速さが零になり自由落下を始める。

虚空瞬動が出来ないほどにダメージを与えても尚、腕を前で交差し防御しようとするタカミチ。

「ちなみにお前が気絶する前に言っておくと、今まで最強の剣法だとか言っただけこれには元々実在の人物・団体・事件とは一切関係ない小説の中の流派なんだ。それを一年かけて習得し、今日初披露するわけで。だから犠牲者第一号のタカミチ君。なるべく派手に散ってくれ」

抵抗するすべも無く重力に従い落下してくるタカミチは既に眼前だ。

「虚刀流、『七花八裂』！」

タカミチは地に沈み、立っているのは勿論俺。

さて、帰るか。

第十五話：自動人形が弟子ってカツコよくね？

当然のごとくあの後何の反省も後悔も謝罪も後始末も後片付けもしなかった俺は後日ジジイに呼び出されて説教をされた。

俺と朱織に秒殺された被害者四人は敵意剥き出しだし、他の魔法関係者もかなり警戒してくれちゃって、楽しくなってきたぜ。

あ、そうそう未成年者喫煙の件はキセルを魔法媒体だとか何とか言っただけの措置を取ってくれたらしいよ。

一般の教員には通じない言い訳だが、『お前らだって銃刀法違反してるじゃん』と、そこら辺を上手く突いたらしい。

住む場所は他に部屋が空いてないとか本人も気に入ってるしということ。エヴァが俺に何かしたんじゃないかという噂も無いことも無いがそこら辺は知ったこっちゃない。

暮らしやすい環境が整っててジジイには感謝感激雨霰。

お礼に五百万円相当のふざけた買い物を買って学園の金でやってあげた。

「で、茶々丸の親って誰だっけ？」

土曜日。自宅で思いつきり寛ぎながら茶々丸に話をふる。

「同じクラスの葉加瀬聡美と超鈴音ですが、それが何か？」

「もうじきまとまった荷物が届くはずだから、その二人とやりたい

ことがあるんだ」

「はあ」

俺の要領を得ない発言に曖昧に頷く茶々丸。

でもこれは確実に茶々丸のためになることだと思っよ。少なくとも損はしない。

と、そこに唐突に響く呪的警報。マジック・アラーム

元は侵入者対策として開発されたらしいがほとんどインターホン代わりに使っている。

「あそこまで無茶な注文したら気付くとは思ってたけど予想以上に速かったな」

昨日注文したのにもう届くなんて副業に運び屋なんかやったら儲かるんじゃないか？

俺の考えを余所に茶々丸がお客様への対応をしてくれる。なんて良くてきた子なんだ。

それにひきかえ吸血鬼の居候は昼まで寝るつもりか。全くどの二トだ。俺だって働きたくないのに。

「どちら様でしょうか？」

「あのこちらに彩？様がいらっしやると伺ったのですが」

ダメ人間になりかけている思考を停止し玄関からの声に耳を傾ける。聞き覚えのある声だ。それもつい昨日聞いたかのような。記憶をさらって人物の特定には一秒も掛からなかった。つまりそれだけ親しい人物というわけだ。

まあつまり、玄関に移動した俺の目に入ったのは刹那だった。

………ほんの数瞬前までの意味ありげな呟きとかが恥ずかしい。

「やあ刹那。とりあえず上がってけよ」

「では私はお茶を入れてきます」

何てできた子なんだ。それにひきかえ吸血鬼の居候は昼まで、以下略。

刹那をリビングに通し、茶々丸が紅茶を出してくれる。朝からアルコールがいいと思っただ俺はエヴァより酷い状態なんじゃないだろうか。

「それで？ 俺に用があつて来たんだろ？」

「はい。私に剣を教えてください！」

「いいよ」

二つ返事です承。断る理由がどこにある。

「ありがとうございます！」

詳しい日取り何かを取り決めていたら、マジック・アラーム 報。またしても鳴り響く呪的警

これはアレだな。俺の取り寄せた荷物と見せかけてまた別の人が来るパターンだ。予想はタカミチ。

そして例に及ばずまたしても茶々丸が対応してくれる。

本当にできた子だ。それ、以下略。

玄関に向かった茶々丸がすぐに戻って来た。

「彩輝さんにお客様です。アトラスの使いと仰っていますが」

立ち上がり刹那と茶々丸をその場に残し、玄関で待たせている客のもとへ向かう。

「繰り返しネタは三回って相場が決まってるだろうが！」

「知らないわよ！」

玄関に居たのはピンクブロンドの髪を後ろで一纏めにした二十代前半の女性。

目にはいっぱい涙を溜めて、そして堪えきれなくなったか大粒の滴が頬を滑る。

「うう……ハウルう……」

と、泣きながら俺の胸に顔をうずめるように抱きついてきた。

「ホントに…死んだのかと……うぐっ……思ったじゃない」

「よしよし」

二十歳の女性をあやす十三歳。横から見れば奇異の目で見られるのは必須。

「どうかなさいま……」

様子を見に来た茶々丸が状況がわからずフリーズしてしまっ。

「茶々丸さん？ 彩輝様は……」

フリーズ二号。今は氷河期か何かですか？ 温暖化もこれで安心ですね。

「とりあえず、上がってくよね？」

コクコクと無言で頷く。

さて、気を取り直して数分後。

「十五年ぶりね。ハウル」

「久しぶりステアちゃん」

「もう私が年上なんだからちゃん付けはやめてくれない」

「フフ。いつまで経っても俺にとっては可愛い子供だよ。と言おうと思ったんだが、月日を感じることは多々あったが年月をこつも感じるのは初めてかも。うん。見違えたよステア」

「あの、彩輝様。こちらの方は？」

今まで黙っていた刹那が痺れを切らして尋ねてきた。沈黙を守っている茶々丸も同じ心境だろう。

「初めましてお嬢さん方。私は呪物調達会社 アトラス の取締役社長、ステアといいます。よろしくね」

十人中八人が振り返るような笑みで名刺入れから名刺を二枚取り出し刹那と茶々丸に渡す。

「あ、桜咲刹那です」

「絡繰茶々丸と申します」

お互いに自己紹介をする刹那たち。つて、ちよつと待て。

「社長が何こんなところで油売ってんだよ」

「売っているのは呪物です」

そんなに上手くねえよ。

「初回から呪符用の霊紙五百枚に純化された水晶五キログラム、洗礼済みの第一種水銀二キログラム、これら全てを日本産で。ヤドリギやアルラウネの根を始めとした各種霊草、鷲獅子の生き肝から妖

精の銀三キログラム、タランチュラの酢漬け肺、e t c……。総額五百万を前金で全額現金で払うようなふざけた野郎の顔を見に来ただけよ」

「褒めるなよ。おだてても何も出ないぞ」

「褒めてません」

まあ要訳すると、死亡扱いされている零崎彩織と同じ買い方をする人が気になって。と、いったところだろう。

「お二人はどういった関係なんですか？」

これは茶々丸からの質問。

「商人と客人」と俺が言い、「依頼人と請負人」とステアが言う。

「今は請け負い業やってないぞ」

「えー」

あんな世界中を飛び回る仕事を学生の身分で出来るか。

でも懐かしいな。することなくなつてちようど請負人でもやるかあと思つていたところに、何の巡り合わせか誘拐されたステアの救難信号を俺が受け取っちゃったんだよね。

サクツと誘拐犯を血祭りにして救出した後、アトラスの先代社長長の娘と分かり、アトラスと関係を持ったのが馴れ初めだったな。

「二人こそハウルと付き合ったりしてないわけ？」

「わ、私のような者がそんな恐れ多い」

「私はガイノイドですので」

「アハハハ。この節操無しが種族とか身分なんて細かいこと気にするわけ無いじゃない」

「おい。何を勝手に」

「楽器も武器も魔法も一つに絞れない人に一途な思いなんてあるのかしら」

「……一縷の望みはあるよ？」

と、言つと目を合わせてきたので、睨めっこをする気にもならず、視線を明後日どころか一昨日くらいまで逸らす。

「まあ、大口の顧客を見つけたことだし今日はこれで帰るわ。商品は家の外に置いてあるから」

空になったティーカップを下げている茶々丸を横目に俺は玄関まで移動してステアを見送る。

「長期休暇になったら揉め事処理屋紛いのことはしてやるから困ったことがあつたら頼って貰って構わんぞ」

「そうさせてもらつわ」

ふむ。既に扱き使う算段をしていそうだが、朱織のストレス発散、刹那の修業と有効活用さしてもらおう。

最後は互いに別れの言葉は用いずただ一言「縁があったらまた会おう」と告げてステアは帰って行った。

さて、必要な物は届いたし超鈴音と接触を図ろうか。

「まあ聞いてくれよ。俺は幼少の頃に人が一生かけても到達出来ないような境地に辿り着いちゃってさ、もうそれ以来苦勞はあっても努力や修業とは縁遠い生き方をしてきたんだ。

それで他人が　より厳密に言えば身内が強くなって行く過程を見るのが楽しみでさ、どうせなるなら最強になって欲しいじゃん。で、色々と魔法を教えたり技術を提供したりとしてるんだけど、一言で表すなら俺って単にステータスマAX萌えなんだよね」

「それが茶々丸を改良したいという理由かな？」

「逆に聞くが天才二人が寄ってたかって視覚と聴覚、五感の内半分も作れてないがそれで満足なのか？」

「あなたならそれができると？」

「俺の持つてるホムンクルス、それに類する情報全てとそっちのオーバーテクノロジーがあれば可能だろ」

現在茶々丸に連れられ超包子で超鈴音と葉加瀬聡美と交渉中。

だつてさあ、茶々丸つて味覚ないじゃん。酒と煙草（俺はキセルだけど）の味がわからない世界なんて生きる価値無いだろ。そんな世界本気で滅ぼしてやる。

それで、ならついでに五感全てを知覚できるようにしてやるつもりだ。

「どうするネ、ハカセ。私は個人的には賛成ヨ」

「私も構わないですよ。五感を知覚できるロボット」
「以下延々とマッドなことを呟く。」

「あ、あの。みなさん。私はそこまでして頂かなくても」

ちなみにここに来るまで茶々丸の意見は一切全く一言も聞いていない。俺も含めてなんてマッドな連中なんだろう。

さて、それでは茶々丸を言い込もうとしたところで、全く別のところから話を振られた。

「話は終わったアルか？」

「うむ。クーは何か用事があるのか？」

「彩輝！ 今すぐ私と勝負するアル！」

突然会話に参加した古菲に勝負を挑まれた。

「嫌だ」

「なぜアルか!？」

「めんどい」

嘘偽りの無い本音。

「刹那や真名から聞いてるヨ。かなり強いらしいアルな!」

「俺は今まで一度も戦ったことの無い非力な中学生ですよー」

果たして戦争中のあの一方的な虐殺を戦いと称していいのだろうか？ 運命という強大なモノに対して人は非力だよね。うん。嘘は何も言っていない。

「むー。なら嫌でも戦ってもらおうアル!」

と、いきなり殴りかかって来た。

短絡的すぎやしませんか？ 本当に俺が非力な中学生ならどうする気だよ。まあ、刹那と龍宮の紹介だからそんなはず無いのは分かるけど。

これから先も事あるごとに絡まれるのも面倒だしなあ。相性の悪さを自覚してもらおうか。

『倉庫』から琴糸を取り出し、俺の身体に三センチまで迫った拳を止める。そして、古菲を捕縛。

「やっぱり転校初日のあの技は鋼糸だたアルか」

「鋼系じゃなくて曲絃系だ。拳士じゃ百年やったって俺に触れる」とすら出来ないぜ」

不承不承といった感じだがこれでおとなしく引き下がってくれた。厄介なことに次は武器持参でリベンジを決意してみたいだ。

「ところで彩輝さん」

俺が古菲の拘束を解いているとハカセが声をかけてきた。

「なにかな？」

「そのホムンクルスって誰でも出来るんですか？ 整備のときとか科学なら誰がやっても同じですが、魔法はそうはいかないでしょう」
あー確かに。毎回俺が整備に行けるとは限らないし、俺が居ないときに茶々丸に何かあったら打つ手無しじゃん。

「そこはアレだよ。茶々丸には錬金術師になってもらい自分で何とかしてもらおう。こっちの技術はあくまで感覚器官までに留めて中樞神経の大部分は機械で」

「自己修復ですか。なるほど。自分の身体の異常は自分がよくわかるでしょうしね」

「え……あの……」

本人の意見は一切聞かずいつの間にか茶々丸は錬金術師になることが決定していた。

「触覚を再現するにあたって人肌そっくりにしたいんだが、そつちに何か技術はあるか？」

「人工スキンならありますよ。それと味覚と言うからには飲食物を口に入れる必要がありますが、食べた物はどう処理するつもりですか？」

「万物にはマナが宿るとか言うし、一度体内で霊的に分解した後魔力として吸収すれば」

以降、茶々丸改造計画は着々と進んでいった。

第十六話：ヘドツペルゲンガーに会う、ただしババ抜き♪ みたいなの！（前書き

サブタイに困ったら巫女子ちゃんネタだな。

第十六話：ヘドツベルゲンガーに会う、ただしババ抜き。みたいなの！

麻帆良大学工学部に葉加瀬と超が借りている研究室の一室。

既に日は落ち部屋を満たしているのは寂寥な人工の光と機械から漏れる作業音、いくつかの人の話し合う声のみ。

「まさかルネッサンス黄金期の自動人形製造技術オートマタまで持ち出すことになるなんて」

「中世ヨーロッパにそこまで卓越した技能があつたなんて驚きの連続ですよ」

「流石は『人類最果ての魔法使い』零崎彩識ネ」

三人寄れば文殊の知恵なんて言うが天才レベルが三人揃って徹夜明けの作業になつたよ。

まあその分達成感みたいなのは半端ないがな。

後は茶々丸の目覚めをゆっくり待つのみ。

「ゼロザキ？」

「ここに居る近衛彩輝こそ人類史上初単独でのタイムスリップに成功した人間ヨ」

「ええっ!？」

俺の預かり知らぬところで盛大なネタばらしが行われているが、別に隠してるわけじゃないしな。

「そして二十年前の大戦で最も多くの敵を葬り、あらゆる命を奪った殺人鬼。まさかこんな学園でのんびり学生をやってるなんて思いもしなかった」

「頼んでも無いのにわかりやすく自己紹介してくれてどうも。強引で無茶苦茶な呪紋を刻んだ中華風少女サン」

ていつか今何時だ。窓の外から核分裂によって生まれた天然の光が差し込んできてるんだが。

そう思い壁時計を見ると五時を過ぎたあたりだった。今日は日曜なので一日中寝るとしよう。たとえ月曜でも一日中寝ていたがな！

「アハハハ。これを一目で看破されるのは彩輝が初めてネ」

そいつは重畳。

「この際だから改めて自己紹介しておくヨ。私の名前は超鈴音。歴史を変えるために来た火星兼未来人ネ」

うん。知ってる。

「……無反応はちょっと辛いヨ」

「生まれる世界を間違ったな。お前一人で涼宮ハルヒの願望叶うのに」

問題は魔法使いと超能力者の差異ぐらいか。自分で言っという何だが、すごくどうでもいい問題だ。

「何かもつと言うことは無いのか!？」

「ん〜。じゃあ、少し気になってたんだが、俺って死ぬるの？」

梵を吸収してる所為か若干普通の人より死の線が薄くなってきた今日この頃。

「禁則事項ネ」

はいはい。期待通りの回答ありがとうございました。

「話を戻して、俺にその歴史を変える計画とやらを手伝えと？」

「そうネ」

「一つ質問。歴史を変えるってのは具体的には何をするんだ？」

「二十二年に一度の世界樹の大発光の魔力を使い世界中に強制認識魔法をかけて、魔法の存在を全世界にバラす」

まあ、流石にここが原作と違ってるわけないか。

個人的にはハッキリ言っでどうでもいい。もう勝手にしてくれっで感じだ。

ただ俺は個人じゃないからなあ。

「事後処理は？ バラしたところで最悪魔女狩りの再来だぞ」

「十数年の混乱に伴って起こりうる政治的軍事的に致命的な不測の事態は私が監視し調整する。そのための技術と財力は用意した」

簡単に言ってくれるね。地球温暖化なんかで騒がしい今、新たなクリーンエネルギーとして魔法は注目を浴びるだろうな。

早い話が魔法と科学技術を確立した国が世界の主導権を握る。といった感じのことを『エア・ギア』で言ってた気がする。

大体、野心と欲望だらけの世の中で十数年も小娘の言いなりになる国があるかつつの。正義の魔法使い（笑）からの反感も強いだろうし、計画が破綻する方に俺は賭けるね。

「私はうまくやる」

そしてふと思った。ほとんど会ったこと無いけど、ウチに一々俺の助けが必要な子っているのか？ ……居ない気がしてきたなあ。ってか、俺が生きること自体知られてるのか？

「とりあえず応援してるよ。がんばってね」

まあ兎に角この話はお終いということだ。

「なあ？ この部屋って禁煙？」

「いえ。違いますよ」

普通こういうとこって禁煙じゃね。俺は助かるけど。

『倉庫』からお馴染みのキセルを取り出し紫煙を燻らせる。

後は気長に茶々丸が目覚めるのを待つとしよう。

SIDE茶々丸

目蓋が重い。

出来ることならあと十分、いや五分でもいいからこの感覚を味わっていたい。

嗚呼。春先になるとマスターが起きようとしないうことが多々ありますが、こんなに気持ちのいいものだったのですね。

これがまどろむという感覚なのでしょう。ガイノイドである私がまどろみを覚えるなんて一度ハカセに相談した方がいいかもしれません。

……ハカセ？ 私が活動を停止する前に何か重要な出来事があったような。

思い出している内に段々意識がハッキリしてきて

「おはよう茶々丸。気分はどうだい？」

ええ。全て十全に完全に思い出すことができました。

「おはようございます彩輝さん。気分の方は私の意見が一切通らな

かったことに目を瞑れば概ね良好です」

「それは重畳」

私の微細な毒を含ませた挨拶も気にすることなく淡々と返してくる。

そつだ。今日の晩御飯は激辛カレーとキムチ丼のご飯抜きにしまし
よう。

「本当に調子の悪いところは無いの？」

「はい。システムには何の問題もありません」

その点は流石と評するしかありません。

お互いが全く関知しない技術をたった一晩の突貫作業で成功させて
しまうのですから。

「よし。何の異常もないなら帰ろうぜ。早く寝たい」

本当に眠そうに欠伸をする彩輝さん。ハカセも超も心なしか眠そう
に見えます。

この三人仮眠もとらずに一晩中研究してたんでしょうか。

「流石に私も疲れたアル。今日はこれで解散にしようカ」

「茶々丸。何か異常が出たらすぐに連絡するんだよ」

「はい」

「それじゃおやすみ。また明日」

早朝に眠る前の挨拶をするなんて下手をすれば駄目人間の集まりです。なんてこれっぽっちも思ってもせんよ。

「行くか。茶々丸」

「……あ」

彩？さんが私の手を握って歩き出す。

温かい。人の手はこんなにも温かいものだったんですね。

「ん？ どうした？」

「いえ。何でもありません」

勝手に話が進んで行った時は不安でしたが。成程。確かにこの身体は悪くない。

「ところで研究室に泊まったのなら昨日のマスターの食事などはどうされたんですか？」

「……エヴァももう六百歳だろ。子供じゃないんだから食べるものが無かったらコンビニとかに買いに行く……よね？」

段々声が小さくなって最後には疑問形にまでなっていました。

「急いじつか」

「急ぎましょう」

そしてどちらともなく足を速めた。

SIDE 彩輝

という訳でヒュプノスとお友達になろうとしている身体に交友関係について説教しながら研究所から自宅まで寄り道せずに直帰した。

要は眠い身体に鞭打って急いで帰っただけ。

「ただいま」

「ただいま帰りました」

扉を開けるとエヴァが待っていた。

なん……だと……！

今は日曜の七時を過ぎたぐらいだぞ。こんな早朝にエヴァが起きて
いるなんて。

異常気象でも起こるんじゃないか？

「貴様ら……今までどこに行っていた」

おっと。目が陰しくなって声がすごく低くなってるぞ。

「俺と茶々丸が一緒に外泊して帰って来たんだからそこは察しよ
ぜ。な？」

「な？ つじやないわああああ！ 貴様！ 何を人の従者に手
出してるんだ！！」

「落ち着いてくださいマスター」

俺に詰め寄ろうとするエヴァを茶々丸が羽交い絞めにする。

そんな茶々丸をジト目で睨むエヴァ。

「……茶々丸」

「はい？ どうしました？」

「まさか一晩でこんなに肌艶が良くなりましたとアピールしている
のか！？ ええい！ 巻いてやるっ！！」

「マスター私はガイノイド、ああああい、いけません…そんなに巻
かれてはあああああ」

えつと、カメラカメラ。俺も後で巻いてみたいな。まあ今はカメラ
を回すことに専念しよう。

「はあ…はあ……」

真っ赤な顔で息を切らしているエヴァと茶々丸。

何か美少女と美少女の禁断っぽい感じで、とてもいいです！

「まあぶつちやけると、俺と超と葉加瀬で一晩かけて茶々丸を改造してただけなんだけど」

「紛らわしい言い方をするなああああああ！」

『断罪の剣』を振りまわしてくるが、魔力で構成された剣なんて魔眼を使っている俺に当たるはずがない。

「ん？ どうしたのかな？ そんなにムキになって。ナニを想像したのかお兄さんに言ってみなさい」

「う、うるさい！ 大体お兄さんって私の十分の一も生きてないだろっが」

「そういうさり気ない話題転換は好きだよ。ほら、悪の大魔法使いさんはさっきの会話でナニを考えてしまったのか正直に言っちゃえよ」

「う……う、うにゃああああああ」

あ、壊れた。羞恥的な意味で。

「茶々丸、録画録画」

「愚問です彩輝さん。こんな愛おしいマスターを一片たりとも見逃すはずがありません」

断言された。最近のAIは凄いな。たった一晩でこんなにも進歩するよ。

「ふあゝ。流石にそろそろ限界だな。ちょっと寝てくるから後は任せた」

「おやすみなさい彩輝さん」

声をかけてくれるが、視線はエヴァを捕えたままだ。

「うん。おやすみ」

自室へと向かいそのままベッドに倒れ込む。

その後は意識が混濁してきてヒュプノスさんと楽しく対談しました。

第十六話：ヘドツペルゲンガーに会う、ただしババ抜き♪ みたいなの！（後書き

茶々丸って、こんなキャラだったけ？

第十七話：隠蔽が面倒。故に巻き込む

この学園に来てから早二ヶ月。

現在は六月下旬で気候もすっかり夏のものに変わった。

原作開始までは約半年。夏休みまでは後一ヶ月。早く長期休暇になんねえかなあ。と考える今日この頃。

昼は暑いが夜は比較的涼しい。時計の短針が十を指し、デジタル時計だと二十二時を示す今はすごしやすい快適な気温だ。

そんな星々が輝く空の下、俺は人気の無い通りで二人の抱き合っている男女と向き合っている。

抱き合ってる男女と言っても恋人のような間柄で『リア充爆発しろ！』と無意味な殺気をバラまかせる関係ではない。

ましてや『今から風紀乱そうぜー』何て本気で俺に曲絃糸を披露させようとするバカップルでもない。

寧ろ目の前の二人組は今日、この場所、この瞬間が初対面だからだ。

何故断言できるか？

詳しく言つと抱き合っているという表現は正しくない。男の方が女を背後から抱き締めてる。左腕で首を絞め、右手でナイフを突き付けながら人質を取る感じで。

背後から抱き締めるって表現も正しくねえよ！　なんて思った君、
そういうプレイかもしれないだろ。俺は人の趣味にケチつける真似
はしませんよ。

ならバカップルじゃねえかって？　そっちの可能性は即否定できる
んだ。

だって女性の方は俺のクラスメイト、長谷川千雨ことちうちやんで、
男の方は俺が追っかけてる不法侵入者なんですもん。ちなみにこの
男、既にスタボロの不審者だし。

「何でもいいから早く助ける！」

ちうちちゃんからはこんな救難信号も届いている。

「待って待って。今状況説明っていう現実逃避が終わったから。次
は回想という現実逃避に走ります」

では、回想スタート。

三十分前、ログハウス。

「彩輝さん。学園長からお電話です」

「ん。わかった」

茶々丸から受話器を受け取りジジイから用件を手短に聞く。

「忙しいから用件は三十字以内にまとめて簡潔に答えよ」

「今日の当直が急用で来れなくなったので代わりに警備をやってくれ」

三十字ジャストだと……！ 本当にまとめやがった。

一音ずつ数えたら完全にアウトだけど。

「さっき忙しいって言ったのが聞こえなかったか？」

「フオツ！？ ちゃんと三十字にまとめたじゃろ」

それとこれとは話が別だろ。常識的に考えて。常考。JK。

「他を当たれ他を」

「それがもう既に学園に侵入している者が居てのう。それも強引に結界に穴を開けて」

いや、そいつバカだろ。潜入の二文字を知らないのか？

「そういう奴は何を仕出かすかわからんから速やかに対処して欲しいんじゃ」

「タカミチは？」

「生憎出張中じゃ」

一応は学園最強（俺、エヴァ、ジジイ除く）の居ない間を見計らっ

てきたのか。バカという評価は変わらんが。

「はあ。しゃあない。当たり前だが次の俺の当直の日、来れなくなつた奴にやらせるよ」

「引き受けてくれるんじゃない？」

「はいはい。殺害許可をくれるなら可及的速やかに解決してみせましょっ」

「殺しは無しじゃ」

チツ。つまらん。四肢奪つて学園長室にでも放り込むか。

電話を切つて必要最低限の準備に取り掛かる。

「茶々丸。学園の地図持つて来てくれる？」

「はい。わかりました」

茶々丸が持つて来た地図を机の上に広げる。

俺は『倉庫』から細いチェーンの付いた三角錐の石を取り出す。

「それはただの石……ですか？」

「正解。何の変哲もない道端に落ちてた石を三角錐にカットしただけ」

別に高価な宝石だとか曰く付きの魔導具なんかじゃない。俺が五分

も掛からずに作ったヤツだ。

それを地図の上に垂らし、魔力を流す。

「『聞け、聡き石よ。汝はその聡さが故に敵の目的を知る。されば、その目的を示せ』」

風は無く、俺が手を動かしている訳でもないのに先端の石がひとりでに動き出す。

俗に言うダウジングと呼ばれる失せ物探しの魔術。今回はそこに石占いも混ざってる。

そして石が指し示す場所は

「図書館島か」

「あそこにある魔導書が狙いということでしょうか」

「まあそういうことになるな」

図書館島ってアルが居なかったっけ？ 放っておいてもいい気がしてきたが、万が一残ってる生徒がいたら確実に巻き込まれるから、俺が動くしかないんだろうな。

さて、それじゃあ侵入者の現在地は……。

石が再び緩やかに動き出す。

止まった位置は森。しかし、ゆっくりとだが図書館島に向かって真

っ直ぐに動いている。地図上だから実際のスピードは速いんだろうが。

やっぱこいつバカだ。単独犯で何のフイイントも無しに目的地まで突っ切るとか。でもこういう猪突猛進のバカが一番面倒つてのは同意するな。

「ん〜。じゃあ茶々丸は今日教えた復習に氷化剤を調合しておくこと。呪物は俺の部屋にあるヤツなら何を使ってもいい」

ちゃんと錬金術教えてるからね。茶々丸はすごく優秀な生徒です。来月（別荘使用）には万物融アルカヘスト化剤を教えてもいいと思ってる。

「わかりました」

まあ俺一人で事足りると思うが一応エヴァにも声かけとくか。

「おいエヴァ。仕事だ」

リビングでゲーム中のエヴァに話しかける。『ゼルダの伝説時のオカリナ』とは、また懐かしい物を。

「ハウルだけでどうとでもなるだろ。それに見てわからんのか。私は今ゲームをしてるんだ」

駄目だこのニート。早くなんとかしないと。

「ふっ。まあハウルがどうしても言うなら条件」

「行ってきまーす」

「最後まで聞けえ！」

エヴァの叫びを聞きながら図書館島まで一気に転移。

騒ぎになる前にトロンボーンを吹きながら辺りに人払い、というよりは認識障害の結界を張る。人を近付けないんじゃないかとこの一帯を認識出来ないように。

授業をサボる時とは違い持続性と確実性を持たせるため魔力も使用する。

結界用の曲は吹き終えたので、後は侵入者が来るまで暇つぶしに楽器を変えつつ演奏しよう。

そして十五分ほどして、真正面から堂々とその侵入者さんは現れた。バカだ。楽器弾いてこっちの位置を知らせてやってるのに奇襲もせずに正面から現れるとか。

まあ魔力はそこそこあるな。少なくともノーマル状態の俺よりは。

あー多分コイツはすごく運の良い奴なんだよ。今まで自分よりも強い人間に会ったことが無いんだろう。で、自分の実力を履き違えちゃってこんな無謀な真似が平然とできる。

「この結界を張ったのは君かな？」

「あー、そうですけど」

これで人違いって線は消えたな。確実に裏の関係者だ。

「ふーん。中々の物だったからてつきり凄腕の魔法使いでもいるのかと思ったらこんな子供か」

ヤベエ。ちょっと殺したくなってきた。

「君も中々いい線いつてるけどこんな子供に警備を任せるなんて麻帆良学園も大したことないんだな」

上から目線がそこはかたなくムカツクが、それには同意するよ。タカミチとジジイ以外は数に数えなくていい。

「逃げるなら今のうちだよ。君とボクとじゃ潜って来た修羅場の数が違うからね。君も怪我をしたくはないだろう？」

潜った修羅場の数が圧倒的に違うのはあってるよ。

ていつか前口上が長いんだよコイツ。その癖隙だらけだし。俺が本気だったら二百回は軽く死んでるぞ。

「まあこつちも仕事なんで。さつさとやりましょう」

「運が無いね君は。そうだ。ボクは心が広いから最初の一発くらいは君に譲ってあげるよ」

……呆れて何も言えない。今までバカバカ言ってきたけど、まさかここまでとは。

「じゃあお言葉に甘えて。ものすごく手加減した、虚刀流」
『雛粟』から『沈丁花』まで、打撃技混成接続」

そこから数秒間打撃音のみが場を制する。

うん。この調子なら人間楽器とかやれるんじゃないかな？

なんてことが頭をよぎったので最後の『沈丁花』だけ少し力を込めてみる。

ゴキツ、と鈍い音が響き侵入者はそのまま吹っ飛ばされる。

やっぱり楽器としては不合格だな。サンドバックなら文句無しの場合だが。

「ゴホッゴホッ。お、お前騙して……！」

「いや、アンタが勝手に盛り上がったただけだし。一応言っておくと俺が殺る気ならさっきの混成接続で二百七十二回は死んでるんで骨折程度で済んで良かったですね」

殺気を放ちつつ極上の笑みを浮かべる。

「ヒ、ヒイイイ」

折れた体でよくまあ速く走れるな。じゃ適当に追い詰めてジジイに引き渡すか。

そして俺が侵入者に追いついたところで冒頭に繋がるという訳です。

「ていうかちうちゃんはこんな時間に何してるんだよ」

「喉が渴いたからちよつと近くのコンビニまで買いに出かけただけだ。なのに途中で『God knows』とか『JOINT』とか『SKILL』を弾いてる馬鹿がいて気になったんだよ！」

ふむ。つまりアレか。俺が悪いと。そういうわけか。

ちゃんと結界張ってたんだけどなあ。本来なら聞こえないはずだし、こんな近くまで来れないはずなんだが。

まあいいや。細かいことは後で考えよう。

「うるせえっ！ クソ、クソッ！ 何で……何でこんなガキにこのボクが」

「強すぎてすみません（笑）」

「畜生畜生畜生ッ！！ 『魔法の射手 連弾・光の37矢』」

おお。思ったたよりも威力がある。当たってやるわけないけど。

光の弾がコンクリを破砕するという不可思議な光景を見てちうちゃんが固まってるぜ。……事後処理って俺の仕事か？

「クソッ！ 当たれえ！！」

「お前ちよつと黙ってる。こっちは労働意欲を引き留めるのに大変

なんだよ」

『何でもいいから早く助ける』とちうちちゃんの目が訴えてるし。

「じゃあちうちちゃん。今助けるから泥船に乗った気持ちで安心してくれ」

「出来ねえよ！」

「えー。欲張りだなあ。なら俺もちよつとやる気出すから豪華客船に」

「タイタニックとかくだらねえオチ言っていないでさっさと助ける」

「《助け舟を出す、ただしブラックパール号》かつ《溺れる者は藁をも掴む、ただしわら俵建築》にして《俺この戦いが終わったら結婚するんだ、ただし相手は部屋のポスター》み・た・い・なー！」

「オイ！ こっちは命がかかってんだよ！ ふざけてる場合か！」

「こんな状況でふざけられるか。俺はただ純粹にこの状況を、楽しんでるんだ！」

「一遍死んでこい！！」

目がマジだ。

もうそろそろ仕込みは十分かな。

「おい侵入者。『その娘を放せ』」

あっさりと左腕を放しちうちゃんを解放する。

「「え？」」

一番驚いているのは本人だろうな。

「『動くな』」

さらに身動きを封じる。

そして解放され近寄って来たちうちゃんはまず一番に、俺をグーで殴った。

「ぐふっ！」

「テメエ！ 助けれるならさっさと助ける！ つーか何だよさっきの光の弾。何でこんなファンタジ-なイベントに私が巻き込まれなきゃいけないんだ」

「それはこっちが聞いてえよ。一応この辺り一帯人が近寄れないようにしてるんだぜ。どんな裏技使ったんだよ」

「私はただ普通に歩いて来ただけだ。……はあ。女子中に通う男子生徒って立場を除けばお前は割と普通な奴だと思ってたのに」

ちうちゃんってすごいぜ。初めて俺を普通扱いしてくれた。

基本的に非常識の代名詞で通ってる俺を。

「なんだ？　ちうちゃんの周りには異常な奴でもいるのか？」

「周りじゃなくてこの学園自体が異常に見えるんだ。『麻帆良だから』ここにいる連中はこの一言で片づけられるけどさっきの超常現象とありえないだろ。不審者はお前の言うこと素直に聞き入れるし」

あ、たった今思い出した。うっかり失念してたぜ。ちうちゃんって認識障害とかが効き辛いんだったか。

「まあ、俺の言うことを聞いたのは、俺が『音使い』だからで。ほら、ヒーリングミュージックとか聞いたことあるだろ？　要はそれの究極版。」

この技術は童話にもあって結構有名なんだが」

「童話にそんな話しあったか？」

「あるぞ。『カチカチ山』とってだな、あれに登場するウサギは音使いなんだ。ちうちゃんも一度は思ったことがあるだろ。自分の背負ってる荷物が燃えてたらもつと早く気付くだろって。アレは火打ち石を打つ音でタヌキの感覚を狂わせたからなんだ。その後も薬と称された芥子を傷口に塗ったり、泥船で沖に漁に出たが、ウサギを疑うことはしなかった。なぜなら、既にタヌキは『疑う』という選択をウサギに奪われ、正常な判断が出来ないようにされていたからだ」

「それ、そーいう話じゃねえから！」

個人的には自分の伴侶の肉を喰わされた老人の心理描写をもっと入れて欲しい。ところで、食人鬼と聞いて白純先輩を連想するのは俺だけじゃないですよね？

「まあ、積もる話もあるし、明日の放課後俺の家来れる？」

「とりあえず、今日の出来事を説明してくれるんならそれでいい」

「もう遅いし女子寮まで送ってこようか？」

「……いや、悠長に話してるけどアイツどうするんだよ」

そう言っただけでちうちちゃんが侵入者を指さす。

やっべ。完全に思考の外だった。

「アイツは既に死んでいる。キャラ的な意味で」

携帯を取り出し、朱織に電話をかけよう。

T r r r r x 5 回

「もしもし朱織？ 図書館島前に自殺志願者が一人居るから好きに
していいぞ」

返答は聞かずに電話を切る。これで後処理は完璧だね。

この後何事も無くちうちちゃんを寮まで送り届け、俺も我が家へと帰
った。

翌日の早朝、巡回中の魔法先生が森で四肢がもがれ、胸と腹に風穴
が開き、頭がトマト的に潰されている身元不明の男性の変死体を発

見したらしい。

犯人は未だ見つかっておらず、遺留品から魔法関係者であることが判明したので公表はせず内々に処理したとか。

いやー。怖い世の中になったねえ。

第十七話：隠蔽が面倒。故に巻き込む（後書き）

ところで学園の中心って世界樹でいいんですかね？

第十八話：ヘドライブスルー実践、ただし轢き逃げ《みたいなの！

出席日数をちゃんと計算しながら今日もほとんどの授業をサボった放課後。

「自宅まで呼んどいて悪いんだけど、ホントに聞く？」

俺が問いかけるのは机に向かい合って座っている長谷川千雨。

「はあ？ なんだよ今更」

「いやさあ。……ま、いつか。とりあえず話すわ。それから先はちうちゃんが自分で決めてくれ」

普通ってこっちに関わるのに覚悟とか聞いたりするのかねえ。

まあ関わらないと決めれば記憶消して認識障害がちゃんと効くようにすればいいか。

「お茶をお入れしました」

「うん。ありがとう茶々丸」

「では私は夕食の買い出しに行ってきます。長谷川さんもごゆっくり」

「いつてら〜」

その光景をちうちゃんは『何で同棲してんだよ』と言っている。主

に目が。

「さて、それじゃあ本題に入ろうか。質問はある？」

「……昨日のアイツが出したあの光は何なんだ？」

「魔法つてヤツだ」

「……………はあ」

おや、意外。もっと大きなリアクションを予想していたのに。現実主義のちうちゃんなら尚更。

「せめて『な、なんだつてー』ぐらいは言っただけ欲しかった」

「私だって昨日の夜からずっと考えてたんだよ。あんな非現実的なことが説明出来る方法を。そういう可能性も結局今まで捨てられなかったんでな」

非現実な結果は非現実な過程でしか生まれないうって感じか。

頭ごなしに否定するんじゃなく発想が柔軟でいいね。ここの教師にも見習わせたい。

「だけど肝心なのはここからでな。ちうちゃんは今日授業中俺が教室から出る姿を見たかい？」

「席が私の後ろなんだから見えるわけないだろ」

「残念ながら教室の前のドアから堂々と出た」

つてことは、俺の『魔力未使用』で音を用いた認識阻害はちゃんと効いてる訳だ。

「話は変わるが昨日の夜あれだけ騒いだのに野次馬が一人も来なかつたろ。コンクリを砕く音だつて相当なモノだったのに」

「確かに。あ、いや、そういうば人を近寄れなくしたとか言つてなかつたか？ ……あれ？ なら何で私は」

「そしてまた話は変わつてこの学園には昨日の事件のような傷跡が不思議に思われないう学園全体に強力な認識阻害の結果が張られています。」

これが学園の一般常識とちうちちゃんの常識に致命的な差を生んでいる訳だね」

それを聞いてちうちちゃんからどんどん冷や汗が。

「ちよ、ちよつと待て。つまり何か？ 私にはその認識阻害が効かなくて、それが原因で昨日の事件に巻き込まれたつてことか？」

「これが寝る前に五分で考えた推論。ちなみに教室から俺が出る姿を見てないのは俺が魔力、つまりMPを消費してないから。そしてこの学園でMPを消費せずにそんな奇怪な真似が出来るのは俺しか居ない」

「オイオイオイオイ。つてことは運が悪けりやまたあんなことに巻き込まれるつてことか！？」

どうだろうな。俺は認識阻害の方が好きだからそつちを使つたけど、

「この教員生徒共はセオリー通りに人払いの方を選ぶだろうし。」

「ここで面倒なのがこれがちうちゃんの体質ってことだ。この先成長して抗力が落ちるかもしれないし、逆に上がるかもしれない。」

「認識障害も人払いも根っこの部分は同じだしなあ。」

「さて、それじゃどうする？ 道は二つ。一つ、巻き込まれても自分の身を守る程度に強くなる。二つ、全てを忘れて平穩に暮らす。この場合認識障害が効くようにしておこう。」

「体質？ 心身掌握こそが俺の真骨頂ですよっと。」

「一応聞いておくけど、このまま現状維持だとどうなるんだ？」

「昨日みたいに人質に取られたら」

「無傷では済まんだらうな」

「エヴァ帰宅。」

「実にタイミングよく俺のセリフを繋いでくれる。」

「珍しいな。お前が他人の面倒を見るなんて」

「昨日ので巻き込んだじゃってね。アレは完全に俺の落ち度だから。一応仕事には誇りを持って挑んでるんで、ここの連中と同じ様に定石通りに記憶消してさようならってというのは嫌いなんだよ」

「お、おい！ 記憶を消すってどういうことだよ！？」

「言った通り。何でも魔法使いと現代社会が平和裡に共存するためには必要なことなんだと。ところで死人に口無しって言葉知ってる？」

愕然とするちうちちゃん。これって要は、一般人は命の危険に脅かされても知ったこっちゃないってことだろ。

周りに拳銃隠し持つてる奴がごろごろ居るのに、その存在を知らされず何の対抗策も持つなって言われてるようにしか聞こえない。

魔法使いには安全でも一般人には危険すぎるよな。

「そんなの一つ目を選ぶに決まってるだろ」

まあ、自分の記憶が適当に改竄されたモノだと思いたくないな。

「しかしながら更に問題があつてだな。これからちうちちゃんが師事するであろう俺とここに居るエヴァンジェリンは過度な表現一切無しで人殺しを含めヤバイ事をたくさんして来たんだよ」

清々しいほどに問題だらけだ。素行を改める気は皆無だけど。

「ちうちちゃんから見れば非現実なファンタジーな世界かもしれないが、関わるなら悲しいほどに切実な命がかかった現実になる」

「昔さ。何かで読んだんだが、記憶ってその人の根幹を形成するするものだろ。記憶だって命と同じくらい大切なものだと思うんだ」

「つまり？」

「どっちを選んだって私という存在が脅かされるなら、私は自分の身は自分で守りたい。だから、私に魔法を教えてください」

……ヤベー。『だが断る！』とか本気で言いたくなつた。割とシリアスだから空気読むけど。

「Welcome to nightmare」

なるべく空気読んだ発言。でもすぐに後悔。

「ク、クク…アハハハハ！ 『ようこそ夜の世界へ』とか。似合わない過ぎだろ。アハハハハハ」

「うるせえ！ 黙れロリババア」

あー言わなきゃよかったぜ。まるで中二病みたいじゃないか。

精神年齢はとつくに三十過ぎてるのに中二病はキツイ。

「まあとにかく、ちうちゃんは帰宅部だったな。放課後は毎日ここに寄ること。『論理魔術』を教えてあげよう」

どうせ在学中に殺し合いなんて殺伐とした展開にはならないだろうし。

「またマイナーなモノを。というか普通にパクティオーした方が早いんじゃないか？」

パクティオーねえ。他人と強固な縁をなるべく作りたくはないんだ

が。

「何だ？ そのパクティオーってのは？」

「契約だな。契約した者にしか使えない専用アイテムみたいなのが出て、楽しんでパワーアップ出来る」

「お。そんなのがあるんなら私と契約してくれよ」

「え？ マジで？ ちなみに契約方法で主流なのはキスだ」

「……………は」

固まるちうちちゃん。

「寧ろハウル。私とパクティオーしないか？」

便乗するエヴァ。お前は最初からこれが狙いだっただんころうが。

「どっちが主？」

「勿論私だ」

そう言うと思った。だがしかし。

「残念。俺は本契約してるから誰かの主になれても、従者にはなれないんだよ」

「なっ！ だ、誰とだ！ まさかナギと」

「馬鹿言つな。アレは俺やエヴァ、ましてやナギよりもずっと高位の存在だ」

アレ呼ばわりで心苦しいが名前は一番短い呪だからな。アレも俺の名は呼ばないし、俺も呼ぶ気は全くない。

「で、どうする？ 俺の従者になる？」

「いや、いい」

どんだけ主って立場に拘ってんだよ。

(正攻法で無理ならもう強引に吸血鬼化して私の眷属にするか。ハウル自身もほとんど人間やめてるし大丈夫だろ)

俺の人並み優れた聴力が不穏な呟きを捉えた。エヴァが血を吸わせるとか言ってきたときは警戒しよう。

「ちつちゃんはどつする？」

「……………やる(ボソツ)」

「え？ 何？」

いや、十分聞こえてるんだけどね(笑)。

「あー、やるよ。キス一つで命の危険を格段に下げれるんなら安すぎる買い物だろ」

と軽い感じで仰ってますが顔は真っ赤だぜ。かーわい。

「ちょっと待ってね」

仮契約用の魔法陣を書く。と思ったけど面倒だから糸でパパッと作製。

陣の中に入って自然と見つめ合う形になる。

エヴァは若いなーとかいいながらニヤニヤ見てるし。

「ところで今更なんだが、ちうちゃんってメガネ外した方が可愛くね？」

メガネを取り上げる。

「あ、お、おい」

と意表を衝いて口を口で塞いでみました。

「んー！」

逃がさないよう抱きしめる感じで手を頭と背中に回す。そして舌を入れてみた。

「ふく……んっ……あ、んんっ」

漏れる吐息。

どれくらいそうしていただろうか。

長い時間が経過して漸くちうちちゃんを解放した。

「茶々丸。ちゃんと撮れたか？」

「はい。バッチリです、マスター」

いつの間にかエヴァの隣には茶々丸が。ホントいつ帰って来たんだ。

「これがちうちちゃん専用アイテム。アーティファクトって言うんだけどね。はい」

俺からパクティオカードを受け取ったちうちちゃんはキッ！っと俺を睨む。

「おい。舌は入れなきゃ駄目なのか？」

「いや、必要無いけど」

「じゃあ何で舌入れたんだよ！」

なんか懐かしい。俺にもこんな時期があったなあ。

「気分？」

「ふざけんなあああー!!」

「いやいや、ふざけてない。メガネ取った方が可愛いつていうのは俺の本心」

「ぐっ。う。う。うるさいー!!」

可愛いなあ。可愛いねえ。可愛いですよ。

この後、エヴァの別荘に入ってちうちゃんのアーティファクトを確認したところ、予想通りというかネット関連の物が出た。

勿論戦闘に使えるはずが無い。

というわけでさっそく今日から魔法の勉強に勤しむ長谷川千雨さんでした。

第十九話：夏休み突入（前書き）

論理魔術について詳しく知りたい方は、

出版：角川スニーカー文庫、著：土屋つかさ、『放課後の魔術師』
をお近くの書店にてご購入ください。

……一体どこの回し者だよ。

第十九話：夏休み突入

ついに待ちにも待った夏休みが始まった。

最近は茶々丸もちうちちゃんも4フィロソファス||7程度の腕になったのでホムンクルスの作り方でも教えようと思っっている。

錬金術とホムンクルスは切っても切れない関係だし、ちうちちゃんに教えている『論理魔術』には《人形ドール》という存在がある。

ちうちちゃんに戦闘スタイルの話をしたら『誰が殴り合いなんてするか！』とのことなので一般的な魔法使いタイプに決定。

第一、論理魔術ってというのがまたチートなんだよ。

基本的に論理魔術で出来ることは唯一つ。万物に宿る魔力を操作して概念を変更すること。小遣い稼ぎに概念武装をばら撒いたあの頃が懐かしい。

そして小さな作業を組み合わせていくことで大規模な魔術も行使するってわけだ。その方向性が現代プログラミングとかなり似ている。

中学生にして独学でハッキング技術を有しているちうちちゃんにこれ以上ピツタリな魔法もないだろう。

俺だってちゃんと考えて教えているんですよ。

そんなわけで《人形》を作る技術はすでに十分なので、基礎の部分だけでも教えよう。

行き詰まったら十中八九本職エヴァに丸投げの形になるんだろうけど。

「というわけで今からホムンクルス作るけど、異論は無いな？」

「まあ、無いけどさあ」

別荘に移動して製作開始。

今回作るのは、活動出来るようにはするが、自我は与えない。単に器そのものを作る感じだな。

なのでスタンダードな方法に俺が少し手を加えたものを採用。

二人になるべく丁寧に製造法を教えていった。

別荘の中で一日が経過。

ホント別荘ってチートだよな。あ、そうそう。今更だが、別荘内でちうちゃんや刹那には成長を遅らせる魔法具を渡して外とのズレが無いようにしている。本当に今更だが刹那の修業は別荘内でやります。

「これでホムンクルスの完成だ」

「……一つ聞いていいか？」

ちうちゃんからの質問。

「何だい？」

「なんで見た目が同年代ぐらいの女の子なんだよ！」

今ベッドの上で横たわっているのは身長は150cm程の女の子。腰の辺りまである白く真っ直ぐな髪に、陶器のように滑らかな白い肌。

「ちゃんと目的があるんだよ。別に試験管の中でしか生きられない生物をここまで人間に似せて作れる俺って凄いだろ、とかは全然微塵も考えてないから」

「結局はお前の自慢かよ！」

なら全世界の師匠は弟子に自慢しかしてないことになるぞ。

「まあ、今日はこれで解散。茶々丸、悪いんだけどその娘に服を着せておいてくれないか？」

「わかりました」

さて、大体予想は出来ると思うがさよちゃんの身体です。

別荘を出て自宅からも出たが、さよちゃんてどこにいるんだよ。まあ、学校とその周辺を虱潰しに……リーディング占いすればいいだけじゃないか。

とりあえず学校に行ってさよちゃんの席とか縁のある物の近くでやろう。

まだ昼だし急ぐ必要も無いので、口笛を吹きながら悠々と学校に向けて歩いて行く。

そして校舎に入ろうとしたところで、「兄様！」と木乃香に後ろから捕まえられた。

振り向いて姿を確認すると振袖姿の木乃香がいた。

「何で振袖？」

「兄様やって着流しに羽織やないか」

「これは俺の普段着なの」

「へえ〜。あ、そやさや。ウチ、今追われとるんよ。兄様助けて」
追われてるって割には緊迫感ねーな。刹那も見えないし。まあ、助けるけど。

「誰に追われてるんだ？」

「ウチに見合いさせようとするおじいちゃんの部下の人たち」

オーケー。把握した。

「最近は全く無かったんやけど。夏休み入ってからまた急にし始めてな〜」

大方俺が来たばかりだからバレないようにしていたんだろう。後であの耳たぶ細切れにしに行こう。

「木乃香は見合いしたいの？」

「したないえ。ウチまだ子供やし、まだそんなん早いわー」

後であの後頭部潰しに行こう。

「とりあえず校舎の中に隠れとくか。ジジイには俺から言うておくから、今後一切そんな話は無くなるだろう」

次があればその日はジジイの命日だ。

で、校舎の中に移動しようとしたら、「いたぞ！ 木乃香お嬢様だ！」見つかってしまった。穩便に済まそうと思っただが。

黒服でサングラスかけた連中がまるでGのようにわらわらと。

「に、兄様、どないしよ」

「仕方ない。俺が引き留めておくから女子寮に逃げ込んでけ」

構成員が男だけってのは不便だねえ。

それにあそこなら中学生とは思えないスペックを持った人たちが助けてくれるだろう。

「うん。わかったえ」

振袖姿のまま寮に向かって駆けて行く。

さて、これからジジイとちょっとお話しなといけないから、こいつらにはさっさとお引き取り願おう。

「よう。ウチの妹に何か用か？」

「彩輝様！？　こちらに木乃香お嬢様が来ませんでしたか？」

「さあね。ってか、いい歳して女子中学生追っかけて……ロリコンかお前ら？」

「違います！　私たちだってもっとちゃんとした仕事がありますよー！」

そりゃあ不満はあるわな。

「じゃあ雇い主の方には俺がきっちり話をつけておくから、もう今日は帰ってくれない？」

「いえ、それでも今は仕事ですから」

わー、すごい仕事熱心な人たちだあ。好感が持てるねえ。もしくは。

「……やっぱりロリコン？」

「違いますー！」

「まあ、でも、今日は『帰れ』」

目からハイライトが消えダークカラーの瞳のまま、しかし、足取りは確かに立ち去って行く黒服たち。

っと、危ない危ない。

さっき話していた男から無線機を奪い、こいつの声を魔法で作る。

「あー、あー」

うん。大体こんなもんだろ。

そして無線で、日程が延びたため追いかけてもよいと学園長から連絡があった、と嘘八百を並べ立てる。

流石にアレで全員ってわけでもないだろうしな。

さてと、ジジイの始末はいつでも出来るとして……いや、よく考えると同じ校舎内に二人とも居るはずなんだから順番に会えばいいだけか。

まずさよちゃんに会つとジジイと話す間待つてもらつことになるから、やはりジジイの方から片付けるか。

校舎に入り、学園長室を目指す。

「おい。ジジイ」

「む。何じゃ彩輝。夏休みにお主が訪ねて来るとは」

「なに。嫌がつてる木乃香を強引に見合いやらせようとしてるんだって?」

「あ、いや……それはのう……」

ドスツ、と机にナイフを深々と突き刺す。

「木乃香が嫌だつて言っただ。次そんな真似したら愉快な後頭部を人並みに整形してやるよ。ああ、安心してくれ。金は取らないから」

「ワシ、命を取られそうなんじゃが……わ、わかったぞい。だから殺気を抑えてくれ！」

何故だろう。一応血の繋がった家族であるはずのジジイを躊躇い無く殺せる気がする。実行はしないけど。

自分でも身内の定義が曖昧であることは自覚している。

「ところでじゃ、彩輝」

「何だ？ ああ、後で一つ頼み事するかも」

「……ともかく、お主は木乃香に魔法の存在を教えぬのか？」

「一応親の方針には従っておくさ。どうせ遅かれ早かれ知ることになるんだろうし」

ま、その時関わるか関わらないかは木乃香が決めればいい。俺はその決断を全力でサポートするだけだ。しかし、だからこそ。

「前以て言っておくが、手前の都合で強引に巻き込んだりしたら、ただじゃ済まさねえ」

「孫を政治の道具にするほど落ちぶれてはおらんわ」

今まで見たことが無いほどの真剣な眼差しで俺の問いに答えるジジイ。でも、どうせ後半半年もしたら秘匿の二文字を知らないガキと同居させる気なんだろう？

だからお前は血の繋がった家族だが、俺の身内じゃねーんだよ。

他に話は無いようなので学園長室を出て、次は2 - Aの教室を目指す。

教室を覗くと案の定さよちゃんはいたのだが、何あれ。ペン回し？もっ指でペンを回すとかそんな領域に居ないんだけど。大会とかで軽く優勝出来るんじゃないかね。

「おーい。さよちゃん」

「わっ！ いつから居たんですか」

「今さっきだけど。これから俺の家に来れる？」

「え？ でも私、自縛霊なんで学校の周辺にしか出歩けませんよ」

足はありませんけど、と笑いながら言うが、反応に困るのでそういうネタは勘弁して下さい。

「まあ、俺に憑いてくれれば大丈夫だとは思っよ」

簡単に乗っ取られるほど軟な精神はしてないんで。

そしてさよちゃんと一緒に自宅へ向かう。

「お邪魔します」

「ゆっくり寛いでいてね」

さよちゃんを自宅に招き入れる。

「えっと、可愛いですね」

その発言は辺りに散乱しているぬいぐるみを見て言ってるんだろうが、誤解して無いかな？

「念のために言っておくけど、俺の趣味じゃないからね。居候の趣味だからね」

「え!?!」

やはり勘違いを。俺の趣味なら楽器と酒瓶だらけになるって。

他に要らぬ誤解を生まないうちにさっさと別荘に連れて行く。

地下室に入り、ボトルシップの前に立つ。

「ところで、何で私を呼んでくれたんですか?」

「ちょっと見せたいものがあって」

術式が展開し別荘内へ。

「な、なんですかここーッ！」

相変わらず初見の反応は面白いな。

軽く別荘の説明をしながら、ホームクルスの置いてある部屋に向かう。

「で、これなんだけどね」

「……え？ これって……」

ベッドに横たわっている自分とそっくりなモノを見て驚くさよちゃん。

ちなみに服装は白が基調のメイド服。さよちゃんの白髪と素肌と相まって、グツジョブ茶々丸。

「まあ、余計なお節介だけど、もう一回学校に通ったりしてみない？」

「出来るん、ですか？ そんなこと」

「出来るよ。学校からここまで俺に憑いてきたのと同じことをすればいい。それは中身空っぽだし、さっき作ったばかりで変な癖とかもついてないから、すぐに馴染むと思う」

「彩輝さん、ありがとうございますっ！」

さっそくイレモノの中に入るさよちゃん。その瞬間、物言わぬ器だったモノが心音を奏で、呼吸を始める。

そして目を開いて起き上がり、手を握ったり広げたり、感覚を確かめるように身体を動かす。

「不調はある？」

「すごいです！　まるで本当に生きてるみたいで」

その発言は切なくなるので出来る限り控えて下さい。　お願いします。

さて、後はジジイに色々と用意させればいいだけか。

とりあえず、別荘内で一日経つまでは連絡できないので、まだ中に残ってた茶々丸とちうちゃんに紹介したりして過ごした。

流石にクラスメイトに幽霊がいると知ったら驚いてたな。

そして、別荘で一日が経ち、外で一時間が経過したので、ジジイに連絡を取ると自分でも拍子抜けするほどあっさり承認された。曲がりも何もここって教育機関なんだなあと再認識した瞬間だった。

第十九話：夏休み突入（後書き）

この作品って完全に作者の趣味を露呈してますね。

第二十話：経験値稼ぎに行こう（前書き）

最近テンプレの意味を見失ってききましたが、あらすじをちゃんと考えた方が良いでしょうか？

そして、今回でストックが尽きます。投稿が不定期になると思いますが最低でも週に一話は投稿するのでご容赦ください。

第二十話：経験値稼ぎに行こう

夏休みに入って二日目。

「なあ刹那。宿題って捗ってる？」

「いえ。まだ二日目ですし」

「そうか。なら今から宿題全部持って俺の家に来てくれ。この夏休みは存分に修業に使うと思うから」

「は、はい！」

修業と聞いて若干目の色が変わったな。

「しかし、この修業が後にあんな大事件に発展するなんてこの時の俺たちは予想だにしていなかった」

フラグを立ててみた。

「え？ 何か事件が起こるんですか？」

「さあ？ ノリで言ってみただけ」

「ノリで意味深なことを言わないで下さい」

わかったわかった。以後気を付けよう。

その後寮から宿題を持って来た刹那と自宅へ行き、議論するまでも

なく別荘に入る。

外の時間の一日で全ての宿題を終わらせてやるぜ。

「どう？ そっちの方は進んでる？」

話しかけるのは、昨日の夜更けに宿題やるから別荘貸せ、と言ってきたちうちちゃん。

「ああ。やっと全教科の問題集が終わった。パソコンに去年書いた読書感想文のファイルが残ってるはずだから取ってくるわ」

「何で長谷川さんが？」

「ん？ 桜咲も関係者だったのか」

ああ。そういえばこの二人会ったこと無かったんだっただか。

ちうちちゃんが来るのは平日の放課後で刹那が来るのは休日だからな。

お互いに軽く関わった経緯を話したりして、ちうちちゃんは作文を取りに寮に戻り、刹那も宿題をし始める。

さて、俺も自分の宿題を片付けるとするか。別荘があれば自由研究も楽でいいわ。プラナリアを切り刻んで約一ヶ月分のデータを取っても外じゃまだ一日しか経っていないとか。

「さよちゃん。悪いけど今度は刹那を手伝ってあげてくれるかな」

「あ、はい。わかりました」

さよちゃんってすごいんだぜ。伊達に六十年も中学生してるわけじゃない。

最近は教科書自体が簡単になってますからねえ、と何だか複雑な気分になることを平然と言ってくれる。

知ってるか？ 今じゃ『大化の改新』のことを『乙巳いっしの変』って教えてるんだぜ。これを知った時はかなり吃驚した。

まあ、回答欄には大化の改新と俺は書いているが。

そして、そんなこんなで外で一日が経つ頃には全ての宿題が終了していた。

「よし。じゃあ全員の宿題が終わったので、ヴェネツィアに行こうと思います」

『は？』

この場に居るエヴァ、茶々丸、刹那、ちうちちゃん、さよちゃんが何言ってるんだコイツ的な目で見てくる。朱織も居るには居るが、寝てるな。

「行くなって何でそんな突然。それにパスポートなんて持ってないぞ」
代表してちうちちゃんが当然の疑問を聞いてくる。

「理由は二つ。仕事と修行。パスポートの心配はしなくていいよ。どうせ不法入国だから」

「オイ」

一般の警察なんてちょっと思考操作してやれば簡単に撒けるんだよ。

「いや、行きたくない人は行かなくてもいいんだよ」

六十年と十五年学園から出たことが無い二人とその従者に加え、無料で海外旅行を楽しめるチャンスを棒に振る人なんていないだろ。

「私は木乃香お嬢様の護衛が」

「龍宮には俺から金を渡しておこう」

妹の為なら金に糸目をつけない俺。貰った報酬分はきっちり働く龍宮。素晴らしい市場が展開されているな。

「じゃあ、一時間後出発ってことで必要最低限の準備してきてね」

早速、刹那とちうちちゃんが寮に戻って行った。

「おい、ハウル。何でまたヴェネツィアなんだ？」

「茶々丸は覚えてる？ ステアのこと」

「はい。呪物調達会社 アトラス の取締役社長の方ですよね」

「そう。約束してね、長期休暇になったら仕事手伝わって。ヴェネ

ツイアには アトラス の本社があるのさ」

俺が居ない間の修業プランを考えるのが面倒になったからもう皆巻き込んでしまおう、といった考えがあったり無かったり。

「……何で社長と知り合いなんだ」

「請負人時代に色々あったんだよ。現社長も当時は子供で、継いだのは最近らしい」

魔術結社とかは能力よりも血筋とかを重視する方が多いから二十代前半の娘が継ぐのも不思議なことではない。まあ、それでも最近はずいぶん珍しい方だが。

そう考えると俺も関西呪術協会を継がされそうな気がするが、断固拒否する。

「世界中に友達がいるなんてすごいです。私海外旅行って初めてですよ」

さよちゃんはそうだろうね。六十年前っていうと戦後、いや、まだ戦争中か。あの独特な空気の中他国に遊びに行くって普通は無理だ。

裏切り者みたいな感じで国を追われたり、無所属で活動しない限り。……こうして思い返すと中々波乱万丈な人生だなあ。

その後、龍宮に木乃香の護衛を依頼するため前金として三百ほど支払ったり、刹那たちが戻ってくるまで取りとめの無い会話を楽しんだ。

そして一時間後。

さて、刹那とちうちゃんの荷物を『倉庫』に入れて、朱織も起床したところで行くとしますか。

「《道よ開け》」

俺の右手から白い光の泡が溢れ、泡は円盤　魔法陣を形作る。魔法陣は人が通れる程度の大きさだ。

これが噂の論理魔術というヤツです。中でもこれは《門^{ゲート}》と呼ばれる二つの空間を結び付ける魔術。ま、要するに瞬間移動だな。

普通の転移魔法との決定的な違いは、移動できる距離が術者の力量に左右されないこと。

結び付けるのに距離という概念は無く、術者が二人いれば入り口と出口を分担し世界中どこにでも、否、異世界にだって小さな労力で簡単に行ける。一人の場合も今回の俺のように『印』を付けておいて、そこを出口にすればいい。

兎も角、俺も含めた七名は《門》を潜り　アトラス　本社のあるヴェネツィアへ向かった。

「お久々」

勝手知ったる他人の家とばかりに堂々と上がり込む。

普段通りについて来てるのはエヴァと朱織ぐらいのものだ。他のメンバーはすっかり委縮してしまっている。

「あ、彩識さん！」

俺を見て駆け寄ってくるのは、三十歳前後の男。

「お。アンゴスチエラじゃん。元気だった？」

「ええ。おかげさまで。いやー、社長が直に会ったと言っていました。が、こうして面と向かって話す機会があるとは思ってませんでした」

「お前は俺の死亡説信じちゃってたわけ？」

まさか、と言わんばかりに大げさなリアクションをする。

「彩識さんが死ぬよりもアトランティスが浮上する方がまだ現実味がありますよ」

それは流石に大袈裟過ぎるだろ。

「クトウルフ的に浮上させようか？」

「……勘弁して下さい。彩識さんが言うのと冗談に聞こえないんで、楽しく談笑しようかと思っただが、後ろの面々が置いてきぼりをくらってるし、室内を見渡すと知らない顔が四割程度。十五年の歳月を感じるな。」

「あの、部長。そちらの方々は？」

アングスチエラに俺よりも少し年上の女性が話しかける。だが、今はそれよりも。

「へえ〜。部長ねえ。あのパシリ同然だったアングスチエラ君が」

「ええ。出世したでしょ」

「あはは。ぶちよー、ぶちよー」

「からかわないで下さい。それで、こちらは零崎彩識さん。紛れもないご本人だよ」

それを聞いて呆然とする女の子。普通こついうネタばらして修学旅行の騒ぎが終わった後に言うんじゃないの？

こつちの面子はエヴァ、茶々丸が通常通り。朱織は若干ダレてきた。刹那は驚愕、ちうさよはキョトンと首を傾げてる。

「『共鳴流転』や『最果て』と呼ばれている零崎彩識さん？」

どうやら再起動が終わったらしい女の子が確認のためにアングスチエラに聞き返してる。

「その零崎彩識」

肯定の返事をするアングスチエラ。

そこから女の子の行動は速かった。自分のデスクらしき所まで戻り、色紙とサインペンを持って（何故常備しているし）、俺の目の前ま

で来る。この間わずか三秒。

「わ、私はミラベルと言います。既存の魔法に中庸の思想を取り入れた新しい魔法体系の論文には感銘を受けました！ サ、ササ、サインして下さい！」

「うん。いいよ」

色紙とサインペンを受け取り名前と作曲？1『邂逅』のサビの部分の譜を書く。ジャック辺りだと自画像とか描いたりするんだろっな。

「はい」

書き終わった色紙を手渡す。

「ありがとうございます！ これ家宝にして一生飾っておきます！」
テンション高いな。二十グラム程朱織にわけてやってくれ。

「なあ、彩輝。実はお前ってすごい有名人だったりするの？」

この光景を見てちうちゃんが質問してくるが、俺が答えるよりも先になぜかミラベルが答えた。

「知らないんですか！？ 大戦の英雄『紅き翼』は少年少女の憧れの的ですよ！ 中でも零崎彩識と云えば僅か十歳にして独創的な論文を世に多く出し、それに影響を受けていない魔法使いは居ないと言われるほどです！」

へえ、そーなのか！。一番肝心な所を適当にぼかした論文がそこ

までの評価を得るなんて、英雄効果万歳！

「まあ、刹那は色々と聞きたいことがあるだろう。後でちゃんと詳しく説明してあげるから」

今にも身を乗り出し出てきそうな刹那に予め釘を刺しておく。幼馴染の失踪先が戦争中の魔法世界だった。簡潔にまとめてみたけど意味不明だな。

「彩識さん。後ろの娘たちは？ 彼女ですか？」

アングステラが上手くいけばからかおうと若干ニヤついた表情で聞いてくる。が、軽くスルー！

「妹、弟子、友達、居候だ。この夏休み期間は手伝ってやるから、仕事寄せ」

「手伝ってくれるんですか！？ では早速こちらへ。ほらミラベル、そちらの方々にお茶をお出しして」

「あ、すみません。すぐに淹れてきます」

他のメンバーはソファに座らされ、ミラベルは給湯室へと入って行く。

俺とアングステラはそれとは別の仕事部屋へ。

「仕事は旧世界のみですか？」

「いや、弟子の経験値稼ぎも兼ねてるから魔法世界の方が都合がい

いな」

「助かります。ゲートポートの連中次にゲートを開くのは来月だとか言いやがって、その間仕事が増えるところでした」

運良いな。そして渡された山のような物資を全部『倉庫』の中に入れて、物資のリストを貰う。

「十六年前よりも生活必需品の割合が増えてないか？」

「そりゃあ、彩識さんのように呪物のみを大量に買う人なんて皆無ですよ。今の魔法使いは本腰入れて研究しようとする人が居ないですから。ま、その分ウチが市場を独占してる形になってるわけですが」

正義語って脆弱な力を振りかざす自己満足な輩がそれだけ増えたってことか。良いことなのか悪いことなのか。

最後に、これから巡回する町村を記した地図を受け取って準備完了。向かう先は主にヘラス帝国の辺境あたり。

そして、最初にいた部屋に戻り、刹那たちと合流。思っていたよりも寛いでるな。

「クエスト受注してきたから、そろそろ向かうぞ」

「はい。わかりました」と、全員から了承の言葉が返ってくる。

ミラベルや十六年前の既知の間柄の人や今日知り合った人たちに挨拶をし、俺はヘラスへと《門》を繋げた。

そついや、テオとも久しく会ってないが元気だろうか。

第二一話：またぞろけむたりい（前書き）

次話から学園を書こうとして詰め込んだ結果がこれだよ！

サブタイは巫女子ちゃんネタすら思いつかなかった。

第二一話：またぞろけむたりい

《門》を潜った俺たちは無事にヘラス帝国に到着した。

まずは俺の身の上話でもするため喫茶店に入ろうかとした矢先、ちうちゃんが、

「オイ。何であそこの人角が生えてるんだよ。あっちじゃイルカが二足歩行で歩いてるし。どこだよこじ」

ちうちゃんに限らず他の面々も同じ心境だろう。エヴァはどちらかというと呆れていて、朱織は……言うまでもないよな。

「ああ。ここは少し位相をずらしたかせ……まあ、平たく言うと魔法世界、異世界だな」

おっと危ない。まだ原作始まっていないのに、このネタばらしは早すぎる。

「異世界ですか!?!」

「異世界かよ。……ハア。最早何でもありだな」

対照的な反応を見せるちうちゃんよ。刹那と茶々丸は単独でこっちの世界に転移出来たことに驚いているようだ。

「そうでもないさ。いつだって、どこでだって、人は平等に不平等で、人生は喜劇と悲劇に溢れてる」

この世の心理だよな。ちうちゃんも、ふうん、なるほどね。と目の前に広がる街並みを眺め、得心いったように頷く。

「要はここも現実と同じ様にくだらねーしがらみや厄介な面倒事が広がってるだけか。異なる世界だなんて名前負けだな」

流星は学園の認識障害にも侵されなかったリアリスト。顔に張り付けたシニカルな笑みが堂に入ってる。

「で、二十年前、面倒事の極致である戦争を終わらせたのが俺たち『紅き翼』なんだよ」

「……………え？」

理解が追いついていないちうちゃんとさよちゃん。

「そうです彩輝様！ あの失踪は事件に巻き込まれて偶々同じ境遇だった朱織さんと」

「ああ。それ、半分くらい嘘なんだわ」

昔騙った戯言を確認するように繰り返す刹那の言葉を遮る。

「じゃあこっちの四人に軽く説明した後仕事するから、エヴァと朱織は自由行動で」

「む？ いいのか？」

「逆に聞くが、仕事手伝う気ある？」

「無い」

即答ですか。

「二人一緒に行動して、なるべく派手な騒ぎを起こさないなら好きにしてくれ」

この二人、お互いにストッパー役が必要だろ。十五年ぶりに本気を出せるエヴァ。普段が普段だけに忘れがちだが、純粋な殺人鬼としての地力なら俺より上の朱織。

……これ大丈夫か？ 相乗効果を生みそうで心配になってきたぞ。

ま、いつか。どうせ次に来るのは来年の夏だ。

「とりあえず、三万程入ってるから昼食はご自由に」

敢えてバリバリサイフに入れて渡す。その際ちうちゃんが口を開きかけたが、自重したようで結局何も言わなかった。

「なら好きにさせてもらうが、どこで落ち合うんだ？ ある程度場所を決めておいた方がいいだろ」

「それは大丈夫。朱織の居る所なら勘でなんとなくわかるから」

ああ、そうだったな。とエヴァ。おそらく十五年前のリアル鬼ごっこを思い出したんだろう。

でも、共振作用に頼って搜索すると世界規模なので軽く一週間は掛かるかも。なので仮契約のパスを辿ることにする。

「朱織」

「わかってますよお。慎ましく殺ればいいんでしょう」

お前の慎ましいという感覚がどの程度のものなのか疑問ではあるが、目立たなければそれでいいか。

そしてエヴァと朱織はどこへともなく去って行った。

「じゃ、その辺の喫茶店に入ろうか」

去らなかった面々も移動を始める。

いつまでも同じ場所に突っ立っててもしょうがないしな。

「　　というわけだ」

喫茶店に入って数十分。

こここの通貨を持っているのが俺だけなので必然的に俺の奢りになるんだが、刹那なんか恐縮しつぱなしで何も頼まないし、他の三人も遠慮して紅茶やコーヒー以外頼まない。俺は俺でアルコール分を注文したら未成年だと断られ、当てつけに何も注文していない。

そんな中過ぎ去った数十分。そろそろ店員の無表情の笑顔（器用だなあ）という圧力が秒刻みで強くなってきたころ、俺は語り終えた。

流石に今回ばかりは戯言抜きで、ついでに物語上ネタばれ要素を含む物も抜いて、理解出来ないだろうから零崎一賊については軽く触りだけで、俺の身にあった出来事は粗方語り終えたのだった。

『……………』

当然ながら誰も何も喋らない。

息苦しい静寂だ。重苦しい沈黙だ。この壁一枚の外で反響している喧騒を少しは分けてくれ。

むう。やはりここは適当に誤魔化しておいて修学旅行で語ればよかったかな。でも、その時はその時で煩わしいのがたくさんいるし。

茶々丸はまだエヴァの従者でもあり、俺のことを少し知っていたからいいが、刹那は経験不足でちうちゃんはこの間まで普通の女子中学生だったし。あ、さよちゃんも知っているんだったな。戦争つてやつを。親しい人に二度と会えないあの感覚を。

やつぱ、まだ早かったかな。せめて夏休み最終日ぐらいに言うんだったかも。まあ、例によって後悔も反省もしていないが。

「ま、これが最後通牒ってことで。引くならこの夏休みが最後の機会だ。俺を護衛するなんて無意味極まりないし、夏休みが終わるころには自分の身ぐらい守れるようになってるだろう。さよちゃんももう独りっでわけじゃないんだしさ」

それでも、どうせ冬には俺よりも、もっと厄介で面倒な、もう疫病神の領域じゃね？　ってぐらいの奴が来るんだが。でも、精神衛生上はそっちの方がマシかな。

「殺人鬼と一緒にいれば」

「彩輝様は！」

「つたく、何だよ刹那。もう店員が無表情の笑顔から怒りの笑顔に変わってるんだよ。あまり大声出さないでくれ。」

「彩輝様は鬼なんかじゃありません」

「いや、個人的にその辺の議論は割とどうでもいいんだ。人だろ？が鬼だろうが神の遣いだろ？が、俺が俺であることには変わらないし」

音楽家に曲絃師に請負人に剣士に刀に西洋魔術師に陰陽師にルーン遣いに錬金術師に論理魔術師に神職に学生にe t c。

「ジョブチェンジするのが仕事のような俺にそういうアイデンティティはあまり意味を成さない。」

「いいのかなあ。俺みたいのが家長or賊長やって。否決多数で降ろされたら凹むよ。マジ泣きしてやる。と言っても三秒もすればぶっ切るだろうが。まあ、十中八九そんなことに拘る子は居ないか。」

漢和九台。あ、間違えた。閑話休題。

折角ちょっとシリアスっぽい話なんだからもつと真面目にやるっぜ、俺。

「大体さあ」

と今度はちうちちゃんが口を開く。

「お前は私を助けて、その後も自衛できるように鍛えてくれる。なのに借りを一つも返さずにさよならなんて出来るわけないだろ」

「私は人殺しなんて許容できません。でも、幽霊である私にもう一度学校に通わせてくれた彩輝さんはいい人だと思います」

流石2-A。まともな人間がない。

「はあ。予言してやる。近い将来、関わったことを絶対後悔するぜ」

「《乗りかかった船、ただし奴隷船》みたいなの！ ってヤツか？」

む。巫女子ちゃんのネタがパクられた。最初にパクったのは俺だけだ。

なんかもう全員引く気は無いようなので、店を出てさっさと仕事しよう。

その際、『いつまで居座ってんだよ。お客様は神様だとか言ってる子に乗ってんじゃないぞ』と店員に極上の笑顔で見送られた。

さて、それでは漸く仕事をしましょう。

と思ったが、まずはアリアドネーにある アトラス 支社に向かった。夏休み中はここに泊めてもらう。

「ほら、ちうちちゃん。どっか適当に『印』を付けておけよ。別行動になる機会多いと思うから」

「わかったよ」

渡したナイフで壁に傷を付けるちうちちゃん。人の会社の壁を傷つけて大丈夫なのか？ 大丈夫だと思うよ。壁の傷なんて気にならないぐらいの働きをすればいいだけだ。

「《道よ開け》」

ちうちちゃんの目の前と壁の前に《門》が出来る。

「よし。繋がった」

それじゃあ、今度こそ仕事をしよう。

次は俺がヘラス帝国辺境地へ《門》を開いた。

そして村に到着し、すぐさま村長と商談。

「態々こんな辺境の村に来ていただいてありがとうございます。確かに注文した品は全て揃っています。こちらが代金です」
確

「どうも。ところで最近変わったことは無いですかね？」

「変わったことと仰いますと？」

「魔獣の活動が活発になって村に被害が出たとか」

「ああ。最近森が騒がしいんです。まだ村に被害は出ていませんが、何分腕の立つ者は皆働きに出てしまっていて確認しようにも」

うん、ちょうどいい。まず手始めにこれからやるつか。

「ここまで来たついでです。ちょっと見てきますよ。低級の魔獣ならそのまま退治しておきましょう」

「おお。何から何まで本当にありがとうございます」

商談に使った部屋を去り、外で待つ刹那たちのもとへ行く。

「というわけだ。刹那、茶々丸、ちうちゃん。ちょっとそっちの森に行って魔獣倒して来い」

「どういうわけでそうなった!」

「大丈夫。さつき糸で軽く探ってみたけど、体長三十メートルぐらいの大蛇が一匹いるだけだから」

「それ大丈夫じゃねえ! 絶対人とか丸呑みに出来るよな!」

「逃げちゃダメとは言っていないだろ。危なくなったら逃げていいから。それに、ちうちゃん《人形》作るってどうすればいいかわからないだろ? こういう時は自然の中で進化した生物を参考にすればいいんだ」

「まあ、確かに。そういう話は科学の中でもよく聞くな」

うん。水を弾くスーツ作るのに蓮の葉の構造を真似たとか、最近の注射針は蚊の口のようにギザギザになってるとかは有名だよな。

「ぶつちやけ『REBORN!』の匣兵器とかな」

「……ぶつちやけちゃったよ」

ちうちちゃんの《人形》が完成したら手軽に持ち運びできるよう匣だけ作ってあげよう。『倉庫』の四次元の理論でなんとかなるだろ。

「ああ。後、牙とか角とか鱗とか高く売れる場合があるから剥ぎ取っておいて損はないぞ」

今度はモ　ハンかよ。とちうちちゃんは小さく呟く。

あのゲーム、本当に魔法世界のこういう生活を参考に作られてたら笑えるな。

ちうちちゃんが旅に出る前に預かったバッグを返せと言ってきたので『倉庫』から取り出す。

「さて、さよちゃん。俺たちはそろそろ行くか」

「えっ!?　私も一緒に行っていていいんですか?」

「そりゃそうだろう。さよちゃんは戦闘スキルも移動スキルも持っていないんだから。貰った物資が何日分の仕事かは知らないが全て今日中に終わらせる。Time×Time=Girlだ」

「Time is moneyだと思います」

「『時をかける少女』って時間だけじゃなく重力も結構無視してるよね」

最後はどうでもいい雑談をしながら《門》を潜った。

SIDE刹那

本当に行ってしまった。

最後の方の会話は最早仕事のことでも何でも無くなっていたし。

おかしい。ほんの数時間前までかなり深刻な話をしていたはずなのに。

彩輝様の過去は壮絶を通り越して凄惨だった。

まだ私が剣の基礎を習っているときに、戦場に飛ばされ命の取り合いをするなんて。

彩輝様は強すぎたんだと思う。強すぎて何でも出来た。だからこそ、逃げなかったんだろう。

でも、六歳の子供が戦場なんて過酷な環境に耐えられるはずがない。殺し合いなんて辛くないはずがない。

人の身が苦しいなら鬼になれば楽になれる。

そして漸く逃げたんだろう。ただ、逃げるのは遅すぎて、手遅れだ

った。

それでも、生まれながらにしてこんな醜いものを背負っている私よりは幾分人だ。

私のこの羽を見ても彩輝様は受け入れてくれるだろうか。

「ところでさ。私たちに三十メートルの大蛇なんて倒せるのか？」

危うく思考が負の連鎖に入りかけたところに声をかけてくれたのは長谷川さんだった。

「実物を見てみないことには何とも」

「じゃあ、行く前にRPGよろしく、手持ちの確認でもするか」

そういえば、彩輝様は長谷川さんにどんな魔法を教えたんだろう。別荘内で茶々丸さんには錬金術を教えていたし、普通の魔法を教えているとは考えにくい。というか考えられない。

「手持ちと言っても、私はこの夕凧と呪符を数枚しか」

「私は氷化剤を五本、人工精霊と万物融化剤を二本です」

「ホントにこれで倒せんのかよ」

「そう言う千雨さんは？」

「あー。期待に沿えず悪いが私はそういう武器や触媒は持ってないんだよ」

「え？ でもさっき彩輝様からバッグを受け取ってたじゃないですか」

てつきりその中に愛用の道具が何かを入れてると思ってたのに。

「中身はノートとボールペン、カッター、彫刻刀が数本ずつだ」

……それ、文房具じゃないですか。そんなのを受け取っても。

「勘違いするなよ。私の魔法は応用は利くが、直接的な戦闘は向いてないんだよ」

ああ。さっきも人形がどうこう言ってたし、長谷川さんは前衛を従者に任せた典型的な魔法使いタイプなのか。

ということは、私が前衛で長谷川さんが後衛。茶々丸さんが長谷川さんを守りつつ私のサポートといった感じか。

「なあ。もういつそ帰らないか？」

突然そんなことを言いだす長谷川さん。

「しかし千雨さん。結局困るのはこの村の方々ですし、倒せなくても手傷を負わせて追い払うぐらいのことはしないといけないかと」

そんな長谷川さんを茶々丸さんが諫めるように言い返す。

既に彩輝様が依頼を請けてますし、このまま何もせず帰るのは私も反対ですね。

「はあ。エヴァンジェリンと朱織は絶対この旅行満喫してるな」

「確かにマスターたちは満喫してるでしょうが……」

私たちとは違って竜種の上位種がそれより上の魔獣と戦ってる気がします。

某盗賊団アジト

話題に上がったので、そのころのエヴァと朱織の会話を少し傍受すると、

「キャハハハ！ 零崎始めっ！」

『斬魔の弦』 『散魔の弦』 『響魔の弦』

「もう最後の一人ですか。お金？ 宝石？ ああ、命乞いね。キャハハ。私は貴方の命を奪えれば十分です」

「……どこから突っ込んでいいのかわからない」

「慎ましやかに私の用事は済んだんでえ、次はエヴァさんの行きたい所にどうぞお」

「え？ 何これ、こわい。というか皆殺しに慎ましさなんて無いだろ」

「慎ましいですよ。何のためにダルいのを我慢してこんな山奥に

まで来たと思ってるんですかあ。有名な盗賊団のようですよしい、これで数ヶ月は発見されません」

といったことが展開されていた。細かく描写するとR - 18指定になるのでここでは割愛させていただきます。

あれから私たちは、長谷川さんの魔法を一度見せてもらい、森の中にいる大蛇を探している。

はつきり言って不安ではある。今まで戦ってきたのは警備の際の妖怪ぐらい。妖怪は例え強くても龍宮が作った隙について致命傷を与えられれば、それであちらに還る。

龍宮とは長い付き合いだし連携も取れるが、この二人と組むのは初めてだ。それになにより、彩輝様から未だに一本も取れていない。

いや、そんなことを言っては長谷川さんはこの間まで一般人で茶々丸さんも聞いた話だとまだ二歳らしい。二人とも実践らしい実践はこれが初めての筈。

なら少しでも経験の多い私が不安になっでどうする。

「見つけました。この先三〇〇メートルです」

「意外と早く見つかったな。最悪この森中駆け回らなきゃいけないのかと思ってたんだが」

駆け回ると言っても瞬動術を駆使してだが。長谷川さんが瞬動を当

たり前のように使ったときは驚いたが、あの反則極まりない別荘で一ヶ月も彩輝様から教わったら出来て当然かと思わず納得してしまった。

長谷川さん曰く、逃げる手段は多いに越したことはない。だそうだ。

「私はサーモカメラを搭載しています。三十メートルもある大蛇を見つけるのは造作ありません」

サーモカメラって確か温度の差を見るカメラですよ。それなら生物を見つけてるのは簡単でしょうが、茶々丸さんも大概何でもありだなあ。

「しかし、蛇も同じ様に匂いや温度を探れますから、私たちの行動も筒抜けと考えた方が良いのでは？」

普通の蛇ならそうなんでしょうが、魔獣にも適応されるのだろうか？ どちらにしてもそういう前提で動いておいて損はないだろうが。

「それは私に任せろ。《環境制御 設定属性 気圧：光：レヴェル段階 4 即時発動》」

長谷川さんの手から光の泡（だろうか？）が溢れだし、それが円盤状になって私たちの身体を通過する。

「これで周囲の風向きとか光の屈折率とかを適当に変えたからバレはしないだろ」

予想通りというか何というか。やはり普通の西洋魔法とは全く別の魔法だった。

その後森の木の枝を足場に地面をのたうつ蛇を見下ろしているのだが、見るからに硬そうだ。

「おい、桜咲。アレ、斬れるのか？」

長谷川さんに尋ねられる。

「あの鱗一枚一枚が微力な障壁を展開していて、全体的に強固な障壁になっていますね」

茶々丸さんが補足してくれる。

「斬れないこともないと思いますが、鱗を数枚ずつ削っていくしかなさそうです」

あのサイズの普通の蛇なら間違いなく一刀両断出来る自信はあるが、障壁を展開していると。一撃では難しいな。

「あ。茶々丸さんの万物融化剤はどうなんです？」

「量がフラスコ二本分ですし、大した効果は望めないかと。それに万物融化剤と言っても、彩輝さんの蒸留水なら私のは泥水。精々硫酸よりもよく融ける程度です」

絶対比較対象を間違っていると思う。硫酸よりもよく融けるってそれは十分に危険です。

「そうか。なら、やっぱセオリー通りにやるか。茶々丸、氷化剤用意。桜咲はいつでも斬りかかれるように準備しといてくれ」

そう言って長谷川さんはバッグからノートを取り出し、一枚ページを破る。

破ったページを半分に、さらにもう半分に破る。その作業を繰り返し、お椀のようにした手には紙切れがたくさん。

一体それで何を？

「《速攻術式インスタント 切れ端は小鳥に》」

長谷川さんの手から出た円環が紙切れを通過する。途端に紙切れは小鳥に変化した。

「行け」

そして、その小鳥が長谷川さんの一言で大蛇に纏わりつく。

「《速攻術式 小鳥は揮発油に》」

次に小鳥は液体に変わった。長谷川さんの言う通りなら揮発油に。

「《火球 段階 最大：目標 指定適正：照準 自動》」

長谷川さんの掌にはサッカーボール程の火の塊が。やっぱり爆発させますよね。

既に茶々丸さんはフラスコを五本準備している。私も夕凧を鞘から抜きいつでも斬りかかれるよう待機する。

「ふう……」

あつ。返り血のこと全く考えてなかった。うう……気持ち悪い。

しかし、長谷川さんの魔法、本人は直接的な戦闘は向いていないと言っていたが、事前に罠を張っていればあれは十分強い。そこに人形というものが加わるのだから未恐ろしいな。

私も負けないように精進しなければ。

「桜咲ッ！」

「桜咲さん！」

「ッ！！」

全て終わったと思いついて完全に気が緩んでしまっていた。

この大蛇、胴を輪切りにされているのにまだ動けるのか。

しかも 速い！

魔獣の生命力を甘く見たいだ。致命傷を与えればあちらに還る妖怪とは違うのに。

すぐさま体勢を立て直し、反撃に備える。

「神鳴流奥義『斬岩』」

「JQWZYAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

なっ！

咆哮に驚き、身体が一瞬硬直してしまう。しかし、構わずそのまま奥義を出したが、嫌な感触が手に残っただけで逆に私が撥ね飛ばされる。

次に来るであろう木の幹か地面への衝突に備えるが、予想に反して襲ってきたのは包み込むような柔らかい感触だった。

「え？」

後ろを振り返ると、これは……クラゲ？

あ！ 茶々丸さんの人工精霊！

疑問が解けると追撃が来ないうちに木の枝に登り、長谷川さんたちのもとに向かう。

「ありがとうございます、茶々丸さん。助かりました」

「いえ、礼には及びません」

「おい、その刀」

長谷川さんに言われ夕風を見ると、

「……あ」

夕風には刀身の真ん中辺りで罅が入っていた。

あんな無様な気の流し方で強引に奥義を続行したのだから当然のことと言える。

なんて未熟。

「ま、最悪の中の最良ってことにしようぜ。桜咲は怪我無いみたいだし、刀なら彩輝が直すなり予備の一本ぐらい持ってるだろ。あの蛇も放っておいたら出血多量で死ぬだろうし」

その通りなのだろう。結果だけ見れば刀に罅が入っただけ。しかし、これは長からお嬢様をお守りするために託された刀。それを自分の不甲斐無さで駄目にしてしまうなんて。

「しかし千雨さん」

「ん？」

「あの蛇、止まりませんよ」

「え？」

それとほぼ同時に私たちが立っている木が揺れた。

「うわっ」

咄嗟に木にしがみつく。どうやら大蛇が木に体当たりをしたようだ。巨体故か胴体が半分無いかからか木には登れないらしい。

「何だよ！ 胴体バツサリ斬られてるんだから無駄な努力するな

よ！ 換気扇の油汚れだつてここまでしつこくないだろ！」

この夕凧で後一撃入れれるだろうか。

「《速攻術式 カッターを刀に》」

長谷川さんが手に取ったカッターナイフが刀に変わる。

「《概念付与 対象 刀：設定属性 不変：切断 即時発動》」

刀を別の円環が通り抜ける。

「ほら、桜咲。即席で悪いが一撃耐えられるかわからないよりはマシだろ」

「ありがとうございます」

長谷川さんに夕凧を預け、数瞬前までカッターだった刀を受け取る。

「茶々丸さん、万物融化剤をお願いします」

「わかりました」

「なら、私が一瞬気を逸らすわ」

なんだか、この二人には最初から最後まで甘えっぱなしだな。

「よし。《速攻術式 爆発^{ボム}》！」

大蛇の横の地面が爆ぜる。その衝撃でさっきの私のように大蛇は動

きを止める。

「『封印術式七番、開封。キーワード 第五元素の夢は全てを溶かせ』」

茶々丸さんの万物融化解剤が大蛇の頭の鱗を融かす。

お嬢様をお守りすると決めて、彩輝様からも剣を教わったのに、これ以上無様を晒すわけにはいかない。

「神鳴流奥義『斬岩剣』！」

限界まで気を練り込んだ『斬岩剣』で大蛇の頭を抵抗なく一刀両断する。

今度こそ確実に大蛇は沈黙した。

その後、村長に魔獣は退治したと報告し、長谷川さんの転移魔法で会社まで戻った。

SIDE 彩輝

思ったよりも早く配り終えて、支社でのんびり寛いでいた頃。

「へえ〜。じゃあさよちゃんは私よりも年上になるのか」

「といつてもずっと中学生やってましたけどね」

「あ〜でも永遠の中学生って感じじゃん。ねえ、ハウル。若返りの

薬とかつて無いの？」

「ねえよ。自分の刻でも止めたらどうだ。不老になれるらしいぞ」「さよちゃんとステアがすっかり仲良くなった。

「あ、そうそう。刻で思い出したけど、空間と時間を操る殺人鬼兄妹がいるって信憑性絶無の風の噂で聞いたけど、ハウルのところじゃないの？」

「残念ながら家賊とのエンカウント率が皆無で確かめようもないんだわ。ていうか何でウチだと？」

「そんなチート能力の癖に信憑性が全くないと言ったら零崎一賊ぐらいでしょ。」

知ってる人にはそういう判断の仕方されてるんだ。知ってる人って言っても世界中でほんの一握りだろうが。

でもまあ、その噂は多分ウチだと思うよ。二番目に遭った弟が異常なまでに結界作りが上手かったから。

名前は幕識。異名は勢いで『ハッピーエンドオブザワールド理想自我』とか付けた記憶がある。

ああ、早く家賊に遭いたいなあ。

と、そんなことを思っていた矢先、部屋のドアが開いた。

自然、視線はそちらの方に向かい

「刹那ッ！」

血塗れの刹那がそこにいた。

「あ、いえ、これは返り血で」

何だよ返り血かよ。よく見ると確かに外傷は無い。後ろのちうちゃん、茶々丸も同様に。

刹那に近付いて、両手を両肩に置き、極々自然な流れで、

「紛らわしいわ！」

と、某寺子屋の半人半獣ばりの頭突きを喰らわした。

「あう……すみません」

「確認するが、怪我は無いんだな？」

「はい。でも、夕凧が……」

そう言つて、夕凧を抜く刹那。その時俺は反射的に動こうとする足に待ったを掛けていた。虚刀流の癖で目の前で刀抜かれると押し折りそうになるんだよね。

なんてふざけてる場合じゃなさそうだ。

抜かれた夕凧を見ると罅が入っている。

夕凧を受け取り、見て、視て、観る。成程成程。

「大方切羽詰まって斬線を見ずに奥義でも出したんだろ」

「……はい」

「説教は後々するとして、とりあえず一言だけ言っておく。刀なんて所詮消耗品だ。あまり気負うなよ」

「しかし」

「だからグダグダ考えるな。お前なりにけじめは付けたんだろ。次に同じ轍を踏まなきゃいいんだよ」

第一こうして無傷で生きて帰って来たんだから、その時点で何を悔いることがある。

殺人鬼の俺が言うのも何だが生きてりゃオーケー。生きてさえいれば次がある。

「じゃあステア。シャワー貸してもらえる？」

「うん。いいよ」

「すみません。おかりします」

刹那はそのままステアについて行く。

「あの彩輝さん」

「何？ 茶々丸」

「今回の戦闘で手持ちの触媒が尽きたので調合したいのですが」

「ああ。じゃあ折角専門の人が居るんだし、ステアが帰ってきたらそっちに頼んで。俺はこれからエヴァと朱織拾ってくるから」

「それ、品物なんじゃ」

「友人価格で安くしてくれるだろ。それに倒した魔獣の鱗とか肝とかで等価交換してくれんじゃね？」

「そんな大雑把でいいんですか？」

「さあ？」

請負業の代金として呪物を貰ったこともあったし、大丈夫だとは思
うよ。

「ま、ちよつと行ってくるわ」

朱織とのパスを辿って転移を繰り返す。

そして、辿り着いたのはどこかの渓谷。

空一面に結構レベルの高い竜種が跋扈している。どうやらここは竜
の巣のようだ。しかし、一体何をやってたらこうなる。

「アーハッハッハ！！ トカゲ風情が私に盾突こうなど四十六億年
早いわ！」

オーケー。理解した。どつりで騒がしいはずだ。

「『おわるせかい』!」

飛んでる竜全滅。ホント御愁傷様です。

結界張つて広域殲滅魔法から難を逃れている朱織の隣に移動。

「なにあの幼女、こわい」

「どちらかというところシユールな画だと思うが」

高笑いする幼女。その周りで碎け散っていく高位の竜。……怖いと言えは怖いな。

「ん？　なんだ、来てたのかハウル」

「今日の仕事は全部終わって刹那たちも帰ってきたから迎えに来たぞ」

「そうか。相手としては役不足だが、久しぶりに全力でやれて気持ちよかったよ」

「それは重畳」

魔法世界の魔獣たち。これから一ヶ月この吸血鬼に出遭わないことを一応祈つといてやるよ。

そして、二人を連れて アトラス に戻った。

戻って、それじゃあ久しぶりに俺も料理でも作るのかなと本気で腕を揮って、全員からお前料理出来たのかよ的な目で見られ、夕食が終わり楽しく談笑していた時、刹那がこんなことを言ってきた。

「夕凧の修理ってどれくらい掛かりますか？」

あれ？ 俺刀作ったことあったっけ？ 刀って日本の伝統工芸じゃない。魔法世界じゃ滅多にお目にかからないし、勿論製法も知るはずがない。請負人時代は魔法世界と西洋を中心に活動してたから鍛冶場なんて行ったことねえぞ。

悪魔喚んで『鍛錬を開始する』とか言ったら刀作れないかなあ。作れないか。

「おーい、ステア。刀って取り扱ってる？」

「扱ってないわね」

「ですよー」。

アレだ。回帰系の魔法だ。えーっつと……………。

「刹那。仮契約しようか」

「えー！？ 今絶対面倒になって思い出すの止めましたよね」

「俺が何でも知ってると思うなよ」

いや、知ってるけれども、思い出せない。『スターウォーズ』の R

2-D2は出てくるのに金ピカロボットの名前が出てこない感じ。
サブタイの元ネタが出てこないでも可。

「それとも何か？ 俺が主だと不満でもあるのか？」

「不満なんてありませんけど」

「なら、いいじゃないか」

パパッと糸で手早く魔法陣作製。中に向き合うように立つ。

「んっ……」

と、刹那の唇を奪ったわけですが、どうしよう。舌入れようかな。

「あ、C-3POだ」

「え？」

悩んでいたところに天啓のような形で名前を思い出してしまった。
まあ、ディープキスは次回のお楽しみということだ。

「さて、日頃の行いが良ければアーティファクトで刀が出るはずな
んだが」

カードに描かれているのは刀だが実物が見たいので刹那に早く出す
よう催促する。

「アデアット」

出てきたのは切刃造の直刀だ。完成系変体刀の絶刀『鉋』を連想して頂けるとイメージしやすいだろう。それを見て、視て、観て、看と、診ると。

「布都御霊か」

ああ。アレね。神武天皇が東征の際、武御雷神から与えられて、その剣の霊力で軍を毒気から覚醒させて勝利を導いたとか。

ってこれ神剣じゃねーか！

しかしアレだな。見た目も相まって色々試してみたくなるのが人情というものだ。

「刹那ちよつと外出ようぜ」

「え？ はい」

流石に室内でやるわけにはいかないし。

「それをちよつと貸してくれ」

「どつぞ」

布都御霊を地面に置いて、

「通卦法」

「ちよつー！」

「虚刀流、『鏡花水月』！」

久しぶりに通卦法を用い、一の奥義『鏡花水月』を本気も本気で打ち込んだんだが、傷一つ付いて無いぜ。

流石神剣。絶刀『鉋』を神様が真剣に造ったらこんな感じになるんだろうな。

「次は最大出力で『七花八裂（改）』を」

「ちよつとーっ！！」

「何だよ刹那」

「何だよじゃありません！ 何押し折ろうとしてるんですか！」

「だって神剣に永久機関とも呼ばれた頑丈な刀とそっくりなんだぜ。普通押し折るだろ」

「折らないで下さい！」

えー。

「アベアット」

あ、ちよつ。カードに戻されちゃったよ。

「まあ、刀は入手出来たからいいか」

そんな感じで一日目終了。

時間が経つのが早すぎると思う。いつの間にか八月三十日。明後日から学校が始まるので今日麻帆帆良に帰る予定だ。

今回の旅行で一番成長が著しいのは刹那だな。初日の失敗をバネにして物凄く頑張った。特に斬線を見極めるのが上手くなったな。今なら普通の剣＋気の強化無しで岩斬れると思うよ。

茶々丸は周りが呪物だらけなので、俺も試したことの無いような組み合わせをやった。俺には音があるからあまり教えていなかった。幻覚系の触媒とか力入れてたな。

面白そうだったから一回試しに喰らってみたんだが、かなりえげげない。自分が最強だと思ふ相手とのマジバトルだぜ。時宮の『操術』を彷彿させる。ちなみに俺の相手は、哀川さん。

死亡回数が二桁越えたあたりで強引にレジストして逃げました。

ちうちゃんは一度に弄れる概念も多くなつたし、《人形》の構想も固まって来たつてさ。

さよちゃんも俺と道中、『ポルターガイスト騷霊現象』や、『アポルト顕現現象』を出来るようになった。幽霊らしいことが出来たと喜んでたなあ。

エヴァと朱織？ あのコンビは自重を知らず、一回マジで軍が調査に乗り出したことに目を瞑れば特筆すべき点は無い。

俺は結局家賊どころかフェイトパーティとも接触出来ずに終わった

旅行だった。俺って避けられてるの？

朱織は信憑性絶無の風の噂の幕識と時織（名前教えてもらった）に遭遇したらしい。本気で泣きたくなった。

と、まあ、俺だけが燦々たる結果のような気がするが、目的は経験値稼ぎなのでよしとしよう。

「じゃあな、ステア。次来るのは来年の夏ぐらいだと思っ」

「皆お疲れ様。今日本って就職難でしょ？ 卒業したらウチに来なよ。優遇するよ」

考えておきます。と、ほとんどのメンバーはお茶を濁す発言で切り抜けた。

「じゃあね、ハウル」

「おう」

「「縁があったらまた会おう（会いましょう）」」

そして俺たちは《門》を通り、麻帆良学園へと帰って来た。

「この学園も久しぶりな気がするな」

「もう少し外に出ていたかったがな」

とエヴァが言う。

「あの、この学園ってこんな空気でしたっけ？」

とこれはさよちゃん。

「こんな感じじゃない？ エヴァは何か感じるか？」

「大方初めての長期旅行でまだ興奮が抜けて無いんじゃないか？」

「そうですね」

さよちゃんも深く考えず、そんなものと納得した。

「さて、じゃあ今日はこれで解散にしますか。最終日は休むなり遊ぶなり好きに使ってくれ」

刹那、ちうちちゃん、朱織は寮へ。他のメンバーは俺の自宅へ帰って行く。

ああ、そうそう。さよちゃんの寮部屋とか詳しいことをジジイに聞いておかないと。

やはり、仕事の疲れが溜まっていたのか、残りの八月三十日は寝て過ごすことにした。

第二一話：またぞろけむたりい（後書き）

戦闘シーンは『NARUTO』の大蛇丸を連想してしまっただけ気付いたらこうなってた。反省はしている。

千雨の《人形》のモデルにしたい動物がいたら言ってくれると嬉しいです。

作者の頭だと彩輝とエヴァが腕を見せつけるために造ったとかそういう話ばかり思いついて、千雨が造っている姿が想像できない。

第三話：最初は何でも些細な事から（前書き）

皆様のおかげで千雨の《人形》の構想が固まりました。

アイデアをくださった方、本当にありがとうございます。

第二二話：最初は何でも些細な事から

明晰夢。夢だと意識して見る夢を明晰夢という。

今の俺の状態はまさしくそれ。

全く、現実を見据えて堅実に生きている俺が夢を、それも明晰夢を見るなんて。……あまり関係性はないけど。

でも、夢を見るという感覚はすごく久しぶりだ。人間寝ているときは絶対に夢を見ているらしいが、起きた時に覚えてるなんて無理だろ。

俺にとって夢なんて記憶の整理程度の意味合いしかない。そんな俺が明晰夢を見るだなんて、傑作だ。このセリフ久しぶりに言っただ気がする。

しかし、夢ねえ。麻帆良に帰って来た途端これだなんて色々考えちゃうよな。某願いを叶える店の店主ならきつところ言っただろ。

『この世に偶然はない。あるのは必然だけ』

夢の中には夢殿というもう一つの世界がある。夢殿に住むのは神や死せる者と相場が決まっているが俺は渡る術なんて持ってないし、はてさて、俺をここに呼んだのはどこの誰だろうね。

呼ばれたからには誰かに会わなきゃいけないだろう。とりあえず正面に向かって進み続ける。

時間なんて意味があるのかわからないが、体感時間で五分程進み続けたところ、目の前に蹲ってる童女発見。

どことなく幼いころの木乃香と面影が似ているので、この子が今回出会うべくして出会う運命の相手か。……こつこつという表現似合わね！。しかも童女相手にこの言葉は犯罪ストレスな気がするぞ。

「やあ。どうしたの？」

とは言っても対話をしないことには話が進まないの、しゃがみ込んで気軽に話しかける。

【~~~~~ツ！】

声ならぬ声が漏れる。

「どうした？ 苦しいのか？」

【……い。……助……け……て】

今日は八月三十一日。夏休み最終日。夏休みは請け負い業をしよう決めてたし、助けを求められたのだから請負人が動かない道理は無い。

「オーケー。わかったよ。その頼み、確かに請け負った」

【うぬは……】

「おっと、自己紹介がまだだったな。俺の名前は近衛彩輝」

【サイ……キ……】

「そう。ところで」

ぐらり、と意識が揺さぶられる。まずい。目が覚める。おいおい、まだほんの少ししか話してないぞ。もっと働けよ、睡魔！

「絶対助けるから」

咄嗟にそう言っつて、俺の意識は覚醒した。

「彩輝さん、大丈夫ですか？」

目を開けた俺がまず最初に見たのは心配そうに俺の顔を覗き込んでる茶々丸だった。

「ハア……。おはよう、茶々丸。俺ってうなされてた？」

「いえ、死んだように眠っつて、軽く揺さぶっつても全くの無反応でしたので」

結局助けるとは言っつたが、何からかは聞けなかつたな。これで起こしに来たのがエヴァだつたら八つ当たりになぶつ飛ばしてたんだが。

まあ、大体の予想はつくからいいか。見た感じ霊格はかなり上。夢殿まで俺を呼べるとなると浅からぬ縁があり、名前を呼ばれたのでそれも強固なモノに変わった。

見た目が木乃香に似ていたのは、俺の陽中の陰を見たからか、記憶を見たからか。どちらにしても俺の内面を見られている。魔眼を使

ったかのように。

そして、逆説的に見るといふことは見られるといふことだ。

今回はあの娘が積極的に見たというよりも、俺があの娘を見たときに偶々覗いてしまったといった感じだろう。

俺が日常的に魔眼を使って見ている相手となると、かなり限られる。

何より、見る見られるといった関係しかないのにも関わらず、俺が夢殿まで呼ばれたとなると、あの娘は他に縁のある相手が居ないともとれる。

俺の勘だけど、かなり厄介なことになりそうだ。

「どうかしましたか、彩輝さん？」

「ん？ ああ」

時計を見る。針が示す時刻は午前九時。まだ一日は始まったばかりだ。

「朝食の支度なら既に出ていますが」

「ああ。ありがとう。すぐ行くよ」

とりあえず朝食を食べよう。朝の活力だ。

茶々丸とリビングまで移動する。

「ヨウ、ハウル。久シブリジャネエカ」

椅子の上にチャチャゼロが陣取っていた。

「久しぶりだな、チャチャゼロ。神様に忘れられてたんだって？」

「ソナ巫山戯タ神八殺シテヤリタイゼ」

チャチャゼロは上を向き、天井の向こう側、空の向こう側に広がっている天を睨みつける。

「このオールドボトルあげるから今回は見逃してあげてくれないか？」

神様に死なれちゃ困る。

「オ。朝カラ酒力。ハウルガソコマデ言ウナラ水ニ流シテヤロウ」

高かったんだからな、このウイスキー。味わって飲みやがれ。

その後、茶々丸の作った朝食を美味しく頂き、調べものがあるので一杯だけ酒を飲んで家を出た。

まず家を出て最初に向かったのは龍宮神社。

この一ヶ月木乃香の護衛を任せっぱなしだったから、依頼料払いに行かないと。

ついでに神社というだけあってあそこも竜穴だから異変を見つけるには丁度いい。自宅の竜穴は既に俺色に染まってしまうていて間違いない探してみたいのは不向きなんだ。

しかし、流石夏休み最終日。人通りが少ない。きっと今頃学園の六割近い学生は宿題に追われているんだろう。

人が少ないのを良いことに、最低限の認識障害をかけてキセルを吸いながら歩いている。

「ん？」

と、それはそんな時に見つけた。

路地裏へと続く道の前を通りかかった際、影に隠れて蠢いている雑鬼共を発見した。

雑鬼とはその名の通り、取るに足らない雑魚だ。スライムのポジションで一ターン無駄にするのも惜しいと思うような雑魚だ。

別に大切なことじゃないけど何度でも繰り返す、最も程度の低い雑魚妖怪だ。基本無害。やる事と言っても悪戯程度、放置しておいて問題ない雑魚だ。まあ、だからこそ觸みたいに数は多いんだけどな。しかし、それでも妖怪の端くれ。普段は森の奥に居るのに、こんな朝っぱらから表に出てくるなんて。

何だか一気にきな臭くなってきたな。現在進行形で何か起きていると漸く実感してきた。

少し歩を速め龍宮神社に向かう。

「おーい。龍宮ー。金払いに来たぞー」

そして、龍宮神社に到着。

「やあ、彩輝さん。この休みは刹那たちを連れてどこに行っていたんだい？ 知らないと思うけど、エヴァンジェリンが学園から消えてかなりの騒ぎになってたんだよ」

あ。そういや、ジジイに連絡した記憶が無いや。ま、もう過ぎたことだし、忘れよう。

「ちよつと魔法世界まで行ってな。あつちでもそれなりに騒ぎを起こしてきたぜ」

「私も学園で護衛をするよりは、そっちの旅行について行きたかったよ」

退屈とは縁遠い一ヶ月だったからなあ。その気持ちはわかる。来年の夏は嫌でも向こうに行くことになるがな。

「それで、この一ヶ月の間に木乃香は襲われたりしたのか？」

「いや。彼女が襲われることは無かったよ」

「その言い方だと他の人間が襲われたみたいだな」

「その通り。どうも最近、園内に侵入してくる妖怪の数が増えているんだ。学園の結界は万全なだけだね」

万全ねえ……。それは置いて、さっき見かけた雑鬼と関係あるのかね。俺の居ない間に何かが起こって今もその状況の真つただ中ってわけか。

「特に何も起こらなかったし、代金は前金と同じ額でいいよ」

「わかった。後で振り込んでおくわ」

前金と同じということは三百万か。何も起こっていないのにポロ儲けだな。まあ、払うけど。

「あ、そうそう。玉串と神楽鈴あるよな？ 神社なんだから」

「まあ、あるけど。それがどうかしたのかい？」

「使う機会がありそうだから今の内に補充しときたい。という訳で売ってくれ」

「二つセットで二〇〇〇円でいいよ。今取ってくる」

と、龍宮は神社の中へ入って行った。

それにしても二〇〇〇円か。良心価格だな。仕事せずに六百万も貰うのは気が引けているのだろうか。……絶対関係無いな。そんな気がする。

さて、待ってる間に竜穴やら霊脈やら調べておくか。

考えを行動に移そうとした時、俺の耳が人の話し声を捉えた。

「あ、ねえ。人がいるよ」

「ホントだ。出直そうか」

そちらの方を見ると、女子高生が二人いる。

「どうしました？ 何か御用ですか？」

今日の服装は白が基調の羽織なので関係者に見えなくもないだろう。実際、知識と経験ならそこらの神主にも負けないしな。

「あ、いえ、すみません。お邪魔しました」

走り去って行ってしまった。何しに来たんだよ。

「どうかしたのかい？」

手に玉串と神楽鈴を持って戻って来た龍宮が話しかけてくる。

「ああ。さっき人が来てたんだが、ちょっと話しかけたら逃げるように帰って行ってな」

そう言うと龍宮は、またか、といった表情をする。

「夏休みに入ってからか、初等部から大学まで流行ってるんだよ。

コックリさん」

「コックリさん？」

「そう。コックリさんに使った紙を神社に埋めると願いの成功率が上がるとか言ってるね」

こっちはゴミを埋められていい迷惑だ、と最後に小さく呟いた。

夏休みに入ってからか。ちよつと自意識過剰な気もするが、俺やエヴァが居なくなってるから。これも必然か？

いや、流行らせてもど素人にやらせたところで失敗しからないのは目に見えてる。

意味がわからん。やっぱ学園だし、自然に流行ったのか？　しかし、部活があるといっても夏休みにそこまで流行るか？

結論、保留。左手法が通用しない思考の迷路なんてやる気無い。

「しかし、どこの誰が流行らせたのかは知らないが、その手順には少し感心したよ」

「手順？」

「ああ。梵字を書いたり真言を唱えたり。よくまあ、噂を流布させる為だけにそこまで調べたものだ」

成程。確かに珍しいな。夏休み中でもこの麻帆良なら流行って当然かも。

「その紙ってあるか？」

ちよつと興味が湧いた。何かの手掛かりになるかもしれないし。

「その辺を掘れば埋まってるんじゃないか？」

掘れってか。何気に雑用させられてない？

龍宮から受け取った玉串と神楽鈴を『倉庫』に入れて、スコップを取り出す。

それで最近掘られた跡のある場所を探し、掘り返す。

深く埋められているわけではなかったので、掘り始めてすぐにその紙を見つけた。

四つに折られた紙を手に取り、広げる。

.....。

「わあー。ヨリキリ様だあー」

「すごい棒読みだね。知ってる手法だったのかい？」

知っている。知っているよ。知っているともさ。

「正式名称は何だったか忘れたけどね、ヨリキリ様って語呂がいいじゃん。まあ、よくある呪詛の一つだよ」

流石にこれはちょっと洒落になってない。

学園一丸となって一人の人間を呪い殺そうとしています。もう笑うしかねえな。

さて、栄えある祝殺対象者は

PRRRRRR

空気の読めない着信音。

『もしもし。彩輝かの？』

「死ねジジイ。何の用だ。死ねジジイ」

『フォツ！？ いきなり死ねってヒドくない！？ ワシ何 』

「さつさと用件を言うか、死ね。あ、やっぱり言わなくていいから死んでください」

『……グスン。相坂君の制服や寮部 』

「俺の自宅に居るから本人にかける」

通話を切る。

チツ。噂をすれば何とやらってか。

さよちゃん本人に任せても大丈夫だよな。茶々丸もエヴァも居るし。

ん？ さよちゃん？ 昨日の記憶のこんなセリフが蘇る。

『あの、この学園ってこんな空気でしたっけ？』

……さよちゃんって、マジで凄いかも。

「そういえば、龍宮は零崎と共闘したことがあるんだってな」

「ああ。一度だけね」

「そいつ、どんな格好だった？」

「あんまりあの出来事を語りたくは無いんだけどね」

「まあ、そう言わずに。情報料払いますから」

「君は零崎と浅い関係じゃないようだし、まあいいか」

「感謝する」

「私が出会ったのは、一見するとどこにでもいる通勤途中のサラリーマンみたいな風貌でアツシユケースを武器にしていたな」

アツシユケースか。昔造ったな。まさか三人しか会ってない家賊の中で共通の知り合いが出来るなんて。

「『ダークサイドイーター常闇暴食』と名乗って無かった？」

「何だ。知り合いだったのか」

誰かに『常闇暴食』を譲ったわけじゃなさそうだし、零崎雅識本人と考えると良さそうだ。

朱織が凶々しき殺人鬼ならば、雅識はおぞましき殺人鬼と言ったと

ころかな。

その雅識と共闘ね。龍宮の実力ちよつと低く評価してた。

「今日、遅くても明日に依頼をする」

「いいのかい？ この短期間に私を何度も雇って」

「たかが数百万の支出だろ？ 別に気にするような金額じゃない。それに今回は真正銘の潰し合いになるだろうからさ」

人手は多いに越したことはない。

学園中に流行らすのを一人でやったということはないだろう。

ていうか、俺が請け負った依頼と関係があると前提で動いているが、時間の無駄じゃないことを祈る。

「ま、正直まだ氷山の一角しか見えてない状況だから、どう転ぶかはわからないんだけどな」

「彩輝さんの勘は当りそうだからね。わかった、空けておくよ」

「助かる」

さて、龍宮とも業務提携したことですし、もっと詳しく調べてみますか。

龍宮神社の竜穴を見た結果、ほんの些細で微細な気にしなくてもいいような違和感を感じ取った。

普段ならば日が悪く、放っておいても霊脈自体の自浄作用でなんとなかなるはずだ。

しかし、ここでさよちゃんの『空気が変』という発言が出てくる。

空気が変。まさかそのまま大気汚染とかそういう意味じゃないだろう。普通に考えるなら様子がおかしいと取るべきだ。

六十年間生身のエーテル体で過ごしてきたさよちゃんの第一印象を無碍にするわけにはいくまい。

学園に入っただけでわかる程の違和感。

もし、さよちゃんの感じた違和感と俺が見た違和感が同じだったら、ヤバイなんてレベルじゃねーな。文字通り、最悪だ。

その最悪の可能性を確かめるべく、俺は今時計塔という手近な高い場所に登っている。

行き詰まったら視野を広く持つ。

何事をする上で共通のアドバイスだな。若干意味は異なるだろうが学園を見渡せるこのポイントを選んだわけだ。

魔眼を発動。

見て、視て、観て、看て、診て、眺め、見渡し、見回し、実見し、

視認し、見据え、觀賞し、通観し、見学し、見物し、視察し、觀察し、診察し、注視し、熟視し、直視し、正視し、洞察し、見通し、見定め、見極め、予想し、予測し、推測し、推定した。

結果　　極悪だ。

「アハハハハハハッ！！」

笑いが止まらない。

何だこれ。何だこれ！

違和感の正体がわかった。例えるなら、まっさらなキャンバスに白い絵の具をぶちまけたような感じだ。

一見するとわからないが、よく見ると本質が全く違う。

乗っ取られた！ たった一ヶ月で、俺にもエヴァにもジジイにも悟られず、こつも鮮やかに！ こつも大胆に！

ふざけてる。これが笑わずにいられるか。

「おもしれえ」

いいぜ。そつちがその気なら、戯言も傑作も不要。

本気で殺しに行つてやる。俺も伊達や酔狂で『最果て』なんて名乗つてねえんだよ。

時刻は正午。気付くには少々遅すぎたが、手遅れというわけじゃな

い。

俺はメンバーを召集した。

第三話：最初は何でも些細な事から（後書き）

眠れない午前二時。

ゴーストハントを見ていた時、百足に足を咬まれて、何の呪いだよ！ とテンパったのは良い思い出。

第二三話：綿密に立てた計画は（前書き）

今回は説明回。

ゴーストハント既読者には、いつにもましてつまらないかも。

どんでん返して難しい。

場所は自宅。

あれから興奮も冷め、良い感じに頭が働くぐらい冷静になったころ、エヴァと朱織を除き、代わりに龍宮を迎えた全メンバーが集合した。集合して早々、さよちゃんと龍宮が挨拶していたが、そういえば、初対面だったな。

「悪いね。最終日は自由にしていって言ってたのに」

「そう思うなら用件を早く言ってくれ」

ちうちちゃんから催促の要望が。快適なネットライフを邪魔してしまったようで少々気が立っている。

「今現在この学園は非常にヤバイ状況に置かれています。緊急事態。非常事態宣言。コンディションレッド。その辺は好きなように解釈して」

「その割に緊張感ねーな」

当然だ。焦ったところで自体は好転しないんだし。こういう時は自分のペースを見失わないのが大切だ。

「で、詳細を言つとだな」

机の上に龍宮神社で拾った紙を広げる。

「あ。これ夏休み入ってからネットでちょっとした話題になってるやつだな。これがどうかしたのか？」

チツ。やっぱネットでも広がってたか。收拾つのかよ、この事件。

「簡潔に言うなら、呪詛だ」

「呪詛ですか！？ えっ、ちょっと待って下さい。ネットで広がってるって、それじゃあ」

流石刹那。西出身なだけあって事態の深刻さを一瞬で理解してくれて助かる。しかし、まだ序の口なんだよなあ。

「さよちゃん。呪詛はわかるよね？」

いまいち理解できていないさよちゃんに語りかける。まあ、さよちゃんには魔法を教えてないし、当然なんだが。

「えっと、誰かを呪うってことですよね？」

「そ。呪いにも、相手を不幸にするとか、内臓を腐らせるとか、色々あるんだが」

一旦言葉を区切り、キセルの煙を吸い、吐き出す。いや、皆さん『緊急事態じゃねえのかよ』的な目で見てきますが、こっちだって自分のペース保つのに頑張ってるんだよ！

「この手法を俺はヲリキリ様と呼んでいてな、この紙で普通のコックリさんをした後、紙を埋めなければならぬんだが、埋める場所

がポイントなんだ」

「埋める場所によって効果が変わるとかそんな感じか？」

と、ちうちゃんが言う。

「お。良い勘してるよ。人を狂わすには十字路に、人を殺すには宮下に埋めるのが通例だ。この場合、宮下とは神社のことでこれが埋まっていたのが」

視線を龍宮に投げる。

「大体夏休みが始まって何日か経った頃にウチの境内に埋められるようになった」

殺意しか感じられねえ。多分主犯とは友達になれる気がする。まあ、その前に依頼を片付けるけど。

「いや、でも、ちょっと待てよ。そんなのが学園中に流行ってるのは確かにヤバイけどさ、方法だけなら図書館島とかで調べられるんじゃないか？」

「うん。まあ、探せばあると思うよ」

あそこの情報量桁違いだし。

「だったら単に、いじめられっ子がいじめっ子にした些細な復讐が学園中に広まってしまった、とかが現実的だと思うんだが。お前が動く程の事なのか？」

「そうですね。さつきコツクリさんと言いましたが、つまり降霊術ですよ。これ、コピー用紙に普通のインクですし、素人の術が何度も成功するとは思えないのですが」

「私も神社でその話を聞いた時に思ったんですが、仮に成功しても学園の結界で行動が制限されるんじゃないのかい？」

「全方面から俺が十数分前まで考えていたことと同じことが述べられる。」

「じゃあ、まずちうちゃんの仮説から。呪詛を行うには必ず対象者が必要です。まあ、当たり前だけど。で、ここに書かれている梵字が対象者の名前なわけだ」

俺は紙に書かれている梵字を指差す。

「何て書いてあるんだ？」

「関東魔法協会理事、近衛近右衛門」

全員が期待通りのリアクションを取ってくれる。これで些細な復讐なんてものじゃないとわかってくれたようだ。

「というか刹那よ。お前読めていなかったのか。ルーン文字もそうだけど、単体で意味を持つ文字は組み合わせた時にこそ真価を発揮するんだぞ。」

実際には理事なんて役職は書いて無いが、こう言った方がわかりやすいだろ。組織のトップを堂々と殺しにきていると。

「で、次に刹那と龍宮の疑問だが、ここの霊脈、造りかえられてるわ」

『は？』

次は理解できないといったリアクションを取ってくれる。本当に期待を裏切らない。現状は好転するなら存分に裏切ってくれていいんだけどな。

「今の霊脈はわかりやすく言うと……そうだなあ、肉を捌いて調味料ふりかけて焼いて、後は食べるだけって感じかな」

「ゴメン。逆にわかりづらい」

えー。結構頑張って例えたのに。今まさにこんな感じだよ。見た時の俺の第一印象は調理済み。

「あー、じゃあ、もうアレでいいよ。某妖結界バトルストーリーの舞台の烏森で。霊脈啜ってるんだからそれなりに力上がるでしょ」

ちうちちゃんにしか通じなさそうな気がするが、もうこの説明でいいや。

「つまり、妖怪からしたらどんな手段を使っても侵入したいと考えてるときに、ここの学生が節操無しに招待してるわけか」

十全に通じたよ。素人のやる降霊術なんて所詮あつちの気紛れだからなあ。ここまで好条件揃ったら成功率はかなり高いだろう。そのおかげで一ヶ月も滞在してる妖怪が居るのか。さっさとジジイ殺して還れよ。

「結界の方は？」

成功率の高さに納得いったのか、続けて結界の方も聞いてくる刹那。

「結界は詳しく見てないから何とも言えないが、まあ、大方ヲリキリ様で喚ばれた妖怪は例外的に制限が掛からないように設定されるんだろ」

術式自体はそんなに難しくは無いし。この学園にだって式にした妖怪を使役する術者は居るだろ。そういう人間の為に例外的措置は最初から取っている筈。

後は教員の目を盗んで項目を一つ加えるだけ。ホント使えねーな、ここの教員。

「えーっと、つまり纏めると。学園長の命を狙う奴がいる。噂の広まり具合からいって複数犯。全員の實力を足せば霊脈を造りかえるなんて巫山戯た事が可能。学園には魑魅魍魎が跋扈していて現在進行形でレベルアップ中。ってところか？」

ちうちちゃんがわかりやすく纏めてくれた。退魔の剣があれば合ってるかわかるんだが。伏線無しで薬売りとか登場しないかな。

まあ、戯言は置いといて、本当にこれで全てか？　ここまでやる連中が呪詛を一つ流行らして終わりとは考えにくい。

「他にも何かネットで話題になってる怪談とかないか？」

「って言われても、時期が時期だからな」

まあ、夏だし、自然と流行るよな。その中から事件性のありそうなものをピックアップするって……面倒だ。

いや、霊脈沿いに限定すれば結構絞れるか？

「なあちうちゃん。今年出来た話で、駅、川、麻帆中、世界樹、神社、祠なんかで思い浮かばないか？」

「……………あ！ そーいや世界樹で深夜二時釘を打ちつける音が響くとかがあった気が」

牛の刻参りかよ。なんつーベタな。いや、ベタで王道だからこそすぐに広まるのか。

「あそこ恋愛成就とかは多いんだが、こういうマイナスな噂って少ないんだよな」

成程ねえ。これもマジな気がしてきた。どんだけ恨み買ってんだよ、あのジジイ。

「あの、彩輝様。さっきからずっと思ってたんですが」

「ん？ 何かな、刹那」

「呪詛なら術者に返せばいいんじゃないでしょうか？」

「んー、まあ、普通ならそうするんだけどね。この場合術者はヨリキリ様をした学園中の学生になっちゃうんだよ。返すのは簡単だけど、その後阿鼻叫喚の地獄絵図が……いや、やっぱり返そう。学園

を封鎖して呪詛を返した後、掠り傷一つ負ってないのが犯人だ。後は文字通りの意味で虱を潰すように」

「ダメに決まってるでしょーッ!」

と、龍宮を除く全員からそんな感じの突っ込みを受けた。

でも、これが事件を解決する最短ルートだぜ。代わりに学園の人間の過半数がこの世から居なくなるかもしれないが。

あ、違った。極短ルートがある。ジジイ一人が居なくなれば済む話じゃないか。呪詛が成立しなくなって妖怪は全てあちらに還り、犯行グループも復讐を遂げれて、晴れて事件解決。

「彩輝様、今すごく不穏な事考えてませんか？」

「ジジイが死ねば、この事件楽に片付くかなあ、なんて考えてないよ」

「考えてるじゃないですか！」

「平和とは犠牲の上に成り立つモノなのだ」

「例えそうだとしても面倒くさいなんて理由で犠牲を出さないで下さいー!」

「大義名分があれば犠牲を出してもいいって言うのか！そこに直れ！」

「え？ 私が怒られるんですか？」

「ふざけてる時間あるのかよ」

「ごめんなさい」

ちうちちゃんに軽く睨まれたので即座に謝る。

「じゃあ、ちうちちゃんと茶々丸。後は任せた。ネットに広めた犯人を特定してくれ」

「他に手段は？」

「無いね。この学園で人伝に噂の元を辿るなんて不可能に近いし、魔術的な搜索は絶対に妨害を受けて相手に勘付かれる」

相手は集団戦が得意なようだし、各個撃破がセオリーだ。集まられるとメンドイ。

「あと、ソイツの明らかに歳が離れすぎてる交友関係とかも」

「わかりました。行きましようか、千雨さん」

「……時間かかるぞ」

「ちうちちゃんの探索能力と茶々丸の情報処理能力は、信用出来るし信頼もおけると思ってるんだが」

「あー、はいはい。わかったよ。二時間だ」

そう言い残してちうちちゃんと茶々丸はパソコンの置いてある部屋へ

移動した。

それにしても二時間か。ま、この二人ならドラマのスペシャルみた
く二時間で犯人特定出来るだろう。

一応タイムリミットがあるとするならば、明日の始業式かな。

強固な結界を張れるわけないし、他の教員も自分のクラスで手一杯。
魔法生徒に臨機応変に対応できる経験なんて無いだろうから、ジジ
イも式の間は無防備になる。

いくら長期滞在を希望している妖怪だってその隙をつかない筈がな
い。あとは数の暴力でジジイが押し負けるだろう。

と言っても、こっちは元凶を叩きたいだけで、ジジイの安否なんて
心底どうでもいいが。

今思い出したけど、タカミチは……ま、例の如く出張だろう。有名
すぎるっていうのも考えものだな。死亡扱いされている俺には縁遠
い話だが。

「ところで彩輝様。犯人が呪詛を使っているなら、西の強硬派の者
ではないでしょうか？ そうなると学園長が倒れた後、奇襲を仕掛
けるため学園の外で待機している術者もいるのでは？」

「まあ、確率的にはそれが一番高いんだろうが、学園って営利組織
じゃん。そっち方面で恨みを持った人間が金でフリーの拝み屋を大
量に雇った可能性もないわけじゃない」

とは言っても雇うなら足が付くし、ここまでの腕を持つ奴等の噂が

一度も耳に入らないとは考えにくい。

でもなあ。西の強硬派と考えるには、どうにもじっくり来ないんだよなあ。勘だけど。

「あの、西とか強硬派って、何ですか？」

さよちゃんからの質問。魔法を教えていないのに、政治的問題を教えるわけじゃないじゃないですか。

「簡単に言うと、日本は四世紀頃に大和朝廷に統一されて、それからずっと歴史を紡いできた。世界的に見ても歴史のある国だろ。なにに関東ではほんの少し前に入って来た西洋魔法が大半を占めていて、今や日本を仕切る二大勢力まで成長した。それが伝統とかを重んじる西の連中は気に入らないわけ。それで、ならいつそ力ずくで追い出そうとか考えてるのが強硬派」

……ん？ 今何か引つ掛かったような。

「力ずくに……」

「うん。よくもまあ、そんなくだらないことに人生を捧げられると俺は半ば感心を隠しきれないね」

「彩輝様の立場でその発言は色々と問題があると思うのですが」

「だってそうだろ。神仏混合。多文化の良いところ取りは日本人が世界に誇れる長所の一つだろうに」

「いつそ西洋魔法も取り入れて新しい魔法体系とか創ればいいのに。」

俺はやらないよ。面倒だから。それに、そういうのは英雄の零崎彩識の仕事です。一般学生の近衛彩輝が出る幕じゃないだろ。

「ふん。随分面白そうなことをやってるじゃないか。探偵ごっこか？」

名前が二つあるって便利だなあ、なんて考えているときに起きてきたエヴァ。正午は完全に過ぎている。

「ただの探偵じゃない。二ト探偵だ」

「……それは私に対する当てつけか何かか？」

ありゃ。通じなかった。ちうちちゃんの突っ込みが欲しいが、まあいいや。

「家主命令だ居候。『今日この家から出ることを禁ず』」

音+言霊。残り半日ぐらいならエヴァだって縛れるだろ。

「なっ！ おい、ハウル！ 何をする！」

「エヴァが動くと目立つんだよ。折角無能な味方や有能すぎる敵に気付かれていないのに、ここでバレてたまるか」

「私にも暴れさせろ！」

お前、魔法世界で散々暴れただろうが。

「オーケー。なら妥協案だ。従者の活躍は主人の活躍ということ、そこでオブジェと化しているチャチャゼロ。刃物研いどけよ」

「オ。殺ッテイイノカ？」

「おう。誰に憚れること無く殺れ。俺が許す」

「ケケ。流石ハウル、話ガワカルジャネエカ」

「ちよつと待て。色々と納得できん」

「納得しなくていいんで理解して下さい」

さて、どうせ今から二時間は動きようが無いんだし、この時間はエヴァを言い込むことに費やそうか。

そして、二時間後。

言い込むのが面倒になり途中から洗の……あ、やっぱり何でもありません。

ちうちちゃんと茶々丸がA4用紙にプリントアウトされた資料を手に持ち戻って来た。

そして、机の上に七名の資料を広げる。

「ネットに広めていたのがこの中高生二人。後は彩輝に言われた通り歳の離れている交友関係から芋蔓式に見つけた。ちなみに全員一

般人ってことになってる」

「高校のスクールカウンセラーから初等部まで。出身は……全員関東ですか」

にしても五十代から十代まで。幅広い年代層だな。それにスクールカウンセラーとか。噂をコントロールするには最高のポジションじゃねえか。

「関東と断定するには早いぞ、刹那。本当に協会が絡んでいるとなると戸籍の操作なんて造作もないだろうし」

「いえ、その可能性は低いと思われます」

と、茶々丸から否定の声か。

「理由は？」

「この初等部の学生を除き、残りの六名は曾祖父母の頃から麻帆良と何らかの関わりがあります。戸籍改竄はされていないかと」

つまり学園の出来た当初から。ひよっとするとこの学園の建設に関わっていてもおかしくない年代からこの周辺に住んでいるわけね。

西の線は消えたか。しかし、七名中六名となると。

「このガキ、気になるな」

「ああ。そう思ってソイツの実家から親戚から可能な限り調べてみたんだが、魔法とは全くの無関係だ」

マジかよ。絶対何かあるだろ。ソイツの資料を手に取り細部まで読む。名前は立花^{タチバナ}五露^{イツユ}ね。

「は？ え？ 立花？ …… タチバナ？ …… 橘か？ それに五露って……ここにきて偶然なんて無いよな」

「ひよっとして知り合いか？」

突然独り言を言いだしたから、ちうちちゃんが声をかけて来る。

「こんなガキ知りもしないね。だが、懸念事項が出来た。ちよっと調べてくる」

「って、オイ！」

刹那やちうちちゃんが引き留めようとするが、無視させてもらう。今回ばかりは余裕が無いかも。

って、待て待て待て待て。今更だが何でこの時期にこんな大掛かりな事を始めた？

てつきりエヴァが居ないからかと思っていたが、俺の極悪の予想が当たっていたら辻褄が合わなくなる。

いや、それ以前に呪詛を流行らす意味がわからない。

「さよちゃん。エーテル体になってこのスクールカウンセラー監視してくれないか」

「えっ？ 監視ですか？」

「監視と言うより盗聴かな。独り言とか一言も聞き洩らさないようにしてくれ」

「はい。私気付かれないことには自信があります」

「あと、このガキには絶対に近付くな。他は待機。じゃ、俺は一時間後に戻ってくるから」

「一時間でどこまで調べられるかわからないが、とりあえず実家に向けて転移した。」

SIDEさよ

「あと、このガキには絶対に近付くな。他は待機。じゃ、俺は一時間後に戻ってくるから」

「そう言っつて彩輝さんはどこかへ転移してしまいました。」

「行っちゃいましたね」

「今っつて結構切羽詰まった状況だよな？」

「ええ。今にも学園長を狙って妖怪たちが動いてもおかしくないんですが」

「立花五露君。名前は珍しいですけどそんなに変わっているようには見えませんけど。」

それよりも私はこの先生の話盗み聞きに行かないと。

……私にしか出来ないのはわかりますけど、何だか嫌な役です。

「あ、このカウンセリングの先生って今どこにいるんですか？」

「今は麻帆良高校に勤務している筈です」

夏休みなのに先生は大変ですね。あ、でも明日から学校が始めるからその準備かな。

「私もちよつと行ってきます」

随分久しぶりにこの身体から出て、彩輝さんの家を後にする。

一ヶ月程彩輝さんから幽霊らしいことが出来るよう指導を受けた所為か、いつの間にか自縛霊から浮遊霊に昇格(?)しているのです、今の私は霊体で世界中どこにでも行けます。

「えっ」

家を出てすぐに感じた。

学園の空気がひどく変わっている。こんなに変わっているのに今まで気付かなかつたなんて、自分でも信じられない。

それにどこかで子供が泣いているような、そんな感じがします。

これはひょっとして私たちが考えているよりずっと深刻な事態なん

じゃ。

私は急いで麻帆良高校へ向かいました。

麻帆良高校に着いて、校内案内で職員室とカウンセリング室の場所を確認して、職員室を覗いてみましたが、茶々丸さんと千雨さんに見せてもらった資料の人は居なかったので、今はカウンセリング室に向かっています。

それにしても壁や床を自由に通過できるのはすごく便利です。目的地まで一直線に行けますから。

あ、ここがカウンセリング室かな。

中に入ると二人の男性が向かい合って座っている。一人は資料で見た五十代の男性。そして、もう一人は噂をネットに広めた高校生。

これはすごく重要な話が聞けるかもしれせん。

「しつつかし、あの吸血鬼。そんなに用心する必要あるのか？ 学園の結界で力出せないんだろ？」

吸血鬼ってエヴァさんのことですよ。やっぱりこの人たちは一般人じゃない。

「首領が恐れているのは力ではなく知識の方だ。あの吸血鬼は研究者としての一面もあるから今回の呪詛を知っていてもおかしくはない。前回のよう術式も佳境に入って邪魔をされるのは不愉快だからな」

呪詛って。この人たちが犯人で合ってる。たった二時間で犯人を特定した茶々丸さんと千雨さん、すごいです。

「前回って二十年前だっけ？」

「十八年前だ」

「どつちにしろオレ生まれてねー。ってか何度聞いても信じられないんだが、前の首領がちょっと戦争で活躍した英雄ごときに負けたって」

「だから何度も言ってるだろ。負けてはいない。戦ってすらいらないんだからな」

「でも死んだんだろ？」

「それはその時の首領が高齢で術式を破られた返しの風に耐えられなかったからだ」

「返しの風ってブーメラン効果のあれだよな。関係ないけど今の菅首相は歴代随一のブーメランの達人とかネットで見たなあ」

「そういえば彩輝さんも、今は副業で総理大臣をやる時代、とか言っていたような。……日本の未来が暗いです。」

「それでその英雄の名前って何だっけ？」

「零崎彩識だ。全く忌々しい男だよ」

え？ 零崎彩識って彩輝さんが昔名乗ってた名前じゃ。

そして、唐突にカウンセリング室のドアが開いた。

中に入って来たのは、例の初等部の子供。私はすぐに窓から外へ飛び出した。

さっき目が合ったような気がしたけど気のせいですね。

「それよりも、忘れない内に皆さんにさっきの会話を教えないと」

彩輝さんの家へ全速力で戻る。

さよが去った後のカウンセリング室

「どうかなさいましたか、首領」

五十は過ぎている男に首領と呼ばれた、まだ十歳程度の少年、立花五露が答える。

「いや、どうやら鼠が嗅ぎ回っているようだ。恐らく今日中に何らかの行動を起こすだろうから徒弟たちを召集しておけ」

「承知しました」

本来なら違和感ありまくりの状況だが、それを感じさせないほどに少年には威厳が満ち溢れていた。

「しかし首領。学園長本人ですら未だに自分の命が狙われていることに気付いて無いのに、他に気付いて独自に捜査する奴なんているんですか？」

高校生までもこの少年相手では敬語を使うようだ。

「アレの孫だろうさ」

「双子の。妹の方は極東随一の魔力保有者ですが魔法の存在を知らされず、兄の方は剣の腕が立つ程度しか聞いたことがありませんが」

「ああ。少なくとも兄の方はかなり実力を偽っているようだ。一度遠くから奴の戦闘を見たが、底が知れない」

それを聞いて高校生は露骨に嫌な顔をする。

「首領に底無しと言わすなんて、どんな化物ですか」

「さあな。俺もよくは知らんよ」

「計画に支障は？」

「出すはずがない。俺を完全に殺したいならこの国の歴史を塗り潰す程の力を持って来てもらわないと」

「我々は首領が全力を出せるように最善を尽くしましょう」

それらの発言は暗に立花五露さえ居れば後はどうにでもなると言っているようだった。

「明日、この学園は滅ぶ」

それは予言めいた、確信に基づいた、自信に溢れた宣言をし、一人の少年は不敵に笑みを浮かべる。

第二三話：綿密に立てた計画は（後書き）

次回は答え合わせ編と戦闘パートを予定しています。

第二四話：解答、答案、答え合わせ（前書き）

まず始めに謝っておきます。

少々待たせておいて、戦闘は始まりませんでした。

そして一番肝心な部分がグダっていると思われます。

第二四話：解答、答案、答え合わせ

吾は、もつすぐ喰われる。

午後三時

京都とから青森。青森から自宅へと戻った俺の第一声。

「だから退魔の剣は必要なんだよ！ 『真』と『理』どころか『形』からして間違ってるじゃねーか！」

「この場合『形』なんて定まんねーだろ。それよりも何かわかったのか」

どつやらちつちゃんは『モノノ怪』も知っているらしい。個人的には鴉の話が好きだなあ。

まあ、それは置いて、わかったことか。

「俺は探偵には向いていないということが嫌というほどわかったよ」

「事件のことについて聞いてるんだが」

「今度こそ、謎はとべてすけた！」

「それより彩輝様。十八年前に彩輝様は敵の計略を阻止しているのですが」

はい、流されました。

十八年前。正義気取りの馬鹿共が一気に助長した頃か。やっぱりその時無自覚に計画潰してたようだな。これで色々と納得。

「十八年前のことは俺も今知ったから詳しいことは何一つ知らん。それよりもだ。刹那と龍宮、今すぐ南の森に行って妖怪を狩りつくしてこい」

「妖怪は量も質も桁違いなんじゃなかったのかい？ 二人だけで対処出来る自信は流石に無いよ」

「安心しろ。最初はその役目、俺が引き受けるつもりだったが、前回五〇〇〇字に渡って長々と説明した俺の推測は全て外れている。よって数が多いだけの普通の妖怪の筈だ」

メタな発言が混じってる気がするが、細かいことは気にしたら負けだ。どうせやることは変わらない。

「ああ、でも出来るなら譲りたくねえ。軽く数百は居るであろう妖怪を前に、全ての妖怪は俺の後ろで百鬼夜行の群れとなれ、とか言ってみたかった」

「ぬらりひよんの孫か、お前は！」

「（頭的な意味で）ぬらりひよんの孫だ、俺は」

「ネタはもういいですから、南の森に居るんですね？」

「多分な。あそこ普段は雑鬼共の遊び場なんだけどさ、雑鬼が溢れてたとなるとそこに群がってる可能性が高い」

わかりました、と刹那が、請求書を楽しみにしておいてくれ、と龍宮が言い、俺がある程度森の近くに繋げた《門》を潜って行った。

それを見送った後、俺は机の上に麻帆良学園の地図を広げ、ペンで複数のマークを付ける。

「さて、ちうちちゃんと茶々丸は今マークを付けた位置にある拡声機からこのCDを流してくれ」

『倉庫』からCDを取り出して二人に渡す。

「えっと、これ重要で急ぎだったりするのかな？」

「確実に今回の切り札になるな」

そう言つと、ちうちゃんは何ともバツが悪そうに顔を背ける。

「え？ 何？ 不都合とかあるの？」

俺の質問にはちうちゃんの代わりに茶々丸が答える。

「この二時間でかなり派手に立ち回ってしまつて、セキュリティの警戒レベルが」

「そつちは本業じゃないから勝手がわからないけど、一般生徒の個人情報を盗むのってそんなに難しいのか？」

「いえ、さつき学園結界の話が出ていたのでついでに改善しようと思つたのですが」

「まさか失敗したとか？」

「結果を言つと成功です。ただ、千雨さんが面倒がつてメインコンピュータを一度完全に掌握して書き換えたので、過去最高の警戒レベルに」

そんな簡単にメインコンピュータ乗っ取れるんだ。ここの教員がちゃんと働いているのか心配になつてきた。

「寧ろそこまで格の差があるなら、どうにでもなるんじゃないのか？」

「先程は学園にここまで大胆にハッキングを仕掛ける奴なんていないと、ある意味盲点を突いたので、次は少々時間を取られるかと」

それでも『少々』なんだ。この二人『チーム』や『砂漠の狐』とそれなりに渡り合えるんじゃないだろうか。

「なるべく早く頼む。ところでさっきから居ないけどエヴァは？」

「マスターなら不貞寝です」

さいですか。

「終わったら刹那たちの方に加勢してやって。数は無駄に多そうだからさ」

「わかりました」

二人は再びパソコンの置いてある部屋へ戻って行った。

「あの、私は何をすれば」

さよちゃんか。『騷霊現象』と『顕現象』だけじゃ人間相手ならともかく妖怪相手だと決定打に欠けるしな。

人間の方は朱織とチャチャゼロが担当だし。

そもそもさよちゃん戦闘向きじゃないし。

「今回は留守番かな」

「………そうですね」

そんな頂垂れられても。

「たった六時間でここまで進展したのはさよちゃんのおかげなんだから、そんなに落ち込まないで」

実際さよちゃんが居なかつたら霊脈の異常に気付かずただの呪詛として片付けるところだったし、同時に化物の存在にも気付かず全滅していたかもしれん。

少し元気を出したさよちゃんを横目に、刹那たちに結界が改善されたことを念話で伝える。

返答ではこれから戦闘を開始することのこと。実に間の良い助言になった。

さて、問題というより本題はここからだな。

(朱織、これから殺し合いを始めるぞ)

カードの念話機能で呼び掛ける。

.....。

.....。

.....。

あれ？ 返事が無い。ただの

(あ あ、準備出来たんでえ、そっちに召喚して)

殺人鬼のようだ。

要望通りすぐさま朱織を召喚する。

「でだ、敵はこの六人。チャチャゼロをつけるから後は好きにしてくれ」

「わかったよー」

と、笑顔で六枚のコピー用紙を折り畳んでポケットに入れる。

「ケケ、ヨロシク頼ムゼ」

チャチャゼロは人形なので表情が読みにくいが、心なしか満面の笑みで朱織の頭の上に移動する。

「こちらこそお。じゃあ行ってくるねえ」

朱織とチャチャゼロも獲物を探して家を出ていった。

それじゃ、俺も動くとしますかね。

やはり切り札を仕込むなら伏せ札も用意しておくべきだろう。なんせ相手は『魔法使い』なんだから。

大戦中にナギの影分身を見ておいてよかった。

障子紙程度の強度の分身を五人造り、これから大祭が行われるであろう世界樹の広場へ向かう。

森

彩輝に指示され、最初に目的地に向かった刹那と龍宮は壁の前に立っていた。

壁、と言っても物理的なモノではない。魔術的な不可視の壁。俗に言う結界の前に立っていた。

「成程。一ヶ月間増え続ける妖怪をどうやって悟られずにしていたのか疑問だったが、随分巧妙に隠されてたわけだ」

自身の疑問が解消され、納得したと頷く龍宮。

その実、この結界はかなり巧く張られている。中に居るモノを隠す、否、認識させないという強制暗示を十全に果たしている。

この二人でさえ、目の前に立ってようやく気付くほどだ。

「ああ。これ程なら魔法先生が気付かないのも頷ける」

刹那は中学に入るまで西で過ごした。大切な人を守りたいが為、剣の修行に明け暮れた。

修業と言ってもずっと道場で竹刀を振っているわけではない。神鳴流は元々魔を討つために組織された集団。師範の許、妖怪相手の実践だってこなしてきた。その折、結界を張るのに優れた術者も居た。

だからこそ、西と東どちらの組織にも所属した刹那は思う。

これ程の結界をたつた七人で張れるのだろうか。

異常を異常と気付かせない、些細な違和感すら感じさせない異常性。

そんな芸当が出来るのは、彼女の知る中では、心身掌握を旨とする近衛彩輝ぐらいのものだ。

と、そんなことを考えていた時、ちょうど彩輝からの念話が頭に響いた。あまりのタイミングの良さについて苦笑が漏れてしまう。

(刹那、朗報だ。ちうちゃんと茶々丸の活躍のおかげで現在学園結界は正常に作動している)

確かに朗報だ。それならこの結界の向こうに居る妖怪たちも、今が昼なのも相まって活発に動きまわることは出来ない。

(わかりました。では、私たちはこれから戦闘を開始します)

そう伝え、念話を切る。

「良い知らせだ。長谷川さんと茶々丸さんが結界を正常に戻したぞうだ」

「へえ。すごいな」

それを聞いて龍宮は素直に感心する。たった二時間で犯人の素性を突き止め、その片手間に警備システムにも干渉しているのだから当たり前前か。

「しかし、これで思いのほか楽な仕事になりそうだな」

そう言いながら龍宮は二丁のハンドガンを手に取り、続いて刹那もアーティファクト、布都御霊を出す。

「そういえば刹那。夕凧はどうしたんだい？」

「うっ、夕凧は私のミスで破損させてしまって、今は彩輝様に預けてる」

ちなみに夕凧は彩輝が実家に戻った際、詠春に修理を頼んでいたりする。その折、自分の元愛刀が罅割れている姿を見て愕然とする詠春に、『つい、虚刀流で……』とか色々フォローする彩輝がいたとか。

そして、二人は結界の内側へ足を踏み入れる。

入ってすぐに二人は顔をしかめた。空気が澱みきつているのだ。何の耐性も無い一般人なら一分も持たずに昏倒するほどの瘴気の濃さ。結界が隠しているモノは妖怪だけではなく、溜めに溜め込んだ瘴気でもあったということか。確かに妖怪にとってこの環境は無料でホテルのスイートルームに滞在し続けているようなものだ。

しかし今となつては、刹那の持つ布都御霊が片端から高密度の瘴気を清浄な気に還元している。その在り方は流石神剣と称するべきだろう。

二人はこのまま森の奥地へと進んで行く。

すると目に入ったのは見渡す限り、妖、妖、妖の群れ。

「……………楽な仕事？」

「さっきの言葉は取り消すよ」

前言撤回かぁ。そういえば最近彩輝様の前言撤回発言聞いて無いなあ。と、あまりの数に若干現実逃避気味な刹那。

当たり前だが、妖怪がそんな現実逃避を悠長にさせてくれるはずもなく、自分たちの領域を侵した人間二人を葬るため、近くに居た数十の妖怪が瞬時に動く。

「神鳴流奥義『百烈桜華斬』」

すぐそれに応戦する刹那。龍宮も背後から刹那を援護する。

刹那が妖怪を絶ち、斬り、裂き、龍宮が撃ち、穿ち、討つ。

「龍宮、前言撤回だ」

この数合で敵の力は粗方把握した。

「これはかなり楽な仕事だ」

ここにいる妖怪は総じて、弱すぎる。本当に数を集めただけのような。

しかし、それだと疑問が残る。これで学園長の命など狙えるはずがない。

彩輝様の話では、霊脈を造り変えてまで妖怪の力を上げている筈。だけど、その効果が一向に見られない。

どうやら家で言っていた『推論が全て外れていた』という発言は本当のようだ。ならば何のために危険を冒してまで霊脈を造り変えたのだろうか。

敵の目的が学園長への復讐でないならば、真の目的は一体？

戦闘に余裕ができ、思考を続けるが答えは最後まで出なかった。

世界樹前の広場

今ここに居るのは、向かい合っている二人の少年。

方や十歳程度の小学生。方や和装に身を包んだ中学生。今現在この二人を除き半径二キロ以内には、一般人だろうと魔法使いだろうと、誰一人として近付くことは出来ない。

「全く。恐れ入ったぜ、立花五露。まさか一組織の長の命を狙うのが唯のフェイクだなんて、一体誰が予想できるかったの」

「ああ、そうだろう。今回は随分回りくどい手段を取ったからな。寧ろ気付かれるなんて予想してなかった。その口振りじゃわかってるんだろ、俺の目的」

ここに事情を一切知らない人が居れば、それこそ兄弟のような間柄に見えるだろう。それほどまでに二人の表情と口調は和やかで楽し

げなものだ。空气中にバラ撒かれている多量の殺気を除けば。

「じゃあ先生。答え合わせといきましょうか」

「いいですよ。近衛君」

「まず最初に、この学園に流行ってるヲリキリ様。これには何の意味も無い。精々大量の妖怪で教員の目を欺こうぐらいにしか使い道が無い」

「ヲリキリ様か。何かいいな、呼びやすくして」

この呼び方は意外と好評のようだ。

「しかし、大量の妖怪って、素人の術がそう何度も成功するはずないんじゃないのか」

「ああ。そこには俺も騙された。初めは霊脈の異常が関係していると思っ込んでたが、これが全くの無関係。妖怪が集まったのはお前がこの世界樹で牛の刻参りをし、瘴気をバラ撒いたからだろ」

世界樹の加護だって一時的には無効にできるだろうしな。と、最後に付けたす。

「最初に気付くのが霊脈の状態かよ。お前も大概だな」

「アンタ程じゃないさ」

「何だ？ 肉体年齢十歳のガキにビビって」

この言葉は最後まで言わせず、彩輝が途中で遮る。

「立花とは橘、五露とは五露鳥のことだな」

「……………」

それに立花は沈黙で返す。その沈黙は不快なものというよりは、早く続きを聞かせろと催促を感じさせる。

「日本書紀には不老不死の霊薬と云われたトキシクノカグノコノミ非時香実を天皇が求め、部下を常世の国に遣わしたそうだ。その実が生るのは常葉の木、つまり橘の木のことだな。そして五露鳥は別名しでの鳥。死出の鳥。早い話が不死鳥だ。永遠を冠す単語が二つも入ってるなんて出来過ぎだよなあ」

「出来過ぎだろ。なんせ自分で付けた名前だからな」

「自分で付けたのかよ」

まあ、そんなとこだらうと思ってたけど。っと、俺がツツコミ役に回るのって随分久しぶりな気がする。なんてどうでもいいことを考える彩輝。

「そうそう。ちょっとした茶目っ気で。ここの魔法関係者が気付かないかなあ、なんて。名乗り始めて八十年、漸く花丸の解答が聞けた」

「わーい。はなまるだー」

「たいへんよくできましたー」

二人とも清々しいほどの棒読みだった。

「まあ、ここの教員に期待するだけ無駄ってヤツだ。ちなみに俺の場合マイナスの方にメーターが振り切ってるからこれ以上失望する事はない」

「うわぁ。祖父の部下ぐらいちょっと信用してやれよ」

「まずは金を払え。さすれば水素の重さぐらいは信用してやろう」

「スゲー。遥か高みからの上から目線。そしてその頃にはお前の信用度は奈落の底に落ちているだろうけどな」

何だかどうでもいい方向に会話が進んできてしまったので軌道修正。

「「閑話休題」」

特に意味は無いが声を揃えて宣言する。さながらステレオ再生のよう。

「それで？ 要は俺がどこぞの吸血鬼のように何百年も生きてる化物と言いたいのか？」

「いいや、立花五露（自称）。お前と比べれば吸血鬼なんて可愛い方だ」

「（自称）を付けるな。ってかお前、アレが可愛いって……ロリコンの方ですか？」

「いやいや。俺はロリコンじゃねーよ。ファミリーコンプレックス、即ちファミコンですよ。七耀 首領、蘆屋アンヤミシコン光栄さん（本名）」

一瞬。ほんの一瞬だが眼が鋭くなったのを彩輝は見逃さなかった。

「ファミコンの割りには随分高性能だな」

「ファミコン程度の処理能力で月に行けるということは歴史が証明している」

「科学の進歩、魔法の衰退。我々魔法使いには世知辛い世の中だよ」

「主語を大きくするな。そう思っているのは蘆屋、アンタだけだ」

最早和やかな雰囲気などそこには無い。先程とは打って変わって獐猛な笑みを顔に張り付けた化物がそこに在るだけ。

楽しいな感情が残っているのはこれから行われるであろう殺し合いに胸躍らせているからか。

「確かにヒントは与えたが、どうやって調べた」

「何、関東魔法協会が出来る前、この辺を仕切ってた組織を実家に戻って資料を読み漁り、何人が候補を見繕って恐山で確認して来ただけだ」

流石に京都から青森通ってまた学園に戻ってくるのは手間だったがな。と軽い口調で言っている。

「でも実際、こうしてアンタの反応見るまでは俺も半信半疑だった

んだけどな。まさか安倍晴明と同期の人間が生きているとは」

安倍晴明。

かぐや姫で知られる竹取物語にもその名が登場する日本で最も有名な陰陽師と言っても過言ではない偉人。

しかし、かの偉人が活躍したのは今から千年近く昔の話。それと同期ということは、まさに生きる伝説。真祖の吸血鬼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルでさえ生きている時間はまだ半分を越した程度。

鶴は千年というが、さっきの五露鳥はホトトギスだったか。ホトトギスには托卵と呼ばれる習性がある。自分の卵を他の鳥の巣に紛れ込ませ、孵化した後も育てさせる。

つまり、立花五露は肉体が死んだ時、魂を母体の中に眠る赤子に移していたということだ。勿論、記憶や経験を継承して。

吸血鬼のように不老不死になるのではなく、焼死した後灰の中から幼鳥となって現れるフェニックスのように、死すらも自らのサイクルに取り込んだ化物。

それを知った時彩輝は、俺も大概人間やめてると思ってたけど上には上がいるなあ、とか、俺は前世足しても精神年齢三十代なのに千歳ってありえねー、とか思っていたり。

「ん？ それで終わりか？ このままだと六十点だぞ」

「赤点免れてるじゃねーか。そういや、まだお前の目的ちゃんと確

認してなかったな」

「俺の経歴まで調べたんだから最後まで言っておこうぜ」

これが人生最後になるかもしれない。と、笑いながら付け足す立花。

「先生、動機から説明していいですか」

「君のしたいようにしなさい」

どうやら、殺気の密度も相当濃くなっているのに、まだ教師と生徒の設定は続いているようだ。とてもじゃないが、これから殺し合いを演じる態度とは思えない。

「まず、第一でもって原初の理由はアンタが『魔法使い』だからだ」

「んん？ えつと？」

「ああ、スマン。言葉が足りなかった。正義を語らず、悪に染まらず、唯只管に己を昇華させる魔法使いの中の魔法使い。現代に生きる数少ない達人アデプトだからだ」

この世界での魔法使いの人口は約六千七百万人。しかし、その中のどれだけの人数が根源の渦を指すであろう。肉体を捨て世界と同一化することを望むであろうか。

単純な強さを求める者は数多くいる。だが、真理を求めるとなるとその数は皆無だ。

そして目の前の立花五露はグラフにして零に等しい数値に当てはまる。

「土地を奪ってまでやっていることが正義の味方ごっこなんて、奪われたアンタとしちゃ許せるわけないよな」

「大方合ってるが、奪われたわけじゃない。譲ったんだ」

流石にそれには彩輝も虚を突かれたようで、「マジで？」と素で反応した。

「千年も生きてりやわかるさ。疲れたんだよ、続くことに。ちょうどその頃、西洋魔法やらが流行りだして、潮時だと思ったね」

終わるつもりだった。幕を引くつもりだった。だけど。

「これが魔法だと？ 巫山戯るな。こんなものを続かす為に譲ったんじゃない。こんなものが見たくて托したわけじゃない。こんなものが続くぐらいなら自分の手で終わらせる」

その過程で、結果で、どれだけの犠牲が出ようと知ったことか。最後はそう締められた。

「だからこそ、大祭か」

「百点だ、近衛彩輝。昔清明の奴が泰山府君祭やってたのを思い出してな」

「そんな上品なモンじゃねーだろ、この霊脈の在り方は」

本来の泰山府君祭は不老長寿、国家鎮護を祈願する祭り。それを安倍晴明は瀕死の高僧を蘇らせる為に用いたそう。霊脈を啜るのだからそれくらいは当然だろう。

だが、今の霊脈は喰われるのを前提に造り変えられている。

喰われて残った土地はどうなる？ 答えは単純。残るモノなど何も無い。

土地の根底から根源から依存するモノまで全て喰われて、今後数十年は雑草一本生えない不毛の大地と化す。学園都市は二度と復興できないダメージを受け、滅ぶ。

「俺は霊脈のチカラで上に行かせてもらう」

霊脈一つを喰らうのだ。位階を一段上がるなど造作も無いだろう。

「……一応聞くけど、今から大祭中止して、二度とこの土地に足を踏み入れないと契約したり」

「論外だな」

「ですよー」

「だが、お前なら。お前なら俺の後を続けさせれる」

「それはつまり、大祭を中止する代わりに俺がアンタの弟子になり、意思を引く継げと？」

「そうだ。この数百年お前のような逸材はいなかった。大祭を予測

し、素性まで突き止められたのは初めてだ。お前になら」

「アンタには、アンタの意思を継ぐとする弟子が居るだろ」

「あの程度で妥協していた時期も確かにあった。お前のような存在が居るとわかった今、もう無理だ。あいつらが俺を引き継ぐなど、在り得ない」

それは固執だった。それは執着だった。それは妄執だった。

「言っただろう。こんなものが続くのなら自分の手で終わらせると」

その瞬間、立花五露は自分の徒弟を、自分の身内を、自ら否定した。

魔法使いとして始まり、魔法使いとして生き、そして、魔法使いとして狂った者なら、それはひどく当然の考えだ。

「アンタは正しいよ。魔法使いとして誰よりも正しい。だけど『不合格』だ」

「交渉は決裂か」

「最初から交わってすらいなかったがな」

「なら仕方ない。大祭は続行。邪魔者は、死ね」

何のアクションも無く、一つの動作も無く、一切の前触れも無く、彩輝の右腕が炎に包まれた。

「『鎮星消災 急急如律令』」

その炎も一秒としない内に鎮火されたが、少し動かすだけで激痛が走る。曲絃系のような繊細な作業はしばらく出来そうにない。

彩輝はこの一合で目の前の化物は唯純粹に強いと感じた。同時に面白とも。

「皆様、大変長らくお待たせ致しました。ここまでお付き合い頂き本当にありがとうございます。くだらない論理の展開は終了。近衛彩輝はこの場をもって退場します」

身体の構造を造り変えろ。精神の本質を塗り変えろ。人格なんて壊してしまえ。

そして彩輝は、否、彩識は厳かに宣言する。

「では、零崎を始めよう」

第二五話：鬼の始まり、人の終わり（前書き）

長くなりそうなので、とりあえず朱織の活躍

第二五話：鬼の始まり、人の終わり

どうして吾が耐えねばならん。

なぜ吾がこんな目に遭わなければならん。

奴のせいだ。全部、全部奴の。

許さない。

許さない、許さない、許さない、絶対に許さない。

このまま生かしてなるものか。

刹那と龍宮が森で妖怪と戦い、彩織が敵首領と死闘を繰り広げている間、頭に人形を乗せた少女、零崎朱織は学園内を徘徊していた。

「ナア。本当ニコツチデ合ッテルノカ？」

頭の上に乗っている人形、チャチャゼロがそう尋ねる。

尋ねなくなる気持ちもわからなくは無い。朱織は大通りから路地裏まで、風の吹くままを体現しているかのように歩いているのだから。その行為にはとても一貫性があるとは思えない。

「さあ？ 適当に殺気出しながら歩いてればその内会えるんじゃないかな
あ」

計画性なんて皆無だった。

「ところで え、この人たち誰なんですかねえ？」

どころか事情すら一切知らなかった。二つ返事で了承して何も聞かずに家を出たので、当然と言えば当然だが。

「まあ、どうでもいいけど」

その疑問すらも、どうでもいいの一言で片付けてしまふ。いいのかそれで。

「オイオイ。モウ他ノ連中ハ殺リ合ツテルンジヤネエカ？」

「彩兄は始めてるねえ。殺気飛んできてるし」

本来なら現在彩織が居る空間は、何が起ころうとも誰にも認識出来ない筈だが、朱織は正確に殺気を感じ取っているようだ。

「完全ニ出遅レタナ」

「だねえ。でも お、彩兄が行き先とか言わなかったてことは、あと少しでエンカウトすると思うよお」

「ソナナコトワカルノカ？」

「経験だね。何だかんだ言ってえ、彩兄との付き合いは長いからあ」

こうして、殺気を振り撒いておけばすぐ釣れると思うんだよねえ、

と朱織が笑顔で言う。

しかしそれは、自分の身を囿にして、尚且つ敵に現在地を逐一知らせているようなものだ。そんなことをしていれば、警戒され、対策を練られ、罠を張り巡らされる可能性が格段に上がる危険極まりない行為。

だが、朱織は足を止めない。ましてや殺気を抑えるなんて真似はしない。

そして歩きながらチャチャゼロに自分の予測を話していく。

まず、素性を隠して学園に潜入しているなら組織立った犯行であること。

自分とチャチャゼロが任されたことから、この六人は連携がとれていて、集団戦が得意であること。

これは完全な経験則で勘だが、この六人の他にも後方支援が多数いる、下手をすればもう一つか二つ別の組織が絡んでいるであろうなど、意外にも色々考えていた。

そうして進んでいる内に、漸く待ちにも待った攻撃を受ける。

「ケケ。ホントニ来タナ」

攻撃と言っても牽制程度の大して威力の無いものだが、それに含まれた殺気を朱織が見落とすはずが無い。

先程言ったように、朱織は本来結界に阻まれ認識出来ない殺気を感じ

知できる程に感覚が鋭敏だ。恐らくそれは一賊の中でもトップクラスであろう。

故に攻撃を仕掛けてきた方角、距離を測り、敵を捕捉することなど造作も無い。

後は今まで撒き散らしていた殺気をピンポイントで相手にぶつけ、瞬動で距離を詰める。

「アデアット」

その最中、朱織はカードを弓にし、敵に向けて狙撃を行う。

普通なら気絶してもおかしくない殺気を当てられているのにも関わらず、仕掛けた相手は矢を避けながら朱織から逃げる。

徐々に距離を詰められながらも壁ジャンプや建物の屋根の上を駆使し狙いを定められないよう逃げ続ける。

行き着いた場所は噴水のある小さな広場。

そして着いた途端に、

『臨める兵戦う者、皆陣列れて前に在り！』

魔力が爆発した。

爆発の影響で広場には煙や土埃が立ち込める。

そこには既に六人の術者が待ち構えていた。

敵は逃げていたわけではなく、朱織と同じ様に自分の身を囿として、仲間が居るこの場所まで誘導していた。そう、これは畏だったのだ。

「……やったか？」

初老の男性が思わずそんなことを口走る。それがフラグだとは気付かずに。

逆にその眩きを聞いてしまった若年層はどんな状況でもすぐ動けるように警戒を強める。

そして煙が晴れ、立っているのは無傷の少女、零崎朱織。

「疾！」

「『必神火帝、万魔拱服』」

「『オンキリキリバザウンハッター！』」

間髪入れずに、三方向から朱織に向けて三枚の符が殺到する。

だが、しゃん、しゃん、と鈴の音が朱織の手に握られた神楽鈴から鳴り響き、「『はらいたまい、清めたまう』」と祝詞が紡がれ、それだけで三人の攻撃はいとも容易く弾かれてしまう。

確かに警戒され、対策を練られ、畏を張られていた。しかし、それがどうした。朱織の絶対結界の前にはそんなもの、無きも同然。

「あー、やっぱり資料に載ってある人と違うし。てゆうか七人いる

し」

学園の外にもいたらダルいなあ、と、ぼやきながら手に持つ神楽鈴を弓に変化させる。

「貴様……何を……！」

「これですか？ これは通常時、弓の形をしています。舞台に必要な物に形を変えたり、無から創り出したり出来る超便利アイテムなのです。って説明なんてどうでもいいんです。一応確認しておきますが、貴方たちは私と敵対してくれるんですよね？」

人生においてターニングポイントというものがあるなら、それは間違いないこの瞬間であろう。

「ハッ！ 命乞いしたってもう遅せえぞ！」

彼らは選択を誤った。もしもここで有無を言わずに逃げていたら、まだ三日程度は生きていられたかもしれないのに。自分の手で安らかに逝くことが出来たかもしれないのに。

そして朱織の身体から際限無く、先程とは比べ物にならない濃密度の殺気が溢れ出す。

「キャハハハ！ 零崎始めっ！」

言い終わると同時に、弓を引き絞り、新たに創り出した矢を射る。

矢は真っ直ぐ、生存フラグを立ててしまった初老の男性に向かうが、あちらも戦闘の素人というわけではない。

即座に対物障壁を張り、反撃に転じる準備をする。周りの者もその障壁を強化し、朱織を囲むように攻撃しようとした。

だが、ここで予想外の現象が起こる。

矢は障壁に阻まれず、障子を破るように突き進み、男の心臓へと吸い込まれたのだ。

先程朱織は言った。舞台に必要な物なら何でも出せると。

舞台と一言で言っても、神に奉納するものから鎮魂まで様々なものがある。それが全て適応するとしたら。

今回朱織が創り出したのはただの矢ではない。俗に破魔矢と呼ばれる、文字通り、魔を破る矢。本来は妖怪に対して用いる物だが、用途を変えれば魔法使いにも最凶の形で通用する。

残るは、六人。

その六人もあまりに唐突のことに男が死んだと理解し、次の行動に移るには数秒の時間を要した。

殺人鬼の前で足を止めるなど愚の骨頂だとわかっていても、動けなかった。そして、その隙を朱織が待ってくれる筈もなく、「『断魔の弦』」と、次は真空の不可視の刃が連続で放たれる。

「ッ！」

動揺していたところに攻撃を受け、つい障壁で防いでしまう。相変

わらず、足を動かすことは無く。

『断魔の弦』と障壁が拮抗した一瞬、朱織は新たに破魔矢を射る。

流石に二度目になると、術者はすぐさま障壁を放棄し、自分の足で回避する。

だが、そこには最早戦いと呼ばれるモノは存在していない。

幾ら攻撃しようとも、朱織の絶対結界を破ることは出来ず、逆に朱織は可視の破魔矢と不可視の刃を用いて確実に相手を追い詰めていく。

この状況は、狩り、そう呼ぶのが正しいだろう。

朱織が計四本の矢と二十八の刃を射た時、気付けば六人は広場の一ヶ所に追い詰められていた。そして気付かなかった。四本の矢が四角形を成すよう正確に東西南北を射抜き、自分たちがその中心に誘導されていたことに。

そのまま朱織は弓を玉串へと変化させる。

「……何の真似だ」

不審に思った六人の内の一人が声を上げる。

「キャハハ。何って、仕上げだよ！」

玉串が振るわれ、祝詞が紡がれる。

「『いくたま たるたま たまとまるたま くにとこたちのみこと』」

四本の破魔矢を起点に今までよりも強靱な結界を織り成す。

本能的に危機を感じ取ったのか、六人は結界の外へ出ようとした。出ようと一歩踏み出して そのまま地面に崩れ落ちた。

「え……？」

身体に力が入らない。理解が追いつかない。

「ところで『楔ぎ』って場合によっては『身削ぎ』とも書くことをご存じで？」

『楔ぎ』とは世界を清める手法。そして清められた世界はあらゆる魔法を弾く結界になる。

しかし、清めるのは世界だけではない。術者も俗世の垢を被い、自らを清める。代表的なものは『水垢離』などがそうだ。

なによりも清らかに。どこまでも清らかに。神の領域へと近付くため。

だが、近付こうとすればするほど、『人間らしさ』というものが邪魔になってくる。

早い話が、楔ぎは人間らしさを奪い、死に近づくためのもの。

「私の場合この『身削ぎ』が『身殺ぎ』になっちゃうんだよねー。」

「キャハハハハ」

朱織は彩織と同じ様に、魔法のことを唯の道具としか見ていない。道具は使い手しだいで表情を変える。

そして、零崎朱織は殺人鬼。神道がどれだけ守りに特化しようとも、類稀なる殺人術に昇華^{アレンジ}してしまう。

「そんな……馬鹿な事が……」

認めざるを得ない。納得せざるを得ない。現にこうして自分たちの体力は殺がれているのだから。

朱織は虫の息となった六人の内一人に無造作に近づく。

「ところで話は変わるけど、鳴弦には魔を祓うだけでなく、巫女をトランス状態へ導く効果もあるんだよ」

要は心を弄るってことだね、と玉串を再び弓に戻し、相手の頭を掴む。そのまま口で弦を絞り、鳴らす。

朱織は相手の心を読み取っていく。勿論、余分な感情や記憶は殺ぎ落としながら。

「へえ〜。七耀 っていうんだ。あ、思ってたより人数多い」

そしてここに来て漸く、事件の顛末を知るのであった。その頃には手に持った物からは何も読み取れなくなっていたが。

「ハハ。馬鹿、め。今の……お前は、隙だらけだ」

息も絶え絶えに残りの五人は最後の希望に縋る。まだこの場に待機している仲間という希望に。

すると、朱織の背後からサッカーボール程の紅い球が飛んできた。

だがそれは、朱織に当たることは無く、五人の前で停止した。

よく見ると、球と呼ぶには些か奇妙な形だ。大量の糸が伸びていて、所々穴が空いている。

その糸が髪で、その穴が口や鼻で、その球が仲間の頭だと気付くのに然して時間は掛からなかった。

「オ。チヨウド終ワツタトコロカ」

頭が飛んできた方向から、身体を真っ赤に染め上げた人形が一体近づいてくる。

「キャハハ。おつかれ、チャチャゼロ」

一番最初の爆発の際、煙や粉塵に紛れて、誰にも気付かれず、ひっそりと行動していたチャチャゼロが戻ってきたのだ。

「ア？ 何カ、キャラ違ワナイカ？」

「細かいことは気にしたら負けだよ」

「ダナ。取り敢エズ、アッチニ潜ンデイタ奴全員ノ死体ヲ転ガシテアルゼ」

残された希望はあっさりと、語られることもなく、潰えてしまった。

「オツケー。じゃ、さっさと死体集めて処分しよっか」

まだ息のある五人はその光景をただ呆然と見ているしかない。

「　　っ！！」

叫ぼうとも声は既に出ず、立ち上がるうと身体に力を入れるだけで、血液が細胞が筋肉の繊維が骨の密度が、悉く殺がれていく。

しかし、その思いが通じたのか、朱織は足を止め、振り返る。

「おつといけない。忘れるところだった。色々教えてくれたお礼です」

パンパン、と二回拍手を打ち、結界を更に強化する。

「ゆっくりじっくりねっとりたつぷり、苦しんで死ね」

死刑宣告をする彼女は、生き生きしていて、大輪の花のように輝かしい笑顔であった。

これが彩識に、最も凶々しいと謂わしめる殺人鬼、零崎朱織のチカラ。

「思ツタヨリモ、アツケナク終ワツタナ」

死体を集めながらチャチャゼロが言う。

チャチャゼロにしてみれば十五年ぶりの殺し合いだ。実は彩織に言われた瞬間から結構愉しみにしていたのに、歯応えが無さ過ぎて消化不良気味になっている。

「まだ終わってないよ」

死体を一ヶ所に集め、敵が持っていた符を存分に使って焼却処分をしながら、朱織が応える。

「この 七耀 って組織、何百年も前からある古い結社で、人数もそれなりに多いんだよね。まあ、ほとんど魔法協会に鞍替えしちゃったみたいだけど」

「つまり、マダ殺ス奴ハ残ッテルツテコトカ？」

「うん。どうも彩兄の不始末が絡んでるっぽいし、皆殺しにさせて貰いましょう」

「ケケケケ。愉シクナツテキタゼ」

「キャハハハハ」

そしてこれより二時間後。

七耀 は一人の少女と一体の人形の手によって全滅させられた。

第二五話：鬼の始まり、人の終わり（後書き）

次回は彩識の戦闘と後日談

第二六話：プロジェクターVS（と）スピーカー

なぜ悪い。

奴を苦しめ、殺すことの一体何が悪いと言う。

世界樹前の広場

「しかし、この夏休み、長期旅行に行つてロードショーでやってた『サマーウォーズ』を見逃したのは痛かったな」

彩織の左手の五指から伸びた数十の通卦法で作られた糸が、全方位から立花を襲う。

「おまつ。あの名作を見逃すとかないわー」

糸が触れる瞬間、前触れ無く立花を囲うように不可視の壁が出現し、糸は触れた部分から次々と分解されてしまう。

「ああ、でも、放送されたのはカットとか多かったからなあ。あのシーン好きだったのに」

そしてまたしても前兆無く、彩識の身体が氷に覆われる。

「マジかよ。って、何で放送されてないシーン知ってるんだ」

しかし、通卦法の鎧を破ることは出来ず、氷はそのまま砕かれた。

「そりゃあ、映画館で見たからに決まってるだろ」

彩識の数百の糸が数十の槍を編み、三百六十度全てから突き出され、同時に地面にも幾つか突き刺し、そこから石礫をぶつける。

「ちなみに、『ぼくらのウォーゲーム』も『時をかける少女』も映画館で見た俺は勝ち組」

だが、糸で構成された槍は先程と同じ様に結界に触れた途端分解され、直撃コースの石礫は不自然に軌道を逸らし、立花には掠りもしない。

「なんとという細田守三部作。まあ、俺も好きだけど」

唐突に、彩識に光の束が降り注ぐが、即座に盾を織り成し防ぐ。だが、光は止まらず、盾を崩しながら彩識へと向かう。

「被え！」

盾が崩されると判断すると、修復を放棄し、簡易の絶対結界で身を

守る。

現時点では彩識が劣勢。

改めて二人の様子を観察すると、彩識は最初に受けた右腕の火傷以外に外傷は見られない。治癒の為呪符が一枚腕に貼られ、完治まで後三分といったところか。

そして立花は、どこを見ても姿が見えない。この場に居ないわけではない。確かに声は聞こえ、彩識と攻防を繰り返している。ただ、姿が見えないのだ。

（あー、畜生。ここまで殺り辛い相手は初めてだ。正直、舐めてた侮ってた。千年間研鑽された技術だろうが、見稽古に掛ければ無力だろう、なんて楽観的に考えてた。だけど、見えない。発現した魔法の効果とかはわかるけど、過程が、魔力の流れが全く見えない。姿も見えないがそっちは死の線に対応できる。でも、見えないものをどうやって見取れって言っただよ）

それは例えるなら、理科の実験で水素が発生するのはわかるが、どの薬品を使ったかまではわからないといった感じだろうか。

原因の推測は出来る。今、この学園の霊脈は立花五露によって造りかえられた状態。気付かれない範囲で、喰らいやすいように霊脈を自分の色に染めたことだろう。それが保護色となり、彩識の魔眼に死角を作りだしている。

そして立花はこの世界樹で儀式を行っていた。つまりここが大祭の中心で、死角が最も多く出来る場所。条件までも極悪だ。

彩識は、これがオリジナルの妖精眼なら見極められるんだろうなあ、
とついつい考えてしまう。

神代の魔眼を二つも合わせるなんて暴挙に出ているのだから、一つ一つの精度は落ちるに決まっている。それに加えて、同時に別々のチャンネルを見て脳に負担を掛け過ぎないように、普段は情報を絞って見ている。

エヴァの呪いを解いたり、霊脈の異常を見れたのは、視覚だけに集中出来る環境が整っていたからだ。

だが今、自分と同格、あるいは格上を相手にしながら、隙を一分たりとも見せることなく、眼に集中することが出来るか？

通卦法製の糸は崩されている。ならば鎧だって崩されるであろう。神道の絶対結界や他の防衛手段だって千年も生きていれば対抗策くらい知っていてもおかしくない。二回目は通用しないだろうな。

（はあ。右手を焼かれたのは痛かった。痛覚と策、二重の意味で。これは十全に使えるようになるまで現状を維持し続けるしかないか。それに　）

左手は糸を張り巡らせるので手一杯。魔力系だけではなくピアノ線やら琴糸なんかも混ぜているが効果無し。通じないとわかっていても、辺り一帯に張った糸を全て放棄して新しい手段に打って出るにはリスクが大きい。

ここは右手の回復をちゃんと待った方が無難だろう。時間を稼がしてくれるかはわからないが。

一方、優勢に戦いを進めている立花も内心では驚愕の連続だった。

（やはり惜しい。この系や、アイツが纏っているモノ。魔力と気と、神通力の合成か。神から直に力を貰っているのもそうだが、連中が人間を個人として扱うこと自体例外中の例外だ。人の身に余る力をこつも完璧に操るとは。だが、完璧であるが故にそのバランスを崩して分解することは難しくはない。合成をしなければ火力不足だしな。実物の糸や石礫は『方違え』でどうにでもなる）

方違え。

時の吉凶や方位の吉凶を捻じ曲げる術。陰陽道に措ける基礎とも真髓とも呼べる技法。先程石礫が不自然に軌道が変わったのは、この吉凶を捻じ曲げているからか。

（それに、さっきの結界は神道か。初撃の炎を消したのは陰陽道。一人で複数の魔術を行うなんて不用意にビツクリ箱を開けてしまった気分だ）

彩識は普段から何気なく複数の魔術を行使しているが、実は本来それはあり得ないことだ。

魔術は血や魂に依存する。そして、魔術には『色』がある。その色に魂が染まっていたら、他の色と混ざり合うことは無く、反発しあう。起源や源流が同じで近い色のモノもあるだろうが、普通は補助程度にしか使えない。

例外は西洋魔法ぐらいのモノだ。西洋魔法だけは他の魔術に比べて

色が極端に薄い。凡庸性を高めて、それこそ魔法の存在を知らない、相性も才能もゼロの一般人ですら簡単に扱える程に。

だからこそ、立花は西洋魔法を使わない。

魔法とは本来、唯一度の奇跡を起こすためのモノ。ありふれた凡庸性を求めるのは科学の領分なのだから。

（この分だと、修験道や道教、他にも色々隠してそうだな。何より）

ここで、彩識と立花の思考が重なる。

（ ） コイツ、俺の精神攻撃が効いていない）

操作系のスキルを持つ者どうしは相性が悪い。

人を操ることに長けるということは、逆説的に人に操られないことに長けるということだ。

向き合った瞬間からお互いにずっと相手を支配しようとしてきた。

だが、今になっても効果はゼロ。そうなると自分と同系統のスキルを持ち合わせていることは、察しが付く。

問題はこういった手段かということだ。

相手の手が分かれば、裏をかくことも出来るだろう。それにより精神的に優位に立ち、こちらの攻撃も通じるようになるかもしれない。

しかし、悠長に探り合いをしているわけにもいかない。

（あの右手。普通なら灰になるなり、壊死したりしてもおかしくないんだが、もう治りかけてるな。というか、今もアイツの身体に直接、一撃死相当の魔法を撃ち込んでるんだが、効果無しってどういふことだよ）

やはり糸と鎧では密度が違うらしく、簡単には崩せない。どころか、生半可な攻撃は逆にこちらが無効化される。

（様子見はやめて、完治して手を打たれる前に、全力でやるか）

それはある意味賭けだった。今有利に戦闘を進められているのは、こちらの手がバれていないからだ。

全力を出すということは、それなりに準備が必要になる。もしもバればすぐさま対抗策を練ってくるだろう。

そして、消耗戦や長期戦をする気は立花には全く無い。

言葉を交わし、幾度も攻防を繰り返したが、未だに彩識の底が見えないのだから。

それは千年近く生きた立花にとっては、不気味な事この上ない。

故に一撃で決めるため、立花は己の最強の術式を構築する。

その動きを彩識が察知出来たのは、本当に運が良かったとしか言いようがない。

十全に見ることは出来ないが四全くらいならヒントを得れるかもと、五本の指で数千の糸を操りながらも、立花とその周囲を見続けた。

そして気付いた。ほんの一瞬だったが、気付くことが出来た。

陽が当たっている場所と影との境界に些細な、しかし、確かな違和感があることに。

直後。

太陽が歪んだ。

先程の光の束とは比べ物にならない密度。まさしく、それは光の槍と言えるだろう。

槍は真つ直ぐ彩識の頭へ直進する。

しかし、彩識には届かない。

何か来るとさえわかっていれば、避けるのは容易いことだ。

問題は千年生きている化物を相手にする以上、同じ防衛手段を繰り返して使えないことだったが、立花の魔法の仕組みも見当が付き、心配事は無くなった。

故に彩識は心置きなく札を切る。

数千にも及ぶ糸を張り直し、『陣』を織り成し、一つの魔法を形成

する。

それは彼の戦友、アルビレオ・イマが好んで使う重力魔法。彩識の頭上に出現したブラックホールにより光は全て呑み込まれ消滅した。一連の光景を見た立花はすぐさま糸を消そうとするが、それよりも速く、彩識が周囲の地面や壁を止めることなく切り刻んでいく。既に広場の原型なんて残ってはいない。

「あーあ。バレちゃったか」

そう口にする立花。彩識のこの行為により、手品のネタが割れてしまったことを悟る。

「某弾幕シューティングゲーム風に言うならば『光を操る程度の能力』ってところか」

「よくわからんが、お前の想像通りだろうさ」

「納得いった。だから呪文も動作も無く、大掛かりな魔法をいきなり使えるわけだ」

ついでに透明人間にもなれるのな、と彩識は最後に付け足す。

要はリンゴが何故赤く見えるのかと原理は一緒。

光とは、人の目で見える範囲の波長の電磁波を可視光線と言い、この事を指して呼ぶことが多い。

リンゴの表面は可視光線の中の赤く見える波長だけを反射し、それ

以外を吸収しているから赤く見える。

ならば突然、リンゴの一点だけ光が吸収され、別の光が反射されればどうなるだろうか。当然、その一点だけ色が変わる。

そして今、この土地は最大限に立花の味方になっている。

つまり、立花は自分の思い描く魔法陣をロスタイム無しで、相手の後ろの地面といった死角に出現させることが出来るということだ。最初の炎は彩識の右手に直接描いたのだろう。

だがこうして、キャンバスになる物を休むことなく破壊し続けていれば、魔法陣は描けない。

（ってことは、俺が音によって聴覚から干渉しているように、アイツは光によって視覚から干渉していると。あつぶねー。魔眼を全力で使ってたら流石にヤバかったかも）

どうせ地面や壁とほとんど同じ色で呪的文様とか所狭しと描かれてたんだろうな、と彩識は予想するが、大当たりである。

「はぁ……。この魔法も見破られたか。オリジナルで結構苦労して創ったんだが」

「オリジナルかよ。にしても光使いとは、えげつないモノ考え付くな」

「お前の系だって十分凶悪だろうが」

「待て待て。凶悪なんて言葉はウチの妹にこそ相応しい。俺のこと

は最悪と呼んでくれ。もしくは最果て」

「何だそりゃ」

「戯言だよ。で、お前の魔法はもう通用しないからその結界を解いて大人しく殺されてくれないか？」

「断る。そういうお前こそさっさと諦めて死んでくれ」

「諦めの悪さには定評があるんだ。それに俺はこれから『サマーウオーズ』をレンタルして見なくちゃいけないんでな」

そして、第二ラウンドが始まるかと思われたその時。学園全体にとある調が鳴り響く。

（全く随分待たせてくれるな。茶々ちうめ）

思考では軽く毒づくものの、口端は少しだが、確かに吊り上がっている。

それは彩識が家を出る際、二人に頼んでおいた曲であり、待ちにも待った瞬間が到来したのだ。

「ところで、音つてのが何か知っているか？」

と、彩識は立花に尋ね、天蓬、と聞こえない程の音量で呟きながら、足を前に一歩踏み出す。

「空気の振動だろ」

天内、天衝。

一步。また一步と、近付いて行く。

「そう。それで同じ振動をぶつけてやるとさ、音の聞こえない点ていつのが出来るんだよ」

天輔、天禽、天心、天柱、天任。

気付かれないよう、悟られないよう、出来る限り音量を抑え、慎重に足を運びながらも前へ進む。

「……それがどうした？」

「こういうことだ。天英！」

そして、地に足をつけるのが七度目になるとき、変化が起きた。

彩識の辿った軌跡が白く輝きだしたのだ。

「北斗か　　！！」

その軌跡は寸分の狂いなく北斗七星を描いていた。

意図を察した立花は懐から符を取り出し、すぐに彩識の行動を阻もうとするが、

「何！？」

この機をずっと待っていた五人の零崎彩識に逆に阻まれてしまう。

そう。茶々丸と千雨に頼んだ後に造っておいた影分身だ。如何に立花五露程の達人といえど、殺気も敵意も感じさせず、ハリボテ並みの強度の上、ほぼ完全に気配を遮断されては気付ける筈がないだろう。

仮に気付けたとしても、精々小動物かと勘違いしてしまうのがオチだ。何より、数百年ぶりに自分と同格の相手をしている時に、離れた場所に居る小動物の動きなんて普通は気にも留めない。

だが、幾ら耐久値が障子紙といえど、戦闘技術は間違はなく零崎彩識本人のもの。立花も反射的に彩識から影分身へと攻撃対象を移してしまう。

そして、その隙があれば十分。

「『清陽は天なり、濁陰は地なり。伏して願わくば、守護諸神、加護哀愍したまえ』」

彩識は完治した右手で『倉庫』から符を引き抜く。

「『急々如律令』」

彩識の魔法は、足跡と無音の場所とを照応し、音の波に乗り、瞬く間に学園全土に広がった。

この魔法の目的は、攻撃ではない。

立花によって造り変えられた霊脈を、元のあるべき姿へと造り直す。

これにより、立花にとって優位な条件は消え去った。

「大変だったんだぜ。拡声器を使ったことによる周波数の微調整とか、ある程度北斗を形作るように無音になる場所を計算して、そこに拡声器設置するように頼むのは」

十八年前の俺は随分暇だったんだな、と昔を思い返したところだが、まずは今回の一件を片付けてからだ。

「ク、クク。アハハハハッ！」

突然、きつちり影分身を全て倒した立花が高笑いをし始める。

「何だ？ 狂ったか？ 面倒だから逃げたりせずここで死んでくれよ。どうせお前の光は通用しないんだし」

土地が立花に味方をしなくなった以上、光を操るにも幾つかの工程が必要になる。逆に彩識は魔力を見切れるようになり、これからが本領発揮だ。

先程とは打って変わって、完全な攻守交代。

「ハハハッ！ 舐めるなよ、ガキが！」

立花は新しく懐から一枚符を取り出す。そつだ。まだ立花には千年間研鑽し、積み重ねてきた陰陽道がある。

「疾！」

彩識に向けて符を放つ。しかし、立花が放った符は手を離れた瞬間

に、意図せずして燃え尽きてしまう。それはどう見ても魔法の失敗を物語っていた。

「なっ!？」

数十年ぶりに立花は心の底から驚愕という物を体感した。

それも当然だろう。今までずっと積み上げてきたものが、文字通り魂までも弄って続けてきたものが、不発に終わったのだから。

そして驚愕は動揺へと姿を変える。立花は自分の腕に絶対の自信を持っている。その自信が今、音を立て崩れ落ちようとしていた。

それを否定する為、咄嗟に立花は再び符を放とうとしてしまう。先程の符のように立花を守っていた結界は既にないというのに。

当然その隙を彩識が見逃してくれる筈がない。

立花が符を放つよりも先に、彩識の糸が立花の四肢を刎ね飛ばす。

「所詮これが、お前たち魔法使いの限界なんだよ」

倒れ行く立花に彩識の言葉が浴びせられる。

戦いの最終局面でこんな都合主義など起りうる筈がない。

これは彩識が初めから狙っていたことだ。自分の魔法を絶対的に信頼しているならば、発動しなかったとき、どういった行動を取るかなど簡単に想像できる。

その為に魔法を、厳密に言えば陰陽道を発動させない環境を造ったのだ。

あの五体の影分身。まさか本当に隙を突く為だけに待機させていたわけではない。

隠密性を存分に生かし、広場周辺に霊符を貼って回っていた。

そして、土地が立花から解放されると同時に、彩識が糸で霊符どうしを繋ぎ合せ、俗に『禁呪』と呼ばれる結界を織り成した。

幾ら彩識といえど魔法全てを禁じることは出来ないが、場所を絞り込み、尚且つ対象を陰陽道とその派生のみに限定すれば、千年の歴史すら欺くことは可能だ。

「な、るほど。確かに、……お前、は、最悪だ」

「褒めてくれてありがとー」

一度確実に欺ければ、二度目は必要ない。

彩識は手にソードブレイカーを持ち、立花に歩み寄る。立花から見てもその姿は、死神を彷彿させるモノだった。本人が聞けば、殺人鬼だと否定するだろうが。

「甘い。ここで、俺を殺、しても……来世、来々世の俺が」

「どこの魔王被れだ、お前は」

四肢を切断されて尚、精神的に余裕があるのはこの為だ。立花には

来世という究極の逃げ道がある。

死を自らのサイクルに取り込んだ立花にとって、死は恐怖ではない。現に未熟な頃はそうして危機を逃げ延びたこともある。

だが、今回ばかりは相手が最悪だった。

「安心してくれ。俺が殺すのはお前の命じゃない。存在だ」

音も無く、ソードブレイカーは死の点へと突き立てられた。

そして立花は理解する。

そうか。これが 終焉。

こうして、立花五露という長い長い歴史は幕を閉じた。

「はああああああ」

戦闘が終了し彩識、いや、彩輝は深く息を吐きながら瓦礫と化した広場に座り込む。

「危なかった。ヤバかった。一番危険だったのはタイムリミットだな。戯れに糸を全部斬られてたら絶対勝てなかった。寧ろ初撃で両腕燃やされてたら確実に俺が死んでた。慢心って怖いわー。通卦法をこうもあっさり分解されるとは思ってたし、これは検討の余地ありだな。そして何より。まさか魔眼が一時的にも封じられる日が来るなんて。結局あの『光を操る程度の能力』は見取れなかつ

たしなあ。ベースは陰陽道みたいだから今度頑張って創ってみるか。完成形はわかってるし」

と、一人で反省会を始める彩輝。瓦礫の中、たった一人ブツブツ呟く姿は救急車を呼ばれても文句は言えないだろう。勿論その際に運ばれるのは精神科医だが。

「まあ、これで依頼は完遂だと思うんだがどうだろう？ ああ、俺の仕事ぶりはアフターケアまで充実しているからその辺は心配しなくていいよ。俺がこの土地に居る間は何人たりとも君に手出しはさせないから。それじゃあ、おやすみ」

反省会を終えると本格的に独り言を呟き始めるが、まあ、アレですよ。彩輝も自分と同格相手に勝って少しハイになってるんですよ。

そのテンションのままクライアントに報告しちゃったんです。

そして、普段通りのテンションに戻り、

「さて、帰るか」

と、帰り道にあるTSUT YAを目指して歩き始める。

八月三十一日。夏休み最終日の残り時間は、全員揃って『サマーウォーズ』を見ながら過ごしたのであった。

第二六話：プロジェクターVS（と）スピーカー（後書き）

この光使いの設定はCanvas3をプレイ中に何故か思いついたんですよね。

あの時は流石に自分の思考回路が理解できなかった。

そして、次回こそ後日談です。

第二七話：これがたった一つの冴えたやり方（前書き）

前回の前書きは友人の戯言で原作とは関係ありません。

紛らわしいことを書いて本当にすみませんでした。

そして、間違えて感想を一件消してしまい、重ね重ね申し訳ありませんでした。

第二七話：これがたった一つの冴えたやり方

後日談というか、今回のオチ。

ドラマチックかつファンタジックかつアクロバティックで、そういえば一度も「不幸だ」とか呟かなかった夏休みは終わりを告げた。

これらのセリフは一度でいいから言ってみただけなので意味は無い。

まあ、そんなわけで、本日は九月一日。またしても学校というものが始まってしまったわけですが、今学園全体では世界樹前の広場が全壊しているという噂で持ちきりだ。

流石に内々に処理できる規模ではなかったらしく、工学部や土木建築研など一般サークルにも協力を仰ぎ、七割がた作業は終えたようだ。

そして当然のことながら、原因は不明。竜巻発生から宇宙人の侵略までありとあらゆる噂が飛び交っている。どうやら新しい都市伝説を作っちまったみたいだぜ。

とは言っても、ジジイやタカミチは普通に気付いてるだろうし、事後処理が粗方終わった今、何らかのアクションを取って来るだろう。

そして、そんなことを考えていたら、いつの間にか始業式が終わっていた。朝のSHRでさよちゃんが軽く自己紹介しているところまでは記憶があるんだが。

どうやらこの学園には新手のスタンド使いが紛れ込んでいるようだ。断じて木乃香に起こされるまで爆睡してたわけではない。

「それで？ 兄様は夏休みの間どこ行つとつたん？」

「うん？ ちよつと青森に旅行に行つてただけだが」

で、今は式が終わつてHRが始まるまでの休み時間。木乃香から質問責めにあっている。

まあ、この夏休み学園に居たのは四日ぐらいだからなあ。一応出発する前に『旅に出てきます。探さないで下さい』とメールを送つてはいたんだが。

「ダウトや。旅行つて言つても一ヶ月も滞在せんやろ。携帯もずっと電源切つとるか圏外やつたし」

そりゃあ、魔法世界に電波なんて届くわけないな。しかし、全部嘘という訳じゃないからダウトという表現はこの場合不適切だ。

「兄様」

僅かな沈黙を回答する気が無いと捉えられたのか、抑揚の無い声で催促される。何だか怖いよ、マイシスター。

「……怒つてる？」

「怒つてない。七年ぶりに再会したのに、また『探さないで下さい』とか言つて行方眩ました兄様のことなんて、全然全く怒つてない」

怒ってるよね？ 標準語になるぐらい怒ってるよね？

「……………」

「わかったわかった。正直に話すから。だから目が全く笑ってない笑顔で見つめてくるのは止めて下さい」

懇願すると一応止めてはくれたが、俺に掛かる圧力が減ることは無かった。ホント、誰に似たんだか。もしくは誰の影響を受けたんだか。

というわけで、夏休み行った場所は

「えーっと、まず友人に会いにヴェネツィア行って、（アリアドネーとヘラスの）町や村を回った後、日本に戻って来たんだよ。で、実家にちよっと顔出して、その足で青森まで観光しに行った後、学園に帰って来ました。さて、この中に嘘が一つ」

「うーん。最後の嘘が一つって言うんが嘘」

残念。正解は実家に帰る前に一旦学園に戻って来たこと。ていうか、何でその前のことは本当だとわかるんだ。双子のテレパシー的な感じか？ 何だか失踪中の言い訳に使った戯言が看破されている気がしてならない。

「って、なんやヴェネツィアって!？」

「いやー、小学生の時に友達百人作ってみてさあ。最近疎遠になつてたから会いに行ったんだ」

言ってから気付いたが、俺小学校行ってないじゃん。義務教育に真っ向から盾突いてんなあ。ま、ここは労働法が軽視される世界だから別にいいか。

「むー。兄様のケチ。何でウチも連れてってくれんかったんや」

「旧交を温めに行っただけだし」

「でも、せつちゃんとは行ったんやろ？」

まあ、同じ期間学園に居なかったら嫌でも気付くわな。刹那の場合は長期旅行なんてする予定あったら木乃香に話してるだろうし。

「行っただね」

ここは事実を話しておこう。下手な嘘ついたら後が怖いし。

「何でそこでウチを誘ってくれんかったんや」

ちよつと拗ねたように呟く木乃香。木乃香は可愛いなあ！

「悪かったよ。次の旅行……春休みぐらいになると思っけどその時は一緒に行こう」

「絶対だよ」

「ああ。約束だ」

しかし、一ヶ月後この約束が守られることは永遠に無くなってしまった……なんてモノローグが入らないよう気を付けよう。

「ほら。そろそろHRが始まるぞ。ちゃんと席に着いとけよ」

「うん。わかつとるよ」

そして学校にチャイムが鳴り響き、タカミチが教室に入ってきた。

そんなに多くはない連絡事項を全て伝え終わり、改めてさよちゃんの自己紹介に移った。

まあ、初日だし、中学校だし、ゆとり教育だし、ってことで授業開始にはならず、HRと言う名のさよちゃんへの質問タイムが終わり簡単に掃除をして、昼前に解散となった。

と言っても、全員帰らずにそのままさよちゃんの歓迎会に移行しようとしたが、さよちゃん本人としては一年の頃から一緒に居るし、『慌てていたので荷物の整理が出来ていない』などの建前を言っ辞退。

実際は昨日の事件に関わった者が教員に絡まれる前にちうちちゃんの《門》を使って俺の自宅へ逃げただけなんだが。

本人不参加ならどうしようもないということ、最後の最後にカラオケとか行って騒ぐ者、寮に帰って寛ぐ者、昨日新しく出来た都市伝説について調べる者、少数派で宿題に追われる者などに分かれていった。

そして、その中でも『帰って研究だ!』とか言ってる、少数派どこ

るかお前ら二人しか居ねーよと言わざるを得ない超と葉加瀬に話しかける。

「何カナ、彩輝」

「どうしたんです、彩輝さん？」

一応念のために盗聴防止の結界を張って単刀直入に本題に入る。

「確か、二十二年に一度の世界樹大発光の時に騒ぎを起こすって言うってたじゃん」

「ム。手伝ってくれる気になったの力。そうかそうか。イヤー、彩輝が手伝ってくれるのなら恐いもの無しネ。計画の細かい点については」

軽快に笑いながら話をする超鈴音。

「待てや。何で俺が協力すること前提で話が進んでいくんだよ」

「違うの力。なら何の用ネ。こっちは忙しいんだ」

一転。冷めた目で俺を見てくる超鈴音。

えー。その態度の変わりようは流石に無いと思います。俺も割とやった記憶があるけど、成程。やられた方はこんな気持ちなのか。悪いことしたなあ、と思わないでもない。

「有益な情報を持って来てやったんだよ。本来なら教えてやる義理も無いってのに」

「あはは。悪かったネ、冗談ヨ。それで？ 有益な情報とは何力ナ？」

「二十二年に一度の周期がズレるかもしれないって話」

「……詳しく聞こうカ」

さっきまでとは違い、目がマジになっている。このままシリアスパートへ移行……出来るだろうか。

「昨日世界樹前の広場で戦闘があったのは知ってるよな？」

「ああ。修復にウチの作業用ロボットを全機貸してくれと頼まれタヨ。何事かと思って私も現場を見に行ったが、無事なモノが一つも無い酷い有様だったが、……まさか」

「うん。俺がやった」

ていつか、あんなこと出来るのはこの学園で俺かエヴァしか居ないだろう。まだ他に世界最強レベルの実力者が潜んでいるなら別だが。

「まあ、そんなことはどうでも良くてだな。肝心なのはその戦闘の際、一ヶ月という短い期間に二度も霊脈を根本から造り変えたことなんだよ」

「あの基準が今一良く分からないんですが、大変なことなんですか？」

とは、葉加瀬の質問。

「電流とか電圧とか碌に調節もせず、電気を流しながら回路を組み立てていくと思ってくれ」

結構危ない橋渡ってるんだよな、俺も五露も。まあ、多分お互いに自分が失敗するとは一ミクロンだって考えてないけど。良く言うだろう。イメージするのは常に最強の自分だと。

「そんな訳で現在ここの霊脈は眠っている。地球の歴史上初と言っても過言じゃない事態が起こったんだ、世界樹も周期通りに発光するとは考えない方がいい」

「成程。言いたいことはわかったヨ。質問だが、発光は早まるのか？ それとも遅れるのか？」

「そこまで知るか。当分は世界樹を観測することに力を入れて、何かあってもすぐに動けるよう、準備を整えて置くんだな」

「一応、礼を言っておくネ」

「どういたしまして」

会話終了。結界を切る。

「一応成功するよう祈っというてやるよ。じゃ、また明日」

「さようなら」

「また明日ネ」

そして二人と別れて教室を出た俺は、取り敢えず帰るか、と思い帰路に着こうとしたが、

「ちょっと待ってってくれるかな、ハウル」

と、タカミチに呼び止められた。

「何だよ」

「学園長室まで来て欲しい」

ま、今日中に来るだろうとは思ってたし、何より暇だしな。付き合っ
てやるか。

「なら、さっさと行こうぜ」

目的地を自宅から学園長室に変更し、途中タカミチとの会話は無く、俺は軽い足取りでタカミチは色々考え込んだ表情をしながら学園長室へ向かった。

到着した学園長室にはジジイが待っていた。当たり前だな。そしてジジイの横にタカミチが移動する。

何だか無性にキセルが吸いたくなってきた。ニコチン中毒者のような発言だが、俺の生命力はニコチンやタール如きにやられるほど軟じゃない。

かと言ってここは気軽に吸える雰囲気じゃないしなあ。……取り敢

えず『倉庫』からキセルを取り出して吸うことにした。

空気は読むものではなく吸うものですよ。自重？ 何それ？ 美味しいの？

「彩輝。何故呼ばれたかわかっておるかの？」

「わかってる。エヴァを許可無く外に連れ出したのは不味かったけど、問題を起こしてないんだから大目に見てくれ」

一回軍が動いたけどそこはスルーで。エヴァ本人だとはバレてないし。

「巫山戯るでない！ 何故九十二人も一般人を殺したんじゃ！！」
全然巫山戯てない。極東の島国で九十二人が変死するよりも大問題だと思っただが。

にしても百人近くか。結構いたんだな。そして朱織が二時間で殺ってくれました。ジェバンニも真つ青な早さだぜ。

（朱織。昨日の感謝の念を込めて何か奢ってやるよ。皆にも何がいかましいといて）

と、朱織に念話を送っておく。

（あ あ。ちょっと待って）

さて、次の返答があるまで話を進めておくか。

「ハウル、彼らが一体何をしたっていうんだい？」

お。ここで付き合いの長さの違いが出たな。

ジジイは『理由』。タカミチは『原因』。ジジイは幾らか零崎について調べていると思っていたが、まあ、こんなもんか。

一度吸い込んだ煙を吐き出し、

「七耀 って勿論知ってるよな」

と、答える。

流石にこの名がここで出るとは思っていなかったらしく、ジジイの顔が驚きの色に染まる。

「じゃが、あの結社は」

「解散なんてしてねーよ。どころか着々と学園滅亡計画を練ってたぜ」

最後までは言わず、ジジイの言葉を遮る。

（彩兄。前ロンドンで彩兄が言ってたシュークリーム美味しい店があったでしょ。皆それで良いって え）

と、朱織から念話が入る。シュークリームっていうと……ああ、あの店か。

（あ、龍宮も居るのか？）

(うん。だから彩兄入れて八人分だね　え)

(オーケー。じゃあすぐを買ってくわ)

という訳でさっさとこの会話を終了させようか。

シュークリーム>>越えられない壁>>報告、の図式が成り立っているが気にしたら負けだ。

「そうそう。一時流行ってたコックリさんだがな、アレ全部ジジイを呪い殺すためのモノだけ」

「なっ!？」

予め『倉庫』に入れておいたヲニキリ様の紙をジジイに渡す。

「アイツは学園を滅ぼす気満々だったし、トップが倒れたらその隙を突いて関西の強硬派も動いていただろうし、たった九十二人の命で学園に居る全員の命を救えて、正義の魔法使いたちは良かったんじゃないの?」

「それは結果論じゃ!　彩輝なら殺さずとも無力化できたじゃろ!」

確かにその内九十一人は可能だろうさ。

「舐めすぎだよ。『魔法使い』の執念ってヤツを」

「……まだ初等部の子供もいたんじゃないぞ」

いえ、そいつが元凶です。運が悪ければ俺の方が殺されていた紛うこと無き化物です。それに何より

「生かしておく理由も無いしな」

ま、後は自分たちで調べてくれ。と俺はシュークリームを買いに行く。

「それでも」

部屋を出ようとする俺に後ろからジジイが声を投げてきた。

「皆殺しにする必要は無かったぞ」

その言葉が戦線を退いて日和見から出た言葉なのか、数々の修羅場を潜った経験から出た言葉なのかは俺にはわからない。

俺は振り返って、ただ一言。某探偵事務所の扉に書かれている言葉を告げて去る。

「It's the only NEET thing to do」

「ただいま」

と、ロンドンまでシュークリーム買いに行った俺が帰って来ましたよ。学園長室を出てからまだ十分足らずしか経っていない。論理魔術マジ便利。

既に全員が揃っていて、話をしていたり、ゲームしてたり、パソコンに向き合っていたり、寝てたり、銃の手入れしていたりと自由すぎないか。

「茶々丸ー。コーヒー淹れて」

事後報告を適当にしてシュークリームを買いに行った俺も大概自由なんだろうが。普通に考えると自由通り越して迷惑な行為だな。

自分や身内のことしか考えず、それを基準に行動していたら組織には居られなくなることがあるので気を付けてね。

なんて、誰かに注意を促していると、皆自分の作業を一旦中断して集まって来た。寝ていた一名に限っては俺が起こしたが。

茶々丸が全員分の飲み物を配り終え、俺もシュークリームを全員に渡し、『ザツハトルテやフォンダンショコラ。さらに八つ橋もあるぜ』とテーブルの上に一応並べておく。

八つ橋が浮きまくっているな。

「昨日一日は本当にお疲れ様でした。学校が始まったけど、まあ時々サボりつつ寛いでいこうぜ」

「いや、サボっちゃダメだろ」

すかさずちうちちゃんがツツコミを入れてくる。

「ああ。そういえばネットに広がったヲリキリ様はどうなった？」

「ん？ 出回ってた画像データはちょっと不法な手段使ってたほとんど消しといたが」

おお。仕事が早い。ジェバンニ二人目か。

「噂自体についても、現在広まっている世界樹広場の事件を盛り上げることによって、鎮静化に成功しました」

茶々丸も情報操作を頑張ってくれたようだ。ジェバンニ三人目。やっぱり噂に対抗するにはよりインパクトの強い噂しかないよな。

「なあ、ハウル。そこまで考えて戦ってたのか」

意外なモノを見るような目でエヴァが話しかけてくるが、

「いや？ 全然。今回ばかりは余裕なんて無かったってのが一番の理由だな」

「考え無しかよっ！」

と、情報操作組には驚かれた。多分噂を駆逐しやすいように俺が配慮したか思っていたんだろうな。

兎も角ネットの方は対処出来たということで、次はリアルか。

一度使用した紙はまた使えないと言っても、掘り起こしてコピーして配布、スキャンして再びネットで流行とかなったら目も当てられない。

「神社の紙、掘り起こすの面倒だなあ。頑張つてね、龍宮。神社の掃除は巫女の仕事だろう?」

「依頼するから手伝つてくれないかい?」

「おいおい。夏休みが終わった今、俺は唯の一般学生だけ。新しく依頼なんてされてもねえ」

と言つてみたけど、どうせアフターケアの中に入ってるんだからやるんだけどね。

「あの、それなら私がやつておきましたよ」

そう言つて席を立ち、部屋を出るさよちゃん。そして、戻つて来たさよちゃんの横には大量の紙束が宙に浮いていた。全部積んだら軽く天井に届くな。

「皆さんが頑張っている時に私にも何か出来るかと思つて。ちょうど『騒霊現象』の練習にもなりましたし」

ジエバン二四人目。ていうか皆仕事が速過ぎると思つんですが。一晩も掛けてないし。

「ありがとう、さよちゃん」

「礼を言うよ。相坂」

取り敢えず、紙束は全て燃やしておく。室内だが対象以外を燃やすなんて三流の真似はしない。煙もすぐに換気する。

おっと、そうだった。室内から家を連想することで割と大事な事を思い出した。

この家のセキュリティ未だに建てた当時と同じなんだよな。つまり、不法侵入者即抹殺。

今回の一件で若干微妙な立場になったからなあ。正義の魔法使いとかが昨日の事件を知ったら絶対に乗り込んで来るに決まってる。そして、当然ながら誰も入室を許可してないためセキュリティ作動『あるえ〜？ こんなところに石榴なんて置いてたっけ〜？』的な展開になるのが簡単に予測できてしまう。

それは流石に不味い。

俺だって対立関係ならまだしも、敵対関係を好き好んで作りたいわけじゃないしな。

というわけで、抹殺から半殺し程度にレベルを下げて、侑子さんや都和子さんが営んでいる店のように、この家を認識出来る条件みたいなのを付けておこう。

「まあ、これで学園側へのフォローは終了かな」

「え？ 彩輝様、フォローなら広場の修復とかもやっておいた方がいいんじゃないか……」

なんてことを刹那が言ってくるが、何か勘違いしてないか。

「依頼は完遂したんだ。その過程でどんな被害が出ようとも、依頼主が言っただけなら、俺の知ったことじゃないね。ヨニキリ様の

撲滅は依頼内容に沿ったものだが、修復は契約外だ」

フォローっていう表現も正しくなかったかも。学園側を助けるつもりなんて微塵も無かったし。単にアフターケアと内容が被ってただけだからなあ。

「おい、ハウル。お前に依頼したのはジジイじゃなかったのか？」

あ、そっぴや言ってたっけ。

「まあ、守秘義務ってことで、このことは他言無用で頼むよ」

俺の言葉に全員が頷く。

「俺に依頼したのは、ここの 竜 だ」

「二十一世紀の日本の学園にドラゴンなんぞ居るかあっ！」

いや、居るよ。ワイバーンなら。図書館島の地下に。しかし、この話とは関係ないので、それは横に置いといて。

「その下等種のドラゴンじゃなくてだな、」

と言うと、刹那、ちうちちゃん、茶々丸が、『あれを下等種扱いか』と少し遠い目をしていた。まあ、話を続けて、

「 竜 っていうのはこの場合隠語で、霊脈のことを指すんだわ。わかりやすく言うと、意思を持つ超自然現象ってところか」

だから、ヨニキリ様みたいに霊脈に澱みを造る可能性のあるものは、

なるべく駆逐しておきたかったんだ。

「……いきなり話が大きくなって理解出来ないんだが」

「霊脈って意思を持つのか？」

「そもそも何で彩輝様に？」

色々と疑問が述べられる。まあ、原因は十中十、俺だ。

「前も言った気がするけど、視るってのは意味づけることなんだよ。俺が視続けている内に自我が生まれちゃったんだろうね。で、自分の身が危なくなっただので、唯一関係性を持つ俺に助けを求めてきた」と

そんな感じだと俺は予想している。

啞然とする面々。ちなみにさつきから会話に参加していない朱織は全種類食べ終わって、一人ソファで寛いでいる。

「何でもありとかいうレベルじゃないだろ」

「請負人が助けを求められたんだぜ？ 断る方がどうかしてる」

後は陽が落ちるまで各々の疑問に答えていった。最後の方は全く関係の無い無駄話になっていたがそこは御愛嬌という事で。

あ、そうそう。今度あの子が目覚めたら、ここに住んでいいかちゃんとお伺いを立てておかないとな。

第二七話：これがたった一つの冴えたやり方（後書き）

この話で出てきた英文の訳はサブタイです。

では、後書きらしい後書きを。

立花五露というキャラは、彩輝に殺人鬼の性質が無く、普通の魔法使いだっただけならと考えて作ったり、

西と東の対立はよく書かれますが、東と東の話はあまり読んだことが無いと思い、この二つを足して今回の話を書いてみました。

というのは後付け設定で、最初は単に『学園と言ったらコックリさんだろ』と、コックリさんをやりたかっただけなのに……どうしてこうなった。

次回からは学園生活を少し書いて、漸く原作開始です。

その内『B・A・D』ネタやりてえ。

第二八話：とある休日 表（前書き）

お久しぶりです。

九月の終わりに期末があつたり、Javaやブレットボードと死闘を繰り広げたり、Missingやオカミさんを読んだり、トワプリとアビスの実況を全て見たり、シュタインズゲートをプレイしていたらいつの間にかこんなにも時間が。

第二八話：とある休日 表

12：15 木乃香視点

図書館島。

大戦の戦火を避けるべく世界中から貴重書が集められ、その増加に伴い地下に向けて増改築が繰り返された巨大図書館。

今となつては全貌を知る者はおらず、それを調査するため発足したのがウチの所属する図書館探検部なんや。

「今日はこれで解散だつてさ」

その部活動もたった今終わった。

「そうですね。ちょうど昼ですし、これからどこか行きますか？」

今話してるのは同じ図書館探検部のハルナ、夕映、のどかの三人。

「あ。悪いけど、ウチこれから予定あるから」

「んん？ 何だかラブのにおいが」

と、早速ハルナが食いついてくる。相変わらずその探知能力は何なんやろ。

「んー？ 予定って言っても、一緒にお茶して、冬物買って、食事するだけやけど」

「「ええっ!？」」

夕映とのどかが声を上げて驚く。いくらなんでも大袈裟や。

「それを世間一般じゃデートって言うですよ!」

「あ、相手は男の方なんですか？」

「うん。そやよ」

「い、一体誰と? ああ、いえ、立ち入ったことを聞いてすみませ
んです」

「ううん。ええよええよ。相手兄様やし」

「「……………へ?」」

今度は二人揃って思考を止めてしまう。ハルナは『だよー』と笑
いながら相槌を打つとる。

「でもスゴイよねー。女子校に男子が一人だけ転入して馴染んじや
ってるし」

うーん。上手く周囲に溶け込む練習とかそんな感じやないかなあ。

「私はあまり話したこと無いんですが、どんな人なんです?」

「夕映やと、何か議論したら新しい視点を見つけられると思うよ」

なんせ『嘘つきみーくんと壊れたまーちゃん』で読書感想文書いてたし。

「新しい視点、ですか」

「うん。兄様のことやから最初と最後で意見変わつとるやろつし」
主張そのものが変わるから兄様の嘘を見抜くんは骨が折れるんや。
その嘘も半分ぐらい事実を混ぜたりしてて、見破っても漠然としたことしかわからへんし。

「そんな簡単に自分の意見を変えるんですか？」

「ほやなあ。短時間で一番意見変えたんは」

~~~~~回想~~~~~

ある夏の日の会話。

「なあ、兄様。エコポって何？」

「エコポ？ 撫でポやニコポの派生じゃない？ どこで聞いてきたんだ？」

「さつきテレビでかんきよーもんだいとか言ってたんや。冷房は二十八度にせなアカンらしいよ」

それより、撫でポとかニコポって何やる。

「ああ。エコポイントの方ね。でも冷房の温度は個人の自由でいいんじゃない？」

「えー？ 南極の氷が融けて島が沈むんやえ」

「そっか。島に住んでる人は困るだろうねえ」

そう言っつて兄様はエアコンのリモコンを手にする。

手にして、動きが止まった。

「ところで南極の氷って融けるの？」

「え？ 融けるって言っつたよ」

「過去最低気温がマイナス八十度にもなる南極で、一度や二度気温が上がったぐらいで融けるかねえ」

えっと、水が凍るのは零度の時やから……あれ？

「今回の教訓は聞いたことを鵜呑みにしちゃダメってことだね」

そして兄様は設定温度を上げずにリモコンを置いて、また手に取った。

「どしたん？」

「いや、日本の石油埋蔵量とかを考えるとこういう小さい積み重ねが生きてくる時が来ると思って。とか思っただけどそれより先にロストエネルギーの削減やらクリーンエネルギーの効率化を頑張ってくれると信じようか。あー、でもなあ、某国なんて自分たちで何も考えずにただこっちの技術パクってるだけだし、そのくせ資源の使用

量は馬鹿みたいに多いから、やっぱり今の内に溜めておかないと。安直な解決法があるなら永久機関か。問題はどうかやって余剰なエネルギーを取り出すかになるが」

「～～回想終わり～～」

「　　っていうんが五歳ぐらいの時の会話」

「……絶対議論と呼べるものにはならないと思うです」

「一応議題に沿った話題にしか轉換せんと思うけど。」

「でも、それだけ意見を変えたら自分の主張なんて持ってないのと同じなんじゃ……」

「持つとるよ。絶対に大切なことは兄様は変えへんし、曲げもせん」

「さっきからどうも妹の兄に対する理解力が半端なく高い気がするんだけどにゃー」

「えー？　ほんなことあらへんよ。普通やって」

『トム・ソーヤーの冒険』みたく居なくなった兄様探すんに兄様の気持ちになったら見つかるかなって考え続けただけだよ。

今となつては、ほとんど嘘発見ぐらいにしか役立たへん無駄な能力やけど。

兄様と久しぶりに会ったときはわからんかったけど、六年間の失踪理由も大半が嘘で出来とるんちゃうかな。まあ、本当のことはいつか話してくれると思って追及はせんけど。



「いやー、でもお姉さん的にはその内あんたが禁じられた一線を越えるんじゃないかとヒヤヒヤしながら見てるんだけどね」

「ややわハルナ。ウチも兄様も、限度も節度も知つとるし、それをちゃんと弁えとるよ」

兄様は好きやけどあくまでも兄妹としてやし……多分。

「じゃあ、ウチはそろそろ行くなー」

「また学校でね」

で、ウチは一旦寮に戻ってから兄様との待ち合わせ場所に向かった。

12:40 彩輝視点

三十八度の真夏日（笑）も過ぎ去り、葉桜の季節が終わって、紅葉やイチヨウも色づき始めた今日この頃。

どうでもいいが桜って早い段階で葉を散らせておけば、秋にまた開花するらしいよ。

さて、今日は夏休みの埋め合わせという理由で木乃香と出掛けることになった。早朝ジジイから掛かって来た電話を除けばいい一日だ。勿論春休みに行く旅行の予定が消えたわけではない。

まあ、尊敬する人物が、神聖ブリタニア帝国第九十九代唯一皇帝と  
か『破片拾い』<sup>ピースメーカー</sup>やら魔刃の持ち主である俺に死角は無いが。<sup>アイギス</sup>



「悪い木乃香。三十秒だけ待ってて」

「え？」

むう。いつから俺はこんな仕事人間になったのだろうか。と言つても、一流を名乗るのなら契約を反故にするわけにもいかないしな。

「『汝は白樺 汝は成長 されば促せ ベルカナ』」

ルーンを刻んだ小石を放り投げて澱みを除去。これで大丈夫だろ。

すぐに木乃香のところへ戻る。

「どしたん、兄様？」

「いやいや、何でもない。じゃあ行こうか」

そして今度こそ目的地へ。

13:23

取り留めのない会話を楽しみながら昼食を取った後、ウチの姫様は冬物を買いたいとのことなので早速買いに行くとする。

「なあ兄様。これ似合うかな？」

「うん。こっちのワンピースの方がいいんじゃない？」

と、いつの間にか三軒目。

「……ほうやな。兄様の方にする」

「そうかい。ついでにブーツとかバッグとかは見えていなくていいのか？」

あそこに木乃香に似合いそうなニーハイブーツが。

どうもさつきから木乃香が買ってと頼むよりも、俺があれ似合つと思つから買おう、といった比率の方が高い気がする。

「さつきから兄様がお金出してくれてるけど、大丈夫なん？」

「何故か金は無駄に多くあるからな。偶には派手に使つて社会に貢献しないと」

そしてまた次の店へと足を運ぶ。

その途中。

「あれ？ なあ兄様。あれ何やる？」

木乃香が立ち止つて空を指差す。

つられて俺も視線をそちらへ向ける。

すると、木乃香が指している方向には飛行物体Xがあった。ていうか、自動販売機だった。

ついに麻帆良にもバーテン服を着た男がやってきたのか。この学園

ならカラーギャングとか探せば居る気がしてきた。

「あの自販機、こっちに落ちてきよれへん？」

「落ちてきてるな」

はあ。取り敢えず即席の認識障害の結界を張って、魔力で身体強化。

距離を測って　三、二、一。

「ちえいさー！」

元あった所に運ぶのが面倒なので、そのまま飛んで来た方向に、ナメ四五度の回し蹴りで蹴り返す。……あ、やべ。ちよっとズレた。けどまあ、大丈夫だろ。怪我人は出ないと思う。主に世界樹の加護で。少なくとも自販機飛ばした奴が近くに居るだろうし。

「あ、兄様……何やったん？」

流石にさっきまで隣で会話してた木乃香にまで認識障害が及ぶとは思っていない。

「見ての通り蹴り飛ばしてみました」

「自販機蹴り飛ばすってありえへんよ」

「そうか？　古菲とかやりそうじゃね？」

「そう言われるとそうやけど」

あれー？ と考え込む木乃香の思考を逸らすことにする。

「あ、次あそこの店入ってみようぜ」

「え？ うん」

しかしどうするか。木乃香に魔法を教えるのを。詠春の方針には従っているが、早いか遅いかの問題だしな。こうして徐々に外堀を埋めているわけだし。

まあ、細かいところは原作主人公が来てから考えるか。奇跡が起こつて常識的な真人間になつてるかもしれない。

「何か気に入つた物はあつたか？」

「やっぱりこれ以上は悪いわ。もう埋め合わせは十分だよ」

「まあ、木乃香がそういうならいいが」

俺は全然構わないよ。稼いでるから。零崎彩識の名前で『オリジナル・グリモア源書』を売りに出せばノートぐらいの厚さでも数千万は軽くいくんじゃね？

面倒だから書かないけど。

さて、ここからは買い物と言うより遊びにシフトチェンジするのだが、まずこの今まで買ってきた荷物を置いてきていいかな。『倉庫』をすごく使いたい。

「あ、せつちゃんや!」

当ても無く学園内を二人で歩いていると、前方に刹那発見。

「おい。刹那」

後ろから呼び掛けるとこちらに気付いたようで、

「彩輝様。木乃香お嬢様」

と返事をしてくる。

「どうしたんですか、その荷物?」

「主に木乃香の服」

「夏休みの埋め合わせや」

それを聞いて、乾いた笑みを浮かべる刹那。

何だよー。紙袋を五つ程持つてるだけだろー。これくらい普通だろ。

「刹那こそどうしたんだよ。『俺たちの戦いはこれからだ』みたいな微妙な終わりを目の当たりにしてしまったような顔をして」

「そんな具体的な表情はしてません!」

まあ、木乃香が居るので念話で話を聞くと、刹那の方も色々あった

らしい。

朝にジジイから電話があったのを思い出したぜ。

超能力を開発している学園都市に比べると劣るが、この学園も意外と事件発生率高いよな。

「さて、本格的にすることが無くなってきたわけだが、これ一旦置いて来ていい？」

重さ的には大したこと無いけど、やっぱり五袋は邪魔に感じてきた。計画性なんて皆無だぜ。

「えー、もう帰るん？」

「帰りはしないけどさ、荷物置くだけでも」

まだ十五時半だからな。帰るにはまだちょっと早いだろう。

「あ！　じゃあ兄様の家は」

俺の家？

「それを帰宅と言っくんじゃ？」

「ええからええから。せつちゃんも行く」

「お、お嬢様！」

木乃香は刹那の手を引いて走って行く。



取り敢えず、そっちは俺の家の方向じゃないぞー。

15:57

「おかえり い」

「おかえりなさい」

家の扉を開けると朱織とさよちゃんが居た。

「ただいま」

相変わらず重力に打ち勝てるのか心配になるぐらい机に突っ伏している朱織と横でせっせと宿題に励んでいるさよちゃん。

……あれ？　ところで茶々丸は？

てっきり居るものだと思ってたんだが。エヴァはいつも通り自室でゲームとかしてるんだろう。

「なあ、兄様。何でさよちゃんと朱織ちゃんがおるん？」

おっと。何か後ろに触れてはならないものがある気がする。回避不能だが。

「俺の家は某三姉妹の南さん家並みに集まりやすいらしいよ」

「へえ」

いやいや、ホントだって。この家は一種の治外法権みたくなってから好き勝手やれるんだよ。だからそんな疑惑に満ちた目で見ないで。

ていうか、麻帆良の中で更に治外法権とかウチはどんな人外魔境だよ、と現実逃避に走っている俺を気遣ってくれたのか刹那が話題転換してくれる。

「ところで、机の上に鎮座しているアタツシユケースはどうしたんです?」

うん。確かにあるね。何だか見覚えのあるケースが。っていうかちうちゃんのじゃね?

「千雨さんのなんですけど、さっきから携帯に電話しても出ないんです」

さよちゃん、こついつときは念話の方が速いと思う。

(なあ、ちうちゃん。ひよっとしてアタツシユケース落としたりした?)

(おい! それ今どこにあるんだ)

すぐに返答があった。やっぱりちうちゃんので合ってるみたいだ。

(俺の家。朱織とさよちゃんが拾ったらしい)

十秒ほどしたらドアを勢いよく開け、ちうちゃんと茶々丸が入って

きた。

聞くと今まで探し回っていたようだ。こっちもこっちで色々大変だったらしい。

ちよつと労おつかないと気紛れを起こして、夕飯は俺が作ることにした。

18:30

この場にいる全員が食べていくなと言ひ（珍しく朱織が異様なほど食いついてきた）、エヴァも出てきたので、俺も含め計八人分の夕食を作ることになった。

『倉庫』の中に色々食材とか入ってるもんだな。そして影分身の有難さに全俺が泣いた。

その時は木乃香をキッチンに入れないよう気を付けたが。

まあ、メニューは普通だよ。サラダとか肉じゃがとかコロッケとか麻婆豆腐とか炊き込みご飯とか一般的な家庭料理だ。

寧ろ料理で奇を衒うって典型的な失敗例だよな。隠し味とかオリジナリティを出すとか。

そして、食卓に並んだ料理の感想は、

「美味しいです」

「……ウチのより美味しい」

「夏休みするときも食べたけど、美味しいよな」

と、割と評価は高い。

当然と言えば当然だろう。何故なら、零崎彩識の名前を使って色んな店の厨房に入り、料理人の技術を見取ったからな！

段々と料理の量も減ってきたころ、今日あった出来事でふと思い出したことを口にする。

「そっぴゃ、今日空飛ぶ自販機を見たよ」

「えっ！」

エヴァと木乃香を除く全員から注目された。

え？ 何？ 皆見てたの？

意外と見られてるんだな。一般人でもやれる奴は居るし、身体強化だけならギリセーフだろと思って蹴り返したのは不味かったか？

まあ、大丈夫だと信じる。自販機が空を飛ぶなんて池袋某所では日常だし。

その後時刻が十九時を過ぎたあたりで皆食べ終わり、寮生たちを送って一日は終わった。

第二八話：とある休日 表（後書き）

技量があれば『多摩湖さんと黄鷄くん』みたいな話を書いてみたい  
ものです。

## 第二九話：とある休日 裏

06：03 学園内の森の中

「超必殺・漢魂!!」

そんな掛け声とともに一本の木から破砕音が響く。

「うおおおおおおお!!」

男が雄叫びを上げながら尚も連続で破砕音を響かせる。

傍から見るとこれ程珍妙な光景は中々見れるものではないだろう。

男が数メートル離れた木に向かって拳を突き出し、触れられる筈も無い木から何かがぶつかる音がするのだから。

これは俗に言う『遠当て』と呼ばれる技法で気を相手にぶつける簡単なもののだが、英雄と呼ばれる筋肉達磨や殺人鬼が全力を出すとこれだけで更地が出来ます。

つまり錬度を上げれば奥義にも成りえる可能性があるというわけだ。すごいね麻帆良。これやってるの唯の一般学生ですよ。よくこんな人材を山のように発見できると感心するね。

「ふう……。今日はこの辺で切り上げるか」

手の甲で額の汗を拭きながら、修業の終わりを呟く。

そんな彼に全力疾走で近付く影が一つ。

確かに一般人の領域で遠当てを使える彼は凄いだろう。しかし、あくまでも一般人の括りの中で、だ。修業を終え、気が緩んだことも相まって、影の接近に気付く筈も無く

「ん？ 何……ぐ、ああああああ」

そして彼 豪徳寺薫は意識を失った。

12：20 彩輝宅

「マスター、千雨さん。昼食が出来ましたよ」

キッチンから料理を数品お盆に載せて、リビングの机に並べていく茶々丸。

休日だからかはわからないが、今日の茶々丸は朝からメイド服に身を包んでいる。その立ち振る舞いはどこに出しても恥ずかしくないパーフェクトなメイドさんだ。

「そうか。今行く」

「サンキュ、茶々丸」

エヴァと千雨がそれに答え、食卓に着き、食事を始める。

「そつえば、ハウルはどうしたんだ？」

食べ始めてエヴァがこの家の家主が居ないことに疑問を持ち、二人に尋ねる。

「私が来た時はもう居なかったな」

と、答えたのは千雨。

誤解しそうな風景なので一応言っておきますが、ここ近衛彩輝の家ですからね。もう勝手知ったる他人の家なんてレベルじゃありませんよ。

「彩輝さんなら今日は木乃香さんとのデートですね」

そして茶々丸の発言にエヴァと千雨の手が止まる。

「……大丈夫なのか、あの兄妹。まさか帰ってくるのは明日の朝なんてことには……」

不安を煽るようなことを口走るエヴァ。

まあ、七年ぶりの再会と聞くが学校でもそれを感じさせないほど仲が良く、兄の方は家族至上主義で、法律？ 何ソレ？ 食えんのかなような状態なのでその不安もわからなくはない。

「食事して買い物をするだけなので大丈夫じゃないでしょうか」

本人的には近親は無しだろう、とのことなので今のところその心配は杞憂です。

取り敢えずその話は横に置いて、色々雑談をしている内に三人



とも食べ終わり、エヴァはそのまま自室へ引き上げていった。恐らくゲームでもするのだろう。

あれが居候の態度でいいのか？ と若干の疑問を持ちながら一応客人の千雨とパーフェクトメイドさんの茶々丸は食べ終わった食器を洗う。

洗い終わった後、千雨はブログを更新して、《人形》の研究でもするか、と考えていたのだが、

「茶々丸。私のアタツシケースってこの家に置いてなかったっけ？」

「あのアタツシケースなら、前来た時に寮に持って帰っていたと思いますか」

「あー、マジかー」

どうやら、日常的にこっちに置いてあることが多いらしく、今日もそのつもりで来てしまったようだ。普段学校に置いてある教科書を気まぐれで持ち帰ったら次の授業で忘れてしまうアレだ。

大事なことなので二回言うが、ここ彩輝の家だからね。

「はあ。しょうがない。一旦寮に取りに戻るか」

「それなら御一緒にしますよ。私も用事があるので」

こうして、千雨と茶々丸は寮に行くことになったのだが、

「ならまずは普通の服に着替える。メイドを連れ歩く趣味は私には無い」

茶々丸が着替えてから、二人は家を出た。

そうこうしている間に寮に着いた千雨と茶々丸。

「あ。千雨さん、茶々丸さん。こんにちは」

「ちはー」

着いて早々、顔馴染みと出会う。

「さよさん、朱織さん。こんにちは」

「よう。二人はこれから出掛けるのか」

「はい。これから朱織さんとご飯を食べに行こうと」

「外に出るのはちょっとダルいけどね　え」

少し話した後、二人とは別れ千雨と茶々丸はアタッシュケースを取りに向かう。

ケースを持って寮を出た後、次は茶々丸の用事を済ませようと町を歩いていた時だった。

「ところでその中にまた何を入れてるんですか？」

「またって何だよ。またって」

「以前はかなり多くのメイド服などの衣装を家から寮に持ち帰っていたと記憶しているのですが」

このアタッシユケース、例に及ばず彩輝がちょっと改造しています。

「今回はノートパソコンとか《人形》の試作機とかだ」

きつと『今回は』の部分に触れてはいけないんでしょう。

「便利ですな。見た目より中身が多く入る機能」

「全くだ。タイムロードの科学かっつての」

「確か……ジエネシス・アーク、でしたか」

まさかこのネタが通じるとは思ってたらしく少し驚く千雨。

わからない人は『ドクター・フリー』でググってみてね。

「茶々丸は何でも知ってるな」

そして次はかの有名な鬼と猫との掛け合いを出す。

「いえいえ。一般教養ですよ」

「……………」

が、軽くスル。ちよつと切ない。

その切なさを忘れさせるように、ドンツ、と後ろから勢いよく誰かが肩にぶつかった。

「うわっ」

突然のことでバランスを崩し、倒れそうになる千雨を咄嗟に茶々丸が支える。

「大丈夫ですか？ 千雨さん」

「あ、ああ。大丈夫だ」

茶々丸に寄りかかっていた千雨がちゃんと立ち、そのまま二人は見つめ合い

「ところで千雨さん、アタツシユケースは？」

「え？」

なんて百合の花が咲く展開になる筈も無く、前方には千雨のアタツシユケースを持って全力疾走する男が。

あれ？ これはひょっとして、引っ手繰りというヤツなんじゃないだろうか。

ぼんやりと男を眺めながら千雨の思考が正常に作動するのはこの三秒後。

12:30 女子寮

零崎朱織は困っていた。昼食が何も無いことに。

食材はおろか、インスタント食品やレトルトですらこの部屋には存在しない。

「あゝ、ダルい」

まあいつか。一食ぐらい抜いたところで人間は死なないし。いと、いつもなら考えるが、今日はそういかない。

何故なら昨日もこんな思考を続けて、そのまま面倒になって眠ったからだ。つまり昨日から何も食べていない。

こうなると食べるのがダルいとか言う前に、空腹からくる倦怠感の方が煩わしくなってくる。

「仕方ない。彩兄のところにとかりに行こう」

少なくとも茶々丸さんは居てくれる筈。

どうやら他力本願で自分は一銭も使いつもりは無いようだ。兄妹揃っていい根性してるよ、ホント。

そして今後の方針が決まった朱織は意気揚々と……って書いてみましたが、この言葉がここまで似合わない人も珍しいですね。ええ、はい。

そして朱織はいつものように気だるげに部屋を出た。

「朱織さんこんにちは」

「ああ、さよちゃん。こんにちは　あ」

部屋を出たところで会ったさよと挨拶を交わす。

「さよちゃんもこれからお昼ですかあ？」

「はい。よかつたら一緒に食べに行きませんか？」

「いいですよ。って言っても私は彩兄のところへたかりに行くんだけどね」

「た、たかりにですか……」

思わずさよの口から苦笑が漏れる。まあ、堂々とこんなことを宣言されても苦笑しか出来ないでしょうよ。

そしてちゃっかり朱織について行き、一緒に彩輝の家へ行くさよの姿が。

彩輝の家へ向けて寮を出ると、ちょうど千雨と茶々丸が寮に入るところだった。

それぞれ挨拶を交わすが、茶々丸がここに居ることで早くも朱織の目論見が音を立てて崩れ始める。

「ところでえ、彩兄は家に居るんですかね　え？」

「彩輝さんなら今日は居ませんよ」

朱織の策に震度七強の直下型地震が。世の中そう都合良く出来てないということですよ。

ここで茶々丸と千雨とは別れ、当てが外れてしまった朱織にさよが声を掛ける。

「と、取り敢えず、ファミレスにでも行きますか？」

「……うん。行こっか」

目的地を彩輝の家からファミレスに変更し、二人は悠々と歩いて行く。

13:20

ファミレスで食事を終え、することもないので当初の予定通り彩輝の家へ向かうことにした朱織とさよ。

そんな二人に近づく四人ほどの人間が。

「ね、君たち今暇？ 良かったらさ俺らとどっか遊びに行かない？」

なんとという典型的なナンパ。朱織もさよも何も知らず傍から見れば可愛い部類に入るので仕方の無いことだろうが、この場合彼らの紹介は、命知らずA B C Dと表記せざるを得ない。

「え、あ、その……」

テンパるさよ。そしてさよとは対照的に彼らに見向きもせず、歩を緩めようとしてもしない朱織。

「あ、そうだ。さよちゃんにちょっとお願いがあるんだけど、宿題教えてもらってもいいかなあ？」

無視するというより、認識すらして無いんでしょう。

「無視は酷いんじゃないかなー」

と、命知らずAが朱織の肩を掴もうとするが、ちょうどその時、命知らずAにとっては非常に運の良いことに、

「おいおい。男が女に手を出しちゃあ、駄目だろう」

横から伸びた手に阻まれる。ちなみに、そのまま肩に触れていたなら、トラウマ確定になるまでメキャツ、ぐじゅり、ぶしゅっ、など身体から出てはいけない音が絶え間なく鳴り続けたであろう。

注意。苦しい、辛いなどの感情を忘れる程、極限状態に追いつめられるだけなので死にはしません。

「あア？ 何だデメエ」

自分の腕を掴んでいる男にガンを飛ばす命知らずA。残りのBCDもAと同じ様な行為をする。

なんて言うか、滅茶苦茶低能そうですね。類は友を呼ぶってヤツで



すか。

「……帰って勉強でもしての方がいいんじゃないか？」

男から発せられる至極真つ当な意見にブチ切れるA B C D。

「うつせえっ！」

と全員で殴りかかるが、

「漢魂！」

数分もしない内に彼 豪徳寺薫に返り討ちにされる。

「あのっ！ 助けて頂いてありがとうございました」

律儀にも近寄って礼を言うさよ。一方朱織は、そんなの放っておいて早く行こう、とどこまでも対極的な考えだった。

「気にするなお譲ちゃん。これは俺が勝手にやったことだから」

それでももう一度豪徳寺に礼を言い、立ち去ろうとするさよだったが。

「巫山戯てんじゃねえぞおおおお」

打撃が浅かったのか立ち上がり突っ込んでくる命知らずA。更にはポケットから折りたたみ式のナイフまで取り出す始末。

しかしながら、この命知らずAがナイフの扱いを知っている筈がな

く、当然人を斬る度胸とか根性を持ち合わせている筈もなく、精々ナイフを見てビビったところを殴り返してやるうとその程度の考えだった。

それがいけなかった。

貴方はナイフを持って叫びながら走ってくる男がいたらどうしますか？

普通は逃げる。少なくとも身を守るうとするよね。

しかし男の進行方向に居るさよは戦闘経験がほとんど無く、咄嗟のことに足が竦んで動けない。

だが、夏休みからさよの護身術は『騷霊現象』に変わりつつあり、必然、この場合も使ってしまった。咄嗟のことなので加減は無しで見えぬ力をぶつけられ、後方へ放物線を描かず十メートル程吹き飛ば命知らずA。その際、余波で命知らずAの近くにあった自動販売機もどこかへ飛んで行った気がするが、気にしないことにしよう。

そしてこの命知らずA、どうやら自分の命が懸かった時だけ無駄に幸運を招くらしい。

吹き飛ばされた着地点にアタッシュケースを持って全力疾走する男が通り、それがクッションとなってほとんど無傷で済んだ。

この間通行人は一連の出来事を見ていないかのように通り過ぎる。ように、というか本当に見てないんだけどね。

何故なら朱織が弓の弦を鳴らしているから。他のことに意識を逸らして一時的、局地的に盲点を作るぐらいのことは朱織にも可能です。と言っても音単体で出来ることは本当に盲点を作るぐらいなんです。寧ろ魔法の秘匿とか覚えてたことに吃驚。

その際、何を間違えたのか風になりたい男の傍に居た小動物が弾け飛んだ気がするが、気のせいということにしておきましょう。

「あ　あ、大丈夫さよちゃん？」

暫し呆然としていたさよだったが、朱織に声を掛けられ我に返る。

「あつ！　ご、ごめんなさい！　つい、突然だったので、大丈夫ですか？」

慌てて命知らずAに謝りながら駆け寄るが、どう見ても街中でナイフを振り回す方が絶対的に悪いので謝る必要はないだろう。

それでも謝ってしまうのはさよの人徳でしょうね。

「完全に伸びちゃってるね　え」

さよの後ろに着いてきた朱織が心底ダルそうに告げる。

命知らずAは気絶しており、ついでに通行人も気を失っている。

「まあ、今回は正当防衛だし、相手も大して怪我して無いし。何より、手を使わずに相手を投げ飛ばしましたって言っても本気で信じないから、気に留める程じゃないね　え」

寧ろ私が気になったのは、と朱織は下敷きにされた通行人に近付いてアタツシユケーシユを取る。

「これ、千雨ちゃんのじゃない？」

「え？」

さよが問いかける間もなく、ケースを開ける朱織。

中からはノートパソコンからUSB、希少価値の高い触媒から低価格物、更には猫の素体まで。一体どこに入っていたんだと聞きたくなるような量が出てくる。

間違いなく千雨のですね。

朱織は携帯を取り出し、千雨に電話を掛けるが、

「……………出ませんね　え」

次は簡潔に『アタツシユケースを拾った』と一言だけ書き、メールを送信。

面倒だからと言わずに、もう少し状況を詳しく書いても罰は当たらないと思いますよ。

「じゃ、居るかも知れないし、彩兄の家に行こっか」

「あ、はい」

少し急いで彩輝の家に向かう二人。

「あれ？ そういえば、助けてくれた男の人は？」

09:30 女子寮

彩輝の家に意味も無く集まってダベる面々の中ではおそらく最も早く活動し始めたであろう刹那の部屋に電話の着信音が鳴り響く。

音源はルームメイトである龍宮の携帯からだ。詳しく言うなら仕事の用の携帯から。

龍宮は電話に出るが、大した用件ではなかったのか、思いのほか早く会話は終了する。

「どうかしたのか？」

「一応何か起こっているのか聞く刹那。」

「刹那、今日は何も予定は無かったな」

「あ、ああ」

この時点で何だか嫌な予感がするが聞いてしまった手前、巻き込まれるのは確実だろう。

「そうか。ちょうど良かった。依頼内容自体は簡単なんだが範囲が広くてね。手伝ってくれないか？」

どう転んでもこの展開になることは読めていたので二つ返事です承

する刹那。寧ろこのスナイパーからどうやって逃げると。

「それで？ 詳しい依頼内容は？」

「どうやら今日の早朝、一人の学生が妖怪に憑かれて今も学園内を彷徨っているらしい」

予想していたことよりも大事だった。

確かに神鳴流では調伏や退魔は十八番だが、逆に言うところの学園に勤務している大半の魔法先生は対処に手間取るかもしれないということだ。

余談だが、どこそのファミコンは妹とデートをするためにこの仕事を断っていたりする。

「つまりこの学園全体が搜索範囲なのか？」

気の遠くなるような話だった。

「ああ。ちなみに明確に憑かれたとわかっているのが一名だけで探せば他に何名かいるかもしれないそうだ」

果てしなく面倒な依頼だった。

「それでこれが今わかってる一名だ」

龍宮は携帯に送られた添付ファイルを刹那の携帯にも送る。

送られたファイルを読む刹那。名前は豪徳寺薫というらしい。

「ああ、クソッ！ 見失った」

苛立ちを隠そうともしない千雨。

茶々丸と二人で身体強化をし、追いかけたのにも関わらず引っ手繰り犯に撒かれてしまったのだから仕方の無いことだろう。

《門》や瞬動を使えばもう少し簡単に追えたんだろうが、数カ月前まで一般人だった千雨にこういった事態が初めての茶々丸には、いきなり目の前で人が消えるのはマズイだとギリギリ陸上部だと言い張れる速度で追いかけたのが仇になった。

勿論何も魔法を使わなかったわけではない。

面白いことに論理魔術では帰巢本能が物にも適応される。使い込まれた道具が持ち主と共に在り続けようとするらしい。

ただ、魔法陣が目標に向かって壁や建物などを通過しながら飛び回ると、帰巢本能が増幅された対象が持ち主のところまで飛んで来るといふ魔法の秘匿を完全に無視した問題がある。

と言っても、魔法陣は地中を走らせればいいだけだし、ある程度距離を詰めておけば引っ手繰り犯が投げたのを千雨がキャッチしたという風に見せかけられないこともないだろう。

そう考えて魔法を行使したわけだが、成果はゼロ。

「ここは彩輝さんに頼んだ方がいいのでは？ 相手は魔法関係者のようですし」

千雨の魔法が通用しないのは、大まかに考えて、この短時間で学園外など搜索範囲外に逃げたか、某殺人鬼の家のように結界に守られた場所に逃げ込んだか、そのまま抵抗レジストされたかの三つくらいだろう。その全てに一般人ではない要素が含まれている。

しかし、茶々丸の提案に首を横に振る千雨。

「流石に兄妹水入らずの時間を邪魔するのは気が引ける。というか連絡する手段が無い」

自分と茶々丸の用事だけでそんなに時間は掛からないだろうと、仮契約カードどこるか携帯すら彩輝の家に置いてきてしまっていた。

「はぁ……。ノーパソは論理魔術で改造してあるからデータは見えないだろうし、バックアップもあるけど、触媒とか試作機は諦めるしかねーか」

徐々に落ち着いてきた千雨だが、もう完全に諦めムードです。

「鍵とか面倒がらずにちゃんと掛けとくんだったなあ」

「千雨さん……」

掛ける言葉が見つからない茶々丸。



「そういえば、茶々丸の用事って何だったんだ？」

流石に千雨自身もこのままではいけないということとは自覚しているようで、自分から話を振る。

「私は猫に餌をやり」

和む。それを聞いた千雨の第一印象。

そういえばあの試作機猫を模して作ったなあ、とまた心が荒んできた。

「早く行こう。少しでも現状を忘れない」

こうなったら癒されに行こうと決める千雨。ケースは彩輝が帰ったら頼もう。運が良ければ半分くらいは戻って来るかもしれない。

「では、まずは猫缶を買い」

そう言っ、茶々丸はコンビニへ足を伸ばす。コンビニに売っているのかと疑問だが、いつも行っている茶々丸がそう言うなら売っているんでしよう。

だがしかし、二人はすぐに足を止めることになる。何故なら前方五メートル辺りに空から自動販売機が落ちてきたからだ。

「ハ、ハハハ。最近の自販機には飛行石でも埋め込まれているのか？」

元と言えば十全に魔法が使えないから今の状態に陥っているわけで、こつも清々しく目の前で超常現象を起こされると千雨の中で燻

っていた感情が蘇る。

「……人が満足な手も打てず走り回ってるのに」

「千雨さん落ち着いて」

茶々丸の制止を無視して、千雨は呪文を紡ぐ。

「《質量制御 対象数 1：重量 マイナス2：継続時間 3秒  
即時発動》」

そして八つ当たりとストレス発散の意味を兼ねて自動販売機を投げ飛ばした。

まあ、一瞬の出来事で魔力発光は見られていないから魔法バレにはならないでしょう。周りからの好奇心な視線を集めることになりましたが。

視線から逃れるように二人はコンビニに向けて走り出した。

その後、どこかの空き地で猫と戯れる女子中学生の微笑ましい姿が見れたとか。

やはり猫は素晴らしいですね。結論、猫は偉大。

13：28

(刹那。そこから三百メートル先を右折だ)

龍宮から念話で送られてくる指示に従い、通りを右折する刹那。

（見つけた。というか、そこから狙撃出来ないのか？）

もうおわかりかと思いますが、この二人現在進行形で豪徳寺の追跡中です。ここが千雨と茶々丸と違い慣れているかいないかの差なのでしょう。

経緯としては、自販機が空を飛ぶなんて物珍しい光景を見たら、その近くに豪徳寺があるのを龍宮が発見。そこから刹那に連絡を取り今に至るというわけです。

（無理だ。偶に居るんだよ。引き金を引く時に出る僅かな殺気で銃弾を避けるヤツが）

人間業じゃない。それを聞いた刹那の素直な感想。でもあなたの身近にも同じことを出来るのが二人ほどいますよ。

（そもそも殺す気で撃ってるのか）

（いや、そんなつもりはないんだが、感覚が身体に染みついているね。条件反射というか、まあ、癖みたいなものだ）

何とも物騒な癖をお持ちで。と言っても新旧世界合わせて約八十億人。その中で殺気だけで銃弾を避けるなんて真似が出来るのは、零崎を入れて百人も居ればいい方じゃないでしょうか。

つまり今回の仕事がレアケースなので、龍宮の癖の矯正は必要ないということですよ。

さて、そんなことを言っている間に豪徳寺が速度を上げ路地裏へ入ろうとする。ここで一気に引き離すつもりのようなようだ。

それを見た刹那も急いで後を追うが、何故か入ったばかりの路地裏から豪徳寺が飛び出してきた。

「え?」

疑問は残るが今はそんなことを言っている場合ではない。

追いついた刹那は豪徳寺と正面から向かい合う。

豪徳寺の目は妖しく光り、口端はつり上がっている。その表情は笑みと言ふより、獣が威嚇の為に牙を覗かせるような印象を受ける。

いや、『ような』ではない。今の豪徳寺はまさしく獣のソレだ。

幸いにも今は人通りが途絶えており、多少ならば派手に動くことが出来る。

刹那と龍宮はこの機会を活かすため、即座に動いた。

どこかの屋上から龍宮がライフルの引き金を引く。それを察知した豪徳寺は跳躍して弾丸を避けるが、そこを「アデアット」と小さく呟き、布都御霊を手にした刹那が叩く。勿論峰打ちですよ。

夏休み最終日、学園にかき集められた瘴気を浄化した神剣に掛かれば憑き物を落とすのなんて簡単だろう。……触れればの話だが。

「なっ!?!」

豪徳寺は空中で遠当てを放ち、その反動を利用して身を振り、刹那の太刀をかわしたのだ。

流石麻帆良。妖怪に憑かれているのを抜いても一般人のレベルが無駄に高い。

そして、再び最初と同じ構図になってしまふ。真剣を振り回していられる時間は残り少ない。刀が触れるだけでいいんだ。すぐに間合いを詰めようとする刹那だったが、視界に映った物を見て足が止まった。

俗に言う自動販売機が刹那の正面からこちらに向かって自由落下をしてきて 背後から豪徳寺に激突した。

自販機の下敷きになった豪徳寺は渦巻きのように目を回し、頭の上では星が舞っている。

危ないところだった。この昔のマンガのような表現でなければ今頃豪徳寺は頭蓋骨陥没で即死だったであろう。

ちなみにこの自動販売機。さよが騒霊現象で飛ばし、続けて彩輝が蹴り飛ばし、最後に千雨が投げ飛ばしたという軌跡は、どうでもいいですね。

「……………えー」

釈然としない刹那。納得いかないのはわかりますが、現実を受け止めて貰うしかありません。

刹那は下敷きになった豪徳寺に布都御霊を押し当てる。同時に一匹の管狐が豪徳寺の身体から弾き飛ばされた。

直後、管狐は龍宮によって狙撃されました。

マジレスすると、さよを助けた時の豪徳寺は理性で動いていたが、龍宮の殺気に当てられたあとは管狐の生存本能で動いていたわけです。

大地震の前に鼠が逃げるとか聞きますし、小動物特有の危険察知能力で龍宮の殺気を含んだ狙撃から逃げ回れたということですかね。

そして、あの路地裏は一時間程前に彩輝によって祓われたばかりの場所で、急激な環境の変化に管狐の方が追いつけなかったんでしょう。

刹那は気で身体強化をし、自販機を起こして豪徳寺を助け出す。後は救護班に全てを任せて、他にも憑かれた人が居ないか龍宮と見て回った。

後日、狐に憑かれていた所為か、豪徳寺の遠当ての威力が上がったのは完全な余談である。

15:36

その後、管狐に憑かれた人は発見されず、今回の事件は終息したとして魔法先生から解散を言い渡された。

刹那は龍宮と別れ、寮に戻ろうとしていた時、

「あ、せつちゃんや！」

「おーい。刹那ー」

と、背後から声を掛けられた。

振り返って確認すると、木乃香と何故か紙袋を五つ程持った彩輝が駆け寄ってきている。

「彩輝様。木乃香お嬢様」

刹那も返事をし、今日あった当たり障りの無い部分をお互いに話す。

(で？ 何があったんだ？)

木乃香が居るためか念話で話をしてくれる彩輝。

刹那もそれに答え、今度は裏の仕事について話していく。

(へえ)。管狐ねえ。いいよね狐。俺狐好きだよ。狐狩りをするイギリス人許すまじ。あの時もつと報酬を奪っておけばよかった。いや、仕事を引き受けなければ大量に死んでたのに)

どどん話がどうでもいい方向へ進んでいますよ。あとイギリス人の皆。逃げて、超逃げて。

(まあ、その話は置いて。管狐か。妥当な所で飯綱法かな。一匹見たら残り七十四匹はいると考えて行動した方がいいんだが)

刹那が口を出すまでも無く唐突に話題修正。

(憑かれた人は何をしていたんだ?)

(いえ、基本的に何も。憑かれただけで普段と変わらない生活をしていました)

(管狐は低級の霊獣で飼い慣らしやすいから、十中八九人為的なものだろうけど、目的は偵察か? 情報が少な過ぎてよくわからん)

(偵察ということは次があると考えた方が?)

(さあな。どっちにしる後手に回らざるを得ないから、保留でいいんじゃないか)

結論は何とも適当だった。

その後木乃香の提案により、三人は彩輝の家へ向かうことになった。

18:30 彩輝宅

「でも何か変な感じやな」

そう呟いたのは木乃香。

「どっかしましたか、お嬢様」

それに反応する刹那。



「んー。いやな、普段遊んでへん人と一緒に兄様の家でご飯食べるんが、不思議な感じで」

今ここに居るのはエヴァ、茶々丸、千雨、さよ、朱織と例の如くいっもの面々なのだが、今日初めてこの家を訪れた木乃香にしてみれば新鮮に感じるのも当然だろう。

ちなみに彩輝は夕食を作るためにキッチンにいる。茶々丸と木乃香が手伝うと名乗り出たのだが、彩輝はその申し出をやりわりと断ったのだ。おかげで茶々丸は手持ち無沙汰になり困っている。

この時刹那は『変な感じ』との呟きで魔法が勘付かれたのかと若干冷や汗をかいたのは内緒だ。

「そういえば、近衛木乃香がここに来るのは初めてだったか」

と、会話に参加するのは最近ゲーム廃人になりつつあるエヴァ。信じられるか？ この幼女、悪の大魔法使いなんだぜ。

「うん。最初はつきり寮に住んどると思ったから。それにしても兄様の交友関係って広いんやなあ」

「……まあ、ハウルの交友関係は広いだろうな」

広いというか絶大ですね。各国の上役やら各結社の重鎮とか。問題は今も行方不明者として扱われていることでしょうか。

「なあエヴァちゃん。前から思ってたんやけど、そのハウルって兄様のことなんよな？」

「ん？ ああ。そうだが」

「それって何でなん？ 近衛彩輝をどう弄ってもハウルにはならんと思っんやけど」

お忘れの方もいると思うので説明すると、彩輝のアーティファクトの名前が『ハウリングミラージュ共鳴流転』と言いましてね、大戦時に武器の名前が異名になり、そこからハウルという愛称が生まれたんです。

「ああ、それはな……」

エヴァもそのまま説明しようとしたら、木乃香の隣にいる刹那が『魔法に関する話は無しで』と目で訴えかけてくる。

でも、それで説明するのはかなり難易度が高くなりますよ。ここは六〇〇年生きて蓄積された知恵の見せ所ですね。

「私のことはエヴァでいいと言ったら、ハウルと呼んでくれと返されてな。何でも昔からの友人にはそう呼ばれているらしくて、由来までは私も知らん」

無難な回答。思ったより普通。六〇〇年も生きていて、息を吐くように嘘はつけないということですか。悪の大魔法使いなのに人を騙すのは苦手って

「うるさいっ！」

突然虚空に向かって叫ぶエヴァ。木乃香と刹那が驚いていますよ。

「ま、まあ兎も角、ハウルに直接聞いた方が早いだろう」

結局本人に丸投げですか。

「文句あるのか？」

ギロリ、とまたも虚空を睨みつけるエヴァ。正直言おう。かなり恐い。悪の大魔法使いは健在です。

「エヴァ。なにやってんだ？」

と、ここで彩輝がキッチンから出てきた。どうやら調理は終わったようだ。

「茶々丸ー。配膳手伝ってー」

「はい。わかりました」

言い終える頃には、茶々丸は既にキッチンへ足を踏み入れている。その内過労で倒れないか心配になりますね。

「なあ、兄様。さっきエヴァちゃんと話したんやけど、何で兄様の愛称がハウルなん？」

「ん？ ああ、それね。昔俺が世話になったフェレンゲル助教授の実験中にマイクでハウリング起こしちゃってさ。そして偶然その共振現象が切っ掛けで水を光に変える実験が成功したわけよ。で、研究チームからお前のハウリングのおかげでってなって、そこからハウルと呼ばれるようになったんだ」

どうだ？ これが呼吸するように嘘をつくということだ。

エヴァと刹那は隣で感心したように彩輝を見えています。

ちなみに、水蒸気の温度を上げていったらプラズマになるのは本当だったりする。四大元素の火に該当するのがプラズマとか言われていますし。

「それ、八割ぐらい嘘やろ」

しかし木乃香には通じなかった。

「嘘じゃないよ。戯言だよ。ていうか、もうご飯出来ただけだよ」

この短時間でテーブルの上には彩輝が作った料理と人数分の食器が全て並べられている。どれだけ家事をしたいんですか、茶々丸さん。

「ほな、食べ終わったら聞かせてな」

「オーケー。わかった」

そして全員で食卓について夕食を食べたわけですが、並べられた料理はとても美味しかった。

なんだか負けた気がして複雑な心境になる者や、単にタダ飯にありつけて喜ぶ者など反応は様々だ。

この後寮生の人たちは彩輝に寮まで送られて、一日が終わった。

第二九話：とある休日 裏（後書き）

次話は原作に入ります。

今週の金曜は昼までで土日は点呼を取らない文化祭。月曜は振り替え休日、と実質四連休みたいなもので次の投稿は遅くならないでしょう。

第三十話：産地直送イギリス産葱（前書き）

行方不明のナギのことについて触れている部分がありますが、ネタバレではなく全て作者の想像なので軽く流して下さい。

### 第三十話：産地直送イギリス産葱

朝、一時間目からサボるつもりで寝ていたら、ジジイに呼ばれた。

誰が好き好んでこんな肌寒い内からジジイの顔を見に行かにならんのだ。

「で？ モーニングコールを頼んだ覚えは無いんだが」

「うむ。実はじゃな、今日からナギの息子のネギ・スプリングフィールド君が教師としてこの学園に赴任することになったんじゃ」

ああ。いよいよ原作一巻が始まるんですね。

「それでじゃな。魔法学校を首席で卒業したとはいえ、今はまだ未熟な魔法使い。そこで彩輝に色々面倒を見て貰いたいんじゃが」

「他に用件は？」

まさかその程度の理由で俺から安眠の時間を奪ったと？ 朝のまどろみがどれだけ貴重かわかってんのか。

「……………これだけじゃが」

「選べ。遺書を残すか、遺言を残すか」

「ちよっ！ いつも思っんじゃがワシに対して風当たり強過ぎないかの？」

「吝かだが一度くらいなら死神の真似事をやってみるのもいいだろう」

最早混沌と化している『倉庫』なら大鎌の一つや二つきつとある。

というわけで、ちょっと探してみたら、案の定あった。……バイオハザードマークの付いた物とか放射線物質とかは流石に入れてないよな？

「ま、待つのがじゃ彩輝！ 本当に鎌を取り出すでない！」

「冗談に決まってるだろ。本気にすんな。僧正の白玉すくいとも言っし」

「……………彩輝が言うところの冗談に聞こえんのじゃ」

大袈裟な。殺気出してないんだから、さらっと流せよ。

「老人をもつと労わるべきじゃ」

「老兵は黙って死ね」

棚の上で埃に埋もれていればいいものを。出しゃばって来る連中ってホントウザいよな。特にメガロ元老院。

そついえば大戦中。俺を強引に自分の手駒にしようとした二・三人が不幸な事故に遭って死んだような、死んでないような。

knock



と、世界で六番目ぐらいにどうでもいいことを考えていると、学園長室の扉が開かれた。

「学園長先生！！ 一体どーゆーことなんですか!?!」

危ねーな、神楽坂。いきなりドア開けんなよ。鎌をしまつタイミングを失うとこだったぞ。

ていつか、何でジャージ?

まあ、これもまたどうでもいいことだな。

「おはよう木乃香」

「兄様、おはようや」

ナギの息子が自己紹介しているのを脇目に木乃香に朝の挨拶をする。一日で最初にする挨拶は大切だろう。

一番大事な挨拶を一番大事な家族に向ける。って書くときちょっと詩的っぽくないか?

「最近風邪とか流行りだしたらしいから木乃香も気をつけるよ」

「うん。わかっとするよ。兄様こそ気をつけてな」

「俺の生命力は風邪如きに負けたりはしない」

「もう、そっやって変に自信持つとる人が一番危ないんやで」

安心しろ。変な自信じゃなくて、絶対の自信だから。

その証拠にこの前タカミチに、検査の為病院に連れて行かれたんだが、俺の気管や肺はスポーツ選手並みに健康だった。十年近くキセルを吸っているんだがな。

まあ、つまり何もしなくても吸収した梵が勝手に身体を最善の状態に整えてくれているんだろう。普通の人よりもほんの少し死の線が薄いし。

ところで源教員。貴女はいつの間に部屋に入っただんですか？

なんてことを考えていると、

「このか、アスナちゃん。しばらくはネギ君をお前たちの部屋に泊めてもらえんかの」

突然ジジイがこんな戯言たわごとを吐きやがった。このガキが木乃香と同棲すると。俺もエヴァや茶々丸と同居しているとかは棚の向こうにでも放っておけ。

「巫山戯んなよジジイ。そんなことをこの俺が許可するとも思っ  
てんのか？」

「待って下さい！ 私たちのところじゃなくても部屋はたくさんあるでしょう！」

「ウチはどつちでもええよー」

三人中否決が二票。よってジジイの提案は却下されました。

「それがの。今ちょうど部屋が空いて無くて、ネギ君の住むところが決まっとらんのじゃよ」

しつこいぞ、ジジイ。さっさと諦めやがれ。

「思いつきり学園側のミスじゃねえか。何面倒事を生徒に押しつけようとしてんだよ」

「なら、彩輝の家に」

「人の話聞いてたか？ 生徒に押しつけんなって言うてんだよ。ホテルあてがうなり、タカミチの部屋にでも入れておけ」

タカミチの部屋と聞いてガキも目を輝かせているぞ。

「うむ。そうじゃな。今日の内にタカミチに確認を取っておこう」

はい。音の操作入りました！。思考の誘導なんて随分久しぶりだな。

「しかし学園長先生。高畑先生は出張が多く、ネギ先生の生活面まで面倒見きれないのではないのでしょうか？」

ちよっ、源教員。そんなに言うなら貴女の部屋に泊めろよ。

「大丈夫。タカミチならこの程度の厄介事簡単に処理し」

「高畑先生に迷惑が」！

あ。発言ミスった。

「大丈夫です学園長先生！ 子供の世話ぐらい私たちで何とか出来ます！」

バックノズル。またはアトラクタフィールド理論。この世界線では何をやっても同居という結果に収束するのだろうか。

「兄様は心配症やなあ。ネギ君はまだ子供やえ。ウチは一緒に住んでもかまへんよ」

「……………木乃香がそう言うなら、百歩どころか五歩も譲って許してやるけど……………」

「全然譲ってないえ」

「何かあったらすぐ言うんだぞ。そしたらそのガキを肉体的、精神的、社会的、全てに置いて歴史の教科書に載るぐらい斬新な手法で惨殺してやるから。あと、これ。一応退寮届な」

念のために退寮届を渡しておく。まだウチには空き部屋があるし、いざとなったら空間捻じ曲げて部屋を作ればいいだろ。

「僧正の白玉すくいともの言うけど、兄様は大袈裟過ぎやっつて」

それでも一応受け取ってくれる木乃香に感謝。

「そろそろ授業の時間だな。教室に行くか」

「そやね」

「じゃあジジイ。俺たちは戻るぜ。後、最初の頼みは断固拒否する」  
俺と木乃香は他の面子よりも一足早く学園長室を出た。

「というわけで、ナギの息子が来てた」

教室に来た俺は自分の席に着き、隣の席のエヴァと話している。

「ほう。どんなヤツだったんだ？」

「第一印象か？ それなら、DNAってなんだっけ？ って一番に感じたな」

「はあ？ なんだそれは？」

「まあ、見ればわかる。ちょうど来たみたいだし」

と、俺は廊下から見えるネギを指差す。

そしてネギは扉を開け、仕掛けられていた黒板消しトラップを障壁で止めやがった。

おかげで一瞬、教室内に『ざわ……ざわ……』って文字が流れるのを幻視できたよ。

ネギは誤魔化すためにその後全てのトラップにかかった。どこぞの転校生が初見でトラップを制覇したことによって、ちよっと量が多くなったりするんだが、その全てにかかったな。

「ああ。成程。実はナギと全く関係の無い子供と言われても納得してしまふな」

「だろ？ 十歳のナギなら今のは扉を蹴破るぐらいのことはしたんじゃないか？」

「少なくとも罫を仕掛けた生徒に軽くガンを飛ばしたりはしそうだな」

「あーやりそうだな。てか、あのバカ今頃どこで何やってんだろうな」

「目の前に世間の死亡説をひっくり返した前例がいるから、死んだとは考えにくいし」

だな。原作通りなら生きているのは確実だろう。

ここで、エヴァが一つの仮説を提示してくれた。

「あれじゃないか。妻が魔王に攫われて魔王と死闘を繰り広げるも相討ち。そして魔王の魂に身体を乗っ取られる、みたいな」

ありがちな。最終回はナギの奪還と同時に父親越えも達成。皆幸せハッピーエンドですね、わかります。

「だったらそこはダークサイドに堕ちて黒マントにヘルメット被ってコーホー言ってるのが相応しくないか？」

「ああ、それもいいな」

「あははははははは」

と、どちらともなく笑いだす俺たち。

「おい。お前ら笑ってるけどこの状況に疑問を持たないのか」

斜め前の席からちゅちゃんの話しかけてきた。今過半数の人が席を立ててネギのところへ集まっているので、注意なんてされない。

が、一応念のために盗聴防止の結界をバレないように張っておこう。

「こんな学園で大丈夫か？」

「大丈夫なわけあるか。大問題だ」

その通り。普通なら大問題だ。

「学園は勿論、PTAや教育委員会に抗議しても、なかったことにされるから無駄な努力はしない方がいいぞ」

「何だよ！ これは完全に度を越してるだろ！」

「諦める長谷川。魔法の秘匿だとか言っているがな、所詮そんなものは金しだいだ。政治家なら一人くらい魔法使いを抱えているものだぞ」

「そうそう。第一あそこでネギを擁護してるのは誰よ？」

教室の前で戯れているクラスメイト達の方を指す。

「……雪広あやか」

「この学園に多額の寄付をしているのは？」

「雪広財閥」

言って理解したのか、ちうちちゃんは頭を抱えてしまう。

「つまり裏、政治、経済と圧倒的権力で隠蔽出来るということだ」

「何でそこまで……」

まあ、普通なら十歳のガキの為にここまでではないだろう。普通なら。

「あのガキはなハウルの所属していた組織のリーダーの息子だからだ」

とエヴァが簡潔に説明してくれる。

「それって確か戦争を終わらせたとかいう」

おお。夏休みにそんな話をしたが、覚えていてくれたのか。

「言い方を変えると英雄の息子になるな」

そして俺がエヴァの説明に補足を入れる。

「連中はさ、自分たちにとって都合の良い手駒と広告塔を欲しがってるんだ。その為なら、一クラス三十三人の人生なんてどうなっ



もいと思ってる」

「反吐が出るな」

とちうちゃんは言うが、俺も身内の為なら身内を除く全人類がどうなるかと知ったこっちゃないと考えているので、そう強く言えないんだよな。

「よく学生が進学とかをレールの上を走るとか比喻するけど、アレはマジで人生ゲームみたいな道を走ってるのか」

わかりやすい比喻表現をしてくれるちうちゃん。

困難も逆境も決断も覚悟も全て元老院の気分次第。<sup>プレイヤー</sup>そしてゴールは犬か。

確かに反吐が出る。

憐れみに満ちた目でネギを見る俺たち三人。

だが、ネギは視線に気付く筈も無く、犬に近付くため明日も明後日も生きていく。

まあ、正義の魔法使い（狂犬病）にかからないよう予防接種をしてやる義理は無いし。

一言で言うとして、どつでもいいな。

「僧正の白玉すくいってレベルじゃねーぞ」

と、口を開いたのはちうちゃんだ。

「……………何だ？ その『僧正の白玉すくい』っていうのは

「エヴァ、知らないのか？」

「ああ。今初めて聞いたんだが」

そうか。なら仕方ない。教えてやるか。

「これはな、桜新町の町長が考えた故事成句だ」

「知るかそんなもん！ ていうか故事成句を新しく作るな！」

「麻帆良なら流行るかと思ったんだが」

「流行らすな！」

道のりは険しいぜ。

とか言っている内に授業終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

話しているだけで終わったが、黒板を見ると全く進んでいないので、何の問題も無い。

その後、放課後にネギの歓迎会があったが、タカミチに『タバコ増税ざまあ』とだけ言ってさっさと帰路に着いた。

### 第三一話：期末テストがあるらしい

ネギが来てから大体一ヶ月程経ったが、語ることなんてほとんどない。

二年の終わりに来るのはわかっていたので、英語の授業はほとんど欠かさずに出席してたからな。

だから残りの授業は全てサボっても大丈夫なんだ。

教師と生徒なんて授業と部活を除けば、接点なんて皆無だからなあ。

まあ、唯一覚えているとしたら、一度あのガキがホレ薬を持ち込んだことがあった。

誰かが飲む前に薬の入った試験管を糸で切断して床にぶち撒けてやったが。耐性の無い木乃香に変な影響出たらどうしてくれるんだよ。

で、その時エヴァに言われたんだが。

知ってたか？ 人の心を永久に操るのは魔法使いの本義に反するらしいんだ。

言われて初めて知ったよ。以後気をつけるつもりなんて絶無だけだ。

さて、特筆することなんて一つくらいしか無かった一ヶ月間の回想も終わり、俺はまたしてもジジイに呼ばれている。

いい加減面倒になってきたので、学園長室までは行かず、電話で用件を済ませようか。どうせ大した用でもないだろうし。

「で？ 何の用だ？」

『……せめて部屋に足を運ぶくらいはして欲し』

「切るぞ」

『わかった。話すから切らないで』

組織の長に対する態度がこんなんでいいのかと思われるかもしれないが、役職はジジイが上っただけで位階は俺の方が上だから問題ない。

裏の世界って弱肉強食的な部分が多いしね。

『ネギ君の最終課題を期末試験で2 - Aの最下位脱出にするんじやが』

「絶対に手伝わない」

『そう言うと思ったわい。それでじゃな、図書館探検部に「魔法の本」などの噂を流して、図書館島で成績の悪い者の合宿をするつもりなんじやが』

「図書館探検部に流すのなら木乃香もそれに付いて行くかもしれないうってことか？」

『うむ。危険は無いから、止めて欲しくないんじやが……』

「いいんじゃない？ 木乃香が行きたいって言えば」

『フオツ！？ いいのかの！？』

「驚き過ぎだ。普段どんな目で俺を見てるんだよ」

『過保護すぎる兄』

まあ、否定はしない。それに俺も魔法に関して徐々に外堀を埋めるのには賛成だ。

常に俺や刹那が居るとも限らないし、どんな状況で巻き込まれるかはわからないからな。

思考を停止させず、ある程度動けるくらいには耐性を付けといた方がいいだろ。

「ただし、木乃香が掠り傷一つでも負っていたら、その時は、わかるよな？」

返答を待たずに通話を切る。

『危険は無い』と確かにジジイは言った。言質取ったぜ。

普通に、一般人でも対処出来る程度の危険はあるとか言っておけば良かったのに。

そしてHRの時間。

なんかネギが大勉強会とか言って張り切ってるよ。帰ってー！。

「提案提案！ お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

椎名がバカみたいなことを言いだしたぞ。それは男の俺が居るとわかった上で提案しているのだろうか。

そしてネギ。採用すんな。

ちうちちゃんがシャーペンを握り潰しかねない程の力を込めてるだろうが。

と思っていたら、この人たちホントに始めやがったよ。悪ノリってレベルじゃねーぞ。

まあ、俺も男だしね。被害が及ばない範囲で眺めて

「兄様。ちよつと廊下に出よか」

「妹君の仰せのままに」

木乃香に連行されました。

「しかしあれだよな。テストで一番ダルいのはテスト自体じゃなく、その前の勉強期間だよな」

ダルいで連想してしまっただけで悪い気もするが、朱織は今日も健やかに睡眠中です。

「それは普段から真面目にやってないからやる」

「まあ、それもあるかもしれないけど、強制的に勉強をしなければならぬ空気がある。テストなんて赤点回避できてればそれでいいじゃん」

「向上心の欠片も無い発言やね」

「恒常心は大切だと思うんだ」

「清浄心けいじゆしんみたいなのも持つといた方がええと思うよ」

「正常から程遠い位置にいることは自覚している。というか造語は反則じゃないか？」

「兄様の恒常心が先やる」

まあそつだな。

「というわけで、ウチの勝ち」

え？ 勝負だったの？

「じゃあ、勝者の木乃香さんには瑪瑙のネックレスをプレゼント」

俺は木乃香の後ろに回って、ネックレスの留め金の部分を引っ掛ける。そしてネックレスの輪の外に木乃香の艶やかな黒髪を出してやる。

瑪瑙には守護のルーンと内包した魔力を隠蔽するためのルーンを刻んだ。これで事前に多少の危険は回避できるだろう。

「えっ、ちよっ、兄様!？」

「ん？ どうした?」

「どうしたやあらへん。いきなり何を」

「まあ、ここは貰っておこうよ」

「でも……」

「いいからいいから。貰ってくれると嬉しいな」

この状態だと、後は根比べだろう。先にどっちが折れるか。

「……ほな、貰っておくえ」

木乃香が先に折れた。

ところで俺たちはさっきから何の張り合いをしているんだろうか。

と、疑問に思っていると、教室から神楽坂とネギが出てきた。今日はこれで終わりのようなので俺は木乃香と別れて家に帰る。

まあ、例の如く、木乃香を含めたいつもの面々が集まりに来るんだが。



その日の夜。

木乃香から携帯に着信があった。

「もしもし。木乃香？」

『あ、兄様。おじいちゃんが本気で怒つとるらしくて、次の期末で最下位のクラスは解散って聞いたんやけど、本当なんかな？』

「それはない。一つのクラスを解散して、他のクラスに組み込むのがどれだけ面倒な作業か」

寧ろ稀有な才能を持った人材を一ヶ所に集めたのに、今までの苦労を自分で台無しにする筈が無い。

『ほんまに？ 特に悪い人は留年とか小学生からやり直して』

「それこそありえないな。中学までは義務教育という力強い後ろ盾があるから。何もしなくなつて勝手に進級できる仕組みになつてるんだよ。小学生からやり直しとかは流石に世間が黙ってないだろ」

『そか。そうやな。じゃあ噂はデマだったんか』

「そこまで気になるならバカレンジャー連れて図書館島に行つたらどうだ？」

『え？』

「ジジイが合宿の準備とかしてるらしいぜ。これは噂じゃなくて本

人から聞いた話だから」

まあ、図書館島まで行ったら、ジジイがどう計画を立てているかは知らんが、ついでに魔法の本も探そうみたいな流れになるだろ。

『わかったえ。ほな皆誘って行ってみるわ』

「じゃ、おやすみ木乃香」

『おやすみ兄様』

通話終了。

そして次の日。

「まさかマジで夜の内に行くとは……」

給料貰ってるくせに仕事サボりやがるとか、ホントいい御身分だよ。寧ろ噂がデマだとわかっているのに何故行ったんだらうか？ ネギの為？ いや、それはないな。

「彩輝様！ お嬢様が！」

「わかってるから落ち着け、刹那」

それに本音を言わせてもらうと、木乃香よりもこっちの方が気がかりなんだよ。

「いいか刹那。今回のことはな全部ジジイが仕組んだことで、アトラクション的な危険しかない」

「一見、危険そうに見えるだけで安全は保障されている。忘れていたが図書館島にはあの変態もいるしな。余程のことは起きないだろう。」

「ところで、お前成績良くなかったよな」

「え……いや……」

「まあ、ちょうどいい機会だし、勉強しとこうか。このままだと高校での生活が危ぶまれるから」

「中学の基礎が出来ていないのに高校の問題が理解できる筈も無く、徐々に赤点が増えていき、最終的に単位を落とし留年。」

「そして次の年も一応通い続けるも、一度習った授業だからどんどん休みがちになり、休学届を提出。翌年には退学届を。」

「みたいな未来予想図が簡単に描ける件について。」

「そういう訳で、いつもの如く口八丁で刹那を言いこみ、さよちゃんのところに行く。」

「出題傾向とかはさよちゃんに聞いた方が絶対に早いし確実だ。」

「ということだからさよちゃん、色々教えてやってくれないかな」

「ええ。いいですよ」

さよちゃんは二つ返事です承してくれ。

「それ、私も参加させてくれ」

「私も う」

と、横から話しかけてきたのはちうちちゃんと朱織の二人。

「ちうちちゃんは、まあわからなくもないけど、朱織までか」

「あの人目がマジなんだよう」

そう言つて朱織は、成績優秀者に指示を出している雪広の方を指差す。

ああ、そういうえばさっきネギがクビだとか騒いでたな。

「目を付けられるとダルいから、ポーズだけでもやっとなないとねえ」

確かに。ここで従つておかないと、逃がさないよう一対一で教えてきそつな勢いだな。

ちなみに朱織は普段から赤点を回避する点数しか取っていない。補習に行くのはダルい。だがテスト全問解くのもダルいとの考えだ。

実際のところ、古典と日本史なら大学でも通用すると思う。

「零崎さん！ 聞こえましたわよ！」

先程の朱織の発言に反応する雪広。

どの道、目を付けられてるじゃないか。

「（チツ、うつせいな）真面目にやりますよう」

「ちょっと　　！！！」

《火に油を注ぐ、ただし水掛け論》みたいなっ！

全く、そういうことを言うから目を付けられるんだよ。

「あー雪広。朱織のことは気にせず自分の作業に戻ってくれ。俺たちはさよちゃんに教えてもらうから」

雪広もいつまでも一人に構っている場合ではないと理解しているの  
で、自分も他のクラスメイト達に教えにいった。

「しかし、最下位脱出するだけって、つまらなくないか？」

「つまらないって何するつもりだよ」

俺の呟きにちうちちゃんが反応してくれる。

「今回俺は平均を70ぐらいに調整しようと思うんだ」

振り分けは英語100、残り63って感じで。

「70だと足は引つ張らないだろうからな。平均を70に一番近付

「けたた奴が優勝ってゲームか？」

「まあ、それも悪くはないな。」

「ちうちちゃんと刹那が俺の平均を下回ったら絶対絶命都市ごっこでもやろうかなと」

「図書館島とか世界樹の下の空洞を支えている魔法をぶち壊し、後は崩れゆく学園を気とか魔力とか色々制限を付けて逃げるだけ。」

「流石に殺人ウイルスや復讐劇までは用意できないが、宝石女やフリートのライターという名の火事場泥棒は百人単位で出てくれる筈だ。」

「ごっこ遊びの領域じゃねーよ！　いいか、絶対やるなよ！！」

「押すなよ、絶対押すなよ、のアレですね。わかります」

「ちげーよ！！」

「冗談だって。……まあ、中には冗談にこそ命を懸ける奴も居るんだがな」

「桜咲。70だ！　全教科最低でも70は取れ」

「多分刹那はいつも選択肢が予想の斜め上に行くあのゲームを知らないんだらう。」

「いや、俺だって本気で学園を崩落させようとかは考えてないからね。そんな霊脈を歪ませるような真似を俺がするわけないじゃないか。」

しかしちうちゃんは冗談だとは受け取ってくれず、本腰入れて勉強を始めてしまった。当然刹那にもどんなゲームのか説明して。

これが日頃の行いというヤツだろう。

さらに翌日。

テストを明日に控えているのにも関わらず、未だに帰って来ない木乃香。

あのジジイ、ついにポケで日にちがわからなくなったんじゃないかと本気で心配になり、俺が直接迎えに行くことにした。

そして今は図書館島の外をうろろろしている。

久しぶりにうる覚えの原作知識に頼ると、何か楽に移動できる手段がどこかにあった筈なんだよ。

まあ、取り敢えず一周して何も無かったら正面から入って道なりに進んでいくか。後は適当に誤魔化して《門》を使って帰ってこよう。

と考えていたんだが、図書館の裏手に回ると、エレベーターがそこに在った。

ああ。エレベーターだったか。案外覚えてるもんだな。いや、エレベーターを忘れてたから覚えてないのか？

結局、どっちでもいつか、と結論付けて、俺は地下まで一直線に降

りていった。

エレベーターの扉が開き、まず一番最初に目に入ったのは、螺旋階段。唯の螺旋階段ではなく円柱状の建造物の壁を沿うようにして造られた馬鹿みたいに長い階段。

「…………造った奴馬鹿だろ」

実際にこの光景を見ると呆れるね。

階段の淵から下を覗くと、地面が見えない。一番底まで光が届いてないんだろ。

俺が今立っているエレベーターの扉の横には地下三十階と書かれているんだが。そこから目視で…………ざっと一〇〇メートルはあるな。実際はもっと深いだろう。

ここまで電気を通すのにどれだけの金と労力が掛かっているんだろ。うか。というか、金が余ってるなら、落下防止の柵ぐらいは設置しろと。

こんなの飛び降りて下さいと言っているようなものだぞ。こんな風に。

「よつと」

軽い掛け声とともに重力に身を委ねる。きっとその内、自殺の名所になるだろう。

まあ、冗談で。この場合は自由落下に任せの方が楽だからな。帰り



は馬鹿正直にこの螺旋階段を昇りたくないの、落下中に糸を張り巡らせておく。

そして地面に接する前に浮遊術を使って着地。

壁の一部から光が漏れているので、おそらくそこが扉だろう。開けるのも面倒なので扉の死の線を斬る。

光が暗闇を満たし、馬鹿みたいに長い螺旋階段の次に俺の目に入ったのは　滝だった。

……まあ、取り敢えず、今は木乃香だ。木乃香を捜そう。

滝をくぐって外に出る。

するとそこには、地下とは思えないほどの広い空間が存在していた。昨日言った『絶体絶命都市』の冗談が洒落で済まなくなってきた。こんな地盤で大丈夫か？

流石に現状を目の当たりにすると、どうでもいいで片付けることが出来なくなった。願わくば俺の存命中に大地震が起こらないことを祈る。

「本に囲まれてあったかくて、ホント楽園やなー」

そんな俺の心配を余所に、リクライニングチェアで横になって寛いでいる木乃香を発見。思いのほか早く見つけたな。

心機一転。または気分転換を兼ねて、気配を絶ち寛いでいる木乃香の後ろに立つ。

「将来は本に埋もれて死にたいね」

と、池袋周辺にいる腐女子が言っていたセリフを耳元で囁く。セリフの抜粋は気分です。

「わひゃあー!!」

木乃香は陸に打ち揚げられた魚のように飛び上がり、「な、な……!」と口をパクパクさせている。お。俺の渡したネックレス着けてくれてるぜ。嬉しいねえ。

突然大声を出すから隣に居た綾瀬も驚いてるじゃないか。俺の登場にかもしれないけど。

「何で俺がここに? って聞きたいのか?」

コクコク、と頷く木乃香。

「帰りが遅いから迎えに来たよ」

「ど、どこから!?!? どうやって!?!?」

自分で質問出来るぐらいには落ち着いたようだ。

「家から歩いて」

図書館島に着いてからはエレベーター使って、螺旋階段は使わずに飛び降りて来ました。

「歩いてって。ここは図書館探検部でも噂レベルの未知のエリアな

んやえ」

「何だ、木乃香。知らないのか？ 愛は全能なんだぜ」

そしてここで距離を詰めて、木乃香を抱きかかえてみた。俗に言うお姫様だつこで。

驚きと羞恥で顔を赤く染める木乃香を觀賞。運賃にこれくらいはしてもいいと思うんだ。

「あー、綾瀬。滝の裏に出口があるから他のメンバーによろしく。俺たちは一足先に帰るから」

返答を待つ筈も無く、さつさと来た道を引き返す。

「こんなところに出口があったんやな」

「非常口のマークが付いてるけど、見つけられなかったら無意味だろっ」

ほんの数分前までちゃんとした扉があった場所を踏み超える。

そして待ち構えているのは意味不明な光景。

「……これ、全部昇るん？ だったらそろそろ降ろして」

「いやいや、昇るわけないじゃん。移動はショートカットしないとね」

予め張り巡らせておいた糸を足場に、一直線にエレベーターまで跳

び上がる。

後はエレベーターが一階に着くのを待つだけ。

「兄様すごいなあ」

「まあ、これぐらい出来ないと長兄なんて名乗れないしな」

そろそろ一人くらい家賊に出遭ってもいいと思うんだ。一向に現れる気配はないが。

「にしても、ちょっと意外だったよ。噂がデマとわかっていても図書館島にまで来るなんて」

「うん。だってデマって教えてへんもん」

と笑顔で言ってくれる。俺の妹がこんなに策士なわけがない。

「この学校はエスカレーター式やから今は問題ないけど、義務教育が終わってもこのままやったら絶対留年するやろ。そしたら、ちょっと間を置くん休学届を出して、次の年には退学届を提出って流れになりそうやったから」

……双子のシンクロ率、高過ぎませんか？

そうこうしている内に一階に到着。

「え？ あれ？ こんなところにエレベーターなんて無かったえ」

「うん？」

「ウチらその裏口から入ったんや」

そう言つて木乃香はエレベーターの隣にある扉を指差す。

まさかあのジジイこれを造っていたからテスト前日まで地下で過ごさせたわけじゃあるまいな。

そしてやってきた三月二十五日。今日は終了式。やっと三学期が終わるぜ。

人生という長い目で節目を考えると、学校関係は入学と卒業ぐらいのものだが、学生という狭い範囲で見ると学年が一つ上に上がるのは大きな変化と言えるだろう。

ディスプレイ上では数字が一つ増えるだけ。そんな小さな変化だが、当事者から見れば節目と言つて差し支えない変化だ。

中でも二年から三年、つまり最高学年に上がるとなると、もう先輩は居らず自分たちが後輩を引っ張つていく側になってしまう。

一挙一動、責任を持つて行動しろとは流石に言い過ぎだが、最低限後輩の模範にはなるべきだろう。

後輩の頭髪や服装が乱れた時、『先輩がやってました』と言いつて訳をさせるようでは、その学校の程度も知れるというものだ。

模範になるような行動。つまり、学年最下位脱出したらいいですよ。

「さあ兄様。明日から春休みやな」

「そうだねえ」

今は終了式＋最下位脱出のパーティーをやっている。帰ろうとしたら捕まったんだよね。

「……勿論、約束忘れてへんよな？」

木乃香が言っているのは夏休みに約束した旅行の件だろう。

「覚えてるって。でも行く前に一度実家に帰るぞ」

なんの不備も無くて忘れられているが、夕凧ってどうなったんだろ  
うな。

まあそれは置いて、どこに行くかとか細かい事を決めていこう  
か。

### 第三一話：期末テストがあるらしい（後書き）

次の話は春休みになるわけですが、テストがあるので半端な所で途切れると思われませう。

なので春休みの話を書き終えたらまとめて投稿します。

### 第三話：かごめかごめ（前書き）

これは木乃香に魔法をバラす為だけのイベントです。  
新しいキャラがレギュラー化することはありません。  
以上の点を留意した上でお読み下さい。

それにしても神世希さんの『神戯』が2940円って学生の懐には  
痛いですね。



### 第三二話：かごめかごめ

三月二十六日。

本格的に春休みが始まり、続々と寮生が実家へ帰省する中、その一団に紛れて俺と木乃香も道すがら実家に顔を出しに行ってる。

最近ほぼ全てにおいて《門》を使いつぱなしかったから、こついう旅の道程を家族と楽しむのも悪くはない。

寧ろ新幹線に乗るのなんて初めてだぜ。

しかし、よくよく考えると一応去年実家には帰ったが、京都市内を見て回るといって時系列順だと大体十年ぶりになるのだろうか。

俺の主観で一番最近来たのは約五年前だが、それは十六年前のナギ達の新婚旅行だからなあ。

我ながらよくわからない行動をしたものだ。取り敢えず、これが運シユ命石の扉の選択だ。とでも言っておこう。

「なあ兄様。九州に行きたいって言ってたけど、何か見たいもんでもあるん？」

そうそう。一応旅行先は九州ということになった。

「特に無いけど、九州地方ってまだ一回も行ったことが無かったからな」

何とも漠然とした範囲だが、ほら、俺って曲絃師だし。一度くらい

は福岡を訪れてみたかったんだ。

福岡到着と同時に俺の旅の目的は果たされるので、あとは風の吹くままを体現するよ。行き当たりばつたりの無計画旅行とか言うな。

木乃香も麻帆良と実家を行き来する以外で遠出するのは初めてらしいので、色々と見て回れたらいいと思っている。目標は九州一周。

春休みは約二週間近くあるしな。金と時間が余ってるからこそ許される道楽だろう。おかげで荷物がちよつと多くなっている。『倉庫』を使いたいです。

さて、そうこうしている内に京都に着いたようだ。

取り敢えず今日は実家に泊まるとして、九州に行くのは明日かな。

新幹線を降り、32・33番ホームから嵯峨野線に乗りかえる。そういえば、京都駅ビルの大階段と空中経路を今日初めて見たよ。…地元民なのにな。

態々九州まで行かずに京都を巡るだけでもいい気がしてきた。

本末転倒なことを真剣に考え始める前に思考をシャットアウト。

今更ここに来て予定変更というのもしかと思うし。まあ、予定なんてあって無いようなものなだけだよ。

予定は未定。未だに定まらない。

寧ろ人生、予め定まっている方が少ないだろう。

人生は旅だ。行き先が同じ者と一緒に歩み、時には新たに加わる者も居るであろう。逆に自分が途中から別れてしまつかもしれない。しかし。それでも、燃料と方向さえわかっているれば、楽ではなくともきつと楽しい旅になる。

と、自分でも一体何が言いたいのか、わからなくなってきたところで、

「お父様に会うんも久しぶりやなあ」

木乃香が口を開いた。

正直、落ちまで考えていなかったので有難い。

「木乃香が戻って来るのはいつ以来だったっけ？」

「うん。少なくとも、中学に入ってから帰ってない」

「結構長いな」

「ウチのクラスは休みに帰る人って少ないし、いつも通り皆で集まって遊んでたりしたから」

ああ、あの祭り好きな連中なら帰省よりも麻帆帆良に残ることを選択するか。

それでも一目ぐらいは親に会ってやれよ。

「やっぱり二年近く帰ってないと街並みもちょっと変わっとなるな」  
電車から走り去る風景を見ても、俺には判断できん。かろうじて判断できるのは、記憶よりも霊脈がちょっとズレてるなあ、くらいのものだ。

ズレていると言っても、許容範囲内なので特に問題はないだろう。

土地開発ってホント嫌になる。

「ところで、変わると言っと、後一週間後にはもう三年なわけだが、何か心境の変化とかはある？」

「普通校なら受験とかなんやらうけど、ウチの学校はエスカレーター式やし、そういうのは無いえ。兄様の方は？」

「諸行無常に盾突いてみようと」

「この世に変わらないものなんてないえ」

「いいや、あるね！」

「えー。何があるん？」

「ひとえに、愛だよ！」

「あはは。愛かー。愛なら仕方ないなー」

そんな話をしている内に駅に到着。どんな兄妹だとかツッコミは無しの方で。

さて、ここからは面倒なのでタクシーを使おうか。

「どちらまで？」

タクシードライバーの方に話しかけられるが、ヤバイ。うる覚えだ。

「あー、？カガビコノヤシロ毘古社ツってわかります？」

「千本鳥居のあるところかい？」

「あ、はい。そこです」

よかった、合ってた。総本山の表の顔なんて意識してなかったし、興味も無かったからな。

そして着くまでの間ドライバーが振ってくる世間話に木乃香と受け答えしていった。

それにしても、あの石段絶対に無駄だと思っただが。

長いし。

景色がいいのならまだしもずっと竹林だけ。月の民でも住んでるのかっつーの。

原作でもあった気がするが、罨に嵌めるならもっと簡単で効率の良い方法があるだろうに。

まあ、歩くのが面倒という理由で総本山の造りにダメ出しするの  
もどうかと思うからこれ以上は言わないけれども。

今は多くの巫女に向かい入れられて、詠春に会いに行っている最中  
だ。

にしても、改めて見ると巫女の比率が異様に多い。昔も多かったけ  
ど、更に増えている気がするんだが。採用基準とかは一体どうなっ  
てるんだよ。

まあ、いいんだけどね。武装巫女。

そうしている間に詠春の部屋に着いた。

「お父様久しぶりやー」

「やあやあ父さん。旅行のついでに顔を出しに来てやったぜ」

「ハハハ。久しぶりですね、木乃香。彩輝も相変わらずのようぞ」

「そつちも相変わらずやつれてんなー」

「ここ最近立て込んでましたからね。それも一段落つききましたよ」

俺だから言ったのかもしれないが、木乃香の前で仕事の話はしない  
方がいいと思うぜ。……話を振ったのも俺だが。

「仕事が大変でも身体には気を付けなあかんぞ」

「ハハ。わかっています。心配してくれてありがとうございます、木乃香」

政略とか向いてないんだし、もういつそのこと誰か信頼出来る奴に譲ったらどうなんだ。と思わなくもないが、簡単にはいかないよな  
！。

嫌だねえ。西とか東とか、権力争いとか。面倒な事この上ない。

そっち方面に後処理を任せることもあるけれど、俺に任せるのは荒事だけにしたい。

「それで、二人はこれからどうするんです？」

「取り敢えず今日は泊まっていくよ。折角の実家だしな」

「あ、じゃあウチはちょっと自分の部屋を見てくるえ」

自分の部屋ね。入るの久しぶりだからなあ。俺も行くか。

「彩輝」

立ち上がるうとしたら、詠春呼び止められてしまったので、そのまま座り直す。

「何だ？」

「木乃香に魔法のことを」

「教えてないって」

「そうですね。私だつてわかつてはいるんですよ。周りがそれを許さないと。いずれは知ることになると。それでも普通の女の子として幸せなつて欲しいんです」

ああ、父親というのはこういう馬鹿を指す言葉だったか。

「いいんじゃないか」

案外。家族想いなのは遺伝だったりして。

「彩輝にもそうあつて欲しかったんですがね」

「無理無理。ここまできたら行き着くところまで行かないと気持ちが悪い」

文字通りこの世の果てまでさ。

「近々大きな抗争があるかもしれません」

ん？ 何だいきなり。

「過激派と呼ばれる派閥の不正の証拠を粗方集め終わりました、ここから一気に掃討といきたいのですが」

まあ、新しい環境についていけず必死に抵抗するのは、老いぼれと相場が決まっています、老いぼれは総じて上の役職に就いてるからな。

反発とか抵抗とか多いだろう。

「もしもの時は頼んでいいですか」



「親孝行を蔑ろにする不出来な息子ではないつもりだよ。その頼み、請け負おう」

いつになるかわからないが、必死にやっても必ず死ぬという現実を老害に見せつけてやるうか。

「なあ、詠春」

詠春は突然呼び方を変えたからか虚を突かれたような顔をする。

「まだ時間あるんだろ？ 久しぶりに殺らないか？」

「ハウルと死合うのも随分久しぶりですね」

そして無事修復された夕凧を手にとって部屋を出る詠春。

それに続き俺も気兼ねなく殺れる道場の方に移動した。

細かい描写はしないけど、師範代が『お前ら親子じゃねえ！』とドン引きするくらいの殺陣を披露した。

思っていたよりも身体が鈍ってなかったようで、途中からお互いにテンション上がったちゃってさ。つい、急所や致命傷を狙って……。

あくまで本気じゃなくて、じゃれ合いの領域だからな。そこを勘違いしないでくれよ。現にお互い大きな怪我は無いし。道場だってちゃんと原型が残ってるからな。

まあ、詠春も気晴らしが出来たようだなによりだ。

そして一日経った朝。

詠春や巫女さんたちに見送られ、再び嵯峨野線から京都駅に向かう俺と木乃香。

京都駅に着くとそこから福岡行きの新幹線に乗る。

一度新大阪に行った方が値段的に安上がりらしいが、金銭的な問題は関係ないしな。

行きはずっと新幹線での移動が続いているが、帰りは羽田まで飛行機で戻ることになるだろう。ネットで何でもできる便利な時代になったものだ。

しかし、京都では普通だったが離れるにつれて和装が目立ってくるね。周りの視線なんて気にも留めないが。

道中木乃香と取り留めの無い会話を楽しんでいる内に博多駅に着いたようだ。

新幹線を降り、ホームを後にする。

こういう旅行のときって、どこぞの探偵とかだと絶対に人が死ぬんだろうな。

まあ、もしも殺人事件が起きた場合、犯人は十中八九俺だろうから、探偵や警察の手を煩わせるまでも無い。

と言っても、俺には旅行先で事件に巻き込まれるような体質は持ち合わせていないが。

基本的に俺が関わる事件は、依頼を受けるか、全てわかった上で自分から首を突っ込むかの二択だ。

「兄様。……人がどこにもおらんえ」

だからこういう巻き込まれみたいな事態に陥るのはすごく稀だ。レアケースです。希少価値は無い。

九州の入り口とも言える福岡の、俺たちのように新幹線に乗って来た観光客がたくさん居る筈の博多駅が、今無人になっている。

「……兄様」

「大丈夫大丈夫」

不安になり俺の服の裾を掴む木乃香をあやす。ついでに裾を掴むだけでは心許ないので木乃香の手を握る。

さて、人払い、……いや、これは位相を少しずらしてるのか。はあ、手の込んだことを。

駅にこんなもの仕掛けられちゃ回避不能だろうが。

全く着いて早々これだなんて、先が思いやられるぜ。

取り敢えず、木乃香と手を繋いだまま外に向けて歩き始める。

位相をずらすなんて、個人でやるとは思えない。なら複数と考えるべき。

目的は現状で考えると、俺と木乃香だろう。しかし、世間の風評で彩織は死亡説有力。彩輝は普通の男子中学生。となると、やっぱり木乃香の保有魔力量が狙いになるか。

まったく詠春も何か起こってるんだったら一言ぐらい言えよ。駅で待ち構えてるとか普通の状況じゃねえぞ。この情報化社会で、ここまですで大掛かりなことやってたら耳に入るだろうに。

足を止める。

「どしたん？」

直後、木乃香の問いかけに答えるように、五人の黒服に身を包んだ男が俺たちを取り囲むように出てくる。

木乃香の手を握る力がほんの少し強くなった。

「別に俺たちはUFOの目撃者じゃないんだから、黒服に囲まれる覚えは無いんだが」

これを都市伝説と取るか、映画と取るかは貴方達しだい、と付け足したが、全くのノーリアクション。

困ったなあ。

「冗談抜きで本当に誰だよ、アンタら」

するとやっと正面に立った男が口を開き、

「知る必要はない」

オーケー。俺に一方的に喋り続けろってことですね。疲れる。誰かのど飴を一つくれませんか？

と思っていたら、懐に手を伸ばし始める男たち。ちよっ、戦闘パ―トに移るの早いつて。まだお前らの所屬とか聞き出してないのに。

「にとーれんげき、ざんがんけーん」

情報は聞き出せないが木乃香がいるため、一瞬で処理しようと動こうとした時、もう一人、ロリータ・ファッションに身を包み、長短二刀を手にした眼鏡っ娘が乱入した。

乱入して黒服に斬りかかった。咄嗟に木乃香の視界を遮る。

幸か不幸かはわからないが傷が浅かったらしく、血飛沫が飛び散るような光景にはならなかったが。

「ざーんてーつせーん」

コイツ、どう見ても神鳴流だな。何？ 詠春の奴は護衛でも付けてたわけ？

今回情報弱者もいいとこだ。

まあ、何か知らんが、チャンス。

「逃げるぞ、木乃香」

手を引いて走る。旅行鞆が無ければ、図書館島のようにお姫様だっこしていくんだが。

外に逃げるのではなく、手近な窓へ。駅と外との境界へ。

そして、辿り着くと境界の死の線を糸で断ち切る。

境界を失った位相のずれた世界はバランスを崩し、駅にはおそらく普段通りであるう活気が突如として戻る。

「兄様、今の、何なん？」

不安を浮かべた表情で尋ねてくる。

「取り敢えず、ゆっくり話せる所に行こう」

時間的にもいいし、ホテルにチェックインするか。

かなり不満そうだが、手を握って着いてくる木乃香。

移動中に俺は携帯を取り出して詠春と連絡を取る。

そして、木乃香にバラすかもしれないことと、今九州で起こっている事件について尋ねた。

前者は俺の判断に任せると、後者は何も知らないだってさ。

はあ、事件の全容を見て判断するか、それともさっさと《門》を使って帰るべきかねえ。

でも関わるなら、結末まで見た方がいいだろうし。アトラクタフィールド理論的には世界中どこに行っただって事件に巻き込まれる自信がある。

結局、まだもう少し、現状に流されてみるか、と結論に至った。これが最初で最後の接触だったら楽なんだけどもなあ。

### 第三三話：籠の中の鳥は

詠春との通話が終了した後、真っ直ぐ福岡市内にあるホテルに向かった。

俺だって初日に泊まるホテルくらいは麻帆良にいたときに予約してある。

「木乃香。前に渡した瑪瑙のネックレス、絶対に外すんじゃないぞ」

「え？ うん、わかったえ」

「あと、これも」

そうやって、俺はブレスレットを手渡す。木乃香の魔力が狙いみたいなので、それを隠すために。

そしてホテルに到着し、チェックインをする際、フロントで中学生二人がデラックススインの部屋に泊まるとわかると、係の人に一瞬怪訝な表情をされたが、すぐに「ありがとうございます」と丁寧に礼を言われ、カードキーを渡された。

そのスルースキルを見習ってこのまま麻帆良に帰るべきでしょうか。渡されたカードキーには『1705』と書かれている。十七階と聞くと、嘘つきとかロリコンの探偵とか金髪青スーツの殺人鬼とか自殺志願者とか作家とか大学生とか死体とか猫がいないか期待するよね。



まあ、それは置いて、フロント係に案内されたエレベーターの前に辿り着く。

「あ」

「え？」

「ほえ？」

そこにはちょうどエレベーターが降りてくるのを待つ、さっき乱入した神鳴流剣士が居た。

木乃香は先程離れた手を再び繋いで、俺の背中に隠れてしまう。いきなり人に向かって真剣を振り回す人間を見たら当然の反応だろう。にしても、同じホテルに泊まってるのかよ。まあ、それはそれでちようどいいか。今の俺は情報弱者だからな。

「月詠、知り合いかい？」

隣に俺より二つか三つ程上で藍色の唐傘を手にしたポニーテールの女性がいるが、どうやら連れの人らしい。こっちは見た感じ戦闘経験とか無さそうだな。

ていうか、何故に唐傘？

「えーつと……あ、さっき駅に居た人ですかー」

あー、こっちも思い出してきたぜ。二刀流で月詠って名前、確か『完全なる世界』に雇われるんだったか。あと戦闘狂ってことも思い

出した。

「ええ。さっきはどうも」

「一つ聞きますけど、あの時結界を破ったんはお兄さんですかー？」

「さあ？ 何のことかな？」

「惚けても無駄ですえー。お兄さん相当強いですやる。一度死合っ  
てみたいわー」

それに俺は適当に笑って流す。

戦闘狂は本能の部分にスカウターでも付いてるのか。

ここでエレベーターが到着し、扉が開く。

乗らないわけにもいかないの、四人とも中に入る。

階のボタンを押そうとしたら先に月詠の連れの女性が十七階のボタ  
ンを押した。

ハハッ。泊まる階まで同じかよ。

でもある意味良かったかもしれん。戦闘狂がいる場所は一番戦闘の  
多いところだろ。となると、事件の中核か少なくともそれに近い位  
置に関わっている筈だ。

……ってことは、このポニーテールの人が黒服の目的？

関わるか関わらないか、ゆっくりじっくり見極めることが出来ればいいんだが。

エレベーター内では特に会話も無く（月詠と俺との間で多少の牽制はあったが）、十七階に着き、扉が開く。

えっと、1705号室は……エレベーターを出てすぐのT字路を左に進む。

「お。ここか」

部屋の前に立つとカードキーを挿入口に入れ、ロックを解除する。

「ほな、ウチらはこっちの部屋なんで。ではー」

そう言って、月詠たちは1704号室に入っていった。

隣の部屋とか、ここまでくると笑えねー。

間違ってこっちの部屋に襲撃があるなんてベタな展開が無いことを祈る。

自分たちもすぐに部屋に入ると、流石デラックススイーンと称するベキか、随分と金を掛けた空間が広がっていた。

十七階だけあって福岡市内を一望できる景色。

ホテルと聞くと洋風のイメージがあるが、そうでもない。戸に障子が使われていたり、さり気なく東洋の特色も至る所に散りばめられている。

和洋折衷と聞くと、神戸という印象が強いかな。

そしてベッドとソファのある空間を隔てるようにガラステーブルが置かれており、その上には32型の液晶テレビ。

気になるベッドは肌触りが良く、今ちょっと横にされてるんだが寝心地もかなり良い。

これホテルから出なくてもいいんじゃない？

「やっと二人きりやな」

「おっと、まだバスルームの描写をしてないぜ」

「兄様。全部教えて。兄様は、ううん、皆はウチに何を隠しとるん？」

げんじつとーひしゅーりよー。

「その前にどいてくれ。この体勢は流石に不味い」

端的に申しますと、ベッドで妹に馬乗りになされている兄という構図が。そこ！三ヶタの数字をプッシュして国家機関を呼ぶな！

「ほな、喋って」

あれかなあ。学園の認識阻害の結界がないからかなあ。それが決定打になったのは間違いないだろう。

まあ、教えるのは一ヶ月早いか遅いかの違いだし、俺は別に構わな  
いんだが。

「実は俺……十年近く飲酒と喫煙を嗜んでるんだ」

ちなみにこの部屋は禁煙です。

「兄様のふりよー」

「そしてこの世界には魔法というものがあつたりする」

「……………ホンマに？」

「ホントホント。ところで、何でも二回繰り返すと信憑性がガクッと下がるよね、うん」

木乃香は「はあ」と溜息をついて馬乗りの体勢を止め、ベッドの端に座った。

俺も上体を起こして木乃香の隣に座る。

「それで？ 皆がウチに隠してた理由は？」

それから俺は詠春のことから始まって、実家のこと、木乃香の保有魔力量のこと、時折木乃香からの質問に答えながら、話していった。

流石に俺自身のことはぼかしている。いきなりは刺激が強過ぎるだ  
ろ。

そして、ある程度のことを話し終えた。

「……そっか」

話の内容を吟味しながら頷く木乃香。

「うん。ウチが結構危ない場所に立つとるんはわかった。駅で起こった事もウチの魔力っていうんが目的なん？」

「わからん。判断材料が少な過ぎる。まあ、隣の二人組が何か知ってるのは確かだろうが」

「というか、良く考えると無理だよな。この計画性皆無の旅行を予測して待ち伏せするなんて。」

黒服の目的は隣の部屋に行って直接聞くのが一番早いんだろうが、それは事件に関わるのと同義だし。

「にしても、よくこんな荒唐無稽な話をすぐに信じたな」

将来詐欺に遭うんじゃないかと少し心配だよ。

「兄様の嘘くらい見抜けるって。ウチは兄様の妹やえ」

「マジッスカマイシスター。ひょっとして何か癖とかある？ 判断基準を教えてください」

「ひとえに、愛やよ」

「愛かー。なら仕方ないな」

一日話の区切りが付いたところで、なんとなくテレビを点ける。ちよつと今やっているのは福岡の報道番組。

福岡の観光名所とか映ってないかな。ネットの方が早いかな。思い直して携帯を開く。

現地に来てやることでは絶対じゃない。

「ところで、ウチらはこれからどうするん？」

「今どこ行くのが決めてるところ。行きたい所が出来たりしたか？」

「ほうやなくて、ウチ狙われとるかもしれんのやろ」

ああ、そつちか。

別に木乃香を狙って来ていると決まったわけでもないし、敵対してもいないのにあんな雑魚共を一々屠りに行くのも面倒なんだよなあ。

本気で木乃香を害するっていうならそれ相応の対処をするが。

なんて考えていた時期も確かにありました。

点けっ放しにしていたテレビから緊急速報のテロップが流れる。

地震かと思ったら、天災じゃなく人災だった。

爆破テロ予告の影響で鹿児島本線、篠栗線、山陽新幹線、博多南線、福岡市地下鉄空港線が運転見合わせ。テロップにはそう書かれている。

鉄道とかそんなに詳しくないし、ちゃんと覚えているわけじゃないんだが、これ全部博多駅通ってなかったか？

すぐに携帯で調べてみたが、どうやら当たりのようだ。

タイミング的にあの黒服が関わってるのは間違いない筈。ていうかテロ予告とか迷惑にも程があるだろ。

位相をずらすのには相当時間が掛かるらしく、手っ取り早く移動手段を封じたということだろうか。

こっちが警戒している中、すぐニュースになるような手段を選ぶってことは……普通なら詰め一歩手前じゃね？

「木乃香質問」

「なに？」

「自分が追われているとして、この爆破テロ予告が追っ手のやったものだと確信出来たらどうする？」

「逃げる。居場所がバレてそうやし」

「だよねー。自分のいる町の駅が使えなくなったら潜伏先はバレていると考えた方がいいよね。」

「どうする？ 旅行のついでに職業体験学習でもしていくか？」

「ちなみに何の職業？」



「請負人兼魔法使い」

「興味はあるえ。魔法とか」

「オーケー。取り敢えず念頭に置いて欲しいことが三つある」

「ん」

「一度関わったからと言って、絶対に魔法使いにならないといけな  
いなんて巫山戯たルールは無い。あくまでも進路の一つとして考え  
るんだ」

「ウチの人生はウチが決めるってこと？」

流石俺の妹。話が早くて助かる。

「二つ、俺の言うことは必ず聞くように」

「わかってるって。最後は？」

「魔法はファンタジックでもロマンチックでもメルヘンチックでも  
ない」

「？ じゃあ、何なん？」

「ただの道具だよ」

人助けから人殺しまで出来る便利な道具だ。

カッターナイフにときめく人間なんていないだろ、普通。厄介なのは妖刀なんかと同じ様に人を魅せる魔力があるってところか。

話は終わり。

旅行鞆を『倉庫』に入れる。これで移動がかなり楽になるぜ。帰りに《門》を使うのは確定だな。

「ホンマに魔法なんやなー」

「使い勝手が良過ぎるのも考えものだよ」

既にテロップは流れておらず、番組ではどこかの家から二千万円払って買った絵が盗まれたという事件を取り上げている。

無論最後まで聞かず、話の途中のオッサンに赤外線をぶつけて、目に映らないよう黒で塗り潰してやった。そして、そのオッサンを二度と見ることはない。

カードキーを持って木乃香と一緒に部屋を出る。その際、ドアにDon't disturbの札を掛けるのを忘れない。

行き先はフロントではなく、1704号室。

出てすぐ隣の部屋の呼び出しブザーを鳴らす。

十秒もしない内に扉が開き、まず最初に出迎えてくれたのは一本の太刀だった。

真っ直ぐ俺の眉間にタッチしようとする刀を左手で横に弾いて軌道

を逸らす。

直後には月詠は俺の懐に入り、小太刀を下から斬り上げるようにして、「ざんがんけーん」と奥義を放とうとする。

当然振り切る前に右手で月詠の腕を掴んで止め、「虚刀流 蒲公英」太刀を弾いた左手で月詠の眼を貫く。とまではせず、指先が眼鏡に触れるくらいで止める。

「やあ。君らが関わっているであろう事件の話聞きに来ただけど、教えてくれないかな」

「だそうですけど、どうしますー？」

月詠が部屋の奥に居るであろう連れの人に尋ねる。

その間、俺はいつでも月詠の眼を抉れるように、月詠も隙あらば俺を殺れるように互いに一ミリたりとも動かない。

そしてお互い笑みが浮かんでいるせいか、後ろで木乃香が引いてるぜ。

「入れてあげて」

部屋の中から返答があった。

って、え？ マジで？ ここの交渉が要だと思っていたんだが。

ホテルの従業員の仕事を大幅に増やす訳にもいかないので、これ以上俺に殺る気は無いと意思表示。

月詠は物凄くつまらなそうな顔をして部屋の中へ入っていった。俺たちもそれに続く。

軽く室内を見渡してみると、部屋の造りは同じらしい。同じデラックスインだから当たり前か。

あっさりと通されたから罨でもあるのかと多少警戒していたんだが、何も無かった。拍子抜けにも程がある。

「早速で悪いけど、ゆっくり話したいから場所を変えてもいいかい？」

とポニーテールの連れの人から提案された。にしても、呼び名が長い。それにこの場合月詠の方が連れだろうし。

取り敢えず、ポニ子さん（仮称）とでも呼んでおこう。

反対意見は無いので俺はポニ子さんの提案に乗る。

勿論、ドアから出るなんて行儀の良い真似はせず、窓を開ける。

「月詠、頼むよ」

「仕方ありまへんなー」

刀を持った月詠と唐傘を持ったポニ子さんが窓を越えて、一人一人がギリギリ通れるくらいの窓の縁に立つ。何故お前らは唯一持っている私物がそれなんだ。

そして、月詠がポニ子さんを抱えて、跳んだ。近くの建物の屋根に跳躍する。良い子は真似すんなよ！。

「さて、俺たちも追いかけないとね」

「ま、待って兄様。ここ十七階やえ」

「高が十七階だろ？ さあ行こうか」

最近木乃香をお姫様だっこ出来る機会が多いなあと感じつつ、月詠を追って俺も跳ぶ。

窓は開けっ放しだが、俺の泊まってる部屋じゃないし、別にいつか金はちゃんとポニ子さんが払う筈なので経営者の方、許して下さい。

木乃香の悲鳴が「きゃー」から「いえー」に変わり始めた頃、月詠とポニ子さんが地面に降りファミレスに入るのが見えた。

それに続いて、俺と木乃香もそのファミレスに入店する。

店内を見渡して、ボックス席を陣取っている二人を発見。その向かいの席まで移動する。ついでに盗聴防止の結界を張っておこう。

「見事なものだね」

手際良く張った所為か、ポニ子さんに賛辞を述べられる。

「大したこと無いですよ」

謙虚な姿勢で受け取っておこうか。

「では改めて。私は鬼灯しじま。事態の発端を担ってしまった張本人だ。巻き込んでしまったようですまない」

「ウチは月詠いますー。よしなにー」

ポニ子さん改め鬼灯しじまと月詠が自己紹介を始める。どう考えてもこっちも名乗らないといけないわけだが。

「俺は香乃木志紀<sup>コウノキ シキ</sup>。ただのしがない請負人さ」

おっと。つい偽名が口から飛び出してしまう。

まあ、出てしまったものは仕方ない。静寂<sup>しじま</sup>に回収を任せよう。

「で、こっちが妹の綾<sup>アヤ</sup>」

木乃香が何か言う前に肩に手を回して抱き寄せる。

「（近衛の名前は思っているよりも影響力が強いんだ。不用意に名乗らない方がいい）」

耳元で囁くと、木乃香はコクリと小さく頷く。

「香乃木綾です」

簡潔に名前を騙る木乃香。

「しかし鬼灯さん」

「しじまでいいさ」

「しじまは俺たちを追っ手だとは考えなかったのか？」

追われている立場の人間が見ず知らずの人間を部屋に上げるなんて、愚行にしか見えないんだが。

「いきなり呼び捨てはちょっと予想外。理由としては、あの人が外から人を雇うなんて恥を晒す真似はしないと、確信しているからさ」

はつきりと断言するあたり、他にも根拠はあるんだろう。

「それで？ あの人がっていうのは？」

あの黒服たちが雇われてないとしたら、しじまって一人で組織に喧嘩売ってることにならないだろうか。

「私の祖母だ」

は？

「私は今一人暮らしをしているんだが、つい先日、帰って来いと言われてね。それを拒否して逃げ回ってる」

おいおいおいおい。位相までずらして待ち構えているからどんな大事件かと思っていいたら、単なる家出かよ。

そりゃあ孫娘が家出したなんて理由で人を雇ったら恥晒しもいいとこだろうな。

「一応聞くけど帰らない理由は？」

俺の至極真つ当な問いに、単純極まりない答えが返って来た。

「今家に帰ると祖母に殺されてしまうんだよ。　鎮魂の生贄としてね」

隣で木乃香が息を呑む。

これを言うのも久しぶりになるかな。前言撤回。どうやら大変厄介な事件のようだ。



### 第三四話：いついつ出やる

鬼灯一門。

大宰府で家族に会えぬまま、無念を残して死んでいった防人たちを  
供養するために遣わされた一族の末裔。

しかし、その使命もすでに昔のものとなり、今は大分県に移住して  
関西呪術協会の傘下の下、九州全体を束ねる顔役となっている。

中でも現当主は占星術に長け、表の企業を大きく成長させた秀才だ  
そうだ。大分に居ながら二人の逃走ルートを占って博多駅で罠を張  
っていた、その実力は確かなものだろう。

おかげで各方面にコネがあって影響力、発言力とかなり強い。とこ  
れがしじまに説明された実家の詳細。

よくまあそんなのから逃げ続けられていると感心するよ。案外警察  
みたいな表の組織が一番鬱陶しかったりするんだよな。

ちなみにホテルのデラックススイーンに泊まるなんて大きな痕跡を残  
したのは、警察のような表の組織を攪乱するためだったらしい。

「請負人と言ったね。それは文字通り仕事を請け負ってくれる人つ  
て解釈でいいのかな？」

説明を終えたしじまが確認の言葉を発する。

「ああ。そんな感じだ」

その問いに俺は肯定の返事をする。

「そうか。なら良かった。助けて欲しい」

と次に助けを求められた。

「月詠はよくやってくれてるよ。何度も助けて貰っているし。だけど、もうほとんど詰みに近いんだ。現状を覆せるなら、みっともなくても私は何にだって縋りつく」

私は死にたくない。だから、力を貸して下さい。

そう言っつて、頭を下げられた。

「わかったよ。対価は情報料ってことで」

元より請けるつもりで来たんだから。

「一つ聞くけど、鎮魂って何を？ 今九州じゃそこまで大きな事件は起こってないって聞いてるんだけど」

というより、九州最高権力者の鬼灯一門が総出でひた隠しにしたいものと言った方がいいか。

「わからない。元々私は家の人、特に祖母とは極力関わらないようにしていたから」

代わりに月詠のような立場の人とはなるべく関わるようにしてきたんだけどね。

と、苦笑気味に付け足す。

それはまた複雑な家庭環境で。しかし、その言い方だとまるで自分の命が危ないことを予期していたように聞こえるんだが。追われる前は一人暮らしをしてたんだろ。

「でも生贄で、殺すって……」

木乃香が呟くが、この業界じゃ日常に埋もれます。

「不思議な事じゃないさ。日本神話じゃ八岐大蛇が有名だし、古墳に並べられている埴輪なんて生贄の代用みたいなものだ。ギリシヤ神話だとアンドロメダやミノタウロスが。北欧だと奴隷の少女には生贄の役割があつたとも言われてるし、マヤ・アステカなんて生贄だらけだぜ」

「それは、神話とか昔の話やろ」

「再現、かな。神話と同じ過程で同じ結果を得よう」と

まあ、結果って言うても今回ののは鎮めるだけだろうし。本当に何を鎮めたいんだらうか。

「ねえ。綾さんって」

しじまが疑問を投げかけてくる。

「ん？ ああ。見習いだよ」

しじまは「そう」とだけ呟いて黙ってしまつ。しじまには悪いが、職業体験の一環なんだ。

「いつまでも話ばかりしてないで、はやく行きましょー」

今まで黙っていた月詠が唐突に口を開く。もう我慢できないのか、この戦闘狂は。

と言つても、ただ逃げるだけだとすぐに依頼完遂しちゃうんだよな。ここから十秒も掛からずに魔法世界に行けますが何か？

でも、あくまで俺の目的は木乃香の経験だから。このまま半端に終わるのはちよつと。

「取り敢えず、しじまを生贄にしなければいいんだろ？」

「まあ、そつだね」

「よし。じゃあ行こうか」

そう言つて、俺は席から立ち上がる。

「どこへ？」

質問したのはしじまだが、木乃香と月詠も同じ様に疑問に満ちた目で俺を見てくる。

「そつちが過程に拘るなら、こつちは過程を省いてショートカットだ」

閃かない探偵のようには、いかないだろうけどね。

鬼灯家なう。

ファミレスから出てやったことは一つだけ。追っ手をボッコして転移魔法符をパクリ、それを繰り返して鬼灯家の近くまでやってきた。まだ敷地内には入っていない。

今は屋敷全体を一望できる場所にいるんだが、武家屋敷というか予想通りこの家もかなり広いな。

そして中でも異彩を放っているのが、一本の桜の木。桜に注連縄をするっていう光景も中々見れるものじゃないしね。

それに学園の世界樹までとは言わないが、この桜も他の桜と比べると相当デカイ。

他に高さを除いて特徴的なのが、花の色。白とか薄紅なんてレベルじゃなく、完全な紅。血を塗ってあるんじゃないかと思うくらいに紅色が咲き誇っている。

「『桜の木の下には』、か」

ちょっと予定と狂いそう。あまり意味は無いだろうが、もう少し近くで視てみるか。

「志紀はん独り言言ってないで早く行きましょー。ウチもう、斬り

たくて斬りたくて」

「まずはその殺人鬼よりも物騒な思考をなんとかしろ」

この娘、ホントに危ないんだけど。零崎化したばかりで不安定な時の朱織並みに危ない。今でこそアレだけど、朱織も相当危険だったんだよ。最近じゃ見る影もないけど。

だからか。だからこんな明らかに正規じゃない依頼しか回ってこないのか。

しかも非正規の方が血生臭いから正規の方をやりたがらないという悪循環。今はまだ技量が認められているからいいかもしれないが、その内絶対破門にされるな。

「……本当に大丈夫なのかい？」

次に口を開いたのはしじま。

しじまからして見れば、今やってることはそれまでの行為を全否定するものだ。

でもまあ、攻撃は最大の防御ということで。それに仮に今は逃げられたとしても、このままずっと俺も月詠も居ない状態で逃げ続けられる保証はないし。

「任せてくれ。生贄なんて風習は今日限りで終わらせよう」

「どの道、無事に逃げられるとも思わないし、最後まで真っ向から立ち向かうのも、いいかもね」

ぐっ、と手に持った唐傘に力を込めるしじま。

さて、問題というか主題の木乃香だが。

「綾、大丈夫か？」

「うん。これが兄様のいた世界なんやね」

「ああ。目を閉じるんじゃない。耳を塞ぐんじゃない。納得のいく結論が出るまで、考え続ける」

「うん」

それじゃあ行く前に、「アデアット」と久しぶりの登場になる『共鳴流転』の黒コートを木乃香に。

当然だがちゃんと今の俺に合うサイズになってるからな。木乃香には少し大きいかもしれんが。

さらに以前渡した瑪瑙のネックレスを握り、ルーン文字を俺の魔力で染色して守護の意味を強化する。

これで準備は整った。

それでは、鬼灯一門へ宣戦布告といこうかね。

今は少し高い場所に居るから一旦戻って、真っ直ぐ屋敷の正門から四人揃って堂々と入る。

八八ッ。屋敷中の視線を集めてるぜ。これが和服とゴスロリと黒コ  
ートと唐傘の取り合わせの結果か。相乗効果って怖いね。

そして、一人の妙齡の女性が近付いてきた。

「お待ちしておりました。しじま様」

この人そこそこ強そうだ。だからって無意味に殺気を飛ばすのをや  
めようねー月詠は。

「申し訳ありませんが、そちらの方々はお帰り下さい」

二言目に帰れと宣告されてしまった。どうせならお茶漬けくらい出  
しやがれバカ野郎。

「私の客人です。何か文句でも？」

毅然とした態度で臨むしじま。家と関わっていなくても、当主の孫  
娘だけあって出迎えた人は何も言えなくなった。

その後客間へと案内される俺たち。移動中に桜を間近で視ることが  
出来たが、流石の俺もアレは引く。注連縄が悲鳴を上げてるな。

正直言つて、これは最初に関わるべき事件じゃなかったかもしれん。

「それで志紀さん。これからどうするんだい？」

客間に着いて、案内した女性が下がった後、しじまが俺に尋ねてく  
る。というか室内までその唐傘持って来るんだな。



まあ、さつき立ち向かうとは言ったが、本当に後戻りも逃げ道もないから気になって当然か。

事前に道中で説明した作戦は至ってシンプル。捧げられるのが嫌なら、鎮めるモノをぶっ殺そう。

表現はぼかしたが、月詠が大賛成で乗って来たのは言うまでも無い。当然しじまは荒唐無稽な作戦に難色を示したが、そこは昔論理魔術で創った概念武装をチラつかせたり、音の誘導が入ったりして説得した。

「取り敢えず、御当主と直接話が出来れば後はどうにでもなるかな」  
戯言を連ねて一方的に俺の言葉を聞かせたら、音で操作して許可を取らせる。反対意見は当主の一言で封殺。

後は俺と月詠が暴れて終了。っていうのが俺の中の理想。

「話をしたって意味があるとは思えないけど」

「まあ、屋敷の人間を振り切って力づくにやっても」

俺が言い終える前に廊下から足音が響いてきた。言っている内容が内容なので、口を噤む。

「失礼、い、致します」

客間の襖を開けたのは小柄な男性。

「お、お茶を、お持ちしました」

確かに男性が持っている盆の上には、お茶と茶菓子に乗っているんだが、手が小刻みに震えてますよ。声も若干上擦ってるし。

おかしいな。まだ恐れられるような事は何もしていない筈。月詠だつて小物にまで殺気をぶつける程、節操無しつてわけでもないのに。何故？ と疑問を持ったが、関係ないかと思いなおし、男から盆を受け取るうと近付く。

「ひっ……!!」

カタリ、と一際大きく男の手が震え、湯呑が盆から落ちる。

湯呑に入っていたお茶は重力から解放されることはなく、そのまま畳へと滲み込んでいった。

「申し訳ありません！」

取り敢えず、何か拭く物をもっとたら、いきなり勢いよく土下座された。

湯呑落としたぐらいで土下座つて。

大事なことからもう一度言うけど、俺たちまだ何もしてないからね。

咄嗟に振り返つて、他の三人の反応を見たが、木乃香も月詠も目を丸くしている。ただ、しじまがバツの悪そうな顔をして、口を開こ

うとした時。

「どうかなさいましたか、お客様？」

先程ここまで案内してくれた女性が温和な表情をして現れた。

「あ、いえ、大したことじゃ」

俺の返答を聞き終えるより先に、女性の繰り出した蹴りが土下座している男の顔に突き刺さった。

蛙の潰れたような音を発した男は何も無かったかのように土下座の体勢に戻る。いや、貴方鼻血が出てませんか。血が滴り落ちてますよ。

「申し訳ありません、お客様。このゴミ虫が粗相を働いたようで」

うわあ。相変わらず温和な表情のまま、ゴミ虫って言い切りましたよこの人。

「ちよ、ちよっと……」

「綾」

流石にやり過ぎと思ったのか、後ろから木乃香が口を出す。俺はそれを即座に制止させる。

「お優しいんですね。しかし、いくらしじま様の御客人と見え、我々の家に口出しなさいませぬよう」

につこりと微笑みながら、「立ちなさい」と男の髪を鷲掴みにし引き上げる。

男の顔は赤く腫れあがり、唇も少し切っている。

「それでは、準備が整い次第お呼びいたしますので」

そう言い残し、男が倒れた湯呑と盆を持って、二人は立ち去った。

「しじまあ」

説明を要求すると三方向からしじまに視線が集められる。

「ごめん。忘れたくて、そのまま忘れてた」

まあ、確かに忘れなくなるのもわかるが、事前知識は欲しかった。

「ウチの家系は女の方が力が強いらしくて、昔から男は見下されてきたみたい。それが今でも続いている」

それで出来たのが、女尊男卑ってわけかい。

あー、言われてみると、博多とか遠くにパシられてたのは、全員男だったな。

なるなる。ここはそういう家か。生贄といい未だに残ってるんだしね。こんな時代遅れの廃棄寸前の風習が。

はあ。これから対談するであろうことを考えると気が滅入る。典型的な老害を相手にしなきゃならんのか。

「綾」。充電させてー」

「うん。ええよ」

これから枯れ果てた砂漠に立ち向かわないといけないんだから、オアシスで潤いを摂取して、消化して、吸収しておかないと。

後ろから木乃香に抱き付いて「はふう」と息をつく。

「……………君たちって血の繋がった兄妹だよな？」

「そうですが何か？」

「……………いや、何でもないよ」

きっと世間の兄妹じゃアレぐらい普通。私も長いこと一人暮らししてたけどまだ世間ズレしてるみたいだな。うん、早く直さないと。

などと呟いているしじま。

こんな家で育っちゃたら基準がわからなくなるのも無理ないが、またズレたと思うよ。

「なあ、兄様」

「ん？ どうした？」

「あれが魔法使いなん？」

んー。やっぱり一番最初に関わるにはハードルが少し高ったか。間違った偏見を与えていそうだ。

「この家が特殊なだけで、普通は常識的な人の方が多いよ」

「こういう人たちも少なくないってこと？」

「正義の押し売りをしてるのが異常なら、常識人より多いかもねえ」

そもそも常識人とは誰のことを指せばいいんだろうか。学園で言う……教員の顔と名前なんて覚えてねー。

「まあ、ここまで酷いのは圧倒的に少ないな。俺も見たのは久しぶり……いや、一門全体でって言うところ初めてだ」

個人で狂ってる奴は結構遭うんだけどね。例として立花の野郎を挙げる。

あれか。類は友を呼ぶってやつか。個人的には絶対に認めない。

「うー。志紀はん、ちょっと斬り合いませんかー」

月詠が焦れてきた。狂った例なら拳げるまでもなく目の前にいたな。

「はいはい。後ちょっとだからもう少し我慢しようねー」

なんだろう。聞きわけの悪い子に言い聞かせているような気分は。月詠の精神年齢が幼すぎないだろうか。

「ところで、話の途中だったけど、志紀さんを祖母と直接話が出るようにしたらいいんだね？」

……ああ。そういえばしてたな、そんな話。さっきのインパクトが強過ぎて全部持っていかれてたよ。

「それでいいんだけど……」

刀を触ってうずうずしている月詠を見る。あれを対談の席には連れて行けないようなあ。

それに、今腕の中にいる木乃香も。

さっきのことを見る限り、会話の内容は全て毒で形成されるだろう。そんな場所に連れて行くには早過ぎる。

しかし、この二人を残して大丈夫だろうか。

今の木乃香の装備だと、傷つけるには最強クラスじゃないと無理だから心配はしてないが、月詠の理性が限界を迎えた時、抑えられるわけがないよな。

「おい、月詠。ここの当主と話が終わるまで耐えれそうか？」

「多分、なんとかー」

不安だなー。

「なあ綾。これと一緒に残ることになるだろうけど、いいか？」

「え？ でも兄様は、目を閉じるな耳を塞ぐなって」

「確かに言ったけど、これは綾の判断の邪魔になる毒だ。態々聞く必要はない」

「というか聞かせたくない。狂った老害なんかと会わせたくない。」

代わりに戦闘狂と同じ空間に居させてしまおうが、幾分かはマシだろう。

「わかったえ。そういう約束やったし」

「あと、あの桜には近付くな。絶対に」

「う、うん」

強く念を押し過ぎたか。返答に若干の戸惑いがあった。

そして、時折月詠を嗜めながら、木乃香としじまと話をして過ごしていた時だ。

漸く、待ちにも待った時間が来た。

この家の異常性を示してくれた女性が襖を開く。

「しじま様、当主様がお呼びです」

「じゃあ行くつか、志紀さん」

唐傘を手に持ちしじまが立ち上がる。それはデフォルト装備なのか。



「なっ！？ しじま様！ その男を連れて行くつもりですか！」

「そうだよ。拒否するならばこのまま雲隠れする。君と彼、どちらが強いから言われないとわからないのかい？」

しじまに宣告されると殺意をふんだんに込めた視線で俺を睨んでくる。

よせやい。そんな目で見られると、本気の殺気をぶつけたくなるじゃないか。ってか、もうぶつけちゃった。

女は顔を雪化粧のように白くしながら、「一、二歩後ずさる。ははっ。白粉、似合ってますよ。」

「なるべく早く終わらして下さいねー」

部屋を出るときに月詠から声を掛けられた。

それじゃあ、期待に添えるよう頑張りますか。まあ、俺が長時間話したくないだけだね。

### 第三五話：夜明けの晩に

案内された部屋へしじまと二人で入る。

基本的に俺は、人の領土だとか、工房だとか、神殿だとか、不法侵入じゃなければ、気にしない方なんだが、ここまで警戒されると流石に気にする。

空気が空間が異物を排除しようとしているのが、ひしひすと伝わるわけよ。

この部屋で待ち構えている老婆を中心としてね。

どうやらこの対談は対一でやるつもりだったらしい。

だが、そんなものはスルーで。

「こんにちは。お久しぶりです、お婆様」

淡々と挨拶を済ませるしじまだが、この一言に副音声や字幕を付けると『まだ生きてたんですか、クソババア』という風なニュアンスを受ける。家族に『こんにちは』って言わないだろ、普通。

家庭内のいざこざには、なるべく口を挟みたくないんだけどなあ。

「はて。私はしじま一人を呼んだつもりなんだがね」

老婆が口を開いた瞬間、あくまで停滞していた空気が、物理的ではなく精神的に、指向性を持って動き始める。

心身掌握で俺より上に立とうなんて、いつぺん輪廻、巡って来い。俺、この事件が終わったら第二次コイルショックに参加するんだ。なんて無為で無意味な思考を止めることすら出来ない当主。」

「自分はしじまさんに雇われたただのしがない請負人ですよ」

俺の返答に当主は「ハッ」と鼻で笑う。付け加えると、心底見下しきった表情で。

テメエ、それが請負人という職業もバカにしてるなら、全身全霊で魂から細胞一つに至るまで懇切丁寧にぶっ殺す。

「請負人だが何だか知らないが、自分の名前も言えないのかい？」

挑発の為、一人称を俺から私に代えさせて頂きます。

「おや？ 貴女に必要ですか？ 日本屈指の占星術師としての腕を誇る貴女に。おっと、そう言えば私がこの席に同行することも把握していませんでしたね。つまり、見えなかった」

「口を慎め！」

ピシヤリ、と言い放ち、顔を憤怒に歪ませるババア。

「私を誰だと思っている！ 私をそこらの術師と、ましてや貴様のような若造と同列に扱うな！」

怒気と共に殺意を振り撒き、顔を更に醜く歪ませる。

「私は鬼灯一門当主鬼灯静だ！ この愚物が！ しじまの客だが知らんがお前のような愚か者が私と話せるだけでも奇跡と思え！」

……あ。すみません。全然聞いてませんでした。

強いて感想を言うなら、静って名前の割りには口煩いですね。

そして、その激昂もまるで人格が入れ換わったのかと錯覚するくらい、すぐに治まった。

憤怒の形相の次は、どれだけ口端を上げれば相手に好印象を与えられるかなど計算しつくされた、気味の悪い穏やかな笑顔。

二十面相も吃驚な百面相ですね。

「しじま。戻って来たということは、漸く決心がついたんだね」

「御冗談を。私がここにいるのは、決別をしに来たからだ」

「よく聞きなさい、しじま。これに選ばれるのは栄えあることなのです」

なら順番的にお前が死ぬべきだろうが。

「そうやって、また殺すのか。母さんと同じ様に」

あーはいはい。理解した。しじまが何で最初から逃亡の準備を整えてたのか。

ったく、どいつもこいつも自分の為に簡単に身内を切り捨てやがって。

「まだそんなことに拘っていたのかい。ああ、だからいつまでも持ち歩いているのか。その傘はアレの遺品だったかね」

ぎりっ、と隣から齒を軋ませる音が聞こえた。

「醜いね」

俺の一言により、またしても室内の空気が変容する。

「黙っていないさい。部外者が。これは光栄なことなのです」

「光栄か。ハッ。醜悪の間違いだろう？」

「黙れと言った」

「皮肉だな。家族に会えず死んで行った防人の無念を晴らす為に遣わされた一族の末裔が、今となっては真っ先に家族を犠牲にするとは」

「黙れっ！」

「あるところに一人の女がいました。女はある竜穴に居を構えようと土地の主に懇願しました。しかし、主は認めません。ならばと女は言いました。『これから生まれる我が一族の男子、その全てを貴方様に捧げます』と。そして主は女の望みを受け入れました」

思想で物を考えていた時代。土地の力が今よりも重要視されている

時代なら、ここはさぞ魅力的に映ったのだろう。

そして、当主の憤怒が驚愕に切り替わる。

「貴様……何を、知っている」

何を？ 全てだよ。と言いたいところだけど、残念ながらここまでだ。もうちょっと視ておくべきだったかな。

多分この家の最古の歴史。おそらくこれが徹底した女尊男卑の原型だろう。

始めから殺さなければならぬのなら、悲しまないようにすればいい。

「それひょっとしてウチの……？ 男子って……ちょっと待ってよ、志紀さん。なら何で、母さんは」

「お母さんが亡くなられたのは何年前だい？」

「……十二年前」

十二年前。まだ小学校に通う前ぐらいの年齢から家族を信じず、一定の距離を持って接してきたのか。

そして俺が次に口を開く前に、物理的手段を持ってババアが排除を試みた。

手に持った符に魔力が集中し、この部屋の全てを味方につけ、符を放つ。

符は飛翔半ばで、炎の槍へと姿を変え、俺を焼き殺さんと直進する。だが、俺はそれをただの障壁で防ぎきる。

「止めておいた方がいいと思うぜ。お前はあくまで占星術師。戦闘なら越えられない壁が存在している」

苦虫を噛み潰したような顔をしてるとこ悪いけど、占いでも存在してるからね。現にコイツ、俺の経歴や素性、名前すらわかってないし。

次は屋敷が、この土地が震えた。

流石にそれはやり過ぎじゃないか、とと思っていたらババアの顔には困惑が浮かんでいる。

それと同時に部屋の外から響き渡る怒号と悲鳴。

立ち上がり、急いで襖を開けて桜を見る。桜の木に巻き付けてあった注連縄が朽ちて。

「ねえ。一緒に遊ぼう」

突然、背後から少年の声が耳に届く。

振り返ると、確かに少年の姿をしたモノがしじまの隣に現れていた。殺意を持たず、敵意を持たず、害意を持たない。だから、反応が少し遅れてしまった。

俺の糸が届くよりも先に、ババアが符を放つよりも先に、しじま自身が逃げようとするよりも先に、少年から溢れだした黒い何かが生じまを音も無く取り込んだ。

刹那の差を置いて、俺の糸が少年を拘束する。

これ魔力を吸収するっぽいな。だが、こっちは去年の夏休みに太陽少年を殺した後、初心に戻って魔力、咸卦、通卦問わず、糸の形成にはかなり力を入れてるんだよ。

そして、眼に集中。視るとしじまは死んだわけではなく、ちゃんと生きている。どこか別の場所に移されたみたいだけど。

これが何なのか見極めるために、あまり時間は無いけど、じっくり視ておくか。

「しじまを返しなさい」

そんな俺を余所に、新たな符に魔力を込めながら、当主が言い放つ。

「貴女とは遊びたくない」

少年は拘束されて大きな動きが出来ない為か、指を一本当主に向ける。そして指から、黒い物質が鋭く伸び、当主の胸を貫いた。

あ。心臓に入ったな。

「やあ、少年。さっきのお姉さんは俺のクライアントでね。出来れば返して欲しんだけど」



「いや」

「そうかい」

糸を引き絞る。

少年の輪切りの出来上り。斬られたモノはまたしても暗黒物質に変わり、空気に溶けるように消えていった。

部屋に残っているのは俺と唐傘とタンパク質の塊。

死の線を斬ったわけではないから、元居た場所へ還っただけだろう。

やはりあのダークマタ、刺さった瞬間ババアから魔力を吸っていたな。

しかし、何て言うのかな、吸収とはニュアンスが若干違うんだよね……。

アレにぴったりの言葉が　何か……。

「あ。渴望……かな」

納得出来る言葉が見つかってよかった。

俺は持ち主不在の唐傘を『倉庫』に入れて、部屋を出る。そこには桜の木から溢れた暗黒物質が屋敷の人間を蹂躪していた。

渴きを潤すように魔力を奪いながら。

木乃香が、ついでに月詠も、呑まれてなきやいいけど。

時を少し戻して、彩輝としじまが出ていった後の客間。

相変わらず刀を触ってそわそわしている変質者の傍ら、木乃香はかなり緊張していた。

無意識のうちに兄のコートの裾を握ってしまつぐらいに緊張している。

人に斬りかかるといふ場面が初対面の相手と部屋で二人きりなので、それも無理ないことだろうが。

「遅いですなー」

「遅いつて今出ていったばかりやろ」

このまま沈黙が支配する空間に居るよりも、多少話した方が精神衛生上いいかもしれないと結論付け、突っ込みを入れる木乃香。

「なあ、月詠さんは何で裏の世界に関わったん？」

提示したのは職業体験中の木乃香が、気になってしまつこの話題だった。

「ウチですかー。そーですねー。強い人と死合いたかったからかなー」

「強い人と」

そんな理由で関わる人もいるんやな。

まだ兄やしじまのように、家の事情で関わる人しか見ていない木乃香には、いまいち漠然としか理解できなかったが。

「志紀はんもかなり強そうやし、この仕事が終わったら死合つてくれへんかなー」

その月詠の一言に木乃香は疑問符を浮かべてしまう。

確かに身体能力は高いと思うが、そこから強いという連想が普段見ている近衛彩輝からは出来ないのだ。

道中に鬼灯一門の人間から転移魔法符を奪う為、多少の戦闘はあったが、彩輝が手早く糸で相手の首を絞めて落としたため、素人の木乃香には何が起こっているのか、さっぱりわからない状況だったし。

「兄様って強かったんやな」

言葉にしてみても実感は全く湧かなかった。

「そついう綾はんは、妹っていうんが信じられんくらい普通やね」

兄からの流れで月詠は次に妹の木乃香のことを口にする。

「まあ、ウチは最近こつちのことを知ったばかりの研修生みたいなもんやから」

最近というか、ほんの数時間前なんだが。

「でもそれで、志紀はんに着いて行けるんですか？」

月詠からすれば、あまりにもレベル差が開き過ぎた二人を見て、ふと頭をよぎった疑問が口から出てしまったに過ぎない。

しかし、木乃香からすればそれは衝撃にも近かった。

もしも関わると決めて、着いて行けなかった場合。

あの兄は冗談抜きで失踪歴を持っている。それが魔法関係であることぐらい、今の木乃香には容易に想像が付く。

また一人取り残されるのではないか。本当に帰ってくるかわからな  
いまま待ち続けるしかないのか。そんな不安が押し寄せてくる。

最初から待つと決めるのと、途中で置いてきぼりにされるのでは、  
意味が全く違ってくるから。

（ウチは　　）

結論は、まだ出ない。

「綾はん？」

「……え？　何？」

「もうちょっとお喋りしましょー。ウチも気を紛らわしてないと危

ないんですよー」

「う、うん。そやね」

焦ったらアカン。それで決めたら絶対後悔する。兄様の言ってた通りちゃんと納得できるまで考えんと。

不安の波を堤防で堰き止め、ゆっくりと思考を再開する。

何か新しい話題を探そうとした時、コトン、と襖に何かがぶつかった音がした。

顔を見合わせる木乃香と月詠。

そして月詠が、何かあっても小太刀をすぐに抜けるよう構えながら、襖を開ける。

「……毬？」

襖の近くには一個の毬が転がっていた。どうやら襖にぶつかったのはこれのようだ。

「あ、あの、ごめんなさい」

この毬の持ち主であろう少年が駆け寄ってくる。

年相応の無垢な少年とわかり、月詠も警戒を和らげる。

「毬かー。昔よく遊んだなあ」

転がっていた毬を拾って少年に手渡してやる木乃香。

「あの、お姉さんも一緒に遊びませんか？」

「え？ ああ、それもいいんやけど、ウチらこの部屋からあんまり出ない方がいいみたいなんや。ゴメンな」

「桜が満開で綺麗だよ」

それは弟が姉に遊びをせがむような別段普通の光景。ただし、それが外ならば。

この女尊男卑という差別が根強く残っている家で、例えば子供だとしても男子が女子を、しかも客人の手を強引に引こうとするなんて、異常極まりない光景。

そして男の子が木乃香の手に触れようとした瞬間、バチンツと音を立てて弾かれた。

焼け爛れた自分の手を無感動に見つめる少年。

「えっ！？ 君、大丈夫かえ！？」

何が起こったのか全く理解できないが、木乃香は突然酷い火傷を負った少年を手当しようと近寄る。

その様子を見た少年は笑みを浮かべ、どぶり、と黒い液体のようなモノが溢れ出た。

「綾はん！」

月詠が止めに入ろうとするも、液体は木乃香を障壁ごと包み込み、どこかへ連れ去ってしまう。

「ざんまけーん！」

少年に斬りかかるが、刀が触れた瞬間、少年は黒い液体に変わる。それもただの液体ではなく、徐々に粘性を増し、月詠の刀を絡め取るように蠢く。

咄嗟にそれを振り払い距離をとる。明らかに剣士の月詠とは相性が悪い。

ここは一旦退いて、二人と合流しようかと戦略的撤退を図った。

「あるところに一人の女が居た。女はいつも自分の家のしきたりに疑問を感じていた。だが、家の者は誰も取りあつてはくれなかった。そんなある日女は女子を孕んだ。家の者はたいそう喜んで祝福し、女は子を産む喜びを知った」

あの後彩輝は屋敷の屋根の上に腰を下ろし、じっくり花見をしていた。ついでにキセルを吹かしながら。

「数年後、女は男子を孕んだ。しかし、それを祝福する者は誰もいなかった。このままではこの子はしきたりに殺される。そう思った女は子供を守るため家を飛び出した。だが、家の者が許す筈もなく捕らえられた女は身籠ったまま、主の生贄に捧げられた。残されたのは一人の娘。っと、要約するとこんな感じかなー」

はあ、と溜息をつく彩輝。

そして、その隣に「こんな所におったんですか」と彩輝を見つけ、跳躍した月詠が降り立つ。

「やっと来たか。これでもずっと待ってたんだが。ところで、綾は？」

「すんまへん。黒いのに攫われました」

彩輝は桜に向けて通卦製の糸を伸ばす。万にも及ぶ糸で桜の幹を枝を花を一片の隙間も無いように巻き付けていく。桜の動きを封じるために。

木乃香もしじまも暫くは無事だとは確信している。

事前にルーンの染色までしたネックレスなら魔力を吸われる中、丸一日放置しても木乃香を護り続ける。

木乃香が拒絶をすれば例え害が無くても、一切の干渉を許さないだろう。

しじまは捧げられたわけではない。現にまだ生きている。

あの黒い影の渴望の意味がわかった今、アレが無闇に危害を加えることは思えない。

だが一つ、不可解なことがある。



「月詠。俺はこれからひどく繊細な作業をするから、その間、後ろは任せた」

告げて、彩輝は雁字搦めになった桜の木の正面に跳び下りる。

「悪いけど、お前らの所に居るのは俺の大事な妹とクライアントだね」

両手を糸の上から幹に押しつける。

その行為を阻むように屋敷に広がっていた暗黒物質が彩輝に殺到した。

「ざーんくーせーん」

それを月詠が斬り伏せる。

「『式の太刀』とかいう奥義が使えれば対抗出来るんでしょうけどねー。ウチには抵抗するんが精一杯ですよー」

それは誰かに聞いてもらおうと言うよりは、独り言のつもりで言ったのだろう。

「時間は掛けないさ。さて、返してもらおうか　！」

彩輝の両手が物理的ではなく魔術的に桜の木の中へ侵入していった。

何も見えず、何も聞こえない。果てまで暗く、昏い。そんな場所に

木乃香は居た。

しかし、この光景が自分が拒んだ結果、出来たものだとも理解していた。

うつすらと兄から貰ったネックレスが熱を帯びている。そして木乃香は、今更ながらに自分の兄が凄い人だと自覚した。

思い出すのは拒む前に見て、聞こえたモノ。

確かにアレは自分には毒だろう。兄がここまで来て、自分に関わらせようとしないのも頷ける。

(兄様ならウチが何もしなくても、ここから出してくれるんやろう)  
それは絶対的な信頼。兄が強いということが判然としなくても、家族を見捨てない人であるということは、木乃香が一番わかっているから。

(でも、ゴメンな兄様。ウチは見極めたい。兄様が見てきた世界を自分のこれからを。 毒を食らわば皿までや。行き着くところまで、行ってやる)

ネックレスを握りしめる。

そして、闇が蠢いた。

い

悔しい

恨めしい

呪ってやる

響いたのは怨念と嫉妬。負の感情を詰め込んだような叫び。

それでも、木乃香は目を逸らさない。耳を塞がない。そして、思考を切り替える。考え方をトレースする。

「何が悔しいん？」

何もしないという選択肢は既に無かった。だが、ほんの数時間前に魔法の存在を知った木乃香には、選べる選択肢自体無きに等しい。

しかし、木乃香は選んだ。

対話という、最も初歩的で、何の変哲もない意思疎通の手段。けれども、人と人が通じ合える奇跡のような手段を。

かくして返答は あった。

裏切られた。もっと、生きていたかった

「何がそんなに恨めしいん？」

笑いながら生きているアイツらが

「呪ってやる。さっき、裏切られたって言ったな。裏切られるってことは期待してたわけやる。呪ってやりたくなるほど、君は何を望

んでたん？」

、欲しかった

その部分だけはノイズが走ったかのように聞きとることが出来なかった。

言葉にするのを躊躇うのか、言葉にするのも忌避するのかわからないが、それが本心であろうことは木乃香にも察しがついた。

何とかしてあげたい、とは思う。

しかし、それを出来るだけの力は木乃香には無い。

(兄様)

結局、最後には兄に頼ってしまう自分を不甲斐無く思う。

でもそれ以上に、目の前のモノを助けてあげたかった。

そんな矢先、声が届いた。

『さて、返してもらおうか　　！』

次の瞬間、木乃香は腕を掴まれ、底から浮上するように引っ張り上げられた。

彩輝は桜の木の中から腕を引く。

手に掴んでいるのは、木乃香としじまの腕。

二人を引き上げると、月詠に合図をし、桜から距離をとる。

「兄、様」

彩輝の姿を捉えると、木乃香の目から自然と涙があふれ出した。

「兄様、兄様、兄様兄様！」

彩輝の胸に顔をうずめて、泣きじゃくる木乃香。

それを彩輝はそっと抱きしめる。

「大丈夫。俺は、ここにいますよ」

「……うん」

お互いの温もりを感じるかのように抱きしめ合う二人。

「雰囲気ぶち壊して悪いですけど、これからどうするんですかー」

尋ねたのは月詠。

現在屋敷中には、生きているのか、死んでいるのかさえもわからないモノがごった返している。

その中で未だにダークマターと交戦している者もいるが、当主が亡き今、鬼灯一門が壊滅するのは既に時間の問題だ。

九州を束ねる鬼灯一門が、こんな短時間で壊滅の一手手前まで追いつめられた。

抱きしめ合う形からほんの少しだけ距離を取って、月詠の質問に彩輝が返事をする。

「まあ、手っ取り早いのはあの桜を消してしまうことだが」

当然ながらそれを許容出来ない者が居る。

「待って、兄様」

「待ってくれ、志紀さん」

声を上げたのは、桜の中で直に声を聞いた木乃香としじま。

「兄様なら、アレを助けることは出来んの？」

「出来るよ」

木乃香の問いに彩輝は即答する。

「志紀さん。志紀さんに任せた方が確実にだってわかってる。でも、私に彼らを助けさせて下さい。リスクが高いことも、無謀だって十分理解した上でお願いします。手を、貸して下さい」

深々と、しじまは彩輝に頭を下げる。数時間前のファミレスと同じ様に。

「下手な同情で背負おうとしてるなら止めておけ。必ず、後悔することになる」

背負ってしまったら、後は地獄への一本道だ、と彩輝はしじまを諫めようとすする。

だが、忠告を受けても、しじまの気持ちは変わらない。

「都合の良い、幻聴だったのかもしれない。でも、聞こえたんだ。母さんの声が。決めたんだ。あの子たちを助けるって」

頭を上げて彩輝の目を真っ直ぐに見つめ返す。

それは嘘偽りの無い本心で、どこまでも本気の言葉だった。

死にたくないと願った少女が、今は命を懸けて助けようとしている。

ファミレスの時とは、何もかもが決定的に変わっていた。

「対価を貰うよ」

「私の命以外なら、何でも払う」

「アレは渴望している。何を求めているのかわかった上で、言っているのかい？」

彩輝からの最後の問い。これに答えられなければ引き受けないという最後通牒。

「はい」

それにしじまは躊躇いなく、力強く頷いた。

「その願い、確かに請け負った」

どんな形であれ、相手が例え異形に成り果てていたとしても、懸命に家族を助けようとする姿は、とても尊い。

「さてと。月詠、今桜の木の辺りにいるダークマターをなるべく一ヶ所に留めることは出来るか？」

「いきなり無茶な注文しはりますなー。まあ、やれるだけやってみますわ」

そう言い残し、月詠は自分に与えられた仕事を全うすべく、雁字搦めになっている桜の木の許へ跳躍した。

「それじゃあ、こつちも始めるか」

呟くと、彩輝は桜に巻きつけてある糸を再び繋ぎ直す。

「兄様。何するつもりなん？」

「あの桜は邪魔だからな、葬っておく」

その返答に虚を突かれたような顔をする木乃香としじま。

「助けるって　！」

「黒いのに吞まれて桜から出てきたから勘違いするかもしれないけ



ど、桜とダークマターは完全な別物だ」

元々は霊格の高い樹精だった。それが生贄として捧げられた死体の血を啜る内に樹妖へと成り果てた。

そして、味をしめた樹妖は、更に生贄を要求する。十二年前逃亡して母子ともに捧げられた母親が残した一人娘を。

これがこの事件の発端。

黒い影は全てこの樹妖の食べ残し。人間の残骸の集合体のようなもの。

一つだけ、彩輝には気に掛かることがあったが、視てもわからなかった為、その疑問は捨て置くことにする。

本来、樹妖は獣妖よりも霊格の高い存在だ。

しかし、血に飢えるなんて、獣じみた樹妖ごとき、彩輝の敵になる筈がなかった。

彩輝は巻き付けた糸を操り、桜の死の線を斬っていく。

桜と黒塊とを切り分けるように、斬っていく。

バラバラと紅い花弁が舞う。バラバラと斬り落とされる枝や幹の断面から、黒塊が零れ出す。

助けを求めるように、救いを求めるように、桜の中から零になるまで零れ出す。

「月詠！」

こちらの準備は出来たと呼び掛ける。

それに応えるよう、時折奥義で牽制し、時折襲いかかってくるのを身を翻して避けながら、月詠は桜の残骸まで誘導する。

一定の距離まで近づいたら、月詠はそれらと距離をとる。

それと同時に月詠の傍へ彩輝たち三人が降り立った。

黒塊は始めから外に出ていたモノと、今零れ出したモノが混ざり合っている。

「それでここからはどうするんですー」

「じじするのわ」

彩輝は以前に龍宮から二〇〇〇円で買い取った玉串と神楽鈴を『倉庫』から取り出す。

「『はらいたまい、清めたまう』」

結界が黒塊を囲む。

被い過ぎず、動きを封じるだけの脆い結界。しかし、魔力を吸われながら境界を維持する強い結界。

とても緻密で、とても繊細な結界を張りながら、彩輝はしじまの名

前を呼ぶ。

こくり、としじまは頷く。

そして、しゃん、しゃん、と彩輝が一定のリズムで神楽鈴を鳴らす中、しじまは結界の境界を、踏み越えた。

黒塊は形を保とうと蠢いていた。今まで吸い集めた魔力で人型を保とうと。また、人として生きようと。

しかし、彩輝の結界に阻まれているからか、それは人の出来損ないの形しか保てない。

それにしじまは歩み寄る。迷いなく、躊躇いなく、手を伸ばせば届く距離まで近づいた。

そしてそのまま、彼らを抱きしめた。魔力を吸われるなどお構いなしに。

続けて、告げる。

「私は貴方達を　愛します」

彼らが渴望していた物。それはひとえに、愛だった。

びくん、と黒塊が痙攣する。

その覚悟を問うかのように、しじまの身体へ絡みつく。結界の有無など忘れたかのように。それほどまでに彼らにとっては衝撃だった。

「ぐっ……あ、ガッあああああ」

当然しじまから一挙に大量の魔力が吸収される。

桜の中へ攫われた時は彼らの期待も無かったわけではない。

だが改めてその可能性を提示されると、また捨てられるのではないか、また裏切られるのではないか。そんな疑念と不安に追い立てられる。

懐疑と猜疑に駆られ、吸収を止めようとはしない。結界で多少制限されているとしても、これ以上は致死量だ。

それでも、しじまは絶対に手を離さなかった。

そんな光景を見て、結界の中へ踏み入る者がもう一人。

「しじまさん。ウチに出来るんはこれぐらいです。この子らを、助けてやって下さい」

言って、木乃香は旅行中ずっと首にかけられていた瑪瑙のネックレスを外す。

そして、しじまの手を、絡みついたモノごと、握りしめた。

「この子らの渴きを潤せるんはしじまさんしかおらん。でも、代用品の魔力なら、ウチが請け負う」

しじまの魔力を補うように木乃香の魔力が流れ出す。

その状態が数分間続き、漸く、しじまからの吸収を止める。

そのまま倒れ込んで気絶するしじまに、黒塊はするすると細い帯のように巻き付いていく。まるで絶対に離さないと意思表示するかのようじ。

木乃香も安心と虚脱感からか、数歩後ろに後ずさり倒れそうになるが、その前に彩輝が後ろから抱きとめる。

「おつかれ」

「兄様、ありがとう」

その感謝の言葉が何に向けて言われたのかは木乃香にしかわからな  
い。

「ちょっと、疲れたえ」

「少し寝てる。俺が傍に居てやるから」

「うん」

彩輝に身を任せて木乃香は眠りに就いた。

木乃香を抱え直しながら彩輝は月詠に尋ねる。

「で？ お前はこれからどうするわけ？」

「そうですねー。もう終わりましたし、一旦帰ろっかなーと」

「そうかい」

「あ、そうそう。しじまはんに報酬はいらないうって言っといてくれます?」

さらりと、裏の仕事をしている者としては常識を疑うようなセリフが飛び出した。ここまでやって来たことが全て唯の慈善事業になっ  
てしまう。

「貰えるなら貰つとけば?」

「いえいえ。十分珍しいモノを見させて貰いましたし、嬉しい人とも出会えましたし」

少しだけ、殺気を飛ばす月詠。それに応じるかのように彩輝もまた殺気をぶつける。

「次会う時は、お互い敵同士でありますように」

そう言い残し、月詠は鬼灯一門を後にする。そして一ヶ月後、月詠の願いは果たされることとなる。

「何て言うか……俺は社会不適合者と引き合つ、磁石の性質でも持  
つてんのか?」

思わず自問するが、それに返ってくる答えは無く、言葉は空気に溶  
け込んでいった。

磁石なら反発する奴もいるからいつか、と適当に割り切って懐から  
携帯を取り出す。掛ける相手は近衛詠春。

「もしもし父さん？ 九州の鬼灯一門って知ってる？ 今ほとんど壊滅状態だからさ、過激派の精鋭送ってくれない？ ほら、俺ら一ヶ月後に修学旅行で京都に行くからさ。送った後は適当な理由で滞在期間を延ばして。おう、その時に色々と決着を付けようぜ。じゃ、迅速に動けよ」

電話を切る。

二人が目覚めるまで、木乃香を膝枕でもしてようかと考えながら、木乃香としじまを屋敷の中に運ぶ彩輝。

しじまを運ぶ際、今や刺青のようになっていくダークマターと一悶着あったのは余談である。

### 第三六話：鶴と亀がすべった

屋敷の部屋を無断で借りて、木乃香としじまが寝ている間、彩輝は木乃香の髪を梳く片手間に、一応糸を屋敷中に広げて現状の確認なんかを行ってたりした。

すると、驚くべきことに彩輝が関わった事件にしては死者が全体の二割にも達していない。

勿論魔力の枯渇によって生死の間を彷徨っているのが過半数だが、大半は助かるだろう。

「偽名を使うだけでこんなにも変わるものなのか」

名前ってスゲー。変な所に感心する彩輝であった。

まあ、確かに零崎彩識を名乗っていけば生死者の比率は逆になってもおかしくはないが。

「これから不殺にしたい仕事は香乃木志紀って名乗ろうかな」

軽口のように口にするが、どうやら割と真剣に検討し始めてしまったようだ。

そんなくだらないこと考えるよりも魔力枯渇してる人を助けるよ、と思わないでもないが、依頼を請けてませんしね。

咎められれば「元を糺せば樹妖一匹管理できない鬼灯側の責任だ」とか言って逃げるんでしょう。



あれが真つ当な樹精だったなら、ここら一帯の土地神を兼任していてもおかしくない存在で、管理なんて出来る筈も無いのだが。

そうこうしている内に、木乃香が目覚めた。

「おはよう、兄様」

木乃香はゆっくりと身体を起こして彩輝の隣に座る。

「おう。おはよう木乃香」

まだしじまが眠っているから呼び名が木乃香に戻っている。

木乃香が目覚めたのは月詠が去ってから大体二時間程が経過したところだろうか。

それにしても、寝ている間に兄が自分の髪を梳き続けたことはスルーなんですね。

「しじまさんは？」

「まだ寝てる」

そう言って、しじまの方を指差す彩輝。

しじまからは規則的な寝息が聞こえてくる。

「そっか。よかった」

顔や首に黒塊の文様が刺青のように出来ているが、問題はなさそう  
だ。

正直、自分が余計なことをしたのではないかと不安だったが、しじ  
まの無事な姿を見て安堵する木乃香。

「職業体験はどうだった？」

今回の一件に一段落着いたところで彩輝が感想を尋ねた。

「……怖いえ」

怖い。それが尋ねられて真っ先に出た回答だった。

「どづい風に？」

「兄様がホテルで言った意味がわかった。魔法は便利やけど、簡  
単に人を傷付けれる。人を魅了して、簡単に狂わせる」

魔法という言葉が本来持っているファンタジックなイメージを払拭  
出来ただけでも連れてきた意義はあったか、と考える彩輝。

ただ、結果の割に過程が重すぎたかもしれないが。

「関わろうとは思うか？」

だが、本題はここからだ。ここまでは事前知識が揃っただけにすぎ  
ない。

「……まだ、わからん」

思い出されるのは月詠との会話で出来た不安。

彩輝と魔法という新しい繋がりは出来たが、それが彩輝の足を引っ張ることにならないだろうか。

関わっても、彩輝なら困っている自分を助けてくれるだろう。だが、それ故に彩輝の荷物になるのが木乃香は嫌だった。

それに関われば今回のようなことを目にする機会も増えるだろう。果たして、家族を蔑ろにする光景に耐えられるだろうか。

「……不安ばかり」

小さく呟く。

「木乃香？」

「え？ 何でもないえ」

隣に座っている彩輝に聞こえてしまったかとすぐに否定したが、それこそ何かあると言っているようなものだ。

だけど、彩輝は追及しない。

彩輝だけの話を聞くのも良くないし、こればかりは木乃香が自分で決めないといけないことだから。

「……んっ」

そんな中、漸くしじまも目が覚める。

「じじは……」

「一応お前の家のどこかの部屋」

そう、と短く返して、身体を起こす。

その際に自分の身体に巻き付いたモノを見て苦笑する。

「ああ。こづい風になったのか」

一見刺青のようになったモノを撫でる。それは喜びを表すかのよう  
に、ぐにやり、と模様を変えていく。

「さて、これから行く当てはあるのかい？」

しじまに質問を投げかける彩輝。

「無いけど。まあ、なんとかなるでしょ。旅の道連れは出来たし。  
私もこの子も、もう縛られちゃいないし、困われてもいないんだか  
ら。自由って感じに人生を謳歌するさ」

「桜の花だけに？」

「やかましい」

と、ここで何か思いついたように考え込むしじま。

「ねえ、謳香オウカってどうかな？」

彩輝と木乃香は突然そんなことを言われても、何を指し示しているのかわからず顔を見合わせる。

「香りを謳うつて書いて謳香。この子の名前」

「いや、安直過ぎんだろ。それにソレ、性別を付けるとしたら男じゃないのか？」

「香乃木から一字貰うよ」

これで今更偽名でしたとは言えない空気になってしまふ。

しかし、今が嘘だとしても、これからも仕事の際は香乃木と名乗り続けられ、いつかそれが本当になるんです。

別段名前が二つから三つに増えたところで、特に支障はないし。と彩輝自身も考えている。

「名前つながりで名字も何かない？ 鬼灯はもう名乗りたくないから」

「しじまだろ……。音無とかでいいんじゃないか？」

「志紀さんも大概安直じゃないか」

「なら自分で考えろ」

「音無しじまね。良いと思っつよ」

名前の話はこれで終わり、先程の話題へ戻る。

「さっきの話だけど、当てが無いなら一応知り合いに紹介ぐらいはしてやるぜ。その格好で現実世界は生き苦しいだろ」

生き苦しい、誤植にあらず。謳香の様子はしじまの顔や首、手足の先にまで届いている。服の下には全身くまなく走っていることだろう。

そんな奇異な状態が一般人にバレたら、日常生活に支障をきたすのは必至。

「有難いけど、当分はフリーで色々見て回りたいんだ。他人の目は極力無視するし。ていうか現実世界って。ゲームの中にも逃げ込めっていつの?」

「世の中には魔法世界というのがあってだな。魔法使いの国があるのさ」

「は?」

突然そんなことを言われてもしじまは理解が追いつかない。

隣で聞いていた木乃香も呆然としている。

「どうする? 送ろうか? フリーでやるなら、あっちの方が依頼多いし。謳香なら並大抵の奴には負けないだろう」

そしてしじまは考える。どの道、一から始めないといけないんだし、世界を見て回るのなら面白そうな方がいいんじゃないかと。

依頼が多いという言葉にも惹かれた。何より謳香の自由度が高いというのが好ましい。

「取り敢えず、連れて行ってもらっても」

しじまの頼みに彩輝はすぐに応じた。

「《道よ開け》」

移動手段としてお馴染みになってきた《門》を繋げる。行き先はヘラス帝国。首都から離れているが、小さいわけでも大きいわけでもない説明に困る街。

「さて、それじゃあ行ってみようか」

彩輝は木乃香の手を引いて《門》を潜る。それに続いてしじまと謳香も。

そして《門》から出て、一番最初に目に入ったのは、ネコ耳、イヌ耳、果ては二足歩行する虎やイルカ。

通り過ぎる人を見て、確かにこの中じゃ刺青ぐらいは霞んでしまっな、としじまは思わず納得してしまう。

「兄様。この人ら皆魔法使いなん？」

「ああ。言っただろ。魔法は唯の道具だって。こっちは科学の代わりに魔法が発達してるから、人によっちゃ魔法なんてライター程度の価値しかない時もある」

木乃香は目の前で笑い合っている人たちを見て、魔法で狂うのは本当に少数なんだと再認識する。

「ん？ あれ？ 志紀さん。こんな簡単に来れるなら、ファミレスで頼んだ後にすぐ来れたんじゃない……」

気付いてはいけない現実にしじまが辿りついてしまった。

「あ。忘れない内に言っとくけど、月詠が報酬はいらないうて言ってたぜ」

即刻話題を他に逸らす彩輝。

「まあ、月詠は戦えればそれでいいみたいなこと言ってたし。あ、志紀さんの対価は？」

しじまは謳香を助けた後、すぐに気絶してしまったので彩輝の対価を払ってないことに気付く。

「もう貰ったさ」

「え？」

何を？ と聞き返そうとするしじまの声を遮るように彩輝は一つの財布を投げつける。

「取り敢えず、一週間分の路銀はあるから」

「えっ、ちょっと」



止める間もなく、彩輝は再び《門》を開く。

「じゃあ、縁があつたらまた会おう」

「え、兄様！？　じゃ、じゃあね！　しじまさん！」

彩輝に手を引かれながら、《門》を潜る直前に振り返って手を振る木乃香。

「う、うん」

咄嗟に手を振り返したが、いきなり過ぎてついていけない。

何であんなに慌てて帰ったんだろう？

そう疑問に感じていたら、しじまの横を武装して制服を着た、まるで軍人のような人が通り過ぎていった。

「いや……まさかね……」

まさかとは思うが、指名手配犯とかじゃないよなあの人。返ってくる答えは当然なかった。

本当にすることが無くなったしじまは取り敢えず渡された財布の中身を確認する。

中には、お金と四つに折られた数枚の手紙。

手紙にはドラクマという魔法世界の通貨を円に換算した説明や、こ

こちらの一般常識から込み入った政治問題、本当に困った時はここを頼れと連絡先まで、両面を使ってびっしりと書かれている。

「至れり尽くせりで悪いなあ」

そう思いながら、手紙の最後の文書に目を通す。

『最後に、依頼完遂ならファミレスの時点で出来ただけど、妹の経験値稼ぎに付き合わせてゴメンね』

今までの感謝とか申し訳なさが月まで届くぐらいの勢いで吹き飛ばす。

「あの野郎、最悪だあ！」

突然大声を上げるしじまに驚いた通行人が目やるが、そんなものは気にしない。

「はあ……。もういいや。宿探そう」

そして、歩き始めようとして、漸く気付く。

いつもどんな時でも持ち歩いていた母の形見が無いことに。鬼灯しじまを象徴する藍色の唐傘が無いことに。

今日までの私は死にたくなかったが、今日からの私は死ぬわけにはいかなかった。

鬼灯とは今日限りで、決別だ。

「……全く、本当に、最悪な人だ」

思わず毒づくが、その口元は確かにつり上がり、笑みを刻んでいた。通りに沿って歩いていると、店の前に人だかりが出来ている。

野次馬の一人に聞くと、何でも客を人質に取った立てこもり犯らしい。

ああ。だから軍人みたいな人が居たのか。と納得するしじま。

しかし、着いて早々こんな事態になるとは。案外磁石のように厄介事を引き寄せているのはしじまの方かもしれない。

そんな時「お願いです！ 息子が人質にされているんです！ 助けて下さい！」と人垣の中から声が聞こえた。

しじまはその親へ近付く。

「お困りですか？」

「……貴女は？」

「私の名前は音無しじま。ただのしがない請負人さ」

これが音無しじまと音無謳香が解決する最初の依頼。

そして、名を上げながら首都に赴いた時、ヘラス帝国第三皇女と縁が『合う』のはそう遠くない未来の話。

「あ。ホテル、チェックアウトしてない」

しじまと別れた後、彩輝は木乃香を連れて、ホテルのチェックアウトをちゃんとして、麻帆良学園まで帰って来た。

「いいか、エヴァ。これは傘だ。人間の知恵の結晶と言ったところかな」

「九州最大の結社を壊滅させかけておいて、言うセリフがそれか。というか割に合っていないだろ」

今この場に居るのは彩輝とエヴァの両名だけ。茶々丸とさよは夕飯の買い出しに行き、他の面子は別荘内に居る。

「させかけた、とは人聞きが悪いなあ。あれは自業自得だよ。それに俺、等価交換とかあんまり拘るつもりは無いし」

「ハウルなら有無を言わず桜と、その謳香って奴を細切れに出来ただろう。何で態々依頼を請けるまで動かなかったんだ？」

思い返せば、二つ目の依頼を請けてない時点で、殺す機会は山ほどあった。

それを敢えてしなかった理由。エヴァの問いに実に単純明快な答え

が返ってきた。

「人の情念から生まれるのは、鬼と相場が決まっているからな。同胞殺しなんて目覚めが悪いだろ？」

「そんな理由か」

呆れるエヴァ。

「ついでに聞くが、その謳香に志向性を持たせたのは誰だ？」

尋ねているのは人間の残骸だったモノに意思と力の使い方を教えた人物。

「そいつらは食べ残し、つまり残りカスだったんだろう？ 塵も積もれば山となるとは言うが、所詮塵は塵だ。それが奇襲とはいえない。一つの結社を相手取るなど、普通とは思えん」

「んー。多分自然発生しただけとは思うが……」

「随分煮え切らないな」

「これと言って不自然な点は見えなかった。ただ感覚的なものなんだが、最近の記憶がちょっと整理されてたっていうか」

それが本当なら、記憶に干渉し、記憶を改竄し、一切の痕跡を隠滅したということになる。彩輝の魔眼が見破れない程巧妙に。

「なら自然発生か。仮に居たとしたらソイツは化物じゃなく神に近いな」

「神様もどきなら、昔殺したことがあるんだけどね。ホント、居ないことを祈るよ」

これで鬼灯に関連する話は終わった。

「それで、ハウル？ 近衛木乃香はどうするつもりなんだ？」

「それこそわからん。木乃香次第だ」

木乃香は彩輝から別荘を借りて、悩み抜いている最中であった。

今別荘内に居て木乃香の相談に乗っているのは、刹那と千雨。他には殺し合い中の朱織とチャチャゼロが居る。

刹那は木乃香のことが心配で。千雨は常識人からの視点で助言してやってくれと彩輝から頼まれて。

それで春休みの体験の説明を終えたところだ。

「結局、ウチがどうしたいかってことやな」

木乃香は何度目になるかわからない溜息をつく。

「お嬢様……」

刹那は木乃香の隣に座り、手を握る。自分が傍に居ると言うように。

「二つ聞くが、関わらないと決めれない理由は？」

千雨は正面に座って、何が原因で決めかねているのかを尋ねる。

「前みたいに残されるんが嫌やから」

「じゃあ、関わるって決めれない理由は？」

「……………」

思いつくのは鬼灯での一連の出来事。自分の為に家族を殺す醜悪な事件。

彩輝は多く言わなかったが、アレで何人が死人が出たことも教えられた。

平然と命の奪い合いをする世界に自分は馴染めるとは思えない。それが関わると決めかねている理由。

「あ　あ。まだ悩んでたんですか　あ」

殺し合いを終え、チャチャゼロを頭に乗せ、朱織が戻って来た。

「まだって、これは人生を左右する決断なんだから、ちゃんとじっくり考えた方がいいだろ」

朱織の物言いに千雨が反論すると、朱織は自分の言い方が悪かったとすぐに謝った。

「催促してるわけじゃないんですよ。私が言いたいのは、木乃香

さんて、もつとシンプルな人だと思ってたから、すぐに決めるんじゃないかな　あつて」

シンプル。そう言われても木乃香には自分のどこを指されているのかわからない。

詳しく聞こうとした時、先に朱織が口を開いた。

「木乃香さんはどこに行きたいんですか　あ？」

どこに行くか。向かう場所。目的地。目標。

考えるまでも無く、一つの答えが弾き出された。

「ああ。そうか」

成程。確かにウチはシンプルに出来てる。木乃香自身も思わず納得してしまう。

「ありがとう、朱織ちゃん。わかったえ。家とか魔法とか生贄とか狂気とか、どうでもいい道路標識が多過ぎて迷ってたんや」

「ど、どうでもいって、このちゃん!？」

予想だにしない発言に刹那の呼び方も昔の物に戻ってしまう。

「らしくなかった。色んな事があり過ぎて全然ウチらしくなかった」

先程とは打って変わり、憑き物が落ちたように木乃香は笑う。



「もう一度聞きますよう。どこに行きたいんですか　あ」

それに木乃香は即答する。

「決まってるやろ。兄様の隣や」

方向はわかった。燃料なんて山ほどある。なら、何を迷う必要があるのか。

「足を引つ張る？　家族に迷惑をかけるなんて普通やろ。引つ張るところか抱き付いてやるえ」

命の奪い合いは恐いが、こうして家族のように相談に乗ってくれる友人たちが居る。自分は一人じゃない。

完全に開き直った妹の姿がそこにはあった。

「蛙の子、いや、蛙の妹は蛙か」

千雨は手を額にやり、溜息をつく。

「ゴメンな、千雨ちゃん。相談に乗ってもらって」

「あー、気にすんな。常識人の観点から言わせてもらつと、そのブラコン思想はどうにかした方がいいと思うがな」

そんな忠告はどこ吹く風で、木乃香は椅子から立ち上がる。

「お嬢様！　本当に、構わないんですか？」

最後の確認をするかのように、刹那が尋ねる。

「うん。それにな、ウチはもう知ったんや。魔法とか、しきたりなんかに人生を狂わされてる人がある。その人が助けを求めているなら、重荷を降ろす役割を請け負ってあげたいんや」

「え」

木乃香の言葉に刹那は虚を突かれる。

しかし、そんな刹那をよそに、「よし。戯言武装完了」と、木乃香は兄の許へ駆けだした。

近衛木乃香。 中学三年の春、進路第一希望は 請負人。

**第三六話：鶴と亀がすべった（後書き）**

もうこれが最終回でいいんじゃないかな。

って思ったのは、今週から始まるテストの所為でしょう。

### 第三七話：赤よりも黒

別荘なう。

あと春休みが残り数日と迫る中、千雨と茶々丸を除くメンバーがいつもの如く別荘内で駄弁っていた。

「そつえば、ちうちちゃんと茶々丸はどこに行ったんだ？ 昨日から見てないけど」

と零したのは彩輝。

勿論この場合の昨日とは別荘の外でのことだ。

「千雨さんが野暮用が出来たと言って、茶々丸さんもそれについて行ってましたけど」

答えたのはさよ。

「野暮用ねえ。まあ、何かあっても、ちうちちゃんの逃げ足に追いつけるのは世界中で俺だけだからなあ」

事前準備さえちゃんとしていれば、地球の裏側にも、異世界にも一瞬で行ける方法を持つ人間に追いつくなんて不可能でしょうよ。

彩輝はソファでうつ伏せの体勢になり、『倉庫』からキセルを取り出して吸い始めようとするが、

「キセル、アカソー」

疾風の如く木乃香に取り上げられる。

「いや、だから。身体に悪影響は出ないんだって」

最近はこのパターンが多くなって、昼間は満足に吸えていない。

「発ガン性の高いジメチルニトロソアミンは主流煙が5.3〜43ngに対して副流煙では680〜823ng。キノリンの副流煙に至っては主流煙の11倍、およそ18000ngが含まれてるんやえ。つまり実際は吸う人よりも周りの人の方が害は大きい」

「それは煙草の話だけど、ウチの妹が名前が借金執事の誕生日と同じ奴のようなことを言い始めたよー。刹那ー、擁護してー」

ハヤテのようにキセルを取り返そうとするが、かわされてしまう。

「せつちゃんからも言ってやって」

「え！？ 私ですか」

兄妹揃って話を振られる刹那だが、この件に関しては世間一般の無難な回答を返すことに。

「彩輝様が吸わなければいいんじゃない」

どこに行っても、この手の話は喫煙者が圧倒的に不利という事です。

「刹那は今まで容認してくれていると思っていたのに……!!」

思わぬ伏兵に打ちひしがれる彩輝。

まあ、仕事終わりに硝煙の香りを漂わせる相方を持つ刹那としては、どっちでも構わないというのが本音だろうが。

「大体、中毒でもないなら吸わんかったらいいのに」

至極真つ当な意見で追い打ちをかける木乃香。

「それはあれだよ。『エル・プサイ・コングルウ』みたく、子供の頃から習慣化してることをやると落ち着くんだよね」

この発言はどう聞いても中毒者のそれだが、病院の検査の結果は健康体、異常無しで返ってくるんです。

ある意味ニコチン中毒よりも性質の悪い状態だった。

「いいんじゃないですか。人生短いんですし、好きなようにやれば」

意外な所から援護する声が。

「だよな、さよちゃん。好きなことを好きなようにするのが一番だよな」

「はい。死んでから後悔するくらいなら、生きている内に後悔する方がいいですよな」

そんなことを笑顔で言われても、返す言葉に詰まります。

「そっだね」

取り敢えず、死亡体験者の彩輝が短く返答する。

「ふと気付いたんだが、木乃香に一番主流な魔法を見せてないんだよ。ってことで、エヴァ。実演してくれないか？」

そして本当に唐突に、脈絡なくエヴァに話を振った。

「ん？ ああ、いいだろう。その代わりに、ハウルも少し付き合え」

突然のことだったが応じるエヴァ。ただし、彩輝を巻き込んで。

「え？ 何？ バトルですか？」

「バトるわけだが、異論でもあるのか？」

その後、賭けや挑発といった紆余曲折を経て、二人は部屋を出て海の上へと移動する。

「俺が勝ったらエヴァの秘蔵の酒を貰おうか。ついでにお前の持っているゲームのセーブデータを全て消す」

『倉庫』から十字剣を引き抜きながら彩輝が告げる。

「私が勝ったらこれから毎日ハウルの血を飲ませて貰うとしよう。そして従僕のように扱き使ってやる」

エヴァの右手に集約された魔力が剣の形をとる。

二人を中心に渦巻く魔力。

最早お遊びの領域ではなく、二人とも目がマジになっている。と言つても、魔眼は未使用です。

賭けの内容はアレだがダメージは地味に大きいからだろうか。

互いに魔力を高め合い、一瞬の隙も見逃さないよう睨みあう彩輝とエヴァ。

そして、ほぼ同時に視線という名の糸を断ち切り、二人は一気に距離を詰めた。

「ハアアアッ！」

「アーメン！」

片や魔力で構成された『断罪の剣』を、片や被<sup>エクソシズム</sup>魔式を行使した十字剣を振り下ろす。

交わる剣。衝撃で飛び散る水しぶき。

鏝迫り合いの後、均衡が崩れたら一旦距離をとり、一合、二合、四合、十六合と速度を上げながら斬り結んでいく。

その光景を少し離れた場所から見ている木乃香は思ったことを口にする。

「……あれ？ 魔法は？」

高レベルな戦闘というのは素人の木乃香にも分かるが、宙に浮いて



いる点を除けば剣の技術しか印象に残らない。

木乃香は古い研に所属しているだけあって、カバラ、ルーン、陰陽道など有名所を名前くらいは知っているが、目の前で繰り広げられている光景は、そのどれからも連想できない。

「今は探り合いなので、そろそろエヴァンジェリンさんが動くと思いますよ」

隣に居る刹那が補足する。

そして刹那の言葉通り、数合斬り合った後、エヴァが至近距離で彩輝に『闇の吹雪』を放った。

「あれが最も主流な西洋魔法と呼ばれるものです」

刹那が解説を入れるが、木乃香はそれどころではない。

「あれ大丈夫なん!？」

当たったら怪我の範疇で納まりそうにないものが、目の前から放出されたのだから当然だ。

「彩輝様なら問題ありません」

それに刹那は慌てることなく断言する。もうこの辺は慣れだろう。

現に『それは残像だ』とでも言うように、彩輝は縮地でエヴァの後ろに回り込み、十字剣を薙ぐ。

それにしても、吸血鬼相手に被魔式を躊躇いなく選ぶとは、まさしく鬼の所業と言えるんじゃないですかね。

実物を見ながら刹那が説明している時、一際大きい氷山が海上に出来上った。

……ちょっとヒートアップし過ぎじゃないでしょうか。その氷で頭を冷やすという選択肢は……ある筈が無いですよ。

それを見ながら解説中の刹那は思う。

別荘が不調をきたすような前兆があれば、今この場に居る自分だけで止めに入らなくてはいけないのではないかと。

世界最強クラスの戦いに割って入るといふ自殺行為の未来を幻視してしまい冷や汗が出てきた。

朱織も居るには居るんですが、睡眠中なんです。くだらない理由で眠りを妨げられて不機嫌になった殺人鬼の扱いなんて、しないに限る。

そんな折、運が良いのか悪いのか、天恵ともとれるタイミングで干雨と茶々丸が帰って来た。

「おかえりなさい」

「ただいま」

「ただいま帰りました」

こんな挨拶が自然と出てくるあたり、もうすっかり我が家といった認識だ。

「はあ……。予想通りだったけど、全員揃って別荘の中かよ」

続く言葉が愚痴。千雨からは大変だったと言わんばかりに苦労が滲み出ている。

「マスターと彩輝さんは何をやっているんですか？」

戦闘中の彩輝とエヴァを見、茶々丸が疑問を口にする。それに簡潔に答える刹那。

「てつきりゲームのセーブデータを消したり、無断で血を飲んだからかと思いましたが、違ったんですね」

現状を見て真っ先に思い浮かぶ理由を上げる茶々丸。

切っ掛けは違いますが、結果は違いません。

そして、お互いに色々と聞きたいことが残っている中、先程の氷山が噴火した。

噴火、という表現がしっくりくるだろう。倒壊と呼ぶには荒々しく、爆発と呼ぶには規模が違い過ぎる。

刹那たちの許にも軽石さながらの氷山の一部が飛来する。

対応したのは刹那と茶々丸。

刹那は「アデアット」とアーティファクトを呼び出し、大き目の氷の塊を砕く。

その後ろでは、茶々丸が人工精霊で壁を作り上げ、降り注ぐ氷の礫から身の安全を確保する。

一方、海上での戦闘は更に激しさを増している。四方八方に魔法をバラ撒き、一般人から見れば一撃必殺のオンパレード。

「で、アレはいつになったら終わるんだ？」

呟いたのは千雨。心中では「自重しろ」の四文字<sup>クワット</sup>。

その答えとして周りから返ってくるのは三点リーダーの連続。

当人たち（主にエヴァ）から返ってきたのは『魔法の射手』の雨霰。

「おわっ！」

障壁を展開する千雨。喜ばしいことなのか、反射で障壁を築けるようになっていている論理魔術師の姿が、そこにはあった。

さつきと同じ様に障壁の前で、刹那がある程度弾を斬り払うが、先程とは量が違う。

そして、砕かれた氷は地面に落ちる前に続く弾幕によって、当人たちも予期せぬ軌道を作ってしまう。

これが光や風なら何の問題も無かったのだろうが、氷という質量を持った属性だったのが災いしてしまった。

「木乃香さんっ、こちらへ」

咄嗟に、今手の空いている茶々丸が木乃香を氷の破片が跳躍する空間から避難させる。

「や、でもウチは」

そう。ハッキリ言って瑪瑙のネックレスを装備している木乃香の防御力は世界最高峰なわけで、茶々丸の心配は杞憂なのだ。

逆にここでは、まだ技術が一流の域に達していない千雨の方が危険だった。

「千雨さん！」

氷の矢と矢が衝突して砕けた一部が、障壁の外、左斜め上から千雨に向かう。

千雨は咄嗟に顔を逸らし、バックステップで回避。間一髪掠めるだけで千雨自身に怪我は無かった。

「あ、長谷川さん。眼鏡に罅が……」

局地的な氷雨「氷雨」が降り終わり、アーティファクトをカードに戻し、振り返った刹那がそれに気付く。

「あー、気にするな桜咲。これは」

スッ、と掛けていた眼鏡を手に取り、

「伊達だ」

そして、グシャリ、と握り潰した。

レンズは砕け、フレームはあらぬ方向へ曲がり、原形を失った眼鏡を投げ捨てる。

そして、８８ミリ砲でも発射しかねない勢いで、懐に忍ばせていたとあるモノを取り出す。

千雨の手の中に納まっているのは、見た目は何の変哲もない立方体の匣。

匣の製作者は近衛彩輝である。

この一言で異常性は十分理解してもらえないのだろうか。

疲れた状態で帰って来たところへこの仕打ち。そんなものを持ち出す程にキレていた。

サッカーや陸上で全力を使い果たした時に、膝カックンされた感じ。

「茶々丸、合わせろ！」

その言葉と同時に開かれる《門》。そこへ茶々丸がフラスコを三本程投げ入れる。

続けて、「行け、ハクウ白雨」と匣から《門》に向けて飛び出すナニカ。

同時に海上で起こる新たな爆発。

目を向けると、海上には彩輝とエヴァに加え、鱗を白銀に煌めかせ頭部から是一对の翼が伸びている一体の大蛇が居た。

再び《門》を繋げると、次は千雨と茶々丸の本人たちが飛び込む。

この瞬間、二人は刹那ですら躊躇う一線を平然と越えたのであった。

「えつと……」

またしても刹那と木乃香の二人だけになったが、ストップパー役の負担が激増。

「長谷川さんが使っているのが論理魔術と呼ばれるもので、茶々丸さんのが錬金術です」

取り敢えず解説役だけは全うする刹那。

「なあ、せつちゃん」

「何ですかお嬢様？」

「魔法って色々あるけど、どうやって選んだらええん？」

「お嬢様の場合、陰陽道になるんじゃないでしょうか。実家の関係で」

いや、逆に密教というのもアリかもしれませんよ。

「陰陽道かあ」

ひよっとしたら道教になるかもしれないので、結論を出すのは少し早いんじゃないでしょうか。

「で、せつちゃん。兄様らはどうするん?」

「……その内収まると思います」

桜咲刹那は匙を投げた!

海上では自然災害が起こっていると言っても過言ではない。

環境省や超自然災害対策室の方をお呼びした方が。

「さつきからウルサインだよ」

「ケケケ。面白ソウナコトヤツテンジャネエカ」

殺人鬼機がログインしました。

それぞれ手には弓とナイフを握り、正しく鬼気迫る光景。

そして、戦場へ跳んだ。

「つーか、テメーら別荘の中に引き籠り過ぎなんだよ! 調伏とかはお前らの専門だろうが!」

「論理魔術でだってやれる方法はあるだろ。ていうか何でこんなところでもいいパートで《人形》のお披露目やってんだよ」



「あんなチート使えるか！」

「諦めが人を殺す。未熟者が」

「なら、達人の彩兄とエヴァさんはもつと静かに戦闘してくれませんかね　え」

「ぐつ。何故貴様ら兄妹は殺人鬼と名乗りながら、退魔法に長けるんだ」

「御主人、隙アリダゼ」

「やめんか、ポケ人形！　ええい、茶々丸、援護しろ！」

「申し訳ありません、マスター。今マイブームが友情・努力・反逆なので、忠誠は二の次にさせていただきます」

「……ポケロボ、お前もか……！」

「私なら悪を成して巨悪を討つ」

「ちや、茶々丸。お前本当に大丈夫か？」

この面子を二分すると、巫山戯ているかストレス発散のどちらかですかね。

その割には些か規模が大きいような気がします、ライオン同士のじゃれ合いのような感じでしょう。

人から見れば確実に死ねるけど、当人たちにはそうでもないという。  
そんな光景を見て刹那は、

「お嬢様、部屋の中に入っ逃げていきましょう」

RとLの同時押しを決行。

出現した敵は現実。敵う筈が無い。

過半数が遠距離攻撃を得意とする中に入って、全員を無力化するなんて暴拳に出なければならぬ場面でもありませんし。

きつと止めに入らなくても、自然消滅するという希望が叶うと信じて。

その後、当初の目的を完全に見失い、「もうやめない？」みたいな空気が漂っていたところへ、ラップ音の応用で増量されたさよの一声により終息した。

問題は無いと思われるが、別荘内であれだけ暴れたのは初めてのことなので、一応念の為に全員外に出た後、軽くメンテナンスをする彩輝とエヴァ。

賭け？ 勿論無効ですよ。

そして別荘が一時的にも使えないと分かると、

「疲れた。寝る」

「寝なおす」

との言葉を残し、千雨と朱織はさつさと寮に帰った。

他の面々もいい時間帯だったので御相伴に預かり、茶々丸の作った夕食を食べた後、寮に帰る者とのまま泊まっていく者にわかれた。

「別荘、異常が無くて良かったな。一番大技を連発してたのがエヴァだったからひよっとしたらと思ってたぜ」

右手に猪口を左手にキセルを持った彩輝が言う。

「今すぐ近衛木乃香を呼んでやろうか」

「若者から酒とキセルを取り上げようとするなんて鬼かお前は！」

「普通なら取り上げるわ！」

「いやいや。青春におかしなことはつきものなように、早春に大吟醸はつきものだろう」

どこの酒物語ですか。あとそれ、季節問いませんよね？

「ふん。なら見逃してやるから私にも注げ」

エヴァは自分の猪口を彩輝の方に突き出す。

「はいはい。ちなみにぬる爛で飲んでるから」

応じて、徳利を傾けてエヴァの猪口に酒を注ぐ彩輝。

注がれた琥珀色の液体はきらめく光沢を持ち、果物の香りを漂わせる。

一口飲むと、コクと奥行きのある味わいが口の中に広がり、味覚が無条件でいい酒だと告げている。

「相変わらず、金に糸目は付けないな」

「これ貰い物だぜ」

「……ハウル。何を吹っ掛けたんだ？」

「仕事じゃねーよ。プライベートだ。羅宇屋やってる妖怪の飲み友達から分けて貰ったのさ」

ホント、貴方は変な所で人脈を發揮しますね。

「妖怪の飲み友達って……あ」

ふと何かを思い出したエヴァ。

「そういえば、ジジイからネギ・スプリングフィールドの試練の相手をしてくれとか頼まれてたな」

妖怪繋がりで思い出したんですか。

「へえ。で、やるのか？」

「どうせ暇だしな。偶にはこういうゲームで遊ぶのも一興だろう」

「俺はRPGよりもアクション系が好きだなあ」

あっちにしてみれば人生の懸かった試練でも、こっちにしてみればただのぬるゲーでしかない。

暇つぶしを除いて残る得なんて、レベル99の勇者がスライムを一撃で倒さないようにするスリルを味わえるぐらいでしょう。

もしくは、負けたら指パツチンして時間を遡り、一番いい装備で挑んでくるかもしれない。

……ぬるゲーが一瞬にして無理ゲーに変わってしまった。

ネギを甘く見ない方がいいということだろうか。

「いつやる予定なんだ？」

「そつだな。春休みが明けたらやるか」

「最高の茶番劇が見れるのを楽しみにしてるぜ」

春休みが明けるまで残り数日。

### 第三八話：桜通りの吸血鬼

SIDEさよ

春休みが明けた最初の学校。

今日から私たち2 - Aも学年が一つ上がり、最高学年3 - Aになりました。

身体がある今、いよいよ六十年にもなる中学生生活にも終止符を打つ時が来たのかと、嬉しいような、どこか寂しいような。

思い返すと感慨深くなってしまいます。

同じようにずっと中学生をやっているエヴァさんも今年で卒業出来るようになったそうですし。

これから皆さんどういう進路を選択して行くんでしょうか。

と言っても、学園を出るまでは彩輝さんの家でいつものように集まって駄弁つてると思いますが。

ひょっとしたら学園を出て就職しても、定期的に集まったりして居るかもしれません。

と、ここでチャイムが鳴り、今年から正規の先生になったネギ先生が教室に入ってきて来ました。

きつと一番後ろの席では千雨さんが労働法について呟いているんでしょう。

彩輝さんとエヴァさんが再三にわたって言っていました、気にするだけ思考する時間とエネルギーの無駄だそうです。

『3年！ A組！！ ネギ先生ーっ！！』

はうわっ！

ビックリしたー。合図も何もなく突然の大合唱。

相変わらずこのクラスの人たちはノリが良過ぎです。

そしてネギ先生の挨拶が終わると、しずな先生が身体測定の準備をするよう告げに来ました。

それを聞いてネギ先生は慌てて、今すぐ服を脱いで準備しろと指示を出します。

……取り敢えず、三つほど思ふことが。

男性教諭がその発言をすれば確実にアウトです。セクハラで訴えられますよ？

次に、今日身体測定をするのは春休みの内から連絡されているのに何で今更慌てるんですか？

そして最後。彩輝さんと木乃香さんが教室内に居ないのに、ちゃんと出席取ってるんですか？

ネギ先生は自分の失言に気付いて、教室の外へ出て行きました。

後ろを見ると、朱織さんは寝ています。千雨さんは手を額に。

兎にも角にも今は身体測定です。

こういう集団行動で遅れて皆さんに迷惑を掛けるわけにはいきませ  
んからね。

そんな訳で朱織さんを起こすことから始めましょう。

「起きて下さい、朱織さん。身体測定ですよ」

朱織さんの席まで移動して肩を揺する。

「後五分」

「そんなお決まりのセリフを言っていないで」

「後1・21ジゴワット」

「タイムマシンでも作るつもりか、お前は」

そう言ったのは前の席の千雨さん。

ほら、さっさと起きろ。と千雨さんは朱織さんの頭に軽くチョップ  
を入れる。

「うーあー」

地球外言語を発しながら立ち上がる朱織さん。漸く起きましたよ。



そして私も制服を脱ぎ始めます。

「にしても、よくそんなネタ知ってたな」

1・21ジゴワット……何かの単位でしょうか？

「いつだったか、彩兄が言ってた気が」

なんか納得です。

「千雨さん。それってどういう意味なんです？」

少し気になったので質問を。

「元はあるハリウッド映画の脚本家のスペルミスで、正しくはギガワットだな。で、そのスペルミスが間違っただま日本語字幕になって知られるようになったんだ」

へえ。今度その映画見てみようかな。

千雨さんから映画の話をしている間に、クラス内では一つの噂が話されていました。

それはほんの数日前に寮で流行り出した噂。流行り出したというか、流行らせたんですけどね。

なんでも学園長の頼みをやるのに必要なことらしくて。

というのは建前で、彩輝さんとエヴァさんが面白がって。

その噂の内容は、満月の夜には寮の桜並木に吸血鬼が出るというものの。

ちなみに主に噂を流布したのは私と木乃香さんです。

彩輝さんから秘密の意味を持つルーン文字を刻んだアクセサリーを貰い、木乃香さんが所属している占い研と図書館探検部で同じ寮の人、数人に話しかけました。

木乃香さんが話している間、私は少し離れた所から彩輝さんに渡されたレコーダーで音楽を聞かせていました。

これはラップ音の応用です。

それでこの音楽は既視感を彷彿させるものだとか。録音する際には千雨さんと茶々丸さんも手伝ってましたから、音質はかなり良い方だと思えます。

初めて聞く話でも『あ、その話聞いたことあるかも』と錯覚させ、自然に受け入れさせるわけです。

そして私たちが去った後はルーンの効果により『誰と話していたか思い出せない』という状況を聞き手に残して、

後はそんな都市伝説のような体験をした方々が勝手に噂を広めてくれるというわけです。

今となつては、最初と話の内容が多少変わっているかもしれないませんが、吸血鬼という単語が入っていればそれでいいみたい。

しかし、こうしてお互いの得意分野を生かして一つのことを成し遂げる達成感は何では得難いものがあります。

うん。上手く纏めようとしてみましたが、どうやっても主人公と敵に対する悪の組織の暗躍ぶりにしか聞こえません。

まあ、誰かが傷付くわけでも無いですし、私を含め皆さん割と楽しんでました。

『先生　　っ！　木乃香が　　っ！』

千雨さんと朱織さんと順番を並んで待っていたら、保健委員の和泉さんが随分慌てた様子で教室に戻って来ました。

「何！？　木乃香がどーしたの！？」

和泉さんの声を聞いて、教室のドアや窓を一斉に開くクラスの皆さん。

心配なのは分かりますが、女子校だからって今全員下着姿なんですからもう少し躊躇って下さい。

「なんか学芸会みたいなノリでやってるけど、これって学園長の頼みじゃなかったのか？」

と呟いたのは千雨さん。

「今更ですね　　え。まあ、実はこの騒ぎは隠れ蓑で真の目的が他にあった、とか言われても私は驚かないけどね　　え」

確かにそう言われるとそんな気がしてきました。

彩輝さんとエヴァさんは何を考えて行動してるんでしょうか。

SIDE 彩輝

いきなりだけど、暴露話しようぜ。

実は俺、何も考えてないんだ。

強いて言うなら自分たちが楽しむ為だけにやってる。

ジジイの頼み？ ネギの試練？ 知らねーよ、そんなもん。俺が頼まれたわけじゃないし。

エヴァも面白がってるから何の問題も無い。

他人の不幸は蜜の味、とまでは言わないけども（今回不幸な要素無いし）娯楽のネタにはちょうどいいよね。

そして現在、木乃香と二人で消毒液の匂いが漂う保健室に居る。

HR終わってすぐに身体測定だからな。緊急避難措置。ついでに折角保健室に居るんだからと自分だけさっさと済ませた。

それに吸血鬼の噂はある程度浸透したし、ここで唯の噂ではないと印象付けようと。ちょうど今日満月だし、そうしないと話が進まないから。

試練なんてどうでもいいが、最低でも形をなぞるぐらいはしとかな  
いと。後でジジイから小言を言われるのは鬱陶しい。

「なあ、兄様」

ベッドに横になっている木乃香が話しかけてきた。

ちなみに木乃香は桜通りで吸血鬼に襲われたという設定で。

俺らの道楽に一般人を巻き込むわけにもいかないでしょ。なにより  
正義の魔法使いに調子に乗られると対処が面倒なんです。

「やりたい放題やけど、魔法ってこんなことに使ってもええん？」

「今更だなあ。噂を流す時に散々使ったじゃないか」

俺は木乃香が横になっているベッドに腰掛けた体勢でそれに応えた。

「それはそれ、これはこれや。噂のコントロールなんて普通の学生  
生活じゃ出来へんし」

貴重な体験だな。将来役に立つかは置いていて。

「まあ、魔法なんてモノはバレなきゃそれでいいんだよ」

「バレた時にすごい反感買いそうやけどな」

「大丈夫だって。『レミーのおいしいレストラン』だって最終的に  
は開き直ってたじゃないか」

「……それ、そういう話じゃないえ」

でもあの店すぐに潰れたと俺は予想する。ん？　ということはバレた時は一般人大勝利ということになるのか。

今まで身を護る力すら無いと勝手に決めつけていた対象に倒されるわけですね。それはそれで面白そうだ。頑張れ、超鈴音。

つと、何かどうでもいい方向へ話題が逸れてきたので軌道修正。

「春休みのアレを銃を持った銀行強盗に例えるなら、これは射的だよ」

自分で例えを出しといてなんだが、銃を持った銀行強盗、すごく懐かしいです。

「射的って、お祭りの？」

「そう。事件ですらなく、ただの出し物だ」

だったら、楽しまなきゃ損だろ。

そう結論を出した時、「失礼します」との声とともに保健室の扉が開かれた。

あ、今までスルーしてたけど源教員も保健室に居るからね。遮音してるから声は聞こえてないだろうけど。

入って来た人物を見ると、ウチの保健委員の和泉だった。

身体測定だからな。保健委員は色々仕事があるんだろう。

そして、二言三言源教員と言葉を交わし、保健室を出て行くことする和泉を呼び止める。

「え？ 彩輝さん……って木乃香！ どないしたん！？」

「大したことあらへんよ。ちょっと貧血でクラっとして」

「そんなわけで、スプリングフィールド教員に連絡してないからさ、悪いけど言っておいてもらえるかな？」

「うん。わかった！」

和泉は力強く頷くと廊下を走って行ってしまった。そこまで急がなくてもいいんだけどさ。

「うーん。騙してて、なんか悪いなあ」

「騙してるわけじゃないよ。真実を曲解して、事実を捻じ曲げて伝えているだけだよ」

「それを世間では嘘って言っつんやえ」

そんなことを言ったら一部政治家の立つ瀬がなくなってしまうじゃないか。

主に元老院。特に元老院とかもそうだろう。後は元老院とかかな。

あんなのが国を運営してるんだから下の人間は大変だよねえ。まあ、苦労には正義っていうメツキが塗装されているんだろぅが。

どうしよう。誰かに『やってること似てね?』とか言われる前に潰そうかな。

元老院との戦いはまた別のお話、みたいなモノローグが流れそうだが。

……また話が逸れてきたなあ。今は寸劇の話だった筈。

「ところで、確認だけどネギに関係者だって言っていないよな?」

「言つてへんよ。知ってるのは兄様の家に集まる人だけちゃうかな」

じゃあ後知ってるのは詠春だけか。

「でも、隠す必要ってあるん? 似た立場の人が襲われたって言った方が緊張感ありそうやけど」

「こんな寸劇を基準にするなって。話したら絶対に関わるぜ。唯でさえ木乃香が対処していかなきゃならん問題は多いのに、それを軽く超えるネギの問題まで付き合っつてられるのか?」

「ん……無理やな」

少し黙考して出した結論。

「それとなく友好的にさりげなく排他的に、適度に親密に適当に対立する。とは誰の主義だったかな」



「何その悪魔の子供みたいな考え方」

「じゃあ、オオキエハジヤクランをオオキエハジヤクラン迷生寂乱 悟無好悪っていうのは？」

「どういう意味？」

「善悪の対立で心を乱さず、全てをあるがまま受け取れば、好きも嫌いもない。って銀朱さんが言ってた」

「良い言葉とは思うけど、最後の予防線で台無しや」

「タツ予防線は大事だと思うなあ。と無責任なことを考えていたら、タツ廊下を走る音。」

「木乃香、大丈夫!？」

声と共に扉が開かれる。

入って来たのは神楽坂明日菜。続いてネギ・スプリングフィールド。

「大丈夫やって。兄様が心配性なだけで」

「なんか桜通りで貧血で倒れてそのまま寝てたらしいんだよね。普通なら病院に連れて行くところだぞ」

「やから平気やって。兄様も偶に倒れるやん」

「初見殺しのトラップは仕方ないって」

「ウチも鉄分をセーブ出来てなかったから」

普段通りの掛け合いを見て一息吐く神楽坂。

対照的にネギは黙り込んで何かを考えている様子。ていつかそうじやないと困る。

露骨なまでにエヴァの魔力の残り香を強調しているのに、これをスルーされたら匙を投げるわ。

取り敢えず、これで色々と仕込みは出来たので、満月の今夜早速仕掛けてみますか。

……エヴァがだけど。

第三九話：詐欺（前書き）

後半、ネギアレルギーの方はご注意ください。

### 第三九話：詐欺

夜が訪れた。

空では一部の欠けも無い月が黙々と月光を生成し、その中を風に攫われた桜の花弁が舞い踊る。

そんな春の夜のワンシーン、桜並木を歩く一人の少女、相坂さよの姿が。

さよは腰にとどく程、長く、色素の薄い髪をなびかせ、月光と街灯と自動販売機とが闇を払拭する中、寮に向けて歩いていく。

その光景は見る者によってはどこか儂げな印象を与えるものだ。

そんな寮へ帰る途中の彼女の頬を夜風が撫で、さよは僅かに身を震わせる。

春と言ってもこの時間帯はまだ冷える。

さよは早く暖房器具が待っている自室へ帰りたい、との願望の表れか歩を速めた。

しかし、そんな彼女を嘲笑うかのように、一際大きい風が通りを吹き抜ける。

翻りそうになるスカートを手で押さえながら、風によって巻き上がった桜の花弁を目で追うさよ。

虚空を彷徨っていた視線はある一点で固定された。

視線の先には暗がりを照らす街灯。それだけならば何の問題も無いが、その街灯の上に人が立っているのだ。

その人物は、月と星が無ければ夜空に溶けてしまいそうな色の外套と、とんがり帽子を身に着け、ブロンドの長い髪を月光により煌めかせている。

『闇の福音』と恐れられる真祖の吸血鬼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの姿が、そこにあった。

魔力を放出しながら、さよに向かって街灯から飛び降りるエヴァ。

それを見てさよは、「き、きゃー」と棒読みに近い、些か緊張感に欠けた悲鳴を上げる。

しかしそれが合図になったのか、また別の人物が現れた。

制止の言葉と共に捕縛魔法を放ちながら二人の間に割って入ったのは、子供先生との愛称で親しまれているネギ・スプリングフィールド。

エヴァは捕縛魔法を障壁で防ぐが、その余波で顔を隠していた帽子は何処かに飛んで行ってしまった。

「ほづ。流石はサウザンドマスターの息子というだけのことはあるか」

捕縛魔法に込められた魔力を見て率直な感想を述べるエヴァ。

力任せに魔力を込める様はネギとよく似ているといった意味合いだろう。

一方でネギは驚きの連続だった。

一連の事件（実際は被害者0の茶番劇）の犯人が自分のクラスの生徒で、しかも魔法使い。

それに加え、先程のエヴァの発言。

自分の父親について何か知っているのではないか。そんな疑念がネギの頭の中を駆け巡っている。

対峙する歴戦の吸血鬼と見習い魔法使い。さよはその場でうつ伏せに倒れこんでいる。

その均衡を破ったのは、エヴァ。ネギに向かって武装解除の魔法を放つ。

ネギは咄嗟に手を前に突き出し、武装解除を抵抗<sup>レジスト</sup>した。

しかし、エヴァが魔力を込め過ぎたのかネギの突き出した腕の袖が砕け散った。始めから狙われていないさよは無事である。

これでネギが相手は魔法使いと確信する中、更なる闖入者が現れる。

「何や、今の音」

「ネギ、どうしたの!?!」

それは二回、魔法が衝突する音を聞き付けた近衛木乃香と神楽坂明日菜であった。

一般人である神楽坂明日菜が乱入したことにより、場所を移す為此の場を離れるエヴァ。

ネギは倒れているさよを木乃香と明日菜の二人に頼みエヴァの後を追う。

ある程度離れたら、エヴァは逃走手段を陸から空へと切り替えた。

それを見たネギは自身も杖に跨り空を飛ぶ。逃走劇においての決まり文句を叫びながら。

「奴のことが知りたいんだろ？ 私に勝てたら教えてやるよ」

エヴァからの返答は挑発。

そしてネギはその挑発に乗り、捕縛魔法を放つ。

そんな光景を少し離れた建物の屋上から見物する幾つかの人影が。

「皆さん酷いですよ。私が寒さに震えている横で、自分たちは暖を取るなんて」

「ホンマや。外は……まあここも外やけど、思ってるより冷えるんやえ」

「仕方ないだろ。寒かったんだよ」

愚痴っているのはさよと木乃香。それに答えているのは千雨。

二人は、明日菜がネギが心配だから見てくると走り去った後、千雨の《門》によってここに移動したのだ。

移動した屋上では千雨が論理魔術で環境制御を行い局地的に気温を数度上昇させていた。

「あの、彩輝様。これが見たかったですか？」

その三人の隣で質問したのは刹那。ちなみに朱織は寮に居ます。一人さっさと帰ったのです。

「あー、仕込みに本気とやる気を出し過ぎたな。おかげで本番が楽しめない」

彩輝と刹那が見ているのは、エヴァとネギの魔法合戦。

本来ならば、最強存在を弱小能力と策で倒そうと試みる王道展開を観戦する予定だったが、事前準備に盛り上がり過ぎてしまった。

現に、たった数日の間に寮では桜通りの吸血鬼の噂が広まっている。皆が長所を活かし、不得意分野を補いながら、一つのことを成し遂げる達成感。

はつきり言って、それで十分暇は潰せた。



そう。彩輝たちはスタートする前にゴールしてしまったのだ。

敢えて言おう。シリアスは、始まってすらいないと。

「エヴァも今は互角を演じてるけど、どうなるかねえ」

戦いに目を戻してみると、空中で戦闘を繰り広げていた二人は八階建ての校舎の屋上に降りていた。

新しい英雄として売りに出す為に子供の頃から色々なことを教えられているのではないか、とエヴァは考えていたわけだ。

普段があんなでも戦闘になれば性格が激変する殺人鬼もいますし。

だが、それは見当違いもいいところ。

蓋を開けてみれば、戦闘は教科書通り。魔法は魔力保有量に頼った力技。それもナギのように扱いきれているわけでもない。

情報操作でゴールした彩輝たちと違って、エヴァからして見れば、興ざめ以外の何物でもなかった。

この調子では暇潰しどころか、時間潰しにもなりそうにない。

故に吸血鬼は幕引きに向けて動き出す。

と言っても、本気を出して圧倒的実力差を見せつけては、学園の魔

法関係者全員を敵に回すことになるので加減が必要だ。

時間潰しという点ではそれも悪くないが、世間に死んでいると思わせ、気楽に生きている今の生活を壊すのは忍びない。

そんなわけで、簡単にネギと差を付けられる手段を取るため、エヴァは屋上に降りたのだった。

それを諦めたと勘違いするネギ。

何故こんな事件を起こしたのか。そして自分の父親のことについて問い質す。

どう聞いても後者の方が本命としか思えない。

「おいおい先生、もうこれで勝ったつもりなのか？ 茶々丸」

短く自らの従者の名を呼ぶエヴァ。

それに答えるようにして茶々丸が空から現れた。

当初と予定は変わってしまったが、観客の中に距離という概念を持ち合わせていない者が二名居るので、合流は念話で頼めばどうにもなるのです。

「申し訳ありません、ネギ先生」

茶々丸はネギとの距離を一瞬で詰め、杖を取り上げ、腕を首に回し持ち上げる。

勿論茶々丸は絞め過ぎないように配慮しています。

エヴァは何の抵抗も出来なくなったネギに近付き、

「これ以上、私の邪魔をしないと誓うならば、命だけは助けてやるよ」

と月並みな忠告をする。

ついでに睨みながら血を吸うのも忘れない。子供には殺気を飛ばすより単純な方が効果ありそうですし。

エヴァも段々面倒になってきたということでしょう。

そして、ネギが何か反応する前に、

「コラーツ！ この変質者どもーっ！！」

神楽坂明日菜が追いついた。

陸路の明日菜が空路の二人にどうやって追いついたんでしょうか。

それにここ八階なのに。体力バカだから……じゃ説得力に欠けますね。

明日菜は走って来たままの勢いでエヴァと茶々丸に飛び蹴りを入れる。

一般人だと思っていたが少し認識を改める必要があるな。

そう思いながらエヴァは障壁で蹴りを防ごうとするが、障壁は政治

家の口約束よりも簡単に破られてしまった。

「なっ!?!」

驚きは一瞬。

エヴァは明日菜の足を掴むと、勢いを殺すこと無く真上へ投げる。

明日菜は空中で体勢を整えて無事に着地。

エヴァが即座に対処出来たのは殺人鬼兄妹のおかげでしょう。あの二人、障壁とか無視して吸血鬼でも死ぬ攻撃しますから。

「あつあれ？ あんた達ウチのクラスの」

屋上という事もあり、転落しないよう配慮され真上に投げられた明日菜はネギを襲っていたのが自分のクラスメイトだと気付く。

「ふん。興が削がれたな。ネギ・スプリングフィールド、二度目は無いぞ」

これ見よがしにさっさと撤退するため、茶々丸はネギを明日菜に投げつける。

そして二人は屋上から飛び降りた。

残されたのは泣きじゃくるネギと展開についていけない明日菜の二人。

眺めていた彩輝は飛び降りたエヴァと茶々丸の下に《門》を開き、二人を自宅へ送る。

その後彩輝はパンパン、と二回手を打ち皆の注目を集める。

「というわけで、今日はこれで解散です。お疲れー」

「え！？ いいんですか、アレで」

思わず聞き返す刹那。

まあ、結果だけ見れば、大掛かりなことをした割に十歳の子供をビビらせただけという。

「え？ いいんじゃないの、アレで」

それに彩輝はほとんどそのまま文書を変えずに返す。

あくまでも中核を担うのはエヴァなので、本人が去った今彩輝たちがやるべきことは何も無いですし。

「……明日菜」

そんな中、ルームメイトの身を案じる木乃香の姿が。

木乃香は現代じゃ滅多にお目にかかれない貴重な体験してますから、魔法に関わっているのを見て心配になるのも仕方ないでしょう。

「木乃香、関わるなとか野暮なこと言うのはやめろよ。あれが自分

で選んだことなんだろうし」

それに木乃香が関係者であると思ったら、頼まれてもいないのに他人の家の事情に首を突っ込んできそうですしね。

ネギ自身、首が回る状態でもないのに。

「分かってるえ」

そして、女性陣は千雨の《門》で寮に帰り、彩輝もまた自宅へ転移した。

「飽きたな」

それが彩輝が家に帰って聞いた第一声であった。

彩輝はエヴァが座っているソファの向かいに座り尋ねる。

「気持ちは分かるが、どうするよ？ ジジイの頼みなんだろう？」

ええ。問題はここですね。学園長の依頼で動いているという事。

幾ら最高位の魔法使いといっても、飽きたなんて理由で依頼を放棄することは出来ない。

というか、契約を反故にするなんて矜持が許さない。

依頼内容は試練の相手をしろとのことなので、乗り越えさせるなり

挫折させるなり、もう一度何かしなければならぬ。

ネギがこのまま諦めてくれるのが一番楽だが、学園長にネギの話をされれば簡単に焚きつけられるだろう。

「それなら問題ない」

と深々とソファに座り、足を組んで無駄に尊大な態度のエヴァには何か考えがあるようです。

「確かに頼まれたとは言ったが、誰がそれを請けたと言った！」

なん……だと……。

……前提が、前提から間違っていたとは……！

「い、いやいやいやいやいやいやそれはない、それはないって、それはないだろうさ」

流石の彩輝もこれは予想を軽く上回っていたようだ。今すぐ狐面と唐傘を無意味に装備しそう。

「大体あのジジイ、この私に頼み事をするのに対価を用意していないとはどういっ了見だ」

あ、それは学園長が悪い。

「それに坊やにはちゃんと申したぞ。二度目は無い、とな」

え？ あれ茶番劇そのものが無いって意味だったんですか。

てっきり違う意味に捉えてました。

「ってことは、残る問題はネギだけか」

今頃ネギは、マギステル・マギなら悪いことは止めさせなければならぬ。でもそうすると自分の命が危ないと葛藤していることですよ。

あれ？ どうでもよくね？

そう気付いた彩輝。

他に特筆すべき点というと流布した噂ぐらいでしょうか。

これもどうにでもなる問題ですね。

ちなみに、この会話を聞いていた茶々丸の一言。

「悪というより、外道ですよ？」

「殺人鬼ですから」

「吸血鬼だからな」

それに即答する道を踏み外したモノたち。

「まあ、なんだ。茶々丸も突っかかれたら適当に相手をしてやれ。その内自然消滅するだろ」



しつこいようならネタばらしするか、とエヴァ。

というわけで、桜通りの吸血鬼は開幕から十数分で幕を下ろした。

今回の後日談。

エヴァとネギが接触してから三日が経ったある日。

この三日間の内に寮で桜通りの吸血鬼の話をする者は居なくなった。彩輝たちが噂の根絶に動いたというわけです。

しかし当然ながらそれで話が終わるわけもなく、この三日間ネギ・スプリングフィールドは架空の恐怖に震えていた。

茶番劇の翌日は登校拒否。明日菜に引っ張られて連れて行かれるも、授業に支障が出るのは当たり前。

当の本人はサボって授業には出ていないのだが。

だが、そんなネギに一筋の光明が差し込む。

……あ、すみません。光明とは暗闇を照らし出す光ですからこの表現は間違ってますね。

まあ兎も角、ネギに助言者が付いたのです。

日中に懐中電灯を使う無意味なものでも、映画館で光る携帯の画面

のように迷惑なものでも、助言者が付いたのです。

そして今日、オコジヨ妖精の助言者アルベル・カモミールに唆されたネギと明日菜は仮契約をし、居もしない敵を倒そうと動き出す。作戦としては、まず従者を二対一で叩くというもの。

ホント、傑作だよ。

放課後になると二人と一匹は一人帰路に着く茶々丸の後を追う。

茶々丸はいつものように猫に餌をやりに行くつもりで、生憎今日に限って一緒に行く人が居ない。

それを好機とみたネギたちは茶々丸が人気の無いところへ行くのを待つ。

「あ、兄貴。アイツ何か落としましたぜ」

ネギの肩に乗ったカモが、茶々丸のスカートのポケットから何かが落ちるのを見た。

茶々丸は落としたことに気付かず、そのまま歩き去ってしまう。

それを後から追っていた明日菜が拾い上げる。

「これって茶々丸さんのハンカチよね。あ、良い香り」

茶々丸の落とした物はハンカチで、それには芳香が付いていたようだ。

香りは風に乗り、ネギとカモにも届く。

「二人とも急がないと茶々丸って奴を見失っちまいやすよ」

カモに言われて二人は再び尾行を再開する。

その後茶々丸は段々人気の無い方へと歩いて行き、人気も人目も無い空地で足を止めた。

「いつまでもコソコソせずに、出ていらしてはどうですか？」

そして茶々丸は物陰に隠れているネギたちに声を掛ける。

子供がやる稚拙な尾行なんて茶々丸が気付けない筈が無い。

そう言われてしまうと、ネギと明日菜は出て行くしかなくなった。

物陰から出て茶々丸の前に姿を現す。

「ねえ、茶々丸さん。どうしてネギや木乃香を襲ったの？」

茶々丸に明日菜が問い質す。

「申し訳ありませんが答えることは出来ません。マスターの命令は絶対ですので」

続けてネギもこれ以上生徒を襲う真似は止めるように言うが。

「それは無理です」

茶々丸に即答されてしまう。

止めれる筈が無い。元より始まってすらいないのだから。

「無駄だ兄貴！ 話なんて通じる相手じゃねえ！」

「そうですねネギ先生。道を阻む物があれば黙って排除すればいい。出来ないのなら、黙って私に排除されなさい」

茶々丸自身も話し合いを拒否。

猫の餌を買いに行くのを邪魔するのであれば如何なる手段も行使するという意思表示ですね。

仕方ない、と説得を諦めてネギは明日菜に魔力供給をする。

明日菜は予めネギに言われていた通り茶々丸の動きを止めようと近接戦闘を挑む。

戦闘と言ってもやってることはデコピンのやり合い。

だが、明日菜は魔力供給によって身体能力が上がったのに加えて、訓練された人間のような動きで茶々丸と互角の戦いを演じる。

そして明日菜が茶々丸の動きを制限している内にネギは詠唱を完成させた。

二人と一定の距離を取りながらネギは明日菜に合図を送り、茶々丸に向けて『魔法の射手』を放つ。

数は十一。

その全てが茶々丸へ殺到する。

至近距離から放たれた追尾型魔法は茶々丸を捉え 直撃した。

重要な機構を守るため片腕を犠牲にするも、残りの弾が足に被弾。

片腕片足を失った茶々丸はその場に転倒してしまう。

「マス……ター……」

地に伏した茶々丸の呟きに答える声がネギたちの後ろから聞こえた。

「らしくないな、茶々丸」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの登場だった。

それを見て焦るネギと明日菜。

今二人が考えていることはエヴァの報復だろう。

だが、残りの一匹、カモだけは違う考えのようだ。

「兄貴。こうなっちまったらエヴァンジェリンもやるしかねえ！」

カモに言われネギはエヴァに杖を向ける。

「楽だなあ、坊や。そうやって他人に選択を委ね、言われるがまま

動くのは。だが、考えることを放棄して生徒を襲うのは悪いことではないのか？」

今までカモに言われた通り、茶々丸を襲い、現在進行形でエヴァに杖を向けているネギは目を逸らす。

「自覚はあるのか？ なら坊やは悪と分かっているながら正義を語って」

「僕は！ 僕は悪くない！」

エヴァのセリフを遮って、ネギは自分の考えをぶつける。

あ、ちなみにこれがネギ・スプリングフィールドの初めての括弧付きセリフだったりします。

断髮式をやるつもりが、トマス・モアの最期のようになっても知りませんよ。

「悪いのは、木乃香さんや生徒を襲っている、貴女だ！ ラス・テル・マ・スキル・マギステル」

そしてネギは詠唱を開始する。

ネギが習得している中で最も強い魔法を放つ為に。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

エヴァも同様に詠唱を始めると同時にネギの詠唱を阻もうと、直線ではなく円を描くように距離を詰めるが、それを明日菜が邪魔す

る。

「『雷の暴風』」

明日菜が足止めをしている内に呪文を完成させたネギはエヴァに向けて魔法を放つ。

「姐さん！」

「うん！」

エヴァを引きつけていた明日菜はカモの合図により、距離を開ける。

「『闇の吹雪』」

『雷の暴風』の射線上にいるエヴァは数瞬遅れて同種の魔法を打つ。

ぶつかり合い、拮抗する魔法。

それも徐々にエヴァが押すようになり、劣勢になるネギ。

「ああああああああ」

ネギは己を鼓舞し、残りの魔力を全て『雷の暴風』に注ぎ込む。

腐っても英雄の息子。保有魔力量は多く、自分の命が懸かっていると思っ込んでいるネギは際限なく魔力を込めた。

そのおかげかエヴァの『闇の吹雪』を上回り、そのまま押し返してエヴァに直撃した。

「これで僕の勝ちです！」

勝利宣言をするネギ。

対して余波で茶々丸の傍まで飛ばされたエヴァは、茶々丸を抱えその場を去る。

そしてエヴァを打倒し、舞い上がった二人と一匹に、茶々丸の去り際の一言が聞こえることは無かった。

「ジャスト一分です。幻想は見れましたか？」

都合がよ過ぎる？ 当然です。何故ならこれは三日前のエヴァの指示通り、茶々丸が適当に相手をした結果ですもの。

近衛彩輝が聴覚から、今は亡き立花五露が視覚から対象を支配したように、錬金術師・絡繰茶々丸は嗅覚から干渉した。

全てはハンカチの香りを吸ってしまった瞬間から始まっていたのです。

いえ、終わっていたと言うべきか。

「すごいぜ兄貴！ 真祖の吸血鬼に勝っちまうなんて！」

盛り上がっているとこ悪いけど、そいつは全部、一分間の儂いユメなんだ。

こうして一連の茶番劇は各々が納得する形で、終結したのでした。



めでたしめでたし？

## 第四十話：警備

茶番劇が終わって休みが明けた月曜日。

月の恩恵を受けている吸血鬼や魔術師でもこの日は好きになれないらしい。

金が好きという人はどこに行っても多いのと同じように。

そんな大多数と意見が重なる彩輝はエヴァと茶々丸と共に登校中。

「……『シマノライト熾光』でも創ろつかなあ」

なんて物騒なことを呟いているあたり足取りは重い。

「お願いですから創らないで下さいよ」

律儀にも茶々丸が呟きに反応してくれる。放っておいたら本当に創りそうですし。

ちなみに『熾光』とは一ヶ所に五百人が集まると空から降ってくる全てを焼き尽くす光のことです。

人類虐殺なんて余裕でやってのけます。

詳しくは『イリーガル・テクニカ』をご購読ください。……あれ？  
宣伝？

それはともかく、身も蓋も無い応酬を繰り返している内に彩輝たち

は校舎に到着。

下駄箱で靴を履き替え、教室に向かう最中に後ろから声を掛けられた。

「エヴァンジェリンさん！」

エヴァが後ろを振り向くと、こちらに走ってくるネギと明日菜、明日菜の肩に乗っているカモの姿が。

ネギが追いつくまで立ち止って待ってやる彩輝たち。

「坊やたちか。何の用だ？」

二人と一匹が目の前に立つと、エヴァが問う。

そしてそれに答える明日菜。

「茶々丸さんがロボットだからってこの前のは流石にやり過ぎたなって思い直したのよ。ゴメンね茶々丸さん」

「はぁ……」

それに茶々丸は生返事をする。

何故自分が謝られているのか茶々丸には全く身に覚えがありませんから。

「それでエヴァンジェリンさん。父さんのことを、サウザンドマスターのことを教えて下さい」

そんな茶々丸の様子には気付かず、ネギは本題へ入る。

しかし、突然そんなことを言われてもエヴァは当惑するばかり。話が噛み合わないなんてレベルじゃありませんね。

確かにネギを挑発するとき、自分に勝てたら教えてやる、みたいなことを口走った記憶はエヴァにもある。しかし、それは前提としてエヴァが負けていなくてはならない。

エヴァからして見れば、最初の魔法合戦以降、会話どころか接触すらしていないのに、どうしてここまで話が飛んでいるのか理解出来る筈が無い。

取り敢えず、ネギが勘違いするような事を何かやっただろうかと回想するが、該当無し。接触すらしていないので当然なんです。

その沈黙を黙秘していると捉えたカモは、

「やいやい、エヴァンジェリン。負けたんだから潔く喋っちまえよ」と煽る。

本気で困惑するエヴァ。小物に煽られたムカつきよりも困惑が勝った瞬間だった。

（おい。何故私が負けたことになってるんだ？）

エヴァは念話で彩輝と茶々丸に尋ねる。

(いや、それよりも。俺はオコジョが喋ったことに驚いた方がいいんだろうか?)

ああ、そういえばそうでした。貴方教室の外でネギと対面するの初めてでしたね。

当たり前のようにエヴァの隣に立っていますが、ネギからして見れば彩輝は一般人でないとおかしい。

「あ、忘れるところだった」

と今までの流れをぶった切って口を開く明日菜。

「はい、これ。茶々丸さんでしょ?」

明日菜が手にしているのは一枚のハンカチ。正直今渡さなくてもいいと思います。

ハンカチを受け取る茶々丸。

(あ。この間ネギ先生たちに尾行されたので幻術をかけたんです)

しかしそのハンカチで、何故彼らが意味不明なことを口走るのかが理解出来た。

(それで? どんな幻術をかけたんだ?)

(マスターと私が負けるような内容だったかと)

どうでもいい記憶として処理してしまう程、適当にかけたんですね。

まあこれで原因説明は出来ました。後はエヴァがどうするかですが。

「僕が勝つたら教えてくれるって約束だったじゃないですか！ ちやんと勝つたんですから早く教えて下さい！」

とネギは主張します。逆に漸く状況が呑み込めたエヴァには少し頭にくるものが。

まあ今のネギを例えるなら、落とし穴に掛かったくせに、落ちたことにすら気付いてませんから。更に穴の底から、上から目線で話されている気分。

物理的にも精神的にもお前の方が下なのに。

と言っても、果たしてこれが、懇切丁寧に全てを説明してあげたところで事実と認めることが出来るのだろうか。

出来るわけじゃないですねえ。『嘘だ！』とか叫び始めたら鉦をプレゼントしてあげましょう。

「……で、奴のどんな話が聞きたいんだ？」

どうやらエヴァの中で、事実を教える・教えないを天秤にかけて、教えないに傾いたようです。

時間は有意義に有効活用しないと。ナギの情報なんてプラスマイナスゼロですし、言っても言わなくても同じですし。

なにより無価値で無意味なものさっさと終わらせた方がいいに決

まっています。

ナギの情報を教えなかったらしつこく付き纏ってきそうという理由もありますね。

そして、これが後々ネギの慢心に繋がったりしますが、その結果ネギがどうなるかと彩輝たちには無関係。

「僕は父さんを探してるんです。その為の手掛かりを何か知りませんか？」

ネギは自分が最も聞きたいことを口にする。

……こうして聞くと、公式にも死亡とされている父親を探しているだなんて、妄言以外の何物でもありませんね。

「手掛かりねえ。奴は十年前に死んだと言われているが」

取り敢えず、無難な回答を返すエヴァ。

「実は」

と、そこからネギが自身の過去について軽く話し始めますが。

（あ。やっぱり生きてるっばいぜ。ところで茶々丸、今日の夕食はラザーニエにしないか？）

（分かりました。では帰りにモッツァレラチーズを買っておきますね）

(おい。ニンニクは控えるよ)

話半分どころか三割程度も聞いてませんよ、この人たち。

「それで、エヴァンジェリンさんは何か知りませんか？」

話終わったネギは改めてエヴァに尋ねる。

「ふむ。白ワインか」

「え？」

うっかり念話の内容を口に出しちゃいましたね。

「気にするな。こつちの話だ。……そうだな、京都に奴が使ってた家があった筈だ」

エヴァはさっさと求められた情報を提示する。

京都と聞いて舞い上がるネギ。舞い上がるというか、はしゃぐネギ。

千年間怨念と共に過ごしてきた古都を舐めると痛い目に遭いますよ。

そして必要最低限の情報を提供したエヴァたちはその場を離れた。

最後のはしゃぎっぷりを見て「月夜ばかりと思うなよ」とつつい漏らしてしまったエヴァは悪くないでしょう。



その後、特にイベントも無く時間が過ぎ去り、翌日の夜。

実はこの日、学園都市全体のメンテナンスの為、停電になっていた  
りします。

学園結界が電力で賄われているのでメンテ中の二十時から二十四時  
の間は無防備になり、警備員の仕事がいつのも倍に跳ね上がった  
りする筈なんです。

「完全復活の『闇の福音』が居る今、低級や低級に近い中級は尻尾  
巻いて逃げるんだよなあ」

と森の中で彩輝が呟く。

態々地雷原を突っ走ろうとする馬鹿はいませんからね。日頃から森  
の奥に住みついている奴なんて、本能に従い息を潜めてじっとしてま  
すよ。

それでも術者に使役されている妖怪や悪魔も居るんで零にはならな  
いんですけど、自分よりも圧倒的に強い存在のプレッシャーを感じ  
つつ、十全に力を発揮しろと言われてもねえ。

「ところで彩輝様。どうしてここに居るんですか？」

そんな中、刹那が彩輝に問いかける。

「どうしてって、俺がここに居たらマズイのか？」

「彩輝様の担当区域ここじゃないでしょうー！」

そう、本来なら学園全体の結果がなくなっているんで、チームでもない人が一ヶ所に集まれる筈が無い。

中でも彩輝やタカミチのような実力者は一人で、広く重要な区域を割り当てられているのですが、仕事してるようには見えません。

「大丈夫だって。なら刹那、俺がどこの区域担当か言ってみる」

しかし、本人は問題ないと主張。

「どっつて……えっと……あれ？」

彩輝に言われて、刹那は答えようとするが、どこだったか思い出せないことに気付く。

「そんな感じで敵味方問わず、意識から欠落させてるから」

どうやら近付いてくる敵を相手にするのではなく、近付こうという意思そのものを相手にしているらしいです。

でも結局これって、他の人に仕事を押しつけてるだけだから近場の人は負担が増えるでしょうね。

その同僚からすれば真面目にやれ、と言いたくなるかも知れませんが、侵入者数0という結果を残してるから強く言えない。

例え当人がサボリのような行動をしていても。

ホント、性質が悪いです。いえ、皆殺しにしないだけ評価するべきなんでしょうか。

「で、他にすることもないから刹那の勇姿を見に来たわけだ」  
手伝いに来たわけじゃないらしい。

一種の授業参観みたいで、刹那からすればやり辛いことこの上ないですね。

「だ、だったら、もう家に帰られてもいいんじゃないですか？」

刹那は帰宅を促そうとしますが。

「そろそろ京都に行くからな。最後の追い上げどうしようか決めかねてるだけだから気にするな」

すごく気になることを言われてしまいました。

「あの、明日はお嬢様と神楽坂さんの誕生日プレゼントを買いに行ったり、修学旅行の準備をする予定なんです」

「大丈夫大丈夫。今の状態でも半月前に知り合った狂刃きやうじんと互角にやり合えると思うから」

でも半月もあつたら俺と戦う為だけに『弐の太刀』とか修得してさうだなあ、とか彩輝は考えていた。

居た場合は、木乃香と同じ班の刹那との接触回数が多くなるのは間違いないですね。

ちなみに木乃香と刹那を除くメンバーは全員同じ班です。

有事の際、この班だけは担任の指示を無視し、各々好き勝手に、事態の收拾に向けて動くでしょう。

「……というか、その結界をここにも張ってくれないかな」

横から口を挿んだのは龍宮。

刹那と組んでいますから今まで話に入らなかっただけでちゃんとこの場に居たんです。

「ゴメン龍宮。決してわざと話を振らなかったわけじゃないんだ」

「そう改めて言われると、喧嘩を売られているようにしか聞こえないんだが」

ポーズとして銃に手を伸ばす龍宮。

「至近距離じゃ『構える・狙う・撃つ』とスリーアクションが必要な銃よりも、ワンアクションで相手を輪切りに出来る糸の方が有利な件」

突然そんなことを言っても貴方はプロフェッサーにはなれませんよ。せいぜい、マスター止まりだ。

……いや、赤い風にはなれるかもしれませんが。

そしてそんな時に漸く仕事をする機会がやってきた。

「お。何か来たな」

彩輝が視線を上げる。

森の中なので葉が生い茂り視界が良いとは言えないが、侵入者は殺気を放ちながら空路で近付いてくる。

殺気を放っている時点で図書館島の蔵書や工作が目的ではないらしい。

誰か個人的に恨みでも買ってるのか。だとしたらジジイかタカミチだろうな。

そう考えてた彩輝だが、侵入者は通り過ぎること無く、木々を斬り裂いて三人の前に降り立った。

ソレは怒りに顔を歪め、背中からは一對の黒々とした翼を持った悪魔だった。

「貴様さえ……貴様さえ居なければああああああ！」

悪魔が距離を詰めようとするが、両手にハンドガンを持った龍宮が発砲し初動を阻害。

その隙を突いて刹那が懐に入り込み、布都御霊を振るう。

悪魔は鋭く伸びた爪で刀を弾き、バックステップで刹那から距離を取る。

「邪魔をするなああああ！」

と激昂するが、目の前には既に瞬動で距離を詰めた刹那の姿が。

再び爪を振るおうとするが、二度の銃声。

退魔の術式を施された二つの弾丸は悪魔の両腕に命中し、

「神鳴流奥義『斬魔剣』」

太刀を身に受けた。

胸を両断され崩れ落ちる悪魔。

「京都行っても大丈夫そうだな」

宣言通りに仕事を一切しなかった彩輝は、悪魔があちらへ還らないよう結界を張る。

そして歩いて刹那に近付き、布都御霊を借りる。

「彩輝様、知り合いなんですか？ さつきも叫びながら彩輝様に」

「いいや。全く知らん。悪魔の知り合いなんてソロモンぐらいしか居ないって」

確かに彩輝とこの悪魔は初対面だが、因縁という名の縁がある。

「でもまあ、一応殺しておきますか」

そして、手に持った布都御霊を悪魔の死の点へと突き刺す。

彩輝と悪魔を繋いでいた縁も今し方切れた。

覚えている人がいないと思うので、念のために説明しておきますと、この悪魔はプロローグで会話に出てきた部下……既に元部下ですね。彩輝が転生する理由になった物語的には重要人物なんですけど、行動理念が逆恨みのような三下ですし、相応しい最期だったのでないかと。

その後は特に問題も起こらず、学園結界が復旧するまで三人は時間を過ごした。

## 第四十話：警備（後書き）

魔法世界編から外伝まで構想練ってみたんですが、出番が無く、ちよつど墮天してるので、

元部下「そんな魔法で大丈夫か？」

ネギ「一番いい魔法を頼む（キリッ）」

とか考えてたんですが、つまんない・シャダイネタ流石にくどいと自重した結果こうなりました。



## 第四一話：修学旅行初日

四月二十二日火曜日。

今日は学校生活でも重要なイベントである修学旅行が始まる日なのであった。

今はまだ早朝で静かだが、後三時間もすれば学園は慌ただしい空気に包まれるでしょう。

学園都市というだけあって、対象の中学三年生だけでも千人近く居るんじゃないですかね。

普通なら受験を控えた三年で修学旅行に行く学校なんてほとんど無いと思いますが、これはエスカレーター式の学園ならではの言いえるでしょう。

そんな中、彩輝宅では。

「一体どうされたんですか、マスター？」

「何がだ？」

「まだ……五時半ですよ」

見て下さい。闇の眷属がものすごく規則正しい生活をしています。

主の意図を察した茶々丸は暖かい目でエヴァを見る。

「おいやめる。まるで私が遠足前で眠れなかった小学生のようではないか」

とエヴァは言いますが、その通りじゃないんですか。

集合は大宮駅に九時ですから後三時間半どうやって過ごすんです。う。

「取り敢えず茶々丸、ハウルを起こして来い」

真っ先に家主が犠牲になりました。

「ケケ。ドーナツテモ知ラネエゼ」

チャチャゼロの言うとおり。一人集合時間に遅刻しても責任は負えませんよ。

しかしエヴァはそんなこと気にも留めず、再度茶々丸に指示を。

茶々丸は何かあれば全てエヴァの所為にするつもりで彩輝の部屋へ向かう。

『……アポを……伝手……だろ………そ…一日』

茶々丸が扉の前に立つと、予想外にも話声が。

こんな早朝から誰かを招く筈が無いので電話でしょうか。

それでも五時半ですよ。帰宅部で早起きする理由なんて無い彩輝が起きているなんて驚きです。

まさか彩輝も修学旅行を楽しみに……すみません、流石にこの理由はないですね。

彩輝にとっては唯の里帰りみたいなものですし、その気になれば今すぐ世界一周に出掛けられますから。

それは兎も角、茶々丸は彩輝の部屋の扉をノックする。

ガチャリ、とドアノブが回り、部屋から彩輝が出てきた。

電話は終わったようですね。

「早いな茶々丸。どうかしたのか？」

扉を開けた彩輝が尋ねるが、それはこっちのセリフです。

「いえ、マスターが起こせと言われたので。それより彩輝さんこそどうかしたんですか？」

「やっぱり突貫でやるには準備が足りないなあ、と実感していたところだ」

一体何の準備なんでしょうね。碌な事じゃないのは確かでしょうが、過激派やら強硬派やらを潰すだけにしては随分慎重なようですし。

「そうだ茶々丸。ついでに聞くけどICレコーダー的な物を持つてるか？」

「探せばあると思いますよ」

「あつたら貸してくれ」

「分かりました」

そして茶々丸はそのままキッチンへ移動する。一日の始まりですから、まずは朝食を取らないと。

彩輝はエヴァとチャチャゼロの居るリビングへ。

「おはよう、吸血鬼」

それは皮肉でしょうか。

「ふん。私に起床時間で負けるとは弛んでるぞ」

「ちよつと奇勝の為の奇策を練っていたからな」

言い返しながら彩輝はテーブルに着く。茶々丸が朝食を作り終えるまでそんなに時間は掛からないでしょうし。

エヴァもそう判断したのか、彩輝の向かいになるように席に着いた。

今日話題に上がるのはやはり修学旅行についてですね。

「で、エヴァは自由行動の日どこに行くとか考えてあるのか？」

「二日目は京都だな。一日目で回れなかった場所に行く」

吸血鬼が神社寺院巡りというのも変な感じがしますが、気にしたら負けです。

というか有名所の場合、境内に入った瞬間に総攻撃を受けるんじゃないですかね。

「分かってるだろうけど、ちゃんと偽装しろよ」

念のために彩輝が忠告を。

「分かっている。折角の京都観光だからな。楽しむに決まってるだろう」

思っていたよりもエヴァはこの修学旅行を楽しみにしていたようです。

「あ。そうそう。チャチャゼロも連れて行くからな」

と彩輝が何でもないかのように付け足した。

「……………正気か？」

エヴァが聞き返す。

しかし、曲がりも何も貴女の従者でしょうよ。正気を疑うのは酷くありませんか。

「何ダ？ 殺ッテイイノカ？」

……………不安になる発言ですが、殺人鬼が欲求を自制出来て、殺人機に

衝動を制御出来ないなんて道理は無いと信じます。

そしてそんな時に茶々丸が朝食を持って現れた。

相変わらず作るのが早いですね。それでいて手間が掛かっている。

茶々丸が手を抜くのは囲碁や将棋の時だけです。

悪い意味で言っているのではなく、一手交代の囲碁や将棋で無駄な手はなるべく省くという意味で。

元々手を抜くって言葉は囲碁が起源らしいですよ。

とまあ、ちょっととした雑学は置いといて、茶々丸は運んできた朝食をテーブルの上に並べる。

それに舌鼓を打つ彩輝とエヴァ。

食べ終わると、流石に茶々丸ばかりにやらせるわけにはいかないと、下げ膳は彩輝が。

ちなみにエヴァは上げ膳据え膳の状態。

「彩輝さん。ありがとうございましたよ」

「サンキュ」

食器を洗い終わると、茶々丸からICレコーダーを受け取る彩輝。

時刻はまだ六時を過ぎた辺り。後三時間の時間潰しが必要です。レ

ツドマーキュリーの解体作業でもやりますか。

本当にやったら六名は『さっぱり分からない。実に面白くない』といった感じで茶々丸と千雨の独壇場になるんでしょうけど。

というわけでまだ面白みがあり、建設的な暇潰しをしようとしてリビン  
グに移動した彩輝はテーブルの上にルーン文字が書かれたカードを  
取り出した。

「何だ占いでもやるのか」

横から見ていたエヴァが口を挿む。

「今後のことについてやるのかなと」

彩輝は二十四の文字に占い用の空白のルーンを足した二十五枚の力  
ードをシャッフルする。

裏返したカードを扇状に広げた時にエヴァが適当に一枚引き抜いた。

「あ。おい、エヴァ」

「別にいいだろう？　これは……ハガラスだったか」

エヴァが引いたカードはアルファベットの『H』に近い文字、ハガ  
ラズが書かれてあった。

これに逆位置などは無く、意味は嵐とか、災難とかですね。

例を挙げると、避けることの出来ない不運、急なアクシデントで計

画が頓挫など。

前途多難の予感です。デカケルノヲヤメナサイと言われても仕方ありません。

「……成程ねえ。これが出るのか」

彩輝は納得しているようですが。

「……何か、スマン」

エヴァが素直に謝りました。

まあ、横から適当に引いたのが、タロットで破壊の象徴である『塔』よりも絶対的な力を持つ文字でしたからね。

「いやいや、礼を言うぜ。順調に進みそうにないことが分かっただけでも収穫だろう」

あくまでもポジティブに捉える彩輝。

早速結果を見て、色々とこれからのことを算段しているんでしょう。

「む。そうか」

本人がこんな感じなので、エヴァもそのまま流すことに。

そしてそれから一時間程経った頃、「ちょっと出てくる」と言い残し、彩輝はどこかへ出掛けて行った。



## 学園長室

修学旅行と言っても一・二年生は通常通りに授業があるわけで、引率の教師では当然ない学園長はいつものように学園長室に居た。

しかし、仕事内容まではいつもと同じわけにはいかないようです。

今年の修学旅行では英雄の息子であるネギ・スプリングフィールドの経験値稼ぎ及び業績作りの為に不仲な組織に特使として派遣するのですから。

相手の組織の長が自分の義理の息子だからって舐め過ぎでしょう。

修学旅行のついでに派遣するなんて、喧嘩を売ってるようにしか聞こえませんよ。

普通の対応をするなら会う事自体拒絶されるでしょうね。

そのために色々と根回しをしていた時だった。

唐突に、ドガン！ と派手な音を立てて、学園長室の扉が蹴破られたのです。

「ジジイ居るかー」

入って来たのは彩輝。建て付けが悪くなったとかは気にしない。

「な、なんじゃ彩輝!？」

突然部屋の扉を蹴破られ驚く学園長。

蹴破った理由はキセルと携帯を持っていて両手が塞がっていたからなので、深い意味はありません。

彩輝はそのまま来客用のソファに座る。

そして、一段落ついたのか彩輝は携帯を折り畳み、制服のポケットに入れた。

後少し早く終わっていれば、扉は犠牲にならずに済んだのに。

しかし彩輝はそんなこと気にも留めず、さっさと用件を切り出す。

「なんかネギを特使にとかいう妄言を小耳に挟んだんだが、本気が？」

「うむ。本気じゃが、それがどうかしたのかの？」

どうかしたのかと聞かれれば、『大問題だ』としか答えようがありません。

常識を兼ね備えた教職員の方で待ったを掛ける人は居なかったんでしょうか。

「まあ、色々と言いたいことはあるが、ネギは親書を渡すだけのパシリとして扱えばいいわけ？ それとも何か権限とかは持ってるの？ それによって今後の対応が変わってくるんだけど」

それを聞いて学園長は自分の耳を疑った。

十分耄碌なさっているのであまり意味は無いような気がしますが。

兎も角、さっきの言葉は聞きようによっては自分の計画に協力してくれるニュアンスを含んでいて。

「それを聞いてどうするんじや？」

現在魔法に最も通じているであろう者が協力者になるなら、それは心強いなんてレベルではなく、学園長にとっては前向きな返答を貰いたいところだろう。

「そろそろ西と東の対立って構図が鬱陶しくなってきたんだよ」

特に極東最大の魔力保有量を誇る木乃香なんてどんな理由で担ぎ上げられるか分かりませんからね。

経歴がバレれば彩輝を引つ張り出そうとする動きも出てくるでしょうし。

ある程度穏便に済む今の内に片を付けたいと考えても不思議ではありません。

学園長もそういう風に考えます。

「確認のために聞いておくが、東と西の仲を取り持つ為に協力してくれるんじやな？」

「西と東の対立が終わるようにはするが、協力はしない。こっちは

こっちで勝手に動くから。まあ、結果だけを見れば協力していたように見えるかもしれないがな」

ああ、勿論どちらか陣営を皆殺しにして解決、なんてことはしないから、と最後に付け足した。

「……ふむ」

暫しの間黙考して、学園長が出した答えが。

「分かったぞい。修学旅行中に起こったことは全てネギ君に一任しよう」

最高責任者のこのセリフを聞けば大多数の教職員が新たな職場を探し始めるでしょうね。

ネギの考えを尊重して、その結果ミスをしても、自分が全ての責任を取ろうなんて甘い考えをしているに違いありません。

外どころか内にまで敵を作って学園長は一体どこに行こうとしているのだろうか。迷走だけで済めばいいんですが。

そしてその答えに彩輝は納得したように頷く。

「オーケー。それならこっちも自由に動き回れるわ」

学園長の回答に満足したのか、彩輝はソファから立ち上がり、部屋から出て行った。出る際には、つい数分前に建て付けが悪くなった扉を閉めて。

集合時間にはまだ余裕があるので、一旦家に帰ったんでしょう。

残ったのは彩輝が燻らせていた紫煙。

「…………ふう」

そんな中学園長は深く息を吐いた。

これでネギ君のことは一先ず安心じゃな、と学園長は考えるが、自分の孫の性格ぐらいはちゃんと把握しておくべきでしたね。

貴方のお孫さんは事実を語りますが、それと同じ数だけ真実を騙りますよ。

そして貴方は近衛彩輝の身内の定義に入っていない。

はたしてこの判断が吉と出るのか凶と出るのか。

いえ、吉も凶も両方出るので、その差がどれだけ広がるかということが学園長にとっての問題ですね。

「念のため瀬流彦君に連絡しておくとするかの」

机の上に置かれている電話機の受話器を取り、瀬流彦の携帯電話へと繋げる。

「おお瀬流彦君。ワシじゃ。実は孫の彩輝のことでの」

こうして、近衛彩輝と七人の仲間たちの活動制限が徐々に消えていったのです。

一時間程前にエヴァが引いたハガラスのように嵐が巻き起こるのも  
時間の問題でしょう。

## 第四二話：清水寺観光

集合時間が来た大宮駅。

駅に集まっているのは、A・D・H・J・Sの五クラス。

こうして並ぶとはつきりしますが、やはり一番騒がしいのはA組のようです。こんな場所でも肉まんなどを売って商売している人が居るくらいですから。

そんなA組の中でも、周りから一步引いているのが六班の面子。

班員は木乃香と刹那を除いた彩輝の家に集まる面々。ちなみに班長はさよ。おそらく責任感とかその辺を考慮したんでしょう。ナイスな人選としか言いようがありません。

そして、しずな先生の号令で生徒たちは各クラスの班ごとに点呼をとり、駅のホームへ向かいます。

「前にも言ったような気がするけど、京都に着いたら一波乱あるの  
で、各自最低限の準備は整えておくように」

新幹線が到着するまでの時間で、これから起こるであろう出来事に備えて注意する彩輝。

「ああ、過激派とか派閥争いのことか。それにしても、あるの  
で、何か起こるのは確定なんだな」

その説明を聞いて一番最初に反応したのは千雨。

どっかの親子が過激派の不正の証拠を握ったり、一部の人を九州地方に派遣したりしましたからね。

目先の利益しか考えない浅慮な方はもう詰みの気分なんじゃないでしょうか。

派閥全体で考えれば王手を掛けられただけで、詰んでいるわけではないんですが。

トカゲの尻尾切りといった形で無能な人に全ての責任を擦り付ければ緊急回避は出来るわけですし。

「そうそう。過激派やら強硬派やらの対応は一ヶ月前に請け負っちゃったからな」

そういえば、三二話でそんな約束してましたね。

表向きは修学旅行、裏の目的は老害の駆除ということですか。

その真意がどこにあるのかは別にして。

そうこうしている内に駅のホームに新幹線が到着。修学旅行参加者全員は開かれたドアを通り新幹線に乗り込んだ。

新幹線の座席は班別になっているようで、班ごとに座っていく。まあ、それも少し経てば自由に移動するんでしょうが。

彩輝たちは座席を回転させ、班員全員が向かい合うように座る。



「あの。ふと思ったんですけど」

ときよが口を開いた。

「木乃香さんを狙うってことは彩輝さんを敵に回すってことですよ  
ね？」

「うん。そうなるね」

彩輝が即答します。

「そんな人居るんですか？」

過剰表現の戯言のように聞こえますが、しつかりと実力差を認識している人たちからはこう思われても仕方ありません。

「実は俺、実家じゃ神鳴流と虚刀流しか使ったことないんだ」

暗に実力も本気も見せたことが無いと告げる。

そういえば、去年の夏休みにお亡くなりになられた 七耀 の方々も彩輝のことは唯の剣士としか知りませんでしたね。

そして、新幹線は時刻表通りに東京駅に着いた。

一団はここから新大阪行きの新幹線に乗り換える。

「さて、することもないし、トランプでもやる？ イカサマ有りです」

もう京都のことで話すことは無いのか、こういった場合における暇

漬しの代名詞を提案する彩輝。

提案に乗ったのはさよと千雨、茶々丸の三人。

朱織は夢現といった状態で、エヴァは窓の外を流れていく景色の方に関心があるらしいです。

「それで何をやるんだ？」

「普通なら大富豪とかだろうけど、敢えてドロージャーを推してみる」

「賭けは無いですよ。熱くなってJRの人に迷惑掛けるわけにはいきませんから」

万が一にも新幹線が脱線なんかしたら洒落になりません。

被害のことを考えたのか、意義を唱える者はこの中にはいませんでした。

しかし、ギャンブルとして行われることが多いゲームを賭けも無く、ただ役を揃えるだけで面白いのだろうか。

そんなことを考えた貴方。甘いです。マジステル・マジになりたいとか言ってる魔法使いの人生設計並みに甘いです。

「では私が配りますね」

と手に香水を吹き付けた茶々丸がトランプの山をシャッフルする。

し終わると、全員にトランプを配るが、この時誰にも聞こえないように千雨が「《材質変換 》」と呟いて、手元が一瞬光りました。一見何もしていないように見えるさよの手の中では配られていないはずの六枚目のカードが存在しています。

茶々丸は幻術をかけ、千雨はトランプの絵柄を変え、さよは無からカードを創り出していた。

そして彩輝は自分の手札に細工しない代わりに、そのほとんどの魔法をレジストして妨害する。

三人は手軽で手早い術を選び、手を変え品を変え、妨害の網を潜り抜けるよう、時にはお互いに妨害を仕掛けるなど試行錯誤を繰り返す。

揃った役の数だけ成功した魔法があり、その乗数だけ失敗した魔法があるということです。

遊び？ いいえ、これも一種の魔術戦闘と言えるでしょう。

「お前ら……一体何をやっているんだ？」

外の風景を見ていたエヴァも思わず隣で起こっている光景にツッコんでしまったようだ。

気持ちは分からなくもないです。見た目の割にやっつてることのレベルは高いですから。

そんな時、車内の数名が悲鳴を上がった。

そちらに目をやると、水筒などの容れ物から大量のカエルが飛び出したらしい。

「……これがハウルの実家の妨害なのか？」

呆れ果てた目で一連の出来事を見るエヴァ。

「……言うな。算段ぶち壊して実行犯とその関係者を皆殺しにしたくなるだろ」

妨害というか子供の悪戯ですよね。

たった一人の女子を捕まえる為だけに爆破予告までやった鬼灯一門に比べると、見劣りなんてレベルじゃありません。

そして車内が混乱している間に通路の真ん中を一羽のツバメが飛行する。

おそらく呪術協会の人間が放ったと思われる式。

まあ、彩輝の横を通り過ぎようとした瞬間に、クシヤリと握り潰されましたけど。

結局ツバメの目的は何だったのか、明確になる時は永遠に来なくなってしまうました。

「その式、どうするつもりなんだ？」

潰した時に出来た皺を伸ばしている彩輝にエヴァが問う。

「いつもなら、ここからパスを辿って呪詛でもやってやるどころだが」

言って、彩輝は術者の魔力を自分の魔力で塗り潰した。

「行け」

その指示に従い式は天井を滑るように移動する。

ほんの一瞬で他人の式を乗っ取りましたよ、この人。いつもの如く理不尽が人の形をしたような奴です。

しかし、その一瞬の隙を突いて、

「ロイヤルストレートフラッシュ」

三人が役を揃えました。全員がスペードで統一している点には目を瞑ってあげましょう。

「スリーカードだよ畜生」

開かれた手札を見て、三人は今にも『どやあ』と言いたげな顔をす

る。これ以降、魔法の成功率がぐんと下がったのは言うまでもないだろう。

その後は特にこれといった妨害という名の悪戯もなく、一同を乗せた新幹線は京都駅に到着した。

京都駅からまず最初に一同が向かったのは清水寺。

世界遺産にも登録されているこの場所は京都における修学旅行の代名詞と言っても過言ではないでしょう。

そんな中でも3・Aの面々はやっぱり騒がしかった。清水の舞台から飛び降りるとの言葉通り、飛び降りを示唆したり、それを実行しようとしたりと、とにかくフリーダム。

それにしても、どうやってたらそこまでハイテンションを維持できるのでしょうか。

既に起きているのか寝ているのか分からず、兄の背に凭れかかってダレている状態の人が居るというのに。

「ここが清水寺か！」

そんな朱織とは対照的にテンションが鰻上りのエヴァ。

囲碁部や茶道部に所属しているだけあって、本当に日本文化が好きなのよですね。

「おいハウル！ お前の地元だろ。何か説明しろ！」

「俺が京都に居たのは六年くらいで、居なかった年の方が多いんだが」

もう背中の物体をおんぶした方が楽かな、と考えながら弁明するが、そんなことエヴァには関係ありません。早くしろと目で訴えてきます。

「んー。……あ、そういえば」

何か思い出したのか、彩輝はトントンと舞台の床を踏み鳴らす。

「この下の舞台を支えてる柱、四十八本あるんだけど、釘一本金具一つ使わずに組み立てられてるらしいぜ」

なんだかんだ言って詳しいですね。

しかし、樹齢五百年と言っても柱が木材である以上、いつかは腐るなり朽ちてしまいます。

来るべき日に備え今から櫨を育てているらしいですよ。勿論、その際にも金具は一切使いません。

清水の舞台は匠の技によって支えられているという事でしょう。

「ほう。そうだったのか」

感心しているエヴァの横で大半の生徒は恋占いの石や音羽の滝の方へ流れて行く。

全体行動である為、一ヶ所に長く留まるわけにはいかず、彩輝たちの班もそちらへ移動する。

色々と面倒になった彩輝はそのまま朱織を背負うことに。

そして、移動した先で目にしたものは、恋占いの石を実践して落とし穴に嵌ったクラスメイト二名の姿。

恋占いの石は二十メートル程離れた石と石の間を目を瞑って歩き、辿り着けたら成就するというもの。

その間に落とし穴が作られていたわけです。

「……いやあ、性質の悪い観光客も居るもんだねえ」

と彩輝が口を開く。

世界遺産に登録されている寺の境内で、誰にも見つからずにメートルを超す穴を掘るなんて真似が、ただの観光客に出来るとも思えません。

「なんとなく、彩輝が実家の方じゃなくて、麻帆良に居る理由が分かったよ。まあ、頑張れ」

「ダメになった組織を立て直すぐらいハウルなら出来るさ。だから、頑張ってくれ」

次々と優しい言葉を掛けてあげる班員たち。

それに比例して彩輝のSP（精神ポイント）がガリガリ削られていくので、もうその辺にしてあげて下さい。

次に向かったのは音羽の滝。



ここでも、年頃の女の子らしく縁結びが成就すると言われる滝に生徒が殺到する。

まあ、すぐに酔い潰れたんですけどね。

どうやら滝に酒が混ざるようにされていたらしいです。

そして彩輝は「……ふう」と息を吐いて、背中の朱織を茶々丸に預けた。

「では、零崎を始　」

「やめいっ!」

物騒極まりないセリフを最後まで言わせず、エヴァが彩輝の脇腹へ肘を突き刺した。

「ぐっ。何しやがる」

脇腹を押えて非難めいた視線をエヴァに送る彩輝。

「それはこっちのセリフだ!」

「それこそこっちのセリフだ!　なんだよこの半端な狙ってますよアピール。何もせず完全に油断した所を奇襲した方が何倍もマジじやねえか!」

まあ、確かにその通りなんですしょうが、一般人の生徒を巻き込まないようにする為に酔い潰したと考えれば、まだ分からなくもない…  
…ことないですね。

そもそも人払いをすればいいだけですし。

敵の意図が全く分かりません。普通なら気味の悪いことですが、こんなにも考えるのが馬鹿らしくなる事例も珍しいです。

「というか、彩輝さんがお酒に反応しないのも珍しいですね」

この流れを見て率直な感想を述べるさよ。

確かにこっちもこっちで珍しいですね。

「今梅酒って気分だから」

単に気分の問題でした。混ぜているのが梅酒だった場合迷わずくすねていたんでしょう。

取り敢えず今は、離れた所で我関せずと雑談してないで、酔い潰れた生徒をバスに押し込むのを手伝ってあげた方がいいんじゃないですか？

こちらも既にダウンしている生徒を一人介抱しているようなものですが。

兎に角、無事な面子が酔い潰れた人たちをバスへ押し込み、少々予定としては早まってしまいましたが、一同を乗せたバスは嵐山にある旅館へ向かったのです。

幾つかの式もまたバスの後を追う。行き先を術者に知らせながら。

## 第四三話：前哨戦

黄昏時。

それは昼と夜とが混じり合う時間帯。

またの名を逢魔時や大禍時とも言い、妖しいモノに出遭いそうな時間、著しく不吉な時間を表している。

そんな日が落ちた暗がりの中、麻帆良女子中等部が修学旅行で泊まる旅館を離れた場所から観察する人影が。

数は四。

内訳は丸眼鏡を掛けた大人の女性が一人、子供が男子二人に少し年上の女子が一人の三人。これが昼間の遊園地などなら家族と思えるような組み合わせだ。

と言ってもあくまで組み合わせだけに限るが。

子供の一人は頭から獣耳を生やし、一人は白髪に感情の一片も読み取れない表情をしている。極めつけに最後の一人は二本の日本刀を所持。

そして、この中で唯一の大人、天ヶ崎千草はこの顔触れを前に口を開く。

「ほな、ウチはこれから木乃香お嬢様を攫ってくるから、運ぶときの護衛は任せたえ」

これから誘拐を行うと宣言するとは会話の内容も物騒なものだ。

「なあ、千草の姉ちゃん」

と獣耳の少年が千草に話しかけた。

「なんや、小太郎？」

その呼びかけに応じる千草。そして小太郎と呼ばれた少年は自分の思っていることを口にする。

「最初は今日待機しとけって言うってたやないか。それに、人攫いなんてつまらんわ」

「ちゃんと理由があるんや。黙って従い」

小太郎は「しゃーないなー」と納得したようだが、小太郎を呼ぶ必要が本当にあったのか、未だ考えているのは千草自身であった。

(この二人、一体何を知つとるんや)

千草が視線を向けるのは白髪の少年、フェイト・アーウェルンクスと、日本刀を携えたゴスロリ服の少女、月詠。

それと同時に回想するのは、二人に誘拐の標的、近衛木乃香の資料を見せたときのこと。

最初に反応したのは月詠だった。

『この人ってお兄さん居はりますー？』

その問いに千草は首肯し、肯定を表す。

近衛木乃香の資料の中にも備考として兄の資料が入っていたので、千草はそれを月詠に見せた。

『あー、成程。木乃香だから香乃木。うふふふ。うふふふふふふ』

そして、資料に目を通した月詠は歓喜と狂気に震え、ストップパーが壊れたように殺気と嗤いを出し続けたのだ。

月詠に続いてフェイトもその資料に目を落とした。

それまでフェイトは、まるで人形のように、感情の欠片すら見せたことが無く、面様には何も映し出すことが無かったのだが、彼から初めて驚愕という感情を読み取れたのだ。

なんや。こんな人間らしい所もあるんかいな、と場違いにも千草がそんな感想を持った程だ。

元より誘拐とそのターゲットなんてものに興味を示すとは思えない二人をここまで変えてしまうもの。

何かある、と思わない方が無理であろう。

気になって直接聞いてみても「知り合いに瓜二つだから」と話をはぐらかされてしまう。

本人たちからすればそれが全てなのだが。

(まあええわ。この二人がここまで反応するんやから警戒はしておくけど、お嬢様さえ手に入れば)

後はどうにでもなる。そう結論付ける千草。

「千草はん、ちゃんと攫って来て下さいねー。そしたらウチは志紀はんと心置きなく死合えるんでー」

「……誰や、志紀つて。本当にそれ、他人の空似とちゃうんやな？」

「逢えば分かりますやろ。あー、考えたらゾクゾクしてきましたわー」

うふふ、とこみ上げてくる嗤いを噛み殺す。

「なんや、ソイツ強いんか!？」

月詠が言っている人間に興味が湧いたのか、小太郎が尋ねる。

「あきまへんえー、小太郎はん。ウチはこの時を愉しみに、愉しみに、愉しみに、愉しみに愉しみに愉しみに愉しみにしてきたんやから。邪魔しはるなら、まずアンタを斬る」

言葉に詰まった。

月詠は紛れもなく本気で言っている。殺気こそ出していないが、全身から出す気迫がそれを物語っている。下手に横槍を入れれば確実に斬られるだろう。

「あーもー、雇われやからってちょっとは協調性とか身につけときい」

そんな殺伐としかけた空気を壊したのは千草だ。今更ながら戦闘力だけでなく性格も考慮すべきだったと考え直す。

そう言っても、もうこのチームでやるしかないのだが。

「はあ……。ほな、ウチはもう行きますえ」

軽く溜息を吐き、旅館に向けて移動しようとしたときだった。

やはり人員を一人増やしたぐらいでは準備不足としか言いようがない。

いや、仮に万全を期していたとしても、万程度では全く歯が立たなかったであろうが。

災厄とは、準備などさせずに突然現れて、甚大な被害を一方的に理不尽なまでに与えていくだけなのだから。

「あれ？ もう行くのかい？ 夜はこれからなんだからさ、もうちよっとゆっくりしていけば？」

唐突に四人の中の、誰とも違う声が暗がりの中に響いた。

八つの目が声の発信源へと集中する。

自分たちの輪の中に、ごく自然に、ごくごく自然体に、居て当然と当たり前のように、見知らぬ男が立っていた。

否。見知らぬではない。資料を読んでその男のことは事前知っている。

名は近衛彩輝。

四人が同時に距離を取った。

（なんや、コイツ　！）

千草は戦慄する。

これから誘拐をしようなんて時に、周囲を見回さない筈が無い。周辺に気を配らないわけが無い。

断言できる。数瞬前までそこには誰も居なかった。

だが現に、手を伸ばせば届きそうな距離まで接近を許してしまった。気付かぬ内に接近されてしまった。

それはつまり、背中にナイフを突き刺そうと思えばいつでも出来たわけで、既に四人は死んでいるのと同義だった。

（転移魔法……いや、それだったら魔力で分かる。コイツ、一体何をしたんや）

考えたところで答えは出ないが、一つ分かったことがある。

渡された資料は何の役にも立たないということ。



「久しぶりどすなー、志紀はん」

そんな未知の相手に月詠が気軽に話しかける。

「や、久しぶり。奇しくも、次は敵同士で出遭いたいという天照の願いは達成されたわけだ」

「確かに二柱ともイザナギから生まれてますけど、ウチは天照やなくて、月詠どす」

「失礼、噛みました」

「違いますー。わざとどすー」

あまりにも場違いな応酬。

だが、千草が考えを纏めるには、それは十分な時間だ。

(妙な術を使うようやけど、四対一や。こつちが有利なことには変わらん。このまま生け捕りにしてお嬢様を誘い出せば)

まあ、指の一本か二本送りつけてやれば従うやろ、と捕らぬ狸の皮算用で千草は考える。

問題は月詠の執着だが、近衛木乃香をおびき出した後なら、好きにやってくれて構わない。

そして、千草が動こうとした時に、

「退いた方がいい」

と隣に居るフェイトが水を差した。

「（何言うてるんや！ これはチャンスやろ。上手くいけば人質として、長への切り札にもなる）」

小声でフェイトに反論し、忠告を無視して、千草は一步前へ出る。

千草の行動を見た小太郎も臨戦態勢に入り、一触即発の空気が完成した。

「志紀はんの相手はウチですよ。黙って見ててください」

そんな周りへの警告を発して、月詠が二振りの刀を抜く。

「まあ、こつちも時間かけたくないし、さっさとやろうか」

彩輝は相変わらず脱力しきって、得物を持っていなければ、構え一つとっていない。

しかし月詠は知っている。彩輝の武器に構えなんてものは必要ないことを。

「志紀はんの糸はウチには通用しまへんえ！」

月詠が取った行動は至ってシンプル。正面突破だ。

立ち止れば捕らえられ、立ち回れば絡め取られる。

そうとさえ分かっていたら、無駄な動きは一切せず、目の前の糸だ

けを斬り進めばいい。

「二刀連撃『斬魔剣 弐の太刀』」

魔力で出来た糸を斬る為、月詠はこの一ヶ月近くを全て『弐の太刀』の習得に費やした。

そして月詠は習得したのだ！

月詠自身が満足するレベルではないが、それでも実戦で使うには申し分ない錬度。

神鳴流における退魔の真骨頂。いかなる魔をも斬り伏せる斬撃が彩輝に振り下ろされた。

だが、それは前提が間違っているとしか言いようがない。

全ての時間を糸に費やしたと言うのなら、糸以外の対策は全くしてこなかったということ。

彩輝は刀の軌道に合わせ、手刀を振るう。

そしてそのまま、刀を押し折った。

「虚刀流 『薔薇』」

直後、彩輝の右足が吸い込まれるように月詠の腹部へ突き刺さる。

先程月詠は彩輝が構えをとらないのは必要ないからだと判断したが、それは間違いだ。

これこそ、虚刀流零の構え『無花果』。

『無花果』とは構えない構え。つまり自然体ということ。

自然体であるが故に予備動作は必要なく、あらゆる武術における最終形にして完成形の構えと言えるだろう。

「月詠の姉ちゃん！」

月詠は自分で加速していた分も相まって、ダメージが倍増。数メートル地面を転がったまま動かない。

「狗神！」

小太郎の影から犬を模した影が十数匹程這い出てくる。

その内の三匹は月詠の回収へ。残りの全ては小太郎と共に彩輝を喰い殺さんとばかりに突貫する。

後ろでは千草が符に魔力を込め、九字を切り、符を放つ。

「殺った んごあ」

勝利を確信する小太郎の言葉を彩輝が遮る。向かってくる小太郎の口の中に指を捻じ込むという物理的な手段で。

「知ってるか？ 犬つてのは身体の構造上、舌を掴むと何も出来なくなるそうだ」

詳しいことはキートンか平賀太平に聞いてくれ、と嘯きながら、今度こそ本当に糸を使い周囲の犬を一掃する。

千草が放った符は、そのまま小太郎を盾にして防いだ。

「がッあああー!!」

「犬は地上最強の動物と聞いたが、そんな高尚な動物、お前には勿体なさ過ぎるな。せいぜい、ファイトプラズマで十分だ」

彩輝は舌から首へと掴み直し ついでに内臓にダメージを与えるよう掌底を叩きこみ 千草へ投げつけた。

そして、千草に激突。

千草は自分の式を出して受け止めたり、身を翻して避けることも出来たであろう。

糸で雁字搦めにされていなければ。

三人が戦闘不能に陥り、ここで漸く、白髪の少年フェイト・アーウエルンクスが動いた。

フェイトは三人を転移魔法符で離れた場所に送り、彩輝と向き合う。

「よう。久しぶりだな。って言っても、お前には初めましての方が正しいのか？」

「どちらでも構わないよ。君が死んだとは信じていなかったけど、こんな所で遭遇する破目になるとはね」

「全くだ」

彩輝は笑い、フェイトは笑わなかった。

「取り敢えず最初に聞いておくが、お前こんなところで何してんの？」

「面倒事の処理、かな」

淡々と詳しいことは一切話さず返答する。

「奇遇だな。キグー。俺も似たようなもんだ」

それに同調する彩輝。

「念のために言っておくけど、僕個人に君と敵対する意思は無い」

そう。仮にも同僚が目の前でやられている姿を見ていて、静観を決め込んでいたのはこれが理由だ。

フェイトにしてみれば、こんな極東の島国の覇権争いに巻き込まれて死ぬなんて、あまりにも馬鹿らし過ぎる。

それに本来所属している組織にも飛び火しないとは、相手が相手なだけに断言できない。

「まあその辺は安心しとけ。俺の身内に手を出さない限り、近衛彩輝として活動してやるから」

手を出せば、即座に殺す。と言外に告げる彩輝。

「……肝に命じておくよ」

はたしてこの二人が正面から衝突した場合、被害が京都だけにとどまるのだろうか。

勿論、その結果は二人とも望んでいないので、実行されることはないが。

「さて、それじゃあお互いに有益な話をしようぜ」

新たな話題が彩輝から提供される。

「麻帆良と魔法世界の最重要機密教えてあげるから、さっきの連中の目的話せよ」

それに胡乱げな顔をするフェイト。誰がどう見ても釣り合いの取れていない取引なので無理もない。

しかし、彩輝はフェイトの反応を無視して話を進める。

「ナギの息子、ネギ・スプリングフィールドの従者は、黄昏の姫御子である」

「……どういう意味だい？」

黄昏の姫御子。

それはフェイトにとっては聞き逃せる単語ではなく、この機会を見

逃すわけにもいかなかった。

「そのままの意味だが。単に魔法ぶつけるだけなんだから、確かめる機会は幾らでもあるだろ？」

英雄の息子の従者だから何もしなくても向こうから会いに来てくれるだろうし」

もう一つは、そっちが話すなら教えよう、と続ける彩輝。

元より零崎彩識が生きていたと分かっただけでも儲けものなのだ。

それに自分たちとは関係の無い組織の計画を教えるだけで、情報をくれると言う。

真偽は後で確かめるとして、自分たちに損害はまず出ない。

「彼らの目的は君の妹、でいいんだよね？ その魔力を使ってリョウメンスクナノカミという鬼神を復活させることだよ」

損得を天秤にかけ、自分の得の方に傾いたようだ。雇い主を裏切らないなんて尊徳は始めから持ち合わせていない。

「なるなる。ところで『キーオフザトワイライト黄昏の鍵』って知ってるか？」

「いや。何だいそれ？」

「『造物主の掟』と対を成す存在。まさかと思うが人間一人が本気で世界を創ったとか信じてるわけじゃないよな。」

ホント、カミサマってやつは気まぐれだから困るよ」



この男、一体どこまで知っている。

それが彩輝の言葉を聞いた時のフェイトの率直な感想だった。

『造物主の掟』は紅き翼のメンバーでも知らない筈。

自分たちしか知らないことを知っていて、自分たちも知らないことを知っている。

「成程ね。礼を言っよ」

言いつつ、フェイトは冷静に考える。

確かに『造物主の掟』を知っていたのは意外だったが、だからと言って他の情報まで真実とは限らない。

鵜呑みにはせず、これからゆっくり調べればいいだけだ。

まずは、簡単に、手軽に調べられる、黄昏の姫御子から。

そして、転移魔法符を起動させ自分もこの場を去った。

「あー、『hack』やりてえー。特にGU」

揺光のレベル上げ過ぎて泣いたのは俺だけじゃない筈、とホテルのロビーでぼやく彩輝。

「なんだよいきなり」

突っ込みを入れるのは千雨。

現在ロビーには六班全員が揃っている。

普段通りならばこのホテルも喧騒に包まれるのだろうが、3・Aの面々が音羽の滝に混入された酒で酔い潰れているため、静かなものだ。

「まあ、新幹線内で式パクったじゃん。で、それ辿って、敵さんをボッコして、情報を聞き出してきたとこ」

今はフェイトが去ってから大体十分ほどが経過したところだろうか。あれからホテルへ戻って来た彩輝はいつものメンバーを呼び集めたのだ。

「……今の時点で言いたいことは山ほどあるが、それと私たちを呼んだことと何の関係があるんだ？」

「珍しいモノを見せれるかなあって」

「一体何するつもりなんですか？」

隣で聞いていたさよも尋ねる。

嫌な予感とまではいかないが、それでも事前に知っておきたいという気持ちが強い。精神衛生上の都合で。

「いや、まだ木乃香と刹那が」

言いかけたとき、ちょうど良いタイミングで、

「ゴメン。待った？」

と通路から走ってくる木乃香と刹那の二人の姿が。

この二人は他の班に属しているため、部屋を抜け出るのに時間が掛かったようだ。

「彩輝様。何かあったんですか？」

到着したばかりで状況が呑み込めていない刹那が、問いかけた。

そして、全員が揃ったところで、彩輝が皆を集めた理由を告げる。

「神様とか見てみたくない？」

彩輝の《門》の先に繋がっていたのは京都府内にあるどこかの湖。

そこが普通の場所ではないと注連縄の巻かれた大岩が雄弁に物語っている。

彩輝たちが居るのは、その大岩の手前に造られた祭壇。

そして、狩衣を着た彩輝が特に詳しい説明なんてものはせずに、

「じゃ、途中までは俺がやるから。朱織とエヴァ、後よろしく」

と儀式にとりかかる。

「はあ？　おい　」

突然よろしくと言われても、何をすればいいのかわからないエヴァは抗議の声を上げようとするが、パンツ！　と彩輝が打った柏手に遮られた。

「『高天の原に神留りまして　』」

ゆっくりと彩輝が祝詞を紡ぐ。

それは最早、口を挿めるような段階ではなく、荘厳な空気が場を支配していた。

「あ　あ、ダルいな　あ　」

間延びした声で、小さく朱織が呟く。

兄に引き摺られるように、また感化されたかのように、彼女もまた準備を始める。

説明は受けていないが、これは彼女の専門だ。何をしようとしているのかは大体想像がつく。

（はあ。全く。こんな荒唐無稽なことやるなら、ちゃんとサポートしてくれるんだよね　え）

心の中で愚痴りながら、朱織はエヴァに指示を出す。

「エヴァさん。取り敢えず、デカイのを撃てるよう準備しといて」

「ん？ ああ」

朱織に言われ、頷くエヴァ。

「『茂しやくはえの如く萌え騰る 生く魂、足る魂、神魂なり』」

彩輝が唱える祝詞も佳境に入る。

すると、大岩に変化が表れた。夜だというのに、天から一条の眩い光が降り注いだのだ。

否、それは逆だ。

彩輝によって霊脈から濃密度の魔力が溢れ出し、天へと向かって放出されているのだ。

そして、ここに神が顕現する。

二面四手の巨躯の大鬼、飛驒の大鬼神、リョウメンスクナノカミが。

「『こおるせかい』！」

と言っても、登場と同時に氷漬けにされてしまったのだが。

その光景を見て、彩輝は『倉庫』から琴を取り出す。

「さて、とある音楽家は言いました。音は全てを支配する」  
弦を弾く。

それにより残留している魔力が祭壇を中心に回り出す。あたかも旋律に合わせて踊るように。

しゃんしゃん、と琴の旋律の中に一定のリズムを保った鈴の音が混じるようになった。

音源は、仮契約カードの機能で巫女服を纏った朱織からだ。

「『アカキ、キヨキ、ナオキ、タダシキ』」

今度は朱織の口から祝詞が紡がれる。

しかしそれは、先程彩輝がやったのとは真逆のもの。

彩輝が行ったのは神を降ろすタマフリ。

今朱織がやっているのは神を鎮めるタマシズメ。

降ろすのと鎮めるのでは、鎮める方が何倍も難しい。流石の朱織も一人では出来ない仕事だろう。

だが、今この場を仕切っているのは近衛彩輝だ。

霊脈から魔力を汲み取り、魔力の残滓を統率し、朱織がチカラを十二分に発揮できる環境を創りだしている。

「『アカキ、キヨキ、ナオキ、タダシキ』」

神楽鈴を持ったのとは逆の手で玉串を振るう。

その姿は、まるで神憑かみがかったように、美しかった。

彩輝の一音と朱織の一挙が合わさる。

朱織の一動と彩輝の一節が絡み合う。

魅入る。神すら魅入らせるような舞が、満天の星空の下で行われた。

そして

「『はらいたまい、清めたまう』」

幻想的な舞台は幕を降ろす。

スクナを縛っていた氷は崩れ行き、スクナは天へと還る。

「貸し一つですよ　う」

「十八年前は友人がボッコして悪かった」

最後に二人で周辺の楔ぎをし、彩輝たち八名はホテルへ戻る。

こうして、修学旅行初日は終わりを迎えたのであった。

#### 第四三話：前哨戦（後書き）

念のためサブタイをもう一度お読みください。  
これはただの前哨戦です。

そして作者は『MASTERキートン』の再販があると信じています。



#### 第四四話：会合

彩輝たちが、ホテルへ帰ってから数時間経った頃。

彩輝と朱織がスクナを還してから数時間経った頃。

日付的には四月二十三日水曜日。修学旅行二日目に入ったばかりの深夜にあたる。

そんな星たちが煌めく夜、京都の一角では混乱が起こっていた。

当然と言えば当然である。

飛驒の大鬼神、リョウメンスクナノカミが復活したという大々的なニュース。数時間もあれば日本全土に広まっただけでもおかしくはない。

千六百年前に打ち倒された大鬼神。逆に言えば千六百年もの間、人の手には余ると封印され続けてきた大鬼。

これは、かの英雄ジャック・ラカンの主観によるが、スクナの戦力はイージス艦約五隻分に相当する。

そんなモノが復活し、尚且つ一晩もしない内に還された。歴史のページに残るかもしれない事件を探るなど言う方が無理であろう。

更に情報の伝達速度に拍車を掛けているのが、彩輝は一切の情報隠蔽を行っていないということだ。

元より隠蔽出来る規模ではないし、ならばいつそ、派手に知らせてやればいい、などと考えていたのだろう。

そしてそれは、計画に大穴が開いた派閥の一部に混沌を招いていた。一手目にして既に後が無い現状に陥った。ステイルメイトまでは程遠い惨状だ。

「おのれっ……！ 一体誰が我々の邪魔を！」

京都の外れにあるとある屋敷で、今現在窮地に追いやられている過激派の幹部である初老の男性が激昂する。

最早男には成功した暁の利権と目先の欲しか映っておらず、自分の取り分が少なくなることへ危機感を抱いているようだ。

そんな醜態を冷やかな目で見る白髪の少年。

もうそんなこと考えてられる状況じゃないんだけどね、と実行部隊として屋敷に招集されたフェイトは思う。

窓から見える枝垂れ桜は月明かりに照らされ、妖しくも美しい風景を作り出しているというのに、このガラス一枚を隔てた醜美の差はなんだろうか。

「聞いているのかっ！」

耳を劈くような怒鳴り声が部屋に響き、フェイトは窓から目の前に座る六名へと視線を戻す。

このフェイトの前に座っている六名こそ、過激派・強硬派の最高幹部。

一人の女性を除き、幹部は皆老人ばかり。

アレの血縁関係なんかはよく分からないけど、この老害たちは一体何に喧嘩を売っているのか分かっているのかな。もう君らの劣化常識が通用する時代はとくに過ぎ去ったっていうのに。

顔には一ナノたりとも表さず、そんなことを思うフェイト。

「天ヶ崎。貴様らが長の娘を攫い損ねなければ、こんなことにはならなかったのだぞ」

まず老人が言及したのは、フェイトと共にこの場に呼ばれている天ヶ崎千草。

千草は投げ飛ばされた小太郎と激突しただけなので、これと比べて大きな怪我は無い。

そして、この老人の言葉に流石のフェイトも、それは暴論だ、と心の中で呟いた。

仮に、もし万が一、誘拐が成功していたら、この屋敷に居る全員の首と体は繋がっていないだろう。

そもそも、あまりにもあっさりと還されてしまったものだから、自分たちが何を利用してしようとしていたのか忘れてしまったのでは、なんて疑問すら覚えてしまう。

神をあつさりと還してしまふ集団への配慮が、危機感が足りなさ過ぎる。

それとも、自分たちもやろうと思えば出来たことで、考慮するに値しないとも思っているのだろうか。

「申し訳ありません。お嬢様の兄が資料と比べ物にならないほどの達人で部下がやられてしまい、これ以上は無理だと判断しました」

千草が口を開く。彼女も上司の前では標準語を話すらしい。

「何だ貴様。失敗は誤った情報を与えた我々の責任だと言いたいのか？」

「いえ、そういうわけでは」

怒気を含ませた男の声で場の空気は一気に張り詰める。

「まあまあ。落ち着きなよ」

そんな空気を弛緩させたのは、幹部六名の中で、外見が掛け離れて下に見える女性。

その容姿は千草と同年代、それより若く見えるほどだ。

外見が実年齢と同じなのか、何か術を使っているのかは定かではないが。

「で？ こっちの被害ってスクナ以外だと何が出てるんだっけ？」

女は今が深刻な事態ではないかのように、実に軽い感じで尋ねる。

その樂觀さに幹部の者が嫌悪を表すが、気に留める様子はない。

「私の部下二名が怪我を負い、内一名が重体です」

補足すると、月詠は重傷。重体なのは小太郎の方だ。

月詠には不十分とはいえ、衝撃を逃がすチャンスがあった。あの刹那に実行していたのなら、最早それは天性の勘と言えるだろう。

問題は小太郎。彼には衝撃を逃がすどころか、身構えることすら許されず、内臓に直接深刻なダメージを与えられたのだから。

彼が狗族とのハーフだったのが、不幸中の幸いだろう。身体の頑丈さも回復力も常人の比ではない。

最も、その全てを考慮した上で、最低限の力で戦闘不能にされたとも言えるが。

「ふん。所詮、はみ出し者と混じり者か」

男が二人の侮蔑を含んだ言葉を口にする。

同調する者は居ても、それに反論する者はこの中には居なかった。

黒幕気取りでここから動こうともしない君たちよりは、余程好感が持てるけどね。

と、この間千草とフェイトの考えることはほぼ同じだったであろう。

次に被害の程を尋ねた女が言う。

「なんだ。その程度なんだ」

ここまでなら他の連中と同じように聞こえるだろうが、続く言葉に誰もが言葉を失った。

「大袈裟に騒ぐからどんなものかと思ったら、神一柱に人間二人。その程度幾らでも替えはきくじゃない」

それが人間だけならばまだ分かる。

しかし女は、神をも含めて代替可能だと言ったのだ。

まるでボディソープの詰め替え用でも買いに行くような気軽さで、言い切った。

迷うことなく、澱みなく、はっきりと、きっぱりと。

「貴女には何か考えがあるのかい？」

女の隣に座っている幹部が質問する。

「っていかさあ」

一度ここで言葉を切り、他の五名の、千草とフェイトも含めて七名の顔を見回す。

「ここは京都だよ？ 態々飛騨の大鬼神なんてモノを持ちだしてく

るアンタらの神経を疑うね」

これにはフェイトすらも、絶句した。

何故こんな思想で幹部に入ることが出来たのだろうか。

失敗したとはいえ、今まで自分たちがやってきた全てを否定するなんて。

「なら貴様はどうするつもりだ！」

再び先程の男が激昂する。

それを諫めようとする者は居ない。

間に入って止めようとする者は誰も居ない。

半端な回答をすれば、次の瞬間には幹部が五人に減るといった事態も考えられる。

しかし、それでも。

「そつだねー」

女は少しも気負うことなく、自分のペースを崩すことは無い。

「んー。……じゃあ、アヤミツヨシ蘆屋光栄の遺産とかは」

深く考えているようには見えず、パツと思いついたことを言ったような調子だ。

だが、目立った行動は何も起こらなかった。

女を殺すことも、ふざけるなど叱咤する声すらも上がらなかった。

蘆屋光栄。当然フェイトはその名に聞き覚えが無いが、それを聞いたフェイトを除く全員の顔色が変わったのだ。

「……出来るのか……？」

確認するように一人が再度問う。

それに女はへらへらと笑い、

「出来ないのかい？」

と、この場に居る者たちを挑発する。

元より、リヨウメンスクナノカミのという大鬼神を使役しようとしていたのだ。

我々に出来ない筈は無い、と他の幹部たちは敢えてその挑発に乗ることにした。

「天ヶ崎。もう一度チャンスをくれてやる。今度こそ成功させろ」

「はい」

そして、スクナの替わりに別のモノを使うということが決定して、この会合はお開きになった。



「何しとるんや、新入り。はよ行くで。……二人とも回復力はあるから明日くらいには動けるようになっとるやろうけど、人手が欲しいな」

屋敷を後にしながら、千草はフェイトに注意を促す。

最後の方はブツブツと足りないものを確認するかのようにはいた。

それに目的は近衛木乃香だが、目くらましに親書の受け渡しの妨害をするのも忘れてはならない。

「今日お嬢様の修学旅行の予定は何やったか？」

確認の為、千草は隣を歩くフェイトに尋ねる。

「彼女らは班別自由行動だね。どこに行くのかまでは分からない」

「あーもう！ 生徒の自主性に任せるんもええけど、大概にしい！」

「有名な観光スポットに限れば大丈夫なんじゃないのかい？」

「その有名な観光スポットが京都だけでどれだけあると思っとるんや。交通機関を使えば府外にやって行くやろうし」

修学旅行やから、奈良とか大阪とかか、と呟きながら千草は掛けていた丸眼鏡を外し、眉間を押さえる。

この区間を四人（内二人は手負い）でカバーするのは不可能だ。

「いつそ、飛鳥とかあの辺の連中を焚き付けよか」

千草は新たな算段を立て始める。

獲らぬ狸の皮算用をし、痛い目を見たばかりだ。今は計画の成功率を上げる為に策を練る。

そうしている内に、本来の二人の隠れ家に辿り着いた。

隠れ家と言っても、山奥にある寺だとか、そういうものではない。

この場所は普通の普遍的な住宅街。

そこにある空き家を隠れ家として使っているのだ。

当然、家には魔術的な対策を施してある。仮にバレたとしても、隣に一般人が住んでいるのだから、相手も派手な動きは出来ない。

卑怯だとも言われるかもしれないが、そこは一般の生徒を盾にしている魔法協会といい勝負だろう。

二人が家に入ると、重体と思われていた犬上小太郎が待っていた。

「小太郎、もう起きてええんか!？」

「ああ。代わりに治療用の符とか薬、ありっただけ使わせてもらたで」

「そうか。月詠はんは?」

「月詠の姉ちゃんはまだ寝とる。って言っても、明日には動けるよ」

うになるやる」

本来なら喜ぶべき場面なのだろうが、フェイトはそれを懐疑に満ちた目で見つめる。

幾ら狗族の回復力に加え、符や薬を乱用したといっても、あの男がこんな簡単に治る怪我しか与えないなんて。本当に警告だけのつもりだったのかな？

フェイトは知っている。大戦中の零崎彩識の虐殺を。

それに続く、零崎一賊の殺戮を。

一度敵対すれば一族郎党皆殺しが通例の彼らがこんな甘い対処しかないのが信じられなかったのだ。

まあこれは単に彩輝が、近衛の問題を零崎で解決するには段階を飛ばし過ぎだろ、程度の考えだっただけなのだが。

「それより、アイツ一体何者なんや！」

フェイトの頭の中のみならず、実際の会話でも彩輝が話題に上がったようだ。

「新入り。お前何か知つとたな」

二人の視線がフェイトに集まる。早く話せと目で訴えかけてくる。

「まあ。信じるかどうかは君たちの自由だからね」

そして、フェイトは彼が大戦の英雄・零崎彩識とそっくりであること話を話した。

フェイト自身は本人であると確信しているが、馬鹿正直に話したところで、逆にこちらが疑われるであろう、主に頭を。

それに彼自体にも不明な点が多いので、かなり輪郭を量した説明になっってしまった。

「なんや。結局他人の空似か」

説明を聞いた千草の第一声がこれだ。

「ん？ ちょっと待ち。確か月詠はんは志紀とか言っってたか？」

どうやら、千草は昨日の月詠とのやり取りを思い出したらしい。

しかし、それによってまた違う名前が出てくる。

「それは僕も知らないよ」

「わけ分からんわ」

まさか、時代を超え色々な事件に関わっているのが、全て名前を偽っている同一人物だとは考えれる筈が無いだろう。

「よう分からんけど、もう油断はせえへん。次に戦ったらオレが勝つ！」

最初に彩輝のことを口にした小太郎が、真っ先に思考を放棄した。

千草一派が動くことになるのは明日。

千草は今日をどうするか考え始め、月詠と小太郎は回復に時間を割く。

そしてフェイトは、この負け戦をどこで離脱すれば自分に最も益があるかを考える。

後数時間で日が昇る頃の出来事だった。

## 第四五話：二日目

SIDEさよ

美しい舞台が終わり、夜が明けた今。

文字通り、神々しい光景を見ることが出来た次の日の朝。

私たちは朝食を取るために一階大広間に集まっています。

まだ来ていないのは彩輝さん一人ですね。

当然ながら、昨日彩輝さんと私たちは別室で寝ました。確か、彩輝さんは瀬流彦先生の部屋に泊まったとか。

そんなわけで一人来るのが遅れています。

「エヴァさん。ぶっ殺していいですかね？」

朝一番にこんな物騒な発言をするのは朱織さんです。

いつもと違って間延びした声を出すことも無ければ、欠伸をし、目を擦るような仕草も見せません。

「今の私はほぼ全盛期に近い状態で大抵の致命傷ならすぐに再生するが、断るに決まっとるだろうが！」

そうですねえ。

一切の魔を被う楔ぎと吸血鬼のエヴァさんでは相性が悪過ぎますし、

かく言う幽霊でホムンクルスの軀に入っている私も結構危ないんですけど。

まあ、京都に入ってから、なんだか体調が良いので、余程のことがない限り大丈夫だと思います。流石は妖怪と歴史を紡いできた古都と言ったところでしょうか。

「ところで、何故そんなに意識がはっきりしているんだ？ 昨日とは違い過ぎだろ」

朱織さんにエヴァさんが尋ねます。

昨日は途中から彩輝さんに背負われてましたからね。

「タマシズメなんてやったせいでテンションが微妙に」

多分二度と見れないであろうハイでもなくローでもない、ニュートラルな朱織さん。かなりレアです。

「はあ、逆に調子狂う」

「それはこっちのセリフだ」

ポツリと呟いた朱織さんに、すかさず突っ込みを入れる千雨さん。

「うっかり擦れ違う人をバラさないようにガス抜きさせてくれませんか、ねッ！」

朱織さんは机の上に置かれていたお箸を投げ矢のように真っ直ぐ投擲する。

お箸が向かう先はエヴァさんでも、私たちでもなく、頭上をそのまま通過しました。

そして背後からパシツと小気味良い音を立てて、「おはよう」と先程投げられたお箸を持った彩輝さんがやってきた。

「おは……ようっ？」

今日ばかりは、挨拶が疑問形になってしまつのも仕方ないでしょう。

「何だよ朱織。その一昔前の懐かしいキャラは」

「まあ、明日には落ち着いてると思うけどさ」

「いや、それよりもだハウル。何で、スーツなんて着てるんだ？」

そう。現れた彩輝さんは何故か制服ではなくスーツ姿。少し着崩されてますが、似合っていると思います。

普段からゆったりとした和装がほとんどなんで、制服と違い、こつ改めて着られると違和感は拭えませんが。

「後十年程したら似合わなくなっていると予言してやるっ」  
「バツサリとエヴァさんが切り捨てます。」

「というか、今日はまだ制服で行動ですよ」

「制服も正装も大差ないだろ？」



学生の正装が制服だから、そう言われるとそうなんでしょうけど。

「態々スーツを着ようと思った理由は何なんです？」

続くように茶々丸さんが質問します。

「昨日鬼神還したじゃん。俺の独断で」

……あれ独断だったんだ。

「流石にやり過ぎだったらしく、関係各位に説明しやがれって深夜に連絡があった」

あつはつは、と軽快に笑ってますけど、そんな余裕ないんじゃない……。

他の皆さんも呆気に取られています。

「ま、そんなわけで、俺帰り遅くなるだろうから適当に誤魔化して」

軽く言ってくれますけど、班長私なんですよ？

新田先生になんて言えばいいんですか。

そして、そんな些事は関係ないと言わんばかりに時間はどんどん過ぎていき、朝食を食へ終わると、彩輝さんは宣言通りに《門》を開いて、何処かへ出掛けて行きました。

本当にどうしろと。

せめて身代わりになるようなものを置いて行って下さい。

「それじゃあ、各班の班長さんは点呼をとってくださいーい」

当然ながら、これから出掛ける前に点呼をとり始めます。

「大丈夫ですよ、さよさん」

と、私が答えあぐねていると、茶々丸さんが声を掛けてくれました。私には現状を打開する方法が思いつかないので、茶々丸さんの言葉を信じます。

「ネギ先生。六班全員揃いました」

虚偽の報告をネギ先生にする。

「え？ でも、六班は」

「何を仰っているのですか、ネギ先生？ 六班は最初から五人でしたよ」

ネギ先生の疑問を後ろに控えていた茶々丸さんが遮ります。独特な香水の匂いがするとかは気にしないことにしましょう。

「……あ、そうですね。すいません。勘違いしてたみたいです」

こちらこそすみません。それ、勘違いじゃないです。

そして、全員が揃ったということになった修学旅行の一団は奈良へ向けて出発します。

「では取り敢えず、金閣寺から回ることにするか」

到着して早々、エヴァさんがこんなことを言いました。

「あの、確かに班別行動ですけど、あくまで奈良でって前提じゃないんですか？」

「そんな暗黙の了解なぞ知ったことではないわ。集合時間までに帰ってくればいいだけだろう？」

別に暗黙の了解ではないと思いますが、エヴァさんから是が非でも見に行くという執念が垣間見えて、止めることが出来ない。

はあ、と溜息をつき、千雨さんが旅館へと《門》を繋げました。

もう班長とか責任とかどーでもいいかなー。結局楽しんだもの勝ちということになるんでしょう？

私たちは千雨さんの《門》を潜り、再び昨晩泊まった旅館へと戻って来ました。

従業員の方に見られない内にすぐにこの場を去り、エヴァさんご要望の金閣寺へと足を向けます。

「それにしても、地元民の三人と悉く別れることになったな」

そう言ったのは千雨さん。

確かに、木乃香さんと刹那さんは仕方ないにしても、彩輝さんまで何処かに行くとは予想してなかったです。

「まあ。ハウルに関しては自業自得だろうさ。お前たちも組織において『ハウレンソウ』を怠るとどうなるか、悪い見本を見て学んでおくんだな」

「それも勿論だが、アイツらしか知らない美味しい店とか色々あるんじゃないか？」

初めて京都に来た私たちよりは詳しいでしょうね。

ふむ、とエヴァさんも千雨さんに言われ少し考え込みます。

「茶々丸、ハウルに電話を掛けてくれ」

「はい」

そうして茶々丸さんが彩輝さんに電話を掛けます。電話に出れる状況なのかと思いましたが、五コール程して、繋がりました。

皆さんに聞こえるよう、ラップ音で音量を大きくします。こっちの方が携帯のスピーカーに頼るよりも遮音性高いです。盗み聞きはされない自信があります。

「もしもし」

ちなみに『もしもし』って『申します申します』の略語だそうですよ。

『私メリーさん。今恐山に居るの』

「京都で昼食を取ろうと思うのですが、おススメのお店とかありますか？」

どう返そうか悩んだ瞬間に茶々丸さんが流しました。早業です。

『朱織に聞いたら？ 何回か連れてったと思うけど』

「愚問だね、彩兄。そんな二年も前の、数回しか行ったことのない店なんて覚えてるわけないでしょ」

『そうかい。じゃあ住所、メールで送るわ』

そう言う通話が切断され、一分も待たない内にメールが送られてきました。

逐一住所とか記憶してるんでしょうか？

「それにしても何で恐山なんだ？」

「説明する相手が各結社の代表だったりしてね」

昨日やったことの規模を考えれば、おかしくはない気がします。

「……先手は打ったが、上手く返されるかもしれんな」

と、エヴァさんが呟きました。

「どういふことですか、マスター？」

「ハウルは神を還して、計画の最終段階を初手で潰したが、逆に原因究明など適当な理由を付けて過激派が戦力を集中させてくるかもしれない」

あ。そうか。昨日のは彩輝さんの独断だから、穏健派の人は止める余裕も理由も無かったことになります。

『ハウレンソウ』の大切さが身に染みて分かりました。

「しかしそうになると木乃香さんは大丈夫でしょうか？」

茶々丸さんが疑問を口にしました。

「今木乃香さんの傍に居るのは姉さんと刹那さんの二人だけ。敵の数と質は未知数ということになりますよ」

「まあ、あくまで可能性の話だからな。第一、年単位で思案されているであろう計画を潰されて、悲観も混乱も動揺もすることなくすぐに切り返してくるような奴が居れば、ソイツは今頃組織のトップに立っている筈だ」

それにだな、とエヴァさんは続けます。

不敵な笑みを顔に張り付け言い切ります。

「私とハウルの自慢の従者が、ポッと出の雑魚にやられる筈がないだろう」

SIDE 刹那

朝、彩輝様がスーツを着て朝食を食べていたけど、あれは一体なんだったのだろうか。

結局彩輝様は朝食を食べ終わると同時に何処かに行つて、聞きそびれてしまったし。

大したことじゃなく、唯の気紛れだといひんだけ。

「どしたん、せつちゃん？ ぼーっとして」

チャチャゼロさんを頭に乗せたお嬢様に話しかけられました。

「いえ、少し考え事を。重要なことじゃないと信じたいので気にしないで下さい」

「んー、まあ、よう分からんけど、はよ行かなおいてかれるえ」

お嬢様に言われ、先頭を歩く神楽坂さんたちから少し遅れていたことに気付く。

今私たち五班が来ているのは奈良公園。

多くの国宝指定・世界遺産に登録された物件があり、海外からもたくさんのお客が訪れる日本有数の観光地だ。

この公園内にある春日大社に興福寺なんかは隣を歩いているこのちゃんとうっかりがあるんだよなあ。藤原氏の繋がりだ。

うん。すご過ぎて全く実感が湧かない。

「お嬢様は先祖の方とゆかりのある場所を巡って何か感じたりするんですか？」

「別に何とも思わんなあ。それに佐藤さんとか伊藤さんとか、名字に『藤』が付く人は大抵藤原氏と関係あるえ、って兄様が言ってた」

「え！？ そうなんですか」

へえ。初めて知った。寧ろ彩輝様はどういった過程でこういう無駄知識を収集しているんだろうか。

「モウ忘れラレテルンジャナイカト思ツテ、会話ニ参加スルケドヨ」と、今まで黙っていたチャチャゼロさんが口を開いた。

「ややなあ、ゼロちゃん。忘れるわけないやろ」

お嬢様の頭の上に乗っているのに、忘れられるわけないじゃないですか。

「マタ前ノ連中ト距離ガ開キ始メタゼ」

言われて前を見ると、確かに先程よりも距離が開いてしまっている。お嬢様と私はどちらともなく追いつこうと小走りになる。

「ケケ。マア、チヨウドイイカラ、コノママ人気ノ有ル所ヲ移動シ  
口」



「え？」

驚いたお嬢様が足を止める。

「それはどういう意味ですか？」

私もお嬢様に合わせて止まり、チャチャゼロさんに質問する。

「ヤツパ気付イテナカタカ。戦闘経験八豊富ダガ、コウイウ経験モ積マセルヨウ、ハウルニ言ツテオイテヤルヨ」

彩輝様やエヴァンジェリンさんの下で出来なかった経験。そしてお嬢様が関西の過激派に狙われているという現状で、何が起きているのか想像するのは容易だった。

「お嬢様。取り敢えず歩きましょう」

「うん」

再びお嬢様と私は歩み始める。小走りではなく、ゆっくりと歩く。

「チャチャゼロさん。私たちは尾行されているんですか？」

「アア。ソウダ」

予想通り、肯定の言葉が返ってきた。

「数八六……イヤ、七力。魔法ナンカニ八頼ラズ、純粹ナ技術デ来テルナ」

十中八九プロダロウ、とチャチャゼロさんは言う。

色々と考え事はしていたが、それでも気を抜いていたわけではない。彩輝様や皆さんのおかげで私もそれなりに強くなったと思っていたが、こんな時まだまだ未熟だと痛感する。

チャチャゼロさんのような玄人が居てくれて良かった。

「これからどうするつもりなんですか？」

「トツ捕マエテ色々聞キ出スノガベストナンドガ、ハウルニ連絡入レテオイタ方ガ良イダロウ。『ハウレンソウ』八大切ツテコトダ」

言われた通り、お嬢様が携帯を取り出しして彩輝様と連絡を取る。

「あ、もしもし兄様」

繋がったようなので、お嬢様と携帯を挟むように顔を近付ける。

『私メリーさん。今高尾山に居るの』

携帯のスピーカーから漏れ出た返事はなんとも巫山戯たものだった。今そんな状況じゃないんだけどなあ。

「なんか奈良公園で尾行されてるらしいんやけど。相手は七人でプロやって」

お嬢様もそれには突っ込まず、今私たちが置かれている状況を簡潔

に述べる。

『成程ねえ。公園の外に車が三台停まっていたら完璧だな。チャチャゼロは居るか?』

「居ルゼ」

『出来れば相手の所属を聞き出しといてくれれば助かるんだけど、出来そうか?』

「戦ツテ生ケ捕リニスル所マデナラ問題無イダロウゼ。タダ、口ヲ割ルカ八分カラネエケドナ」

仮にも相手がプロだとしたら口を割る可能性は極めて低いだろう。逆に虚偽を含んだ情報を掴まされるかもしれない。

『そうか。もしもの時は茶々丸に応援を頼んだ方が良さそうだな』

確かに茶々丸さんなら自白剤を持っていても不思議じゃない。

『まあ、相手の真意が分からない以上、無視出来る内は警戒だけに留めていた方が無難か　　っと、悪い。これから人と会う約束をしてるんだ。くれぐれも無茶はするなよ』

そう言い残して、通話は切れた。

「ほな、あっちが行動起こすまで無視の方針で行く?」

「ええ、やはりそれが無難かと」

しかしそうになると、後手に回ってしまうことになるが、模擬戦を思い出せ。後手から始まるのなんていつものことじゃないか。

万を越す系とたった七人の敵。どちらがやり易いかなんて比べるまでもない。

「お嬢様」

「どしたん、せつちゃん？」

「必ず、お守り致します」

「うん。ありがとうな」

そう言っつて、お嬢様は朗らかに笑う。

「でもな、せつちゃん。ウチはひ弱守られキャラになるつもりはないえ」

笑顔の種類が変わった。

笑顔の意味が変わった。

先程とは打って変わって何事にも動じない堂々とした笑みを浮かべる。

「ま、一応逃走ルートは確保しておこか」

言っつて、お嬢様は長谷川さんにも電話を掛けた。茶々丸さんにも白剤を使うかもしれないという旨を忘れずに。

そしてやっと、神楽坂さんたちに追いついた。

ネギ先生や神楽坂さんは奈良公園に居る鹿にエサをやって楽しんでる。

宮崎さんたち三人は少し離れたところで話をしている。

「ところで木乃香。さっきから気になってたんだけど、その人形どうしたの？」

「ちょっとした預かりものかな」

「態々頭に乗せなくてもいいと思うんだけど。重くない？」

「そうでもないえ。それにこの娘はウチを守ってくれてるんや」

「お守り？」

「うん。大体そんな感じ」

お嬢様と神楽坂さんが談笑しているとき、それは起こった。

周囲に結界が張られたのだ。何者かは分からないが魔法使いが動いた。

咄嗟にお嬢様と視線が交わる。

数瞬遅れて「……あれ？」とネギ先生も声を上げた。

あ。ネギ先生のことを全く考えていなかったが、大丈夫だろうか。

「すみません。僕ちよつと急用が出来たんで、先に行つて下さい」

「あつ、待つてネギ君！」

お嬢様の制止の言葉を無視しネギ先生は走り去ってしまった。

「つたく、しょうがないわねえ。ネギ坊主は」

と、今度は神楽坂さんまで後を追おうとしたので、お嬢様と一緒に引き留める。

「待つて待つて明日菜。ネギ君ならすぐ戻つてくると思うけん、先に行つてよ」

ここでベストなのはお嬢様が神楽坂さんを引き留めている内に、私とチャチャゼロさんが迅速に対応することの筈。

「うーん。ガキを一人にしておくのも危ないし。ま、すぐ連れ戻つてくるから」

神楽坂さんはお嬢様を振り切つて、走つてネギ先生の後を追つて行った。

マズイ。さつきから完全に受け身の対応しか考えていなかった。

まさか！ まさかこつちから、事情も一切分からない未知の相手にアプローチを掛けるなんて、全体誰が予想できようか。

今さつき危害が無いなら関わらないと決めただけなのに。

「ど、どうしようせつちゃん」

先程の不敵な笑みの面影をなくしたお嬢様が尋ねてくる。

「サツサト話シトイタ方ガ良カツタンジャーノカ？」

確かに結果論を言えばそうなってしまいましたが。

「折角修学旅行中なのに、ウチらの問題に巻き込むのは、なんか忍びないやろ」

それに関西内部のゴタゴタだけでもややこしいのに、関東所属のネギ先生が関わってくるとなると……。

「兎に角、私は二人を追いかけます。チャチャゼロさん、お嬢様を願います」

私は瞬動を用い、鹿が跋扈する中を走り抜ける。二人が向かった方向に進むたびに人の数が疎らになり、いよいよ無人になる。

何で二人とも無駄に足が速いんだろうか。

遮蔽物が少ないこともあり、二人の姿を発見するのは容易だった。

六人の大人が倒れている中、ネギ先生と神楽坂さんが一人の男性と対峙しているという状況だったが。

おそらくお嬢様を尾行していたであろう七名がここに居て、お嬢様

に危害が加わることは無いと安堵すると同時に、別の新たな問題に冷や汗が出てきた。

いくらなんでも、こっちから手を出すなんて短絡的な行動はしてませんよね!?

跳躍し、すぐさま三人が対峙している間に降り立つ。

「えッ!? 桜咲さん!？」

「危険です!!! 下がってください!」

私の身を案じることを言うてくれるネギ先生と神楽坂さん。

その気持ちは嬉しいんですが。その気持ちは嬉しいんですが。

「おや、貴女は近衛様の護衛の方ですよね？」

と、相對している男性が呟いた。

「近衛つて。貴方僕の生徒に何をするつもりですか!」

年は二十代前半といったところだろうか。

朝の彩輝様を連想させるように服装はスーツにスラックス。染色などとは無縁であろう黒髪は短髪に切り揃えられている。

その佇まいは一流のそれで、歴戦の猛者を彷彿とさせる。

「そうですが、貴方は何者です？」



ポケットの中に入っている仮契約カードを手にし、いつでも戦闘に入れるよう準備をする。

出来れば、チャチャゼロさんの応援が欲しいところだ。

「申し遅れました。私、飛鳥の篠ノ女しのおと申します」

篠ノ女と名乗った男は私が臨戦態勢に入ったことなどお構いなしに悠々と一礼した。

「話が分かる人が来てくれて助かりました。そちらの方々は魔法で悪いことをするなと一点張りで、どうしたものか考えあぐねていたところでした」

少し肩すかしを食らったが、どうやら私が考えていたような事態ではないらしい。そのことに関してはほっと胸を撫で下ろす。

戦闘にはなりそうにないので、お嬢様に状況と男の所属を念話で伝える。

戦闘にならないと言っても、目の前の男を信用するつもりも、隙を見せるつもりもないが。

「篠ノ女さん。貴方も私たちを尾行していた内の一人ではないのですか？」

「随分直球ですね」

篠ノ女さんはそう言って、苦笑する。

「すみませんね。こういうのは私の領分じゃないんです。」

「確かに、結果だけを見ればそう見られても仕方ありません」

それでも律儀に答えてくれる辺り、事を荒立てる気はないようだ。

「ちょっと！ 黙って聞いてれば尾行ってどういことよ！」

逆に神楽坂さんが声を荒げる。

ですから、これから詳しい経緯を話してくれる雰囲気だったじゃないですか。

「当事者抜きで話が進んでいても困るんやけどな」

そしてその後ろから声が投げられた。

聞きなれた声のした方に目を向けるとお嬢様の姿があった。顔色が少し優れないようなのでここまで全力で走ってきたのだろう。呼吸を整えてすぐに出てきたという印象を受ける。

「飛鳥 の篠ノ女さんと仰いましたね」

「これはこれは。お初にお目にかかります」

「前置きは結構。時間は有限なんです。有益に使いましょう。それが魔法使い同士なら一秒は黄金の林檎にも勝ると思いませんか？」

「ふふっ、仰る通り」

不敵な表情と標準語で話をするお嬢様。それを見てネギ先生と神楽坂さんは呆気にとられている。

「飛鳥 といえば、今回の一件には中立の立場を貫いていると聞きましたか？」

初めて聞く事実。おそらくお嬢様も今知ったばかりだろう。人に会うと言っていたが、無事に彩輝様と連絡を取れたようだ。

「はい。首領を筆頭に過半数の者は中立を保っておられます」

「では、ここに倒れている六名は」

お嬢様は倒れている人たちに視線を向ける。

「近衛様のお考えの通り、暴走した過激派の一派です」

ということはこの人は彼らを止めに来たのか。

身内が恥を晒す前に、彼らを罰しに来たのか。

「本来ならもつと事前に察知しておくべきなのでしょうが、お恥ずかしい限りです」

お嬢様を尾行していたのは六名。その六名を追っていたのがこの人。結果的に計七名。

いや、この場に居るのが七名というだけで、本当はもっと居るのかもしれない。彩輝様も公園の外に車を待機とかそんなことを言って

いたし。

取り敢えず、これで 飛鳥 の最低限の面子は保たれたということか。

「成程。概ね事情は分かりました。貴方方が出し抜かれることになった要因は、本日中に私の兄が説明に参りますので」

「ほう。兄君が」

これには素直に驚いたような声を上げる。まあ、失踪歴とか色々持ってるからだろうけど。

「それでは、首領殿によりしくお伝えください」

言って、お嬢様は篠ノ女さんに一礼する。

「分かりました。近衛様も、よき魔法を」

篠ノ女さんは倒れている六名と共に転移魔法符を使ってこの場を去った。

それと同時に人払いの結界も解かれたようで、ちらほらと人が行き来するようになる。

「……ふう。以上、香乃木綾の外交モード終了。とか言ってみたり」

あー、疲れたー、とお嬢様は私に寄りかかるようにして倒れ込む。

「お、お嬢様。大丈夫ですか」

お嬢様を抱きとめるように支える。

「無理。実は全力疾走が響いて膝が笑ってたりするんや。魔力配分  
って難しいわー」

軽快に笑うお嬢様。多過ぎて困るといふ聞く人が聞けば贅沢な悩み  
なんでしょうね。

「というかそんな状態で会話してたんですか。」

「ねえ、木乃香。一体どういふことなのよ」

「木乃香さんは魔法使い、なんですか？」

すっかり蚊帳の外だった二人が口を開いた。

「いいえ。陰陽少女です」

からからとお嬢様は笑う。

「いや、疲れてるんはホンマなんや。詳しい話は夜にして。のどか  
たちを放っておくわけにもいかへんし」

当然それで二人が納得する筈ないが、お嬢様の頼みとあって渋々と  
いった風に引き下がる。

「それでお嬢様。立てますか？」

まだ私の腕の中に居るお嬢様に問いかける。

「朱織ちゃんみたく楽出来そつやから無理って言う」

「分かりました。では、肩車で」

「……ゴメン。自分で歩くえ」

言ってお嬢様は自分の足でしっかりと立つ。

宮崎さんたちと合流する途中に、千雨さんや彩輝様に顛末を書いたメールを送信しておいた。

その後、ネギ先生が宮崎さんに告白されたらしく、知恵熱を出して倒れた。そしてそのままホテルへ戻ることに。

正直、無用な問答が避けられたことに、ほっと胸を撫で下ろした。

## 第四六話：二日目夜

SIDE 刹那

現在の時刻は一九時三〇分。

どうやらネギ先生が朝倉さんに魔法の存在をバレたらしい。

まあ、そんなことは置いといて、今はお嬢様と二人で彩輝様の帰りをホテルのロビーで待っている。

待ち時間の合間に、自動販売機でお嬢様はオレンジジュースを私は烏龍茶を購入し、ロビーに設けられたソファに隣り合うよう腰掛けしている。

そろそろ朝倉さんと話し終えたネギ先生がこちらに向かってくると思うので、今の内に彩輝様には帰って来て欲しいところだ。

ただ話すだけなら何の問題も無いのだけれど、派閥や組織間の争いが関わってくると、線引きが重要になってくるから、その辺の采配が一番詳しい人に任せたいのが本音になる。

「お嬢様、もう一度電話なさってはどうですか？」

という私の問いかけに対し、

「うーん。あんまり意味は無いと思うけどなあ」

と言い返すお嬢様。

そう言いつつも、お嬢様は手に持っていたオレンジジュースをテーブルに置き、制服のポケットから携帯を取り出して、彩輝様に電話をかける。

隣に座っているの、昼のように耳をお嬢様の携帯電話に近付ける。

そして、発信音が途切れた。

『私メリーさん。今出雲に居るの』

昼にも聞いたようなセリフがまたしても聞こえてきた。というか出雲って、京都通り過ぎてますよ。

「や。もうそれはええって……あ、切れた」

お嬢様が突っ込むと通話を切られてしまったようだ。本当に何の意味も無かった。

昼は確か高尾山と言っていたような気がするが、彩輝様は一体何をやっているのだろうか。

お嬢様は昨晚やったこと　タマシズメの説明に行っていると言っていたが、修学旅行で日本一周する人なんて初めて聞いた。それももうすぐ見ることになるんだろうけど。

そう考えていた時、

「あ」

お嬢様の携帯が鳴った。



「兄様からやね」

携帯の画面を見ながら発信先の相手を述べる。

「もしもし」

さっき何のために切ったのかよく分からないけど、居留守を使う場面でもないし、意味も無いのでお嬢様は素直に電話に出る。

『私メリーさん。今貴女の後ろに』

と、彩輝様の声が聞こえてきた。

まあ、大体予想は付いていたので、お嬢様と一緒にバツと勢いよく後ろを振り返る。

しかし転移魔法が何かで突然現れると予想していた私たちの考えは裏切られることになった。

「居る、と思わせて下でしたー」

「ひゃああつー!」

お嬢様が悲鳴を上げ、ソファから飛び上がった。お嬢様の足元を見ると、影からぬう、っと手が伸びてお嬢様の足首を掴んでいる。

その光景は正しくホラー映画のそれ。私も思わず立ち上がり、一歩引いた。物理的にも心理的にも。

完全に、後ろから来るんだろうなあ、と思い込んでいた節があったし、そもそも気付かれないよう足首を掴まれるというシチュエーションが日常生活に無い為、お嬢様も反射的に悲鳴を上げ、手を蹴る程に驚いてしまったようだ。

「あ痛」

不運なのか幸運なのかはよく分からないけど、スリッパだったので大したダメージは無いと思う。

そしてゆっくりと影から這い出てくる彩輝様。スーツから黒地の着流しに着替えているようですが、そんなホラーは注文していません。

「まさかと思うけど、この演出をやりたいが為だけに、ずっとメリーさんを連呼してたわけやないよね？」

「それこそまさかだ。幾ら自分の不始末が原因で日本中を駆けずり回る破目になったとはいえ、最後にちよつとした潤いが欲しいだなんて考えるわけがないだろう」

……考えてたんだ。

「時に妹よ」

「何、兄様？」

「いや、色気のないパンツ穿いてるなあ、と思って」

「そんなの見る人なんて兄様ぐらいしか居らへん、よっ」

言いながらお嬢様は彩輝様の左足の小指に踵を落とす。

「いつてえっ！」

足を押さえるように蹲る彩輝様。ああ、確かにこれは痛そうだ。つて、いや、

「そもそも見ないで下さいよ！」

「大丈夫。刹那のは見ないよ。そんな失礼な真似、妹以外にするわけないじゃないか」

「……………」

痛みが抜けたのか、立ち上がった彩輝様が顔色一つ変えずに言う。

本人目の前にしてこうもはっきり言われると、それはそれで何かムカつきますね。

いつまでも立っているのはどうかと思うので、お嬢様と私はさっきと同じソファに座る。その対面になるように彩輝様が座られた。

このままだと、無駄話をしている内にネギ先生が来てしまう予感がすごくするので、今の内に私から話題を振っておこう。

「それで、ネギ先生にはどこまで説明するつもりなんですか？」

「当たり前障りの無い部分」

ええー。事実でも納得しませんよ、絶対。

「ネギ先生は魔術戦闘を見ている可能性があって、素直に引き下がるとは思えませんよ」

と、私が言うと、

「ああ、それぞれ。相手、篠ノ女だったんだってな」

彩輝様は昼に会った篠ノ女さんの名前を出した。

「知り合いなん？」

私も思った疑問をお嬢様が問いかける。

「意見の相違があつたから、ガチバトルをしたただけだ。流石、首領の懐刀とか言われてるだけあつて強かつたよ」

あの人そんなに強かつたんだ。ってそうじゃなくて！

「ガチバトルって、彩輝様は一体何をしに行つたんですか!?!」

「まあ、それについては零時頃に六班の班部屋に集合ということで消灯時間は考慮しないんですか。いつものことなんで今更気にはしませんけど。」

そうしている内に漸くネギ先生が神楽坂さんを伴ってやって来た。

表情を見るに、朝倉さんの問題は無事に一段落ついたようだ。

詳しい経緯を知らないから何とも言えないけど、態々報道部の麻帆良パラッチと言われている人にバラすことはないと思います。

「木乃香さん。昼間のアレは一体何だったんですか。教えて下さい！」

「一つの問題を解決出来たからだろうか、息巻いた様子でネギ先生が尋ねてくる。」

「まあ簡単に言うのなら、ウチがモテモテってことやな」

「一言目から茶化し始めるお嬢様。」

「お兄ちゃんはそのような交際認めません。相手方の組織を問答無用で潰すぜ」

「大丈夫やって、兄様。だって」

と、お嬢様はソファから立ち上がり、彩輝様の目の前に移動する。そして、正面から抱きつくように彩輝様の肩に腕を回し、体重をかけて、身体を密着させた。

「一挙一動が、なんというか、すごく艶めかしい。」

「ウチが愛してるのは兄様だけやもん」

そう彩輝様の耳元で囁くお嬢様。私までちょっとドキッと思いましたよ。

「木乃香……俺もだ」

そつと彩輝様も両腕をお嬢様の頭と背中に回して抱きしめる。離さないと思表示するかのように。

「なら、兄様。ウチと一緒に逃げてくれる？」

お嬢様はほんの少し身体を離して、顔の距離が数センチといったところでそつ尋ねる。

そして、まるで返答は要らないと言うように、僅か数センチの距離も零へと近付いて行った時、

「ちよ、ちよつと！ 兄妹で何やってるのよ！！」

顔を真っ赤にしてもう耐えられなくなったらしい神楽坂さんが突っ込んだ。

そろそろ私が突っ込んだ方がいいのかなあ、と思い始めたときだったのでちよつと良かったです。

「とまあ、戯言は置いといて」

それを合図にパツと離れるご兄妹。

「いやー、せつちゃん。もっと早く突っ込んでよ。どこまでやればいいのか分からなくなつたえ」

「日本一周した後に逃避行とか、ヨスガエンド並みに勘弁だわ」

からからとお嬢様が笑う。

けらけらと彩輝様が笑う。

「こ、木乃香さん！ 何をしてるんですかつ！」

慌てた様子でお嬢様を注意するネギ先生。これは教育上良くない光景を見せてしまったのではないでしょうか。

「冗談やって。こんな失礼な真似、兄様以外にするわけないやろ」と先程聞いたようなセリフを口にするお嬢様。

「ほ、本気じゃないのよね？」

確認の為に神楽坂さんが発言する。

「本気に決まってるだろ。愛してるぜー、木乃香」

「イエー、私もやえー」

「そろそろそのノリに誰も付いて来れなくなるので自重して下さい。ええ、本当に」

私からの切実なお願いです。

願いは受け入れられ「さて、何の話だったか」と、この話題から離れることに。

「確か、人生で初めて出合ったツンデレはナディアじゃないか、み

「たいな話だったよな？」

「ウチは……ルト姫かなあ」

「違いますよ！ 昼間に奈良公園であったことを聞いてるんです！」

ネギ先生が正しく話題を修正しようと試みるが、もうこっちに真面目に話す気が無いという意図を汲み取ってはくれないだろうか。

「はあ。もう無理だと思えますよ」

溜息を吐き、ぼつり、と呟きを洩らした。そして、これを聞きつけたのか、

「狂ってやがる」

「遅過ぎたんやね」

やれやれと、手を額に当て、無駄にシンクロナしながら首を横に振る二人。

「いや、彩輝様とお嬢様のことですよ」

「「……えっ？」」

「ちよっ、そんな同時に『心外だ』みたいな顔されても」

当たり障りの無い部分にいくまで、あとどれだけの時間が掛かるんだろう。今のところ、当たるどころか触れてもいない。



「ちょっと！ 何で木乃香が狙われてるなんてことになってるのよ！ 説明しなさいよ！」

神楽坂さんまでいきり立ったところで、彩輝様はネギ先生の眉間を数ミリ先で止めるようにして、指差した。

「線引きをしよう」

先程までとは違い、別種のオーラを纏って厳かに彩輝様が口を開く。

漸く、シリアスに移る気配が。期待は出来ないけど。

「線引き、ですか……？」

「そうだ、ネギ・スプリングフィールド。お前に与えられた任務が何か言ってみる」

「か、関西呪術教会の長に親書を届けること、です」

ネギ先生は突如として場の雰囲気が変わったからか、すっかり呑まれてしまっている。

「それと、昼間の一件と何の関係があるっていうんだ？ お前が現場に行かなければ知ることすらなかった出来事だろう？」

「関係なら、あります。あの人たちは木乃香さんに何かしようとしていました。教師として見過ごすわけには」

「そこだよ」

彩輝様はネギ先生の言葉を遮ります。

「お前は魔法協会の特使なのか、一般の教師としてなのか、その辺をはっきりさせてから出直して来い」

「ぼ、僕は……」

それにネギ先生は言い淀む。

しかし、上げ足を取るようで悪いですけど、職業欄にエトセトラと書き込まなければならぬ彩輝様がそれを言いますか。

それに特使も『一般』の教師もお嬢様を守らせる肩書きじゃないし。

まあ、結果を出せるかどうかは大きな差ですけど。

「だったら！ 木乃香が危険な目に遭ってもいいっていうの！」

ネギ先生が関われないならお嬢様が危険。うん、その論理の展開はおかしい。

「いや、明日菜。ウチは全然危険やないえ。寧ろ、世界で一番安全な場所に居るんや。」

それに、ホンマに危険やったら修学旅行なんて参加せずに、兄様とせつちゃん拉致して学園で遊んでるって」

最後の方、何か不穏な単語が混じったような気がしたが、概ねお嬢様の言う通りだ。態々自分から危険な場所に踏み込む道理は無い。

どちらかと言えば、目隠しをしたまま地雷原を歩こうとしているネ

ギ先生たちに当て嵌まるんじゃないだろうか。

「つまり、木乃香の心配は不要だから、お前は自分の任務を全うすればいいんだよ」

そう言っつて彩輝様がこの話し合いの結論を出しました。

「こら。そこ、もうすぐ就寝時間だぞ。自分の班部屋に戻りなさい」

そして、計ったように新田先生が現れる。いや、計っていたのは彩輝様か。

新田先生に言われてしまったら仕方ない、といった風に解散する私たち。

彩輝様はそれでいいかもしれませんが、お嬢様と私は神楽坂さんと同じ部屋なんですけど。いや、宮崎さんたちも居るからそんな話にはならないか。ならないことを信じます。

零時になったら六班の部屋に行くことを忘れずに、空になったカンをゴミ箱に捨て、五班の部屋へ戻った。

SIDE 瀬流彦

「やあやあ瀬流彦教員。昨晚は泊めてもらったのに色々と忙しくて挨拶やらお礼やらが遅くなって申し訳ないね。と言っても、俺が本気で謝罪することなんて滅多にないからさっきの申し訳ないと言っ発言も場を円滑に進める為と思っつてさらっつと滝壺に流してくれ。」

ところで、高い所から落ちるといっつ光景で連想してしまっつたんだ

が、サスペンスなんかのラストには崖が採用されるのに滝が採用されないのはなんでだろうね？ 崖にしる滝にしる簡単に行ける場所じゃないっていう共通点はあると思うんだけど。ああ、これは落ちるから連想した話だけど、話の内容自体にオチは無いからやっぱりこれも流してくれ。

いやあ、意識しないと関係の無い話ばかり広がってしまう。気を付けないとなあ、とは思っているんだけど、俺は関係の無い話をするのが大好きだからね。そんなわけで改めまして、俺は近衛彩輝。修学旅行中はこちらの部屋にお世話になります」

……………え？ 今の挨拶？

就寝時間が近づいてきて、部屋に戻って来た彩輝君の開口一番のセリフがこれだ。

原稿用紙一枚分程の量を一気に捲くし立てるように喋ってたけど、こんなに饒舌な子だったっけ？

昨日は逆にずっと携帯を操作してて、全く喋らなかつただけ。それに就寝時間間近にどこかへ出掛けて行っちゃおうし。

止めようとはしたけど、学園長からネギ君同様、好きにさせろって言われてるからなあ。

京都で大事件があったらしくて、学園長から昨晚のことを詳しく聞け、とも言われてることを思い出した。

確かに昨日は僕もすごい魔力を感じたけど、あれは絶対に人がどうこう出来るレベルじゃないよ。

学園長のお孫さんといっても、一介の魔法生徒が関われるレベルじゃない。そう思っけど、命令だからなあ。

それに今日は何故だか饒舌みたいだし、何か知ってたら教えてくれるかも。

そんな期待を胸に僕は彩輝君に話しかけた。

「あのお、前々から気になってることがあるんだけどいいかな？」

「何でしょう？ 瀬流彦教員」

「彩輝君はいつも教員って呼んでるけど、普通に先生とは呼ばないの？」

いや、いきなり昨日の事件について何か知ってるか、なんて僕は聞けないよ。軽く世間話から入らないと。

「ああ。深い意味は無いんだ。他人の嫌がることを全身全霊でやる俺とは全く違う極悪人のことを人生で初めて先生と呼んでしまっただけね。アレと同列に扱うのは自分でもどうかと思っただけで」

さらりと自分のことを持ち上げたね。

「極悪人ってそんなにヒドイ人だったの？」

「酷いっていうか、引いたね。ジジイ呪殺しようとしたり、霊脈喰おうとしたり」

……ちよ、ちよっと待って！

「なんて、戯言ですよ」

そう言っつて、彩輝君は笑う。

そうだよね。冗談だよね。明らかに僕なんかに関わるべきじゃない話が出てきたから焦ったよ。霊脈を喰らうなんて御伽話でも聞いたこと無いし。

でも、ちょうどいいや。ちょっと強引だけど、この流れで聞いてちやおう。

「へえ〜。てつきりそんな事件があったのかと思っちゃったよ。あ、そういえば。昨日もこの辺りで何か事件があったらしいんだけど彩輝君は何か知ってる?」

「知ってるよ」

そう……っつて、え!?

「何も知らないということを知っている」

「なんだ。驚かさないでよ」

「まあ、これだけは確実に言えることがある」

と言っつて、彩輝君は真っ直ぐに僕の目を見る。

相手は子供の筈なのに、まるで全てを見透かされているみたいで落ち着かない。

そして、彩輝君はさっきの続きの言葉を口にする。

「近衛彩輝は何もしていない」

うん。やっぱりそうだよな。大人の僕でも出来れば関わりたくないと思ったのに、まだ中学生の彩輝君が進んで事件の渦中に行くとは考えにくいし。

好奇心猫を殺すとは言っけど、そういうのとは縁遠そうだしね。

そういえば、明石教授が何か言っていたな。亡くなった奥さんの知人に似た人が居たとか、そんな感じのことを。

まあ、年齢的に他人の空似だろうけどね。

「じゃあ、僕はこれから見回りに行ってくるけど、なるべく部屋は出ないようにね」

「ええ。っと、そうだ。今の職場を辞めることになったら言ってくれよ。俺のコネをフル活用して再就職先を見つけるから」

「ははっ。そんなことにはならないって」

最後に彩輝君の冗談を聞いて、僕は部屋を後にする。

近衛彩輝は何もしていない。

その時、特に理由は無いけど、この言葉が反芻された。

SIDE彩輝

そして瀬流彦（漸く一人、魔法先生の顔と名前を覚えた）が部屋を出てから、いつの間にか零時が来ていたので、ちうちちゃんと《門》の出入り口を分担して、六班の部屋に入る。

「……お前、それ本気なのか？」

で、今俺の考えを説明し終えたところだ。そして、朱織が寝入ったところだ。

「本気も本気。何のために日本全国駆けずり回って、喧嘩売りまくったと思ってるんだよ」

「もっと平和的な話し合いは出来なかったんですか？」

「仕方ないじゃん。こっちはスクナと魔法理論の説明だけで喋り疲れたんだから。途中から魔術決闘に切り替えたっていいだろう？」

全く。俺が真面目に仕事をすると期待する方が悪い。

「で？ 決闘までした成果はあったと」

「ああ。算段の平兵衛と呼んでくれ」

「いえ、絶対に鉄砲勇助でしょ」

さよちゃんが答えてくれたけど、反応を見る限り案の定ちうちちゃんなんかは分かってないね。



まあ、気になるなら後でググるだろう。

「で、六百年世界を見てきた吸血鬼様はどう思います?」

そして俺はエヴァに話を振る。

「まあ、構想自体は悪くない。可能か不可能かと言えば、まだ実現可能の領域だろう。だが」

「時間と金か」

「そうだ」

急ごしらえの案だから色々とボロは出るだろうとは思っていたが、問題はここだよなあ。

あー、もっと縁作つとけばよかった。

「金って、お前滅茶苦茶持ってるだろ」

と、ちうちゃんが言ってくるが、

「それも使うつもりだけどさ、一時的なその場凌ぎじゃなく、継続的な収入がねえ。企業を大きくするぜー、みたいな」

表側の繋がりには弱いからな。はっきり言って、専門外だろ。

「なんだ、コンサルタントでも紹介して欲しいのか?」

「優秀なら、性格・経歴一切問いません」

ふうん、とちうちゃんは曖昧な返事し、茶々丸と目を合わせる。何その意味有り気なアイコンタクト。

まあ、俺が普段、ソロモンの魔神を通じて、どの株が上がるか未来視するみたいに魔法使いには未来を知る術があるからな。多分大丈夫だと信じたい。

「基盤作って地盤固められれば御の字かな、これは」

そしてもう少し、主にエヴァと話した後、瀬流彦の部屋に戻って寝た。

おっと。ついすっかり忘れてたよ。ネギ・スプリングフィールドと宮崎のどかが仮契約をしたらしい。

まあ、どうでもいいか。

第四七話・比較的穏やかな三日目（前書き）

皆神さん家のさくやちゃん可愛過ぎて、何も手につかない今日の頃。

## 第四七話：比較的穏やかな三日目

現在の時刻は昼過ぎといったところだろうか。

昨日と同じようにホテルの大広間で朝食を取った後、彩輝たち六班はまたしても京都の街へ繰り出していた。

昨日と違うところは京都出身の彩輝が居るということだ。

この修学旅行に一番乗り気だったエヴァの要望で、午前中は昨日行けなかった観光スポットを巡ることに費やされた。

京都のほとんどの名所を制覇し、ご満悦になったエヴァは兎も角として、残りの五人は一休みするために、とある店を訪れる。

六人が今居るのは、祇園にある小さな甘味処。

小さいと言ってもかなりの歴史があり、店内には仄かに甘い匂いが漂っている。

窓から見える庭園もまた手入れが行き届いており、見ているだけで心安らぐ空間を提供してくれる。

そこで彩輝たちは窓に近い畳席に陣取り、昼食も兼ねて各々好きな料理を注文する。当然、デザートにはあんみつやぜんざいなどを。

「さて、他に行きたい所とか予定ある人っている？」

そう尋ねたのは彩輝。今日は完全自由行動日で私服での行動が認め

られているので、当然のように和服を着ている。見慣れてるだけあってスーツよりも似合うとは全員一致の見解。

「お前は自分の予定を優先させろよ」

呆れながらに言い返すのは千雨。

今の京都の現状を考え、今日明日中に起こるであろうことを想像すれば、それも当然と言えよう。

「してるって。今はタイミングを見計らってるんだよ。同じ手札でも出すタイミングと順番で全く違った結果になるだろ？」

それを聞いて、大富豪でもいきなりジョーカーを出す奴は居ないかと千雨は納得し、ぜんざいを口に運ぶ。

同時に口の中に広がる程よい甘さ。

店の雰囲気も良いし、味も申し分ない。彩輝がここを選んだのも理解できる。

「そうすると、実は今すごい暇なのか？」

「暇っちゃ暇だけど、全体的に見たらヤバイぐらいハードスケジュールだと思っぜ」

「一日で日本各地の有名結社を巡る人なんて初めて見ましたからねえ」

と、さよも隣から口を挿む。

「まあ、日本一周とは言っても、九州の方に行かなくて済んだのは助かったな」

けらけらとおどけたように彩輝はそう口にする。

現在九州地方の最大勢力を誇る結社、鬼灯一門は諸事情により協会の多大な支援を受けている状態で協会の人間も多く、態々行く必要はない、と判断された結果だった。

ここでのんびりあんみつをパクついている彩輝こそが諸事情を引き起こした張本人なので、行っていれば一波乱あったのは確実である。

「……九州か」

小さく千雨が呟いた。

「ん？ 何？ 今から行くの？」

その呟きを聞いた彩輝が尋ねる。

「行くわけねえだろ！ まあ、ちょっと思い出したことがあるだけだ」

「ちょうど春休みだったんで、彩輝さんもご存じなんじゃないですか？」

千雨の言葉に続くよう言ったのは茶々丸。

話を要約すると、春休みが始まる前に福岡で二千万相当の絵が盗まれたというものだった。

「時期的には合ってるから、そんなニュースを見た記憶もあるような気がする」

と言っても、俺が居たのは大分にある時代遅れの武家屋敷だったけどわ。

早い話がうる覚え、もしくは覚えていないということだろう。

「そうそう。昔話というのなら 比叡山 で面白い話を一つ聞いてきたぜ」

「面白い話ですか？」

「俺の隣で突っ伏している妹の恥ずかしい過」

最後まででは、言えなかった。

昨日のニュートラルなテンションが夢だったかのように、いつも通りのローテンションでいた朱織が彩輝の首に腕を巻き付け、一言こつ言ったからだ。

「黙れ。折るぞ」

追記するなら、三秒前まではおおよそ考えられない俊敏な動きで、かなりの早業だった。

「甘いな、朱織。お前に羞恥を与えられるなら、マミられることも

「  
ぐっ、と腕に力が込められる。

「  
というのは冗談だから本気にすんな。……ちよっ、待って。  
マジで、気管に……」

ぺしぺしと朱織の腕を叩き、ギブアップの意思表示をする。

そして解放されると同時に盛大に咽る彩輝。

「相変わらず妹には弱いな、オイ」

冷静に成り行きを見ていたエヴァが冷めた目で一言。

「ごほごほつ。……いやいや、他人より少しは死にづらいと日頃  
から自負してはいるが、流石にマミるとか即死級のはちよっど勘弁  
願いたいねえ」

俺だって、あくまでベースは人間だからな。

と彩輝が言い、それを聞いたエヴァが更に一言。

「つまり即死じゃなければ死なないと」

「まあ、指一本動かせれば延命の為の小細工なんて幾らでも出来る  
し」

「ハウルを即死させる一撃なんて私でも十年単位で準備期間が欲しいところだよ」



「いや、そもそも自分が殺される過程の話で盛り上がんなよ」

千雨に窘められ、それもそうか、とこの話題は打ち切られる。

その代わりと言うように、新たな話題をさよが提供する。

「さっき気になったんですけど、朱織さんって比叡山に居たんですか？ 神道なの？」

「神仏混合ってややこしいよね　え。まあ、私が居たのは日吉大社の方なんですけど」

さよの問いに朱織が答える。

「一つの山に寺と神社が同時に存在してるからなあ。別々の結社として扱えば縄張り争いとかで泥沼化するのは必至だから、対外的に比叡山　って一つの結社に纏まったのが始まりらしいぜ。知名度が低いからって質まで低いとは限らないからな。」

で、補足するなら現当主は日吉の出」

更にそこへ補足説明を入れる彩輝。

当主が入れ替わる時期はやはり少しゴタゴタが起こってしまうので、関西呪術協会の代表である詠春が仲裁に入り、日吉大社から現当主を推したということだ。

その縁があつて、彩輝が詠春に朱織の修業先を頼んだ時に、比叡山の名前が挙がり、当主の方も恩があるので二つ返事です承。

そして、朱織が神道を修めるに至るといったこととなった。

「本当にややこしいですね」

説明を聞いたさよがそう答える。

「まあなあ。頼まれても無いのに他人の結社の内政に首を突っ込むなんて、出来る限り避けたいところだよなあ」

しみじみと呟くが、その顔には「面倒だ」という本心がべったりと張り付けられている。

「これから騒動を起こす人間のセリフとは思えんな」

そんな彩輝を見て口を開くエヴァ。

「人を事件の首謀者みたいに言いやがって。俺は色んなものに便乗して、利用するだけだ」

「どうやっても事件の首謀者にしか聞こえねえよ!」

「今のは自分でも言ってるってそう思ったわ」

すかさず突っ込みを入れてくる千雨に笑いながら言い返す彩輝。

「皆さん食べ終わられたようですし、そろそろ店を出た方がいいんじゃないでしょうか」

外で騒がしくなりそうですし、店の方にご迷惑お掛けするのも。

そして話に一段落ついたと判断した茶々丸が席を立つように促した。

その意見に反対の者は居らず、全員が席を立つ。

「昼食代くらい奢らしてくれよ」

と彩輝はこの場の会計を済ませようとする。

「流石に六人分は気が引けるっていうか、自分の分は出すって」

「まあまあ、千雨さん。世界で三番目に幸せなのは人の金でご飯を食べることだよ　う」

比較的良心のある千雨とさよが払おうとするが、朱織がその流れを断ち切る。茶々丸も払おうとしたのだが、エヴァに言われそのまま沈黙。

「で、二番目に幸せなのは人に飯を奢ることだよな」

店員に金を渡しながら、彩輝が続ける。

「……じゃあ、一番目は何なんだよ？」

気になってしまったのか店を出て、不自然なほどに誰一人通らない道を歩きながら、千雨が二人に尋ねる。

「人の金で映画村に行くこと」

「脈絡ねえな！」

「脈絡はあるだろう。折角京都に来てるんだし」

「一度貰ってみたいよね　え。袖の下」

「つまりアレか？　一番目は他人から金を巻き上げるってことではないのか？」

「いくらさつき甘々なせんざいを食べたからといって、人に辛いモノを与えようとするなんて。ちうちゃんは怖いなあ」

「他人の不幸は蜜の味とか考えてそんなお前にだけは言われたくないよ！」

「だんだんツツコミの波長が合ってきましたね　え」

「まずは話を合わせろ！」

「それで？　その東京でニート達がやってそんな漫才はいつになったら終わるんだ？」

観客は今にもフリーガンを起こしそうな雰囲気だぞ。

そして漸く、それまで眺めていたエヴァが割って入り、このやり取りも終わりになる。

はあ……と千雨は深く、深く、マリアナ海溝並みに深く息を吐き、

「ったく、仕方ねえな」

と片手で髪を掻き上げながら毒づいた。

「キヤハハハ。さあて、」

一転。がらりと纏う雰囲気を変えた朱織が嗤う。とても愉快だと言わんばかりに、嗤う。哄笑する。

「始めるとしますかねえ」

そして、朱織の言葉を繋げるように彩輝が口を開いた。

「一体、何を始めるんです？」

そう聞いたのは、服の袖に仕込んであったフラスコを取り出した茶々丸。

零崎じゃない何かだよ。

彩輝がその問いに答えるのとどちらが速いか、数十の符が彩輝たちを狙って飛翔する。

ここに開戦の狼煙が上がった。

そして同時に、パンツ、と静謐な音がこの場に満ちる。朱織の拍手である。

「被え」

一切の魔を被う結界が展開され、符はその壁を越えること無く威力を失った。

だが、それと入れ替わるように、またしても数十の符が殺到する。

「なんか、数多くないか？」

その光景を見た彩輝がポツリと呟く。

「どうせどっかの誰かが神を還したことによる弊害だろうさ」

「……ああ。そういえば、情報を聞き出す為に何人かと遊んだんだ  
つた」

攻撃を受けてもなお、緊張感に欠けた会話を続けるのは彩輝とエヴァ。  
ア。

そんな二人を余所に戦闘は続く。

「千雨さん。一時方向九メートル先、四時方向七メートル先、七時  
方向十四メートル先に《門》を」

「《道よ開け》」

内蔵されたサーモカメラや人工精霊を駆使し指示を出す茶々丸。その  
的確な指示に即座に対応し、千雨はすぐさま《門》を繋げる。

「封印術式二、五、六番、開封。さよさん」

「はい」

そして茶々丸が放った三つのフラスコは、さよの『騷霊現象』によ  
って《門》を通過。次の瞬間にはフラスコを破壊し、それに伴って

中に入っていた液体が瞬時に気化した。

気化した薬品は、まるで自分の意思を持っているかのように、周囲の人間の口や鼻といった呼吸器を狙って殺到する。

突然呼吸を奪われれば、如何に魔法使いといえど、すぐに対処出来る者は少ないだろう。

「《閉じる》」

アアアああアアアああアアツツ！！

《門》が閉ざされると同時に三方向から聞こえてくる悲鳴。幾人の泣き喚き咽び叫ぶ声。

中には肺の空気を押し出されたことにより、気を失ってしまった者も居るだろうが、それがどれだけ幸せなことか。

幻術を得意とする錬金術師の触媒を昏倒するほど吸ったのだ。

自身のトラウマを刺激されたのか、悪夢の中を彷徨っているのか、未だ嘗て体験したことも無い恐怖に身を震わせているのか。

対象者の身に何が起きているのかは、術者である茶々丸自身でさえも詳細は把握出来ない。

「相変わらずえげつねえな」

「いえいえ。千雨さん程では」

余裕が生まれたのが軽口を叩き合う二人。

その直後、建物の陰や屋上から、直前で護符が間に合ったか、始めから範囲外に居たであろう何人も人が躍り出て来た。皆それぞれ手に刀や槍、筆架叉などの得物を携えて。

彼らもその道では一流と呼んで差し支えない腕の持ち主なのだろう。

故に、たった六人の中学生を襲うなんて仕事を軽く見ていた。心の何処かに慢心があった。

だが、少しばかり青い顔をし、相手の实力を知った彼らに最早油断は無い。

明確な敵と認識し、排除すると決めて  
そのまま張り巡らされた網へと突っ込む。

そして為す術もなく、捕縛された。

「糸はハウルの十八番であって特権というわけではないからな」

このセリフから鑑みるに、網を張ったのはエヴァらしい。

「『偶には私にもやらせる』なんて言うから譲ってやったのに」

正直これ、二度手間だぜ。

言いながら彩輝はエヴァの糸を弾く。

糸の振動は音と一緒に捕縛された者たちに届いた。



「一曲いかがです？」

「じゃあ、その間に私は残党狩りにでも」

いち早く朱織がこの場を後にする。

彩輝は『倉庫』から楽器を出しながら、おどけたように言うが、彼らが知っていることを洗い浚い喋るまで演奏は続けられた。

全ての勢力の事情に内通した彩輝たちが、本格的に動き出した瞬間だった。

#### 第四七話・比較的穏やかな三日目（後書き）

テストあるんでこれが今月最後の更新になるかと。

#### 第四八話：誓いを立てる三日目（前書き）

テスト直前にインフルエンザに罹ったことに呆れ、留年回避した自分  
分にビツクリ。

#### 第四八話：誓いを立てる三日目

彩輝たちが京都の観光名所を回って、甘味処で寛いでいた頃。同じ京都の空の下で、その妹である木乃香は思案に暮れていた。

木乃香が属する五班が今居るのは、京都のとあるゲームセンター。

態々修学旅行に来ているのにゲームセンターへ足を向けるのもおかしな話だが、どうやら関西限定のレアカードがあるらしく、それを集める為だそうだ。

こういったことは本当に大好きな面々である。まあ、ゲームは面白いのだから仕方ない。

問題はこのゲームセンターに釘付けにされているということ。

ひしひしと良くないモノが感じられる。それに合わせてぞわり、と肌が粟立つ。

「ケケ。中々、大シタ狂気ジャネエカ」

周りに居る人間に聞こえないように小さく呟いたのは、木乃香の頭の上に乗っている人形　チャチャゼロだ。

隠すつもりも無ければ、隠れる気配も無い。そんな狂気を持ち主に木乃香は頭を抱えたくなる。

「……なんや、知り合いのような気が」

それに拍車を掛けているのがこの既視感。

一人だけ、木乃香にとっては忘れられる筈もない事件の渦中で知り合った、長短二振りの刀を手にした同年代の少女の姿が脳裏をよぎる。

（あの人一般人を巻き込まないとか素敵な事を言ってくれる人やつたかなあ）

こんな自問自答をしている時点で、その保障は無いも同然だろう。

そしてその相手をするのは自分ではない。

隣でただ静かに、ただただ研ぎ澄ませるように佇んでいる幼馴染と、自分の頭の上に乗って居る、六〇〇年間主と共に戦い続けた殺戮人形が相手をするのだ。

木乃香の既視感が現実のものとなったら、敵であろう少女が盛り上がる要素しかない。

今はまだ歯止めが掛かっているようだが、一度戦闘が始まってしまえば、確実にこのゲームセンターは廃業する。廃墟に変えられる。下手をすれば瓦礫の山だ。

故に迂闊に動くことが出来ない。

（まあ、釘付けにされる代わりに、あっちも礫にしとると思えばええか）

さつきネギ君と明日菜が出て行ったけど、追いかけてようとしてへん

し。

この二人を説得して送り出すのは少しばかり苦労した。個人の安全と組織の指令を天秤に掛けられても、掛けられた側は不安で仕方ない。

兄ならば、『迷惑だ』の一言で相手の好意などは一切顧みずに切り捨てるのだろうか。

それにしても、敵を目の前にした膠着状態は、まだもう少し続きそうである。

「あ　っ！！　負けた　ッ！！」

と、突然大声を上げたのは先程までゲームに熱中していた木乃香の友人の早乙女ハルナ。

「あー。さっきのところは呪文系使った方が良かったんやない？」

自分の思考はおくびにも出さず、木乃香はハルナに話しかける。この辺りの切り替えは、彼女の兄に似てきてしまったのではないだろうか。

「ぐわー。読み間違えちゃったよー。何か字牌切ってくると思ったんだけどなー」

ハルナはがしがしと頭を搔いて反省。

「いえ、それよりもあそこで移動タイルを置いて『出航』を選んでおけば良かったのでは？」

更に横から同じ班員の綾瀬夕映が口を開く。

しかしそれにしても、どんなゲームだ。

「よし。それじゃあ」

と、リベンジに挑もうとするハルナがあることに気付いた。

「って、あれ？ ネギ君と明日菜は？」

「ああ。二人ならちよつと外すって言うてたえ。その辺でお土産でも買っとるんやないかな」

顔色一つ変えずに平然と答えれるところもまた、似てきた部分だろうか。

「ではのどかも着いて行ったのでしょうか」

「……………え？」

ポツリと呟いた夕映の一言に冷や汗が出てくるのを感じる木乃香。

ネギと明日菜、敵の対応でそこまで気が回っていなかった。

「せつちゃん。気付いてた？」

宮崎のどかがいつ消えたのか全く覚えていない。ギリギリ呼び戻せる範囲ならまだいいが。

「すみません」

幼馴染は申し訳なさそうに頭を下げる。こちらも全く気に留めていなかったようだ。

ただでさえ、実家の派閥争いだけでも厄介なのに、東から西への特使派遣。兄は兄で色々と謀略・計略を張り巡らせている真つ最中。

正直、もう一杯一杯なんでこれ以上面倒事を増やさないで欲しい、と切に願う木乃香。

（あー、もうええかなー。ネギ君って言ってしまえば親書を届けるだけなんやろ？ もしのどかが追いついてたら、ネギ君に任せよう）

寧ろ、一ヶ月前に魔法の存在を知ったウチにどうしろと。

何よりも今ここで木乃香が動けば、同時に狂気の持ち主まで動くことになってしまう。

それに迂闊に実家へ近付けば、それが原因で新たな一波乱を作ってしまうかもしれない。

こうして、ゲームセンターで時間を潰しているのが、周りへの被害を考えると一番なのだ。

一方。木乃香と理由は違うが、狙われているという点では同じネギ・スプリングフィールドとその従者神楽坂明日菜は、関西呪術協会総本山へと向かっていた。



「もう！ 木乃香も木乃香よ。なんで自分が狙われてるって分かってるのに、あんな暢気に構えてるわけ！？」

道中、そう愚痴を零すのは神楽坂明日菜。

「全くだぜ。そこらの魔法使いなんかより、真祖の吸血鬼を倒せる兄貴と一緒に居た方が安全なのによ」

明日菜の発言に同調するように言うのは、ネギの肩に乗っているアルベール・カモミール。

「でも木乃香さんにはちゃんと考えがあるようでしたし」

二人に対してネギは一応擁護する発言をするが、その顔はやはり納得しているとは言い難い。

彼らにとって木乃香は大切な友人なのだ。その友人が危険な目に遭おうとしているのに、黙って見過ごすなんてことは出来ない。

当事者からは戦力外通告どころか、初めから頭数にも見なされていなかったのだが。

「さつさとその親書とかいうのを届けて、悪い奴等から木乃香を守るわよ！」

「ハイ！」

意気揚々と気合を入れて、二人は本山に向けて走り出す。

そして、本山の入口へ辿り着いた二人は、その風景に息を呑む。伏見神社のように鳥居が立ち並ぶ石段。山から伝わってくる蔭かな空気。二人と一匹は京都の歴史の一端に吞まれたのである。

「早く行きましょう」

気を取り直して、ネギの一言により、彼らは石畳を進んで行く。

その様子を観察する人間には気付かずに。彼らの後を追う人間が居たことにも気付かずに。

そうして三十分程走り続けただろうか。

景色はずっと竹林が続いていて変わり映えしないが、三十分も走り続ければ嫌でも何かがおかしいことに気付く。

関西呪術協会の総本山と言っても表向きは神社である。少なくとも参拝客がずっと零ということはありえないだろう。

もう相当な距離を走っている筈なのに案内の看板一つ見えないとは。

「一体いつまで続くのよ、この石段は」

息を切らせてその場へたり込む明日菜。

「はあ……はあ……。そうですね。ちょっと休憩しましょうか」

ネギも同様に座り込んで息を整える。

「でもよ、兄貴。流石にこれはちょっとおかしいぜ。幾らなんでも長過ぎる」

「えっ？ それじゃあどういうこと？」

「ひょっとして罠なんじゃねーのか」

「わ、罠!？」

今更ながらにその事実気付くネギたち。

本当に力モの言う通りなのか、ネギは明日菜を残して一人先へと進むが、走るネギの前方には残して来た筈の明日菜の姿が。

「ちょっと！ 何でネギが後ろから来るのよ！」

わけが分からないよ。といった風に明日菜が叫ぶ。

「お、落ち着いてください、明日菜さん。きっとどこかにこの魔法を使っている人が居る筈です。その人を探せば」

まるで教科書通りの解答を返してくれるネギ。

「どうやってソイツを探すのよ」

しかしその考えも、続く明日菜のセリフによって白紙に戻る。

その後も道を逸れて、竹林の中を走ったり、上空からの脱出と、思いつく限りのことを試みるが、悉く失敗。

走り続けて肉体的に、もう外に出れないんじゃないかという恐怖から精神的にも限界が来た時、獣が現れた。まるで狩りの時間だと告げるように。

「よオ。西洋魔術師」

一昨日、彩輝によって戦闘不能一歩手前まで追いつめられた犬上小太郎である。

「君は、誰？」

見ず知らずの人間が突然現れたことから、慌てて起き上がるネギと明日菜。

「オレが誰やかそんなんどーでもええやろ。さつさと親書渡すなら、無傷でここから出してやるわ」

親書という単語から二人と一匹は警戒を露わにする。

「もしかして、この魔法は君の仕業なの？」

「先に質問してるのはこっちや。渡すか渡さんかはつきりしろ」

「そんなの渡さないに決まってるじゃないか！」

それを聞いた小太郎の反応は極めて単純だった。

「だったら力尽くで奪わせて貰うわ」

瞬動を用い、杖を構えるネギの目の前まで一瞬で移動して、ネギの

腹に掌底を叩きこむ。内臓を破裂させんと、加減なんてモノはせず  
に。

例え相手が弱く見えても、例え相手が巫山戯ていても、油断せずに  
最初から全力で勝ちを取りに行く。

―昨日の経験が活かされていた。

―昨日の教訓が活かされている。

「ネギッ！」

「兄貴！」

掌底をモロに喰らい、宙を舞うネギ。しかし、小太郎は自由落下を  
させる猶予は与えず、続け様に右足で回転蹴りをさらに打ちこむ。

それはネギの脇腹へと吸い込まれるように入り、ネギの身体を吹き  
飛ばす。

一応ネギには魔法障壁があるが、元々体力と精神が追い詰められて  
いた状態では、焼け石に水もいところ。

何よりもここまで本気で向かい合う人間から敵意と殺気を浴びせら  
れたことは、十歳の少年には初めての出来事だった。

身体の動きを鈍らせるには充分な理由。

士気を下げるにはこれほど効果的なことはないだろう。

やはり心のどこかで舐めていたのだろう。自分は真祖の吸血鬼を倒したんだと。大抵の相手には負けたりしない、勝って当然だと。

それが、蓋を開けてみればこの様である。

倒れ伏すネギの壁になるように、明日菜が立ち塞がる。

「ア、アンタの相手はこの私よ!!」

目の前で繰り広げられた、相手の安否なんて一切考えない、殺人をするかのような攻撃を見て尚、神楽坂明日菜は立ち塞がる。

大声を出して自分を鼓舞するも、顔色は優れず、既に膝は震えており、逃げ出したい気持ちで一杯なのだろうが。

「悪いけど、女殴る趣味は無いねん。邪魔せんかったらお姉ちゃんには手え出さんわ」

一昨日の体験があつたとはいえ、これまでずっと守ってきた少年の主義を変えるまでには至らなかつたようだ。

そして、小太郎と明日菜が話しているその隙に、ふらふらとネギは立ち上がり呪文を詠唱しようとした。

「ラス・テル・マ・スキル・マギス」

「百年遅いわ、ボケ」

明日菜を回り込むように瞬動で移動した小太郎の右ストレートが、ネギの左頬に突き刺さる。

「がつ！」

その一撃は障壁を抜いて、ネギの身体に甚大なダメージを与え、後方へと吹き飛ばした。

「ネギイツー!!」

悲痛な叫びを上げる明日菜。

「キヤアアアアツ!!」

その直後、ネギの飛ばされた方向から少女の悲鳴が聞こえてきた。

音源はゲームセンターで皆と別れて、ネギと明日菜の後を追って来た、宮崎のどこからである。

「ほ、本屋ちゃん!？」

「はあ。まだ居ったんか」

面倒臭そうに小太郎が呟く。

小太郎にしてみれば、この程度の傷で一々悲鳴を上げる敵なんて構いたくもないだろう。

「ま、待ちなさい！ 本屋ちゃんは無関係なの！ 一般人なのよ！」

明日菜が必死に訴え、

「……彼女に……手を、出すな」

フラフラでボロボロでズタズタなネギが精一杯凄む。

「ならさっさと親書渡してくれへんか？ オレかて弱い者いじめやのうてー昨日の借りをきっちり返しに行きたいんや」

「ぐっ……」

唸るネギ。親書を渡せば自分たちの身を保障してくれると言う。

宮崎のどかを戦いに巻き込まないようにするためには、ここは渡すしかないのではないかと、逃げの口実を考えるネギ。

そしてネギは、自分のポケットへと手を伸ばす。

ポケットから親書を取り出そうとした、その瞬間。

世界が割れた。

「何や!?!」

ガラスが砕けるような音と共に、張っておいた結界が破られたのだ。

驚く小太郎に向かって、風を斬る音を残しながら一条の光が走る。

「ちっ!」

反応出来たのは獣特有の勘か。はたまた獣と同等の反射神経の賜物か。



小太郎は自らの急所目掛けて飛んで来た物体を弾くことに成功した。空中を回転しながら上へ飛んでいく物体の正体は、銀槍である。

「何者や！」

先程の投擲技術。槍の速さ・正確さから言ってかなりの手練れであることは間違いない。

正直、こんな三流西洋魔術師の相手をするよりも心が躍る。

そう考える小太郎の問いに、弾いた槍の方から答えが返って来た。

「協会 の者だ」

再び視線を弾いた先に戻すと、一人の男が空中で槍を構えて突き出してくるところだった。

「狗神！！」

咄嗟にこれはかわせない、と悟る小太郎。

( だったら、肉を斬らせて )

敢えて、その突きを右腕で受ける。

「ぐっ！」

多少肉が抉れるのを覚悟して槍の柄を握り、こちらへ思い切り引き寄せる。

相手は空中。当然、踏ん張れる筈も無く、小太郎の思い通りに引き寄せられる。

（ 骨を裁つまで！！ ）

そして左手に狗神を集中。

「狗音爆碎拳！！」

渾身の力を込め、今の自分に出せる最大出力を相手にぶつける。

しかし 協会 の人間も素人ではない。

喰らうと思った瞬間には槍を放棄し、腕を盾にして内臓への直撃を防いでいた。これで両者共に片腕は使えない。

「槍の柄に転移魔法符を張ったわけか。いきなり現れるからビツクリしたで」

小太郎は手に握っている槍を竹林の中に投げ捨てる。

「さっきのは奇門遁甲の応用か。破るのに面倒な結界張ってんじゃねえよ」

男は懐から取り出した符を、骨を砕かれた腕に張り付け、次に小刀を取り出す。

「まだアンタみたいな人が残ってたんやな。政治の話はよう分からんけど、そっちもちよっと驚いたわ」

「戦力を集中させているのが過激派おまえらだけだと思つなよ」

対峙する二人。

先に動いたのは小太郎の方であつた。

「狗神！」

自分の影から犬を模した影が這い出て来て、男に喰らいつこうと突進する。

それを男は小刀で捌き、時には蹴り技で犬の数を着実に減らしていく。

「もろたで！」

狗神を囷にして、小太郎は更に男に追撃を加えようとするが、男はそれを竹林の中に飛び込むようにして回避。

一瞬槍の回収を疑つたが、自分が槍を投げた場所と男が飛び込んだ場所は違っている。

その行為を一旦身を隠して奇襲する為と読んだ小太郎は、先程と同じ様に偵察も兼ねて狗神を出す。

「行け」

指示を出すと同時に、竹林の中から一本の竹が投擲された。

それを小太郎は転がるようにして避ける。どうやら、男は小刀で即席の竹槍を作ったようだ。

急ごしらえな為、身体に刺さるといったことはないだろうが、それでもあの投擲技術は十分な脅威である。

二本目、三本目と連続で投げ出される竹槍。

竹林の中に潜む人間を喰い殺そうとする狗神。

戦いは消耗戦へと入るかに見えた。

小太郎は竹槍をかわす瞬間、足の踏ん張りが利かず、転がるように倒れてしまう。

(くそつ。身体が重い。血を流し過ぎたか?)

実戦経験も成長も発展途上である小太郎との差が明確についてしまった瞬間。

起き上がるうとする小太郎の背中に、ザクリと小刀が突き刺さる。

そして、急速に朦朧としだす意識。

(これは……出血量、だけや……ない……)

気付いた時には後の祭り。こうして小太郎は意識を失った。

狗神が消えたことによって、竹林から男が出てくる。

「やっと効いたか。もつと強力な毒にしとくんだった」

と、槍を回収し、小太郎を縄で縛りながら男がぼやく。片手しか使えない筈なのに縛る作業には淀みが無い。

「それで？ 君らは誰かな？」

そして漸く、協会 の人間はここで関東魔法協会からの特使を向き合ったのであった。

「ぼ、僕たちは関東魔法協会理事から関西呪術協会の長へ親書を渡すように任されて」

「あー、成程」

小太郎を肩に担ぎながら、男は納得する。

「なら送っていこう。護衛の意味も兼ねて」

そう言うと、踵を返しさつさと一人で進んで行ってしまっが、ネギたちにはそれが有難かった。

突然始まった殺し合い。目の前で繰り広げられた命の奪い合い。

感情も理性も何もかもが追いつかない。追いつけない。

「ネ、ネギ先生」

少年の横で怯えながら弱々しい声で話しかける少女。

「すみません、のどかさ。詳しいことは歩きながら説明します」

「は、はい」

「大丈夫です。のどかさんは絶対に守ってみせます」

そう、固く決意するネギは先往く男の後を追って、関西呪術協会総本山へと歩き出した。

第四八話：誓いを立てる三日目（後書き）

途中、主役が小太郎に変わったような気がしますが、気にしないで下さい。

第四九話：どうあがいても絶望な三日目（前書き）

今になって知ったんですが『神様のメモ帳』がアニメ化するそうですね。

なんという胸熱。



## 第四九話：どうあがいても絶望な三日目

ネギたちが去った後も木乃香たち五班のメンバーである四名はゲームセンターで時間を潰していた。

同じ班員二人と引率の教師が途中で消えたので、戻ってくるまで待つていよとの考えだったのだが、一向に戻ってくる気配は無い。

幸い時間潰しには適している場所なので、すぐに戻って来るだろうと気長にゲームをプレイしつつ、当初の目的である関西限定のレアカードを集めたりしながら過ごしていたのだが、

「三人とも何処行つたのかなー？」

随分な時間が経過して、流石に痺れを切らしてきた。

「ですね。ちよつと近くを見てきましたが、どこにも居ませんですし、携帯も出ないです」

「ホンマ何処行つたんかなー」

友人たちの身を案じる二人と、全て承知の上、何食わぬ顔で会話に参加する木乃香。

「集合時間までには戻って来るでしょうか？」

と、呟いた刹那の疑問に答えられる者は居なかった。

「もう結構時間経ってるしね。一旦ホテルに戻って他の先生に言っ

「の方が良いんじゃない？」

「ここからだホテルまではそんなに時間も掛からないし。

そう現実的な意見を提案するハルナ。

「一度ホテルへ戻ったら、時間が時間なので再び外出することは許可されないかもしれないし、されても近場までに制限されるだろうが。

「まあ、私はカードをほとんどコンプ出来たから良いんだけどさ」

「うちらも地元やし、今更色々見て回る気にもならんしなあ」

「観光をするには程遠い考え方であった。」

「それに、ネギたちが何かの事件に巻き込まれているとしたら、そっちの方が厄介だ。下手をすれば修学旅行の日程にも関わられるかもしれない。」

「早めに他の教師の耳に入れておいた方が無難だろう、と考えた五班の残っている面子はホテルに戻るという選択をした。」

「そして、ゲームセンターから外へ出ようとした時、」

「あつ！ ゴメン。ちょっと忘れ物した」

「木乃香が声を上げて、先程彼女たちが居たコーナーへ戻ろうとする。」

「「待っていた方が良いですか？」」

その背中へ夕映が質問を投げかける。

ホテルまではそんなにも離れておらず、歩いて移動できる距離なので、ゆっくり歩いていればすぐに追いついてくるだろう。

「んー。もうホテルに戻るだけやし、先行つてて。すぐ追いつくから」

「お嬢様。私も一緒にします」

忘れ物を取りに行く木乃香とその後を追う刹那。

「あの二人仲良いよねー」

そんなことを呟きながら、ハルナと夕映の一般人は何も知らず、知らされず、一足先にホテルへと戻った。

そしてそうなるように誘導した木乃香と刹那は二人とは違う出入り口から外へ出る。

「咄嗟に忘れ物って言ったけど、実際は一瞬たりとも忘れさせてくれんかったな」

「コレクライ特筆シテスゴイワケデモネエヨ」

そう呟く木乃香の頭の上で今までジツとしていたチャチャゼロが答える。

その隣では、刹那はずっと自分たちに向けられている狂気の発信源へと殺気を飛ばした。

直後。

二人と一体目掛けて五本の棒手裏剣が飛来した。

「禁」

しかし、ただ一言。木乃香が紡いだ言霊により現れた不可視の壁によって、棒手裏剣の全ては地に落ちた。

「アデアット」

刹那は自分のアーティファクトを呼び出して、臨戦態勢に入る。

そんな二人の目前に、ゴスロリ服に身を包んだ一人の少女と、白髪の一人の少年が降り立った。

「あー。やっぱり月詠さんでしたか」

「ええ。お久しぶりどすなあ、綾はん」

狂気と殺気が入り混じる世界で、二人は和やかに挨拶をする。

「ケケ。知り合いカヨ」

「まあね。月詠さんは兄にはもう会ったんですか？」

「志紀はんって酷いんですえー。ウチはこんなにも愉しみにしてたのに、さっさと死合い終わらせて。おかげで消化不良やわ」

月詠は長短二刀を鞘から抜く。一昨日、彩輝によって押し折られた刀は代用品を使っているらしい。

「うふ。うふふふ。でも綾はんも、以前に比べたら随分美味しそうになりましたな」

「まあ、人間、周りの環境に適応していくものですから」

一言で言うならば、『慣れ』であろうか。元々素養はあった。遙か昔から続いてきた血統を受け継いだ木乃香ののびしろは途轍もない。更に周りに居るのが、何かしら一芸に秀でた者ばかりなのだ。学ぶ機会も量も格段に多い。それでも一番影響を受けているのは兄になるのだから。

「それで、月詠さんらはウチを攫いに来たことで良いんですね？」

「そうですよー。この前とは違って、ねっ！」

突如会話を打ち切って、月詠が木乃香に向かって突進する。

だが、木乃香はそれに反応しない。木乃香が動く前に隣に立っていた刹那が対処したからだ。

月詠の振るう刀を受け止め、刹那は即座に反撃に転じる。

「うふふ。貴女はウチの先輩になるわけですか。出来るだけ、ウチを愉ませてくださいね」

月詠は狂気と共に刃を煌めかせる。

「お断りだ」

対照的に刹那は殺気を霧散させ、刀を振るう。

ただ静かに、無心で。刀に殺意は必要ないとも言うように。

そんな刹那と月詠の剣劇を横目に、木乃香は白髪の少年　フエイ  
ト・アーウェルンクスと向かい合う。

「貴方は見てるだけですか？」

との木乃香の問い掛けにフエイトは、

「月詠さんはああいう性格だけどね。僕は一切君たちに手出ししな  
い」

僕だって、まだ死にたくはないんだ。

と、答えた。

「何ダ才前。彩識ノ関係者力」

次に頭の上に乗っているチャチャゼロが尋ねた。

手を出しただけで死に直結させるような輩には心当たりがある。それ  
も身近に二人も。どうせ聞くなら有名な方の名前を出すのが道理  
である。

「違うね。僕は被害者だよ」

「ケケケケ。ソリヤソウダ」

しかしこれで何かしら関係があることは分かった。

少年の見た目と零崎彩識の活動していた年代が合わないということもあるが、彼らが被害者を生き残らせているなんてあり得ない。

それはこの少年が只者ではないということを表しているのか。

それとも背後に 零崎 ですら殲滅出来ないほどの組織があるのか。

チャチャゼロは思案を巡らす解答が出る筈もなく、ただ目の前の相手への警戒を強める。

しかし、そんなチャチャゼロの考えとは真逆のことを木乃香は口にした。

「じゃあ、ゼロちゃん。せっちゃんの加勢してあげて」

「オイオイ。イイノカヨ？」

「うん。あの子を信用するわけじゃないけど、あの子が敵に回したくない兄様なら信頼できるやろ」

それにウチ、防御力なら誰にも負けへんものを装備中やし。

と、木乃香は言う。

「本当ニ他力本願ダナ」

「ウチが手を出せる領域やないし、使えるものは何でも使えって教えられてるからね。一応忘れ物を取りに来たって設定やから時間掛けたくないっていうのもある」

そしてチャチャゼロは木乃香の頭から飛び降りて、自分の身の丈ほどもある大振りのナイフを何処からか取り出し 地を駆ける。

一直線に月詠へと向かって。

一方、刹那と月詠の戦いは熾烈を増していた。

刹那が突きを繰り出し、それを月詠が寸でのところかわし、刹那の首目掛けて一閃。

その斬撃は宙を斬り、二人は一旦距離を開ける。

月詠は刀を握り直し再び距離を詰め、二刀からなる連撃を刹那に浴びせる。が、刹那は最小限の動きで刀を捌き、お返しとばかりに刀を薙ぐ。

その繰り返しを何十合ほどしたであろうか。

打ち合うたびに斬閃の速度は増し、より冷徹に無慈悲に相手の生を刈らんとする。

その最中、刀を握り直した月詠は不満の声を上げる。



「なんですそれ？ 斬り合つたびにつまらなくなっていくくんはどういうことですか？」

貴女とは全然愉しくない。

そう月詠は本音を漏らす。

「なら、もっとまともな刀を用意して来るんだな」

刹那の指摘に、ピクリと月詠は反応した。

「あらら。バレてましたかー」

「さつきから何度も刀を握り直していれば嫌でも気付く」

例えば道具を自分の身体の延長に見立てる、と言われることがある。

これには月詠も同様に刀を自身の腕の延長という風に考えていた。だが一昨日、その腕は押し折られることとなった。

この世には同一の刀なんて存在しない。

当然である。材質から長さから重量から全て同じ刀など造れる筈がない。

それには一人の刀鍛冶が、全く同じ条件、全く同じ環境を揃えて、全く同じ工程を繰り返さなくてはならない。

どんなに似ていても、必ず差異が出る。

そしてその差異は、使い手の違和感に変わる。自分の腕を見知らぬ人間の腕にすげ替えるようなものなのだ。

新しい刀に馴染むまでの期間、それは例外なく全ての剣士がほんの少しでも弱体化する期間と言えよう。

それが刹那にも満たない一瞬を争う戦いならば、差異は大きく致命的な欠陥に変わるであろう。

しかし、

「それはセンパイと死合って愉しくならぬ理由にはなりまへんえ」と月詠は述べた。

「知っているか？」

それに刹那は答える。

「刀は斬る相手を選ばないんだそうだ」

瞬動。そして一閃。

月詠は上段から振り下ろされる刀を受け止める。

「自分は人やなく、刀でも言うつもりおすか！」

力が拮抗し、鏝迫り合いになった形を崩して二撃加えようとする。

刹那の考えは一般とは対極の考え方なのだろう。

刀を腕の延長と考えるなら、刹那の考え方は自身を刀の付属とするもの。

元より刀は人を斬る為に造られた道具。

人を斬るのに理由はいらない。斬る相手を選ぶのに理由はない。それはただ持ち主がそう命じたからだ。

人と鬼。その境を行き来するモノの影響を、彼女もまた少なからず受けているということだろうか。

「ハッ！ 成程。刀と斬り合っても愉しくはありませんなあ！ まだ人形の方がマシですえ！」

更に追撃を加えようとする月詠の背後から、声が響いた。

「ダツタラ、オレト殺ロウゼ」

ぞんっ、と空気が裂かれた。

チャチャゼロの振り下ろしたナイフによってである。

間一髪、月詠は攻撃を中止し回避へと専念した為、傷を負うことはなかったが、代償に彼女が伸ばしていた髪はバツサリと斬り落とされることになった。

そして不恰好になった頭を気にする余裕も無く、一人と一体から距離を取り、刀を構える。

二対一となった現状で、どう攻めようか考える月詠の耳に、凜と透き通るような声が届く。

「縛」

と、ただ一文字。

「ッ！」

しかし、その言葉通り、文字通り、月詠は数瞬動きを封じられた。

言葉。言葉には魂が宿る。

言葉とは世界を共有させ、『脳』を『人の脳』へと変えるモノ。

勿論、それを紡いだのは木乃香である。

そして人を斬るのに数瞬もあれば十分過ぎる。一人と一体は各々が持つ得物を握り締め、その刃を繰り出した。

だが、それは突如として現れた流砂の壁によって阻まれる。

刹那とチャチャゼロは攻撃を止められると、即座に砂塵から距離を取る。

壁が崩れると、その向こう側では月詠とフェイトが同じ様に距離を取っていた。

壁を作ったのは今まで傍観に徹していたフェイトである。

「貴方は手出ししないって言ってたんとちゃいます?」

いつの間にか、刹那とチャチャゼロの背後に移動していた木乃香がフェイトに問い掛ける。

「手出しはしてないさ。手助けをしたただけでね。君の方こそ手を出せないとかそんなことを言ってたと思うけど」

「手は出せませんから、口を出したんです」

彼女は笑い、彼は笑わなかった。

「退くよ、月詠さん」

「えー。これからですよ」

「残念だけどね。色々と集まって来てるみたいだから、僕らみたいな雇われはこれ以上出しゃばるな、と連絡があったよ」

犬上小太郎が捕まったらしいし。

と、フェイトが理由を述べる。

「千草はん、もうちょっと頑張つて欲しかったわー。ま、これ以上続けてもそんなに愉しくなさそうなんで、今日のところはこれで」

そして、二人は転移魔法符を使って、この場を後にした。

それを見送った二人と一体は近くに気配が無いことを確認してホテルへと足を向ける。

「最後に不吉なこと言い残して行ったな。色々集まるとか」

「そうですね。ネギ先生たちは大丈夫でしょうか」

「ケケ。マア、ハウルノ敵二八ナンネエダロウケドナ」

イヤ、的ニハナルカ。と付け加えるチャチャゼロ。

身に降りかかる火の粉を払った木乃香たちは、先に送り出したハルナと夕映に追いつく為、足を速めた。

月詠とフェイトが撤退したその頃、関西呪術協会総本山でネギは治療を受けていた。

案内されたのは畳が香る和室。空間を遮る明障子からは暖かな陽光がほどよく差し込んで、日本家屋独特の美を演出している。

洋風の学園では見かけない風景にネギはきよろきよると忙しく視線を動かす。

「では、準備が整いましたら案内の者が来ますので」

そうしている内に、ネギの治療は終わり、治療に当たっていた巫女は立ち上がって部屋から出て行く。

「あの、ありがとうございました」

ネギの感謝の言葉に巫女は一礼すると、この部屋から小走りで行った。

「何だか、忙しそうですね」

その様子を見ていたネギがポツリと呟く。

慌ただしい。それは屋敷に入った時から何となく感じていた雰囲気ではある。

擦れ違う人は皆どこか余裕の無い表情をしていて、ギリギリ走っていないと弁明できる速度で歩いていた。

当然、ネギたちには今京都で何が起こっているのか何て知る筈もなく、自分たちも負担の一端を担っているということは無自覚である。

「それよりネギ。本屋ちゃんのことどうするのよ」

と、ネギに話しかけるのは従者である神楽坂明日菜。

話題に上がるのは、ついさっき魔法バレしてしまった宮崎のどかについて。

ここに来るまでの道中に大まかな事は説明したが、巻き込んでしまったことには変わらない。

「えっと、のどかさん……」

「は、はい。私なら大丈夫です。ネギ先生が言っていたことも分かっているつもりです」

「すみません。巻き込んでしまっつて」

「いえ、私が勝手に着いて来たのが原因ですし……」

ネギの予想に反して思いのほか、現実を受け止めているようである。

この場合はネギの些少である知識が役に立ったということだろうか。

「でも、どうしたのよネギ。エヴァちゃんってスゴイ魔法使いだったんでしょ？ それに勝ったのに」

「いや、姐さん。その言い方はちょっと酷だぜ。あの時の兄貴は万全の状態だったが、今回は心身ともに疲れた状態で、しかも前衛の戦士が相手だったんだ」

呪文を唱えてる間にはどんな魔法使いも無防備だしな。

明日菜の当然ともいえる疑問に、カモが納得できる理由を考えて喋ってしまった。

もう今となつては、真相は闇に葬られたと考えていいだろう。

それから少し経つと、先程とは違う巫女がネギたちを長の下に案内しに訪れた。

その案内役の人に着いて行き、ネギ一行は謁見の為の広い部屋へ到着し、

「ようこそ、ネギ先生」



と、関西呪術協会の長である近衛詠春に迎え入れられる。

「あの、長さん」

そしてネギは詠春に近付いて、親書を取り出す。

「東の長、麻帆良学園学園長近衛近右衛門から、西の長への親書です。お受け取りください」

そう言つて、親書を詠春に差し出した。

「確かに承りました。任務御苦労。ネギ・スプリングフィールド君」

親書を受け取つた詠春はネギに労いの言葉を掛ける。

そしてこの瞬間、ネギ・スプリングフィールドの任務は無事に完了はじめてのおつかいしたのであつた。

「それですね、ネギ君」

と、更に詠春は言葉を続ける。

「明日もまたここへ来てはくれないでしょうか？」

「え？ 明日も、ですか？」

「無理を言っているのは承知していますが、東と西の仲違いを解消できるチャンスかもしれないんです」

この機を逃せば次は何年後になるか。

「ああ。そうそう。その後はナギの別荘に案内しましょう。おそらく時間が取れると思いますので」

そして詠春は、ネギの京都での最も優先順位の高い用事を口にする。

「えっ!? 長さんは父さんの、ナギ・スプリングフィールドのことを知っているんですか?」

早速食いつくネギ。

「ええ。私は嘗て『紅き翼』に所属していましたね、あのバカとは腐れ縁の友人ですよ」

「そ、そうだったんですか!?!」

思わぬところから自身の父親を知る人物が現れて、ネギは驚きと同時に喜びが湧きあがる。

詠春に父親のことを尋ねようとするが、

「詠春様ッ!」

随分慌てた様子の子の巫女が駆け込んで来て、それを遮る。

「すまない、ネギ君。詳しいことは明日にしてもらっても構わないだろうか」

「は、はい。構いません」

「帰る頃には日が暮れているでしょう。人を手配するので、少し待っていてください」

そう言つて、人を呼ぼうとする詠春だが、それにネギが待ったを掛けた。

「いえ、皆さんお忙しいようですし、僕たちは大丈夫ですよ」

確かに親書を届けてしまった今、西洋魔術師といつても態々十歳の子供を狙つような輩は過激派内にも居ないだろう。

それに詠春にしても何が起こるか分からない今は一人でも戦力を保持しておきたいところであるから。

「夜道は危ないですから、なるべく早いうちに戻った方がいい」

そしてそのまま、先程来た巫女と共に立ち去って行く。

『過激……動きは……』

『はい。彼……延暦……集……』

段々遠くなつていく声を聞きながら、ネギたちもこの部屋から出て、本山を後にした。

その帰り道。

「よし。これで親書は届けちゃったから、あとは木乃香のことね！」  
日が大分傾いてきた中、ホテルへの帰路に着いた明日菜がそう口にする。

「そうですね。今度こそちゃんと事情を話してもらいましょう」

今まで詳しく話を聞こうとするたびに「まずは親書を届けてから」と言われ、有耶無耶にされていたのだが、もうその手も通用しなくなりネギたちは木乃香の助けになろうと意気込んでホテルへ戻る。

「あの、木乃香さんがどうかしたんですか？」

そんな二人に宮崎のどかが問いかけた。

本山に入る前に魔法のことは説明していたが、ネギたちもよく分かっていない木乃香の件は話していなかったようだ。

「なんか、木乃香が悪い連中に狙われてるみたいなのよ」

「そ、そうなんですか!？」

「でも木乃香姉さんは狙われてるって分かってるのに、全く気にしてないんだよ。危機感が無いというか」

「だから心配なのよ」

「……早く戻りましょうか」

言っているうちに何だか不安になってきた一行は、足を速めてホテ

ルへ戻ろうとする。

しかし、無事に帰る、ただそれだけのことが叶うことは終ぞ無かった。

確かに親書を渡した今、ネギを狙う理由は無くなったと言っている。だが、それは関西呪術協会過激派のみに限った話だ。

詠春も組織の人間を全て覚えている筈もなく、ましてや研修員になりすまして入り込んだ者など知るわけがない。

その存在を知っていた者も居たが、彼にとってネギたちは色々対象外であったため、一握りの情報すら与えてはくれなかった。

故に、何の対策も講じようとはしなかった。する必要なんて無いと思っていた。

だってそうだろう？ 彼は真祖の吸血鬼を下したのだから。

「『石化の邪眼』」

最強クラスの魔法使いに対する策なんて必要無いと判断しても、仕方ないことだ。

虚空から放たれた光線は真っ直ぐネギたちに向かって走り、

「あ、兄」

「ネ、ギせ」

彼の従者の一人と使い魔を石に変える。

光線を受けてから石化するまでのタイムラグで、ネギに向かって手を伸ばそうとする少女の彫刻が出来上った。

『大丈夫です。のどさんは絶対に守ってみせます』

ほんの数時間前に彼女と約束した言葉が思い出される。

それと同時に想起される彼のトラウマ。

六年前の雪の日。

彼を庇った老人が、幼馴染の母親が、良くしてくれていた近所の人  
が、次々と石に変えられる出来事が連鎖的に蘇ってくる。

「あ　　あああああああああああああ！！」

ネギ・スプリングフィールドはゲシュタルト崩壊を起こすほどに、  
慟哭する。

また、何も出来なかった。

また、目の前で失った。

また、マモレナカタ……。

自分の生徒が、自分の従者が、自分のことを好きだと言ってくれた  
少女が石にされたのに、どうすることも出来ない。

バキンッ

その時、ガラスの砕けたような音が響いた。

「ほ、本屋ちゃん!? 一体なんなのよ!! 何で、いきなり、こんな ツー!!」

神楽坂明日菜の着ていた服が石化して砕けた音である。

しかし、強襲はまだ終わらない。

「 『石の槍』 」

鋭く尖った石柱が神楽坂明日菜へ向かって直進する。

だが、この攻撃は明日菜の身体に触れる直前、バターが溶けるかのように形が曖昧になり、霧散した。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!!!」

次の瞬間には『石の槍』が放たれた射線上に向かってネギが魔法を放とうとする。

結論を言うと、彼の背後に現れた白髪の少年によって阻まれたのだが。

背に掌底を叩きこまれ、ネギは地べたに這いつくばる。

射殺すような視線を白髪の少年 フェイト・アーウェルンクスへ

と向けて。

「お前が……お前がああああああ!!」

闘志を燃やし、尚も立ち上がるうとするネギの背に、フェイトは無慈悲に魔力で十分に強化した踵を落とす。

これにより、ネギ・スプリングフィールドは意識を手放した。

「何よっ！ 何なのよ、アンタはっ！」

残っているのは神楽坂明日菜一人だけ。

「半信半疑だったけど、まさか本当に魔法無効化能力を持ってるとは」

『黄昏の鍵』……そっちも調査してみる価値はありそうだね。

と、フェイトは小さく呟いた。

フェイト・アーウェルンクスが現れた理由。それは一昨日与えられた情報の確認である。

京都内には不穏な空気が漂い始め、戦闘が始まるとすれば今日だろうと予想した為の行動。

戦闘が始まるということは、フェイトのよく知る殺人鬼も動くという事で、事が起こる前に片付けておきたかったのだ。

一度始まってしまえば、もう何が起こっても不思議ではないから。



「……っ」

そしてフェイトから逃れるように後ずさる明日菜。

その様子をフェイトは冷めた目で見つめ、

「少し眠っててもらおうよ」

瞬動で距離を詰め、明日菜の後頭部に手刀を入れる。

これで呆気なく神楽坂明日菜も意識を失った。

「ここで死なれても困るしね」

と、フェイトは彼女たちを隠すように結界を張る。この場を去っても一晩くらいは効果を発揮するであろう。

魔法無効化能力を持つ少女。彼女はフェイトが所属する組織の計画の中核を担うであろうから、こんな派閥争いに巻き込まれ、死なれては困る。

「さて、負け戦が始まる前に僕も逃亡させてもらおうか」

結果の分かりきった戦いに興味は無く、このまま無傷で京都から撤退しようとするフェイトであったが、ふと足が止まった。

フェイトの視線の先には地に伏したネギ・スプリングフィールドの姿が。

それはほんの気紛れであった。

マイナスの勝率を零にするくらいなら手伝ってもいいかな、と。

そしてフェイトはネギの襟首を掴み、何処かへと転移する。

## 第五十話：開戦する三日目

夕暮れに染まる空。

その下、京都では一般人に悟られることなく、大規模な闘争が始まっていた。

穏健派と過激派による派閥争いである。

赤色に染まる空に呼応するかのようになり、地上も徐々に赤色に染まっていく。人の流す血によって。

中でも幾多の術が飛び交い、数多の武具が交差する、戦闘が最も激しい総本山では、既に血の海が広がっている。

こうしている間にも、本山には人が集まり戦闘が激化していく。

鬼神・リョウメンスクナノカミを還したことによるある種の弊害であった。

元より不正の証拠を握られてもう後が無い過激派の切り札を奪ってしまったのだ。

更に極東最大の魔力を誇る木乃香が後数日で麻帆良学園に戻ってしまう。そうならば手出しは難しくなる。行動を起こすのは、修学旅行中しか考えられない。これが最初で最後のチャンスなのだ。

スクナの代案は用意されたが、それもまた急ごしらえの策。

故に、過激派は最も単純で最も効果的な物量に打って出た。本山の結果に穴を開けるほどに。

そんな続々と敵が集まる中、本山で野太刀を振るい、多くの敵を屠る一人の男。

関西呪術協会の長である近衛詠春。

大戦時の彼の愛刀、夕凧を持ち次々と敵を斬っていく。

ここに夕凧があるのは、以前彩輝が破壊された夕凧を修理の為に持ち帰り、そのまま預けっ放しにされていただけのことだ。

それが功を奏したか、詠春は部下に指示を出した後、いち早く戦線に加わることが出来た。

「クソツ！ 長年の政務で腕が鈍っているなんて言ったのは誰だ！」

過激派の詠春と対峙する者たちの一人が叫ぶ。

取り敢えず、詠春を殺害出来ればそれで長の座は空く。そうならばまだチャンスはあると考えて集中的に詠春を狙う。

だが甘い。

詠春は次の瞬間にはその者の眼前に踏み込んでおり、「斬鉄閃」と相手が構えている得物ごと斬り裂く。

続けて、「百花繚乱」と周りにいる者を一掃。

幾ら多忙とはいえ、最低限の鍛練は続けている。日常生活の中でも呼吸法や気を練りつつ動くだけでも、何もしないのに比べれば十分だろう。

そして時間が空けば、本格的に身体を動かせばいいだけなのだから。

何よりも、

「一ヶ月前に粗方錆を落とされましてね。技のキレは落ちていませんよ」

そう。麻帆良学園ではまだ春休みに入ったばかりの頃、帰郷した彩輝との模擬戦によって、詠春はある程度錆を落とされていた。

当人たちには遊びの範疇でも、生半可な者が同じことをすれば数分と持たず斬り伏せられていただろう。

しかも、相手は彼の殺人鬼である。ギラギラと殺気をバラ撒く彩輝を相手にしていれば、昔の感覚を取り戻すには十分過ぎる。

だがしかし、

（予想より人数が多い。この程度、昔ならどうということ無かったのですが、私も年ですかね）

呼吸が乱れる。

技のキレは落ちていないが、体力そのものが落ちているのだ。

生物である以上、老いには勝てないということか。

もう少し日々の鍛錬に時間を割ければ良かったのですが、とそんな風に考えた時。

敵の後方に魔力が集中し始める。

不味い。

自分の直感が警鐘を鳴らす。

過激派は数の暴力で攻めてきた。例え二流や三流でも、全員が一樣に、同じ術に魔力を注ぎ込めば、それは十分な脅威と成りえる。

夕暮れよりも血の色よりも紅い、全てを呑み込まんとする紅蓮の炎が生まれ、瞬く間に穩健派の陣営へと迫る。

(クツ。間に合うか)

穩健派の術者も対抗する術を放ってはいるが、総量が違う。このままではこちらに甚大な被害が出るであろう。

それを止めようと詠春は動くが、当然ながら刀で炎は斬れない。だからこそ、詠春が取る行動は剣圧で力任せに吹き飛ばそうとしたのだが、それよりも速く炎が掻き消された。

いや、それは掻き消されたと言うよりも、途中で燃え尽きたかのようだ。

まるで魔法の核を潰すような、魔法そのものを殺すような出来事。

詠春は見覚えのある光景に何処か懐かしさを感じた。

「何だッ                    ぐう!？」

過激派の術者が声を荒げると同時に、地に伏した。

「かははは。腕が鈍るって言うより衰えてんじゃん。情けねえなあ、オイ」

ひゅんひゅんひゅん、と糸が空気を切り裂く音が耳に入る。

そういえば、この音を聞くのも随分久しぶりですね、と詠春は思った。

「五月蠅いですよ、彩輝。全く、誰の所為でここまで人が集まってしまったと思ってるんですか」

答えるようにトン、と詠春の隣に一人の人間が降り立つ。

黒コートに手袋を着用し、頭に狐の仮面を乗せた近衛彩輝であった。

「だからお詫びも兼ねて、滅茶苦茶働いたつもりだけど。後今は香乃木志紀な」

「出来るなら話し合いで解決して欲しかったところを魔術決闘持ちかけて、本当に滅茶苦茶ですね」

「この事件はもう吾輩の掌の上だ」

「はいはい。基本的に何も考えてない無鉄砲なのはよく分かりまし

「だから」

「失礼な。これでもクラスメイトには鉄砲勇助と呼ばれた男だぞ」

「……駄目じゃないですか」

「まあ、安心しろよ。一旦麻帆良に戻ってフル装備で来たから」

軽口を叩き合っている最中にも過激派の攻撃は止まらない。

数を揃えただけあって幾多の波状攻撃には並みの術者では耐えられないだろう。

しかし彼らは忘れている。

目の前にいる存在は、より多くの兵を揃えた方が勝つという戦いの常識を覆したからこそ、英雄と呼ばれるようになったのだ。

「クソツ！ 何なんだお前らは！！」

一向に当たらない攻撃。次々と減らされていく仲間。そんな時過激派の一人が焦れて声を荒げる。

「言いたいことは山ほどありますが、これだけは言わせてもらいましょうか」

詠春が夕凧を構え直す。

「私の家族に手を出す者は」



「殺して解して並べて揃えて」

彩輝が二本のソードブレイカーを構える。

「斬る」

「晒してやんよ」

放たれる三つの斬撃。

それは、ある者には絶望を与え、ある者には希望を抱かせる、『ハ  
ウリングミラージユ』と『サムライマスター』の約二十年ぶりの共  
闘であった。

京都ではもう一つ、戦いが激化しようとしている場所があった。

その場所は比叡山。

昼間に彩輝が祇園の甘味処で説明したように、比叡山 という結  
社は延暦寺と日吉大社の二つの寺社からなっている。

場所柄一つ一つの結社として扱えば、縄張り争いなどで関係が泥沼  
化することを危惧してのことだ。

そして、今代の首領は日吉大社の出である。理由としては、関西呪  
術協会の長、近衛詠春が間に入って日吉大社を推したからだ。

それは何故か、と聞かれると、日吉大社は穏健派。延暦寺は過激派

の割合が多いから。

そうになると、今の京都で起こっている戦闘と照らし合わせると組織内の抗争が起きてても不思議ではない。

延暦寺には首領に選ばなかったことで不満を持つ徒弟も多いだろう。

だから彼はこの戦闘に参加した。自分たちの首領の座と 協会 で甘い汁を吸える立場を夢想して。

「 疾！」

延暦寺の使い手の中には 協会 所属の者も混じっている。

そこには近衛木乃香を攫う実働部隊であった天ヶ崎千草の姿も。

やはり、犬上小太郎が穏健派に捕らえられてしまったことが響いたようだ。

更に、自分の部下として雇った月詠はこの場にいるが、フェイトは少し前から姿が見えない。

今、京都では手柄を立てようと躍起になっている人間でこった返している。

そこに立て続けにミスをし、雇われでも自分の部下を管理できないと見なされた千草は重要な役目から外され、延暦寺の一派への加勢を命じられた。

「チッ」

千草は思わず舌打ちをしてしまう。

本来であれば、彼女は一人でリヨウメンスクナノカミを降ろす計画であった。つまり、それほどの技量を持った人物なのだ。

出る杭は打たれる。

千草がここに居るのは、彼女の才能を快く思わない人間の策である。

だが、千草にとって出世なんてものはどうでもいいことだ。

彼女にとっては覇権争いも自身の目的の過程に過ぎない。見据えるのはその先。大戦時、彼女の両親を殺した西洋魔術師への復讐である。

しかしそれも自分の利益しか考えない連中に着いていったところで果たされることは無いだろう。

既に彼女の目的は道半ばで潰えてしまったと言って過言ではない。

「『雷電神勅、急急如律令　　！』」

自棄になり、配分も考えず、ありったけの魔力を込めて符を放つ。

符は飛翔半ばで純白の雷の槍となり、日吉大社の陣営が張った結果を喰い破らんと猛進する。

しかし、相手は守りに特化した集団。千草の放った符も無駄に終わる。

「クソッ」

予想出来る結果に毒づく。

本来なら自分はこんなところに居ない筈なのに。

どこで間違えてしまったのか。

どこを間違えてしまったのか。

何もかもが上手くいかない。

上手く事を運べない自分に腹が立つ。

このままでは、今までの怒りが、憎しみが、魔術に明け暮れた日々が、水泡に帰してしまふ。

報われるだなんて思っていない。

救われるだなんて望んでいない。

それでも、こんな中途半端に終わるのだけは、嫌だ。

それが天ヶ崎千草の源泉であった。

(何や、霧が出てきたな)

いつの間にか、周辺を覆うように霧が発生している。

敵の罠かと思っただが、霧からは一欠片の魔力も感じられない。

どうやら、日吉大社の術者が張っている楔ぎの結界にも反応していないようだ。

(自然現象……？ いや、こんな都合良く発生するわけない)

身構える千草に、後方から絶叫が迸る。

「あ、ああああああ！！」 『あまねく金剛尊に帰命したてまつる』！！」

それは不動明王真言であつたか。

制止の声を掛ける間もなく、生み出された業火が味方を焼き尽くさんとばかりに蠢いた。

その後も叫び声と共に、同士討ちの光景が続き、味方の陣営に混乱が広がる。

「この霧か！」

正気の者たちは原因が霧であると断定し、各々魔術を行使して、霧を吹き飛ばす。

すると、奇妙な現象が起こった。

魔術の影響でそのまま風に流されるものと、まるで意志を持つよう

にその場に漂うものの二種類に分かれたのだ。

そして、漂っている霧は風向きに逆らい、人の呼吸器を狙って進んで来た。

「 疾！」

得体の知れない霧に向かって千草は符を放つ。

符は飛翔半ばで土石を呼び出し、霧を打ち消す。

そして、霧が晴れたことで新たな異変に気が付いた。

「流石神道の本場と言いますか、術のキレがまいちですね」

「全くだ。朱織の奴は着いて早々どっか行っちゃまうし。意外とツンデレなのか？」

両陣営が睨み合うド真ん中に私服姿の中学生らしき少女が二人立っていた。

巫女服然り、狩衣然り、服装にもちゃんとした魔術的意味がある。

組織と組織の集団戦という状況だからこそ、統一性の無い私服を着ている二人は際立って異彩を放っている。

(こいつら、麻帆良学園の?)

疑問は浮かぶが、それを確かめる術は無い。

「まあ、仕込みは全て終わってますし、さつさと始めましょうか」

「さつさと終わらせる、の間違いじゃないか？」

そう言つて、一人は無表情にフラスコを取り出す。

もう一人はシニカルに笑い、懐から小さな匣を取り出した。

こうしている間にも混乱は徐々に治まって、同士討ちを引き起こしたであろう二人に敵意が向けられる。

それを迎え撃つように、

「私の魔法、<sup>ロジック</sup>崩せるもんなら崩してみろよ」

と一人が不敵に笑みを浮かべてそう告げた。

錬金術師・絡繰茶々丸、論理魔術師・長谷川千雨 参戦。

舞台は移り、修学旅行で訪れている麻帆良学園の教師・生徒が泊っているホテル嵐山では、二名の学生が人知れずホテルから抜け出していた。

その二人は近衛木乃香と桜咲刹那。

今ホテルに居る魔法先生はただ一人。無駄に負担を掛けないようにと配慮し、一般人を盾にするつもりがない二人が取った結果であった。

二人が移動した先は開けた場所にある広場。三六〇度、全方位に亘り、大きな遮蔽物は無く人が近付いてくればすぐに分かる。

傾いた日によって影が伸び、広場に二人しか居ないこともあってか、それが寂寥感を漂わせている。

既に人払いの結界は張り終わっており、一般人は近付けない。ついでに撃退用にと様々なモノも仕込み終えたところだ。

細工は流々、仕上げを御覧じるといった段階である。

「もう始まつてるみたいやけど、どれぐらいこっちに来ると思う？」

と、口を開いたのは木乃香。

ひよっとしたら自分が捕まっていけない内は計画に穴が開いていて、逃げ続けていれば大事にはならず麻帆良に帰れるのではないかと全く考えなかったわけではない。

結局は物量で押しきる形で始まってしまったのだが。

「やはり、それなりに来るのではないでしょうか。本山に総攻撃を仕掛けてお嬢様の護衛が手薄になったところを狙う、とか」

いつ敵が襲って来てもいいように、既にアーティファクトを呼び出している刹那が答える。

「護衛は最初からせつちゃん一人やけどな。ゼロちゃんはさよちゃんの方に行ったから」



「そうですね」

「そもそも兄様が居るから人数的な問題は関係無い気がしてきた」  
手に余るようやったらすぐに呼ぼう、と木乃香は固く胸に誓う。

そうになると次に浮かぶ疑問は、少し悠長過ぎないかというものだ。  
自分の持つ極東最大の魔力が要になっているという自覚はある。

既に戦闘が始まっている以上、普通はもっと切羽詰まった様子で人員を送り込んで来るのではないだろうか。

（まあ、人間大所帯になれば気が大きくなるもんやけど）

そんな長期休暇で破目を外した中高生みたいなノリでここまでのことはしないだろう。

してくれば対処も楽なのだろうけど。

（となると、ウチが居なくても大丈夫な代案が用意された？）

ここは京都なのだからスクナノカミに代わるモノは幾らでもある。

確かに質より量の手段で来ているならば、それなりに魔力も集まるだろうし、制御も出来るであろう。しかし、同時に総本山に居る全ての人間を相手にするなら絶対に人数が足りない。

それに簡単で手早い方法があるのなら、楽をしたいと思うのが人間

だ。

態々改まってデメリットの多い方法に変えるとは考えにくい。

「うーん。勝算があるようには思えんなあ」

相手の出方から計画を想像してみるが、全く予想できない。

「ところで、ネギ先生は無事に親書を届けられたでしょうか？」

周辺に気を配りつつ、刹那が新たな話題を振る。

「まあ、大丈夫やないかな。届けてしまえばネギ君の仕事終了やし、あっちも不用意に手は出さんやる」

父様やって帰り道に護衛ぐらいは付けるやろうし。

と、木乃香は考えていたのだが、それは本人が丁重にお断りした為実行に移されることはなかった。

そんなことは露知らず、木乃香はこれから降ってくる火の粉の対処を考え始める。

「お嬢様」

そこへ刹那は先程までとは打って変わって、真剣味を帯びた調子で木乃香に話しかけた。

刹那の言葉に促されるように、あらかじめ張っておいた探知用の結界に意識を集中させる。

「ん？ ああ。来たみたいやね」

そして木乃香も人払いの結界を張っているこちらに向かって、近付いてくる者の存在を感じ取った。

最後にもう一度、手持ちの呪物と仕掛けた術を頭の中で確認する。

「せつちゃん。一度広場の中に入った奴は逃がすつもりないから、そのつもりでな」

いつの間にか木乃香の指には符が挟まれていた。

「はい。分かっています」

刹那も刀を構え、迫り来る敵を見据える。

新たな戦いの火蓋が切って落とされる瞬間であった。

## 第五一話：慢心しない三日目

あかね色に染まる坂。

その道を駆け抜ける八人ほどのグループが居た。

彼らは大規模な派閥争いが勃発した為に、地方から呼び戻された呪術協会の過激派に属する者たちだ。

当然、彼らの目的地は総本山であり、少しでも早く戦いに身を投じようと移動速度を上げる。

ここに至るまでに町の中や通りを突き進んできた。

今隣を走り抜けた者がこれから戦場に赴くなど、果たしてどれくらいの人間が信じられるだろうか。

千年もの間怨念と共に在り続けた古都。

今や山一つ、川一つ挟んだその向こうに、ありふれた日常を浸食しかねない勢いで魔が蠢いているなどと。

表裏一体。

今日起こった出来事は少なからず、表側にも影響を与えるであろう。

そして、そんな世界の裏側で生きる者たちは総本山に辿り着く前に足を止めることになった。

坂道を上る彼らの前方に、道を遮るようにして二人の少女が立っているからだ。

一人は十歳ぐらいの女の子。少女と言うよりも幼女と言った表現の方がしっくりくる。

幼女は彼らを見下すような目つきをし、腕を組んで仁王立ち。

金色に煌めく長い髪を風になびかせ、端正な顔立ちが異国の血を引いていることを物語っている。

もう一人は中学生らしき少女。

こちらは先程の幼女とは打って変わって、ただ静かに佇んでいる。

少女は色素の薄い白髪を腰の辺りまで伸ばして、その肌も透き通るように白く、手には大き目のジュラルミンケースが握られている。

このジュラルミンケースは昼間の内に麻帆良へ戻った際に取ってきたもの。

謂わずと知れた、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと相坂さよの両名である。

まるで月と太陽のようだ。

そんな感想を抱かせる二人組に過激派一派は逸る気持ちを抑えて向かい合う。

このタイミングで自分たちを待ち受けるようにしていた者を一般人

だと思っ輩は、彼らの中には居なかった。

「仕方ないとはいえ、一番面倒な仕事を押し付けられたんじゃないですか？ 私たち」

過激派一派が警戒を剥き出しにする中で、さよが口を開く。

「後で適当に対価を請求すればいいのさ。どうせハウルも後半になればこっちに回るだろうしな」

彼らの視線など意にも介さずエヴァが答える。

「お前たち、何者だ」

数人の大人にこうも警戒され、それを飄々と受け流す様はどう見てもただの子供ではない。

彼らの疑念が確信に変わり、その内の一人が問い質す。

「ん？ 私か？ 私はアレだ。吸血鬼だよ」

「あの、エヴァさん。そんなあっさりバラしてもいいんですか？」

「普通は正直に言ったところで誰も信じないだろう」

「まあ、それもそうですね」

彼女たちにとっては、いつもの如く緊張感の欠片もないやり取り。

真面目に答えてくれるとは思ってはいなかったが、急いでいる彼ら

の神経を逆撫するには十分であろう。

穩健派の手の者である可能性が最も高いと予想していたが、道を阻むのであれば実力行使もやむを得ない。

スツと過激派一派の八名は符や得物など、各々戦闘の意思表示を見せる。

「やる気満々だな。こっちも割と忙しいから、とつとと片付けさせて貰うぞ」

エヴァの声に答えるように、一步、ジユラルミンケースを手にしたさよが前へ出た。

パチン、とさよはケースの留め金を外す。

何かする気だ。

態々声に出すまでもなく、さよの行動を阻害しようと、八人の中で符を手にした三人がさよよりも速く攻撃を加えようとする。

だが、それよりも格段に速く、

「『魔法の射手 闇の29矢』」

エヴァが牽制の魔法を放つ。

速く、十分に魔力が込められ、的確に急所を狙った攻撃。

それは得物を持った残りの者が対処するが、符を放とうとした三人

は一瞬迎撃に切り替えるべきか動きが止まった。

この僅かな間にもさよはジュラルミンケースを開き、

「さあ。崇つてあげましょう」

夕暮れの空をケースから飛び出した剣群で彩った。

明らかにケースに入る筈の無いサイズの大剣からフランベルジェ、中には薙刀からスカジナビアンスプリッティングアックスまで混ざっている始末。

その数十の刀身が夕陽を反射して煌めいている。

「……っ」

息を呑む。

八人に対して数十の刀剣類。ごく普通の刀から禍々しい気を発する物まで千差万別。

あれが一斉に放たれたらオーバーキルもいいところだ。

そうさせない為にも、三人は更に魔力を上乗せして符を放つ。

それと同時に射出される三本の剣。

符と剣は互いの威力を打ち消し合い、符はそのまま消滅し、剣は何処かへと弾かれた。



それを見て、狙いは正確だということを理解する。

近付こうが離れようが距離に関係なく、このままでは魔法と剣とで狙い撃ちにされるだけだ。

過激派一派は咄嗟に散開して的確にならないように動く。

そこへ、

「モウチヨット周ニリ気ヲ配レヨ」

ふと後方から、八人の内の一人、先程符を放った者にとっては真後ろから声が響く。

その直後には身体を殴打する鈍い音が空気を振るわせ、どさり、と術者は糸を切られたマリオネットのように倒れ伏す。

残った七人が目にしたのは倒れた仲間の隣に立っている、大振りのナイフを両手に持った小さな人形、チャチャゼロであった。

「おいおい。こっちも忘れずに対処しろよ」

倒れた人間を糸で拘束するエヴァ。その声が続くように、さよが数本の刀剣を撃ち出す。

これは過激派一派にとって状況は最悪であった。

いつ降りそそいで来るか分からない刀剣に気を配りつつ、足元に出来る死角に入り込むチャチャゼロの攻撃を避けなければならない。

上空の刀剣を弾き落とそうとすれば、いつの間にか死角に入ったチャチャゼロがナイフを振るう瞬間であり、チャチャゼロの動きを封じようとすればさよの放った武器が身体を貫こうとする。

この短時間で傷が次々と増えていき、それが徐々に機動力を削いでいく。

そして鈍くなった足は更に傷を増やす要因となる悪循環。

「ケケケケ」

ここでチャチャゼロは、敢えて一人の死角には入らず姿を晒した。

「このッ！」

過激派の一人は反射的にチャチャゼロに蹴りを入れる。それは気で強化され、コンクリート程度では容易く砕いてしまうだろう。

しかし、チャチャゼロからしてみればほんの少し身体をズラすだけでいい。

チャチャゼロの身体が小さ過ぎるのだ。小さいが故に小回りが利き、チャチャゼロ自身の素早さでこの場を翻弄する。

そして難なく蹴りをかわすと、軸足になっている方の足の腱を切り裂いて、体当たり。

「ぐあ……」

その者はバランスを崩し、呻き声を上げながら転倒する途中で事切

れた。

そして受け身も取れず倒れた相手をまたしてもエヴァが糸で拘束する。

まだ立っているメンバーはこれを見て悟る。自分たちは他にも正体不明の攻撃を受けている、と。

足を斬られた程度で気絶するなど軟な鍛え方はしていない。

だが現に目の前で仲間が呆気なく気を失った。どんな方法か、どんな条件か、それらを探る余裕は無い。

このままでは遅かれ早かれやられてしまう。

その結論に辿り着いた彼らの行動は極めて迅速だった。

この場で最大の障害となっているさよを叩く。

初めこそ本山の戦いに備えて体力を温存しつつ、数の差で有利に立ちとうとしていたが、こうなってくると話は別。

これほどまでに多対戦に適した人物を放っておくのは、あまりにも危険過ぎる。

六名は半ば玉碎覚悟で、背後からチャチャゼロに刺されることも、さよが撃ち出す刀剣に貫かれることも覚悟して、符を放ちながら突貫するが、

エヴァによって止められた。

暗闇と吹雪を濃縮したような魔力の奔流が過激派一派に向けて放たれる。

それは彼らの符を容易く呑み込み、次の瞬間には射線上に居る六人も丸呑みにした。

その威力と危険性を肌で感じ取ったのか、咄嗟に護符などの防衛手段を全て用いて彼らは、暴虐を体現したかのような魔法から九死に一生を得た。

しかし、六人が護符を全て使ったのにも関わらず、全員が満身創痍の状態だ。

背後から聞こえる地を蹴る軽い音。真っ直ぐに自分たちを向いて、今にも貫かんとする劍群。

このままでは不味い。

分かってはいても、既に足がフラフラで踏ん張るのに精一杯の状態だ。もうこれ以上立ってられない。

それでも尚身体を動かそうとした瞬間、ぐらり、と頭を揺さぶられるような感覚と共に六人全員が気を失った。

倒れた六人を糸で拘束するエヴァの隣で、「ふう……」とさよが息を吐く。

もう使う必要のなくなった刀剣類を回収し、再びジュラルミンケースの中へ収納する。

「さっきの戦闘がな、やはり遅過ぎる。もっと迅速にやれ」

そんなさよにエヴァがダメ出しを入れる。

「いつそのことその刀を全て一斉に放った方が良かったんじゃないか？」

「浮かべるだけならなんとかなるんですが、ちゃんと狙って撃つとなると、まだ五・六個が限界で」

つまり先程までの怪奇現象は全て、さよの『ポルターガイスト騒霊現象』だったということだ。

「上から落とすだけの作業に精密さなんて必要ないだろ」

「当てるだけなら出来ますよ。でも急所を外すなんて器用な真似は難しくて」

「……はあ。ウチの面子の中じゃ信じられないぐらい甘いな、お前は」

「ケケ。ソレデモ連中ヲ眠ラセル手際ノ良サニハ驚カサレタゼ」

「ああ。難易度は物を投げるのより、遙かに上の筈なんだがな」

「そんなことないですよ。油断したところにパスを繋いで頭蓋骨をちよっと小突くだけですから。労力としてはこっちの方が少ないで

すよ」

エヴァに拘束されている八人の内、七人が気を失った原因はさよが脳震盪を引き起こしたからのようだ。

「そのパスを繋ぐ作業が重労働だろうに」

と、エヴァは呆れたように呟く。

厳密に言つと『騒霊現象』は魔法ではない。どちらかと言えば異能に近い部類である。

魔法という型に嵌めず、魔力をそのまま用いているからだ。そして純粋な魔力であるが故にレジストもされやすい。

本来なら障壁によって阻まれたり、抵抗力の高い魔法使いには通用しないのだが、

「トランプでイカサマやってれば慣れますよ」

ここで思い出して欲しいのは修学旅行初日、新幹線内で行われたポーカーだ。

参加者全員がさよの行うことを知っている状態だったのにも関わらず、さよの勝率は決して低くはなかった。

それはさよが妨害を潜り抜ける術に長けているということに他ならない。

遊びで多少加減しているとはいえ、最果てとまで呼ばれる魔法使い

のレジストを潜り抜けれるのならば戦闘でも十二分に通用する。

後は対象の気が他へ逸れた瞬間を狙って、パスを繋ぎ脳を軽く揺らすだけ。

「今からでも大規模な戦闘が行われている場所に向かった方がいいんじゃないか？」

「流石に戦闘中の神社とかに入るのは、ちょっと……」

エーテル体ではなく、器のあるさよは昼間のように観光目的で入るには問題ない。

だが、戦闘中で結界などが十全に機能している間は入らない方が良さだろう。軀であるホムンクルスは魔に属する物だし。

エヴァのように最強種ともなれば全く気にしなくていいのだが、今回の場合はさよが一人思うように活動できない為、一緒に京都市内を回っているというわけだ。

事のついでにさよの実戦経験を積みせる算段だったのであろう。

思い返せば、先程の戦闘も基本的に止めは刺さず、拘束に徹しようとしていた節が見られる。

「よし。次に行くぞ」

そう言ってエヴァは踵を返し、歩き去る。

アシストの回数もこれから少しずつ減らしていくのであろうが。

「あ。待って下さいよ、エヴァさん」

その後をチャチャゼロを頭に乗せたさよが追いかける。

「どうせなら関係者がそうでないかを見分ける方法も教えてやろう」

「ケケケ。次ハ『レポート顕現象』モ織リ交ゼテミロヨ」

「千雨さんが居ればそれも構わないんですけど」

そして京都に集まってくる過激派狩りは、さよの携帯が鳴り響くまで続けられた。



## 第五二話：言葉が満ちる三日目

何事にも誤算というものは付いて回る。

手に入ると思っていた商品が店頭に並んでいなかったり、早く終わると思っていた仕事の中々終わらなかったり、どちらも自分の予想を下回った場合の出来事だ。

木乃香と刹那はこの現状を誤算と呼んでいいべきか頭を悩ませていた。

眼前には二人の四方を取り囲むように探知の結界を越えて来た者たちが集まってくる。

このタイミングで現れる時点で、十中八九木乃香を攫いに来た過激派の一員であろう。

ここで二人を悩ませているのは相手の人数だ。

四方を取り囲むように四人の男がこちらに近付いてくる。

そう。たった四人だけなのだ。それ以上結界を越えたものは関知していないし、刹那もどこかに待機している仲間が居るのかと視線を巡らす、これといって不審な要素は無い。

初日のような見戯ではなくちゃんとした戦闘要員ならこの人数で問題無いと判断されたのか、それとも木乃香の魔力が不必要になるほどに事態が好転したのか。

前者ならば嬉しい誤算だが、後者ならば事態を見極め、手の空いている者に伝えなければならぬ。

「平然と未成年者略取誘拐を企てたり、最近物騒な世の中になってきましたけどその辺どう思います？」

唐突に口を開いたのは木乃香。

現在進行形で見知らぬ男四人に囲まれているのに関わらず、こんな話題を振るとは。

「略取誘拐だなんてとんでもありません。我々はお嬢様をお迎えにあがったままで」

木乃香の発言に対し、正面に立っている男が話し始める。

「そんなことは初耳ですし、修学旅行中なので家に帰る気はありません」

「少々御実家の方で困ったことになりました。何分急だった為、詠春様も連絡出来なかったのでしょうか」

「例えば、派閥争いが表面化して大規模な戦闘に陥ってしまったたり？」

彼らにとっては木乃香はまだ魔法の存在を知らない一般人に近い立ち位置である為、簡単に連れ出せると思っていたのだろうが、世の中そう甘くはなかった。

既に人払いの結界が張られていて、総本山で何が起きているのかも

正確に把握しているようだ。

一応体裁を取り繕っていた男の紡ぐ言葉もだんだんと空々しさの比率が高くなってくる。

「ちなみに、理由を護衛云々に切り替えたって、もつと信憑性を失うだけやえ。お父様がウチに護衛なんて付けるわけないから」

「……そうですね。なら力尽くに」

うまい具合に言いくるめて、連れ去ることが出来なくなった以上、彼らは強硬手段に及ぼうとした。

だが、それよりも先に刹那が動く。

真後ろに居た男に向かって刀を一直線に投擲する。その動きは疾風であり、迅雷であった。

これから戦闘に移るといったその瞬間、相手が思考を切り替える絶妙のタイミングで放たれた刀は、男の右太腿を貫通した。

「衝ッ！」

直後には男の身体が水平に飛んだ。

木乃香の紡ぐ力ある言葉が意味を成し、車と正面衝突するような衝撃を与えたのだ。

懐から符を取り出す残りの三人を横目に、刹那は木乃香の手を取って倒れた男へ向かって瞬動で移動する。

「疾」

三人が放った符を木乃香も符を投げ応戦している傍らで、刹那は突き刺さった刀を乱暴に振り抜いた。その際に、脚から鮮血が迸る。

やはり、まだ荒事には抵抗があるのか、木乃香は極力その光景を視界に入れないように努めた。

その間にも、間髪入れずに刹那は男の喉元へ踵を落とす。

「ぐ……が……」

蛙を轢き潰したかのような音を発した男は白目を剥いて意識を奪われた。

まず一人。

そして木乃香と刹那は残っている三人と向かい合う。

「一応言っておきますけど、帰るなら今の内ですよ？」

絶対嘘だ。

表情には出さないものの、それを聞いた刹那の感想はこの一言に尽きる。

帰す気も逃がす気もある筈がない。ここは既に檻の中なのだから。

彼らとて仲間がやられて逃げ帰るなんて真似は出来ないだろう。そ

れも魔法の存在を知らない筈の女子中学生に負けたなどという理由では。

「おいッ。お前ら！」

木乃香と話をしていた男が他の二人に指示を出す。

もうその目は獲物を狙う狩人の目だ。任務遂行の為淡々と木乃香を追い詰め、最後には宣言通り連れ去って行くのだろう。

仲間がやられたことよって油断は消え去り、張り詰めた空気が辺りを満たす。

刹那は木乃香を庇うように一歩前に立ち、三方向から襲いかかるタイミングを見計らう三人と相対す。

「……せつちゃん」

そんな刹那に、自分が立っている場所を把握した木乃香は辛うじて聞き取れる声量で、早々と簡潔に指示を出した。

左斜め・右斜めから、じりじりと詰め寄ってくる二人の過激派たち。残りの一人は正面に立って距離を詰めずに、符を構える。

刹那は木乃香の壁になるように、彼らと間合いを一定に保ちつつ一歩ずつ下がる。

そして、正面の男が九字を切り、符を放った。符は雷へと姿を変え、刹那を貫かんと眩い光を放ちながら直進する。

それが合図となって左右から囲むように迫っていた二人も同時に瞬動を用いて飛びかかった。その手には何らかの札が握られている。

おそらく障壁を破る類の物であろう。障壁を無効化し自らの拳に込められた力を十全に相手にぶつけるつもりか。

どうやらこの二人は術師ではなく拳士のようなのだ。

この三方向からの同時攻撃に対し刹那と木乃香が取った行動は、

「神鳴流奥義『斬魔剣』」

と、刹那が斬撃を飛ばし、迫り来る雷撃の軌道をズラした。

しかし、奥義を繰り出した直後の隙を突くように、鉄槌さながらの拳が振るわれる。

刹那が次の技へと切り替える一瞬の合間に、最高のタイミングで固く握った拳が撃ち出される。

先程刹那がやったように次の行動へと移る瞬間を狙った攻撃。

先程の男と違うのは、刹那には頼り頼られる相手が後ろに控えている点であろう。

トン

と、刹那の背後から小さく地面を踏み鳴らす音が響いた。

それはとても小さな、とても些細な動作。しかし変化は劇的であっ

た。

木乃香を中心として淡く地面が光り始めたのだ。その光は複雑精緻な陣を模っていた。

「縛」

続けて凜とした声が空気を振るわせる。

陣と言霊、この両方に束縛された男たちは刹那の身体を殴り飛ばす直前、動きを自分の意思と関係なく急停止させる。

拳が届く寸前ということは、同様に刀が届く範囲内ということだ。

刹那は右側の男の首筋に峰打ちを入れ、返し様に左側の男にも一撃加える。

木乃香の束縛が解かれると、何の抵抗も無く二人は地面に倒れ伏した。

「アカンなあ。結界が張られてたつてことは罠がある可能性も考慮しとかな。聖人とかは歩いた足跡すら神秘になるんやえ。基礎中の基礎とはいえ、歩法やって立派な魔術やろ」

思い返せば、去年の夏休みに起きた 竜 を巡る7114、アダプテス・イクセントラス 最高位の魔法使い同士による戦闘の際にも、流れを変えたのは足跡からなる魔術であったか。

何しろ、ただ歩くだけなのだ。

過激派の四人が来るまでに仕込む時間は山ほどあった。

残すは一人。

「く、クソツ！ 何なんだよ！」

木乃香に近付かなかった為、陣の束縛から逃れることが出来た最後の男は牽制に符を放ち、踵を返して逃げようとする。

既に男一人が手に負えるような状況ではなくなっていました。一旦退いて仲間と連絡を取るのが理想だろう。

しかし、敵の逃亡を許すなんて甘い教育を、この二人は受けていなかった。

「な、何で……!!」

男の目には異様な光景が映っていた。

広場の出口までの距離が、地平線の彼方まで伸びているのだ。どれだけ走っても出口までの距離が縮むことは無い。

「奇門遁甲ですよ」

静かな声が男の背後から発せられる。

木乃香である。

奇門遁甲。



それは方向そのものの持つ魔術的意味を利用した魔法。

方違いや方位占いと同じ様に、然して珍しくも無い、どちらかと言えば基礎に部類されるもの。

だが、基礎であるが故に応用が利く。

広場の外を凶と定め、そこから遠ざければどうなるか。今の男のように外へ向かう方向には進めなくなってしまう。

木乃香にとってこの広場は自分の領域であり、男にとってこの広場は監獄と化していた。

「せつちゃん」

声に応え、刹那が地を駆ける。

術師と剣士が接近戦で戦えばどちらが勝つかなんて自明の理だ。

男は咄嗟に自らの持つ最速の術式を選択するが、それよりも速く刹那の刀が振り下ろされる。

刀はそのまま男を殴打し、昏倒させる　　筈だった。

「寄るなあッ！　化物ッ！！」

広場の外を凶と見立てるならば、内側は吉ということになる。

ここに来て、最後の最後で、意識を絶たれる寸前に、男は桜咲刹那のキーワードを言い当てた。

化物と。

深い意味は無い。ただ咄嗟に相手を罵倒する言葉が口から出ただけだ。

しかしそれは、刹那がずっと目を背けてきた現実で、触れられたくないコンプレックスであった。

「ッ  
！」

びくり、と一瞬だけ身体が硬直する。

すぐにその考えを振り払う。

即座にその思考を斬り払う。

自分は刀。ただ目の前の男を斬ればいい。そこには感情も主観も情緒も心情も機微も気分も情念も情動も何も要らない。

そうやって心を保つ。

だが、この一瞬の揺らぎは刹那にとって致命的であった。

「疾」

男の懐から引き抜かれた符は、至近距離まで迫った刹那の眼前で爆発した。

「あ………がっ………！」

刹那は何の防御の動作も取れず、爆熱と爆風をその身に受ける。衝撃に脳を揺さぶられ、身体が宙に浮き地面に叩きつけられる。

逆に男は抜け目なく、その爆風を利用して刹那と距離を取っていた。

「せつちゃん!!」

耳鳴りが響く中、今日一日で何度も聞いた自分を呼ぶ声が聞こえる。

でもその声は今まで聞いたことが無いほど、悲痛な声であった。

木乃香は倒れている刹那に駆け寄り、膝をついて上半身を抱え起す。

「『鎮星消災 急急如律令』」

男の動向に気を配りながら、数枚の符を取り出し、応急処置を施した。

そしてその男は二人が見ている前で突然笑い始める。

「は、ははっ。はははははは！ そうか。そうだった！ 貴様は化物だったな！」

先程口走った言葉と刹那の動揺を照らし合わせ、その正体に気が付いた男は、刹那を見下しながら嘲笑する。

「人の友達化物呼ばわりして笑うなんて随分な態度やね」

刹那を抱き止めながら、木乃香はキツと男を睨む。

それが刹那には嬉しかった。純粹に自分の為に怒ってくれていることが。

そんな木乃香を欺いている自身に嫌気が差し、罪悪感で胸が締めつけられる。

「ハッ。成程。そうやって、今までずっとお嬢様を騙してきたのか。化物がっ」

化物。その嫌悪、侮蔑、嘲弄が入り混じった陰湿な声が耳朵を打つ度、刹那は身を固くする。

これも言霊である。刹那のトラウマに触れることによって、本来の実力以上の効果を發揮しているのだ。

ある意味刹那は、彩輝のこういったアイデンティティに囚われないところに憧れたのかもしれない。

人や鬼、そんなものには拘らない在り方に惹かれていたのかもしれない。

しかし、折れず曲がらずよく斬れる刀は、錆ついて刃が欠けてもう何も斬れそうにはなかった。

「その女は化物の血を引いていて、人間じゃないんだよ！ しかも、その人外の里からも追放された禁忌だそうだなあっ！」

「あ……………」

言えなかった事実が、語れなかった真実が、他人の手によって詳らかにされていく。

心構えをする暇も無く、覚悟を決める時間も無く。

こつもあつさり。こんなにも最悪な形で。

刹那は固く目蓋を閉じる。そうしないと今にも涙が零れそうで、自分を支えてくれている木乃香の顔を見る勇気なんて到底無かつたら。

「おい」

木乃香の声であった。

たった一言。たった二文字。それでも怒りで声が震えていることは十分過ぎるほどに伝わった。

びくり、と刹那は木乃香の腕の中で身を竦ませる。

「ウチの親友の心を土足で踏み荒らして、ただで済むと思うなよ」

「……………え」

思わず目を見開く。

ずっと黙っていて、ずっと隠していて、ずっと騙してきた。

糾弾されても仕方ないと思っていた。されて当然だとも考えていた。

しかし、続く言葉はまだ自分を親友と呼んでくれる。

「今までずっと独りで頑張ってたんやな」

木乃香は先程とは違う優しい声音で、刹那の頭の上へ手を伸ばし優しく撫でる。

「……あ」

その手はとても、温かった。

今度こそ、頬を上を涙が滑る。その意味も、理由も、既に違うものへ変わっていた。

そして、木乃香が立ち上がる。男と真つ向から対峙する。

これでも男には勝算があつたのだ。

刹那を封じさえすれば、木乃香と一対一の戦闘になる。そうすれば、スペックの差を経験で埋め、隙を見て木乃香を拐かすことが出来る。

たったこれだけの条件を満たす為に男はあまりにも高い物を買ってしまった。

陰陽師・近衛木乃香の怒りを。

一步、木乃香は踏み出す。

いや、一歩だけではない。そのまま男に向かって一直線に歩き続ける。

そんな木乃香に男は両手で印を組み、捕縛の術を掛けようとする。

「『オンアビラウンキャンシャラクタン』」

しかし、それはいとも容易く弾かれてしまった。

口訣も身振り手振りすらも、木乃香は何もしていないのに関わらず。

ならばと。

「『謹請し奉る、降臨諸神諸真人、縛鬼伏邪、百鬼消除、急急如律令』」

次に放ったのは攻術。言ってしまうえば男に必要なのは木乃香の魔力であり、無傷で捕えろとは一言も言われていない。

死なない程度に加減をされた術は、またしても木乃香に当たる直前に弾かれた。歩法による簡易結界すら張られてはいないのに。

木乃香は一定のペースで男に近付いていく。

「くっ」

男は新たな符を抜き取り、別の術を放つ。

それを何度も何度も何度も何度も幾度となく繰り返す。

しかし、その全てを持ってしても木乃香の歩みを止めるまでには至らない。

相変わらず木乃香は何もしていない。だが、予想できるだろうか。世界最強レベルの者でしか傷付けることが出来ない護符タリスマンを木乃香が身につけているなんて。

この妹が兄から貰ったネックレスを、しかも非常時に身につけていない筈がなかった。

「な、何故ッ 『電灼光華、急急如律令』」

最早男に加減なんてものは無かった。

男が扱える最も強い術に、最大限の魔力を込めて符を放つ。

符は雷の剣を呼び出し、視界を真っ白に染め上げる。男には雷の刃によって木乃香が貫かれるビジョンが浮かぶ。

だが、色が戻った男の目に真っ先に入ったものは、何事も無かったかのように歩く木乃香の姿だった。

その姿に男は慄然とする。頭の中が恐怖で染まる。無意識の内に足が一步引いていた。

木乃香が一步前進する度に、男は一步後退する。

しかしここには、予め木乃香が張っていた奇門遁甲がある。男は逃亡を許されずに、徐々に距離を詰められていく。



「っ！」

そして後ろ歩きだった所為か足が絡まり、男は無様に尻もちをついた。

木乃香との距離は零。

「な、何で、術が　！」

うろたえる男の胸倉を掴み、木乃香は男と目を合わす。

眺めるように、見透かすように、深淵を覗き込むように。

「『お前ごときの術が、ウチに通用するとても本気で思ってたんか』」

「ひっ、な……」

「『お前は弱い』」

「あ……あ……」

「『もう二度と、魔法が使えらと思つな』」

男の目からハイライトが消えた。

何も映してないかのような虚ろな目。

何も見ていないかのような空ろな目。

精気と呼べるものが、生氣と呼ぶべきものが、男から抜け落ちていた。

「ああ。それともう一つ。ウチを狙ってた割には全然人数が足りんと思っんやけど、理由は？」

「……英、雄の……息、子……」

それだけ聞けば十分だった。

胸倉を掴んでいた手を放し、代わりに携帯電話を取り出す。

コール先は、相坂さよ。

「もしもし、さよちゃん。エヴァちゃん居る？ うん、代わって。あ、エヴァちゃん。ちょっと困ったことになったんやけどな」

先程の単語から考えられる、最悪とまでは行かないまでも、そこそこ悪い状況になっていることを伝える。

「じゃあ、あとよろしく」

通話を切る。

携帯をポケットへ仕舞いながら、邪魔されないよう他の三人に改めて捕縛術を掛け、一番最初に犠牲になった男の右脚を適当に止血する。

そして漸く、近衛木乃香は桜咲刹那と向き合った。

「……………」

「……………」

暫し、沈黙に包まれる。

目を伏せる刹那に、木乃香は刹那がアクションを起こすのをただずつと待ち続ける。

「お、お嬢様」

「うん」

やがて刹那は意を決したように顔を上げ、木乃香と目を合わせる。

「わ、私は、烏族という妖怪と、人間との間に生まれたハーフで、真つ当な人間じゃ、ないんです」

言葉にすればこれだけで済んでしまふ。

果たしてこの言葉の裏に、どれだけの苦悩と、どれだけの葛藤があったのだろうか。

「今日こそ言おう。寮の部屋を出る前はいつもそう思ってます。でも、彩輝様とお嬢様と話していて、長谷川さんが悪態をつきながら律儀に突っ込んでくれて、エヴァンジェリンさんもそこに入って、茶々丸さんと相坂さんがお菓子やお茶を用意して、少し離れたところで朱織さんが寝息を立ててる。」

そんな毎日はずっと続けばいいと思ってたら、いつの間にか寮の部屋に戻っていて、明日こそ言おうって考えてるんです」

楽しかった。幸せだった。だからこそ、いつまでも続いて欲しいと願い、この関係を壊してしまうかもしれないと考えたら、言い出せなかった。

何よりも、拒絶されるのが怖かった。

「大丈夫」

刹那の考えを振り払うように、そう言って木乃香は刹那を抱きしめる。

「うちも兄様もエヴァちゃんも千雨ちゃんも茶々丸さんもさよちちゃんも朱織ちゃんやって、その程度のことですってちゃんを嫌ったりなんかせんよ」

言葉には魂が宿る。

言葉は簡単に人を傷つけるが、同じ様に人を救うことも出来る。

「ありがとう。このちゃん」

静かに、刹那は涙を流した。

第五二話・言葉が満ちる三日目（後書き）

ところでネギの弟子入り試験に代わるイベントは入れた方がいいんでしょうか？

### 第五三話：入り混じる三日目

虹という漢字の由来を知っているだろうか？

光の屈折と反射でしかない現象に、虫偏が宛がわれている理由。

虫という漢字は、本来へびを指して用いられた文字である。尤も、この場合はへびと言っても普通のへびではなく、竜を表しているのだが。

蛇や竜は水神の象徴とされている。

江戸時代では木造建築の建物が多い為、火事は特に恐れられていた。更に作物の収穫量によって一年の生活が左右されることから、田の神、山の神とも結びつき、水神は各地で民間信仰の対象となる。

雷鳴を伴った激しいにわか雨の後に出来る空に架かる虹を、昔の人々は竜の化身と見立てたのだろう。

そして、天ヶ崎千草の目にもそれに似た光景が映っていた。

夕焼け色に染まる空の中、オレンジ色の光を白銀の鱗によって反射させ、悠然と一体の蛇が宙を舞っているのだ。

と言っても、蛇と形容するには些か抵抗のある姿である。

その全長は悠に五メートル近くあり、大人程度ならば難なく丸呑みに出来るだろう。蛇と言うよりも大蛇と言った方が相応しい。

さらに極めつけには、頭部からは一對の翼が生えている。

この奇怪な生物は、眼鏡を掛けた少女　長谷川千雨の持っている匣の中から飛び出してきたものだ。

五メートルを超す巨軀をどうやったら掌サイズの匣に納めることが出来るのか、千草には見当もつかなかったが、それでも、アレは危険なモノだと自分の直感が警鐘を鳴らす。

こういった場合には術者を倒すのが定石なのだろうが、千雨は既に日吉大社の陣営が張る結界の中に避難済み。

術者の自分には手の出せない領域へ逃げられてしまっている。

ここに最後まで自分の下に残った部下　月詠が居れば、『式の太刀』で大蛇を斬り伏せることも、結界の中へ特攻をかけることも出来たのだろうが、生憎既に敵陣内へと突っ込んでしまった後である。

言いたいことは多々あるが、居ない者を頼っても仕方が無い。

今考えるべきことは、この現状をどうするか。これに尽きる。正体不明の未知の相手に正面から挑むのは下策であろう。

それに、蛇の派手さに目を奪われた隙に、二人組の片割れ　絡繰茶々丸が忽然と姿を消しているのだ。

しかも相手は神道の結界内という同じ条件下で完璧に気配を断っている。

錬度の高い幻術を扱うということしか分かっていない千草にとって、

それは不気味な事この上ない。

故に、千草が真つ先に取った行動は単純且つ明快であった。

後退する。

ただそれだけ。

失敗を悔いる時間は終わった。待遇を嘆く時間は過ぎ去った。自暴自棄に走るのは終了だ。

冷静さを取り戻し、平静になると、まずは相手の出方を観察する。

幸いにも、ここには自分の代わりに戦ってくれる人間が、自分の代わりに犠牲になってくれる人間が、掃いて捨てるほどいるのだから。

「白雨。《水球 段階レクエル 最大：目標 指定敵性：照準 自動》」

千雨が紡ぐ呪文スベルが耳に届く。

それに呼応して、白雨と呼ばれた大蛇に光る泡のようなものが集まる。泡は円環へと形を変え、魔法陣を形作った。

その魔法陣と、大蛇が重なる。

本来ならば、呪文や使用する触媒などで相手が扱う魔術を推測出来るだろう。そうでなくとも、文化圏ぐらいいは絞り込める筈だ。

しかし、東洋のモノとも、西洋のソレとも一線を画す、こんな滅茶苦茶な呪文を千草は知らない。



西洋魔術が主流になってしまった現代では、後継者が絶え廃れていった魔術もあるだろう。それでも、あったとされる逸話や痕跡が、何かしら残っているものだ。

だが、目の前で起きている現象には、心当たりが全く無かった。

そう考えている間にも、天を舞う大蛇はゆっくりとアギトを開き、その牙と牙の間には水の塊が発生している。

「《水球 発動》ウルトゥガ」

そして、水の塊が千草たち延暦寺の陣営に向かって発射された。

「《あまねく諸仏に帰命したてまつり とくに風天に帰命したてまつる》！」

こちらも黙って見ているだけではない。幾人かの密教僧が風の神の権威を借りて刃を放ち、水の球を輪切りにする。

形が崩れた水球は、シャボン玉のように弾けて、球状に構成していた水を辺り一面にバラ撒いた。

一体どれだけの水量があったのだろうか。数秒間視界を奪う程のゲリラ豪雨が降り注ぐ。

視界が開けると、境内には大きな水溜りが出来上り、この場に居る者を区別なくずぶ濡れにしている。

それには千草も例外ではなく、じっとりと髪を濡らし、着ている衣

服は多分に水を吸い、ぴつとりと肌に張り付いている。

濡れて重くなつた着物を不快に感じながら、千草は論理魔術師を見据える。

相変わらず、少女はシニカルに笑っている表情を崩さない。

（その余裕、今すぐ無くしてやりたいわ）

とは思つものの、そうすぐに具体的な打開策は浮かばない。

元より退魔調伏に長けた人間の集まりだ。大蛇は延暦寺の僧たちに任せるとして、肝心の術者が神道の結界の中に逃げ込んでしまっている。

どうもさつきから大社内が騒がしく感じるが、それでもここに集まっている術者の質も量も相当なもの。

あらゆる魔を退け、被つのを得意とする術者たちが一丸となって張り上げる結界を、破る手札は持ち合わせていない。

と、ここで千草は思考にストップを掛ける。

（神道はあらゆる魔を祓う。だとしたら　　）

何故アレは浮いていられる。

ここは神道の結社の敷地内。常日頃から禊ぎが行われ、ここ清さは京都でも上位に入るであろう。

先程の呪文を思い出す。

多少神道の流れを汲む陰陽道ですら、普段通りとはいかないのだ。

明らかに異国の、縁も所縁も無い魔術系統があそこまで力を発揮出来るとは。

（穴がある）

そう千草は思案する。

神道のシステムを掻い潜れる何らかの手段を、あの少女は持ち得ている。

ならば。その穴を上手く利用し、裏を突くしかないだろう。

（最初に発生した霧は間違いなく天然のものやった）

それは千雨と茶々丸がこの場に現れたときの記憶。相手に幻覚を見せ、錯乱させる魔術の霧を、隠すように発生した天然の霧。

神道や陰陽道にも雨乞いなど、世界に働きかける呪まじないは数多くある。

もしも、少女の魔術系統がそれに特化したものだとしたら。

必要なのは、初め世界に訴えかけるほんの少しの魔力だけで、後は全て自然現象だとしたら。

神道は土着信仰という側面上、土地に依存する傾向がある。

早い話が、今この境内を色濃い瘴気や毒気といったもので汚染することが出来れば、それで勝敗は決まる。土地の力が全く無い場所での楔ぎは達人でも無い限り十全には出来ないだろう。

つまり神道の術式の要は土地ということだ。

そこに少女が何らかの干渉をしているのならば、それを解析し逆手に取ることも不可能ではない。成功すれば、日吉大社陣営への大きなアドバンテージになる。

この千草の推測はおおよそ当たっていると置いていいだろう。

霧が発生した過程などは、ほぼ彼女の想像通りである。

しかし、彼女は結論を出すのを急ぎ過ぎてしまった。結果、計り損ねた。論理魔術の特性は世界に訴えかける程度のものではないというところに。

「熊鬼」

千草は自らの式神を呼び出した。

ソレの見た目は熊の着ぐるみである。手の部分から鋭利な爪が伸びているものの、これを着て遊園地に行けば違和感なく紛れ込めるであろう。

そんな、一見巫山戯た格好をした式神ではあるが、能力までも見た目通りとは限らない。

陰陽道で優れている点と言えば、使役や呪詛などが挙げら

れるが、他にも学問的側面も持ち合わせているので、ヒントを得るぐらいの解析は出来るのだ。

元々、戦闘用の式神で少々効率が悪いのは否めないが。

そして、唐突に。解析の為に打った式は、解析を始める前に、一挙一動すら出来ずに 還された。

式を打った瞬間に、呆気なく、前触れ無く、還されてしまった。

「ッ！」

咄嗟にこの場を移動する。式神に続いて攻撃されなかったのは運が良かったとしか言いようがない。

(くそつ。何をされたんや!?)

身を翻し、物陰へと避難した千草は論理魔術師の方を見遣るが、彼女はずっとシニカルな表情を保ったまま。まるでその表情しか知らないのではないかと疑いたくなってくる。

術者がこちらに気付いていない以上、その使い魔であろう大蛇も千草に攻撃する筈が無い。というか、密教僧たちの相手だけでそんな余裕は無い筈だ。

物陰から辺りを見回してみるが、どこから狙われていたのか、まるで見当がつかない。

そんな時、またしても同じ様な光景が目に入った。

一人の僧が印形を組んでいた。唱える真言は廣大無辺の知恵を持つ文殊菩薩の力を借りる為のもの。

早い話が、その僧もまた千草と同じ様に相手の魔術を解析しようとしているのだ。

そして、真言を唱え終える前に、何らかの攻撃を加えられ、その場に崩れ落ちた。

(最初の片割れか?)

可能性として最も有力なものは、初めに現れてから一度も姿を見せていない、もう一人の少女であろう。

不可解な魔法。不可視の攻撃。

未知の相手はこんなにも厄介だと、千草は改めて実感する。しかも、その感情を与えているのは中学生くらいの子供なのだ。未恐ろしいにも程がある。

だがしかし。もっと不可思議な異変が起こった。

千草が見ている目の前で、あの少女、長谷川千雨が突然倒れたのだ。事切れたように。魔力が切れた《人形》が崩れ落ちるように。

「はあ!？」

あまりにも予想しえなかった光景に、つい声を出してしまう。

倒れるまで何の前兆も無かった。さらに、倒れる瞬間には受け身も

取らず、地べたに転がったのだ。

彼女の近くに居た巫女が焦りと困惑が入り混じった表情を顕わにしながら、慌てて駆け寄る。

元々守戦に特化した集団だ。千雨が現れてからは、足りない攻撃性をほとんど彼女一人が補っていた。それが理由も分らず倒れてしまったては、焦るのも無理は無い。

当然と言えば当然だが、彼女が倒れると同時に、大蛇の動きも格段に悪くなっている。

その隙をついて、密教僧たちが襲いかかる。使い魔であろう大蛇に止めを刺す為に。

腑に落ちない点は多々あるが、今は相手に大打撃を与えられるチャンスが生まれようとしている。

何せ五メートル近くもある巨体だ。それが結界へ倒れ込めば、破るまでは行かずとも、揺らがせることは出来るであろう。

千草も物陰から飛び出して、攻撃を仕掛けるタイミングを計ろうとした。

そこへ、一人の虚無僧の姿が目に入る。

真っ黒な袈裟に身を包み、表情は顔を覆う藺笠によって見えない。

本来ならその手には錫杖が握られているのだろうが、今虚無僧が手にしているのは、この場にはあまりにも不似合いな、不釣り合いな、

不格好な、サブマシンガンであった。

「《道よ開け》」

と、虚無僧が呟く。

それと同時に幾多の円環が、出現する。今まさに浮足立っている延暦寺の術者たちを閉じ込めるように、何十もの円環がドームを形成する。

ドームの外側に立つ虚無僧は銃口を円環へと向け、躊躇いなく引き金を引いた。

スガガガガガッ！  
？ 鳴り止まぬ銃声？

発射された弾丸は、円環 《門》 を通り、三六〇度全方位から術者たちを襲う。

標的に当たらなかつた弾丸は、反対側の《門》 を通過し、再び別の角度から何かに当たるまで猛進をやめない。

これが実弾ではなくゴム弾なのが一握りの良心であろうか。ゴム弾と言っても、当たり所が悪ければ、骨も折れるし、命に関わる危険性を孕んでいるが。

「猿鬼ッ！」

弾幕結界が張られる中、千草はこれにいち早く対処した。

彼女が新たに呼び出した式神は、猿の格好をした着ぐるみである。



そう。着ぐるみだ。

千草は自分の式神を着込んでしまい、全身を隈なくカバーする。死角から飛んで来る弾も防ぐことが出来るように。

そして、この試みは成功であった。

次々と密教僧が倒れていく中でも、式神は完璧に衝撃を阻み、千草を弾幕から守り切った。

弾丸による暴風がやむと、

「《解除》」

との虚無僧の掛け声でドームのようにこの場を覆っていた数十の《門》が消え去る。

虚無僧は深く被った藺笠を引き上げ、顔を晒す。

先程唐突に倒れた筈の長谷川千雨が、そこにいた。

そもそも千草が乱入した少女二人に注目した理由を思い出して欲しい。

それは、服装である。

二人が来ていた統一性の無い私服姿が目立っていた為、容易く乱入した人物を特定することが出来たのだ。

逆に言えば、画一的な服装は個性を殺す。

似たような格好をした集団の中に、人知れず部外者が一人加わっていたとしたら、果たして気付くことが出来るであろうか。

「《霞の羽衣 種別<sup>パターン</sup> 全身：番号 25 即時発動》」

千雨が新たに呪文を紡ぐ。

千雨の手から湧き出るように光の泡が溢れ出し、それが彼女の全身を覆うと、次の瞬間には千雨は虚無僧の格好から、動きやすそうなカジュアルな服装へと変貌を遂げた。

これが千草が計り損ねた論理魔術の魔術特性 概念操作。

形状・質量・体積、果ては気圧や気温を意のままに操るなど、千雨にとっては造作も無いことだ。

「まさか着ぐるみで防がれるなんてな」

唯一、傷一つ負っていない千草を見て、感心半分呆れ半分といった割合で、千雨は率直な感想を述べる。

「お前、さっきまでのアレは偽物か」

「ん？ ああ。アレはただの《人形》だから、気にするな」

元は茶々丸の予備のボディであったものを借りて、千雨の身代わりになるように弄繰り回した結果があれだ。

当人は《人形》が見栄え良く暴れている裏で、先程の《門》を使った下準備をずつとしていた。短時間でもいいから銃弾を全て吐き出すまで、楔ぎに消されない《門》を行使する為の準備を。

その成果は上々。

千草を除くほぼ全員が負傷し、これでは神道の守りを突破することなど、不可能であろう。

だが、陰陽師は符を引き抜く。

「生憎なあ。こんなところで終わるわけにはいかんのや」

未だに陰陽師の闘志は萎えてはいなかった。

それほどの執念を。ここまでの情念を。全てを掛けて臨んだ戦いだ。例え先が無いと分かっているでも、止まるという選択肢は既に無かった。

符を放とうとする千草の側頭部を衝撃が駆け抜ける。

「がッ!」

またしても、関知できない未知の攻撃であった。

衝撃を堪えきれず、千草は地面に倒れ込む。地面に接する前に式神は還され、泥の中へとダイブ。

そこへ、駄目押しの一音を千雨は口にする。

「ところでさ。バイナリー爆弾って知ってるか？」

バイナリー爆弾。

物質Aと物質Bといった二種類の違う物質を混ぜ合わせることによって爆発を起こす物のことだ。

最近ではテロ対策の為、飛行機内にペットボトルなどの持ち込みが禁止されている理由の一つにもなっている。

何故今こんな単語が出てくるのかというと。

屋根の上、誰も居らず、何も無い筈の空間から二十個近くのフラスコが、突如として現れたからだ。

栓が抜かれているフラスコは、内容液を揺らし放物線を描きながら、延暦寺の術者たちの傍へ落下する。

しかし、混ぜ合わせるのがこの爆弾のポイントだ。

仮に二つの物質を分けてフラスコに入れていたとしても、落下点が少しズレるだけで十全な反応はせず、期待通りの爆発は起きないであろう。

なので、フラスコの中身は全て同じ物である。

ならばもう一つの物質は？　と思われるかもしれないが、それなら既に散布済みだ。

千雨が大蛇の《人形》

　　白雨を使った初めの攻撃。夕立のように

降り注ぎ、境内に大きな水溜りを作り、術者の衣類にたっぷりとしみ込んだ水こそが、もう一つの物質。

バリント

フラスコが割れるまでに千草に出来たことは、護符を握り締めるくらいであった。

そして、轟音と爆風と爆熱が一時的に空間を支配する。

「やはり些か派手過ぎたのではないでしょうか？」

全てが収まり、そう呟きながら絡繰茶々丸が、フラスコが飛び出した何も無い空間から、スナイパーライフルを携え現れた。

種明かしをすれば簡単だ。姿が見えなかったのは千雨が大気を操って、光の屈折率に干渉していたに過ぎない。

術を解析しようとした千草の式神などが悉く還されたのは、茶々丸が狙撃を行っていたから。

千雨のサブマシンガンにはされていないが、茶々丸の物には退魔の術式が施されている。

再三繰り返すが、ここは神道の領域だ。

馬鹿正直に魔術合戦をする選択肢なんて、この二人は考えてすらない。

魔法が駄目なら、科学で攻めればいいじゃない、と。

「派手って言うけどな、最後のバイナリー爆弾を使うかどうかの選択権を握ってたのはお前だからな」

「麻帆良に帰ったら軍事研の方にお礼を言わなくてはなりませんね」

「さらっと流しやがったよ」

軽口を叩き合いながら、白雨や囃といった《人形》を回収する。

ちなみに、この《人形》たちは魔術と科学のどちらかによる純粹な技術ではなく、二つのハイブリッドである。

気が付けば既に日は落ちて、夕焼け色だった空は深い藍色に様変わりしている。

東の空では星々が輝き始めた頃だ。

「また派手にやったなあ」

と、その男が現れたのはそんな時間帯だった。

「言つとくがこれを行ったのはほとんど茶々丸だからな」

爆発による惨状を指しながら、千雨がその言葉に反応する。

「千雨さんこそ、何かの映画だったら真っ先に死亡フラグが立つような撃ち方をしていたじゃありませんか」

「それはそれ、これはこれだ。つーか、こんなところで油売ってて

いいのかよ、彩輝は」

「一応加勢しに来たつもりなんだが」

「もう終わりましたよ」

「来るの遅えよ」

「本山とその周辺を制圧して、割と急いで来たのに、何て酷い言われようだろうか。まあいいや。ウチの愚妹は？」

彩輝の問いに千雨と茶々丸が答えるよりも速く、夕闇を一条の光が切り裂いた。

光は日吉大社の内部へと降り注ぐ。

「じゃあ俺は朱織の勇姿を見学してくるわ」

「では私たちは他の皆さんと合流するのでしょうか」

「だな」

そう言つて、彩輝はそのまま日吉大社の内部へと。千雨と茶々丸は《門》を通過して、木乃香と刹那の二人組と合流した。

ここで、冒頭の虹に関する雑学に一つ付け加えよう。

虹を英語で言つと rainbow になるが、これは <sup>rainbow</sup> 雨と弓から来ている。

西洋では虹を竜ではなく弓に喩えたということだ。

きつと今頃、あの殺人鬼は手に弓を持ち、血の雨を降らせ、星空へ架かる橋を建設中なのだろう。



## 第五四話：凶り狂う三日目

駆ける。

少女は一人、敵陣の中を駆け抜ける。

その少女、ロリータ・ファッションに身を包み、眼鏡を掛け、元々腰に届く程長かった髪は昼間の戦闘で散切りにされてしまい、今は見かねた上司によつて肩口で切り揃えられている。

「うふふ。うふふふ」

そして少女　月詠は手に持った長短二刀を振るう。

その度に血が溢れ、血が流れ、血が飛び散る。先程倒れた人間が着ている紅白の巫女装束が赤一色に染まっていく。

立ち上がれない生者を踏みつけ、二度と動くことの無い屍を踏み躪り、尚も少女は戦場を駆ける。

日吉大社側も巫女の比率が高いことは確かである。

しかし、全員が非戦闘員というわけではない。神楽を修めた男や、鳴弦など相手を討つ技能を会得している巫女の方が多いのも、また事実。

ならば何故、たった一人、月詠の猛進を止められないのかと言つと、これには巡り合わせが悪かったとしか言いようがない。

この三日間、月詠には二度戦闘を行う機会があった。自分よりも格上と、自分と同格であるう相手と。

本来ならば心置きなく死合え、心の底から愉しめたのだろうか、そのどちらもが中途半端な形で、不完全燃焼に終わってしまったのだ。

そして、今ここは戦場。

燻っていた闘争心が再燃し、この三日間で溜まったストレスを、不快感を、不満を心行くまで発散する。

胸に溜まった鬱憤を全て吐き出すかのように、月詠は刀を振るう。

「うふふふふふふふ」

最早、人を殺すのを止める者など居ない。人を斬るのに歯止めを掛けようとすらも思わない。

この狂人の相手をするには、そこそ腕の立つ程度の者では荷が重過ぎるのだ。

道を阻む者が居れば斬り払い、道を塞ぐ者が居れば斬り伏せ、道を遮る者が居れば斬り裂いた。

だが、それでも。

（ああつ。足りない、足りない、足りない足りない足りない、足りない！　こんなんじゃ全然足りません。）

もっとももっとももっとと血と戦を。もっと斬り甲斐のあるモノを！（）

この少女を満足させるには至らない。

満たされないまま、満ち足りないまま、月詠は更に奥へと進攻する。

『いきたま たるたま たまとまるたま くにとこたちのみこと』

ー

当然、黙って斬られるのを待つわけもなく、日吉大社側の巫女が数人、新たに立ち塞がる。

全員で一樣に同じ術に集中し、月詠の動きを止めようとする。

本来なら彼女たちが行っている術は、対象者の魔力の流れを良くしたり、活力を与えるもののだが、薬も度が過ぎれば毒になるよう、過剰に力を注いで月詠の命を蝕む。

自分の中で流れる魔力や気を他人の思惑で無茶苦茶に掻き乱されるのだ。

これが苦痛で無い筈が無い。

並大抵の術者ならば、これだけで戦闘不能に陥ってもおかしくないことである。

流石の月詠も足元がふらつく。そこへ、

ドンッ

と、震脚にも似た足運びが、月詠の眼前の男から行われる。

神楽。

舞や能といった、神様を楽しませる技法。

だが、それは舞台の上に限られることではない。目的が神様を楽しませることなのだ。その技術の中には武術までもが含まれている。

男は間髪入れずによるめいた月詠へ掌底を叩き込む。

忘れてはいけないのが、神楽は神道より派生した一種だということだ。

当然その特性もまた、楔ぎということになる。

魔法使いの障壁ならば障子紙のように容易く破る掌底が。神の息吹を受ける為魔力で十分に強化された掌底が、バランスを崩した月詠に向かって放たれる。

「うふふふふ」

しかし、嗤う。自らに迫る危機に対して笑みを崩すことはない。

足に力を入れ、倒れそうになる身体を支える。

「神鳴流奥義『斬岩剣 弐の太刀』」

そして、手にした太刀で奥義を繰り出す。

退魔と退魔。特性故か込められた魔力はお互いに反発するように霧

散し、残されたのは生身の身体と一振りの刀。

刀は製造理由を全うし、柔らかな肢体へと刃を滑らせる。

「グ、があっ」

男から呻き声上がる。月詠はその声を止める為、逆の手に握っている小太刀を振り下ろす。

それを阻む為、少し離れた場所から弓の弦が弾かれた。

矢が番えてあるものも、番えてないものも、区別無く。その音は十を超す。

形のある矢は真っ直ぐに月詠へと向かう。形の無い静謐な音の矢も月詠を射抜かんと大気を裂く。

だが、月詠は止まらない。既に男のことは眼中になく、矢を射た相手に向かって前進する。

壊れた玩具のように、狂ったプログラムのように。刀が相手に届く範囲まで、突き進む。

月詠は身を捻じって、見える矢をかわし、音の矢は刀を振るって相殺した。

だが、完璧にタイミングを計っているわけではなく、身体には少しずつ裂傷が増えていっている。

まるで初めから自分が受ける攻撃など、度外視しているとしか思え

ない行動だ。

自分が受ける攻撃も含めて戦いを愉しんでいるかのような振る舞いである。

そして、傷付きながらも後退という選択肢を放棄した月詠は、巫女たちの前に辿り着いた。

「うふふふふ」

口端を吊り上げ、手に持った太刀が巫女の喉元へ吸い込まれる。

鮮血が飛び散る。

「ひっ」

小さな悲鳴が上がる。それと同時に、少なからず月詠の動きを鈍らせていた祝詞が止まった。

無理も無いことだろう。あれだけの攻撃を受けて、愚直なまでに、人を斬る為だけに突き進む彼女の狂気を、同僚の死という現実で認識してしまったのだから。

「『は、はらいた』」

「神鳴流奥義『百烈桜華斬』」

どうやら、月詠と彼女らは、巡り合わせだけでなく、相性もそこはかとなく悪いようだ。

どんなに狂っていようと月詠自身はただの人間で、手に持つ二刀は一昨日に新調したばかりの何の変哲もないただの鉄の塊。

一切の魔を祓うという触れ込みも、目の前の狂った少女には通用しない。『弐の太刀』を用いれば、相殺に近い形に持って行かれる。

またしても血が流れる。また新たに人が倒れる。

この狂気を止められる者は、この場には居ない。

かと、思われた。

「随分好き勝手してくれたね、お嬢ちゃん」

しゃりん。と神楽鈴の清い音が響く。同時に結界が張られる。身を守るためではなく、相手を殺す為の結界が。

新たに巫女装束の若い女性が現れた。ただ、その女性は周りの巫女たちと、纏う空気が明確に違っている。

ここで初めて、月詠の顔から笑みが消えた。

「貴女は？」

「ああ。比叡山ヒイの首領をやってる者だ」

会話をしながらも、しゃんしゃんしゃん、と鈴は鳴り続ける。この首領が鳴らし続けている。

「流石首領さん。これはまた……えげつない術です、ねッ！」

そして会話を打ち切るように、月詠は首領へ刃を向ける。

「同意するよ。一年ほど前に居た弟子が気付いたら使ってた術でね、アレは『身殺ぎ』と呼んでいた。まあ、私も今まで忘れてたんだが」  
そんな声を聞きながら、月詠は結界内を駆け抜ける。

月詠にとって幸いだっただのは、あくまでもこの『身殺ぎ』は、とある殺人鬼の為の術で、首領と言えど十全に効果を発揮することが出来なかったことであろう。

更にこのような状況に陥るまで忘れていた術だ。日頃から修練を積んでいる筈も無い。

しかしそれでも、この結界の危険性を肌で感じ取っている月詠は一刻も早く斬り払おうと首領に向かって走り出す。

結界内を疾走する月詠を視界に収めてはいるが、結界の維持の為に首領は一步たりとも動こうとしない。

月詠の刃が煌めく。

そこへ、世界を呪うかのような殺気と共に、別の巫女が乱入する。

今この場に居る巫女のような紅白の鮮やかな巫女装束とは違い、千早も袴も全てを黒に染め上げた黒巫女が、首領の喉笛を掻き切ろうとする刃を止める為、横から手を伸ばし、月詠の腕を掴んだ。

「まあ、本人に遭えば嫌でも思い出すさ」



月詠の腕を掴んでいる黒巫女は、同じ年頃の少女。左手で腕を掴み、右手には弓を持っている。

そして、月詠へと向けられた弓は口で弦を引き絞られ

「あは」

パンツ！ と空気を裂いた。

ほぼ零距离。咄嗟に掴まれていない方の腕で小太刀を振るったその反射神経には目を瞠るものがある。

弓から放たれたギロチンさながらの圧縮空気の刃を斬り、ただの風の塊としてその身に受ける。その衝撃で月詠は黒巫女との距離を取った。

その光景を見ながら、爛々と眼をギラつかせ、哄笑を洩らしながら、黒巫女 零崎朱織は高らかに宣言する。

「キヤハハハツ！ 零崎始めっ！」

再び、月詠の表情に笑みが戻っていた。

しかし、それは今までの笑みとは違う、まるで生き別れた愛しい恋人に逢ったような、華々しい笑顔であった。

「それじゃ、手筈通りに」

と、『身殺ぎ』の結界を中断し、右手に玉串、左手に神楽鈴を持つ

た首領が声を掛けるが、既に二人は互いに向かって走り出した後。

「『高天の原に神留りまして

』」

しかし、気に留めることも無く首領は祝詞を紡ぎ始める。

その前方で新たな死闘もまた、始まった。

凶々しい巫女が弦を鳴らす。

狂おしい剣士が刀を振るう。

殺気と狂気で満たされた空間を幾重もの刃が斬り分ける。

弓と刀。

ある程度の距離を維持できれば、一見朱織が有利になるように思えるが、常識から逸脱した者にとっては縁遠い理屈である。

月詠が「斬空閃」と二刀から斬撃を飛ばし接近する中、朱織もまた同じ数だけ弓を引き前進する。

一歩たりとも退くことはせず、相手よりも速く足を踏み出す。

そして、お互いに手が届く距離まで近づいた。

巫女が晒う。

剣士が嗤う。



しかし、どちらも守りの体勢には入らない。

互いに離れないように。互いを離さないかのように、執拗なまでに攻め続ける。幾度となく攻め立てる。

だが、永遠に続くように感じられる鎬を削る命の奪い合いにも、いよいよ幕引きの時間が近付いてきた。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

月詠の息が上がり始めたのだ。ずっと休み無しで『身殺ぎ』の結界内でも戦い続けていた月詠と、途中から参戦した朱織との残りの体力差が明確になってきた瞬間。

「いいえ。まだどす。まだ上がありますやろ？ もっと、もっとウチを愉ませてください」

と、月詠は朱織に問いかける。

三メートル程の、この二人ならば一步で間を詰めれる距離を開けて動きを止めた。この戦闘における初めての小休止。

それに対し朱織は、

「キャハハハ。それじゃあ、お言葉に甘えさせて貰いましょう」

と答えた。

しゃん！　しゃん！　しゃん！

ふと、月詠はあることに気付く。いつの間にか鳴り響く鈴の音が大きくなっているのだ。

朱織の動きに警戒しながら、周りに視線を向けると、比叡山 首領を筆頭にここに集まった全ての巫女が一樣に何らかの儀式をしている。

同じ結社。同じ魔術系統。同じ流派だからこそ出来る芸当。

全員が全く違う分野に特化し、少数精鋭の彩輝たちでは実現不可能な領域。

そして忘れてはいけない。零崎朱織はこの弟子だったということ

いくらなんでも巫女全員が同じ儀式に取り組んでいれば、普通なら嫌でも気付く。

しかし、月詠は気付かなかった。否、目の前の黒巫女が気付かせなかったのだ。

弓という遠距離武器を武器を手にしながら、接近戦に持ち込んだ理由。

互いが高速で命を刈り取ろうとする間、月詠は朱織から一瞬たりとも目を離すことが出来なかった。朱織以外の人間に目を向ける暇など無かった。

その間に恙無く儀式は進行し、その結果がこれだ。

「『 茂しやくはえの如く萌え騰る 生く魂、足る魂、神魂なり』  
」

祝詞が終わると同時に、赤色から黒色へと変わりつつある空の境目を、一条の白銀の光が二分したのだ。

「さて、貸しの徴収だ。スクナノカミ」

そう呟いた朱織の頭上に光が降り注ぐ。

轟、とその余波で山の木々が軋む。近場に居る巫女も数名が儀式を切り上げ、首領を含めた他の巫女たちを守る為に結界を張る。

神降ろし。

一昨日、朱織がやったことの逆である。そしてその出来事があったからこそ、神様と 縁が合った。

神通力の奔流が少女の中を駆け巡る。

未熟者がやれば自身のキャパシティをあっさり越えてパンクし、簡単に『力』に押し潰されるだろう。

果たして達人と呼ばれる者たちでも、神という『力』の権化を真正面から受け止めて無事に済むであろうか。

だが彼女にとって、これは別段珍しいことではない。

例えば彼女の兄、零崎彩織ならば日常的に霊脈から魔力を汲み取っ

ている。人の身には過ぎる『力』を平然と制御している。

ただあやかる対象がほんの少し違うだけだ。

そして、彼女ならばこういうだろう。

「兄に出来て、妹に出来ない道理は無い」

それに、膨大な『力』の中で一つの儀式をやり遂げるのは、一昨日経験したばかりだ。

もう必要のない弓をカードに戻し、ぐっ、と手を握る。

指先からつま先まで、血の一滴、細胞の一片に至るまで神通力を身体の中に沁み込ませる。疎密無く、万遍に全身に『力』を行き渡らせる。

心配性だなあ、という感想を持ちながら。

「もう最後になるだろうから一言だけ言っておくよ」

と、朱織は月詠に語りかける。

「これでもね、一年近くこの世話になったんだ。仇討ちをやれる程、人間関係を構築していたかと聞かれると微妙な所だけど　お前は殺す」

純粹な殺意が。凶々しい殺気が月詠を貫く。

「うちからも一つ質問が。今更ですけど、こんな殺気出すなんて貴

女何者です？」

答える義理は無いのだろうが、律儀にも朱織はその問いに答えた。

「零崎朱織。ただの 殺人鬼だよ」

その返答は嗤い声であった。

「うふふふうふふう。鬼に！ 神に挑まずして！ 一体何が人間かッ！！」

そして月詠は一步を踏み出した。この一步で二人を隔てていた三メートルの間合いは一瞬で零になり、純潔の狂気と共に、純白の兇器が振るわれる。

勝てるなどという幻想は抱いていない。生き残れるとも思っていない。

しかし、それがどうした？

彼女が求めるのは血と戦。勝敗なんてものに興味は無く、命の有無だなんて度外視だ。今までも、そして、これからも。

もう、余力は考えなくていい。

文字通り、全身全霊で、命を燃やして、魂を振るわせて、月詠は生涯で最高の一撃を繰り出す。

だが、その刃は、朱織の肌を傷つけるには至らなかった。



対称に朱織の掌底は月詠の心臓を的確に穿っていた。

血と戦に溺れた狂戦士は人間の限界に挑み、戦場でその命を散らす。

しかし、

「ああ。愉しかったあ」

その死に顔は憑き物が落ちたように、とても晴れやかなものであった。

自身の身体を支えることが出来なくなった月詠はゆっくりと地面に崩れ落ちる。

総本山に続き戦闘が激化すると思われた比叡山の戦いも、この瞬間に終わりを迎えた。

「よう。おつかれ」

そして、神を還している最中の朱織に声が掛けられる。

「懐かしいね　え。その狐面」

声を掛けたのは言わずと知れた近衛彩輝である。既に朱織も戦闘のテンションではなくなっている。

「ついでに、やっぱり彩兄は甘いよね　え」

「ん？　何が？」

「私降ろすのが専門で、降ろされるのは初めてだったんだけど」

暗に、あそこまで十全に制御できたのは、自分の実力だけではないと語る。

「何が言いたいのか俺にはさっぱり分からないよ」

それに対し、彩輝はあくまで白を切り通す。

「ありがとね」

「……一応、どういたしましてと言っておこうか」

「それで彩兄はこれからどうするの？ 私は休憩するう、というか眠い い」

普段通りなので違和感が無いが、それでも神降ろしの疲労はピークに達しているらしい。

「ホテルまでは連れてってやるよ。まあ、後はその辺の小競り合いを抑え込むだけかな」

比叡山 首領との挨拶もそこそこに、彩輝は朱織を連れてホテルへと戻る。

そして、そこでネギ・スプリングフィールドとその従者の不在を知るのであった。

この派閥争いにも終わりが訪れようとしている。



## 第五四話：凶り狂う三日目（後書き）

朱織自身が殺し損ねたとか直接的な表現はして無いから、ここは「つギリギリセーフ」ということで。

次回、漸く終戦。

第五話：もう何も怖くない三日目（前書き）

サブタイ注意。

まさか彼女がこのタイミングで再登場するとは、誰も予想出来なかつたろう。

## 第五五話：もう何も怖くない三日目

古来より山は異界として認知されていた。

日本は元々国土の八割が山である。昔から集落の隣には山が存在しており、水源や狩猟、果実など自然の恵みが得られる場所であった。そして同時に、火山噴火など畏怖の対象でもある。

それにより、山は神や御霊が宿る場所と信じられた。

他にも山上他界と呼ばれる物があり、死者の魂が山に帰り、山の上の遙か彼方に行ってしまうと考えられたものだ。

だからこそ、神や靈魂といったこの世ならざるモノが居る山を異界と認識したのだろう。

そして、派閥争いが表面化し、戦闘が激化する前のこと。

京都に聳え立つ山の一つ　大江山に白髪の少年、フェイト・アーウェルンクスが訪れたのは、まだ日が傾き始めた頃のことだった。

彼がこの場を訪れたのは使命でも宿命でも何でもなく、ただの気紛れである。強いて言うなれば運命といった大きな流れの所為であるうか。

黄昏の姫御子に関する情報の真偽を確かめる為、ネギ・スプリングフィールドの従者と使い魔を石化し、神楽坂明日菜を昏倒させたフェイトは、二人と一匹の主であるネギをここまで運んで来たのだ。

フェイトは気を失っているネギの襟首を掴み、ずるずると引き摺りながら山道を歩く。

当然そこには配慮といったものは一ナノグラムたりとも無く、フェイトが一步進むたびにネギは採れたての作物のように泥に塗られている。

そうしている内にフェイトは奇妙な一団と出会う。

一つの祠の前に、年齢性別問わず何十人も人間が集まって、一心に真言を唱えるという不気味な光景を形成している者たちだ。

彼らは戦闘が起きる前にいち早く京都に集まった過激派の集団である。

「何用だ。西洋魔術師」

と、そんな中から一人の山伏が儀式から離れ、フェイトの前に移動してきた。

もとを糺せば、穏健派も過激派も西洋魔術とどう折り合いをつけるかといったことで、袂を分かった間柄だ。

そこに関東魔法協会とは関係の無い西洋魔術師であるフェイトが協力しているのは、良くも悪くも少々目立ったことになっている。

更に彼の雇い主は、本来であればリョウメンスクナノカミを一人で降ろす予定だった天ヶ崎千草。

失敗が続いた彼女の処遇がどうなったのかは、出世目的の人間なら

ば誰でも知っていることだ。

だからこそ。その部下であるフェイトがここを訪れる理由は皆無と  
言っていていい。

そのことを不審に思ったのが先程の山伏の問いである。

「持ち場にはちゃんと戻るさ。ただちょっと、届け物をしに来ただ  
けだよ」

届け物。という単語に山伏の両目がフェイトの手元に焦点を合わせ  
る。

「その子供は？」

「これは関東魔法協会の特使。大戦の英雄、ナギ・スプリングフイ  
ールドの息子だよ」

山伏の懐疑的な眼差しを受けて、フェイトは淡々と商品の説明を進  
めていく。

「青々としていてちょうど収穫も楽だったからね。近衛木乃香の保  
有魔力量と比べれば見劣りするが、それでも相当の魔力を持っている  
ことには変わらない」

腐っても英雄の息子。

本山で治療を受け体力・魔力共に回復していた時に、フェイトによ  
って一撃で沈められた。



それ故に膨大な魔力量は全く減っておらず、ここに居る山伏たちにとってはこれ以上ない差し入れだろう。

更に、英雄の息子というネームバリューが素晴らしい。

薬なり術なりを使つて洗脳すれば、利用価値は跳ね上がる。この点は日本国内でしか通用しない木乃香の立場よりも都合が良い。

「そうか。ならば存分に利用させて貰うでしょう」

そして、ネギ・スプリングフィールドはフェイトから山伏の手へと渡されたのだった。

このフェイトのただの気紛れにも、アトラクタフィールド理論・バツクノズル・ジェイルオルタナティブといったものが働いたのだろうか。

起こると決まっていることは、小さな差異はあっても、別の場所・別の時に必ず起きる。

誰かがやるべきことはどんなに固辞しても、別の誰かがやることになる。

リョウメンスクナノカミの代替品の封印を解く為にこうして何十人もの人間が動き、近衛木乃香の代用品として英雄の息子が利用される。

ある意味、運命とも言つべき大きな流れは何も変わっていない。

「それじゃあ僕は持ち場に帰らせてもらおうよ」

そして用が済むなり、フェイトはこの場から転移する。

否。この場からではない。一刻も早く京都から離れる為に転移を何度も繰り返す。

今はまだ彼の殺人鬼が動く前。

こうしてフェイトは血で血を洗う戦闘が始まるまでに、無傷で京都から脱出することが出来たのだった。

そして現在。

傾いていた日は完全に没して、夜が到来していた。

人と妖が交わる、昼と夜とが混じり合う大禍時は過ぎ去って、ここからは魑魅魍魎が跋扈する時間帯。

山中での儀式もいよいよ佳境に入っていた。

主な光源は、夜空に輝く月と星。そして、山中に取り付けられた篝火だけである。

この頼りない光の中に集まっている人間たちも、一人一人の個性が抜けて、一群と言った方が良いような体系になっている。

それはまるで歯車のように。儀式を進める為だけに、詠唱をし、魔力を放出する。

誰かが欠けても、すぐに別の誰かがその役割を全うするシステム。そこに個人という概念は必要無く、部品としての価値を求められるだけ。

これもまたジエイルオルタナティブであろうか。

「ぐう……うあ……」

そして、長時間に及ぶ儀式の中で、いつの間にかネギ・スプリングフィールドは目を覚ました。

ネギは祠と一群の間、地べたの上に寝転がされている。

当然動きは封じられていて、逃げることは叶わない。口から漏れるのは呻き声ばかりで、意味を持った声を出すことは出来ないであろう。

こうしている今も、真言の一音、一節が唱えられる度に身体から魔力が奪われていく。

抵抗どころか身じろぐことすらも出来ずに、時間はどんどん過ぎて行く。

ネギは絶望と恐怖が縋い交ぜになった目で、篝火に照らされた一群を見渡す。

彼らが何をしようとしているのか、ネギには見当もつかない。

分かっているのは自分の身体から魔力が抜け落ちていく感覚だけ。

実力不足。経験不足。知識不足。無い無い尽くしてここまで来たのだ。今更敵の真意にも気付ける筈が無い。

無論、このような状況に陥ってしまったのがネギ一人の所為だと言  
うのは酷だろう。

寧ろこれが魔法学校を卒業して一年も経っていない子供の、当然と  
も言える末路。

確かに真祖の吸血鬼を下したという幻想に囚われて、図に乗ってい  
た部分もあつたであろう。

しかし、ただ一言。学園の大人が嗜めていれば、修学旅行先が京都  
に決まった際、一言でも注意を促しておけば、もう少しマシな結果  
になつたのではないだろうか。

まあ、今更そんなことを言つても、既に後の祭りなのだが。

「あ……あ……あ……！」

そしてそれは、英雄の息子としての自慢の魔力量もついに底を突こ  
うとしたときであつた。

バキンッ

と、音を立てて祠に亀裂が入つたのだ。

その瞬間。祠から濃密度の瘴気が溢れ出す。

何年も、何十年も、何百年もの間、ゆっくりと熟成させたかのようなヴェンテージ物の瘴気が、ねっとり肌と肌に絡みつく。

洩れ出した瘴気は辺りの草花を枯らしていく。その時間は数十秒も掛からない。

最早毒の域だ。一般人が当てられればすぐに昏倒し、下手をすれば一生目を覚まさないかもしれない。

「ひっ……あぐっ………」

幸いにもネギの魔法抵抗力は高く瘴気に当てられることはなかった。逆に気を失えなかったことが最大級の不幸とも言えるが。

しかし、まだ儀式は終わらない。

「がっ……あっ、ああああっ！」

底を突きかけていたネギの魔力を全て使い切り、一群は儀式の仕上げへと取りかかる。

そして祠からより一層濃く、濃厚で、濃密で、濃縮され、凝縮され、こっけりとし、トロリと粘つく、鬱々とした瘴気が溢れ出した。

次に訪れた変化は顕著なものであった。

その祠の亀裂から、まるで深淵にでも繋がっているような闇の中から、ナニカ左腕が伸びたのだ。

子供の胸ぐらいはあろうかと思われる太い腕。手の先で伸びている

爪は、どんな名刀・妖刀にも引けを取らない鋭利さを醸し出している。

亀裂から這い出るなんて物理的にはあり得ない。魔術的な拘束が、今まさに解かれようとしていた。

ダァンッ

そして、伸ばされた腕はそのまま地面に叩きつけられる。

たったそれだけの動作で、？ぐらり？と地面が揺れた。地獄から這い出てきたモノに恐怖するかのように、山が震えたのだ。

左腕は五指を地面に食い込ませるように力を込める。

それを支えに、祠の亀裂からずるずると身体が顕わになる。

剥き出しになった左肩が出たかと思えば、ぼさぼさの頭髮が、左耳が、左目が、鼻が、そしてその顔が外気にさらけ出された。

鬼のような表情、どころの話ではない。

どこを見ているか分からない濁った眼。裂けた口元から覗く牙。何より特徴的なのは額から伸びた角であろうか。

その全ての要素が、憤怒の表情を彩っていた。

ここは大江山。

大江山には三つの有名な妖怪退治伝説が残されている。

一つ目は崇神天皇の弟、日子坐王が土蜘蛛を退治した話。二つ目は聖徳太子の弟、麻呂子親王が英胡、軽足、土熊の三鬼を討ったという話。

そして、三つ目が日本三大妖怪に数えられる酒吞童子の伝説である。彼らの目の前に居るのは、紛れも無く鬼であった。

顔に続いて右肩が、右腕が裂け目から出てくる。

ダァンッ

もう一度。次は右腕を振り下ろし、山を揺さぶる。

両腕で身体を支え、酒吞童子はその巨軀を晒す。

この瞬間。大江山は現世の理を外れた、異界へと成り果てた。

「やった！ やったぞ！ これでこの戦いは、我らの勝ちだ！！」

この場を集った山伏たちは歓喜に打ちひしがれる。

日本の妖怪の中でも最上位に位置する鬼を呼び出すことに成功したのだ。圧倒的に不利になってしまった戦況を覆す程度、酒吞童子を用いれば造作も無いことだろう。

まずはこのまま本山を落とす。否、それだけではない。この大鬼を目の当たりにすれば、関東に巣くう西洋魔術師など難なく倒せる。

それは希望や楽観的観測などではなく、この場に居る全員が抱いた  
確固たる確信であった。

地面に手をつく必要がなくなった酒吞童子は両足でしっかりと立ち  
上がり、空いた右手を伸ばす。

伸ばされた手が向かう先は、一群と化していた一人の人間だ。

「な、何を……おい！ 言うことを聞け！」

一同に困惑が広がる。全員が酒吞童子を御しようとして一丸となって術  
を行使するが、腕は止まらず、

ゴキバキベキッ

一人の術者を握り締めた。

「ぎゃあああああアツッ！！」

幾重にも骨が砕かれる音と、断末魔によってこの場に居る全ての人  
間が停止した。磔にされたように動けない。

そう。彼らに出来たのは封印を解き、呼び出すところまで。この大  
鬼を使役するには至らなかったのだ。

動作も、思考も、全てが止まり、目の前で起こっている出来事に釘  
付けになる。

人を握り締めた手は、ゆっくりと酒吞童子の口元に運ばれて行き、



「あああああああああ  
」

ブチッ

と、ナニカが噛み切られる音と共に断末魔が？びたり？と止まる。

鬼の手に握られている、肩口が水平になったオブジェから赤い水が溢れ出す。赤く見えるのは篝火の所為だけではない。

同時に咽かえるような鉄の臭いが辺りに充満する。

ああ。アレは血だ。

ぼんやりと眺めながらネギがこの結論に至るまで、その時間は掛からなかった。

ぐちゃり、ぐちゃり、ぐちゃり、ぐちゃぐちゃ、ぐちゃぐちゃぐちやぐちやぐちや

そして、音が死に絶えた世界に、『ニク』を咀嚼する音が響く。

酒吞童子は再び手の中に残っている『ニク』を口に運ぶ。

そこに優雅さや気品等はある筈も無く、ぼろぼろと口元から『ニク』の欠片が零れ落ちる。

それは骨であったり、筋であったり、臓器であったり。

数分前までは確かに息をして、喋って、思考することが出来る塊であった筈なのだ。

人はこんなにも呆気なく死ぬのか。

理由も無く。意味も無く。ただただ『食事』という形で簡単に死んでしまうのか。

それを理解した瞬間。目の前で繰り広げられている光景も正しく認識することが出来、ネギは胃の内容物をブチ撒けた。

周りに居た術者たちも悲鳴を上げ、蜘蛛の子散らすように、我先にと一目散に逃げ出した。

だが、ネギは未だ束縛され、身動きを取ることが出来ない。逃げ出すことが出来ない。

出来るのは胃が空になるまで嘔吐を繰り返すことぐらいだ。口を拭うことも、溢れ出る涙を拭うことも出来ない。

「ハッハッハッハッハッハッ」

極度の緊張から呼吸は非常に浅く、ちゃんと肺に空気を取り入れることが出来ているのかすら、ネギ自身にも判然としない。

そして、

ぐちゃり

一回目の『食事』が終わった。

当然、たった一人を喰らって程度で数百年ぶりの『食事』に満足す



バランスを崩しそうになるが、伸ばしていた手を地面に着いて倒れないよう身体を支えた。

文字通り間一髪。

酒吞童子が僅かによるめて手の位置がズレていなければ、ネギは今頃ミンチにされていただろう。

と言っても、ネギも無傷というわけではなく、酒吞童子の鋭利な爪が頭皮を掠め、頭髮はざっくりと斬り落とされてしまったが。

「う、わあああああああぁぁぁっ!!！」

頭部の痛みが引き金となり、今まで溜めこんでいた絶叫がネギの喉から迸る。

そして、声を出したおかげか、極度の緊張状態から脱することが出来、ネギはそのまま気を失った。

ネギが最後に見た光景は、闇色のマントを靡かせ、金色に煌めく長髪を風の自由にさせて、不敵に笑みを浮かべる少女の姿であった。

今この山はある種異界へと成り果て、酒吞童子の領域と言えるだろう。

しかし、この時間。日が没し、月が輝くこの時間帯。夜は彼女の領域だ。

即ち、真祖の吸血鬼　　エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの。

見た目は十歳程度の少女が臆することなく、巨躯の大鬼と向かい合う。場違いな光景の筈なのに、不思議と違和感を感じない。

それはエヴァが積み重ねてきた歴史のためであろうか。

「さて、一つ尋ねるが。お前が過激派の隠し玉ということでもいいんだな？」

物怖じせず堂々とした不敵な態度。

その返答は　　酒呑童子の拳であった。

山をも揺るがす拳がエヴァの矮躯を捉えたのだ。そしてそのまま、エヴァを地面へと押し潰す。

「グ　　アア　　」

酒呑童子から漏れ出る声に理性があるとは到底思えない。

そう。この鬼はただ単に怒っていた。『食事』を邪魔されたことに対して。

「……………はあ。何百年眠っていたのかは知らないがな、寝覚め悪過ぎだろ」

溜息と共に呆れの色が強い呟きが、拳の下から吐き出される。同時に、？ぐん？と酒呑童子の拳が押し戻されたのだ。

今度こそ、それは奇怪な光景であった。押し潰されたかに見えたエヴァが、片手でその大きな拳を持ち上げている。

純粋な力と力の勝負で少女と大鬼が拮抗している。

「『魔法の射手 闇の144矢』」

身体が大きいということは、そのまま強さにも直結するだろう。

小細工無しで純粋な力をぶつけるだけならば、京都にこの鬼を止められる者は居ないと思える程に。

だが、ここまで来て力比べをしようなどとは考えまい。自分の得意とする分野で攻めようとするだろう。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの場合は魔法といったように。

そして魔法に身体の大きさは関係ない。

単に的が大きくなっただけ。これがエヴァが酒吞童子に対する第一印象であった。

エヴァが放った144本の矢は、一発も外すことなく酒吞童子に直撃する。

ほぼ零に近い距離で放った所為か、理性が欠如している所為かは分からないが、酒吞童子は防御せよとせずに全身でその矢を受けきった。

それでも、やはり身体は頑丈なようで、普通の人間なら簡単に殺されていただろう攻撃を数歩後ろによるめくだけのダメージしか与えられていない。

「 ア アア ツ! !」

酒呑童子が咆える。

最早兵器と言って差し支えない声量を爆発させる。

「まあ。同じ鬼のよしみだ。目を醒まさせてやるよ」

しかし、それにも一歩も退くことなく、彼女は静かに告げる。

理性無く、衝動のままに行動する目の前の鬼は、彼女の目にどう映ったのだろうか。

そして理性が無い為、ひゅんひゅんひゅん、と空気が裂ける音に酒呑童子はまるで頓着しなかった。

思うことは『食事』の続きと、それを邪魔した者への報復のみ。

もう一度。鬼は腕を振り上げる。

ここでさっきと違っていている点が一つ。振り上げたのは両腕。そして両手の指を祈るように絡め、その鉄槌を勢いよくエヴァに振り下ろす。

だが、巨体であるが故に初動が遅く、エヴァが詠唱を完成させるにはその僅かな時間で十分であった。

「『闇の吹雪』」

この攻撃は酒吞童子を仰け反らせることに成功する。

このままでは倒れる。

子供でも予想することが出来る数瞬後の未来を回避すべく、酒吞童子は足を引き踏ん張ろうとするが。

ギシリッ

両足に絡みついた糸と周囲の木々が軋み、酒吞童子はバランスを保つことが出来ず、そのまま転倒してしまった。

本日最も大きな揺れと轟音を引き起こしながら。

振動から逃れる為か、酒吞童子が倒れる直前、エヴァは空中に飛び上がりその様子を見下ろしていた。

そして、エヴァの攻勢はまだ終わらない。

起き上がるうとする酒吞童子を眼下に収め、新たな呪文を詠唱する。

「『凍てつく氷枢』」

周囲の気温が一気に下がり、酒吞童子を氷の塊が包み込む。

氷の棺が意識を奪い永眠へと誘おうとする。



ただの力の暴走である現象と、意志を持った災害との決定的な差異が明らかになった瞬間である。

ビシリッ

そして、そう時間が経たない内に氷枢に罅が入る。

罅はどんどん大きくなり、氷枢そのものを瓦解させた。

「頭は冷えたか？」

と、エヴァがどこまでも不敵な態度で問い掛ける。

「お主は？」

この時、初めて酒吞童子の言葉が意味を持ったのだった。

「エヴァー。終わったかー」

そして、全てが終わってから実に見計らったかのようなタイミングで、京都で猛威を振るうもう一つの災厄が登場する。

鬼と吸血鬼と殺人鬼が一ヶ所に集ったのである。

「ハウル。お前今頃何しに来たんだ？」

「え？ いや、酒吞童子が目覚めたって聞いたからさ、一緒に飲むぜ」

そう言って、彩輝は一升瓶を掲げる。

「アツハツハツハツ。いいだろう。気つけには丁度良い」

誘いを受けた張本人は彩輝の本意を確かめようともせず、二つ返事  
で了承する。先程までの無闇に暴れていた時とは違い、毘が在ろう  
と力で捻じ伏せるといふ自信が窺える。

どうやら、本来の気質も見た目通り豪快な鬼のようである。

酒呑童子は等身大の人間サイズに化けると、彩輝から酒を注がれた  
盃を受け取る。

「って、オイ！ ホントに飲むのか!？」

先程までのシリアスな空気は何処へやら。注がれた酒を煽る彩輝と  
酒呑童子を見て、思わずエヴァが突っ込んだ。

どうやらこのまま酒飲みに移行してしまうと確信すると、「私にも  
注がんか」と催促し始めたが。

「しかし、よくアンタ封印出来たよな。何人がかりでどれだけの日  
数掛ったんだ？」

ちらりと辺りに巻き散らかされた瘴気を見ながら彩輝が尋ねる。

「そう思うだろう？ だがな、儂を封じたのは蘆屋光栄とかいうい  
け好かん陰陽師がたった一人でやってのけおったのよ。まあ結局相  
討ちだったがな」

その陰陽師は自身の命と引き換えにこの大鬼を封印したと言いが、

「……ああ。五露の野郎が。成程ねえ。こういう形で縁が合ったか」  
その陰陽師こそ死を自らのサイクルに取り入れた生粹の化物である。  
そして、去年の夏休み。麻帆良の霊脈を喰らおうとしたことで、こ  
こに居る殺人鬼に存在そのものを殺されたのだ。

命と引き換えなんて彼にとってはノーリスク。彼ならばきつと笑っ  
てこういっただろう。「命は投げ捨てるもの」と。

ちなみに四月一日にソロモンの魔神　　バアルを瞬殺したりしてい  
たのは余談である。

「折角酒呑の旦那が復活したっていうのに、三人だけなのはちよっ  
と味気ないかい？」

「誰を呼ぶつもりだ。今の京都の情勢はお前が一番詳しいだろう。  
そんな暇を持て余している奴がいるのか？」

それに返す彩輝の答えは一枚の符。人間を呼ぶつもりは最初からな  
かったようだ。

そして、流れるような動作で慣れ親しんだ妖怪を呼び出す。

猫耳を生やし、丈の短い着物を着込んで、そこからは先が二つに割  
れた尻尾を揺らしている。俗に言う猫又である。

「お。彩識か。なんや久し、ぶ……り……」

鬼と鬼と鬼の中に一匹の猫が紛れ込んだ。世界レベルの大妖の中に

一介の妖怪が入り込んでしまった。

肩身が狭過ぎて潰される思いである。

「やほー、燐の字。久しぶりー」

燐と呼ばれた猫又は羅宇屋を嘗んでおり、彩輝にキセルを与えた重要人物だったりする。

そして燐は、酒呑童子、エヴァと視線を移し、フレンドリーに話しかけてきた彩輝に詰め寄る。

「えっ、ちよっ、彩識さん。ウチなんか気に入らないことしましたか？ いや、マジ、ホント、助けて、帰らせて」

「連れないこというなよー、燐の字。酒呑の旦那の封印が解けたんだから盛大に祝ってやろうぜ。っーわけで知り合い片っ端から呼ぼう」

魔力と酒は俺が受け持つ。

と、その言を聞いた燐は一人でも多くの道連れを増やす為、手当たり次第に声を掛ける。

十分もしない内に大江山に出来た異界は宴会場という更なる異界へと変貌を遂げていた。

この宴会が切っ掛けで零崎彩識とエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの名は広く知られることになるのだが、それはまあ余談であろつ。

「おーい、彩輝ー。ここに転がってる残念な頭したガキ、喰ってええかー？」

「んー？ …………… あっ。ソレ、ウチの学校の担任だから喰わないでくれよ」

そして空で輝く月の位置がかなり動いた時、彩輝が立ち上がった。

「よし。酒は置いていくから後は好きなだけ騒いでてくれ」

「おい。何処に行くつもりだ主催者」

と、そんな彩輝をエヴァが止める。

「いやいや。折角こんな気持ち悪くなるぐらいの瘴気があるんだから有効活用したいじゃん。どうせ明日には抜われてるんだから」

これが宴会を始めるに至った動機である。続けてもう一言。

「流石にこれだけ時間が経てば、詠春の方も終わってるだろ。元々不正の証拠とかあったんだから。そこから芋蔓式に過激派幹部を除名したり」

「つまり時間潰しに宴会始めたんだな。うん。お前はそういう奴だ  
「よ」

呆れたように呟くエヴァを横目に、彩輝もまた一言呟いた。

「では、零崎を始めよう」

穏健派と過激派の派閥争いは終わりを迎えた。ここから先はただの虐殺である。

第五五話：もう何も怖くない三日目（後書き）

酒吞童子

「散髪は任せろー」バリバリッ

というわけで、三九話の伏線（？）回収完了。

これで次回から髪を切ったネギの気は鰻上りにッ！

……………何故だろう。最後の最後でシリアスの皮を被ったネタ回になっちゃった。

そしてチートオリ主は雑魚ラッシュしただけで終わりましたね。

## 第五六話：とある詐術の営業戦略（前書き）

ルビはセールストークと振りたい。

まさか彼女がこのタイミングで再登場するとは、誰も予想出来なかつたろう。



## 第五六話：とある詐術の営業戦略

今日は日付が変わって四月二十五日。修学旅行四日目の朝である。

俺こと、近衛彩輝は昨晚の内に五つ程家を滅ぼした後、倦怠感からくる睡魔に負け、実家に戻り快適な睡眠時間を満喫したのだ。

流石に現長の息子といっても、組織の重鎮を皆殺しにしてしまったのは色々と罪に問われてしまうところであるが、そこは我が父、近衛詠春の働きによってお咎めなし。

俺が連中の家に向かう頃には、今までの不正の数々と、今回の反乱の責任を問われ一族郎党 協会 から除名された後であったから。

派閥争い終了直後でドタバタやっている間にゴリ押しで通したようなものだが、一度通ってしまえばこっちのものだ。

除名した者を再び迎え入れるとなれば、相応の準備や手続きが必要になる。

たった五つの家の家人を皆殺しにするには十分過ぎる時間だろう。

つまり要約すると。俺がやったことは、無所属でテロ思想を持った魔法使い共を亡き者にしただけなのだ。

カード切る順番は大切だよなえ。切実にそう思うよ。まあ、俺の犯行だとはバレてないと思うけど。

ところで今俺は屋敷の中の一室に居る。

そこでせつせつと指と腕を動かしてヴァイオリンの演奏中なわけだが、モチベーションが自分でも驚くほどに上がらねえ。

それはきつと、ここに居る唯一の観客が、頭にぐるぐると包帯を巻き付けた十歳のガキが一人だけの所為だろう。

言わずもがなウチの担任のネギ・スプリングフィールドである。

昨日俺の飲み友達に酒のつまみ的な意味で喰われそうになったネギ・スプリングフィールドなのだ。

自分の従者・使い魔をいよいよに攻撃されて、全く反撃できずに道具として拉致されたネギ・スプリングフィールドが、この場に居る唯一の聴衆なのである。

何故そんなことを知ってるかって？ ソレを回収したのが俺だからだよ。京都中の規模問わず争いを鎮圧するついでに。

二人と一匹もこの屋敷のどっかに居るんじゃないの？ 詳しいことは預けて放置だから知らないけど。

新田教員などまともな教職員側には、ウチの誰かが干渉してるだろう。万が一にも修学旅行中止とか洒落にならんし。

あー、色々思い出したらやる気が更に消えていく　う。

あまりのやる気の無さに詞を口ずさんでいるものの、今はただただ作曲者に申し訳ないという気持ちだけで演奏を続けている。

曲目はシベリウス作曲　フィンランディア。

「  
o n n a a a m m u s s a l k k a n n u t t , s y n n y i n n m a a  
お前の一日が始まるのだ、祖国よ」

取り敢えず一通り弾き終わったので、ヴァイオリンを『倉庫』の中に収納する。

次に俺は椅子代わりに使っているカホンを叩き始める。

ちなみに、カホンとはペルー発祥の打楽器であって、元々跨って演奏する物だ。

形状は中身が空洞の直方体をしていて、ぶつちやけ見た目は理科室の椅子。

その内一面が打面になっていてそこを叩いて演奏する。

持ち運びとか楽ししストリートミュージックとかに結構重宝されるんだぜ。

「ところで知ってるか？　フィンランディアって独立運動の時に歌われた曲で、この曲がなければ今のフィンランドは存在していないんじゃないかとまで言われているんだ」

と、こちらから話題を振ってやっても、

「人が……人が……」

相変わらず何処を見ているのか分からない虚ろな目をして、ずっとこんな調子で呟いている。うぜえなあ。

「おいおい。何を言ってるんだよ。鬼が人を喰うことの一体何がいけないんだ？」

リズム良くカホンを叩きながら、ネギに語りかけてやる。

『喰う』という単語に実に敏感な反応をしてくれました。

しかし、そんなことは気にせず更に続ける。

「食物ピラミッドも見たことが無いのかお前は？ 一段上の生物が下の生物を食べるのは自然の摂理だろうよ。」

そこに意味は無く、その死に理由なんざ必要無い」

「人の死は……無意味……」

「死んだ人間をどうこうするのは生きた人間のやることだ。それで？ お前はその死に一体どんな意味を持たせたのかな？」

単純に生理的嫌悪？ もっとシンプルに恐怖？ いやいや。違うよな。そうじゃないよな。心の底でお前は喜んでいる。心の奥で嬉しがっている。死人に礼を言いたい程に」

僕の代わりに死んでくれて、ありがとう。ってさ。

「ち、ちがつっ！」

「で？ それの何が悪いんだ？」

「……………え？」

「穏やかに死のうが、悲惨な死に方だろうが、そんなものはどっちにしたって同じだよ」

「……人が死ぬことには変わらない」

「そう。死に様を都合の良いように改変してやるのは生者の特権だ。それにお前は自分の生徒を助けようとしたんだろう？ 結果的には無駄だったかもしれない。でも、率先して行動を起こした奴を、一体誰が笑えよう」

あはははは。溺れた奴助けようとして自分も溺れてたら被害増やしてるだけじゃん！ 俺やエヴァが居なかったら今頃京都は焼け野原だからな！ という本音は一旦横に置いといて。

これで、ネギの目が焦点を結び、しっかりと前を見る。

ふう。これで漸く本題に入れそうだな。

「僕と契約して、魔法先生になってよ！」

多分この時の俺の声は、とても生き生きしていて、とても澁刺としていたと思う。まあ、コレと契約なんて無益なことはいらないけど。

「生け花っていうんはな、花を切ってるだけやないんや。自分の迷いも切ってるんやよ」

などと、唐突にちよつと良いセリフで切り出したのは、今回の派閥争いの中核を担うであろう近衛木乃香である。

彼女は桜咲刹那を連れ出して、六班の班部屋で寛いでいる真つ最中だ。

本日六班は外出しないのかと聞かれると、理由は二つ。

京都の観光名所はほぼ制覇したという理由と、

「……はあ。流石に疲れました」

「あ　あ。だり　い」

このように、幽霊と殺人鬼がダウンしているからである。

五班が旅館から出れない理由は言うまでも無いだろう。結局夜が明けても二名の班員と付き添いの担任が帰って来なかったのだから。

この三人に関しては、夜遅くに警察を通して、安全な場所で無事保護されているという連絡が新田先生に入れられている。

協会　の表社会への影響力が皆無というわけではなかったのが、功を奏したのだろう。

流石に国家機関を疑うような人間は、教職員の中には居らず、詳しい経緯は全て闇の中へ。

後々三人には相応の処分が下されることになるが、ここではどうでもいいので割愛。

ここ数十年で一番忙しい時にどうでもいい仕事増やすんじゃないやねえよ、

と 協会 の人間が愚痴っていたのは余談。

さて、それでは木乃香たちの会話に話を戻しまして、

「どうしたんですか、お嬢様？ そんな突然」

と、木乃香の第一声に刹那が問い掛ける。

「何となく兄様が言うであろう戯言を先に殺しておこうかなと」

あの兄にしてこの妹あり。特に意味は無かった。

「ついでに、未だどうでもいいことに悩んでそうなせつちゃんに向けても言っておこうかなと」

事のついでが重要事項なもの、まあいつものことである。

「……確かに、ちょっと割り切れてないところもありますけど……」

「というわけで、兄様に電話掛けてみるな」

言い終えるよりも速く、携帯電話を取り出した木乃香は彩輝へと電話を掛ける。

数コールで電話は繋がり、

「もしもし。せつちゃんがかくかくしかじかでな」

『えー。昔約束したじゃん。「風評とかしがらみとか掟とかくだらないことは気にせず木乃香をよろしく」って』

第一話参照な、と彩輝は嘯く。

かくかくしかじかで通じたのか、なんて質問は無粋なのでやめましよう。

「ちょ、ちょっと待って下さい、彩輝様！　いつから、気付いてたんですか……？」

『目と目が合うその瞬間』

「要するに初対面のことやね」

予想よりも遙か昔の記憶が想起され、刹那は呆気に取られてしまう。

「……何とも思わなかったんですか？」

『いや、別に。ていうかそれ重要？』

日本三大妖怪の一角と出遭って、第一声から躊躇いなく飲み誘った男に死角なんて無かった。

『他に用件ないならもう切っていいか？　これから勧誘とか営業とかで忙しいんだよ』

仕事を頑張らないで欲しいと思ってしまうのは何故だろう。

ついそんなことを思ってしまう刹那の横で、木乃香が二三やり取りをし、通話終了。



「そういうわけで、今更血統とか混血とか気にする人はここに居らんから、せつちゃんも気にし過ぎんようにな」

「あ、はい。そう　ですね」

肩の荷はまだ降ろすことが出来なくても、一晚経って中身の整理はちゃんと出来たようである。

「しかし、概ねハウルの計画通りに事が進んでしまったな」

「彩輝さんなら、そこは計画ではなく算段だ、と訂正を入れるかと思われませうよ」

「どつちでも同じだろう」

話が一段落し、次に口を開いたのはエヴァと茶々丸。

「まあ、流石にハウルも酒吞童子まで連れ出して来るとは想定外だったようだが、何の支障も出なかったな。それどころか、さっそくパフォーマンスに組み込んでいるし」

「そういうところは抜け目ないですね」

「全くだ」

「一応私が還したり、降ろされたりした鬼神のことも忘れないであげて　え」

主従の話に布団の中で蹲っている朱織が混じる。

「あ。なあ、朱織ちゃん。神様相手にする時って、何かコツみたいな  
なんてあるん？ もしもの時の参考までに」

ふと思いついたように木乃香が疑問を投げかける。

「コツね え、……………」

朱織は、木乃香からの問いに暫し黙考する。そして出した結論が、

「頼み倒せ」

意味不明  
簡潔明瞭だ。

「んー。もうちょい分かりやすくお願い」

木乃香もこの一言から全てを推し量ることは出来なかったようで、  
詳しい説明を要望する。

「一回声を掛けたくらいじゃあ、向こうに届かないかもしれません  
からね え。こっちの主張が通るまで何度でも頼むことです」

後は気力とか根気の問題かなあ。

「そんなもんなん？」

「そんなものだよ。木乃香さんの場合、声が小さくて聞こえない、  
なんてことはないだろうからさ あ」

そんなもんかー、と木乃香が一人頷いている横でエヴァが一言。

「吸血鬼に殺人鬼に鬼神に鬼か。揃い踏みだな」

「これ程までの災厄が一日の内に勢揃いしたのにも関わらず、被害がたったあれだけというのは、未だに信じられません」

「おい、ポケロボ。さり気なく自分の主を災厄認定するな」

「えっ？ 違っただんですか？」

「……巻くぞ」

ポツリと呟くエヴァの横で、空気を一新する為かさよが声を上げた。

「あの、いまいち良く分かってない部分があるんですけど、取り敢えず私たちは学校側に目を付けられるなんてことは無いんですよ？」

「ああ。それは大丈夫だろう。何故か最近制服を着ているだけで身分証明になるからな。逆に着ていなければ、個人を特定出来る物なんてないさ」

「それにこの修学旅行に來ている魔法先生はネギ先生と瀬流彦先生の二人だけ。不幸な事に、瀬流彦先生の部屋に泊まっていたのは彩輝さんですから、もう手は打たれていると考えていいでしょう」

エヴァの回答に茶々丸が補足を付け加え、自分たちのアリバイを証明する。

あくまでも行方不明として扱われていたのはネギを含む三人だけ。彼女たちは昨晚、他の班員と同じ様に過ごしたことになっている。

「じゃあ、昨日のアレは流石に彩輝さんでも想定外な規模だったと思うんですけど。さっき言ってたパフォーマンズって……？」

さよは最も身近な問題が解決すると、この騒動の裏側で仕組まれていたことに触れる。

「簡単に言うと関西呪術協会の力の誇示といったところか。組織内の過激派が反乱を起こし、酒吞童子まで持ち出して来ても、一晩で鎮圧出来る力を持っているぞ。といった感じだな」

ちようど先日にはリョウメンスクナノカミが還されて、日本中が協会 に注目している最中に起こったのだ。

宣伝効果を問われれば、結果は絶大だとしか言いようがないだろう。

「アイツは日本中に知らしめたのさ。どの組織に付いた方が一番得をするかとな。そして」

ここでエヴァは一旦言葉を区切る。

しかし、それは間を溜めて次の言葉をより印象付けるといったテクニクではなく、言葉が詰まった原因は、自分が言おうとしたことから連想された記憶からなるものだった。

「成程。アレはこういう意味だったか」

一人納得したように頷くエヴァだが、

「どうしたのですか、マスター？」

周りの者は完全に置いてきぼりをくらってしまつて、説明を要求する。

「修学旅行初日、まだ集合時間には十分な時間があつて自宅で寛いでいた時のことだ。ハウルの奴は暇潰しにルーンを刻んだカードを取り出して、簡略化した占いをしていた」

「それで、結果は？」

「引いたのはハウルではなく私なんだが、そのカードにはハガラスが書かれてあつた」

「ハガラス。嵐や災難という意味ですか」

茶々丸が意味を説明する。

「そうだ。不運な事故で計画がご破算になる、という風にな」

「え？ だったらその占いは外れてるんじゃないですか？ ほとんど彩輝さんの計画通りに進んでるわけですよね？」

矛盾するような内容に、さよは思わず口を挿んでしまふ。

「ああ。私も最初はそう考えていた。だが、この占いは当たっているんだ」

更なる混乱を招く言葉に、聞き手全員が小首を傾げる。

エヴァは次の質問が出てくる前に、その理由を解説する。

「ハガラスが表す嵐の後には、今までの安定した世界が破壊され、新しい世界が現れる、という意味があるんだ。

思い返せば、あの時ハウルは何について占っているのか明言してはいなかった。これが個人の計画とかじゃなく、もっとマクロな問題だったら。そう、例えば」

この国の未来なんてどうだ。

息を呑む。

ここに居る六名と本山に居る残りの一人はほとんど無自覚に改革の手伝いをし、それをほぼ成功させてしまったのだ。

「……一昨日言っていた夢物語、戯言なんかじゃなかったんだ」

今回、近衛彩輝の計画を三言に纏めるところなる。

表向きは修学旅行。裏向きは 協会 の膿み出し。そしてその真の目的は 東西合一。

SIDE千雨

わけがわからないよ。

そうボケてみたところで、ここに突っ込んでくれる相手は当然居らず、寂寥感が増すばかり。

どうしようもなく疎外感を感じてしまう。

どうしようもない孤独感に苛まれる。

何故だ。おかしい。私はただ彩輝と朝方に昨日やったことを軽く電話で話していただけなんだ。

『敵の前に姿を晒すのがチエックメイトの一手前って、なんだそのチキン戦法』

『「魔法使いの夜」と「DDD」3巻が出るまで死ぬるかよ!』

『じゃあ不老不死にでもなってる!』

みたいな感じで偶には私がポケに回ってみたり、冗談を交えながら話していただけなのに。

『ところで、一言喋るだけでいい簡単な仕事があるんだけど、手伝ってくれない?』

……何で安請け合いしちまったんだろう。

今私が居るのは関西呪術協会総本山。目の前に座っているのは彩輝木乃香兄妹の父親であり、この長の近衛詠春。私はその後ろに側近のように控える形で立っている。

この時点で既に場違いだ。

そして私の　　厳密に言えば詠春さんの　　前に座っている連中が  
相当ヤバイ。

過半数の人の身体が透けて反対側が見えているということもあるが、これは遠隔地からエネルギー体の投射なのでなんの問題も無い。

何がヤバイかっていうと、恐山、伊勢、出雲など魔法なんて知らなくても一度は聞いたことのある有名所の首領が雁首揃えて一堂に会しているんだ。

その中にはよく見知ったウチの担任の姿もある。

頭を包帯でぐるぐる巻きにしているが、割と平気そうだな。この場に居る全員から注目されているが、本人は事の重要性に絶対気付いてないだろう。

ちなみに私は髪の色・長さ、顔の造形から体型に至るまで変装ならぬ変身で誤魔化している為、正体は絶対にバレない自信がある。

論理魔術マジ便利。

まあ、これに関しては自分が自分じゃないっていう、かなり気持ちの悪い違和感が付きまとうのであんまり多用したくないんだが、今回ばかりはそんなこと言ってる場合じゃないよなあ。

精神衛生上の問題で、こんな超重要会議に私が関わっていたなんていう証拠は徹底的に隠滅したい。

「さて、挨拶もそこそこに早速本題に入らせて頂きましょうか」

と、詠春さんが喋り始める。

ああ。単刀直入っていいよな。なるべく早くここから解放してくれ。



そう思いながら、『ついでに』と彩輝から頼まれていたことを実行するべく、小型カメラのスイッチを入れる。

「事前にある程度説明されているかと思われませんが、我々関西呪術協会は日本魔術相互扶助協会と名を改めまして、大きな組織改革を行います」

一番の変化は改革の内容だろうな。

今まで関西呪術協会が処理していた仕事を他の結社へ回す。結社側は仕事をこなす代わりに 協会 から報酬を得る。

そして 協会 は各地の情報を集め、同時に表社会への情報処理や事後処理を一手に引き受ける。

真面目に魔術の研究をしようとするれば、多額の金が掛かる。結社側はそれを補うことが出来、 協会 は東西の確執を少しでも和らげることが出来る。

だから相互扶助なんだろう。綺麗に言えば助け合いの精神。

「そこで皆様のお力をお貸しただけなんでしょうか」

手っ取り早く言えば、組織を一新するから傘下に入らないかってことか。

元々二大勢力の一つだった組織が最大勢力になるんだ。ここで入れば恐山のような東北地方でも古参としての発言力が高まるチャンスがある。

こんな荒唐無稽な話、多分一週間前ならすぐに一蹴されただろう。

でも今はそれが出来ない。協会はこの四日間の動乱を迅速に収めたのだから。力を見せつけるにはこれ以上ないパフォーマンスだ。

そして何より、

「関東魔法協会は日本魔術相互扶助協会へ参入することを表明します」

流石。ウチの担任は言うことが違う。

「……失礼だが、それは関東魔法協会の正式な決定なのかな」

まあ、十歳のガキがこんなことを言っても信憑性は皆無だよな。ついでにまだ新米の十歳のガキを特使として派遣する魔法協会の株も暴落中の筈だ。

そしてその問いに答えるように、ウチの担任は懐からICレコーダーを取り出し、音声を再生する。

『修学旅行中に起こったことは全てネギ君に一任しよう』

聞こえて来たのは紛れも無く麻帆良学園学園長近衛近右衛門の肉声。十中八九彩輝の仕込みだな。一体いつの間に言質取ったのやら。

修学旅行という単語に眉を顰める人も居たが、そんなことはすぐにどうでもよくなったみたいだ。

「この京都に居る間、僕は学園長から全権を任されていると考えてもらって構いません」

それを聞いて、全員の目の色が変わった。ああ。これは獲物を見つけた獣の目だ。全く、馬鹿に権力を持たせた結果がこれだよ。

これが今回、彩輝の最強の切り札だったんだろうな。関東魔法協会という二大勢力の一つを生贄にすることで、誰に付けば多く利が得られるのか、まだ分からない奴は居ないだろう。

ウチの担任の一言を境に、全員が是と答えた。

そして詠春さんが私に視線を寄こす。

「それでは契約の為、もう一度確認させて頂きます。日本魔術相互扶助協会へ参入するならば是と答えて頂きますか？」

もう一度。全員がYESの類の言葉を口にする。

「《その言葉を契約とする》」

私の手から溢れた光がこの場に居る全員を包み込む。

仕事終了。

もう知らん。この後どうなるかと私の知ったことじゃない。

例え担任が呪詛のエキスパート達と無理難題な契約を交わしたところで私には関係ない。

「はっはっは。しかし、詠春殿も人が悪い。あんな『招待』をされて何を為さるのかと思えば、こんなサプライズを用意してくれているとは」

快活に笑う男性の視線はウチの担任に送られている。

「どうやら不肖の息子が無茶をやらかしてしまったようで。気付けば人の嫌がることを進んで出来る子になってしまい、お恥ずかしい限りです」

そう言つて詠春さんは苦笑する。その言葉をマイナスの意味で使われる奴なんて初めてみた。

実はここに居る人たちは有名所の結社の首領以外にも共通点がある。

一昨日彩輝に魔術決闘を挑まれ、負けたということだ。多分負けてもこの会合に出席するだけだとか、ほとんどノーリスクみたいな内容だったから、誘いに乗ってしまったんだろう。

一人対一結社なんて巫山戯た決闘を、連戦全勝出来る相手だとは知らずに。

ところで、その全ての元凶は今どこで何をやってるんだ？

総本山内にある建物の一つに天ヶ崎千草を含む過激派一派は収容されていた。

本来なら牢に入れておくべきなのだろうが、なんせ数が数だ。牢に納まりきるわけがない。

そういうわけで 協会 は処分が決まるまでの間、建物一つを収容所として使うことを決定した。

当然ここにいる全員は武器は取り上げられ、術は使えないような処方がされている。

されてなかったとしても、脱獄を試みるような輩は居なかったであろうが。

すでに彼らにも過激派幹部が正体不明の何者かに一族郎党皆殺しにされたというニュースは広まっている。

計画は完膚なきまでに叩き潰され、幹部たちは釈明の機会すら与えられず皆殺された。

彼らの心にあるのは大きな喪失感のみである。この状況で未だに反撃のチャンスを探る者は誰一人として居なかった。

その中には彼女、天ヶ崎千草の姿も。

畳の薫る和室で一人、正座している彼女の前には花器と剣山が。彼女の手には花鋏が握られている。

元々牢として使うつもりが無かった所為か、道具なども揃っており、手慰みとして生け花を始めたまでは良かったのだが手が一向に動いていない。

この鉄を持って暴れてやろうか、などと無体なことを考えてみるが、すぐにその考えを打ち消す。

あつちには戦闘準備を整えた術師が山のように居て、こっちは鉄一本で切り抜けなくてはならない。どう考えても不可能だ。

何をすればいいのかわからずに、道に迷ってしまっている。

いや、目的地すら見失ってしまっているのか。

「……………はあ」

と、溜息を吐いた時だった。

「よう。精が出るな」

自分しか居ない筈の部屋で、後ろから声を掛けられた。

部屋に誰かが入った気配は無く、驚いて振り返ると、

「お、お前……………！」

そこには、近衛彩輝が寛いでいた。

「これを見て精が出ると本気で思っとなるんか？」

「いや全く」

驚くことには驚いたが、自分にはどうすることも出来ず、相手も手は出せまいと思うと、すぐに冷静さを取り戻すことが出来た。

「まあ、いいんじゃないかねえの？ 生け花っていうのはな……以下略」

「何やそれ、最後まで言え！ ちょっと気になるやないか！」

「いや、何だかこのままじゃ死語を言ってしまうしそんな気になって意味分からんわ、と干草は呟く。

「ええ機会やから聞くけど、アンター一体何者なんや？ 長の息子つてだけやないんやろ？」

「俺は近衛彩輝。ただの学生（みせい）でもって、協会（きやくかい）の革新派（かっしんぱい）所属だぜ」

「革、新派……？」

はつきり言っつて、そんな派閥は聞いたことが無かった。

「まあ、部外者含めても八人しか居ないんだけどさ」

「そんな派閥って言うかつ！ ていうか、八人て……」

「なんだバカ野郎。『あまつぎ』を読んでないのか？ 一人じゃなければ、道は無限なんだよ」

思い出すのは昨日会った二人の少女の姿。

魔術と科学。虚と実を織り交ぜて戦った二人の少女。

（ウチは穩健派の連中やなくて、実質たった八人の集団に負けたん

か)

ふと気付く。

(『ウチは』か。成程な。ウチは、一人やったか)

千草は自嘲的な笑みを浮かべる。

「まあ、革新派っていうのもたった今適当に考えた単語なんだけど

そんな感傷を悉く無視し、彩輝は喋る。

「……なあ。狼少年って知つとるか？」

「知ってる知ってる。みーくんだろ」

「……何しに来たんや、アンタ？」

偽らざる心情が言葉となって吐き出された。

「じゃあ、そろそろ本題に入ろうか」

と、一旦仕切り直し、

「革新派という単語は適当に考えたものだが、この協会が一新されるというのは嘘偽りなく本当だ。

取り敢えず勢力を関西圏から日本全国に広げてみたんだが、このままだと調子に乗って羽目を外す馬鹿共が出て来るのは間違いないからな。そこで、組織を一新するついでに新しい部署を作ることにしたんだ」



この時点で千草は彩輝の言っている半分の意味も理解できてはいない。

「勢力を広げるとかそんなこと、出来るわけないやろ！」

組織を立て直すくらいならば、まだ分かる。

だが、東西合一なんてものは千草にとっては戯言にしか聞こえない。そうは言ってもこれが当たり前前の反応なのだが。

彩輝は一つ溜息を吐き、

「ああ……………そうか。それは俺が至らなかつたね。言葉が足りなかつた。いや、ホントならお前がどれほどのバカか千の言葉を用いて罵ってやりたいところだよ。でもいかんせん、俺の舌はそんなに早く回らないんだ。

はがゆいよ。

もつと言いたいことはあるのにバカ野郎の一言に気持ちを含められないんだ。でもそれだとお前は自分の何処がバカなのか反省しようがないわけだ。

出来ることならね。お前の何処がバカなのか万の言葉を用いてレポートを纏め上げてやるよ。でもいかんせん、俺は今からそんなことが出来る程暇じゃないんだ」

だから、予め纏め上げて来て良かったと、本当に思うよ。

そう言つて彩輝は『倉庫』から取り出したのであろう、A4のレポート用紙の束を千草に投げつけた。

ばさばさと紙片が舞う。

この時千草は、割と本気で彩輝に対し殺意を抱いた。

意表を突いて手に持った鋏を突き刺してやろうか、と考えたところで、畳の上に散った何枚ものレポート用紙が目に入る。

そして、目を奪われた。

「おい……これ……」

本当に千草の何処がバカなのかということをや々と書いてあるわけではない。

書いているのは陰陽道や神道についてだ。

「昔これより稚拙なものを考えたことがあってな。まあ、若気の至りというヤツだ。」

西洋魔術の特性は 精霊使役。陰陽道の特性は 使役。陰陽道ってのは元々複合魔術だ。新しく組み込むのに、然して手間は掛からなかったかな。

でもって神道。これは性質上土地に依存してしまう傾向がある。だから世界中に遍在している精霊を電波の基地局みたいに踏み台にして神の権威を広く伝えられるかと思ったんだが、まあ、こっちは及第点といったところだろう」

西洋魔術の要を取り込んで、更に踏み台にするという発想。常識破りにも程がある。

だが、これは喉から手が出る程欲しい。

元より魔術師なんてものはその道を極めようとする探求者だ。

自分には無かった着想。自分とは全く違った視点。自分が得意とする分野で、未知の部分が見つかった。

そしてその先には、西洋魔術の礎を踏み躪る結果が待っている。

「こういったものを交渉材料に話を進めてたわけだよ。結局最後は力尽くだったわけだが」

「それで、ウチに何をさせる気や」

「俺たちは西洋魔術師が中心になってるこの世界に一石投じてしまったのさ。関東魔法協会を押し付け、陰陽道が主体の組織を日本最大にすることで。」

「言ってみればこれは希望だろう。もう廃れようとしている魔術師たちから見ればな。だからこそ、そういう輩が調子に乗らないように、断罪機関でも作っておこうかと思ってるね」

詠春と契約して、魔法使いを罰する魔法使いになってよ！

一体どこまで先を見ているのだろうか。

「大体、何でウチなんや？ ひよっとしたら今回の処分で 協会からは追放されるかもしれんのに」

「ああ、骨のある陰陽師が居たって聞いて。追放は多分ないだろう。流石に短期間で詰め込み過ぎてな、文字通り猫の手も借りたい状況



と、歌いながら今度こそ彩輝は部屋から出て行った。

一人残った部屋はまた静かになったが、この静寂が長く続くことはなかった。

ほどなくして、この建物全体が一つの話に持ちきりになったからだ。

『おい、聞いたか！ 恐山や伊勢、果ては関東の連中までウチの傘下に入るらしいぞ！』

その喧騒は千草の居る部屋にも届いており、

「あははははははっ！」

千草は笑いが止まらなかった。

「あのガキ、本気でやりやがったんか」

こうなってしまうえば話は別だ。今は穏健派も過激派も関係ない。文字通り転換期を迎えている。この国が、変わるかもしれない。

自分は今まさに歴史的瞬間に立ち会っている。

「おもしろいやないか」

どんな形になるのか見届けたくなった。自分もこの歴史的瞬間に関わりたい。

パチンッ

そして、天ヶ崎千草は花を切った。迷いを、断った。

先程彩輝は言っていた。もしもこれが切っ掛けとなって、風前の灯火の魔術がまた息を吹き返したら、今のような西洋魔術が中心の考えは終わりを迎える。

今はまだ蝶の羽ばたきでしかないかもしれない。だが、池に石を投げ込んだように波紋は大きく広がっていく。

そうならば、それこそ千草の悲願である西洋魔術師への復讐というもの、最大級の形で成し遂げられるのではないか。

天ヶ崎千草が新たな道を見つけた瞬間であった。

SIDE 彩輝

「やつほー。ハウル」

と、ちうちちゃんと合流しようとして屋敷の中を歩いていたら、背後から声を掛けられた。

「おう。ステアか」

振り返った先には呪物調達会社 アトラス 取締役社長のステアがこっちに向かって手を振っている。

「相変わらずやるのが派手よねえ。まあ、大口の顧客が見つかってウチとしては感謝だけだ」

餅は餅屋。

専門家がいるならそっちに仕事を投げるべきだろう。今は一人でも  
人手が欲しい筈だから。

「業務提携でもやったわけ？」

「やったわね」

どうしよう。後で仲介料を貰っておこうかな。

「ところでハウル。一つ質問があるんだけど」

「何だ？」

「関東魔法協会も巻き込んでるみたいだけど、大丈夫なの？ あそ  
こメガロ元老院の管轄でしょ」

「ははっ。可笑しなことを言うなステアは。大丈夫なわけないだろ」  
だってこれ、ネギが勝手にやったことだし。ジジイがこのところを知  
るのは修学旅行が終わってからになるんじゃないだろうか。

一応断っておくけど俺が心身掌握して強制的に言わせたわけじゃな  
いからな。

東西の問題を次々上げていって、修学旅行初日に録音しておいたI  
Cレコーダーを取り出して、問題を無くすにはどうすればいいと思  
う？ って尋ねたらこんな感じになっただけだから。

元からちゃんとハウレンソウをする癖とか付けさせておけばよかったのに、教育機関のくせして新人の教育の手を抜くから、取り返しのつかないミスをやってしまうんだよ。

取り敢えず、ジジイの立場が無くなってしまふことは確実だな。

「よし。それじゃ俺は暫く大人しくしようかな。学園の仕事とか手伝いたくねえし」

さり気なく 協会 以上に学園の方が慌ただしくなる予感。預かってた英雄の息子が暴走して、好き勝手やってるし。完全に後手に回っている状況。

「学園長がそれを許すのかよ」

と、たった今ちうちちゃんと合流した。

「お。ちうつちお久ー」

「どうもステアさん。お久しぶりです」

二人の挨拶が終わって、俺はちうちちゃんに頼んでいたことを尋ねる。

「ちゃんと撮れた？」

「多分撮れてるだろ」

契約の証人を頼むついでに、もう一つ頼んでいたことが、会合の様子を映像・音声記録として残すこと。



「怖いよなー。最近是国家機密ですらネットに流出しちゃう世の中になったからなー」

「流出させる気満々の奴が『怖い』とか言っても説得力皆無だな」

「ああ。じゃあ私は人伝で噂を広めておけばいいわけね」

「アジア圏にはこっちから声を掛けるから、ヨーロッパの方は任せる。魔法世界の方はやらなくていいかな」

「オツケー。商人の横の繋がり舐めんなよ」

そう言つて、これから仕事量が格段に増え、忙しくなるステアは俺が作った《門》を通じて会社へと戻つて行つた。

世界中に広まつた後でも契約反故に出来るもんならしてみろよ。関東魔法協会の退路がどんどん塞がっていくぜ。

「ていうかさ。お前あの人達に何もしてないんだよな？」

「だから心身掌握の類はしてないって。俺が連中と話したのは一昨日の数十分だけだぞ。薬とか催眠術っていうのは継続的に続けるから意味のあることで、例えやってたとしても、流星にそこまで長く効果は続かないから」

たった数十分の会話で永遠に効果が続くなら、この世にはPTSDなんて存在してないだろう。

後で瀬流彦にもちよくちよく話しかけないといけないんだから。これが原因でまた関東魔法協会の立場が無くなつていく。

「お前は一体ウチの学校をどうしたいんだよ？」

と、改まってちうちゃんが聞いてくる。

どうしたいか、か。

「ノープランだな」

「うわぁ……」

そんな声を出して引かないでくれ。

「お前はそんなんだけど、ウチの担任はお前らの友人の息子なんだよな？ 詠春さんですら庇おうという素振りが見えないんだが」

「当たり前だろ。もうすでに、個人の意思を、故人の遺志を尊重できるレベルじゃなくなってるからな。一応詠春には日本中の魔法使いの生活と、世界中の魔術師の未来がかかってるんだぜ」

つまらん私情を挿んで今までやってきたことを全て台無しにする程、アレはバカじゃないよ。

少なくとも十歳のガキに権限持たせて全てを任せるとこそその学園長よりは数百倍マシだ。

……両方俺の親族ってオチか。

「安心しろ。一番性質の悪いのはお前だから」

自覚はしている。だが、自重はしない。

「で、ちうちゃんはこれからどうする？」

「私はホテルに戻って寛いでるよ。彩輝は？」

「俺は京都市内でも散策してくる。霊脈の様子見たりしないといけないからな」

リヨウメンスクナノカミと酒吞童子が揃ったんだよなあ。不自然な歪みとかなければいいけど。

そして俺はここでちうちゃんと別れて、京都市内へ向けて出発した。

軽く京都市内を見て回ったが、異常なまでに霊脈が歪んでいるといったことは、大江山の一ヶ所ぐらいだったので、霊脈の修繕と矯正を施してホテルへ向けて戻ることに決めた。

立ち寄ったついでに大江山山中でもう一度楔ぎをしていたりした所為か、現在の時刻は正午を軽く越してしまっている。

これはホテルに戻る前に、適当に何か食べておくべきだろうか。

そう思いつつ、口笛を吹きながら市内を散策する。

味気ない気もするが手軽にファーストフードで済ませてしまおうかな。

そんな風に考えていた時、ふと疑問が一つ浮かび上がった。

あれ？ 今吹いてる曲名なんだっけ？ クラシックなのは確か  
なんだけど。

普段は無駄に覚えているくせに一度気になってしまうと、中々思い  
出せない。

あー、もどかしいなあ。はがゆいなあ。

……確か、悪戯みたいな単語が入っていたような、いなかったよう  
な。

後少して思い出せそう、といった状態で曲が二週目に入った時だっ  
た。ソレが俺に目に留まったのは。

ホテルのある方角に向ってはいるものの、暮盤の目のようになって  
いる通りをジグザグに適当に進んでいたので、詳しい場所は分から  
ないが、ある土産物屋の陳列棚に飾られている簪が俺の目に留まっ  
たのだ。

一目で気に入ったソレを購入すべく、曲名のことは一巨頭から追い  
出して、土産物屋に入ろうと進路を急遽変更。

今視線が固定されているのは土産物屋の出入口で、その前は曲名を  
思い出しながらぼんやり街中を眺めていただけだ。

なのでこの時の俺は周りを全く見ていなかった。

？どんっ？と人にぶつかってしまったのも完全にこちらの不注意で、

俺は「すみません」と即座に謝った。

ぶつかった相手を見ると、大和撫子と形容したい顔立ちで、しかし脱色や染色をしたわけではないだろう金髪の女性が数歩よろめいていた。そんなに強くぶつかったわけではない筈なんだが。

「大丈夫ですか？」

と、声を掛けると、

「死んだらどーするッ!!」

というソプラノボイスが返って来た。

おーう。またわけのわからないタイプの人だよ。何故俺はこうも常人とは全く違った価値観を持つ人たちとよく出会うのだろうか。

取り敢えず、『死んだらどうする』と言われたので「極楽浄土への片道切符を差し上げます」と言っておこう。

「わっ。その返され方は初めてだ」

ええ。普通なら戸惑う人が過半数を占めるでしょうね。ていうかしょっちゅう言ってるのか、さっきのセリフを。

「どこか怪我をされたりは……?」

「ハッ。世界最弱を豪語する私の耐久値を甘く見ないで貰おうかって言いたいところだけど、怪我は無いよ。残念ながら」

「おつと危ない。何故だか急に財布の悲鳴が聞こえてきたな。勿論幻聴ですけど」

「あらら。幻聴じゃなければ私が引き取ってあげようかと思ったんだけどねえ」

「そういう欲に塗れた俗物的な考えは好きですよ」

「覚えておくといい少年。世の中にはその欲を自分の手足のようにコントロール出来る奴がいるのさ」

「まさかアンタ、王ドロボウ……!」

ネタが通じて良かったですねー、と二人して笑い合う。

ふむ。なんだろう。初対面だけど、この人と物凄く波長が合う気がする。ボケとツツコミ的な意味で。

「ところで少年。口笛上手だね。さっきの『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快なはずら』でしょ?」

あ! そう! それだ! 『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快なはずら』。あー、すつきりした。

「私はこの曲が大好きでね。つい曲の方に意識が向いている間に? ドンっ?だよ」

「俺も似たり寄ったりですよ」

すっ、と土産物屋を指差す。

「あそこのリンドウをモチーフにしてる簪に一目惚れしましてね。買ってしまおうかと思っていたら」

「お互い気を付けないとねえ」

「ですねー」

ここで他愛のない会話を切り上げることにして、名も知らない女性は歩き去り、俺は土産物屋に入ってリンドウをモチーフにした簪を購入する。

勿論木乃香のプレゼントに。

そして、そこらの店で適当に昼食を取った後、俺はホテルへと戻った。

まさかここで会った女性と、そう遠くない未来、縁が合うことになるなんて夢にも思わずに。

一つだけ。この騒動で一つだけ、解決どころか何の対策もなされていないものがある。

彩輝は昨晚、過激派幹部である五つの家を滅ぼした。

だが、リョウメンスクナノカミが還された夜、集まった過激派幹部は六人居たのだ。

一人だけ獲り洩らしがある。

なのに彩輝も詠春もその存在は知らず、会合の場にいた千草でさえも忘れている。

「『テイル・オイレンシュピーゲルの愉快なはずら』ね。テイルの残した愉快なはずらは不滅である」

それが先程彩輝とぶつかったこの女性。彼女こそがこの派閥争いにガソリンを投下し、激化させた張本人なのだ。

『テイル・オイレンシュピーゲルの愉快なはずら』とは簡単に言うと、好き放題にいたずらを繰り返す主人公テイルの活躍を描いたもの。

市場の牛馬を解き放ち、僧侶に変装してでたらめな説教で人々を煙に巻き、騎士に変装して淑女を口説いたり、果ては教皇・国王まで様々な身分の者を欺いて、最後には処刑されてしまう物語。

「私もそのくらい派手に何かやってみたいな」

と、片手でテニスボールよりはやや小さく、球体状から大きな欠けのある紅い水晶のようなものを弄びながら彼女は囁く。

「しかし商品に見合った対価を支払って、商品を受け取るというのは、いつの時代も肌に合わない」

世の中、与えるか奪うかでしょ。

欠けのある紅い水晶を軽く真上に投げ、重力に従って落ちてきたと



ころをキャッチ。

「関西呪術協会っていつでも結構楽に盗めたわねえ。大分の時と大して労力変わらなかったし」

与えるか奪うか。

この二つこそが彼女の根幹に位置しており、この騒動を大きくした動機であるようだ。

まさか信じられるだろうか。派閥争いを激化させた理由が、今彼女が手の中で弄んでいる紅い水晶を手に入れる為だけだということに

「さて、次は麻帆良か。全部奪ってコンプしたら深識ちゃんに自慢しようつと。……あの殺人鬼と最後に遭ったのは六年前のイギリスだっけ？」

不穏な呟きが空気の中に溶けていった。

第五七話：風前の灯火（前書き）

キリがいいので一旦区切ります。

## 第五七話：風前の灯火

修学旅行一団が帰って来た翌日。四月二十七日の日曜日。

その日、麻帆良学園学園長・近衛近右衛門の一日は一本の電話から始まった。

相手はメルディナ魔法学校校長。ネギの祖父であり、近右衛門の友人である。

「もしもし。どうしたんじゃ？　こんな朝早く　いや、そちらは夜か」

時差のことを考慮して発言を訂正している間に、校長が言いたいことをある程度予測して、幾つか返答を考えておく。

十中八九、ネギのことだろうと近右衛門は予想する。

修行と称して敵対とまでは行かずとも、険悪な関係を維持している組織へ特使に送ったのだ。

あちらが心配する理由もよく分かる。

しかし、瀬流彦の報告だと、目立った怪我は無く、あるとすれば斬髪程度で親書も無事に渡している。

近右衛門は初日にあったりヨウメンスクナノカミを還す騒動で、派閥争いは終局を迎えたと思っているのだ。

それが出来る程の實力を持ったものが事態の收拾に当たったということもあり、何より最初からやけに能動的だった。

今回の標的はアレの妹なのだ。初日から早期解決という選択を取ったとしても不思議な事は何も無い。

ネギに大きな危険は無く、怪我もせずに無事帰って来た。

結果良ければ全て良し。今回のことはネギにもいい経験になっただろう、とそのようなことで言い込もうと考えていた時だった。

『どうしたかだと！ 正気が近右衛門！？』

予想に反して、返ってきたのは怒声であった。

結局、近右衛門は読みが甘かったのだ。

近衛彩輝の行動力を、零崎彩識の人脈を、甘く見ていた。

妹が巻き込まれる厄介事を早期解決する。確かにここまでは当たっている。

ただ、近右衛門の予想と現実が、かけ離れすぎていた。

無理もない。たった四日間でこの国を根底から変えるなど、一体誰が予測できようか。

そして、何も考えずに自分が言い放った無責任な言葉が、今まさに自分の首を絞めていた。

「……何か、あったのかの？」

『近右衛門。お前……』

最早あらゆる感情が緋い交ぜになり、全てが統合されて呆れに近い  
声音が返ってくる。

再度詳しく話を聞こうとする近右衛門だったが、校長から話を聞く  
必要はなくなった。

「学園長ッ！！」

と、突然ノックも無しに明石教授や式集院先生を筆頭に多くの魔法  
先生が学園長室に詰め寄ったからだ。

「なんじゃ騒々しい。今は電話中で」

「そんなものは後にしてください！」

ほとんど叩く勢いで固定電話の通話を切られる。

「どついうことか、説明を要求します」

言って、明石教授は手に持っていたノートパソコンを学園長の机の  
前に置いた。

画面にはある会合の様子が映し出されている。

言うまでもなく一昨日あった日本魔術相互扶助協会が発足する時の  
動画である。

「これは……」

「今日の零時頃、まほネットにアップロードされたものです。いえ、実際は一昨日の内から情報通な人の間ではすでに出回っていたようです。」

ただそのときは、内容が内容なだけに信憑性は高くなかった。しかし、こうして学園長の肉声付きでネットに流れてしまった以上、全く信じていないという人は居ないでしょう。

幸い、魔法世界の方にはまだ広まっていないようです。……それも時間の問題ですが」

真偽は別にしても、日本の魔術界が全世界から注目されているということは確かだ。

そして、協会には隠す意思が無い為、少し調べれば確固たる事実は簡単に知ることができる。

「……じゃが、何故じゃ。……何故当人であるワシらに情報が伝わるのがこんなにも遅い」

もっと早く知ることが出来ていたら、手の打ちようは少なからずあったのだ。

そんなことを考えても、もう後の祭りでしかないのだが。

情報の伝達が遅れた理由としては関東魔法協会の在り方が原因だろう。

元々関東魔法協会が日本の二大勢力とまで言われる程大きくなれた

のは、メガ口元老院や雪広財閥など政界や財界からの後盾があったからに過ぎない。

しかし今回、協会 は日本全土を手中に収めた。

旧世界の極東の島国では、魔法世界の組織の影響力など無いに等しく、日本国内のほとんどの財閥もより大きく、自分に利益をもたらしてくれそうな協会 の方へ鞍替えするのは当然と言えるだろう。

そうなってしまうと、関東魔法協会は明治中頃に出来たばかりの新興結社ではない。

そんな新興結社を構うはずもなく、国内の魔術結社は次々と協会 に登録し、国外では流石にそれはないだろう、と否定的な考えだけで、実際に確認しようとする者は居なかった。

当然、関東魔法協会の職員にしても、たった今日本で改革が起こっているなど荒唐無稽な話を察知出来るわけもない。

「一体どうして、ネギ君にそんな権限を与えたのですか!？」

ガンドルフィーニが声を荒らげる。誰にも何の相談もせず、自分勝手にこんな重大なことを決めているのだから、彼の怒りはもつとものだ。

「む……それは……」

そう言うっておけば孫が本気で事態の收拾に動いてくれると思ったから。

そんなこと、口が裂けても言える筈がない。

「今はそれよりも、今後のところを考えるのが先決じゃろう。まずはあちらの代表に日本魔術相互扶助協会から脱退する旨を伝えるのじや。刀子君は」

例え近右衛門の正式な発表があつたとしても、協会への参入は許されないだろう。

関東魔法協会はメガ口元老院の配下だからである。

このまま本当に参入してしまえば本国から睨まれるのは火を見るより明らかだ。

西洋魔術師にとってこれ程までに恐れることはないだろう。

それに事の発端は近右衛門の迂闊な発言とネギの後先顧みない行動が原因なのだ。つまり関東魔法協会の全ての関係者はただのとばかりで処分される可能性がある。

これだけは、何としてでも避けなければならない。

だからこそ、近右衛門は関西との繋がりを持つ葛葉刀子を呼ぶが、学園長室に入ってきた教職員の中に彼女の姿は無かった。

「刀子君はどうしたんじゃ？」

「彼女は」

それに答えるようにまたしても学園長室のドアがノックもなく開け



放たれた。

「大変です学園長！」

ちよつど呼ぼうとしていた葛葉刀子と彼女に連れ添うように神多羅木が入ってきたのだ。

「刀子君。早速で悪いんじやが、関西の人間と」

「今は後回しにしてください！」

学園長の言葉を遮って、葛葉と神多羅木の二人は手に持っていた封筒を学園長に渡す。

「これは……？」

「こちらが関西呪術 いえ、日本魔術相互扶助協会からの請求書です。内容はネギ・スプリングフィールドとその従者二名、使い魔一匹の治療代。そして残りが……」

先程までの剣幕と勢いが鳴りを潜め、葛葉は言葉を濁す。

学園長は神多羅木に視線を移すと、彼が彼女の代わりに答えてくれた。

「日本の各結社からの契約書の写しです」

慌てて全ての書類に目を通すと、そこには確かに一部の隙もない呪術契約としての文書が並んでいる。

そしてその全てに、ネギ・スプリングフィールドという署名がなされていった。

「瀬流彦君！ これはどういうことじゃ！」

矢面に立たされるのはネギと一緒に修学旅行へ行っていた瀬流彦。

しかし、追求されたところで、

「ネギ君はそんなこと一言も……」

何の相談もなく勝手に契約書にサインした人間が、そのことを誰かに報告するなんて当たり前のことを出来るはずもなく、瀬流彦自身困惑するばかりだ。

そして肝心の契約内容はどうと、

「……霊地の移譲、じゃと……！」

そう。関東魔法協会には決して無視することの出来ないものが鎮座している。

世界樹である。

例え世界樹そのものが手に入らなくても、この地の霊脈は他と比べればかなりの上物だ。と言っても、今現在霊脈の手入れをしているのは実質近衛彩輝ただ一人。

土地そのものを慮るならば、こういったことには疎い西洋魔術師よりも別の結社に移譲して管理してもらった方が何倍も良いのだが。

当然、関東魔法協会としては納得するわけにも認めるわけにもいかず、打開策を練るのであった。

どうすればやり過ごす事が出来るのか。必死に現状を打破出来る術を探る。

「……刀子君、先程ネギ君に従者が居ると言っておったな？」

「ええ。神楽坂明日菜と宮崎のどかの二人となっていていますが……二人とも一般人のようです」

「そうか」

近右衛門は重々しく頷くと、一つの決定を告げた。

「魔法の秘匿を破ったと見做し、ネギ・スプリングフィールドを関東魔法協会から除名する」

そして、除名した時期を改竄し、修学旅行時にはただの一般の先生だったことにしようと言うのである。

「巫山戯ないください！」

魔法先生の中から口々に反発の声が上がる。

そんな子供の屁理屈のような理論が通じるはずがない。それに、それを実行するとまた新たな問題も出てくる。

「だとすれば、我々は一般の教師に親書を持たせ特使として派遣し

たということになります」

「こちらに不備があったと押し通すしかないじゃろう」

「先方がそれで納得するとしても本気で思っているんですか？」

「明石君、式集院君、ガンドルフィーニ君は図書館島へ行き、アラ  
ンク以上の禁書を見繕って来てくれ。刀子君と神多羅木君は特一級  
の呪物の調達を。」

これで各結社には手打ちにしてもらうしかあるまい」

諦観したように近右衛門が喋る。

本当に世界樹を含めたこの霊地を移譲すれば、メガロ元老院に多大  
な損失を出すことになってしまう。そうなればオコジョ刑で済むか  
どうか。

幾らでも彼らの代わりはいるのだ。元老院なら関係者の総入れ替え  
など、さして難しくもないだろう。

それを理解しているからこそ、渋々といった雰囲気醸し出しなが  
ら、名を呼ばれた教職員は退出していく。

近右衛門に不信感を抱きながら。もしも次に何かあれば辞職も真剣  
に考えよう、と決意しながら。

この日を境に、過半数の関係者が独自に研究機関や結社との繋がりを  
持つとアクションを起こすのは余談。

さて、ここで一番の問題になるのは、各結社がその条件を呑んでく

れるかということだが、もうこの時点で彼らの目的はほとんど達成したようなものなのだ。

考えてもみて欲しい。

十歳の子供に名前を書かせるだけの簡単な仕事をするだけで、今となっては入手不可能な禁書や呪物がタダ同然で手に入る。

こんなに美味しい話はもう二度とないだろう。

まさか本当に霊地を移譲してくれるとは、初めから誰一人として考えていない。

目的はあくまで、その条件に匹敵しうるモノを手に入れること。それすらも渋るようならば、契約を盾に強硬手段に出ればいいだけの話だ。

こうして莫大な出費と共に関東魔法協会は契約の破棄を取り付けることに成功する。

ただ、自分から契約すると言っておきながら、自分から解消したいなどと身勝手な行動を全世界に見せ付けて。

会合の際、ネギがいの一番に参入を表明し、その場に居た全員に契約魔術をかけられたことは、動画を見れば明らかだ。

関東魔法協会が一方的に契約を破棄するよう動いたことは、日本魔術相互扶助協会発足の情報よりも早く、世界中を駆け巡った。

魔法使いにとって誓約や契約といったものは絶対だ。

それをこつも自分勝手な都合で解消されては、麻帆良学園の信用度や評判は地に落ちたと言っても過言ではない。

最低劣悪のレツテルを貼られた麻帆良学園への就職・進学希望者数はガタ落ちである。

それに、悪評を付けられようとも、全ての問題が解決したわけではない。

「ネギ君とその従者を呼んでくれ。それと瀬流彦君。君には話がある」

今更ながらに、ここに来て漸く、近右衛門は新人の教育に力を入れることにしたのだ。最早全てが手遅れだが、二度目の失敗は防がなくてはならない。

そして、近右衛門自らもまた、後日元老院から正式な処分が言い渡される。

緊急避難措置として英雄の息子の経歴に泥を塗ったのだ。

広告塔と利用したい元老院としては無視できる筈もない。

今回はあくまでも、忠告としての意味合いが強い為それ程重い処分ではなく、これは近右衛門個人の責任なので他の教職員は処罰の対象にはならなかったのが、せめてもの救いか。

これで一先ず、麻帆良にのみ甚大な被害を与え、日本魔術相互扶助協会発足の波乱は終結した。

そして、次の波乱が巻き起こるまでには、さして時間は掛からない。

## 第五七話：風前の灯火（後書き）

白状すると、日本列島を赤で塗り潰し、麻帆良だけ青で塗るといった勢力図にしたかったんだ。

西と東の争いは終わり、これからは麻帆良とそれ以外。

今回の話書いてて、オリエンテーリングといった学校行事中に他人の家の車庫に入り込んで、断りもなく自転車の空気入れを使い、家主に詰問されてた校長を思い出した。

懐かしい中学時代の思い出。



第五八話：ヨスガにソラってる（前書き）

……魔が差したんです。

## 第五八話：ヨスガにソラってる

同日。四月二十七日の日曜日。

麻帆良教職員が前後不覚に陥り、上へ下への大騒ぎとなつて、右にも左にもトラブルが山積みになっている絶体絶命の窮地の中。

それを引き起こした張本人でもって黒幕とか、そろそろラスボス疑惑がかけられてもいいんじゃないかと思う俺こと近衛彩輝は、別に何をするでもなく、ただただ惰眠を貪っていた。

日曜日の午前中なのだから、当然といえば当然である。

寧ろ休日にはちゃんと休まないと週休二日制を採用してくれた人に申し訳が立たないだろう。ありがとう。何処の誰とも見知らぬ人。

因果関係は無いけれども。

大体この学園自体が五露の気紛れによつて建てられたようなものだから、潰れる時も誰かの気紛れであつた方が理に適ってるんじゃないだろうか。

究極的にどうでもいいや。

今回俺が戯言抜きで誠心誠意謝罪する相手が居たとしたら、それは一人だけだろうし。

まあ、こんな話は地球の片隅にでも追いやつて。

こういつ長閑な休日はずっと昼寝のつもりで眠りについたら、目が覚めたとき『サザエさん』が始まっていて絶望するのが定番だよな。

こんなに長く寝るつもりはなかったのに、と。そして、月曜の一時間目が英語であることを思い出して、深夜に遊ぶという悪循環に捕らわれるのであった。

なんて分析は今年度の英語の授業並みにどうでもいいので、このまま微睡みの中徐々に目覚めるか、それとも三度寝と洒落込むか、それが問題だ。

修学旅行という中学生にとって一大イベントに参加していただけに、四日も家を開けていたのだ。

自分の家。自分の部屋。慣れ親しんだ寝具。

四日も外泊したからこそ、改めてここが俺の帰って来る場所だと認識し、ここで眠るのが一番落ち着く、よし寝よう、という結論に至る。

そして、僅かながらも揺れていた天秤が、完璧に三度寝に傾いたとき、計ったようなタイミングで俺の部屋のドアが開いた。

？ギイイ？と扉が軋む音と共に、部屋の中に誰かが入って来る。

「兄様ー。電話鳴ってるえー」

なんだ木乃香か。許す！

絶え間なく鳴り続けるであろう俺の携帯は昨日の内から電源を切つてある為、安眠を妨害することなく沈黙を守っている。

だからこそ、家の方に電話が掛かって来てしまったようだ。まあ、相手が誰であるかは嫌すぎる程に予測できてしまいが、もしも違っていたら掛けて来た人に申し訳ない為、一応聞いておこう。

「誰から？」

あくまで一応なので、起き上がりはせずに布団から顔を出しただけの体勢で尋ねる。

「おじい」

.....。

.....。

.....。

布団が剥ぎ取られました。

抗議の声を上げる間もなく、腹部に人肌の温もりと重みが加算される。

「今おじいちゃんって単語を言い終わる前に寝たよな？」

うつすらと目を開けると、マイシスターが馬乗りになって俺を見下ろしていた。

「いや、だつて眠いし」

「やからつてそんなすぐに寝るとか、兄様は射的とあやとりが得意な小学五年生か！　つていうツツコミは置いといて、早く出たら？」

「コノえもんはお呼びじゃないんだ。押し入れか机の引き出しにでも追いやつてくれ」

「二十二世紀へのクーリングオフ制度は適用されません」

「じゃあタイムパトロール隊員104と119を呼んできてくれよ」

「それ二十二世紀やない、二十六世紀や」

「後地球が一回転したらシルクロード踏破して春蘭助けてくらあ」

「明日まで起きんなんてこと言わんよな？」

「言わないさ。地球が太陽の周りを一回転」

「今日来るときにポリスボックスから出てきて、やたらと『ファンタスティック』つて言うタイムロードが居ったけど」

「えっ！？　マジで！」

「あ。漸く起きるんやね？」

そんな風に改まって言われると起きる気が無くなって、再び目を閉じる。

「もう。起きないとそろそろ酷い目に遭わすえ」

と言つて、妹君は俺の両腕を頭の上へやり、両親指を重ねて左手で握りこんだ。早速両手が使えない状況に追い込まれたね。

木乃香の重心がやや前へと移動して、烏の濡羽色の長髪が俺の首筋を撥る。

そして空いている右手で、？ぐイっ？と左の瞼が強引に開かれた。まさか物理的手段に打って出るとは。

「うぐっ」

喉から軽く呻き声が漏れ、俺はつい反射的に右目を開いた。この状態でまだ寝ようとは流石に思わない。

しかし、光が入って来るのは右目からばかりで、視界の左半分は真っ暗闇だ。瞼をこじ開けられているのにも関わらず。

今この現状を理解しようとする思考が追いつく前に、木乃香が行動を起こした。

「ぺろり」

「にゃあ!?!」

「れろれろ」

「にびゃー!」

眼球の上を熱いナニカが這っていく。

ナニカ？ そんなものは分かりきっているだろう。これは、木乃香の舌だ。

目の表面を触られるという異物感から全身に鳥肌が立つ。

ああ。熱い。目から脳が溶かされているみたいで、理性がメルトダウンを起こしてしまいそうになる。

木乃香が丹念に目玉を舐める度に、背筋に電流が走る。

ビクリと身体が跳ね上がりそうになるが、逃げられないよう馬乗りにされている為、僅かに身を震わすことしか許されない。

行き場を失ったエネルギーが背筋を括り、腹筋を捻ろうと躍起になる。やがてそれは声帯を震わし、口から意味を成さない声を発生させた。

足の筋肉は伸びきり、足の指はぎゅっと、絶え間なく身体中を駆け抜ける電流を耐えるように握り締められる。

手の拘束は相変わらず緩むことがない。少しでも抵抗しようものならより一層身体を密着させ、更に力を込めてくる。

「んふっ」

そして、直に肌で俺の震えを感じ取り、口から漏れ出る声を聞きつけた木乃香は更にゆっくりと、ねっとり眼球を舐め上げる。

瞼の裏に至るまで丁寧に丁寧に舌を這わせる。味を占めたかのよう  
に舌使いには躊躇いが無くなっていった。

本当に眼球から視神経を通って、脳を弄られている気分だ。

これは流石にマズい、と俺は他のことに意識を向けるよう試みる。

木乃香は馬乗りの体勢から上半身を押し掛らせるように身体を密着  
させているのだ。

そこから徐々に体温が上がっていることが分かって、？とクとク？  
と早鐘のような心臓の鼓動が伝わってくる。

視界を確保出来ている右目からは、紅潮した頬が左目の電流と共に  
網膜に焼き付いた。

艶の良い綺麗な黒髪が鼻を擦って、仄かに香るシャンプーの匂いが  
鼻腔を刺激する。

二人だけしか居ない部屋で聞こえてくるものと言えば、俺の荒くな  
った息と、木乃香の吐息。そして、木乃香が舌を動かす度に生じる  
水音だけ。

あはははは。

もう木乃香しか感じられない。木乃香のことしか頭に入らない。こ  
れじゃあ冗談抜きで洗脳されたみたいじゃないか。

ああ。木乃香が俺を犯していく。



「こ、木乃香……」

喘ぐ呼吸の中、俺は唇を震わせて木乃香の名前を呼んだ。

すると、舌の動きが止まり、目玉から離れていく。漸く終わったのだ。長かった。一体どれだけ時間が経過したのだろう。

気が緩み、そんなことを思った瞬間だった。

「ちゆるん」

と、最後の最後で、身体の弛緩を敏感に感じ取った口撃が俺を襲ったのだ。

舌は離れても木乃香のやわらかい唇はまだ触れたままだった。

文字通り吸い込まれるような、吸い上げられるような、今までとは別種の刺激が弛緩した全身を駆け巡る。

気が緩んでいたことも相まって、ゾクゾクと頭頂から爪先まで震わせる。この刺激は先程までのよりも、何倍も強く感じられた。

不思議ともう忌避感を感じなかった。

木乃香の唇も目から離れ、漸く両目で視界を確保出来ると、全身から力が抜ける。脱力しきった状態だ。

「うふふ。ねえ？ 兄様？」

良好になった視界の中で我が妹は妖艶に笑う。

そして、今まで俺の両親指を掴んで離さなかった左手を、ついに離した。

しかし無意識の内に、自然な流れで俺は右手でたった今離された木乃香の左手を握っていた。何も考えない内に指を絡めるようにして、木乃香と手を繋いでいた。

否、何も考えなかったわけではない。そう。ただ　離さない、と。

「木乃香」

もう一度、名前を呼ぶ。

「兄様」

目が？トロン？となり、顔を上気させた木乃香が答える。

再びお互いの顔が接近する。

勿論それはアブノーマルな行為の為ではない。

木乃香が目を閉じ、更に顔を近付けてくる。そして俺は　取り敢えず、軽めのヘッドバットをしておいた。

？ゴチん？と鈍い音と共に、「痛っ！」と木乃香が声を上げる。

「よっ。目は醒めたか？」

「それはこっちのセリフや！」

木乃香は額をさすりながら、涙目で俺を睨んでくる。

「元はと言えば、兄様が中々起きへんから、文字通り酷い目に遭ってもらっただけなのに」

そう言つて、木乃香は手を解き、俺の上から退いてベッドに座る体勢へ移行する。

「途中から随分とノリノリだったみたいだけどなあ」

腹筋に力を入れて、ここに来て本日初めてベッドから起き上がると、木乃香の右隣に座り込む。

「初めてのキスが涙の味なんて、何や悲しくなるな」

「ホント、左目から涙が止まらないぜ」

主成分は唾液だけどな！

「寧ろ何であんな突飛な行動に出たのか、その過程を知りたいわ」

「いや、驚いて飛び起きるかなあ、と」

「うん。まあ、驚いたよ。ジャムおじさんとバタコさんが人間じゃないって知ったときぐらいに驚いたよ」

でも跳ね上がることは許されなかった記憶があるんだが。

「あの流れでヘッドバットされるぐらいの衝撃はあったわけやね」

「じゃあ俺の吃驚と木乃香の衝撃でお相子ということにしておこう」

「……何か釈然とせんなあ」

世の中そんなもんだよ。と、達観したような意見を述べてみる。どちらかと言うと諦観に近い気もするが、細かいことは気にしない。

「さて、本音を言えばまだまだ寝ていたいところだけど、仕方ないから起きますか」

「何でそんな寝ることに拘るん？」

「いいじゃないか。普通の魔法使いの一生分に匹敵するであろう仕事量をたった四日間で片付けたんだから。思う存分休ませてくれよ」

大体まだ終わってないんだぜ。日本魔術相互扶助協会は始まったばかりなんだ。

もし依頼があれば、流石にこの案件は優先的に引き受けてあげないと。途中で頓挫しちゃったり何かしたら、かなり寝覚めが悪い。

しかし、この返答に妹君はかなりご不満の様子。

「仕事仕事って、兄様はウチと仕事どっちが大事なん？」

と、まるで恋人や夫婦の間柄で適応されるであろうことを言ってくる。でもこれ、困らせたいが為だけの言葉だよな。

その証拠に木乃香は、「さあ、どう返す?」と言いたげな表情でニヤニヤしながら俺を見ている。

「木乃香が大切だから仕事頑張ってるんだよ」

木乃香の目を真っ直ぐに見つめて、敢えてネタに流さずマジで答えを試みる。

ジツと見つめている内に、木乃香の頬が段々朱に染まっていき、「もう」と唇を尖らせてそっぽを向く。

しかし、その横顔からは緩んだ口元が確認出来た。

こんな顔を見れるのなら日本魔術相互扶助協会を創って良かったんじゃないだろうか。

幾ら魔法使いが血統に拘ると言っても、あそこまで大きくしたら、安直な世襲制は導入されないだろう。

俺も木乃香も首領には不向きな性格だからな。成りたいんなら実力で這い上がれ。

世襲制撤廃。そんなつまらない動機で、一体どれだけの人生が変わってしまったのだろう。まあ、強く生きてください。

「そういや、何か俺に用事があったんじゃないかなかったっけ?」

「んー?」

と、木乃香は小首を傾げて少し考え込む。

「あつ！ 右目も！」

抱き着いて、そのまま押し倒そうとする木乃香をさらりと避けながら、ベッドから立ち上がる。

ま、木乃香も忘れてるみたいだからそんな大した用件じゃなかったんだろう。

取り敢えず、俺はこのまま洗面所へ、木乃香はリビングへ向かう。

ここで漸く、俺は自室から一歩踏み出したのであった。……何かヒキコモリみてー！。

第五八話：ヨスガにソラってる（後書き）

近衛兄妹の近親によって生まれた純潔にして純血、純粹にして純白の魔術師・近衛彩香の物語は、絶対に始まらない！ 始まるかあつ

！ 始まってたまるかあつ！

次回こそ、四月二十七日を終わらせてみせる。

## 第五九話：クビになったあと

「食べちゃった」

と、木乃香が言い、続けるように、

「食べられちゃった」

何とも軽いノリで彩輝が返す。

いつものように彩輝宅のリビングで、暇を持って余した面々が寛いでいる中、前触れも前置きもなく倫理的に大変問題のある言葉が、唐突に発言されたのだった。

？ぴたり？と全員の動きが止まり、

「んぐっ……んっ……、ゴホッゴホッ」

飲んでいたコーヒーを噴き出しかけて、目の前にパソコンがあることを思い出し、必死に堪える千雨の図。

「朝から何なんだお前らは！ そんな報告一々いらなんだよッ！」

朝一番に力一杯ツツコミを入れる。真偽の程を確かめないのは、普段からの行いの所為だろう。

「な？ 分かったら、木乃香。これが世間一般の反応なんだよ。だから少しは自重しろ」



「えー」

「……お前らはアレだな。親に申し訳ないとかは思わないのか」  
呆れながら、ほとんど投げやりに千雨が尋ねる。

「日本の魔術界のトップに据えてやりましたが何か？」  
頭を下げられることはあっても、彩輝から頭を下げる機会はこの先も絶対に訪れることはないだろう。

「母様はなあ……」

父親の次は当然の流れで母親が挙げられるが、それに答える木乃香の歯切れは悪い。

補うように彩輝が続ける。

「まあ、『探偵殺し』な解読者を弟子にして匂坂節を教え込んでいても違和感無いような人だからなあ」

きつと饞別に、特性が精気喰いの物騒極まりない得物を持たせたりするんだぜ。

「お前ら二人でいうと、彩輝寄りな訳だな。意味不明だ」

と、千雨は理解することを放棄。千雨も無関係でいられるとは限らないのだが、この世界線では縁のない話である。

千雨の振った話が一段落したところで、横で聞いていたエヴァが口

を挟む。

「どうせ反対する奴は居ないんだ。私としては、いつ戯言その場しのぎが通用しなくなるのか見物だな」

そう。一番厄介なのは、反対する人間が居ないということだろう。

倫理や道德なんてものは真っ先に切り捨てられる世界。

妹は極東最大の魔力保有量を誇り、兄は修学旅行でその異常性を存分に見せつけた。

片方は女で片方は男。

より濃く、より良い血統が望まれる魔術界では、単純で安直な足し算が期待される。

祝福する者は居なくても、反対する者も居ない。

「それこそ、戯言だけどなー」

ケラケラと兄が笑う。

「それこそ、戯言やけどねー」

カラカラと妹が笑う。

そんな外れた理屈すらも、この兄妹の前で意味を成すのかは、別問題のようだ。

「おーい茶々丸。どっちがどれだけ遠くに匙を投げれるか勝負しないか？」

「お言葉ですがマスター。この問題にのみ関して、私は太陽系の外まで投げれる自信がありますよ。」

まあ、そんなことより、彩輝さん。ちょうど噂の詠春さんからお電話です」

と、茶々丸は彩輝に電話の子機を差し出す。

「サンキュ」

受け取った彩輝は席を立つ。

彩輝の携帯は昨晩から電源を切つてある為、自宅に直接掛けたのだろう。

この時点で、ただの与太話をしたいわけではないと察することが出来る。

詠春から彩輝宛に電話が掛かって来たとなると、十中八九、日本魔術相互扶助協会関連だろうと、彩輝を含めこの場の誰もがそう思った。

しかし、そんな予想を裏切つて、掛かって来た用件は残りの一二の方である。

「は？ 見合い？ えっ、木乃香じゃなくて俺に言ってるの？」

リビングから出ようとする刹那に彩輝が言い放った言葉がこれだ。

今日の始まりと同じようにもう一度？ぴたり？と全員の動きが止まった。今度は木乃香も含めて。

『ははあ。成程。それはまた俺好みな』

リビングのドアを閉じた向こう側から微かに聞こえてくる彩輝の声。それから数分経ち、再び彩輝がリビングに入って来る。

「兄様屋上」

訳：見合いに行くなら、まずはウチを倒してからにしろ。

部屋の中には、早速戯言の通用しない状況が待ち構えていた。幾ら何でも早過ぎはしないだろうか。

「いや、取り敢えず落ち着けよ」

「いやいや。まさかホンマにどこの馬の骨とも知らん奴と付き合っ  
ん？」

「いやいやいや。だから会っただけだって。触りを聞いた感じ、かなり面白そうだったぞ」

「いやいやいやいや。せつちゃんなら百歩譲るところを億歩譲ったっていいけど、修学旅行直後に寄って来るハイエナみたいな輩との交際は一步足りとも譲りません！」

今までの行いからか彩輝は、妹の木乃香と比べられたり、失踪歴を

持っていたりと、悪い意味ではそれなりに知られているのだ。

それが今回、蓋を開けてみればそこに居たのは、落ちこぼれでも絞りカスでもなく、異端を更に極める異端。他とは一線を画す達人<sup>アデプト</sup>の姿。

それまでの評判と相まってか、近衛彩輝の名は割と広く知られていた。妖怪界限でのことも含めると、日本全国と言っても過言ではない程に広まっている。

そして、またしてもここで出てくるのが、血統である。

優秀な『血』を取り込む為に、幾つかの家が動いたとしても、何の不思議もない。

だからこそ、普段とは立場が逆転して木乃香が声高に反対意見を述べているわけだが。

「よーろし」「い、な」「らば単」「戈争だ」

打ち合わせ無し。無駄に息の合った無駄のない無駄な連携プレーを披露する兄妹。

「この二人の関係を危惧してのことだったら、詠春さんが一番正しいんじゃないの?」

ポツリと呟いた千雨の声は聞こえるはずもなく、

「来いよ木乃香。兄を超えられる妹など存在しないということを実明してやるっ」

「行くえ兄様。その幻想を殺されるか、そのまま抱いて溺死するか、好きな方を選び」

そして、まるで計ったようなタイミングで呪的警報マジック・アラームが鳴り響く。

これが合図となり互いの魔力が交錯する　なんて展開になる筈もなく、代わりに？パンパン？と茶々丸が手を打って、

「兄妹漫才はその辺にして、対応したらどうですか？」

と、割って入る。

「この鳴り方は招いていない方の客だしなあ」

あー、めんどくさ。と頭を掻く彩輝。

「む。お見合いの話は終わったわけやないえ」

「じゃあ一緒に来」「行く」

即答である。

「俺の予想だと多分明後日になると思うから、予定空けとけよ」

「また随分急やね」

「朝の通勤ラッシュ時みたいな理由があるのさ」

「つまり、間が置けない、と」

「そういごと」

恙無く木乃香同席の約束をした彩輝は、そのまま玄関へと一人で向かったのであった。

ところで、今回の騒動で忘れてはならない面々が居ることを覚えて  
いるだろうか。

関東魔法協会に莫大な被害を与える切っ掛けとなったネギ・スプリ  
ングフィールドのことである。

と言っても、別に彼が悪いということではない。契約書に何の疑い  
もなくサインしてしまうのも悪いと言えば悪いが、誰が悪いのかと  
指を差せば、学園の教職員たちだろう。

誰も叱らず、何も正さず。そうやって放置し続けてきた代償を払わ  
されている。新人一人の教育に手を抜いただけにしては高く付き過  
ぎではあるが。

しかしそうして、何もしなかったからこそ、今現在においてもネギ・  
スプリングフィールドは何の反省もしていない。

元々自分が損害を与えたことすら無自覚なのだから、仕方のないこ  
となのだが。

「ちょっとネギ、何処行くのよ？」

「あ。明日菜さんのどかさん」

あまりの非常事態に学園中の関係者が右往左往している最中、そんなことは露知らず、野球帽を被ったネギは従者を伴って外出していた。

数日前に死にかけたとは思えない年相応の振る舞いで、肩にオコジヨを乗せながら三人の先頭を歩く。

後ろに続くのは言わずと知れた神楽坂明日菜と宮崎のどかの二人。

ネギは明日菜から問われた行き先について答える。

「よく覚えてないんですけど、僕を助けてくれたかもしれない人に会いに行くんです」

何があったのかは霧がかかったように思い出せない。それでも断片的に思い出せる記憶に、夜間の中を金色に煌く長髪を靡かせた少女の姿があったのだ。

その記憶と符合しそうな人物に一人、心当たりがあった。

つまり、ネギが向かっている先はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの居住場所　近衛彩輝の自宅である。

自己防衛の為に記憶が欠落している少年。気絶させられ気付いた時には本山で治療中だった少女。もう一人の少女はそもそも何が起ったのかすら認識していない。

無知と無能をふんだんにデコレーションしたパーティーが、彩輝宅



へ行つてどうなるかなど、想像するに難くない。

「この辺りの筈なんですけど……」

ネギは住所が書かれているクラス名簿と現在地を見比べる。

キヨロキヨロと周りを見渡しても、あるのは人の手によって管理された不自然な自然だけ。家なんて一軒足りとも存在しない。

「ちよつと、貸してみなさいよ」

明らかに迷っている様子のネギを見て、明日菜はネギの手からクラス名簿を受け取る。

そして明日菜も書かれている住所と今自分が立っている場所を照らし合わせてみるも、

「……確かに。この辺りで合ってるわね」

結局ネギと同じように発見には至らない。

三人寄れば文殊の知恵と言うが、第一問題として家を見つけることすら出来ないでいる。まあ、当然といえば当然であるのだが。

もう少し周辺を彷徨いてみるネギ一行であつたが、やはり家を発見することは出来なかつた。

「兄貴。そのクラス名簿の方が間違つてるんじゃないっすか？」

ネギの肩に乗つたオコジヨ妖精　アルベール・カモミールが口を

聞く。こつも探して見つからないのであれば、そう思いたくもなるが。

「それはないと思いますよ。ウチの学校はクラス替えが無くて、そのまま進級しますから、名簿も一年の頃から同じです。間違いがあるならもつと早く直されている筈です」

従者の一人、宮崎のどこによって否定される。

「何で見つからないのよ」

明日葉が全員の心中を代弁する。

「あー」

そして、おずおずとのどかが自分の思い至った予想を述べた。

「エヴァンジェリンさんって魔法使いなんですよね？　じゃあ、魔法で家を隠してるとかは？」

何の為に？　そんな疑問が浮かんだが、すぐに力モがあることを思い付いた。

「案外そうかもしれませんぜ。悪の魔法使いの習性ってヤツで。こは探索系の魔法を使った方がいいツスよ」

「でも、別に魔法の力は何も感じないけど……」

「どうせこのまま足で探しても見つかりそうにないんだから、さっさと使っちゃいなさいよ。困った時の魔法でしょ？」

「そうですね。ラス・テル・マ・スキル・マギステル」

そしてネギは杖を握り、探索の魔法を行使する。

例え探索と言っても、他人の工房に向かって魔法をかける。世が世なら殺されたって文句は言えない。

彼らが会いに来ている真祖の吸血鬼ならば女子供は殺さないという矜持があるが、この家を建てた魔法使いにそんな優しさは微塵も無かった。

？ゆらり？と影が浮かぶ。

「えっ？」

異変の先を見ると、一匹の豹が居た。

ただの豹ではない。その身体は半透明に透けていて向こう側が見えている。一見してこの世のものではないと分かる存在。

「な、何よあれ……？」

答えを言うならば、近衛彩輝が 否、零崎彩識が家を守る為だけに創った人工精霊。侵入者を排除する為に創った防衛システムである。

そして、ネギたちにそんな知識はある筈がない。突然現れた豹に当惑するばかり。



しかし、そんな事情は一介の防衛システムには関係ない。ただ創り手に仇なす者を始末するだけである。

そして？ミシリ？と致命的な音と共に、杖に亀裂が入る。既にネギの顔は蒼白だ。

いよいよ杖を押し折るかと思われたその瞬間、

「何やってんの、お前ら？」

と、黒い着流しを着た少年、ここの家主が登場した。

そのため豹の動きも止まり、ネギたちから離れ、彩輝の隣に控える。

「いきなり何すんのよー！」

突然の手荒い歓迎に明日菜が早速噛み付いた。まあ、襲われたのは自業自得なわけだが、そんな考えが彼女に浮かぶ筈もない。

ネギはというと、

「そ、そんな……杖に……」

茫然自失。彩輝のことなんてアウトオブ眼中。これもまた自業自得なので、彩輝が直してあげるなんて展開は永遠に訪れない。

「やいやいやい！ 客人をいきなり襲うたあ、一体どういっつ見だつ！」

そんなネギに代わって肩の上のカモが明日菜と一緒に突っ掛る。

「で？ 何か用？」

まあ、そんなことをこの男が気にする筈もなく、一人と一匹の主張を全てをスルーした上で、実に面倒くさそうに彩輝は尋ねる。

「『何か用？』っじゃないわよッ！ 私たちはエヴァちゃんに会いに来ただけなのに、ネギなんて大切な杖を壊されかけたのよ！？ 他に言うことがあるでしょう！」

「無いね」

と、彩輝は反射的に答えてしまいそうになる喉に待ったをかけ、その言葉を飲み込む。

付け加えるなら今家の中に居る面々もこればかりは理解できなかつたろう。師の影響か、基本的に呪物は使い捨てである集団だから。

刀などの武器と違って身体に馴染ませる必要のない発動媒体に、そこまで執着する感性を理解できる筈もない。

そして彩輝は少し黙り込んで 正確に言つと念話をして そもその原因を口にする。

「ていうかさ。アポイントメントって、知ってるか？」

必要無いと思われるが念の為の解説。

アポイントメントとは、事前にされた面会などの予約や約束の意味合いで使われる言葉である。

他人の家に日常的に入り浸っていたり、そのまま泊まってしまっても誰も疑問に思わなくらい親しい間柄なら別にアポなしでも構わないだろうが、初めて訪れる家の住人が在宅か不在かも分からずに突然訪問するのは些か非常識であろう。

つまり、ネギはアポなしで意気揚々とここまで来たのだった。

一言断りを入れるという簡単な工程を省いてしまうと、本来家まで辿り着けない招かれざる客人を案内するモノが牙を剥いたりするの  
で、連絡は事前にちゃんとするようにしましょう。

本日の教訓である。

と言っても、それで引き下されるわけもなく。

「た、確かに、ちゃんと連絡しなかったのは悪かったけど、魔法で家を隠すことないじゃない」

「隠してなんかねえよ。来れる奴は来れるし、来れない奴は来れない。それだけだ」

噛み付くことはしなくなったが、代わりに食い下がるようになった。

これはこれで面倒だ。

「お願いします。エヴァンジェリンさんに聞きたいことがあるんです」

聞き直ったわけではなさそうだが、会話が出来る程度に立ち直った

ネギは彩輝に頭を下げる。

頭を下げる時は帽子を取れというのに。

「何が聞きたいわけ？ どうせエヴァが会うはずないからこのまま仲介してやるよ」

そしてそのままさっさと帰れ。

下手に言い込んだりせず、相手の要求を適当に受け入れてやること  
が、このやり取りの最短の終わらせ方だと彩輝は悟り、最後の一言  
は心の中で呟いた。

「修学旅行中の三日目のことなんですけど……」

「ああ。残念ながら、表向きアレに関わったのは俺と木乃香と刹那  
だけってことになってるから」

麻帆良生が介入して上手い具合に恩を売ったり出来ないように配慮  
された結果である。

簡単に喋っているようにも見えるが、裏を返せば、他の面子が関わ  
った証拠なんて残していないということだ。

「それじゃあ、って……表向き？」

加えてネギが誰かに喋ったところで、その信憑性は皆無である。

「じゃあ、やっぱりあの時の人はエヴァンジェリンさんだったんで  
すね!？」



「多分そうじゃねーの？」

とても投げやりに彩輝が答える。

「エヴァンジェリンさんにお願ひがあるんです」

長いので要訳。

何の役にも立たなかつた自分の力を再確認する為、もう一度自分と戦つて欲しい。

もう一度つて、いつ一回目があつたんだよ。と、桜通りのことなんて忘れ去つてゐる彩輝はそんな風に思つたりもしたが、気にせずエヴァと念話で会話する。

それに対するエヴァの返答は、

「『何故私がそんな面倒なことに付き合わなくてはならん。どうしてもというなら目の前のハウルに頼め』つて、さり気なく人に面倒事を押し付けんなよ」

しかし、口ではそう言いつつも、ここで彩輝の算段が働く。日本全土をひっくり返した近衛彩輝の算段が始まつた。

まず東の空を見て、南を通り、西の空へ。そこから北を通つてまた東の空へと視線を動かす。

「そろそろ、頃合いかなあ」

誰の耳にも届かない声量で、ボソリと彩輝が呟いた。

「三週間後の土曜日、深夜零時くらいなら、ちよつと暇を持って余してるから来なければ来ればいいさ。場所は世界樹前の広場で」

「ま、待ってください。僕はエヴァンジェリンさんと、出来れば今すぐにでも」

あー、メンドクセー。と、たった十分も経っていない会話の中で何度となく「面倒だ」と繰り返す彩輝。

「じゃあ、小手調べに今から軽い一撃を与えてあげるから、魔法アリで耐えることが出来れば、エヴァをこの場に引き摺り出してやるよ」

なんとという理不尽な条件。

しかし、軽い一撃を耐えるだけという、字面だけなら簡単に受け取れてしまう条件に、ネギは頷いてしまう。

「てけててん。トーマートー」

まるでひみつ道具を出すかのようなノリで、彩輝は真っ赤に熟したトマトを何処からともなく取り出す。

「ぐしゃ。だくだくだくー」

そして、手に持ったトマトを握り潰した。

手から滴り落ちる赤い果汁が、指の隙間から零れ落ちる赤い果肉が、

ネギが本能的に忘れようとしている記憶を刺激する。

それはまるで血のように、肉のように見えてしまう。

いや、違う。自分は見ていたのだ。その光景を。人が餌に成り下がる『食事』を。

人の血はもっと赤かった。肉が地面に落ちる鈍い音。骨という赤だけの物体の中に唯一混ざる白色。噎せ返るような血の匂い。静まり返った山の中に響く、肉を咀嚼する音。

もうこの時点でネギは呼吸が浅くなり、遠目から分かる程に顔を土気色に変色させ、全身から脂汗をかいている。

当たり前だが、トマトを潰すなんて行為が攻撃に該当する筈もなく、ここから彩輝の軽い一撃がネギに浴びせられた。

「ところで、昨日食べた『ニク』は美味しかったかい？」

今度こそネギは胃の内容物を全て地面にブチ撒けた。

ガタガタと身体は震え、目の焦点は合っておらず、ちゃんと息を吸えているのかさえ疑わしい。

「ネ、ネギ!?! 一体どうしたのよ!?!」

慌てふためくのは展開について行けない、従者二人と使い魔である。

「重度のPTSDだろうから、精神病院に連れて行くことをお勧めするよ」

月並みな助言を残して、彩輝は彼らには見えない家の中へと入って行く。

混乱し、何をどうすればいいのか分からなくなった少女たちは、取り敢えず大人を呼んだ。

そして、運ばれた先は病院ではなく魔法関係の施設。

当分の間は学校行事も公欠扱いになり、これからはネギの治療と並行して、三人と一匹の『教育』が為されることだろう。

S I D E 瀬流彦

当てもなく街を彷徨う。

ここは学園都市で、今日は日曜日。その所為か、どこに行っても人通りが絶えることはない。

すれ違う学生たちは皆笑っていたり、今幸せかと聞かれたら「YES」と即答するだろう。……僕と違って。

……はあ。鬱だ。

本当にどうしようか。考えれば考えるほど本気で泣きたくなくなる。

何があったか単刀直入に言うと、ちょっと学園をクビになってきた。

監督不行届というか、もう少し時間が経ったら全部僕の所為になつてるのかな？ 今頃ネギ君が被る泥を最小限にする為に画策中だろうし。

ホント、何でこんなことになつたんだろうね？ 僕は何もしていないのに。いや、何もしなかったのが悪いと言えば悪いんだけど。

でもさ。元はと言えば、ネギ君を好きにさせろって言ったのは学園長だよ？ あのクソジジイの日和見がこんな事態を引き起こした元凶なのに。

……はあ。ここで分かりやすく怒りに任せて復讐とかしないあたり、僕も相当なお人好しだよな。

きつと平行世界には知り合いに片っ端から連絡取って、反旗を翻したりする僕も居るんだろう。

平行世界のことを考えて現実逃避したところで、何も好転しないしなあ。

今はすれ違う学生たちの笑顔を見るのが辛い。もの凄くクルものがあるね。こっ、心の奥底に。

ゆっくりこれからのことを考える為、人気のない方に向かって歩いて行く。

最大の問題は次の職場だよな。今はまだ貯えがあるからいいけど、すぐに底をついちゃうだろうし。

魔法世界にでも行けば適当な職は見つかるだろうけど、正直荒っぽ

いのは向いてないしなあ。かと言って、問題起こして麻帆良をクビになった僕を雇ってくれる親切な会社がそう簡単に見つかるわけないし。

何これ。どうあがいても絶望。バッドエンド直行なんだけど。

「……はあ」

もう何度目になるか分からない溜息を吐き、右足左足と交互に足を前に出す。

マズイなあ。ダメ人間へとなる境界線上に立っているのがありありと自覚できる。あと一歩踏み出せばしがらみとか気にせず、色々と楽になるんだろうけど。

この期に及んで、また何もせず安易な道に逃げようとしてる自分が嫌になる。

軽く自己嫌悪に陥りつつ、でも僕を取り巻く現状に更に嫌気が差して、気付けば人っ子一人居ない場所を歩いていた。

あれ？ どこだろう、ここ？

これでも学園に勤務していた時間は長いし、裏の仕事の関係で普段一般人が立ち入らないような場所にも行ったことはあるけど、ここは本当に見覚えがない。

まさか、迷った？

洒落にならない。確かに適当に彷徨っては居たけれど、土地勘だっ

であるし何年も住んでるこの学園で道に迷うなんて、自分でも信じられないことだ。

これは自分で思っている以上に堪えているのかも。

もう見納めに辺りをブラブラするのはやめて、大人しく部屋に戻る。取り敢えず、荷造りでもしながら折り合いを付けるしかないだろう。

新田先生や一般の先生たちにも挨拶しないといけないしね。理由としては、実家に居る親が体調を崩して、とかがり来りなものでいいか。

そして、百八十度振り返り、歩いて来た道を引き返そうとしたとき  
ログハウスが目に入った。

「こんな所に、家？」

思わず口に出して確認する。

何故かは分からない。ただこの時の僕はこの家を訪ねなくてはならない、そんな思考に支配されていた。

玄関の前へと移動して呼び鈴を鳴らす。

大して待つこともなく、ドアはすぐに開いた。

「やあ。遅かったね。待ちくたびれたよ」

という、予め僕がここに来ることを分かっていたかのような、見透

かしたセリフと共に。

中から出てきたのは、先日の修学旅行で僕の部屋に泊まっていた、近衛彩輝君。

「ああ。突然ごめんね。恥ずかしい話だけど、道が分からなくなっちゃってさ」

「いえいえ。お気になさらず。ここはそついう風になるよう、創った場所なんで」

まあ、こんな所で立ち話もなんですから、上がって行ってくださいよ。

そんな風に彩輝くんは言っつて、結局お邪魔することになってしまった。

通された部屋のソファに座るよう促され、緑茶とお茶菓子を出してくれる。

「ホントごめんね。突然やって来たのに、お茶菓子まで出してもらって」

「いや、気にしないでいいですよ。ここに來れる人はアポとか考えなくても。こつちも大歓迎ですし」

來れる人？ じゃあ來れない人も居るのかな？

と、思つたのもつかの間、



「ところで、瀬流彦教員」

「うーん。もう、教員じゃなくなっただけだね」

「……ああ。貴方には戯言抜きで言っておかなければならないことがあるんですよ」

そう言っつて、彩輝君は佇まいを正し、

「すみませんでした」

と、頭を下げた。

「えっ！？ いや、何で君が謝るの!？」

「うん。まあ、約束ですしね。再就職先はすぐにも見つけますよ」

こっちの質問を微妙に無視して、彩輝君は話を進める。

確かに、そんなことを言われた記憶もあるけど、ひょっとしてあの頃から麻帆良学園がこうなるって分かってたの？

「呪物の取り扱いとかは出来ますか？」

「え？ まあ、一通りは出来るけど」

「それは良い。面接無しで一発採用される結社を紹介しましょう」

彩輝君の手から光の泡のようなものが溢れ出し、それは魔法陣となつて一つの円環を形作った。

そしてその円環をくぐり抜けると、そこは夜になっていた。

街中に水路が走っていたりして、明らかに日本とは違う街並み広がっている。ていうかアレ、ゴンドラだよな。

すごく今更な疑問なんだけど、彩輝君って何者なの？

そんなことを考えている間にも彩輝君は一軒の建物の中へと入って行き、慌てて僕もその後を追う。

「おーす。ステア居るー？ 求人広告を見て来たんだけどさー」

断りもなくオフィスに入ると、近くに居た人たちが一斉に挨拶をして、その内の一人が「社長呼んで来ます」と駆け足で去っていった。

駄目だ。短時間に理解の範疇を超える出来事があり過ぎて追いつけない。

先程走り去っていった社員の人綺麗な女性を引き連れて戻ってくるまで、状況の整理を頑張ってみたけど、ほとんど意味がなかったよ。

「やほー、ハウル。三日ぶり」

「おう。ところで、早速本題に入って悪いんだけどさ、こちら先的一件で麻帆良学園から解雇処分された瀬流彦さん」

「あー、採用」

「いやいやいやいや！ ちょっと、いきなり採用ってそれでいいんですか!?!」

あまりの即決について口を挟んでしまったけれど、この場合は仕方ないだろう。

「あの世界樹のある麻帆良学園で働いてたんでしょ？ なら文句はないわよ。ちょうど大口の取引相手が出来て、人を雇おうとしてたのは本当だしね」

「それに今回のだって責任を擦り付けられて蜥蜴の尻尾切りみたいになった形だから。切られた尻尾の方が優秀だなんてよくある話だろう?？」

ほんの十数分前まで、僕は人生のどん底に居た筈なんだけど、気付いたら再就職先が決定していた。

未来がどうなるかなんて、その時が来るまで分からないと言っけれど、こればかりは予測出来た人なんて居ないだろう。

もうその日のうちに雇用契約書にサインすることになって、僕の人事はたった一日で二転三転することになる。

取り敢えず、一度麻帆良へ戻り、荷物を纏めて挨拶回りをした後から、正式に入社することに。

正直、展開に全くついて行けてないけど、決まったからには精一杯頑張ろうと、新たな決意を胸に、僕は麻帆良へ帰った。

第六十話：お見合い騒動（前書き）

昨日、今年初めて蛭を見たよ。

というわけで、六十話目にしてメインヒロインは木乃香と明言します。

ついでに、すっかり人避けの意味を成さなくなってしまったあらすじも書き直しました。

## 第六十話：お見合い騒動

一体ここは何処だろうか。

右を見ても左を見ても、そこにあるのは木ばかり。勾配があるから、多分山であろう。

空を見上げると木々から葉が生い茂っていて、その隙間をすり抜ける頼りない月明かりが私の最低限の視界を確保してくれる。

今が夜ということは分かるけれど、正確な時間までは判然としない。

どうやら私は携帯電話どころか、腕時計すら身につけていないようだ。

文字通り着の身着のまま。こんな夜に山の中に入るなんて自殺でもしたいのだろうか。

しかし本当にどうするべきだろう。山を降りるにしても月明かりだけでは心許ないし、そもそも私は何の意図があって夜の山に入ったのだろうか。

下手に動くことも出来ないし、仕方なく野宿することになるのかと現状を俯瞰する。どうやら、虫刺されは諦めるしかないようだ。

まあ、時間が経つに連れ、何のためにここに来たか目的を思い出すかもしれないし。

そう思っていたとき、

ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ

頂上から荒々しい息遣いと、軽やかに地面を蹴る音が聞こえてきた。

次第に大きくなる音と、だんだん近づいてくる気配に、私は言い知れぬ恐怖を覚え、それまでの考えを全て捨てて山を走って下山する。

？がサがサ？と幾重もの枝が私を服を破き、肌を引っ掻いていくが、そんなことが気にならぬ程私は迫り来る気配に恐怖していた。

唯でさえ僅かな光量しかない夜の山を、そんな風に脇目もふらず走り抜けたら、落ち葉に足を取られ、そのまま転んでしまう。

けれど、それで今までの勢いが無くなるわけではなく、何度も身体をぶつけながら斜面を下り降りていく。

止まったときには全身打撲と擦り傷だらけ。大きな怪我をしなかったのが奇跡のようだ。

ウオオ                      ンッ

後ろから遠吠えが聞こえてきて？びクリ？と身を震わせる。

逃げようと起き上がろうとすると、辺りに獣の臭いが充満してきて、振り返るとそこには人を見下ろす程に大きな狗が一匹居た。

声ならぬ声が口から漏れる。身体は震えるばかりで言う事を聞かぬ。

そんな私に狗は近付いて来て、その鋭い牙を私の足に突き立てる。



んと、助けてみせるから」

あの男。あの男さえ、居なければ !

鋭く明確な殺気を感じ取って、俺こと近衛彩輝は枕の上から頭をずらす。

次の瞬間には先程まで俺の頭があつた場所にヒカキボルグが突き立てられている。そして休む暇なく腹筋に力を入れ、転がるようにベツドの上を避難。

なぜなら間髪入れずに、聖剣エクスカリバーが横薙ぎに振るわれたから。

立ち上がり、スパナギの剣に武器を持ち替えて更に振り下ろそうとしている闘入者の腕を掴んで止める。

「おはよう木乃香」

「おはよう兄様」

そして何事も無かつたかのように交わされる爽やかな挨拶。

取り敢えず、危険なので木乃香の手からスパナを奪う。ボールのようなものと火かき棒の回収も忘れずに。他に凶器は持っていないようなので、これだけは真っ先に言わせてもらおう。

「俺は何処の屍人だコノヤロー」



「……静岡県産？」

「じゃあ、エンジェル・フィックスでも使ったかのような素敵な世界にお誘いするぞ」

「麻薬みたいに頭が痺れて、そのこと以外考えられなくなるような、背徳的な恋愛をしたいん？」

「オーケー。誘うまでもなく誘われているという状況は理解した」

「うん。つまりは、そういうことやね」

そう言つて、木乃香は大きく前に一歩踏み出し、俺の背中に両手を回す。二人の間の距離は既に零。俺相手にここまで早く距離を詰め、一瞬の内に懐に入れる人間は、今抱きついてきてる妹だけなんだろうな。

そんな無駄なこと考えてないで、

「残念ながらそんな分かりやすい畏には嵌らねーよ」

木乃香の肩に手を置いて、半歩分の距離を開ける。

「むー。兄様の甲斐性なしー！ 臆病者ー！ チキンチキンー！」

スキル的にそれ言うのちうちゃんじゃね？ というツツコミは置いていて。臆病者という単語に懐かしい顔を思い出したが、それはまあ、外伝で。

別段普段通りと言われればそれまでなのだが、何故マイシスターが屍人やらゾンビ相手に重宝する三大聖剣まで持ち出して、凶行に走る程に機嫌斜めなのかというところ。

今日は四月二十九日。学生が大好きな祝日であり、俺のスケジュールに見合いという予定が入っているからである。

取り敢えず、今日密室で二人きりになるのは、色々と俺の身が危ない気がするのでリビングに避難。

相変わらず平日だろうと休日だろうと人の家に集まって好き勝手やってるね。文句を言うつもりはないけれども。

「聞いてよせつちゃん。やっぱり何か釈然としなくて物理的に行けなくしようとしたら、全部避けられたんやけど」

「偶に寝起きで不機嫌な朱織さんの八つ当たりの相手をやってたら気付いたんですけど、意外とスタングレネードとか非殺傷武器が有効だったりしますよ」

そこ。的確なアドバイスはやめろ。

ただでさえ、ちうちゃんといい茶々丸といい、そういうのを大量生産出来そうな集まりなんだから。

「そっぴや、茶々丸が居ないな。何か用事？」

ここに住んでいるのだから常に居るのは当たり前だが、その当たり前に居る姿が見えない為、暇そうにネットサーフィンしているちうちゃんに尋ねる。

ちらりと画面を覗くと、徳島・香川辺りで行方不明だった子供の變死体が発見されたとか何とか。

「ん？ ああ。茶々丸ならエヴァンジェリンの頼みで調べ事の真っ最中だ。ちよつと本気で取り組むらしくて別室に籠ってるよ」

もしも標的が企業とかならご愁傷さまとしか言いようがないな。

それじゃあ茶々丸も忙しそうだし、久しぶりに自炊しようか。と言つても、簡単なものしか作らないが。

「まだ朝食べてない人は拳手。今から適当に何か作るわ」

当然というべきか、茶々丸が居ないなら率先して朝食を作ろうとする者はこの中には居らず、全員が拳手をした。

「じゃあ、ウチも手伝うえ」

と、木乃香と二人でキッチンに入る。

「和と洋どっち？」

「今日は洋って気分」

言うやいなや、俺はフライパンを熱して油を引く。その間に木乃香が冷蔵庫からベーコンを取り出して、投げてよこす。

「兄様」

「ほい」

ベーコンをフライパンに投下していると、木乃香が声を掛けてきたので目の前にある塩コショウをパス。

「ん。ありがとう」

木乃香は卵をときながら塩コショウを適量に振り掛けていく。

その間に俺は人数分の皿を用意したりして、木乃香が焼けたベーコンを乗せていく。そして次に卵を焼き始めて。

「木乃香」

「もう出してあるえ」

「サンキュ」

まな板の上に置かれているキャベツなどの野菜を糸でぐるぐる巻きにして、解体。一瞬でサラダの出来上がり。

家事炊事なんて、如何に効率良く手を抜くのがポイントなんだよ。

「見たか桜咲。アイツら名前呼ぶだけで意思疎通してるんだぞ。どこの熟年夫婦だよ」

「確か見合いつて、人生のパートナーを探すものだったと記憶してるんですが。何の為に行くんですかね？」

なんて話し声が聞こえたりもしたが、木乃香がオムレツを焼き終わ

るまでにトーストの準備。そして焼き終わったら切り分けて配膳。

この後皆で美味しく頂きました。

そうこうしている内に時間は経って。

「じゃあ、ちょっと徳島行ってくるよ」

今になって言うけど、見合い場所四国の徳島なんだ。

すると俺が行動を起こす前に、木乃香が腕を組んできて、

「うちも一緒に行くって約束やよな？」

「はいはい。分かってますよ、妹様」

そして俺は《門》を開いて、木乃香と一緒に転移する。

彩輝と木乃香が居なくなつて少し時間が経つと、別室から茶々丸が顔を出した。

「調べ物は終わったのか？」

と、尋ねるのは千雨。

「ええ。現在の家族構成から生い立ちまで十全に。……見ますか？」

茶々丸からA4用紙を受け取って、千雨はその全てに目を通す。横

からは刹那も覗き込んでいたり。

こつも彼女たちの興味を引く今一番の話題といえば、彩輝の見合い相手のことである。

面白そう。裏があるだろ。という理由でエヴァが茶々丸に調べるよう命じていたのだ。

そしてその結果は、

「……成程なあ。確かにアイツが食いつきそうな内容だ」

「気付きましたか千雨さん。そうなんです。この方 妹属性  
持ちなんですよ」

「私が何にでもツツコムと思ったら大間違いだぞ」

そんな軽口を叩き始めた二人を横に、千雨から用紙を受け取った刹那は、更に詳しく読み進めていく。

「現在は姉夫婦との三人暮らしで……えっ？ ちよつ、これ」

その先に書かれている予想の斜め上をいく内容に思わず、本当なのか？ と茶々丸に視線を送る。

「事実です」

茶々丸はそれにキツパリと肯定の返事をした。

「私さ。ちよつと詠春さんの評価改めるわ。抜け目ねーな、あの人」

大雑把に四国に上陸した後、俺は木乃香を連れて徐々に目的地のホテルへと近付きながら転移を繰り返す。

折角徳島にまで来たんだから、土産はいちごで、帰るときには藍染めをやっつけていこうと心に誓いながら、見合い場所であるホテルへ到着。

ホテルのロビーに入ると、早速こちらに近付いてくる女性が一人。普段通りの和装だからかすぐ見つかったようだ。

女性は俺たち兄妹の前まで来ると一礼して挨拶。

「やあ。仲人役は 協会 からの派遣ってことでもいいのかい？」

「はい、彩輝様。この度はよろしくお願いします」

と言って、彼女は名刺を差し出してくる。取り敢えず、貰っておこうか。

「……その、私が言うのもどうかと思いますが、本当によろしいんでしょうか？」

協会 から仲人役として来た女性はほとんど無意味に近い最終確認をする。

「別に。その辺はどうでもいいさ。君は仕事が楽になってラッキー、程度に思っておけば？ どうせ当分は待機してるしかないんだから

さ。で？ 先方は来てるわけ？」

「そちらのティーラウンジに」

俺と木乃香は指差されたラウンジに向かって歩いて行く。

「ちょっと兄様。さっきのどうでもいいっていう投げやりな回答はなんなん？」

向かっている最中に、グイッと木乃香が腕を掴んで問い質してきた。

「不服？」

「大いに」

あらら。木乃香の目を見ると、不満気な様子なんて通り越して、軽く怒ってる。

「だってそうやる？ このタイミングで兄様に声が掛かること事態、碌でもないこと考えとる輩が居るってことや。」

それに見合いつて、お付き合いしましよとかじゃなくて、ちやんと結婚を前提にすることやからな。兄様ならそれくらい知つとるやろ」

もちろん、知っているとも。

俺は歩みを止めて、木乃香の話に聞き入る。

「今までは兄様を利用しよつていう、分かりやすい腹積もりが嫌やったけど、今はここまで来て、戯言にもならん心構えで臨んでる



兄様が嫌」

「ここからは戯言抜きで答えなさい。

その目はいつになく真剣で、その声はいつになく本気だった。

木乃香は、俺が俺自身を政界の道具として利用出来ないよう手を打ちに来たとも思っていたのだろう。木乃香が関することには散々やってきたからな。

しかし残念ながら、例え結婚する事態に陥ったとしても、見合いなんでどうでもいいと思っっている俺の本心は変わらない。

それが伝わってしまったのだろう。

木乃香はこんなに心配してくれてるのに、肝心の俺がどうでもいいの一言で片付けたら、そりゃあ怒るわなあ。

あー、これはちょっとヤバイなあ。申し訳ないという気持ちより、嬉しさの方が勝ってる。目の前の妹をとて愛しく感じる自分がいる。

『私としては、いつその場の戯言が通用しなくなるのか見物だな』

ふと脳裏に一昨日言っていた吸血鬼のセリフが甦る。なにアイツ。吸血鬼である前に予言者なんじゃねーの。

戯言抜きで答えると言われた途端に素直に感情を露見させる自分に呆れ、思っていたよりも自分の中で大きい存在になっていたことにビククリ。

「オーケー。分かったよ。戯言抜き。一言目からバツサリ斬って  
こう」

……ふう。取り敢えず、思考を切り替えていこうか。

本心騙る為に真意を語るっていうのもおかしな話だけど。

「じゃあ、兄様は何で断らんかったん？」

「俺も相手も詠春を含めた 協会 の人間も、見合いなんて最初か  
ら眼中に無いから」

「……えっ？」

「ここからは見合い相手も入れて話を進めていきたいんだけど。待  
たせっぱなしも悪いだろ」

再び俺はラウンジに向かって歩き始める。

「えっ、ちよっ……ええー」

いまいち理解が及んでない木乃香も俺の後を追って、すぐ横に並ぶ。  
ゴールデンウィーク初日とも言える祝日で、更に今現在の時間は正  
午に近い。その所為か、席は家族連れの観光客と思しき人たちが溢  
れかえっている。

今席に座っている客と写真で見た顔を照らし合わせて、目的の人物  
を探す。俯いていて分かりづらかったが、ここに一人だけで居る様

は逆に目立ち、無事発見。その席まで木乃香を伴って移動する。

「<sup>イスイミク</sup>成井美玖さん、ですよね？」

声を掛けられて、目の前にいる高校生くらいの女子は顔を上げた。

セミロングの黒髪で、くりっとした大きな目が特徴的。服はワンピースタイプのものを着ていて、俯いていた視線は手に持っているハンドバッグに注がれていたらしい。

改めて事前に送られた写真と見比べて、やはりこの人で間違っていないなかつたと確信する。そして俺は彼女の向かえの席へ、木乃香は俺の隣の席へ座った。

取り敢えず、木乃香は相手を見極めながら、話の流れを掴むことに専念するようだ。

「貴方が」

「どうしました？ まるで幸せだった日常が理解不能な異能のモノに蹂躪されちゃって、それが原因で家庭は滅茶苦茶になっちゃって、最愛の家族が一刻を争う状況に陥っちゃって、そしたら天啓のように助ける手段を提示されちゃって、でもそれを行う為の条件に他人の命が絡んじちゃって、反発しても苦しんでいる家族を見ている内に他人を犠牲にすることを決意しちゃって、相手の立場を利用してダメ元で見合いを申し込んだら予想以上に食いつかれちゃって、だけどいざ相手を目の前にしたら決心が鈍ってしまったというようなそんな、思い詰めた顔をしていますよ」

「……なつ……あ、貴方は……っ！！」

悪いね。普段ならもつとダラダラお喋りに興じてあげてもいいんだけど、今日の俺は戯言抜きって約束しちゃってるから。

一言目からバツサリ斬っていかせてもらおうよ。

「どうして、その、ことを　！」

何故知っている、と言いたげな目で彼女は俺を見てくる。というか睨んでくる。おっと、先制口撃が強すぎたか、警戒レベルまで引き上げてしまった。

「まあ、チカラの差というか、格の違い？　初めてですか？　アデプタス・イク  
ゼンブタス 7」  
4と相對するのは「

俺が次に紡いだ言葉に戌井美玖は目を瞠る。まあ、先日あれだけ派手に騒ぎを起こしたと言っても、所詮耳に入るのは人伝の噂だしね。懐疑的な人ならまず信じない内容だろう。

それに彼女自身、こっちの世界に詳しいというわけではなさそうだ。

それでも、彼女はここに来て漸く、自分が何を呼び寄せてしまったか自覚してくれたいらしい。

そして木乃香の方も俺がここに来た目的を理解でき始めた様子。

「分かったらどう？　俺は全て承知の上でここに居る。謝罪はいいから本題に入ってくれませんか？」

そう言って、彼女の背中を押してやる。

虫が良かろうと都合が良かろうと、厚顔無恥だろつと恥知らずだろつと、そんなものはどっちでも構わない。俺がここに居て、何をするのかは俺が選ぶことなんだから。

「貴方は、貴方なら……姉を、誰も犠牲にせず助けれられるのですか？」

「それはお姉さんの命を削り、縛り付けているものを壊して欲しいと？」

「お願い、します」

「おめでとつ。君の願いはエントロピーを凌駕した」

アナタの願い、叶えましょう。

木乃香に目を向けると、そういつことなら早く言え、と言いたげな呆れた表情や、 unnecessary な心配をさせるな、と少し拗ねたような表情など、色んな感情を縋い交ぜにして俺を見ていた。

嘗て俺は繰り返し二つの言葉を使っていた記憶があるような気がする。一つ目は『近親はなし』と。そして二つ目には『前言撤回』と。

……やっぱり、戯言は必要だと思います。

遠吠えが聞こえた。

私は山の中を脇目もふらず走り抜ける。

背後から地を駆ける音は、どんどん早くなって、私に近付いているのが分かる。それが理解できると皮膚は粟立ち、恐怖が背中を押し、足を前へと進ませる。

私は逃げた。必死に逃げた。

もう息は切れて、すでに体力なんて残ってない。それでも私は逃げ続けた。

でも、必死に逃げたところで、結局、必ず死ぬだけだった。少し結果が先に伸びただけだった。

私は地面に転がされ、頭上では大きな狗が見下ろしている。

脚を喰らい、腕を噛みちぎり、臓物を貪り、骨を砕き、血肉を咀嚼した後、狗は私の目の前で、私の血で真っ赤に染まった口を開く。

血塗れの牙が口から覗く。私の顔に近付いてくる。

そしてその大きな口で、唯一残されている私の身体 頭部を

バクリッ

と、濡れた音が静寂を保つ山の中に木霊した。

## 第六一話：狗寶の宴

一度依頼を受けてしまえば、そこからの行動は明瞭で、迅速だった。依頼に至る背景や、依頼人の心情なんてものは考慮せずに、近衛兄妹はホテルのラウンジの席を立つ。

妹はやはり何一つ変わっていなかった兄に安堵して、兄の方はいつも通りに何も考えてはおらず、強いて言うなら少しばかりの心境の変化を自覚して。

そんな、お互いだけで世界を完結させている二人の後を、依頼人イヌイミク 戌井美玖は追いかける。

申し訳ないと思う。利用しようとしておいて、依頼なんかしている自分の都合の良さに吐き気がする。

しかし、そう考えていても、この二人に頼ることが最良だということとを、彼女はすぐに理解させられることになった。

ホテルを出て、彩輝は携帯の地図アプリを起動させ、美玖に大まかな住所を尋ねると、彼はいつも通りに《門》を繋げる。

初見である美玖にとっては、何かを潜ったと思っていたら、次の瞬間には目の前に見慣れた街並みが広がっているのだ。

ホテル周辺のような人通りが多く賑やかなソレではなく、家と家との距離がかなり開いていて、閑散とした田舎の風景。

つまり、美玖にとって幼少から慣れ親しんだ光景がそこにはあった。  
長距離転移。

しかも、何の前準備も無く、先程伝えられたばかりの場所へである。  
否応無く、眼前に居る自分よりも年下の少年の力量を押し量れた。  
加えて、これでまだ断片なのだ。

自分と自分の姉の現状を考えて、差し出される手を、こんなにも力強い手を、拒める程余裕は残されていなかった。もう自分には恥も外聞もなく継りつくしか手段がない。

ここからは美玖の案内で彼女の自宅まで歩いて向かう。

右を見ても左を見てもこの土地は山に囲まれており、平地の水田ではすでに田植えが終わっている様子。

あと数ヶ月もすれば、苗は十分に育ち、穂を実らせ、辺り一面の大地を黄金色に染め上げるのである。

人工物が圧倒的に少ないここでは、きつと壮観な風景が見れる筈だ。  
そんな感想を抱く彩輝と木乃香の前に、周りの家と比べて一回りほど大きい二階建ての家屋が見えるようになった。

家のすぐ後ろには山が迫っており、普通の家の倍近くある塀が外界との拒絶を明確に表している。

美玖はブレること無く、真っ直ぐとその家に向かって歩を進める。



そして三人は門の前に辿り着いた。

門の前に立つだけで、物々しい雰囲気伝わってくる。現在進行形で怪異発生中なのだから、それも当然と言えようか。

しかし、経験の浅い木乃香でさえも、この辺りには慣れきったもので、気負うこと無く、臆すること無く、戌井家の門は開かれた。異形ですら霞んでしまう魔法使いを招き入れるために。

門をくぐると、そこには地獄が広がっていた。という突拍子も無い展開はなく、そこには一般的な家よりも大きな家屋が鎮座しているだけである。

到着早々、木乃香は件の姉の容体を見に、美玖もすぐに案内するつもりでいたのだが、

「それじゃあ、ちょっと家の中を見させてもらっていいかい？」

と、彩輝が口を開いた。

それに対して美玖は、ここまで来て何を、と非難めいた視線を送るが、それを彩輝は飄々と受けながす。

「実家の都合上分かってるだろ？ 今日俺らが扱う魔術は陰陽道。ここじゃ土地の恩恵は微妙だから、風水を確認したい」

基礎もこなせない奴に大掛かりな儀式なんて出来やしないよ。

と、続けるように彩輝は嘯く。

二人居るのだから役割分担した方が効率が良い。何も一部屋ずつ丁寧に家捜しするわけではないのだ。

あくまで家の周りとの力の流れを確認するだけ。しかも彩輝が行うのであれば、ごく短時間ですぐに終わる。

なにより、ここで万全を期してもらわないと困るのは美玖の方で、最終的に彼女は彩輝に許可を出した。

玄関に入ってすぐ彩輝は二人と別れて行動を開始。木乃香は美玖に連れられて成井姉の容体を見に向かう。

二人と別れた彩輝は一人家中を彷徨っていた。

こうして中を歩いてみると、外装よりも広く感じられる。

家自体は木造建築の古い建物であるが、最近増築か何かで手を加えられた箇所がいくつか見られる。

意外なことだが、そういう風に彩輝はちゃんと家を見て回っている。

やはり古い所為か途中？軋軋？と床が声を上げることもあったが、そんなこと彩輝が気にする筈もない。

そして時折、何か思うところがあったのか、扉を開けて部屋の中を覗き見る。部屋には一歩も入ることなく、本当に覗くだけ。一通り目を通すと、扉を閉めて次の部屋へ。

そんな作業を幾度か繰り返し、一階は粗方調べ終わろうとしていた  
ときのことであった。

「ガタン?とまだ見ていない部屋の中から物音が響いたのだ。しか  
し、扉一枚を挟んだだけにしては、やけに籠った音である。」

それを聞いた彩輝はというと、口元に緩やかな弧を描いていた。何  
が飛び出すか分からないびっくり箱の中身に期待するかのように。

「さて」

一言間を置いてからドアノブを右手で掴む。右手を捻りドアノブを  
45度右回転させ、ガチャリとドアを押そうとするが。

「……まあ、鍵掛かっているわなあ」

ドアは?ギイギイ?と異論を唱え続けるばかりで押ししても引いても、  
立ち入りを拒否し続ける。

異論を絶叫に変えて、力尽くで破ろうと思えば簡単に出来るが、流  
石に切羽詰った状況でもなく、何かあるという絶対的な確証がある  
わけでもなく、他人の家を壊すのは忍びない。

だが、この部屋に辿り着くまで、全部ではないにしろある程度の部  
屋は覗いてきた。

逆に言えば今まで鍵の掛かった部屋は一つとして無かったのだ。

何か隠されていることは確かだろう。根拠は彩輝の勘であるが。あ

くまでも、ただの直感で人の家を壊すのはどうかと思う。彩輝自身もそれは自覚しているので、蹴破ることはしない。

「目星はついたし、ここは依頼が一段落した後でいいかな」

そんな風に考えて、というか呟いて、木乃香と合流でもしようかと足を動かしたとき。

？どタバタ？と、大きな足音を立てながら新たな人物が現れた。

性別男。年齢は三〇代半ば。身長は一七〇といったところだろうか。シャツにジーンズとラフな格好をし、その顔は怒りに歪んでいる。

彩輝の姿を見て一瞬驚くような反応を見せたが、怒りの中に剥き出しの敵意をブレンドして彩輝を睨みつける。

逆に彩輝はその態度を見て、男は相手が誰であろうとこの部屋に入ることを嫌っている。いや、阻止しようとしている。と、凡その見当をつけた。中には、さぞ大切なモノ、もしくは人目を憚りたいモノがあるのだろう、と推測と共に。

向かい合う二人。彩輝は特に何も思っていないが、男から発せられる敵意で取り巻く空気は最悪だ。

そして、沈黙を最初に破ったのは、男の方であった。

「お前……近衛の者だな。ここで何をしている」

ドライアイスのように、低く冷たい声音である。

この家の者なら、今日美玖が見合いをする相手の顔くらい知っていてもおかしくないが、第一声から素性を当てられたとなると、彩輝は面倒くさそうに溜息をつく。

勿論いきなり溜息をついても、相手の神経を逆撫でするだけなので、バレないようにはあるが。

そして溜息をつく理由はというと、

（零崎姓に続き、近衛姓まで有名にすることなかったな）

国一つ変えておいてする後悔がこの程度の個人的な問題というのも、ある意味で凄いことだが。

「拝み屋紛いの仕事を頼まれましたね。この家の風水を見て回ってるんですよ」

別に嘘をつく場面でもないのに、あるがままの出来事を喋る。と言つても、素直に喋ったところでそれを相手が信じるかは別問題。

相変わらず敵意と嫌疑の眼差しは収まることを知らない。協会に因縁でもあるのだろうか。そう思いたくなる程の眼光の鋭さである。

「……その部屋には、入るな」

短く簡潔に。そして明確な拒絶を持って、彩輝に命じる。

「そんな邪険にしないでくださいよ。中から物音が聞こえたんで、家人が居るなら挨拶をと。それだけです」

「その部屋の中には誰も居ない。古い家だからな。大方、鼠でも出たんだろう」

「ああ、鼠。なら猫を飼いませんとねえ。犬は役に立ちそうにありませんよ」

敢えて、『犬』という単語にアクセントを付ける。

そして男が何か言う前に、では失礼。と、口を三日月のように曲げてそう言つと、彩輝はこの場から去っていった。背後から聞こえる舌打ちと齒軋りの音が、まだ男がその場に留まっていることを主張する。

そんな不愉快なBGMもすぐに聞こえなくなり、彩輝は木乃香の居る場所へ向けて足を動かす。

これからどうやって依頼を片付けていくか考えながら。

一方、家屋に到着して早々、兄と別行動を取るようになった木乃香は、美玖の案内で彼女の姉の寝室を訪れる。

玄関に入ってすぐ自分たちとは別方向に歩き出す兄を見送り、自分はこの家の住人であり、依頼人である人の後を追う。

「そういえば、まだちゃんと挨拶してませんでしたよね？ 妹の木乃香です」

ふと、思い立ったように前を歩く彼女に向けて木乃香は自己紹介を始めた。

「あ、妹さん……」

対する彼女は立ち止まって後ろを振り向く。身体は木乃香の正面を向いているが、目を合わすことは出来ずに視線は泳ぎっぱなしでいる。

下手をすれば、自分の兄が殺されるかもしれない事態に巻き込まうとしたのだ。それくらいの罪悪感を持っている。

と、一応思いはするが、

「まあ、兄様自身があんな感じなんで、ウチも深く突っ込むことはやめておきますよ」

実際、彩輝は全て知った上で来ているようだし、本来であれば自分は来る予定ではなかったのだ。なら、兄の意向に従っておこう。

加えて、色々理由を付けているだけで、朝起きてからホテルに着くまでの自分の反応を楽しんでいたんじゃないかと、木乃香は深読みをする。

(流石にそれは趣味が悪すぎるか)

でも、考えてなかったにしても、楽しんでたのは事実だろうなあ。

逆に、自分の為に慌てふためく兄の姿を想像したら、口元が綻びそうになったので、この件はチャラにしてあげよう。と、結論を出す。

それにここまで着いて来たら、ごちゃごちゃ文句を言う前に依頼を達成してしまおう、という気持ちにすでになつてしまっている。

自分たちを騙そうとしていたことは、この際棚に上げておく。木乃香のモチベーションは仕事を請けた人間のものへと変わっていた。

「それにな。ウチも兄様も、そういう理由は嫌いじゃないえ」

そう言つて、木乃香は美玖に微笑みかけた。

彼女の顔が驚きに染まる。

「  
ありがとう」

それは心からの感謝の言葉だと伝わった。

立ち止まっている彼女を先へ促し、廊下を真っ直ぐ進んで行くと、右手には二階へと続く階段があつた。その階段を登っていく。

二人分の足音に重なるよう、段差の板が？ギシリ？と軋む。

常日頃カーテンにより光を奪われ、自身を痛めつけるように重い物を背負つて、拳げ句の果てに美少女二人に足蹴にされて嬌声を上げるとは、家に人格があれば周りがドン引きするぐらいのマゾヒストなのではないだろうか。

もちろん、戯言だ。

そして階段を登り終わると、美玖は再び廊下を歩き出し、少し先に



ある部屋の前で立ち止まった。

ここが彼女の姉の寝室なのだろう。外から見ただけでは何も異常は見られない。視覚からの情報は問題無しと判断される。

だが、入るかと思ねられれば、大抵の者は二の足を踏んでしまうだろう。

( 獣臭い )

嗅覚に感じる異常に、思わず木乃香は顔を顰める。

部屋の外にまで漂うほど、重厚な獣の臭いが満ちている。発生源は言うまでもない。

「な、何で!? 今朝はこんな風には……何もなかったのに……」

目に見えて美玖自身も狼狽している。戸惑いを隠しきれないほどに。

彼女の言葉から察するに、朝までは何の異常も無かったのだろう。美玖が見合いのために家を出て今に至るまでに、何かが起こった。

彼女の姉の身に、もしくは取り巻く環境に、異変が起こった。そう考えるのが妥当だろう。

慌てて美玖はドアの取手を掴む。その手を更に木乃香が掴んだ。冷静さを欠いた彼女を落ち着けるように。

「中で何が起こってるか分かりません。ウチが先に入ります。よろしいですね?」

相手に尋ねてこそいるものの、木乃香の有無を言わせぬ物言いは拒否することを許さない。

その言葉には重みがあり、歴史があつた。木乃香の中に流れる血が、幾百年と積み重ねられてきた血脈がそうさせるのだろうか。

ぴしゃりと冷水を浴びせられたように美玖は動きを止めて、取手から手を離した。

入れ替わるように木乃香が取手を握り、ドアを押し開く。

一先ず、美玖を廊下に残し、一人だけで部屋の中へと足を踏み入れた。

室内は一面白色に染まっている。やはり彼女の姉の寝室だったのでろう。部屋にはベッドが備えられていて、寝る者を拘束するように存在する分厚い革のベルトが、異彩を放っている。

そのベルトも今となつては、鋭い刃物か何かで引き裂かれているが。ベルトだけではない。ベッドのマットレスも大きく裂け、スプリングが飛び出している。掛け布団も例外なく無残な姿へ変貌を遂げている。

まるでベッドの上で寝ていた者が、起き上がりにも暴れたかのような有り様だ。

そして、それらから舞い上がったのであろう真っ白な羽毛が、この部屋の基調を白一色へと統一していた。

しかし、肝心の部屋の主が見当たらない。戌井姉の身に何かがあったことは明白だ。

更に数歩、木乃香は羽毛で出来た不恰好な絨毯を踏みしめながら、神経を研ぎ澄ませながら前へと進む。何かしら痕跡が残っていないかベッドの傍まで。

その木乃香の背後で？ふわり？と羽毛が舞う。

？タンツ？と床を跳ねる音に木乃香が振り返ると、「危ないっ！」と美玖が声を上げるのと、一体どちらが早かっただろうか。

木乃香に向かって腕が伸びる。鋭く伸びた爪が木乃香を捉える。

その刹那

「『禁』」

一言。たった一言によって構築された不可視の壁が、強襲者から木乃香を守る。

壁に激突した強襲者は、それで怯んだのか木乃香と十分に距離を取る。その隙に木乃香は強襲者と美玖を結ぶ直線上に滑り込む。

強襲者は女性である。最近手入れを怠っていたようなボサボサの髪を垂らし、肌からもメリハリが消え、血走った眼で木乃香を睨みつける。歳は成人を越しているであろう。

そんな彼女を更に異常せしめているのが、鋭く伸びた爪。口元から

覗く牙。その隙間からはだらしなく涎を垂らす。そして、彼女の頭からは犬耳が生えていた。

この部屋のドアは押戸だ。つまり部屋に入ったばかりだと開いたドアの反対側に死角が出来る。

古典的な手ではあるが、木乃香も美玖もズタズタにされたベッドに目が行っていた為、気付くことが出来なかったようだ。

そして、木乃香の背後から、

「姉さんッ!!」

と、美玖が悲鳴にも近い声で叫ぶ。

言われてみると、どことなく背後に居る美玖と目の前の女性は面影が似ているような気もする。

今となつては、拘束を外す為に戌井姉が自身の爪でベッドを引き裂いたことが伺える。

（ 憑物、やろっね ）

戌井姉と相対し、木乃香は冷静に分析する。

雑霊が憑いているのなら被えばいいだけなのだろうが、どちらかと言えばこれは、真面目な幼馴染か、いつも眠たげにしている巫女の<sup>サツシキ</sup>領分である。

勿論木乃香だって落とし方は知っている。教えられている。

しかし、こうして本物に遭うのは初めての経験だ。

今後ろに立っている人の実の姉。落とそうとして傷つけてしまっ  
ては本末転倒だ。攻めあぐねる。二の足を踏んでしまう。

そして、その隙を突かれてしまった。

戌井姉は大きく跳躍する。木乃香に跳びかかるのではなく、部屋の  
窓に向かって。

「『縛』！」

木乃香は咄嗟に言霊を放つが、もう遅い。

バリント

声を掻き消すように、ガラスの割れる音が響いた。

逃げられた。と思う間に自分も、たった今割られた窓へ走り寄る。  
下では、憑かれたことによる影響か、苦も無く二階からの着地に成  
功している戌井姉の姿があった。

その姿を見つけると、美玖を残し木乃香も窓から飛び出した。重力  
に従いそのまま降下。ぶわっと風が身体に当たる。

そして、地面に激突する寸前、

「『オン・ガルダヤ・ソワカ』」

真言を唱えて、着地の衝撃を殺す。

「疾」

体勢を立て直すと同時に符を一枚放って、戌井姉の動きを牽制する。

「グルルル」

唸る。牙を剥き出しにして、獣のように威嚇する。

こんな状態の人間を家の敷地外に出すわけにはいかない。この家は塀の高さが普通の家の倍近くあるが、それでも今の彼女ならば助走なしで跳び越えられるだろう。

まずは、動きを止める。

取り敢えず、そう方針を決めたとき、誰よりも捕縛術に長けた男が現れた。

ひうんひうん、と風を切りながら、辺り一面に網が張られる。

「なんだ。外に居たのか。ならそうと早く言ってくれよ。あと少しで二階に上がるところだったぜ」

と、五秒も掛からない内に戌井姉の身動きを完璧に封じ切った、自分の兄・彩輝が玄関口からひよっこりと顔を出す。

どんなに鋭い爪を持っていようと、肩、腕、肘、手首、指に至るまで全てを拘束されては、抵抗できる筈もなかった。

「あー、もう。いくら靴下履いてるからって、ガラスの破片が散らばってるところを歩くな。ほら」

本人はまるで何事もないかのように、玄関で脱いでいた木乃香の靴を投げ渡す。

何事もないかのように、ではない。兄にとって狂犬が一匹暴れている程度、本当に何でもないので。

靴を履きながら、改めて兄の凄さを再実感。

「それで？ これからどうするん？」

「どうすればいいと思う？」

靴を履き終わり、立ち上がりながら尋ねる木乃香に、彩輝は試すように聞き返す。

「……憑物やよね？」

「ああ。憑物で合ってる。より詳しく言うなら犬神だ」

「だったら、落とすしかないんと違うん」

「でも、普通の憑物とはちょっと違うんだな。この家系は憑きもの筋なのさ。だから偶然霊がとり憑いたとかじゃなく、元々憑きやすい家筋なわけ」

「じゃあ、血筋そのものをどうにかしろってこと？」

言って、少し後悔。生まれ持ったものがそう簡単に捨てられる筈がない。

今も自分の中には莫大な魔力が眠っている。これが原因で修学旅行では動乱が起きた。要らないと言ったところで消えて無くなるわけではないのだ。

だがしかし、

「んー、じゃあ、それでいこうか」

いつものように気負うこと無く、夕食の献立でも決めるノリで近衛彩輝は言い切った。

「いいか木乃香。憑きもの筋なんて言っても、所詮はただの民間信仰だ。ここで多いのはアニミズムだろうな。自然崇拜や精霊崇拜。もっと言えば神や妖怪。一括りにして怪異。

怪異とは妖しくて不思議なもの。正体不明の化物のことだ。ならば、意味付けてやればいい。そうすれば妖しくなく不思議でもなく正体不明でもなくなってしまう」

そう言って、彩輝は糸で雁字搦めになっている戌井姉を見据える。

「そして、『見る』という行為は最も簡単に相手を意味付ける」

言い終える前に彼女の周りの空間が？ぐにやり？と歪む。

霞がかかったように戌井姉の周囲が不透明になり、徐々にソレが木乃香の目にも映るようになる。



ソレは大きな狗であった。

戌井姉の背後にそびえ立つ大きな狗。牙の隙間からは獯猛な唸り声  
が大気を震わし、その力強い脚から伸びた爪は鉄なんてあっさり  
引き裂くであろう。

狗の登場と共に、プツリと事切れたかのように戌井姉は動かなくな  
った。顔は苦しみに歪むことも、獣のように猛ることもない。た  
だ憑物が落ちたかのように安らかな寝顔を浮かべている。

「木乃香。黄白篇の禹歩から布留の言」

短く指示が出される。

それと同時に足が動いていた。？たンツ？と地面を踏み抜く。

禹歩とは中国古代の伝説的な帝である禹が治水事業の際、氾濫する  
河を治めたときに用いた呪術である。

禹という文字は本来竜の姿を描いた象形文字。水神の象徴には多く  
竜や蛇が当てられる。

そして、『抱朴子』の黄白篇、務成子法の中にはこんな記載がある。

『又つた一丸を以て禹歩して虎狼蛇蝮に擲てば、皆即ち死す』

水 つまり、竜を鎮めるための呪術は、時として猛獣を殺す呪術  
になる。

「『一三三四五六七八九十、布留部 由良由良止 布留部』」

そして、紡がれる祝詞。

布瑠の言、という。

これは死者蘇生の言霊として用いられるものだ。即ち、肉体的に限界が訪れているであろう戌井姉の活性を計ったもの。

「  
！！  
」

狗が吼える。

周囲に張り巡らされた糸に身を裂かれながらも、その巨軀からは想像できない程の疾さを持って、木乃香を襲いに跳びかかる。

「では、憑物殺し零崎を始めよう」

思えば、兄の殺し文句を聞いたのは、これが初めてのことだった。

狗は跳ぶ。現在進行形で殺そうとしている木乃香に向かって。その間に居る彩輝に向かって。

着地は出来なかった。その有り様を表現するならば、墜落といった方が相応しい。

新たに張られた糸によって空中で身動きが取れなくなり、糸で編まれた槍によって全身の死の点を串刺しにされたのだ。

抵抗もなく、地に落ちる。抗うことも出来ずに、地に墮ちる。概念から、存在から、根こそぎ殺されて。

一人の人生を狂わせる程に蝕んだ犬神筋の血統は、呆気無く 死んだ。

そして？キラリ？と狗が消え去った場所で何かが光った。

狗の中にありながら、狗の一部ではなかったもの。狗が殺されても、こうして現界に姿を留める物に彩輝は近寄って、拾い上げる。

それは紅い破片。水晶が砕け散った破片のような紅く、透き通るような結晶であった。

「……また、面倒なことになってんなあ」

ポツリと呟く彩輝。そのまま紅い破片を地面へ落とす。厳密に言えば地面に貼り付く彩輝の影へ。破片は音もなく、『倉庫』に収納された。

「ま、取り敢えず、依頼終了ってことで」

異論はあるかい？

彩輝は言葉と視線を玄関口に送る。木乃香もつられてそちらを見る。と、二階へ置き去りにしてしまった美玖がいつの間にか追いついていたようだ。

「……これで、終わったの？」

確認するように美玖は尋ねる。最後の狗に止めを刺すシーンには間に合った様子。

「ああ。請負人の仕事は終了だ。ここからは家族の役割だろうか？」  
依頼は先着順でやるようにしてるから、これ以上は頼まれたってやらないよ。

一見突き放すようなことを言う彩輝だが、それを聞いた美玖はといて、

「ありがとう。本当に、ありがとう」

目に涙を浮かべながら、姉のもとに駆け寄る。

そして、姉を力一杯抱き締めて、「ここからはわたしが」と、なにやら固く決意した様子である。

「さて、それじゃあ俺らはそろそろお暇しましょうか」

「うん」

依頼は片付けたのだ。去り際は弁えていると言わんばかりに、兄妹揃って門へと歩き出す。

「あ、待ってっ！」

感謝し尽くしても、まだ足りない。そんな恩人を引き留めようと美玖は声を出す、

「じゃあなー。お見送りありがとう」

すぐに二人は見えなくなった。

「知ってるか、木乃香？」

折角徳島まで来たんだから「藍染めやってこうぜ、藍染め」と、そんな体験コーナーがないか探しながら、彩輝は木乃香に問い掛ける。

「ここらでは犬神のことを『スイカズラ』って呼ぶんだよ」

「スイカズラ？」

「そ。スイカズラ科スイカズラ属で常緑蔓性の木である吸葛。常緑樹だから冬でも葉を落とすことがなくてな、忍冬ニシドウとも呼ばれる」

「うん。それがどないしたん？」

突然始まった近衛彩輝の雑学コーナーに、木乃香は小首を傾げる。

「いや、ただこれの花言葉が『献身的な愛』で言い得て妙な依頼だったなと」

言われると、厳しい冬を耐え忍び、献身的に姉を支え続けた戌井美玖の姿が想起される。

「そういえば、兄様。いつの間にやら終わってもうたけど、今回の動機は何だったん？」

「いつも通り大したことはねーよ。俺という人間は事件に巻き込ま

れるでもなく、事件を起こすでもなく、全てを知った上で首を突っ込む。そんな感じだったなあ、と思い出しただけ」

昔みたいに行動しようとしたのに、自分の変化に気付かされる事件だった。

しみじみと彩輝は呟く。

「どっという意味？」

「ところで木乃香」

と、先程までとは打って変わって、露骨に話題をすり替える。

「そろそろ戯言ありで話を進めてもいい？」

縛っている割には、所々危うい発言があったが、本人的にはホテルからずっと使っていないつもりだったらしい。

「うん。もうええよ。ところで、初対面の時からズバズバ言い当てたけど、アレはどうやったん？」

「アレぐらい見て分かれよ」

「……普通は分からんえ」

「はッはッはッ。俺の視力は53万だ」

ここに『ソレは観察力が洞察力だ』とツツコミを入れてくれる友人は居ない。

「あと二回の変身を残している　！？」

？じゅるり？と、口元を拭う木乃香。

「どうした？」

「どんな味になるのかなーって想像したら、つい」

目と目を合わせて話す木乃香だが、その視線の意味は世間一般から大きく逸脱していることは間違いないだろう。

ここに『食べるのは前提なのかよっ』とツツコンでくれる友人は居ない。

「ああ。最近流行りの肉食系女子ってやつですね。分かります」

などと宣う彩輝に『お前捕食される側だぞ』と誰かツツコンであげて。

「兄様みたいな紡織系男子はいつの時代も流行らんよね」

「絶滅危惧種は大切に扱いましょうねー。乱獲なんてせずに」

「じゃあ、今度ルーズソックスでも履いてみようか？　鑑賞料は鎖骨でええよ」

「予め条件を出してくれるのは親切だよな。偶に順序を逆転させて話を進める詐欺師なんかも居るからさ」

と、ここで漸く、彩輝は木乃香の最初の問に向けての解答を話し始める。

「他人の過去を言い当てるなんて、そんなもの先に調べておけばいいだけだよ。本人しか知らない過去の開示というのは、自分のチカラを見せ付けるにはちょうどいいからな。」

詐欺師なんかが良く使う手法でもある」

本人しか知らないと言っても、壁に耳あり障子に目あり。情報なんてどこからか漏れているものだ。

現に茶々丸が本気で戌井家のことを探したら、もう筒抜け状態。その資料を見せてもらった千雨や刹那も麻帆良に居ながらにして事件の概要は知っている。

「いつの間に調べたん？」

「俺が調べたわけじゃねーよ。まだ日は浅いけど 協会 の情報局は結構やるね」

「あれ？ そういえば、父様は兄様になんて言って、お見合いの話を勧めたわけ？」

「忍冬だよ」

「スイカズラ？」

「耐え忍ぶ必要のない冬を終わらせてやってくれ、要約するとそんな感じの話だった」



これで依頼に関する話は終了。

藍染めは布を染色液に浸けるよりも、空気に触れさせた方が深い色が出る、と無駄知識を披露しながら、恋人のように手を繋いで仲睦まじく街を歩く兄妹が居たとか居なかったとか。

彩輝と木乃香が去った後も成井美玖の戦いは続いていた。いや、寧ろここからが本戦だと言っても過言ではない。

近衛兄妹に依頼して、姉を蝕んでいた問題を解決してもらった。そうなると、もうこの家には居られない。

元より、彩輝の前にも姉を助けてやると言ってきた男は居たのだ。その条件として彩輝を狙うように、けしかけて来たのと同じ人物である。

今にして思えば、美玖の存在が鬱陶しくなっていたのだろう。だから無理難題を吹っかけて、あわよくばそのまま消えてもらおうとも考えていたに違いない。

思い返せば、姉がおかしくなり始めた切っ掛けも、あの男が来てからのことだ。

今までずっと姉と共に暮らしてきたが、あんな兆候は一度として無かった。

元凶は疑うまでもなくあの男。

ならば、姉の無事が確かになった今、一刻も早くこの家から逃げなければならぬ。あの男に見つかる前に。捕らえられる前に。

しかし、急に家を飛び出せる準備を常日頃からしているわけがない。印鑑や通帳など本当に最低限必要な物だけを取りに、家の中に足を踏み入れる。

それが終わればすぐにでも姉を連れてここを飛び出そう。

いくら田舎町と言っても、高い塀に囲まれた敷地を出てしまえば、人目がある。そうなれば男も迂闊な手出しは出来なくなる。

後のことは逃げきってから考えればいい。

そう、楽観視していた。しかし、現実はそのような風に、甘くはない。

自分の思い通りの結末に物語を誘導できる力があれば話は別なのだろうが、ここまで他人の力を借りつつ放しである成井美玖にそんな力がある筈もなかった。

悪いと思いつつも、姉を庭先に寝かして、自分は印鑑と通帳を取りに戻ったときである。

リビングにある戸棚の引き出しを開けて、目当ての物を発見したとき、髪を鷲掴みにされた。そして、声を上げる間もなく戸棚の角へ頭を打ち付けられたのだ。

目の前で星が散る。

あまりの突然の出来事に理解するのに時間が掛かってしまう。

その間にも、二度三度と執拗に頭をぶつけられ、ついに足が崩れ、美玖は仰向けに倒れる。

視界が暗転しそうになる中、目の前には先程まで逃げようと考えていた男の顔がそこにあった。その表情は怒りに歪んでいる。

男からしてみれば庭先に突然犬神が現れたのだ。異常を察するなどという方が無茶である。

そして男は倒れた美玖に馬乗りになって、殴る、殴る、殴る。

「一体！ オレが！ どれだけの準備をしてきたと！ 思っているッ！」

振り下ろされる拳に容赦はなく、ぶつける怒りに際限はなかった。

美玖は顔を庇うことも、抵抗することも出来ずに、呻き声を上げながら男に殴られ続ける。

「ああ、畜生！ お前の姉の血の濃さは他の犬神筋の人間と比べても格別だった。なのにイ！ あと少して、あと少して終わるところだったものを！」

段々と痛みが麻痺してくる。立て続けに殴られている所為だろうか。

朦朧とする意識の中で、ひたすら自分を殴り続けていた手が止まった。ように感じた。

「、」

男が何か言っているのだろう。しかし、すでに言葉の意味を判別できる程、美玖は意識を保ってはいなかった。

少し間が開いて、今度は顎を掴まれる。口を強引に開かれて、何かの液体を口内へ注ぎ込まれる。

美玖は？ゴクリ？と喉を鳴らした。

粘着く液体が喉を通って胃に溜まる。口の中は鉄が錆びたかのような味でいっぱいだ。

そう。それは殴られた際に、唇を切って広がった血の味と同じで。

胸の灼けるような痛みと共に美玖は、意識は闇へと吞まれた。

獣の唸り声で目を覚ます。

一体、どれだけ気絶していたのだろうか。？くらくら？と頭が揺れる。ざっと辺りを見回すと、起きた場所は窓が一つもない異様な部屋であった。

光源は無数に点けられた蝋燭が。それに照らされて小さいながらも祭壇のようなものが部屋に設置されている。

香のようなものが焚かれているらしく、独特な匂いが部屋の中に充滿している。

喉が渴く。

口の中がやけに粘着いて、？ひりひり？と喉が痛む。

そして自分が気絶する前に何かを飲まされたことを思い出し  
血を、飲まされたことを自覚する。

「ぐうっ……」

胸が痛む。

ズキズキと、ジクジクと、鈍い痛みが広がっていく。

すると、服に点々と血が付くようになった。その点は繋げば円弧のようになり、まるで狗に噛まれたかのような痕が出来上がる。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

呼吸が乱れる。

酸素を取り入れようと大きく息を吸い込むのに、肺を満たすのは不愉快な香。更に気分が悪くなる。

ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ

それでも、深呼吸したことに多少の意味はあったのか、少し落ち着くと、密室の中に自分とは違う息遣いが聞こえてきた。

（待て。わたしは何の音で目が覚めた……？）

幾分かマシになった痛みの中で、より詳しく部屋を見渡す。

結論を言つと、ここに居るのは自分一人ではなかった。祭壇や何かの物陰に自分よりも幼い子らが四人隠れている。

全員が身を守るように、お互いを牽制し合うように。

服は薄汚れて、髪や肌艶の状態は先程までの姉と同じように荒れている。

いや、それだけじゃない。

あまりにも大きな異変で、光源が蠟燭だから気付かなかつた。この床に広がる黒ずんだ大きな染みは、血痕ではないだろうか。

そんな美玖を虚ろな八つの目が注視している。観察するように、ジツと見ている。

そして、その内の一人が呟いた。

「…………おなか…………空いた…………」

人として当然の欲求。子供が言う無垢なお願い。

しかし、それを実現しようとするモノが、歪過ぎた。

ガウッ

狗が吼える。大気を震わせる。

一匹が吠えると連鎖するように、部屋の至る所から鳴き声上がる。今までは、均衡が取れていたのだろう。それも美玖が入ったことにより、崩れ去った。

ここに居る四人は全員、姉と同じ憑きもの筋だ。さほど詳しくない美玖にすら、それは容易に理解できた。

一体、どれだけの数が居るのだろうか。

この狗は宿主の欲求の表れなのだろう。

均衡が崩れ去った部屋の中では、狗と狗がお互いの宿主を喰らおうと躍起になっている。

宿主を守ろうと他人の狗を喰い、純粹に宿主の欲求を満たそうと、宿主自身を喰らおうとする狗もいる。

幸いなのは、美玖には霊視なんて能力はなく、音だけしか聞こえないことであろうか。

手段は特殊であるが、人が生き残るために他人を食べようとする。その光景を、地獄と言わずになんと言おう。

最後の一匹になるまで、この勢いは止まらないだろう。

いや、最後の一匹になれば、そこからは守るものがなくなった宿主を喰らうのだろう。食欲が暴走した狗だ。最後には、宿主すらも喰らうのか。

「どつして……」

そう呟かずには居られない。

ただ、姉の無事を祈っただけなのだ。問題を解決できる人に依頼を  
しただけなのに。どうして、こんな目に遭わなくてはならない。

ぞわり、と身の毛がよだつ。

いつの間にか、彼女の足元には狗が居た。姉が憑きもの筋ならば、  
必然、彼女にも同じ血が流れている。

そして、この空気に当てられたのか、彼女の狗もまた食に走ろうと  
した時だった。

狗たちが喰い合いをしているド真ん中に、一つの円環が浮かび上が  
る。

その円環を美玖は知っていた。ホテルから移動するときに、少年が  
用いていた長距離転移魔法。

「『庄』」

凜とした声と共に、烏の濡羽色をした長髪を靡かせ、先程ここを立  
ち去った筈の少女が現れたのだ。

「どつして……」

またしても、同じセリフが口から漏れる。しかし、言葉に込められ



た意味が違っていた。

その声に、少女　近衛木乃香は笑って答える。

「ちよいと冬を終わらせにな」

すぐに笑みは消え、射抜くような鋭い眼差しで部屋を一瞥する。

「……悪趣味な」

ポツリと呟くと同時に、？轟？と木乃香の身体から魔力の奔流が迸る。

どれだけ飢えようとも、群れを成そうとも、所詮狗は狗だ。極東最大の魔力量に当てられて、全ての狗は身を竦ませる。

だが、木乃香は魔力を無駄に消費しているわけではない。

指の間には一枚の符が挟まれている。部屋の中で荒れ狂っているのは、符の魔力許容量を超えた余剰分。

極東最大の保有魔力量。それは裏を返せば、極東最大の火力を誇るということ。

あの兄の指導なのだ。魔力コントロールなんて基礎中の基礎に手を抜く筈がない。

「疾！」

放たれた符は飛翔半ばで、紫電の槍へと姿を変える。

その槍に穿けぬ物はなく、密室を作り出していた壁のほぼ一面を、塵へと変えてしまった。

「さあ。出ようか」

この部屋の中の陰惨な闇を払拭するかのよつに、麗らかな春の陽射しが差し込んだ。

耐え忍ぶ必要のない冬は去った。

もう窮屈な思いをすることも、ひもじい思いをすることもない。この先には暖かな団欒が待っている。

監禁されていた四人にもそれが分かったのだろう。

この部屋を取り巻く狗たちは、数匹が部屋を飛び出して、残りは全て、消えていった。

木乃香が壁を破壊する轟音を聞きながら、同じ屋根の下で二人の男が相對していた。

片方は焦りを隠そうともせず、ひたすらに、一心不乱に真言を唱える。

「ナウマク・サマング・ボダナン・キリカ・ソワカ・ナウマク・サマング・ボダナン」

片方は不敵な表情でゆっくりともう一人を追い詰める。

そして、追い詰める側である近衛彩輝は淡々と言葉を紡いでいく。

「確かに、元々犬神筋の由来は、蠱毒を用いた術者の血筋ってというのが通例だが、お前は派手にやりすぎだ。

蠱毒の中でも同種の生物で作られたものを更に区別して、『犬蠱』なんて言ったりもするが、お前がやったことは『人蠱』だよ。犬神筋の人間を集めて、犬同士を食い合わせる変則的な人蠱だ」

尚も男は真言を唱えることやめない。

「さつきから唱えているのは茶吉尼真言か。使用魔術は陰陽道か密教か、いや、徳島には剣山（つるぎのさん）という修験道の山があつたな。

修験道。今のお前は修験者でも山伏でもない。ただの天狗だよ。天狗というのもおこがましいな。貴様は狗竇で十分だ。山岳信仰じゃ神に近いと言っても、天狗の地位は最下位。ぴつたりだろう？ 狗竇は今お前が唱えている茶吉尼天が乗る野干と結び付いて誕生した妖怪だしな」

ケラケラと彩輝は喋るのをやめない。逆に男が唱える真言は、段々詰まるようになってきた。

「そうそう。ここで一つ、間違いを訂正してやろう。さつき言った茶吉尼天が乗る野干だがな、これは元を辿るとアジア南部からアフリカに生息しているジャツカルにあたるんだ。

勿論、日本にジャツカルなんて生息しているわけがない。なら何で代用したと思う？ 答えは狐」

「さつき、きつね」

ついに、男の唱える真言が止まった。

「そ。犬じゃあ、ない。第一、狗竇というのも天狗信仰と結び付いたもので、犬なんて一片足りとも介入してないんだよ。

頑張つて犬神筋を集めてご苦労様でした。結局、根本から間違つてたわけだが」

ケラケラと彩輝は男を嘲笑する。

「ば、馬鹿を言え！ そんな筈はない！ これはあの方から与えられた血と、知恵で行っているんだぞ！ 間違っている筈がない！」

「ああ。やつぱり、他人の入れ知恵か。まあ、気にすることはないさ。数十分前と違って、今の俺は戯言が解禁されているからな」

「……………戯言……………？」

男がその意味を理解する前に、？ダンツ？と派手な音を立て、部屋の扉が開かれた。

入ってきたのは数匹の狗。木乃香が壁を破壊して真つ先に飛び出した狗である。

訳も分からず誘拐されて、主犯の男をあの人々が恨んでいない筈がない。狗にとっては食欲よりも殺意の方が動きやすいだろう。

そして、この狗たちは男が隙だらけになる様を虎視眈々と狙っていたのだ。

彩輝の言葉に揺さぶられた今が、襲い掛かる絶好の機会。

狗は男の手足に噛み付き、男がバランスを崩して倒れたところを狙って、喉笛を喰いちぎった。

「狗同士を食い合わせようなんてするから、狗に食われる破目になるんだよ」

ていつか、補足すると、ジャツカルも狐もイヌ科だし。

などど嘯きながら彩輝は携帯と、ホテルで会った 協会 の人間の名刺を取り出す。

「あ。もしもし。そう、近衛彩輝だ。取り敢えず、全部終わったから事後処理よろしく。あと憑物落としの専門家も呼んでおいてくれ。拐われた一般人の安否？ 妹が言うには四人無事らしいぜ。俺からの報告はこれくらいだろ。じゃあな」

通話を切る。

そう。今のご時世、犬神筋と言っても、その全てが裏に関わっているとは限らない。そんな因習なんて忘れられている場合が殆どだ。

協会 が改革でこたついている隙を突いたつもりだったのだろう。見通しが甘い。

決定的だったのは、拐った一人が死んだのだ。その死体を男は適当に山の中へ遺棄した。

この子供の変死体が発見されたという記事は千雨もネットサーフィ

ン中に読んでいたりする。

狗竇の宴は主催者がメインディッシュになったことにより、閉宴した。

その後、協会 の人間が来るまで、彩輝と木乃香と、比較的無事な美玖は少年少女四人と戌井姉の容体をみる。

「さて、それじゃあ帰りますか」

「うん」

そうして、近衛兄妹は今度こそ麻帆良へ帰っていった。

しかし、彩輝も木乃香も、今回麻帆良に残った面々も、これが激動のゴールデンウィークのほんの幕開けだとは、知る由もないことだ。

## 第六一話：狗寶の宴（後書き）

というわけで、木乃香の経験値稼ぎのお話でした。

さて、激動のゴールデンウィークと銘打って、天狗とか画家とか悪魔憑きとか『アンティーク』とか化猫とか『禍具』とか出すけど、本編に全く関係ないから外伝に回すね。

あと六月はテストがあったり、面白そうなゲームが多く出たり、執筆時間がプレイ時間に削られるので、更新は途絶えるでしょう。

第六二話：暇じゃないんだ（前書き）

テスト心折問題多すぎてワロタwww.....ワロタ.....



## 第六二話：暇じゃないんだ

その日、請負人と吸血鬼のもとに一羽の来客があった。

その日、論理魔術師と錬金術師は友人を訪ねに学園外へ。

その日、血濡れの聖職者は殺人鬼と幽霊に出遭う。

その日、主人を失った猫は陰陽師と剣士に行き着いた。

そしてその日、麻帆良に侵入した悪魔に気付いた者は、誰ひとりとして居なかった。

彩輝たちが見合いの一件を筆頭に、色々とゴタゴタに巻き込まれたり、巻き起こしたりしているゴールデンウィーク。

しかし、この大型連休中に一切の自由を許されない者たちも居た。

言わずと知れたネギ・スプリングフィールド一行である。

彼らが一堂に会する場所は教会の地下にある本部の一室。

清潔感溢れるように部屋には白が満ちている。閉塞感を出さないよう天井に青空のペイントがされていないからか匠の遊び心が感じられない。

四月二十七日に彩輝によってネギが新しく出来たトラウマを想起さ

せられ、施設に運ばれてからずっと外に出ることは禁じられていた場所がここなのである。

当然学校にさえ行かせてもらえない。授業・行事等は公欠扱い。この数日間彼らは魔法関係者以外と接触する機会を絶たれていた。

中にはネギ経由で魔法の存在を知った朝倉和美も居たのだが、多忙のあまり軽く殺気立った教職員と自身の担任を見比べて、立場の不利益を悟ると自己保身に作戦変更。

有事の際は麻帆良パパラッチと謂わしめる情報網を用いて役に立てるかも、と逆にこちらから自身を売り込む強かさを発揮。

このまま魔法のことは口外しないという条件で見逃してもらえよう朝倉は記憶保持の為に上手く立ち回った。中学二年生にしては良くやった方であろう。

しかし、世の中そう甘くはなかった。

修学旅行前ならば英雄の息子の関係者として見逃してもらえたかもしれないが、今の麻帆良にネギを色眼鏡で見る輩は居ない。

私情を挿むなら彼女の機転の良さ、実行力、情報収集能力という一種の才能を伸ばすことを考えた者も居るであろう。残念なことに、朝倉の抵抗は規則の前に一蹴されてしまったのだが。

特別扱いなんてある筈もなく、朝倉和美は魔法に関する知識と記憶を失い、早々に解放された。

そして、そんな彼女のように要領良く動けるわけでもなく、その場

の勢いで仮契約をしてしまったに等しい神楽坂明日菜と宮崎のどかは、ネギと一つ屋根の下で過ごすことになってしまった。その更に別室では調教されている小動物。

客観的に全く嬉しくないシチュエーション。

運ばれた先でまず真っ先に行われたのは、ネギ・スプリングフィールドの治療である。

ここで漸く魔法薬を用いてネギの頭髪が人目に晒しても大丈夫なようになつたのだが、今やネギ本人が晒し者のような扱いなので意味は皆無。

ネギがPTSDの治療している傍らで明日菜とのかは魔法に関わる際の常識を担当の教職員から叩き込まれる。

これ以上魔法の存在をバラすなよ、と釘を刺す発言に、

「あ、あの。親友に隠し事は、したくないんです」

のどかの返答に「話し聞いてた？」と威圧的になってしまったのは仕方のないことだろう。

そして、ネギも治療している最中にまた新たな問題を浮き彫りにした。従者が従者ならば、主も主。ネギの方まで魔法の隠匿意識が欠落していることが発覚。

この三人を担当していた教師は匙を全力で投げつけた。瀬流彦という<sup>被害者</sup>前例が居る以上、本音を言えばあまり関わりたくない。

そんな奴に一般常識から教え込まなければならぬのだ。必然、担当の人間は日替わりになった。

治療と言ってもやっていることはネギの視線を左右に動かしながら、トラウマになっていく体験を喋らせるだけなので、人の記憶を取り扱うこともある教職員にとっては難しいことではない。

なので担当は日替わりでも問題ないのだ。

このような素敵待遇でも意味を理解出来ないネギは不満一つ零すこと無く、教師の指示に従って常識を学んでいく。並行して魔力コントロールの訓練も。

魔法バレのそもそもの原因はネギのくしゃみによる武装解除が大きい。

こんな基礎も出来ずによく首席卒業出来たな。

麻帆良もヤバいけどメルディナも相当ヤバい。

ていうか、これもう魔力封印したほうが早くね？

という無言の圧力を一厘足りとも感ずること無く、魔力コントロールに精を出すネギ。

その甲斐あつてか、魔力の暴発回数は格段に減った。減っただけで零にはならないのだが。

そうして、また今日も同じような毎日の延長になるのかと、ネギも明日菜ものどかカモも思っていたのだが、この日だけは違ってい

た。

午前中の出来事。本日担当であったガンドルフィーニの携帯が声高に独唱を始めたのだ。

画面に表示されている発信先は学園長。また何か結社間で問題が起きたのかと辟易しながらガンドルフィーニは通話ボタンをPUSH。

「もしもし。何ですか学園長？ ……は？ 磔？ …… …… なッ！

一般学生がですか！？ 分かりました。すぐに向かいます」

学園長の話を聞いているうちに纏う空気が一変。ガンドルフィーニからは余裕が消え去り、間髪入れずに他の魔法先生へ連絡をとる。

「ああ。ネギ君。少し急用が出来てしまったんだ。代わりの人が来るだろうから君たちはここを出ないように」

携帯のコール中、全員が揃っているネギたちに手早く言い付けをし、ガンドルフィーニはこの場を去って行く。

当然、残されるのはネギを筆頭にした三人と一匹。

「出ないようにつて、私たちだけじゃドアは開かないようにしてるくせに」

居なくなった途端に悪態をつく明日菜。ずっと閉じ込められっぱなしだった為、この環境に嫌気が差しているのだろう。

本当に嫌気が差しているのは学園で働く関係者。関東魔法協会に甚大な損害を与えたにも関わらず、牢屋に入れられないだけまだマシ

だ。

「夕映、心配してないかなあ……」

その横では親友のことを思うのどかの姿が。

学校は無断欠席でなく、適当な理由が付けられているものの、やはり何の連絡も取れなくては疑問に思う者も居る。

まあ、この三人と一匹の共通の友人の中には『帰ってこない？ じゃあゴールデンウィーク中は兄の家に泊まるんで』と、詳しいことは何も聞かず即座に切り返した者も居たのは余談。

「学校くらい通わせてくれたっていいのに。魔法なんてバラすつもりないんだから」

「でもなあ。元々一般人だった姐さんや嬢ちゃんが巻き込まれたのは兄貴の不注意だから、その点は信用されてないんじゃないか」

カモの一言によりたちまち居心地が悪くなるネギ。その点ではなく、全てにおいて信用を失墜していると訂正を入れる親切な人は居なかった。

「い、今は特訓して、暴発みたいなことはほとんどなくなっただよ」

魔法学校を卒業しておいて『ほとんど』というのはかなり問題がある筈なのだが、たった数日間魔法と関わる上での常識を学んだばかりの彼女たちには分かる筈もない。

やはり第一印象は大切だ、と思い知らされる。

明日菜ものどかも初めて会った魔法使いが、こんな非常識な腐熟者でさえなければ、真つ当な道を歩めただろうに。

まだ面と向かって話したことがある魔法使いがこの学園の関係者だけというのも残念極まりない。

多種多様な人材を集めたところで、立派な魔法使いという一括りに纏めることが出来てしまうのだから。

魔法使いを判断しようにも、ネギを基準に置いて、振れ幅の両端には正義の魔法使いが位置している。協会 の人間からしたら失笑ものだ。

同じクラスの一部の者からは「人生楽しそうだね」と褒められるに違いない。

魔法に関する常識を身に付けたところで、魔法の意味を理解していなければ彼女たちに未来は無くなってしまふ。

そして、そんな彼女たちを救う救世主が現れた。

関東魔法協会の本部と言っても、その過半数は連日の過労で疲れ果てている。更にここに居る魔法使いたちは全員が戦闘要員というわけではない。

主戦力である高畑・T・タカミチは出張先での難題にしばらくは帰って来れず、残りの戦闘に長けている教師陣も今朝発見された普通では考えられない変死体の犯人確保に赴いている。

つまり、今この戦力は通常と比べて半減どころの話ではなく、四分の一も無い状態。

始まりは何かを瓦解させる破砕音だった。

切り替わる。

日常が異常に。平穏が騒乱へと。

気付けば、安息の地が戦場に早変わり。オセロの盤面だってもう少し頑張る。

「え？ な、何？ 今の音」

明日菜が困惑の声を上げる。しかし、その問いに答えられる者はこの場には居なかった。

これが陰陽師や論理魔術師なら逃げの一手を打ち、現状を把握するまで自分の身を守るだろう。殺人鬼や吸血鬼ならば施設の風通しを絶望的に良くするかもしれない。

少なくともここで何もしないなんて選択肢はあり得ない。

しかしそれも、まともな実戦経験の無いネギたちには期待出来そうになかった。

教えようにも『人の家に勝手に上がるな』という一般常識から教えなければならぬ人間に戦闘のいろはなんて教えている筈がない。



ネギたちの居る部屋に？カツカツ？と一定の間隔で靴が床を蹴る音が響いてくる。走るでも慌てている足音でも無い。淡々と歩を進める足並みだ。

そのメトロノームをジツと、誰一人動こうとせずには聴き続ける。単調な音は段々と大きくなり、誰かが近付いて来ているということのみを認識させる。

カツンッ

それを最後に、緩急の変化すらなかったBGMが途絶える。

代わりに流れてきたのは？ガチャリ？とドアを開ける音だった。

先程ガンドルフィーニが出て行ったドアから、白基調の部屋を浸食する黒色が混じり込む。

その黒色は初老の男性の姿を象っている。

つばの広い帽子もコートも手袋もブーツに至るまで、身に付けているものは全て黒一色で統一されており、頭髮と髭のみが白く染まっている。

そんなモノクロ男はコートの左袖部を不自然に靡かせ、部屋へと踏み入る。

左袖の軌跡を見れば、如何に社会常識が欠落したネギであろうと、目の前の男には肩口の辺りから左腕が失われていることが伺える。

「確認するが、君がネギ・スプリングフィールド君でいいのかね？」

「え？ はい。そうですね……」

開口一番にそう尋ねてきた男にネギが答える。

「ああ。良かった。万が一にも人違いが起きれば大変だ。……ふむ。重ねて聞くが、そちらのお嬢さんがカグラザカアスナ嬢かね？」

次に男は視線を明日菜へと向ける。

「は、はい。……貴方が次に来る先生の方ですか？」

真つ当に思いつく疑問を投げかけてみるが、得られた回答は予想の斜め上をいくものであった。

「私はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵。あくまで没落貴族の身であつて、教師ではないよ」

「は、はあ……」

右手で帽子を取り、にこやかに自己紹介をするヘルマンだが、聞く側としては生返事しか返せない。

「それで、ヘルマンさんは僕たちに何か用事があるんですか？」

要領が掴めず話を促すネギにヘルマンは大仰に頷いた。

「ああ、あるとも。では手始めに、そちらのカグラザカアスナ嬢を拐かさせてもらおうか」

言うやいなやヘルマンの行動は極めて迅速であった。ネギたちが間の抜けた返事をする間もなく、一瞬で距離を詰め、ネギの無防備な側頭部へ回し蹴りを叩き込む。

「ギ  
」

蛙を轢き潰したような音と共に蹴り飛ばされるネギ少年。

死神の鎌を彷彿させるような鋭い回し蹴りは、命を刈り取るとまではいかなくとも、意識を奪うには十分である。

ネギは一度壁にバウンドし、床に伏せたまま起き上がる気配は無い。

立ち上がっている明日菜たちは、嫌でもその光景を目で追ってしまふ。その結果、目前の老紳士に隙を与えることになったとしても。

そしてヘルマンは、続けるように無駄のない洗練された動きで明日菜の背後に回り、後頭部に右手刀を入れた。

「おっと  
」

崩れ落ちる明日菜を咄嗟に右手で支えるヘルマン。

「やはりこういうとき片腕は不便だな。他称臆病者に自称世界最弱め。今度遭ったら覚えていろ」

軽く毒づきながらヘルマンは震えるのどかとカモを一瞥する。

見据えられ一歩後ずさるのどか。カモは必死に生き延びる方法を模索する。

「何、手加減はした。ネギ君はすぐ目を覚ますだろう。彼女を返して欲しくば、学園中央の巨木の下にあるステージに來いと伝えてあげてくれ」

明日菜を肩に担ぐと、ヘルマンはそう言い残し、この部屋から立ち去って行く。置き土産とばかりにドアを蹴り破って。

ヘルマンが去ると緊張の糸が切れたように？ぺたん？とのどかは床に座り込む。

「お、おい嬢ちゃん！ 放心するのは後にしてくれ！」

カモの声でハツと我に返る。

「ネ、ネギ先生！？」

ネギに駆け寄るのどかだがそれもカモに諫められる。

「あのおっさんも言ってた。兄貴は気を失ってるだけだ。それよりも早く誰かに知らせねーと」

「で、でも……」

「俺っちたちがここで悠長に過ごしてる間に姐さんがもっとヤバイ状況になってるかもしれないんだ」

「う、うん。大人の人に知らせてくる」

そして部屋の外に出ると、備品が廊下を転がっていたり、所々壊れ

ていて、荒れ果てた光景を少女と小動物に見せつけた。

それでも残っていた職員に、今しがた起こった出来事を正確に伝えることが出来ると、のどかはすぐに元居た部屋に駆け戻り、ネギの介抱を始める。

程なくしてネギは無事に目覚めた。

「ネギ先生。あの後、明日菜さんが……」

のどかとカモの一人と一匹でネギが気絶した後の出来事を簡潔に述べていく。

「それで、今学園で他にも事件が起きてるらしくて、すぐに明日菜さんの助けには向かえないって、ここに居る先生が」

「そ、そんな……」

顔を伏せるネギ。しかし、それも僅か数秒で意を決したように顔を上げる。

その意図は誤解なくのどかとカモにも伝わった。

「ダメですネギ先生。他の先生が来るまで待った方が」

「そうだぜ兄貴。ここは兄貴一人が行ってもどうにかなる問題じゃねえ」

一人と一匹はその蛮行を阻止しようと声をかけるが、ネギは首を横に振る。

「こんなところになんて居られない！ 僕は一人で行く！」

亀裂の入った杖を握り、ネギは一人駆け出した。ギリギリでカモが肩に乗れたのは僥倖だろう。

目指す行き先は世界樹前の広場。

第六二話：暇じゃないんだ（後書き）

べ、別にテストの点と同じくらい登場人物を血に染めてやろうなんて考えてないんだからっ！

## 第六三話：All your base are belong to us

人間誰しも適材適所が存在する。

得手不得手。その人物の特技・長所などで、収まるべき場所は大きく違ってくるだろう。

この日はゴールデンウィークを飾るのに相応しく、キャンバスには白よりも青の比率が多い快晴。

学生が大半を占める学園都市だからか大型連休には普段以上の、しかし普段とは少し違った活気が溢れている。

そんな賑やかな青空の下では、一人の少女が得意不得意も特技も長所も関係無い場所に収まっていた。

その少女の名を神楽坂明日菜といい、彼女が収まっている場所を、人は人質と呼ぶ。

場所は学園中央にある世界樹前の広場。

そこに設置されたステージの上に手足の自由と意識を奪われて転がされている。

他に明日菜が拐われたときと異なっている点といえば、首からペンダントがかけられていることだろうか。

そして、誘拐犯である悪魔　ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵はと言うと、特に何をするでもなく、時が来るのをた



だ静かに待っていた。

「……んっ」

そんな中明日菜の意識が覚醒する。

「やあ。お目覚めかな、お嬢さん」

寝起きの所為か、ぼんやりと頭を巡らす明日菜だったが、ヘルマンの一言により現状は悲しい程鮮明に認識できた。

「ア、アンタねえ……!!」

今にも掴みかかりそうな剣幕でヘルマンを睨む。手足を縛られていなければ本当に掴みかかっていただろう。

「いや申し訳ない。本当ならもう少し趣向を凝らしたいところなのだが、生憎これでは時間が掛かりすぎてしまっただね」

言って、ヘルマンは腕の通っていないコートで左袖を揺らす。

「部下も居たには居たんだが、アレに皆殺しにされてしまっし、その連れには左腕を奪われるし、全く六年前は散々な目に遭ったものだ」

遠くを眺めながら物思いに耽るヘルマンであったが、そんな事情は神楽坂明日菜には関係ない。

床に這い蹲りながらヘルマンを睨め上げる。

「私とネギに手を出して、何が目的なのよ！」

情報を引き出すには最悪の態度と交渉術だが、口止めをする必要はないのか、時間が来るまでの退屈凌ぎなのか、ヘルマンは明日菜の問いに答える。

「なに、少し仕事でね。主な目的は『学園の調査』だが、この場合は『ネギ・スプリングフィールドとカグラザカアスナが今後どの程度の脅威になるかの調査』と言った方がいいかね」

「な、なんで私とネギの名前がここで出てくるのよっ！」

「あくまで私は調査の依頼を頼まれただけだ。詳しい事情は知らないね」

きっぱりと言い切る。

その返答からは嘘偽りは感じられず、本当に頼まれただけでこんなことをしでかしたのだと明日菜に認識させる。

「じゃあ、アンタは頼まれたってだけで誘拐までしたの……?」

「そういう生業でね。どちらかと言うと生き様か？ まあ、当分は助けは来ないだろうし、他に聞きたいことはあるかね？」

実を言うと、私も暇を持て余しているのだよ。

そんなことを囁くヘルマンであるが、直前に言ったセリフの所為で、明日菜の耳には入っていない。

「助けが来ないって、どうして!？」

「この街は本当に愉快的な場所だね。特に今日この日は、輪を掛けて喜楽に満ちている」

「……えっ？」

今まで律儀にも、質問にちゃんとした回答を返していたヘルマンだが、ここで初めて、一見すると関係の無い話題を口にした。

「私程度では足元にも及ばない実力者らがちょうど学外へ出かけており、この学園自体も政治的、経済的、更に今朝は死人が出たりと直接的に危険を孕む問題もいくつか出てきたようだ。」

時系列で述べるならお嬢さんの誘拐は最も新しい出来事となる。分かるかね？ つまり、すぐに人員を割ける程、余裕が残っていないのだよ。この学園には」

「……まさかアンタが、全部やったの……？」

「いやいや。それは誤解だ。私は強者の不在を狙い、偶然起こった事件に便乗したに過ぎない。これが誰かの意図ならば、人の左腕を嬉々として奪っていくぐらいの性悪が居なければ起り得ないだろう」

真犯人は別に居る。例え仮定だろうとそんなことを言われても、明日菜には助けが来ないという現状がひっくり返ることはない。

幸いにも、ヘルマンが直接明日菜に危害を加えようとする意思はないらしく、暇な為かこうして話にも乗ってくれている。

出来ることならこのチャンスを活かしたい。

そうは思つものの、手足を縛られて出来るのは、ステージの上を転がるくらいだ。そんな状態で逃げ出す機会を作れる筈もなく、結局は時間の流れに身を任せるのみ。

『止まれええええええ』と叫びながら走ったり、『跳べよおとおおおっ！』と吼えながら過去の携帯へ電話を繋げ、記憶データを上書きすることが出来ない明日菜にタイムリープする力は備わっていない。

勿論、葬儀屋新入社員になり遺品に触れてもタイムリープ以下同文。出来る可能性があるならば、それは白い営業生物と契約することぐらいであるうか。エントロピーを凌駕するかは別問題として。

しかし、別に時間跳躍がしたいわけではないのでこの話はここで終了。

かんわきゅーだい。

明日菜は抵抗も反抗も出来ずに、囚われのお姫様役にハマリ続けている。自力で脱却する術は見つかりそうにない。

自力で駄目ならば他力に頼るしかないであろう。そして、それを現実にしたかのように、

「…………ふむ。思っていたよりも早かったね」

と、ヘルマンが呟いた。

ヘルマンが見つめる先へ明日菜も視線を向ける。

青と白の二色からなる絵画には、いつの間にか黒い点が生じている。

一刻。一秒。一瞬。経過する時間に比例するようその点も次第に大きくなる。

近づくにつれ、それが本来持つ色彩と形容がハッキリし、黒い点は杖に跨った赤毛の少年へと変貌を遂げた。彼女が仮契約をした主ネギ・スプリングフィールドの姿へと。

そしてネギは手を掲げ、『魔法の射手』を放つ。属性は風。牽制を目的とした捕縛魔法である。

しかし、ネギの放った魔法はヘルマンに触れる直前に掻き消された。神楽坂明日菜の首にかけられたペンダントが光ると同時に。

「あつっ……」

明日菜が呻く。

だが、そんなことヘルマンは気にも留めないし、ネギの耳に入るには距離が開きすぎている。加えて、魔法が掻き消されたことに焦燥を隠しきれないネギは、明日菜の変化に気付ける筈もない。

「どうしてこんなことをするんです!?! 貴方の目的は!?!」

直線距離にして凡そ二十メートルの観客席の上に降り立ったネギは、ヘルマンに問い掛ける。

「目的ならば後でこのお嬢さんから聞いてくれたまえ。同じ話を繰り返すのは些か面倒なのでね。」

私からの条件は一つ。彼女を返して欲しくば、私を全力で倒してみろ。どうだね？ 実にシンプルだろう？」

ハツハツハツと快活にヘルマンは笑う。

「……貴方を倒せば、明日菜さんを返してくれるんですね」

「ああ。約束しよう」

既に一度、初対面で実力行使に出ているヘルマンに対して、ネギは遠慮をするつもりはないようである。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル」

詠唱を始めるネギ。前衛も居らず、敵前で止まったまま詠唱を始めるなど失笑ものであるが、ヘルマンは敢えて行動を起こすこと無く、魔法の発動を待つ。

「『白き雷』」

詠唱が完成し、ネギの手から眩い光が迸る。

殺傷力を秘めた光は、ヘルマンを消し炭しようと、二人を隔てる空間を突き進む。

しかし、ヘルマンに届く寸前。またしてもネギの放った魔法は掻き消されることとなる。

「なっ！？ ど、どうして……？」

ヘルマン自身は何のアクションも取っていない。それなのに一度ならず二度までも、魔法がヘルマンに届くことは叶わなかった。

この不可解な現象をただの障壁だと判断を下すことが出来ればどれだけ楽だっただろうか。

障壁に当たって弾けるのではない。ヘルマンに届く直前、魔力そのものが霧散するのだ。

自分の勘違いなどではない。現にネギの肩に乗っているオコジヨ妖精 アルベール・カモミールもまた、ただの障壁ではないと告げている。

そして先程と違い、今回明日菜を襲った変化にネギは気付く。

「く、ああああっ」

と、光るペンダントに呼応するように、苦悶を上げる明日菜はステージの上で身を仰け反らせる。

「あ、明日菜さん！」

何がどうなっているのか分からない。

そんな感情を表して名前を呼ぶネギにヘルマンが話し掛ける。

「魔法無効化能力というヤツだよ。今回は私が逆用させてもらって

いるが、君たちも心当たりがあるのではないかね？」

心当たりなら山ほどある。

しかし、だからこそ。この状況は最悪と呼べた。

それはつまり、ヘルマンに対して放出系の魔法は通用しないということなのだから。

この時点でネギが持つ手札は全て封じられてしまったのだ。今まで身体を鍛えるということをしてこなかったネギにとって、これ程戦い難い状況はない。

そんな中、使い魔のオコジヨ妖精は冷静に声を上げる。

「兄貴。少しの間持ちこたえてくれ」

確証はないが、原因は明日菜の首から下がっているペンダントだと推定したカモはネギの肩から飛び降りて、明日菜の下へ向かう。

残されたネギは一人でヘルマンと対峙することになるが、開いている距離は約二十メートル。

肉弾戦の出来ないネギに勝ち目はなく、明日菜を奪い返し逃げることにしか選択肢はない。

「どつしたネギ君。来ないのかね？　なら、こちらから行かせてもらおう」

そう言って、ヘルマンは右腕を構える。同時に右手に込められる魔



力。身体を引き絞るようにして拳に乗せた魔力を解放する。

二人の間には二十メートルの距離があった。

だが、先程のネギと同じように　否、それ以上の威力を持って、ヘルマンの放つ攻撃はネギを襲う。

ネギが拳から放たれた魔力を避けることが出来たのは、僥倖というほかないだろう。

身の危険を肌で感じ、咄嗟に跳んで回避するも、まともな戦闘の経験が皆無であるネギは着地に失敗し、？ごろごろ？と観客席を転がっていく。

一回転する度に座席の段差に全身を打ち、打撲傷が次々と増えていった。

自分から跳び込んでしまった所為か、勢いは止まることを知らず、ネギの三半規管が平常を捉えた頃には、観客席の一番下。つまり、ヘルマンの目と鼻の先まで近付いてしまっていた。

「あ……ぐっ……」

全身が痛む。関節が軋む。それでも、フラフラになりながらも、杖の本来の用途を用いてネギは立ち上がるうとする。

地べたに這い蹲った状態から片膝を付き、杖を支えに立ち上がるうとした。その瞬間である。

ベキンッ

と、手元から致命的な音が立ち、バランスを崩したネギはもう一度地面に手を付くことになった。

「……………えっ？」

ネギは呆然とした声を上げる。理解が追いつかない。いや、理解することを拒否している。視界に収まるのは、手の中とその周辺に散らばった残骸。

元々、寿命は来ていたのだ。先日彩輝の家を訪れた際に人工精霊によって杖に大きな亀裂を入れられた。

そんな杖を手にとって、三十段近い段差を転がり落ちたのだ。段差の角に力強くぶつきたりもしただろう。椅子の間に引っ掛けて尚、勢いは止まらずに転がり続けたりもしただろう。

その無茶な責め苦の結果、父<sup>ナキ</sup>から子<sup>ネキ</sup>へと受け継がれた杖は、子供の体重すら支えることが出来ずに、天寿を全うしたのだった。

ペンダントの効力により苦しみ喘ぐ明日菜も、その明日菜を解放しようとするカモも、我を忘れてその光景を見るしかなかった。

「……………巫山戯ているのかね？」

ヘルマンの冷たい声音が風に乗ってネギの耳にも届く。

だが、鼓膜を振るわせたとしても、ネギ自身に言葉は届いていない。呆然自失。戦意消失。そんなネギを見てヘルマンは深く溜め息を吐いた。

「話しにならない」

そう呟いたヘルマンはステージの上から姿を消し、気付けばネギの背後へと移動していた。

ヘルマンが明日菜から離れた今、カモは明日菜からペンダントを取るが、果たして意味はあるのだろうか。

「君の目的はカグラザカアスナ嬢の奪還だろう。このまま終わるつもりかね」

ほぼ真上からヘルマンの音が落ちてくる。しかしそれでも、ネギは如何なる反応も見せなかった。

「期待はずれだよ」

ヘルマンはネギを力強く蹴りつける。宙を舞うネギは空中で三回転はすると、地面にワンバウンド。そしてちょうど明日菜とカモの目の前に来る位置で停止した。ナイスシュート。

「全く。私はこれでも君が六年前の雪の日からどれだけ使えるようになったのか、楽しみにしていたのだよ？」

呻きながらヘルマンを見るネギに、そう声をかける。

そしてネギの視線から逃れるように、ヘルマンは帽子で一度自らの顔を隠した。

帽子を胸の前まで下げるとそこに人の顔はなく、代わりに一柱の悪

魔が立っていた。

「あ……ああつ……！」

「ああ、良かった。反応を見る限り忘れてたわけではないようだね。てつきり、過去を忘れて安穩と暮らすことを選んだのかと思ったよ。

そうだネギ君。目に焼き付ける。私が村人たちを石に変え、君の村を壊滅させた 仇だよ」

タガが外れる、音がした。

床に手を付く。それと同時に嘔き上がる今までとは桁違いの魔力。

だが、急にやる気を出したところで、全てが手遅れだった。発動媒体を持っていないネギに魔法を使うことは出来ず、武芸の心得の無いネギには嘔き上がる魔力を身体強化に回したところで活かすことが出来ない。

そして、もつと致命的なことに、ヘルマンが口を開いたのだ。魔力を集中させて。

ネギが立ち上がるよりも早く、ヘルマンの口から光線が放たれる。その特性は先程ヘルマン自身が述べたように、石化である。

光線は瞬く間に二人と一匹を飲み込んだ。明日菜の魔法無効化能力はカモにペンダントを取られたことによって、普段通り彼女のみを守るだけ。

抵抗する術もなくカモは全身を、ネギは右腕の肘から先を永久石化されたのだった。

「アアあアアあアアアツッ！！」

しかし、石化の攻撃を受けても止まらなかつた者が居た。立ち上がり、床を蹴る。ネギは己のことなど顧みず、ヘルマンに特攻を仕掛けたのだ。何もかもが足りていない。

ネギに足りないもの。それは、情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ。そしてなによりも 速さが足りない。

ヘルマンは実に緩慢な動作でネギが突き出す左拳を払う。続けるように、そのまま突進してくるネギの右手を掴み持ち上げると、力の限り地面に向かって叩き付ける。

ゴキンッ

石が碎ける音。骨が折れる音。様々な鈍い音が重なって、広場に重低音を響かせた。

「依頼人には最低の報告をするしかないようだね」

シラけたように呟くと、もうやり残したことはないと言うように、ヘルマンは麻帆良学園から立ち去った。

残されたのは血反吐を吐くネギと、もう二度と動くことのなくなった小動物。そして、手足を縛られ、そんな一人と一匹を見ることが出来ない明日菜。

だから最初に言ったのだ。人間誰しも適材適所が存在する。

得手不得手。その人物の特技・長所などで、収まるべき場所は大きく違ってくるだろう。

ただ野菜ネギの収まるべき場所は保冷室だっただけの話である。

そして、そんなことが起こっていたなんて露知らず、ゴールデンウィーク最終日に全員が揃った彩輝宅。

「ダーレクとサイバーマン巻き込んでちょっと戦争してきたぜ」と彩輝。

「ターデイスとソニックスクリュードライバー作ってました」と茶々丸。

「ロプノール湖で春蘭さんに会いましたよ。あの人親近感湧きますね!」とさよ。

「雪達磨大師像を拾ったんやけど、どうすればいいと思う?」と木乃香。

そして『戯言でずけごとだけどなっ!』と締める千雨・エヴァ・刹那の三名。

「じゃあ あ、真面目な話に移っていい い」と朱織が仕切る。

ぐったりとソファに倒れながら、指にチェーンを引っ掛けて、ロザリオを?ぐるぐる?と回しながら。

「あー彩兄。まあ、何か、色々あってさ あ、コレ、深識にでも

渡しといてよ」

そのまま遠心力を利用して彩輝の居る方に投げ渡す。

放物線を描くロザリオは彩輝の手の中に収まった。

「おう。縁が合ったらその内な」

返事をしつつ、どんな日く付きの物が見定めると、『倉庫』の中へと収納。

代わりに中から釣鐘草が描かれた一枚の絵画を取り出した。

見るものに生きていると錯覚させるような鮮やかな色彩。陰影のつけ方なんて、額縁の向こうに一つの世界が広がっているのではないかと思わせる。

はっきり言って、見惚れてしまう。

「友達になった画家から貰ったんだ。枯らすなよ」

「えっ。枯れるの？」

当然の疑問を聞き流し、彩輝は絵を壁に飾る。

その背後からさよが一言。

「釣鐘草。花言葉は確か 感謝でしたっけ？」

「正解。他にも上を向いて生きるっていう彼なりの意思表示も含ま

れてるだろっね」

掛け終わり椅子に座る彩輝に次は千雨が話し掛ける。

「なあ彩輝。この学園への入学希望者が一人居るんだが、捻じ込め」

「オーケー」

なんとも横暴なオーダーであるが、彩輝は即答で返す。いつものように気負うこと無く請け負うのであった。

「でもいいのかよ？　ここはある意味牢獄だってちうちゃんが身を持って体験した場所だろ？」

「確かに、異常が普通を喰い潰すここはイカしてるけどな。最初から異常な奴が『普通の学校生活』を送れる場所なんて、ここしかないだろ。」

それに、住めば都。一緒に馬鹿をやれる連れを見つけちまえば、ここも存外　悪くない」

漢数字の九って書いてイチジクって読むんだな。初めて知ったよ。とシニカルに笑いながら、まだ十年程度しか生きていない少女のプロフィールを彩輝に手渡す。

「で、木乃香と刹那は何か要望ないわけ？」

最後の二組には、彩輝の方から話を振る。

「ん。後で別荘借りるえ。それと井桁組むの手伝って」



送ってあげたい子が居るんや。

彩輝の問い掛けに返事をしたのは木乃香であった。

それに彩輝は快く了承の意を伝える。

そんなわけでゴールデンウィーク最終日。学園長から協力要請があつても、既に一つ二つ案件を片付けた彼らが、学園の手伝いをすることはなかつたのであつた。

第六四話：「ばいばい、アナロ熊」(前書き)

ヨスガにソラってるPart2

## 第六四話：「ばいばい、アナロ熊」

あと数時間で休みが終わろうとしている。

ゴールデンウィークという名の大型連休が今まさに終わりを迎えようとしているのだ。

気候もだんだん夏の到来を示唆し始めて、日の入りまでの時間も長くなつたが、夕焼けが映える時間帯なんてとっくに過ぎ去ってしまったあと。

天体は黒いベールに包まれて、その上に？綺羅綺羅？と輝く宝石が地平線の彼方まで散りばめられている。

今頃は地球の裏側を明るく照らしているであろう太陽光を、反射して届けようとしている健気な丸い鏡が一際目立つ。

月光は夜の麻帆良学園を照らし出し、別け隔てなく全ての家屋に光を届ける。

そのおかげで、室内の電灯を点ける必要もなく、最低限の視界を確保出来ているのだが。

あ。どうも。近衛彩輝です。ガラスの水面に映る月が風情を出していると思います。

ベッドが窓際にあるという部屋の間取りの所為で、足を伸ばし、かなりリラックした姿勢で一口、グラスに注がれた琥珀色の液体を呷る。

何をしているのかと問われれば、月見酒の真っ最中。ここは桜が来るまでこいこいを連呼すべきだろうか。まあ、そもそもスキが無いから月見酒自体揃ってないんだけどね。

ははっ。うっかりうっかり。

更にグラスを傾けて？ゴクゴク？と喉を鳴らす。心地の良い刺激が口内に広がって、最後は胃に収まる。

ふう、と息を吐く。そんな微細な音すらも、この静寂では大きく響いて空気の中へと溶けていく。

今部屋に居るのは俺一人。リビングとか共用の場ではなく、自室なのだから当たり前だが。しかし、こうなるとチャチャゼロでも連れてくれば良かったかな、なんて考えてしまう。

折角の休日を休むために使わずに、見合いを初めとして終始馬鹿騒ぎに興じていた所為か、話し相手が欲しい。

自室での月見酒はここでお終いにして、リビングに行ってみますか。エヴァかチャチャゼロは居るだろう。いや、寧ろエヴァの方から誘われそうだな。今夜の月を見る限り。

夕食を取るまではいつもの面々が全員揃っていたのだが、流石に辺りが真っ暗闇になると寮生たちは帰って行きました。

さて、と。月への注目解除し、明かりを点けていない為か色彩が限りなく白と黒の二色に近付いている自室へ視線を動かす。

シルエット化が成功した室内で動くものは俺一人。ベッドの上で足を伸ばしていたが、そこから四十五度左へ腰を回転させ、床に足を付ける。

グラスの残り四分の一程度の酒を嚙下して、立ち上がる。

そして、リビングまで向かおうと目先の扉を開こうと踏み出した。はじめのいっぽ。？ガチャリ？ダルマさんが転んだとても言いたげな、狙ったかのようなタイミングでドアが開く。

「わ。暗っ」

ドアが開いた隙間から？にユツ？と手が伸びて電灯のスイッチをONにした。

一瞬で色彩を取り戻す室内。ドアを開けて入って来たのは

「何してるん、兄様？」

妹でした。予測通りエヴァが酒飲みに来たのかと。

「ナイスタイミングだ木乃香。ちょうど今ソツチに行こうとしてたんだよ」

さっき寮生は帰ったと言ったが、休み中に家族が親族の家に泊まることの一休何が悪いんだ？ 異論は認めない方向で。

蛍光灯の光に包まれて全身を晒す木乃香はアイロン掛けされ皺も無く、シミ一つ無い真っ白なYシャツを着ている。上二つのボタンは留められずに放置。

大きさが合っていないのか、シャツは少しダボついて、袖は肘のところまで捲り上げられている。ていうか、俺のシャツだった。

下半身の肌を隠す布地は極端に少なく、シャツの裾からは？スラリ？とした剥き出しの太ももが覗いており……ていうか下着一枚だった。俗に言う裸Yシャツというヤツだ。

くらっときた。

暗闇に目が慣れていたからだろう。光が眩しすぎて直視できない。

うわーお。妹様に後光が差していらっしやる。そうかあ。ウチの妹は神だったのかあ。それなら大丈夫だな。神の兄妹観なんて障子紙より薄っぺらいもので

「兄様、大丈夫？」

木乃香が肩を揺らしてくる。

「気にするな。見蕩れてただけだから」

「そのまま惚れてもいいんやよ？」

「それはない」

挑発的な笑みを浮かべていた木乃香だが、途端にムスツとした表情に早変わり。

いや、客観的に見てもウチの妹が世界で一番可愛いのは周知の事実

だが（主観120%）、今更惚れた腫れたの関係じゃないでしょ、俺たちは。

さて、そんなことよりも。普通ならまず最初に聞いておかなければならない質問をしようか。

「その格好はどうしたんだよ？」

「うん？ ああ、これ？」

言って、自分が着込んでいる衣服を見下ろす木乃香。

「お風呂上がりでちょうどいい服借りたえ。……アカンかった？」

上目遣いでこちらの意向を尋ねてくる。

確かに木乃香の髪は完璧に乾かしきれていないのか、少しばかり水気を含んでいるようだ。

加えて、仄かにするシャンプーの香りが鼻腔を攪り、色白の細い首が、健康的な印象をあたえる鎖骨が、無造作に留められたボタンのおかげで開いたシャツの隙間から覗く胸元が、悉く反対意見を封殺していく。

と言っても、異議なんて最初から無いのだけれど。なので返答は、

「全然オツケー。寧ろありがとう」

そう俺がそう答えると、からからと木乃香は笑った。逆にその笑顔に俺の頭はくらくらと揺れる。社会に喧嘩売る意味で。

ちなみにここまで立ちっ放し。俺は先程立ち上がったばかりのベッドの上へまた腰を下ろすのであった。

一応椅子だつてちゃんとあるのだが、最近部屋で木乃香と一緒にときは、ベッドで隣に並んで座るとというのが定型化しつつある気がする。

「急ぎの用があるわけじゃないんだよな？」

俺の左に座った木乃香に話かける。

「うん。遊びに来ただけ」

「じゃあ何で遊ぶ？」

「兄様」

「ひどいッ！俺との関係は遊びだったなんて!!」

「ウチの憩いの時間を取り上げるって言うんか、兄様は!!」

「だったら妥協案を提案する。俺が木乃香で遊ぶから!!」

「ふたり一緒につて案が出ない辺り、流石ウチのお兄様」

終わりが一向に見えない言い合いに小休止を挿む。ただ話してるだけで、いつの間にか太陽が顔を出していそうな気がするからな。まあ、個人的にはそれでも構わないのだけれど。楽しいし。



連休明け？ ハッ。学校なんてサボっちまえばいいんだよ。授業と妹とのスキンシップ、どっちが大切かなんて言うまでもないことだ。木乃香も俺の意見に賛同するように？こてン？と俺に向かって倒れ込んで来た。後頭部を俺の腿の上に乗せて見上げてくる感じで。

「位置関係のチェンジ希望」

「却下。兄様はもう少し枕になってなさい」

木乃香は頬を緩ませ目を閉じる。何時ぞやのお返しに、瞼の下にある水晶体を舐め上げてやろうかといった考えが脳裏を過ぎったが自重。

ハンムラビ法典的にはやるべきなんだろうけど、汝右目を舐められたなら、左目にも要求するべきだと思います。妹は赦して愛さない。

ていうか、木乃香たんほっぺぶにぶにー。

指で木乃香の頬を突付く。張りと弾力があって、押ししても押し返さず。

さらに頬から首へと滑らかなキメの細かい肌をなぞる。

「んっ……」

擦ったそつに身を抜いて、木乃香は俺の指から逃れるように手を掴むと、

「はむり」

薄い唇を開き、人差し指を口内へと誘った。

人差し指を覆う生温かい感触。キヤー。タベラレルー。

「こりこり」

「甘噛み禁止やっちゅーに！」

「ぢゅー」

「吸うなっちゅーに！」

「ほは、るっしるっへいっくん？」

「まず指を啜えるのをやめなさい」

拒否するかのようになぐになぐにと口腔が蠢動する。それにしても木乃香の口の中、温かいなあ。

今俺の指は木乃香の内側に、口内という無防備な箇所へ触れている。そう考えると、目くじらを立てる理由が瓦解する。寧ろこのままでいい。

俺の手を掴んでいる木乃香の手を、掴まれている方の手で握る。この行為をどう受け取ったか木乃香は腕に力を込めるが、逆に好都合。

柔らかな唇に挟まれている人差し指を動かし、舌を優しく撫でてや

る。

「んあ……!!」

効果は劇的。今まで無抵抗だった分、突然の指激に口腔だけでなく身体全体を？ビクリ？と蠢動させる。

お互いの手は無駄に複雑に絡み合っていて、口内の指を力任せに取り除くには決め手に欠ける。顔を背けようにも、絶賛膝枕中の木乃香に逃げ場なんて無いも同然。

その間にも俺は木乃香の舌にのの字を書き連ねるのであった。

「あつ……に、にいひゃ……まつふえ、や、め……」

俺が呂律を回らなくしている所為か、舌足らずな静止を呼びかけてくる。可愛いなあ。

最早木乃香の口は閉ざされておらず、大きく口を開けている。指を引き抜こうと思えばいつでも出来る状態だ。だからこそ、ここで俺は中指の投入を試みる。

指を二本に増やし、更に木乃香の口腔を蹂躪する。

歯に爪が当たったり、歯茎にそっと触れてみたり、頬の裏側を撫で回す。

「あふ……うう、ああ……」

時間が経つに連れて、吐息と共に言葉として意味を成さない喘ぎ声

が漏れ始める。意思疎通の出来ない単語に意味なんてないだろう。なのに。その艶めかしい声を聞く度に、感情が昂ってくる。言葉にならない声を聞く度に、感情の静止が利かなくなる。

気付けば初めに指を啜えられたときよりも、口内は熱くなっていた。そこから吐き出される乱れた息も熱を帯びたかのよう。

体内の変化だけに留まらず、木乃香は火照った表情で見上げてくる。汗で張り付いたシャツは、成長途中の身体のラインをより明確にして、俺の目に焼き付けられる。

これは、自重すればよかったかも。

今更そんなことを思ったところで、もう遅い。堪え切れるか。

木乃香の舌を指の間に挟む。表と裏、両方から舌を摘む。剥き出しになっている柔らかな肉を揉む。

「ふあ、あ、あああっ！」

ぐにゅぐにゅ。うねうね。ぐにゅに。うぞうぞ。ぞくぞく。

強弱を付けて、緩急を付けて。木乃香の嬌声をBGMに、舌を弄り続ける。

お互い、相手の手を封じるために握っていた手は、既に離してある。木乃香の右手は俺の空いている手と指を絡めるように握り合い、左手は着流しの袂を握り締めて。

「こいひゃ……こいひゃま……」

焦点の定まっていけない眼差し。舌足らずな声で何度も「兄様」と呼んでくる。

堪らない。呼ばれる度に心が満たされる。気分が良い。気持ちが良い。幸福感が溢れてくる。

そしていよいよ、目の前にはボーダーラインが見えてきた。越えてしまえ！ 昂った感情が叫ぶ。

躊躇なんてするな！ アクセルを踏み込め！ その境界を、飛び越して行け！

それでいいのか？ 俺は構わない。でも木乃香が、世間から後ろ指を指されるようになってもいいのか？ そんな風に僅かながらに残った理性が囁いてくる。

「あ……」

その叫びを肯定したのか、囁きを肯定したのか。兎に角、俺は一度木乃香の口の中から指を引き抜いた。

唾液塗れの二本の指。一体どれだけ味わったのだろうか。指はすっかりふやけてしまっている。そこから唾液で出来た銀系が木乃香の口へ繋がっており、淫靡な光景を作り出す。

銀系が切れると、木乃香は膝枕をやめて、また俺の左隣へ座り込む。ふやけた指を手にとって、更に丁寧な舌を這わせながら。

「もっと」とねだるように熱の籠った視線が見上げてくる。その視線を受けると、くらくらと頭が揺れた。自分も熱に浮かされた錯覚に陥る。いや、錯覚なんかじゃない。

これがアルコールならば、とつくに泥酔状態だ。ステータス異常になって、リカバーの常連さんになっていることだろう。

「もう、終わりなん……?」

先程から動きの止まっている俺に、上目遣いで尋ねてくる。

可愛い。どうしようもなく。

どうしようもないくらいに、愛おしい。

この状況に、関係に、酔っているわけじゃない。ただ、俺が木乃香に溺れているだけ。窒息寸前の肺を水が満たすように、否応なく木乃香が俺を満たしていく。そしてこの水は、拒むのが億劫になるほど心地良い。今更常識なんて語るなよ。理性、ちよつと黙ってる。

「木乃香　！」

名前を呼ぶ。同時に指を木乃香の舌から逃がすと、華奢な両肩を両手で掴んでいた。

シャツ一枚の所為で強調される胸の双丘。シャツの裾から覗いている艶めかしい生足。扇情的な格好が初見とは違った見解を弾き出す。

いつの間にか左右に並んで座る位置関係は、上下に組み伏せる体勢へと変わっていた。妹を、押し倒している。

その事実で、柄にもなく背徳感に支配される。だけど今はそれ以上に、もっと、もっと木乃香を　　！

「兄様……！」

木乃香の手が伸びる。手は俺の頭の後ろに回された。手に力がこもる。引き寄せられる。抵抗出来ない。するつもりもない。その黒曜石のような綺麗な瞳に魅入ってしまう。

美麗で端麗で鮮麗で佳麗で秀麗で典麗で流麗で織麗で華麗で壮麗な妹様。普段から一緒に居る筈の木乃香が、今この瞬間は別人のように見える。血縁なんてどうでもいいと心の底から思ってしまった

俺は腕に力を籠め　　木乃香を

「おいハウル。前にオマエがちよろまかしてた酒がまだ残っていただろ。月を肴に飲むから寄越せ」

月に叢雲花に風。雰囲気ブチ壊しだよクシヨウ。ああ。知ってる？ G o g l e I M E って何故か『ふいんき』で変換出来るんだぜ。優秀すぎて気持ち悪い。

それ以上に、この熱気から、興奮から、冷めてしまった空気がなによりも気持ち悪い。放射冷却先輩、働かないで。お願い。

木乃香と共に第三者の声がした方へ顔を向ける。施錠を怠ったドアからは金髪幼女が室内へ侵入していた。

『倉庫』の中にある取って置ききの神酒を掴む。あ、いいなこの酒瓶。人の頭とか軽く割れそうじゃん。魔力で強化して、力の限り吸血鬼

に投げつける。

それを難なくエヴァはキャッチすると「若いからって程々にしとけよ」と先達のようなこと言って去っていった。

その背中に、

「『怨』」

と二重鉤括弧＋スタツカート付きで呪詛を浴びせる妹様。 ついでに、神酒には被えの力がある。好きなだけ苦しめ、吸血鬼。

そんなことよりも。問題はこの居た堪れなくなった空気をどう乗り切るかということだ。

「……兄様。ちょっと退いて」

「……あ、ああ。悪い」

未だ木乃香を押し倒している体勢の俺だったが、再び隣に並んで座る位置関係に戻る。

「……トランプでもするか？」

「うん。そやね。賛成。ついでに、何か賭けよ」

この一言で脱衣ポーカーやらキスババ抜きに類するゲームをするこ  
とが決定。

次は戸締りをしっかりした上で、ゴールデンウィーク最終日の夜は



もう少し続くのだった。

ていうかさ木乃香。俺、このままお前の『兄』でいられる自信がないよ。

なーんて、戯言だけど。

第六五話：「走れ、地デジカ」(前書き)

ヨスガにソラってるPart3

## 第六五話：「走れ、地デジカ」

「戦争をしよう」

ウチこと近衛木乃香は目の前に座っている兄・近衛彩輝から、そう、にこやかに告げられた。

「本気なん……？」

無駄だと分かっても、思わず聞き返さずにはいられない。マトモじゃない勝負をしたってウチが彩輝に勝てる確率は、限りなく零に近いんやから。

「本気本気。さっさと始めようぜ」

その目に偽りはなく、いつものように戯言を用いているわけでもない。

ならば、と。手の内にあるカードを思い浮かべる。これはほとんど運の勝負や。それ以外に勝つ手段があるならば、超短期決戦。六手を確実に、全て決めるしかない。

それを理解しているからこそ、ウチは大丈夫。もう一度、手札を確認する。奇を銜うことも裏をかく必要もない。このカードは絶対に負けはしないのだから。

「分かったえ兄様。臨むところや」

ウチの返答を聞いて、彩輝はけらけらと笑う。そして

「デュエル  
決闘」

「スタート  
開始！」

あ。トランプの話です。そんな注意書きが必要になりそうな掛け合いで、ウチと彩輝のトランプ遊びが始まった。

戦争。ルールは至って単純。裏向きにカードを重ねて一番上から二人同時に捲っていくだけ。そして、互いのカードを比べて強い数字の方が出したカードを獲得出来る。こうして相手から全てのカードを奪うことが出来れば勝ち。

カードの強さはA、K、Qと並んでいって、最弱は2。マークに強弱は無し。枚数はジョーカーを除く52枚やけど、流石にソレは面倒なんで今回の手札はよくシャッフルされ、適当に配られた十枚のみ。そして、この十枚の順番を好きなように入れ替えて出し合うと。

采配としては、彩輝がどのタイミングで強いカードを出すかをどこまで読めるか。後は単純に配られたカードの運の良さ。

当たり前やけどイカサマは無し。トランプを用意したのは彩輝で、カードを配ったのはウチ。その時にカード捌きが上手いって褒められたぜー！ いえー！

「どうしたよ木乃香。勝利の美酒に酔っちゃったみたいなおかしちゃって」

「気にせんといて。今から兄様をどうしてあげようか思案中なだけやから」

どうやら、つい笑みが零れてしまっていたらしい。まあ、ポーカーフェイスは大して意味の無いゲームやから問題なし。

問題があると言えば、ゲームが終わってからのかな。手札を全て奪われたら、戦争よろしく、勝者に大して何かを譲渡するという。

まず賭けを提案したのはウチやけれども、よく考えると手持ちの品が彩輝のYシャツとパンツだけだったというオチ。……うん。負けなければいいだけのことや。

斯くして一枚目。捲られたカードは、ウチがらで彩輝が。一応ウチの勝ちやけど、何か似たり寄ったりな順番になってそんな気がする。

「俺のターン！ ドロー！ セット森。茨の精霊召喚」

「ウチのターン！ ドロー！ セット沼。堕ちたる者、オブ・ニクスリス召喚」

「なあ木乃香。緑単色こそ至高だと思っただけ。リバー・ボア、ガイアの揺籃の地、怨恨辺りが」

「えー、そこは黒死病とラーズの死の奈落やろ。恐血鬼の利便性は目を瞞るものがあるね」

おい。デュエルしろよ。

そんな流れで迎えた五戦目。ここまで四勝。互いにカードを捲る。

ウチがAで、彩輝もA。

「ぬ」

「む」

何というか、本当に似たり寄ったりの順番になっていた。数字が被った場合はもう一度出し合うことになる。続けて出されたカードはウチがJ、彩輝がK。

「にゃー！」

「はっはっは。悪いなー」

目の前で纏めて回収されていく強力カードたち。……嗚呼、勝ち目無くなってきた。気がしてきた。

その後も恙無くゲームは進み、一巡目は六勝三敗一引き分けといった成績。数字の上ではウチが勝ってるけど、まだ手元に残ってる絵札は一枚だけとなってしまいました。もう負ける気しかせん。大番狂わせも無く、淡々とカードを捲っていく作業が続く。

「兄様には、ルピアの実力が分からなかったんや！」

「ドラゴン系に興味など無い。それよりギャザかデュエマか統一しようぜ。……まあ、これで木乃香の手札は0と」

そう言って、彩輝は二十枚全てを手の中に収める。対照的にウチの手の中にトランプは一枚足りとも残ってはいない。

「これでウチの遊びに来たという目的は達成されたし、ちょっと眠いからもう寝るね。おやすみ」

彩輝から言及される前に動く。足をベッドの外へ投げ出して、床に接触。重心を前へと移動させ、立ち上がるうとしたとき。

「まあ待てよ」

言葉と共に彩輝の腕がウチの身体を絡め捕る。背中から抱き着くように両腕を身体の前に回された。

「な、何かな兄様？」

彩輝の方から抱きしめてきた。少し驚くと同時に、エヴァちゃんの所為で冷めてしまった感情が再燃しかかる。

「まだ楽しい楽しい賭け事の時間が残ってたと思うんだけど」

耳元で囁かれる。間近で聞こえた声から察するに、少し首を振るだけで、彩輝の顔がありありと見えるようになるだろう。寧ろこの至近距離ならば、彩輝以外の物は目に映らないかもしれない。

こんなに近くに彩輝が傍に居るといふ事実を認識するだけで、ほんの少し脈拍が速まるのを自覚してしまう。

「あ、アレはエヴァちゃんが悪いと思うなあ」

「それには全面的に同意するが、言い出したのは木乃香からだぜ」

話を逸らし、ついでに責任転嫁を試みるも失敗。耳に息がかかって

擦りたい。

今まで眼球とか指とか舐めたり、結構危ない発言もしてきたけどな、恥ずかしいに決まってるやる！ 常識で考える！ ウチやって人並みの羞恥心は持つてるんや。彩輝のシャツに袖を通すときなんて、どれだけ緊張したと。

……いや、まあ。喉元過ぎれば熱さ忘れるというか、その場の勢いって怖いよね。

兎も角、妹であることのメリットは大きいと思う。ずっと一緒に居ても兄妹セットで扱われて、何よりも別れるとか縁を切るなんてことは普通起こり得ない。のけば他人にならないのが兄妹や。でも最悪、ずっと一緒に居たとしても、異性として見られてないっていうんはデメリットとして致命的やる。

そんなわけで今まで頑張って抵抗してきたけれども、彩輝の方から過度な接触をしてくることは意外と少ない。

数十分前に押し倒されたばかりやけど、アレはその場の流れとか雰囲気とか、色々過程や要素があって起こり得たことやし。勢いってこわいわー。

だからこんな風に、不意打ち気味に抱きつかれるのには、ほとんど耐性が無かったりする。

そもそも立ち上がるのを止めるなら、腕を掴むだけでもいいわけで。もっとそんざいに扱うならシャツの襟首を掴むとかもあるよね。そーういうのをすっ飛ばして、抱きしめられた。



どきどき。

『Yシャツ・呉服・礼服。驚きの白さに』っていうクリーニング店の売り文句を見たときぐらいに驚く心を落ち着ける。うん。こういうシチュは無いだけで普段からの行いと大差ないし。

「木乃香？」

でも滅多にないってことを考えると、まだ少し味わっていたくなつた。彩輝の腕に手を添えて、胸に凭れかかり身体を預ける。

すると、？キゅっ？と腕に籠る力がほんの少し強くなる。

「有耶無耶にして、賭けなんてなかったことにするならそれでもいいけど、何か意思表示してくれよ。嫌なら嫌でいいからさ」

俺的にはこのまま抱きしめてるだけで大いに満足。と彩輝は言う。

有耶無耶になんかはせんよ？ せんけど……ねえ？

「いや、兄様。世の中には国防省のコンピュータをハッキングしたり、飛行船の操縦をテレビゲームで覚えたりする人も居るわけで」

「ああ。リッキーのことが」

「リッキーやない。ミッキーや」

「勘違いされそうだから訂正を入れておこう。浦安周辺に居る二足歩行で図体がデカければ態度もデカい自意識過剰の齧歯」

「やめてえっ！」

その言い方はアカン。思わず彩輝の抱擁を解き、振り返って口を塞ぐ。

先程言ったミッキーという名前は人物名であり、某夢の国に居る

ッ  
とは一切関係ありません！

しかし、おかげで。おかげ様で。

後ろから抱きつかれるといったことはなくなり、正面から抱き合うような形に移っていた。口を塞いでいた手は彩輝の首の後に回す。

「あ、あのですね兄様。『あげる』というのは譲渡といった意味だけでなく『してあげる』といった行為的な意味でも良いんじゃないでしょうか？」

ウチの問い掛けに彩輝は答える。距離にして十センチにも満たない、文字通り目と鼻の先で紡がれた言葉は、

「良いよ」

と、実に明瞭なものだった。

ふう。少し安心。ここでNOと答えられていたら、どれだけウチのパンツを狙ってるんやよ！？と終わりの無い言い合いに発展していただろう。だけど彩輝のセリフはもう少し続いていて、

「賭けつて言っても、木乃香が嫌がるようなら俺もさせたくないし  
さ」

なんてことを宣いやがるお兄様。

「あはは。それやったら賭けになってないえ」

「だからそんな誰得な賭けはやらなくていいじゃん。その分、もつと有意義なことしようぜ」

平静に受け答えしつつも、こんなやり取りを四六時中やれるバカツプルすげー、といった尊敬の念が胸の中で渦巻く。

いや別に、これくらいのやり取りなら毎日欠かさずしているウチと彩輝も、仲睦まじいカップルの仲間入りとか遠回しに言ってるわけやないよ。

「で？　ウチ以外の誰にそういうセリフを言ってるって？」

「はっはっは。こんな恥ずかしいセリフ妹以外に言えるかボケー！」  
なら良し。

「木乃香こそどうなんだよ」

「兄様以外にこんな格好見せたり、抱きついたりするわけないやろバカー！」

一緒に住んでるネギ君にやって無防備な姿は見られてないね。こういう言い方はアレやけど、論より証拠。ネギ君が彩輝の手に掛からず、五体満足で生きていることを証拠として提出します。

まあ、今は担任のことなんてどうでもよくて。何故だか、お互い以外に興味なんて無いと盛大に自爆った気がする。

照れ照れ。

「……うん。まあ、話を戻そう。確か賭けの話をしていた筈だ」

「そ、そうやね。それでね兄様」

ウチは彩輝からちょっとだけ距離を取って、甲を上左手を差し出す。

「ふむ？」

彩輝は差し出されるまま、ウチの手を取った。行為がアリって認めたのは彩輝やからね。そして咄嗟に思い付いた、限りなくウチが得する賭けの内容を口にする。

「爪を切らせて『あげる』」

最早賭けというより罰ゲームと言った方が相応しく感じる。しかも勝者より敗者の方が立場が上という、なんともあべこべな関係。肝心の返答はというと。

「あはははは！」

おー。ウケたー。彩輝は笑って、そうくるかー、と快く了承してくれた。

爪切りを取り出すと、むにむにとウチの左手を揉み続ける。爪を切

り始める気配は一向にない。爪切り関係ねー。

「兄様？」

催促の意味を込めて呼びかける。

「いや、ちょっと薬指のサイズをだな」

「五年早いわ！」

「なら五年後まで愛想尽かされないように気を付けるよ」

パチンッ

左親指の爪が両断される。刃と刃の間に挟まれる爪は為す術も無く断たれていく。

彩輝はウチの指を優しく握り、深く切りすぎないように細心の注意を払ってくれているみたい。そんな当たり前の心遣いで、ウチの胸はポカポカと暖かくなる。

その間にも、パチンッパチンッと彩輝は慎重に爪を切り進めていく。

しかし、これは。中々唆るものがあるね。咄嗟の思い付きで、所詮は爪切りだと侮っていたえ。

爪切りなんてものは基本的に自分でしかやらないだろう。定期的にする習慣。自らの生活の枠に収まっている行為。そんなサイクルの一部を他人の手に託すのだ。

普通なら、そこには不快感しか生まれない。見知らぬ人間にこんなことをされたら、新手の自殺志願かと勘違いしてしまうこと間違いなしや。

でもそれが、自分が心を許した相手なら。しかも、ウチのことを想ってくれていると自惚れなくなる程献身的な態度だったなら。不快感という名のベクトルは百八十度方向転換し、ウチに快感を与えてくれる。

ぶつちやけると。何だか彩輝を従えて偉くなった気分になれる。まるで彩輝の主人になった錯覚を抱いてしまう。

ただでさえ彩輝がウチの為に何かをしてくれるだけで嬉しいのに、そんな妄想で更に頬の筋肉が緩んでしまう。にやにや。

と言っても、結局は十本の指の爪を切るだけの単純作業。この至福の時間が長く続く筈もなく、すぐに終わりを迎えてしまった。

楽しい時間は早く過ぎると言うけれど、ただでさえ短い時間までも短縮されてしまうなら、こんな大損に黙っていられるわけがない。

そしてウチは、ベッドの外へと右足を投げ出した。

「まだ足の爪が残ってるえ」

「まあ、そんなことだろうと思ったさ」

そう言うと彩輝は一旦立ち上がって、ウチが伸ばした足の先へ座り込む。ウチの足を手に取ると、再びパチンツと爪切りを動かしていく。

足の触覚が彩輝の手の温かさを認識する。爪切り中に余所見なんてする筈もなく、視線はずっと下げられたまま。うわぁ。これは本当に彩輝がウチに傳えているように見える。

ベッドの上から彩輝を見下ろすように座るウチ。彩輝はウチの言うことに従っている状態。

なんだろうな。ちょっとゾクゾクしてきた。このまま足を舐めるとか言ってみたい気分や。……どうしよう。本気で悩んでる自分がいる。

そんなことを考えている間に右足の爪を切り終わられてしまった。彩輝は右足を床に降ろし、左足へと作業を移行。パチンツパチンツと一定のリズムを刻む爪切りは止まることを知らないかのよう。

親指、人差し指、中指と次々に移って行ってしまっ。あーあ。この時間もあと少しで終わりやな。正直、かなり残念。

彩輝は相変わらず、強く握り過ぎないように包むようにウチの足を持つてくれる。そんな心遣いも薬指が終わり、あとは小指の爪を切るまでだけとなる。

パチンツ

「はい。終了」

「うむ。」「苦勞」

「ははっ。何の重役だよ」

彩輝は爪切りを床に置く。でも、ウチの足を離そうとはしない。疑念を込めた視線に気付いたのか、彩輝はすぐに口を開いた。

「こつという趣向はいかがですか？」

左足の踵を左手で掴むと、右手で足裏を割と強く押してくる。

「ひゃっ……！」

親指の付け根あたりから段々刺激する場所を下げっていく。

「痛い所はあるか？」

「ん」。特には「

痛いと言えば痛いけど、これくらいなら別に足の裏じゃなくても感じるし。それでも彩輝の足裏マッサージは念入りに続く。丹念に、丹精に。ウチに見下ろされたまま、跪くような形は継続中で。

一度終わってしまったと思われた至福の時間は、彩輝が「健康体」という診断を下すまで続いた。

困ったなあ。これはちょっと、癖になってしまいそうや。一日の終りにこんな彩輝を見ながらマッサージされるなんて、明日の為の活力を得るってことやる。

こつなると、何故もつとはやくお願いしなかったのか悔やまれる。軽く恨むえ、昔のウチ。



そんな風に少し後悔しているウチの足元で、彩輝はまたしても新たな行動に打って出ていた。

先程まで足裏を押していた右手はふくらはぎに、左手は太ももの裏へと伸ばされている。そして、ウチの足に抱きつくように身体を密着させると。

「すりすり」

「太ももに頬擦りするなっちゅーに！」

「ぺろりろり」

「舐めるなっちゅーに！」

「こればかりはそんな格好をしている木乃香が悪いと思う」

上は彩輝のYシャツ一枚で下はパンツ一枚。まじまじと彩輝に見つめられる。下から舐め回すようにウチを注視してくる。

蘇りそうになる羞恥心に蓋をして、あくまで平静と余裕を保ったまま質問をぶつけてあげよう。

「どうしたん兄様。妹相手に欲情しちゃった？」

「魅力的な妹様素敵！」

欲しいリアクションとちょっと違う。

「素敵な妹様魅力的！」

「それ順番変えただけやろ」

「妹様の健康的なお御足魅了的！」

「そつかそつか。兄様がそんなに足が好きだったなんて知らんかったわー」

だったら首四の字でも決めてやろうかと一瞬思ったけど、体勢的に無理なので諦める。

「いや、別に俺、脚フェチってわけじゃないからな。変な誤解すんな」

と言いつつふくらはぎを撫でたり、太ももに頬擦りするのはやめな  
いお兄様。普段は触られないような場所に彩輝の体温を直に感じる  
ことが出来、心身共にこそばゆい。

それにこうしていると、彩輝がウチに甘えてきているように感じら  
れる。生まれる順番が違っていれば、こんなこともあり得たのかな。  
IFの世界に思いを馳せるのも悪くない。だけど、ずっと彩輝が従  
順な態度でいた所為か、このまま彩輝の気が済むのを待つのは無理  
そうや。

ご褒美に擦り寄って来る彩輝の頭を撫でてあげるのもいいと思う。

「もう、兄様。そろそろ離してよ」

思うだけで行動には移さないけど。肩を揺らすと少し不満そうにし

ながらも、彩輝は手と身体を放す。その瞬間。抱えられていなかったウチの右足は彩輝の顔を捉えていた。

「ッ  
」

離れようと身体を後ろに傾ける彩輝に合わせて、顔を足で押しつけてやる。予想外の力が加わって、咄嗟に彩輝は床に手を付くけど、そこを立ち上がって追撃。右足に体重を乗せる。

？どテン？と音を立てて彩輝は床に転がった。足裏から苦悶の音が漏れる。兄を足蹴にし、その声にゾクゾクと身を震わせている自分がある。得体の知れない、けど、不快ではない感覚が背筋を這い上がる。今まで燻っていた嗜虐心が燃え上がるのを自覚してしまう。

そして、すかさずウチは、仰向けに寝転がる彩輝のお腹の上に座り込み、彩輝の両手と指を絡めるようにして握りこんだ。これで抵抗は出来ないよね。

ぐにぐにと足で彩輝の顔を押しさえつける。最初に爪を切ってもらってて本当に良かった。

頬から顎へ、ゆっくりと優しく撫でてあげる。

「あー、ウチの妹の突飛な行動にも慣れてきたなー」

「そう。じゃあちよっとくらい無茶を言っても安心やね。舐めなさい」

唇の裂け目。柔らかな口腔へ足の指を捻じ込む。イエー！ ハンムラビ法典サイコー！

「むぐっ!?!」

彩輝は顔を逸らして逃げようとするけど、当然そんなことは許さない。口内から首を傾げる反対側に引っ張ってあげる。

「…………ぐっ」

すると彩輝は小さく呻き声を漏らした。苦々しい響きが耳朵を打つ。なのに、それを聞いているウチの気持ちは全く正反対のものであつて。

あれ? あれあれ? 何で彩輝がこんなに可愛いわけ? 普段とは全く違う兄の顔にウチが一番興奮してる。そして、もっと見たいという欲望にウチは素直に従った。指の付け根の辺りを下前歯に押し付けて小刻みに振るわせる。

「ほら。どうしたの兄様。妹相手に欲情してしまつどうしようもないお兄様。ウチは舐めろつて言ってるんやえ」

そしてついに。今までは触れるだけやった舌が、彩輝の意思で動き始めた。初めはちろちろと指の形を確かめるように。その動きが段々と大きくなつて、指に舌が這う。爪と肉の間。指と指の間。付け根まで頬張つて口腔が蠢動する。

うわー! うわーっ! うわーっ!!

何コレ!? 何やコレ!! 背徳感とか禁忌っぽいのがヤバイ!

こんな知つてもたら後戻りなんて出来なくなるに決まつてる。ていうか、このままブレーキを壊したい。

ウチの口端は嘗て無い程に、愉悦に曲がってることやろう。

「あはつ。兄様ったらホンマに舐めてしまっんやね。妹に足を舐めさせられて興奮しちゃってるわけ？」

ブーメランを全力で投擲する。兄に足を舐めさせて興奮してますが何か？

彩輝を床に押し倒している。彩輝の自由を奪っている。彩輝の口内へ足の指を挿じ込んでいる。そして、彩輝がウチの足を舐めてくれる。全ての要素がウチに愉悦を与えてくれる。肉体的な刺激と精神的な刺激がウチを快樂の虜にする。

彩輝からの返答は熱の籠ったような舌使い。より丁寧に、より丁寧に、より丹念に、より丹精に。

「ハアハア……ハアハア……」

息が荒くなってるのはウチと彩輝のどっちやろう。ああ、両方共か。こんなことならニーソか黒スト履いて、ブーツで学園一周してやればよかった。今日はそんな悠長なことをやっとなる場合やなかったけど。

一度足を彩輝の口から離す。

「夢中にしゃぶりついて、ウチの足はそんなに美味しかった？ほら。兄様の唾液がべつとり」

そしてウチは彩輝の頬に、今まで舐められてた足を擦り付ける。唾

液に塗れた足で触ってるっていうのに嫌がる素振りには全く見えない。

「それでどうだった？ 妹に欲情して、妹の足を舐めて喜んでしま  
うお兄様の感想が聞きたいな」

「……………」

回答は沈黙。彩輝は黙秘権を行使するみたい。

いつもなら『木乃香のことを舐めていたよ。甘くみていた。俺たちの関係はこんなにも甘酸っぱいっていうのに、それを許してくれない世間は世知辛いにも程がある』といった感じに味の感想なのかよく分からないことを言い返してくるだろう。

つまり、こんな切り替えしも思いつかない程、彩輝の頭はいい感じに蕩けてしまっているらしい。となると、止めを刺したくなってくるな。

「ふーん。喋らんのやったら塞いでしまってもいいよね」

今度は両足。片方で鼻を、もう片方で口を抑えつける。あ、ぐにゅりと土踏まずで彩輝の唇を踏みしめる感触が伝わってくる。

「んーッ！」

最初は首を振る程度の抵抗で酸素を得ようとしてたけど、時間が経つに連れてそれも激しくなってきた。

自由にさせないよう、ウチも彩輝の手を握る力を更に込める。顔の方は言わずもがな。足の下で若干口を開いているのが分かる。本当

に苦しくなってきたのか、ウチの土踏まずに舌を伸ばしてきた。

舌が往復するたびに、擦りたい感覚と共に嗜虐心が刺激される。

そろそろ一分経過するくらいかな。勘やからそんなに信用できんけど。兎も角、一旦ここで解放してあげる。

「ぶはっ！ …… はぁ …… はぁ …… けほっ …… はぁ ……」

彩輝は少し噎せながらも何度も深く息を吸う。呼吸が整ってきたところで質問をもう一度。

「新鮮な空気とウチの足、どっちが美味しかった？」

「木乃香、です」

次は即答。変に奇を衒った返答はやめたみたい。

「はい。よく言えました。正直な兄様にはご褒美です」

優しく頭を撫でてあげる。勿論足で。足の裏でサラサラと髪が零れる。肌を踏むのとは違った感触が伝わってきて、やみつきになりそう。そして、撫でられながら彩輝が言った。

「で、木乃香。他に何か言うことは？」

足を離す。手も放す。立ち上がる。ベッドの上に移動。正座。頭を深く下げて、土下座。

「ゴメンなさい！ すぐく調子に乗りましたあっ！」

「許さない。実行が運ゲーの tomcat 並みに許してやらない」  
頬に付いた唾液を袖で拭いながら重ねて言う。あー。後で舐めとろうと思つとつたのに。残念。

大体、彩輝やつて言われるがままで嫌がってなかったくせに。その証拠に絶対に歯を立てようとはしなかったやろ。と、顔を上げて非難めいた視線を送ってやる。

しかし、既に彩輝はウチの目の前に座っており、こっちに手を伸ばしている。背中と頭に手を回されると二人してベッドに倒れ込んだ。どちらかが上か下かになるのではなく、そのまま横に。向かい合うようにして。

頭に回された方の手がウチの腕枕になっている。

「窒息は、後半洒落にならないぐらい苦しかったんだが」

実際は一分なんてとっくに過ぎ去ってたみたい。

「うっ。ゴメンね。次からは自重します」

「そういうわけだ。お前、今晚俺の抱き枕な」

「その言葉はそっくりそのまま返しておくえ」

ウチも彩輝の背中に手を回す。お互い、まだ熱を持った身体がクー  
ルダウンするには当分時間が掛かりそう。



というか、この体勢である以上、ウチの火照りはなくなりそうにないなあ。

あーあ。ホント、いつからやろう。妹っていう立場で満足できなくなったのは。この家に集まるんは皆良い人やし、誰かとそういう関係になつても祝福してやろうとか思ってた筈なのに。もう、誰にも渡したくない。渡すつもりも、無い。

彩輝の胸に額を押し付ける。

「……………ねえ、さい」

自分でも驚く程に最後の単語は掠れてしまった。呼び名を変えるのは、存外勇気の居るもので、声帯が緊張してうまく震えてくれない。それにウチらの場合、呼んでしまえば何もかもが変わってしまうと分かってるからやろうか。

「うん？ 何だ木乃香？」

ウチの髪を梳きながら、彩輝は言葉の続きを待ってくれる。

「何でもない。それより、兄様。またウチの前からフラっと居なくなるんは禁止やからな」

「信用ねえな。もうあんなことはしないって」

トントンと彩輝はあやすように背中を叩いてくる。心地良い一定のリズム。でも、忙しく動くウチの心臓と、額から直に感じる彩輝の鼓動で簡単に打ち消されてしまう。やっぱり、慣れるまでは眠れそうにない。

どうしよう。明日からまた学校やけど、サボっちゃおうかな。こんなにも幸せなのだから。この満ち足りた感覚を無駄なことで浪費したくないし。

なのに、思考する度に止まらなくなってしまう。そう。本当は全然満ち足りてなんていないと。まだこの気持ちに上限があるのをウチは知っている。満たしたいなら一言尋ねればいいだけや。

ねえ、彩輝。ウチは彩輝にとって、『妹』でしかないのかな？

あはっ。なんて戯言。

第六五話：「走れ、地デジカ」（後書き）

キヤー。彩香ちゃんの足音が聞こえてくるー。まあ、作者の貧相な発想で他に思い浮かぶのは、耳かきと洗髪と座薬ぐらいのものですが。

当然、既にこの兄妹が同居に至るまでの過程は考えてあります。ちなみに同時進行でネギの治療がされているのは完全な余談。

そして、来週から期末テストが始まったり、次回から、絶対に傷付かず、ただ見ているだけの傍観者・神楽坂明日菜の対処もするので、かなり間が開くと思われます。

では、夏休みを謳歌している世のリア充と学生とリア充とリア充の爆発を祈って。

第六話：Ring-a-Ring-o-Roses 1（前書き）

漸く書き上げることが出来ました。かなり遅くなってしまっ  
て申し訳ありません。

それじゃあ明日菜救済イベントはーじまーるよー。

と言ってもヒロインは木乃香。明日菜は傍観者。これだけは揺る  
がないので注意してください。

ところで原作35巻を読みましたが、あれって現実世界の火星はど  
うなってるんですかね？

そして今頃になって、ツジギリクエストとか月詠が主役の話と思  
っていたんだけど、何で殺しちゃったのかなあ。

第六話：Ring-a-Ring-o-Roses 1

そこは閉じた世界。何者かによって閉じられた世界。

地面には白い紙に銀朱で文字が書かれた符が散乱している。その閉じた世界で動いているのは三人。皆成熟しきっていない少女ばかりだ。

内二人は中学生、もう一人は小学生くらいであろうか。中学生二人と小学生が相對する。

一人の中学生と小学生が目まぐるしく動き回る。それはあたかも踊っているかのようだ。だが実際は違う。刀を持って踊るなど、それはダンスではなく舞踊である。

中学生の少女は刀を振るう。小学生の少女はそれをかわし掌底を突き出す。

どう見ても、和やかな雰囲気ではない。これが殺し合いの場面以外の何に見えるだろうか。事実、小学生の少女は命を懸けていると言っても過言ではない必死さだ。

戦況は全くと言っていい程動かない。刀を持った少女が巧みに攻撃を捌き、小学生の少女を大きく動けないようその場に縛りつけてしまふのだ。

暫くは二人の少女のやり取りが繰り返し続く。

そして突然？<sup>カリン</sup>華蘭？と場面が切り替わった。テレビのチャンネルを

替えるように一瞬で。ここにリモコンがあるのならばもっとマシなものを見たいものだ。

そう思ったところで目の前で繰り広げられる光景は止まらない。

気付けば小学生の少女が刀を持った少女の連れに肉薄していた。連れの少女は悟ったような顔をしてピクリとも動かない。

小学生の少女は掌底を突き出す。しかし相手の少女は尚も動かない。逃げようとも、かわそうとも、避けようともしない。このままでは掌底が当たる。避けない以上それは必中だ。

殺してしまう。

小学生の少女は泣いていた。しかし、突き出した手は止まらない。身体が自分とは違うものに操られているように、自分の意志に反して勝手に動いてしまう。

そして、その小さな掌は少女の胸を貫いた。物理的に貫いたわけではないが、中学生の少女は？グらり？とバランスを崩して地に伏した。おそらく二度と立ち上がることはないだろう。

刀を持った少女の慟哭が大気を斬り裂く。それに続くように閉じられていた世界が崩壊した。そこは見慣れた普通の街並みに戻る。

ただ一人、少女の命を除いての話であるが。

これでこの上映会は終わり。後は真っ暗な画面が視界を覆う。経験上これ以上は何も映ることはないだろう。それにしても。

人を殺すなんて、なんて最低な夢だろう。

朝。目が覚めると、兄の顔が真つ先に浮かんだ。というか、視界を占領していた。

麗らかな春の日差し。暖かな布団の中。陽の光を受けながら、同じ布団の中でぐっすりと眠っている兄。近衛木乃香が今日一番に目にしたものは彩輝の寝顔。

まじまじと兄の寝顔を観察しながら木乃香は昨晚のことを思い返す。あの後、時間が経つに連れて緊張よりも安心感の方が勝つていき、そのまま眠りについたのだった。そして、未だ眠りについていて彩輝の頬に手を添えながら、今日は月曜日かと思いを巡らす。

同時に制服やら教科書・ノート類を寮に取りに行く時間と、登校にかかる時間を計算する。もそもそと布団の中で身じろぎしながら時計を確認。時刻は午前六時。授業開始までには十分に間に合う時間だろう。

というわけで、仰向けに寝ている彩輝の身体の上に被さるようにして、引き続き彩輝の髪を梳く木乃香。鼻梁から唇、顎へと眠っているのをいいことに彩輝の顔を好き放題撫で回す。その間木乃香の両頬の筋肉は緩みっぱなしである。

彩輝に触れる手つきはひどく優しいもので、木乃香の顔から笑みが絶えることはないだろう。

「もうそろそろやめてくれない？」

唐突に声が上がった。気が付けば彩輝の瞼が開いている。

「あ。起きた？」

「そりゃあ、これだけ撫で回されたら起きるっての」

目が覚めたばかりの彩輝は口を大きく開けて欠伸をひとつ漏らし、上体を起こす。つられるように木乃香もベッドから起き上がり、二人は昨晚のようにベッドの上に座り込む。

「というか、お前はそろそろまともな格好に着替えると」

言われて、木乃香は自分の服装を確認すると、Yシャツ一枚にパンツ一枚という扮装。この場合、着衣の乱れとは何を基準にすればいいのだろうか。念の為に言っておくと、この状況で一番起こり得そうな事態は一切発生していない。幸いなことなのか残念なことなのか、この二人の関係ではなんと判断し難いことである。

さて、と。一息ついて彩輝はベッドから立ち上がる。足の向く先は部屋の扉。そんな彩輝の後ろからまだベッドに座ったままの木乃香が声を掛ける。

「あれ？ もう行くの？」

もうちょっと触れ合<sup>イチャ合</sup>ってようぜー、と言いたげな眼差しと共に。その視線を受けて、振り返った彩輝が答える。



「いやいや。今日月曜だろ。平日だろ。木乃香は学校に行かなきゃ駄目だろう」

至極真つ当な正論を言っただけで、実はそうでもない発言。

「……何か、ウチだけ行かなアカンみたいに言うけど、兄様も学校には行くべきやろ」

「ゴールデンウィークも過ぎたし、そろそろ下準備とか始めないといけない時期になってきたんだよ。だから俺は平日返上で人知れず地味な作業を続けるの」

「人はそれをサボリという」

「サボタージユの間違いだろう」

「語源はフランス語やね」

「ちなみに、教科書は教科用図書」

「ついでに、エンストはエンジンストール」

略語紹介コーナーは終わって、木乃香もベッドから立ち上がる。彩輝は一八〇度身体を回転させると、再びドアに向かって歩き出す。そしてその背中に木乃香は抱きついたのだった。

「じゃあ、朝ごはん食べに行こう」

朗らかに笑いながら彩輝の背中に張り付いた木乃香が先を促す。歩き難さなんて欠片も感じさせず、お互いの温もりを感じ合って。け

らけらと笑いながら、からからと笑いながら兄妹はリビングへ向かう。

リビングに着くとキッチンで茶々丸が朝食の準備中だった。二人が部屋に入ったことに気づき、茶々丸は作業の手を止めて挨拶をする。

「、おはようございます」

一呼吸分の間を置いて。妹が裸Yシャツで抱きついて、兄の方も何一つ不満を漏らすこと無く笑い合っているのが一日のはじまりに見た光景なのだから仕方のないことだろう。

「おはよう茶々丸」

「茶々丸さんおはよう」

普通に挨拶を返し、兄妹はテーブルに着く。当然、席は隣り合って肩を並べて談笑する兄妹を「まあいつものことですし」と、茶々丸は深く考えないようにして朝食の準備を再開する。

ある意味見切りを付けられている彩輝と木乃香はと言うと、先程の彩輝のサボリ宣言を話題に上げて茶々丸の作る朝食を待つ。

一見すると手伝えとも言われそうな光景ではあるが、この状態の二人に手伝われる茶々丸の心中を推し量ってやってほしい。そもそも決して狭くはないキッチンで肩身の狭い思いをしたくない茶々丸は、二人が申し出てもやんわりと断るであろうが。

その間にも、お互いだけの為の世界を築いてしまっている兄妹は話を進める。

「そういう訳で、ちょっとした儀式をやる為に今から準備を始めるんだ」

「……それ、被害とか大丈夫なん？」

「大丈夫大丈夫。すごく繊細な儀式だから十全に力を入れるし。運が良ければ去年の焼きまわし程度で終わるだろうさ」

「……ちなみに、運が悪かったらどうなるん？」

不吉なことを宣う彩輝に、木乃香は念の為最悪の可能性を聞いておく。

「麻帆良<sup>ココ</sup>が廃園、いや廃墟になるだけだっただけ」

もしもそうになったら、現地の関係者を差し置いて独自に事態の收拾を図り、名実共に麻帆良を手中に収める 協会 の姿が目に見えかぶ。

「だからそうならないように、ここ数日間は木乃香が学校に行っている間に霊脈沿いや竜穴周辺に出没して黙々と仕込みをだな」

「何を朝から物騒な話をしているんですか」

その話を遮ったのは、朝食を作り終え、人数分料理が盛りられた皿を運んで来た茶々丸である。今日の朝食の献立はポーチドサーモンとミントサラダ、カンパーニュ。手の込んだ朝食が次々と並べられていく。

無機質なテーブルの上を彩る料理と共に食欲をそそる芳しい匂いが

辺りに満ちた。

「あれ？ エヴァの分は？」

並べられる皿の枚数に疑問を持った彩輝が聞き返すが。

「今日はもう起きないと思われませう」

何かを諦めたように茶々丸は呟く。どうやら昨晚の呪詛と神酒は十全に効果を発揮したようである。元凶となっっている兄妹の片割れは「そうかい」と適当に相槌を打って、茶々丸の作った朝食に舌鼓を打つ。

「今日も茶々丸さんの作ったご飯は美味しいね」

と、木乃香は朝食に対する率直で素直な感想を述べる。こちらでもエヴァのことなんてなかったかのように振る舞って。

「いえいえ。それ程でもありませんよ」

それを茶々丸は謙遜しながらも受け取って、並べられた料理の量は次第に少なくなっていく。

「「ご馳走様でした」」

「お粗末さまでした」

木乃香と彩輝は空いた皿を重ねて流し台まで持ち運ぶ。

「あ」

そんな二人の背後で茶々丸が声を上げた。

「どうかしたか？」

流し台に食器を置いた彩輝が振り返って茶々丸に何事か尋ねる。

「ああ、いえ。大したことじゃないんですが……」

そう言って一度言葉を区切り、続きのセリフを彩輝に向かって投げかける。

「首筋の引っ掻き傷は隠しておいた方が良くないんじゃないでしょうか？」

「そんな傷はねーよ」

即答する彩輝を横目に、朝食を作った茶々丸が皿洗いを手伝うことはなく、そのまま登校の準備へ。立ち去る際に口元が少々吊り上がっていたのは言うまでもないことだ。

「茶々丸まであんなことを言うようになるなんて。一体誰の影響だ」  
ボヤク彩輝の隣で木乃香も食器を流し台に置く。しかし、皿洗いを始めることはなく、彩輝の首筋を摩り始めた。労るような優しい手つきである。

「……昨日はゴメンな。で、でもコレはウチだけの所為やないやろっ」

木乃香は頬を少しばかり朱に染めて、上目遣いに彩輝を見る。

「爪を切った覚えはあっても、爪を立てられた覚えは無いんだけどな」

木乃香の手をやんわりと払って、堂々とサボリを宣言した彩輝は皿洗いへ。まだ時間に余裕がある為か、木乃香もそれを手伝う。何でもいいから口実を作って、二人でいる時間を引き伸ばしていると取れなくもない。

彩輝はスポンジを洗剤で泡立て汚れを落とし、木乃香は洗われた食器を布巾で拭う。分担作業で効率良く進み、皿洗いは短時間で終了。

取り敢えず、現時点でこれ以上する必要のある仕事は無く、漸く木乃香は彩輝のYシャツから自分の普段着に着替え、寮へ戻る準備を整えるのであった。

「俺の教科書持って行く？ どうせ今日行かないし」

「どうせというなら、制服取りに行かなアカンし。一旦寮に戻るから教科書はええよ」

そうか、と彩輝は頷くと携帯を取り出して千雨に連絡。用件は単純に《門》の出入口の分担である。確実に人目を避け、且つ寮まで移動するとなると、千雨の部屋に繋がれた方が手っ取り早いからである。

論理魔術ならば今着ている服の概念を操作して制服を作ることくらい簡単ではあるが、瞬時に女子中学生の制服を仕立てれる人間には彩輝としてもなりたくないし、木乃香もなっ欲しくない。

千雨と連絡を取り終えた彩輝は携帯を閉じ、呪文を紡ぐ。

「《道よ開け》」

そして、彩輝の手から光の泡が溢れ、移動手段としてこれまで何度となく見てきた円環が木乃香の目の前に現れる。

「いってきます」

「いつてらっしゃい」

彩輝に見送られ、木乃香は《門》をくぐる。

くぐった先では、まずパソコン類が目に入った。次にデジカメなどの撮影機器。背後からは「《閉じる》」と、この部屋の住人の声が聞こえ、先程通り抜けて来た《門》が消える。

「おはよ、千雨ちゃん」

木乃香は振り返って挨拶を交わす。

「ああ。おはよう」

部屋の主である長谷川千雨は既に登校の準備は終わっているようで、制服に身を包みテレビを見るなりして時間を潰している様子である。

「朝からこんなこと頼んでゴメンね」

「これくらいなら別にいいさ。それよりも、一応時間確認しとけよ」

スツと千雨はテレビの画面を指し示す。映し出されているニュース番組の左上には、一度部屋に戻って着替えるだけならば十分過ぎる時間が表示されていた。

「ありがとう千雨ちゃん」

最後にお礼を言って、木乃香は部屋の玄関へ向かう。

「じゃ、また教室で」

「うん」

背後から掛けられた声に頷いて、からからと笑いながら木乃香は千雨の部屋を後にする。玄関のドアを開けて廊下に出ると次は自分の部屋へと足を向ける。

そういえば、と。木乃香は、ゴールデンウィーク中は一度も寮に帰って来なかったな、などと考え、同居人であるネギと明日菜も何処かに泊まると聞かされていたのを思い出す。

学校から帰ったら、連休中無人になっていた部屋の掃除をするかと思考を巡らせていると、自室に到着。

ドアノブを握り、右へ四十五度回転させ？がチャリ？とドアを開く。久しぶりとまでは言わずとも、少しばかり帰って来るのに間の空いてしまった自分の部屋の中へと踏み入る。

部屋を出たときと変わっているものは何一つ無く、数日間使われていなかった部屋はうっすらと埃が積もっている。



強いて大きな変化を挙げるのであれば、まだ授業開始まで時間に余裕があると言っても、ルームメイトが何の身支度もせず、机の上で腕を枕にして顔を伏せ、暗いオーラを漂わせていることであろうか。

「や。明日菜。帰ってたんやね」

明らかに何かありましたよと、ある種の構ってちゃんオーラを出すルームメイト・神楽坂明日菜に木乃香は気さくに話し掛ける。

声を掛けられて明日菜は？のソリ？と起き上がり、顔を木乃香に向ける。目は充血して目は腫れ上がり、今でこそ涙を流していないもののずっと泣いていたのだろう。

「……………ねえ、木乃香……………」

彼女から発せられる言葉には張りがなく、いつもの澆刺とした声と違って、掠れるように弱々しく響く。

「魔法って、何なのかなあ……………」

それは木乃香が『魔法』というモノに出合っただけで真っ先に直面した、対面させられた、向き合わざるを得なかった事柄。

「何があつたん？」

木乃香は明日菜の沈鬱な表情を見て、話を促す。そして明日菜の口からポツリポツリと語られるゴールデンウィーク中に起こった一つの事件の顛末。

悪魔に拐われ、それを助けに来たネギとカモがひどい怪我を負ったということ。カモに関しては全身に永久石化の魔法をかけられ、再び動くことは叶わぬ身体に。ネギは右腕の肘から先を石に変えられ、その後粉々に砕かれた。おまけとばかりに身体の至る所の骨も折られ、それが内蔵を傷付ける結果に。

そうして？ 訥々？ と明日菜はゴールデンウィーク中に彼女たちが関わった事件の中で唯一、誰一人として死んでいないければ、陰惨でも凄惨でもない事件を話し終えた。

明日菜が部屋に戻って来ているのも、言ってしまうえばネギの治療の邪魔で学校へ行っているのと追い出されたといった方が相応しい。元々、ただでさえ成績の悪い生徒をずっと休ませるワケにもいかず、ある意味巻き込まれただけでも取れる従者に関しては、連休が明けたら一時的に学校へ通わせて様子を見ようと、学園側はそのような腹積もりだったようだ。

連休前と後では悲しい程に理由が悪変してしまっている。

ネギとカモがああなってしまった一因の明日菜としては、ネギと同じ空間にいるのは居た堪れなく、学校にも行ける気分ではなく、こうして部屋に閉じ籠っていたのだ。

もう一人の従者である宮崎のどかはというと、登校も立ち退きも拒否しネギの傍に居続けている。

斯くして、全ての話を聞き終えた木乃香は「そっか」と軽く頷き、

「でも、不幸中の幸いやったね」

と、一言目から明日菜の許容を超える発言をしたのであった。

「……え？　ちょ、何言ってるのよ木乃香？　腕が砕かれたのに幸いなのじゃないでしょ。カモなんて、もう二度と動けないのよ」

それを聞いて木乃香は表情には出さないまでも、クエスチョンマークを頭に浮かべる。

互いに互いの言っている意味が分からない。

木乃香からしてみれば、その状況を聞く限り、悪魔はどうやらネギのことを『使えない』と判断したようで、相手が相手ならばその場で殺されていてもおかしくはない。

加えて、彼女の身近には人体と寸分変わらないホムンクルスの製作者と、六〇〇年間『人形遣い』と呼ばれ恐れられている吸血鬼が居るのだ。好き好んで身体の一部を失いたいとは思わないが、義手を用いれば代替可能の領域である。

そして使い魔が一匹死んだ。それ以上でも以下でもなく、ただそれだけの事実である。木乃香は知らなかったが、カモは過去に罪を犯し、反省の色皆無の脱獄犯。社会的に見れば寧ろプラスに働いている。

ほぼ同時期に魔法の存在を知った二人ではあるが、いつの間にか両者の間には大きな溝が隔たりを作っていた。この溝を埋めれるようにはなるのだろうか。

「確かに良くはないけど、明日菜は無事なんやろ。明日菜まで大怪

我してたら、ウチは……」

そう言っつて、木乃香は顔を俯かせる。

明日菜の治療が終わったなら、ウチはその悪魔を殺してしまうんやろか、と頭の片隅で物騒な仮定を考えながら。

「そういう意味じゃなくて……ゴメン、木乃香」

自分の身を案じてくれている友人のことを邪推してしまったからか、明日菜は謝罪の言葉を口にする。

これでお互いに違和感を持ったことで訪れる沈黙が場を制することはなくなり、木乃香は？ ちらり？ と時計を見る。

話を聞いている間に思っていたよりも時間が過ぎ去っていたらしく、今からでは授業開始に間に合わないであろう。先程千雨とは「また教室で」と言い合ったばかりだが、目の前のルームメイトを放っておくわけにもいくまい。

「ま、授業に遅れて出るくらいなら、最初から行かない方がマシかなあ？」

「……え？ 何か言った？」

独り言のように小さく呟かれた言葉は明日菜に届くことはなく、木乃香は自問に対して早々に答えを出してしまう。明日菜の聞き直しの要望を「何でもない」と、さらりと流して。

「ほら。明日菜はさっさと顔洗って。出掛けるえ」

木乃香は明日菜の背中に回り込んで、洗面台へと押して行く。

「ちよつ、木乃香は学校でしょ」

「あー、ついさっきも似たようなことを言われたなあ」

明日菜の意見は完全に封殺して木乃香は着々と遊びに行く為の準備をし始める。

「どうせ部屋の中に閉じ籠ってても碌な事は無いんやから。ぱあつと気晴らしに行こうや」

からからと笑いながらサボリに誘う木乃香の顔を明日菜はポカんと眺めるしかない。はたして長年一緒に居た親友はこんなことを提案する人物だったかと思いついて返しているのだろう。

逆を言えば、そこまで明日菜は思い詰めているようにも見ええるということで、結局明日菜は木乃香に押し切られる形で街へ繰り出すのであった。

身体的だろうと精神的だろうと傷を放置するのは芳しくない。何もせず傷口が膿んでしまうくらいなら、多少強引でも、痕が残ったとしても、さっさと塞いでしまふに限る。

「あ。おじいちゃん。風邪引いたから学校休むね」

と、如何にも仮病ですと告げているような、何とも適当な報告を祖父にした後、身支度を整えた二人は、まず交通の要である寮から最も近い駅に向かう。既に登校時のピークは過ぎ去っており、人通り

は疎らになっている。疎らというだけで皆無ではなく、時折平日の午前中から私服姿で出歩いている二人に視線を送ってくる人も居るのだが。

広域指導員に見つからないよう気を付ける必要性がある。と言っても、見つかったところで今日の木乃香ならば、禁厭ましなの一つ二つ用いて煙に巻きそうではあるが。

二人は駅内へと入り、改札で切符を購入する。電車が来るまでの待ち時間、改めて明日菜は今のことを木乃香に尋ねる。

「ねえ木乃香。ホントに良かったの？」

学園長に欠席の旨を知らせる電話をしてしまった後で聞くことではないが、それでも矢張り確認してしまう。それに対する木乃香の回答は実に明瞭なもので。

「良いの良いの。そんな疲れた、憑かれたような顔をされても、こちの気が滅入ってくるし」

明日菜が責任感を覚える必要は無いんやえ。

そう言つて、からからと木乃香は笑う。

そして二人は駅のホームへと辿り着く。矢張りここでも電車待ちの人は少なく、登校時の混雑さを見る影もない。

なんとなく、木乃香はホームから空を見上げる。すると、青と白との二色を背景に屋根に留まっている一羽のカラスと目が合った。

「うん？」

エサでも狙っているのだろうか。場合によっては石鹸なんかも啜え  
て行ってしまおうと聞くし。一瞬そう考えたが、すぐに、そんなわけ  
ないか、と自分の考えを否定する。誰のモノかは知らないが、あの  
カラスにそんなカラスらしい行動を取れる筈がない。

カラスから視線を外すとホームに設置されているベンチへ明日菜と  
並んで移動する。しかし、そのベンチに座ることは叶わなかった。

先客が一名居たからである。背凭れに隠れて見えなかったが、木乃  
香よりも年下の、というか十歳かそこらの女の子が横になってベン  
チを占領していたのだ。亜麻色の肩口で切り揃えられた髪をベンチ  
に垂らし、清楚な白色のワンピースに身を包んで。

木乃香は困ったように明日菜と顔を見合わせる。自分のことを完全  
に棚の向こう側へ放り投げて考えるが、こんな子供が朝のうちから  
駅で寝ていたら色々と問題であろう。

「ねえ、キミ」

声を掛け、肩を揺する。女の子は小さく身じろぎをし、起き上がる  
と？チツ？と隠そうともせず舌打ちを一つ。眠りを妨げられてか、  
眉根を寄せて木乃香を睨む。

同年代の子と比べても格段に可愛らしい顔立ちの女の子が凄んでも、  
微笑ましく映るだけなのだが。

「うぜーです。麻帆良学園中央駅行きはこっちのホームじゃねーで  
すよ」

取ってつけたような敬語に毒を含ませ、女の子は反対側のホームを指差す。

「あはは。元氣いいね、お嬢ちゃん。何か良いことでもあったんかな？ まあ、それは置いて、お嬢ちゃんにはウチらが今から学校に用事のある人に見えるん？」

どう接しようか悩む明日菜を横に、面白い娘を見つけたとばかりにからからと笑いながら木乃香が話し掛ける。その反応に更に女の子は不機嫌になる。

「見えねーですねー。立派な不良少女に育って親御さんは泣いてるんじゃないですか」

「環境破壊という素敵な趣味を持つお母様には、校舎くらい軽く壊せる人間になれと厳しく躰られたもので。今なら泣いて喜んでくれるね」

「その前に家庭崩壊の方が先だろっての。ワタシですら敬遠する破壊屋ですねー」

「あらあら。そんなことを見抜くなんてお嬢ちゃんは名捕手になれるね。大リーグでも目指すん？」

「将来は大リストラするつもりで頑張ってるっての」

「現代に打首獄門を蘇らせようとするなんて、応援してるえ」

「なら期待に伝えてやるーじゃねーですか。先行投資でアンタのク



「びを差し出して下さいよ」

「ではお嬢ちゃんには先日捕まえた首なしライダーを贈呈しましょう」

「ふっ。白状しゃがりましたね。盗んだバイクで走り出して天城越えをするなんて、アンタは不良少女だったってことだわ」

「ハンガーを……あの人が、ウチに向かって……ハンガーを投げってきました」

「ひどい事件だったね。ではワタクシ、これからお空を飛べないお薬を買いに行かなくてはならないので失敬」

「まあまあ、お嬢ちゃん。電車来るまでには舞空術を体得できる程度の時間はあるえ。るえるえ」

「電車車？　じゃあバスに乗ることにするわ。るわるわ」

「逆から読むと？」

「不良を獲<sup>え</sup>る」

「あなたとわたしで？」

「不良を獲<sup>と</sup>る」

この間、木乃香は笑顔を崩すことはなく、女の子が仏頂面を変化させることはなかった。そしてその横では、明日菜が僅かにヒートしている。

「つーか、お嬢ちゃん呼ばわりはやめてそろそろ立ち去ってくれませんか？」

「うーん。じゃあキミのことをなんて呼べばいいのかな？」

「駅の利用客A」

「オツケー。駅の利用客Aちゃんやな、覚えてえ。RPGじゃ、子供が酒場を利用したり、誰も通らない辺境のダンジョンの入口ですつと立ちっ放しの人も居るしね。駅の利用客Aちゃんくらいの歳でも平日の朝から駅に居座るなんて名前通りで全然普通やな。ところで駅の利用客Aちゃんは」

木乃香の話を遮って女の子は？ハアあ？と何もかもを諦めたような溜息をつく。

「やってらんねーわ。何をどうしようたってアンタとの邂逅は回避不可ってわけ？ それともこれが最善？ ハッ、交通機関に頼らざるを得ないこの脆弱な身体が怨めしーわ」

取ってつけたような敬語も取り払い、女の子はブツブツと悪態をつく。そして、心底嫌そうな顔をして、

「最初に言っておくけどさー。ワタシは陰陽師ってヤツが大嫌いなんだわ」

木乃香を見据えて、そう告げた。

「まあ、仕事の半分が誰かを呪うことやしなあ。でも職業差別はア

カンえ」

この愉快的な娘は魔法関係者確定、と木乃香は結論づけて世間話のよ  
うに合いの手を打つ。

「どんなに不愉快だろうと、ある程度目的地に近付けると、今  
は選り好みしてる余裕はねーしね」

「安心確実にモットーにあなたのご依頼承ります」

「少しの間匿って下さい。お願いします」

からからと木乃香は笑い、女の子は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「それと、護身用の護符タリスマンか呪物フエティッシュは持ってねーの？」

言われ、木乃香は普段から常に首に下げている瑪瑙のネックレスを  
まず一番に連想するが、兄からの贈り物を渡すわけにもいかず？ご  
ソゴソ？とポケットの中を確認する。そして緑色のミサンガを一つ  
取り出した。

「手持ちやとこれしかないかな」

はい、と木乃香は女の子にミサンガを手渡した。

「礼は言っておくわ」

感謝の念も何も無い、文字通り形だけの言葉を吐き出すと女の子は  
片膝を立てるようにベンチに右足を乗せた。どうやらミサンガを手  
首ではなく足首に付けるらしい。

そんな女の子の挙動から目を逸らし、木乃香は明日菜に向き直った。

「そういうわけやから明日菜。この子が一緒になってもええやろ？  
あ、明日菜子供嫌いやったっけ」

元々の目的は彼女の気晴らしだった筈なのだが、木乃香は今の今まで蚊帳の外で話の輪に入ることの出来なかった明日菜に同意を求め  
る。

「まあ……放っておくわけにもいかないし、別にいいけどさ……」

一応了承の返事はするが、何とも歯切れの悪い言い方になってしまった。女の子の物腰も然ることながら、木乃香との掛け合い中、女の子は明日菜のことを一瞥足りともしなかったのだ。

初めから居ないかのように扱って、貴女が話し掛けて来ても無視しますと言わんばかりに。そういう意味では、どんなに嫌っていようと木乃香のことは認めていると取れなくもない。

悪意と無関心でしか人と接することが出来ないのならば、かなり将来の危ぶまれる娘である。

「この子の親とかに連絡しないでいいの？」

「ややわー明日菜。そんな無駄なことしなくてもこの子の親はもうとつくに知っているかもしれんえ。それに、経験上ウチが関わる魔法使いはかなり偏りがあってね」

「えっ？ 魔法使い？」

「ううん。気にせんといて。まだ全容どころか断片も分からんし」

「ていうかその子、また寝ちゃったわよ」

木乃香が再び視線を女の子に戻すと？こクリコクリ？と船を漕いでしまっていた。

「あらら。結局名前聞きそびれたね」

寝付き良いなあ、と思いつつ、もう一度木乃香は空を見上げる。青い空には点々と白い雲が浮かんでおり、先程屋根に留まっていた人工のガラスは既に飛び去った後であった。

第六七話：Ring-a-Ring-o-Roses 2

そこには団欒があつた。

昔からある古い家に住むのは母と娘の二人きり。父親は居なかつたが、それでもその家族は幸せに暮らしていた。

「見てー。お母さん。わたしテストで100点取つたよー」

「そう。偉いわね」

親の期待に応える娘を、母親は温和な笑みを浮かべて優しく頭を撫でてやる。娘はくすぐつたそうに目を細め、母親に身をまかせる。

「晩ご飯はごちそうを作つてあげるわね」

それはどの家庭にでもあるありふれた日常。母親の言葉に娘は喜びを顯にする。

R i n g - a - R i n g - o - R o s e s  
R i n g - a - R i n g - o - R o s e s  
A p p o c k e t f u l l o f p o s i e s ,  
A t i s h o o ! A t i s h o o !  
W e a l l f a l l d o w n .

「お母さん。それなんていう歌なの？」

母親も機嫌が良いのか歌を口ずさみ、それを聞いた娘が曲名を尋ねる。

「これはね、マザー・グースっていう童話の一つなのよ」

「りんぐ・あ・りんぐ・おー・ろーぜす？」

「そうよ」

そして親子は一緒に歌を口ずさむ。母親が少しずつ娘に教えていき、たどたどしくも娘はそれを覚えていく。

誰が見ても幸せを体現したような家庭の筈だ。しかし、母親は時折遠い目をして娘を見やる。何かの完成を待ちわびるように。

どうして。どうして、このままの生活で満足出来なかったのか。

ガタンゴトン、と一定の間隔で僅かに座席が振動する。

近衛木乃香をはじめとする三人の少女たちは、あの後時刻表通りにやって来た電車に乗り込んだのだった。ホームで出会った女の子は木乃香が背負って。

最初に肩を軽く揺すっただけで起きた女の子は、木乃香に背負われなくても規則的な寝息を乱すことはなく、今も壁に凭れるようにして眠っている。

その女の子の隣に木乃香が座り、向かい合った席に明日菜が座る。

登校の時間は過ぎ、向かう先も学校とは逆方向なので電車内は空いていると言っていていいだろう。

車窓からは普段から見慣れた風景が流れていつている。ぼんやりと外を眺めている木乃香に明日菜が声を掛ける。

「……木乃香ってさ」

「うん？ 何？」

声を掛けられて木乃香は、四角く切り取られた風景から、目の前に座っている友人へと視線を移す。

「ちよつとの間会ってなかった所為かもしれないけど、改めて見ると、なんて言うか……かなり変わったんじゃない？」

「そう？」

と相槌を打ち、木乃香はからからと笑う。

「なんだか、よく笑うようになった」

「知ってる明日菜？ 笑顔っていうんはな、人が造れる中で最高の無表情なんやえ」

より一層笑みを深くして、まるで兄からの受け売りを語るように木乃香は喋る。

「その子だって」



明日菜は一旦言葉を区切り、木乃香から横で寝ている女の子に目をやってから続きを述べる。

「今も昔も放っておくとは思えないけど、少なくとも連れ回すなんてことはしなかったと思うわよ」

「えー、市中引き回しは趣味やないな」

「それ刑罰っていうか、死刑になってるから」

「くすり？」と明日菜の口端は淡く笑みを形作る。他愛ない雑談。身も蓋もない話の中で漸く明日菜は笑みを浮かべたのであった。

それを見て、木乃香は少し安堵する。勿論明日菜が笑ったことに対して。そして、どうやら自分は変われているらしいということにも。ここ最近はずっと同じ面子としか居なかったことに加え、問題が自分自身であることから、こうして他人に客観的な意見を貰わないと気付けないのだろう。

誰の影響を受けているかは容易に想像がつく。兄と一緒に居るときは自分でも突飛なことをしていると自覚はあるが、兄が居ないときでも昔はしなかったような行動に出てしまっている。

率先してリスペクトしている所為だろう。この変化の指摘は木乃香にとっても嬉しいもので、目標に近付けているのならと思うと頼も綻ぶ。

しかし、自身のことはこれでいいとしても、眼前の友人のことになると話は別だ。

「明日菜は、変わってへんよね」

「そりゃあね。そんな簡単には変わらないわよ」

木乃香の一言に明日菜は苦笑を浮かべて答える。変わらないというのも、それはそれで一つの美德だろう。だが、魔法などという超常的なものを知って尚、これまでと何一つ変わらないなんてことがあり得るのだろうか。

だからこそ、明日菜は魔法を知らないのではないかと考えてしまう。

(ウチが一番近くに居たのになあ)

思い返せば、今まで色んなものを秤に掛けて、篩に掛けて来てしまった。ただ、兄と一緒に居たいが為に。

その最もなのがゴールデンウィークだろう。一つの事件に関わったことを除けば、ずっと兄の家にした事しか記憶にない。逆に言えば、クラスメイトからの遊びの誘いよりも、そちらを優先したということだ。恋は盲目とはよく言ったものである。

当然、後悔はない。

その選択に憂うことも悔やむこともある筈がないが、目の前の友人をこのまま見なかったことにすれば蟠りが残るだろう。

だから、少しばかり深く魔法に立ち入った者として、ちょっとしたお節介を焼こう。隣で寝息を立てている女の子を含め、どこまで立ち入るべきか線引きをして。

そう考えていたときに、流れいく風景の速度がゆっくりとなり、慣性の力を働かせながら電車が止まった。

どうやら次の駅に着いたようである。しかし、木乃香たちが下車する駅ではないので席を立つことはない。客の乗降を終えたのか、開いていた電車のドアは閉まり、乗客を揺らしながら、再び次の駅へ向けて走り出す。

そうして、また先程と同じくらいのスピードに達した頃、車両を隔てるドアが開き、見知った顔がこちらに向かって歩いて来た。

その人物は、黒髪を頭の片側で纏めてサイドポニーにしている女子中学生。少女は迷うこと無く木乃香が座るシートまで歩を進めて一言呟く。

「何をしてらっしゃるんですかお嬢様」

通路側に立つのは幼馴染である桜咲刹那。

「や。せっちゃん。遅かったね」

それに木乃香は挨拶代わりに軽く手を振って、気軽に話に応じる。

「何をしているのかと聞かれたら、電車に乗ってこれから遊びに行くところ」

「語源はフランス語ですか」

「そのやり取りは今朝やったばかりやけど、端折り過ぎやえ」

笑いながら普段と変わらない掛け合いを繰り返す木乃香と刹那に、寧ろ明日菜が面食らった。

「ちよっ！ 桜咲さんまで学校サボったの？」

元々刹那にとっては木乃香の身辺警護の方が何よりも優先順位の高いもので、護衛対象である木乃香が学校をサボり、フラッと何処かへ出掛ければ、それに付き従うのもある種当然の帰依であり。

「出来るなら初めに言っておいて欲しかったです。一度学校に登校した後なんですよ」

「ゴメンゴメン。急に決まったからね。うっかりしとったんや。それより明日菜」

と、木乃香に促されて刹那が立ちっ放しであることに気付く。

「あつ、ゴメン桜咲さん」

明日菜は一言詫びを入れると窓際へと席を詰めて、空いたスペースに刹那が座り込む。

「でも一回学校に行った割には準備いいな」

一度登校したと言う刹那の服装は、学校の制服ではなく何処で着替えたのか私服姿になっている。

「これは千雨さんをお願いして」

どうやら、制服一着を論理魔術によって魔改造したようである。木乃香がこの電車に乗っていることも携帯のGPSや駅の防犯カメラを調べたのだろう。あとは《門》で近場まで送ってもらえれば何の問題もない。それにしても、サボリ学生を一人見つけるだけにしてはスペックの無駄遣いもいいところだ。

「それよりもお嬢様。そちらの子は」

そして、刹那は木乃香の隣で熟睡している女の子へと目を向ける。疲れていたのだろうか、ホームで寝入ってから起きる気配が一向にない。

「さつき駅のホームで会ったんやけどね。なんか匿って欲しいらしいから一緒に行動してるんや」

「それ匿ってるって言えるんですか？」

「言うてすぐに寝たからね。こっちの事情も考慮してもらわんと」

木乃香と刹那は定時連絡のように、淡々と慣れた様子で今まで何があったか話し終わると、次は明日菜も交えて何処へ遊びに行こうかという話題に早変わり。

取り敢えず、少し早いが適当なファミレスや喫茶店で昼食を取った後に、未だに眠っている女の子も交えて相談しよう結論は暫定的な保留になる。

そうこうしている内に電車が目的の駅に到着した。

女の子は刹那が背負い、四人は下車。改札を抜けて駅を出ると、近

場に発見したファミレスへ向けて歩を進めた。その道中。

「……………んっ……………」

刹那の背中、寝入ってからは全くの無反応であった女の子が身じろぎしたのだ。続いて女の子はゆっくりと瞼を開ける。

「おはよう。起きた？」

早速声を掛ける木乃香を余所に、

「え……………え……………？」

と、戸惑った声を上げて、きよろきよろと辺りを見回し、背負われているということに気付くと？じタバタ？と暴れ始める。

「お、降ろして……………」

今にも泣き出しそうな、か細い声と共に。

「わ、分かった。今降ろすからね」

服を掴まれている刹那が焦りながら答えて、しゃがんで女の子を地面に降ろす。しかし、女の子は自分の足で立つても、たった数歩歩くだけでフラついてしまい再び刹那に支えられる。

「ちよっ、お嬢様！話を聞いて予想していた反応と違いすぎるんですけどっ」

子供と触れ合う機会が少なかつたからか、この状況にうるたえまく

った刹那が木乃香に助けを求める。

「いや……ウチも予想してた反応と違いすぎて、何がなにやら」

正直に。正直に言つと。冗談の範囲でだが、ゆっくりじっくり刹那の首を絞めるぐらいのことはするのではないかと思っていた。それを止めると、悪態をつきながら長々と掛け合いが続くものだ。木乃香は予想していたのだが。目の前に居る女の子は良くも悪くも年相応にしか見えない。

理由はさっぱり分からないが、涙目になって怯えている姿はとても演技には感じられず、木乃香もしゃがんで女の子と視線を合わせる。そしていつもの如く、からからと笑いながら話しかけた。

「はじめまして。ウチは近衛木乃香っていうんや。駅で会ったときはちゃんと自己紹介出来んかったよね」

表情・声・言葉と、この状況におけるメラビアンの方則を十全に果たしている木乃香に女の子の警戒も幾分かは下がる兆しを見せる。流石は詐欺師の妹と言つべきかこういつた手法には澱みがない。

「……駅？」

木乃香の言葉に引つ掛かりを覚えたのか小首を傾げる女の子を見て、そこからか、と木乃香は思案する。

「うん。ホームに設置されてるベンチで寝てたんやえ。覚えてない？」

そう尋ねられると、女の子は少し俯いて？ふるふる？と首を横に振

った。本人は覚えていると主張するが、目線や細かい仕草から察するに実際は微妙なところだろう。反応が芳しくないからか木乃香はこの話題は早々に切り上げて、今まで蔑ろにされてきた重要な項目を埋めに入る。

「ところで、キミの名前を教えてください。」

「……杏子……です。薬王寺、杏子」

女の子　杏子は街の喧騒に負けてしまいそんな小さな声でそう名乗った。

それに続いて刹那と明日菜も自分の名を杏子に教える。と言っても、全員の名前を交換し終えたところで、杏子が今の状況を把握出来る筈もない。

この少女自体にも不可思議な点は多々あるので、どういう風に説得いいこみをしようかと木乃香は考えを巡らす。

しかし、その思考を遮るように？きゅるるる？と四人の中で可愛らしい音が木霊した。三対の瞳が音源である杏子へと向けられる。その視線から逃れるように杏子は頬を赤らめて俯いてしまう。

「ちょうど今からご飯食べに行くところだったんやえ。行こっか」

そう言って、木乃香は杏子の手を引いて歩き出す。杏子は自分のワンピース姿を見下ろすと歩いて行く木乃香に待ったをかける。

「……わ、わたしお金とか持ってな」



その言語を遮ったのは、杏子を挟むようにして木乃香の隣を歩いていた明日菜であった。

「子供はそんなこと気にしなくていいのよ」

杏子の頭に手を乗せて、少々乱雑に頭を撫でる。初めのうち、杏子は少し身を固くしたようではあるが、嫌がる素振りは見せずそのまま明日菜に撫で続けられる。

「明日菜も大分調子戻って来たよね」

木乃香はからからと笑い、杏子の頭を撫でる明日菜を見やる。

「そ、そんなことは……あるわね」

木乃香が部屋で発見したときの意気消沈ぶりに比べれば、漸く本調子に戻って来たようだ。

「お嬢様が学校をサボった理由がやっと分かりましたよ」

杏子とは反対側で木乃香を隣を歩く刹那が溜息と共に呟いた。全員の言葉に耳を傾けながら、からからと木乃香は笑う。そして、四人はファミレスへと入店し、各々好きなメニューを食べるのであった。ある程度時間が経ち、運ばれた食器から料理が消えた頃を見計らって、木乃香は杏子に話し掛ける。

「さて、これから何処に行くかとか色々話し合いたいことはあるけど。その前にあんずちゃんに一言言っておくえ」

「……な、なんですか？」

態々改めて発言する木乃香に杏子も心なしか姿勢を正す。

「知らない人について行っちゃいけません」

その瞬間『おまえが言うな』と四つの瞳が木乃香を射貫いた。刹那と明日菜の視線を、木乃香は『行動を共にしてる時点で五十歩百歩やろ』と言いたげな笑みで跳ね除ける。

肝心の杏子はというと頭に疑問符を浮かべていた。

「……でも、最初は分からなかったけど、木乃香さんたちは知らない人じゃないですよ」

木乃香たちのアイコンタクトではなく、木乃香の発言そのものに対して。この一言に次は木乃香らが疑問符を浮かべることになる。

「あれ？ 前に会ったことあったっけ？」

見た目の年齢から察するに、初等部の頃に会ったことがないとも言いきれない。麻帆良での在校生の数を考えるとゼロに近い割合ではあるが。しかし、そこに中等部から編入した刹那も交えらると、出会ったのは二年以内ということになる。もう一度思い返そうとしてみるも、矢張り該当する記憶はない。

「……え？ でも、この前……あれ……？」

周りの反応を見てか言い出した杏子本人も自身の記憶に自信を持ってなくなったようである。

まあ、デジャヴの類は誰にでもあるよ。と木乃香が話の收拾にかかり、次の話題を提示する。昼からは何処に遊びに行くかということ

を。  
そして、ファミレスを出た四人はカラオケやゲームセンターに立ち寄り、ウィンドウショッピングを楽しんだのであった。

高かった陽は沈み始め、青かった空を今では赤色に染めている。

「いやー、楽しかったなあ」

と、一日を締め括るように木乃香が呟いた。他三人もその言葉に同意を示す。

「ところであんずちゃん。今日はこのまま泊まっていかがへん？」

そのまま何でもないかのような気軽な口調で木乃香はそう続けたのだった。一瞬、杏子は何を言われているのか分からずに呆けた顔をするが、意味をきちんと理解すると地面を食い入るように見つめてしまう。俯いて髪が垂れ下がり、杏子の表情は何えない。

「ちょっと木乃香。いきなり泊まられて言われても何の準備もしてないし、杏子ちゃんの親だって家で帰りを待ってるんじゃない」

黙って俯いている杏子を見て、明日菜は断りづらいのかな、とでも考えたのだろう。今日一日で杏子のことを見た限り、自己主張が強いわけではなく、こうして最後まで初対面の筈の自分たちに付き合っ

てしまっている辺り、押しに弱く状況に流されてしまうタイプ。だから断りやすいように明日菜は助け舟を出したつもりなのだが。

「……本当に、泊まってもいいんですか？」

消えてしまいそうな小さい声ではあったが、杏子が発したのは確認の言葉。裏を返せば帰りたくないという意味表示。

「うん。ちょっと約束があつてね。歓迎するえ」

何の心配もいらないうように、からからと木乃香は笑う。杏子はおずおずと木乃香の手を握った。

そのやり取りを明日菜は少し怪訝そうに見つめ、刹那は明日もサボりかなあと嘆息しながら寮への帰路に着くのであった。

寮に到着する頃には東の空は藍色から紺色へと色彩を暗く深く変化させ、星々を瞬かせている。西の空では夕日は沈み、かろうじて赤色の残滓を漂わせている。

そんな二つの世界を視界の両端に収め、四人は寮の中へと入った。杏子にとっては初めてとなる女子中等部学生寮への入寮である。この学園には見た目も能力面でも様々な人間が集まっているので、どう見ても小学生にしか見えない杏子が寮内を歩いても不審に思う者は誰一人として居ない。

六階までは四人一緒に。そこからは部屋が違う刹那とは別れて木乃香と明日菜は自分たちの部屋まで杏子を道順を教えながら案内する。

今日は帰ってきたら一通り掃除をするつもりだったけど、まあ明日でいいか。と、ダメ人間の思考に陥りながら木乃香は部屋のドアを開けた。当然だが朝と同じで何の変化もない。

「さあ、入って入って」

「……お、お邪魔します」

部屋に招き入れる木乃香とそれに続く杏子。しかし、その後ろで明日菜は部屋に入ろうとはしない。

「あー木乃香。やっぱり私このままお風呂入って来るわ。時間もちようどいいし、今日は歩き回ったから」

そう言っただけを返し、明日菜は歩いて来た道を引き返す。所詮今日やったことは辛い記憶を楽しむことで塗り潰して、辛い記憶と向き合う時間を稼いだ程度のものだ。

部屋の中に入れば否応無く彼女の主の私物が目に入る。まだ向き合えないならそれでも構わないが、木乃香としては時間稼ぎと称して明日菜が逃げ出さないよう祈るばかりである。と言っても、その類の心配はあまりしていないが。

大浴場へと向かう明日菜を見送りながら、木乃香は杏子にも意向を尋ねる。

「部屋に着いたばかりやけど、ウチらもお風呂行く?」

聞かれ、杏子は?くり?と頷くが、すぐにハツとして、

「……わたし、着替え持っていない」

何の準備もせずにここに居ることを思い出す。しかしこの問題は予

測可能であり、泊まることを促した者としては解決策を二つ程用意してある。

「着替えは大丈夫だよ。用意できると思うから」

まあ、最悪ゴスロリ服で我慢してね。と木乃香の最後のセリフに杏子は？きよとん？と小首を傾げていたが。

木乃香は自分の着替えと、もう着なくなった服を二着見繕い大浴場『涼風』へと足を運ぶ。

「この時間帯やと空いてるからウチの友達とかも居ると思うけど、ウチの親戚ってことで押し通そうか」

友人が居たときに聞かれるであろう問いを予想して、道中に口裏を合わせながら。

そして大浴場に辿り着くと、二人は脱衣場で服を脱ぐ。その際に、

「…………あれ？」

と、靴下を脱ごうとした杏子が声を上げた。彼女の視線の先には右足首に巻かれた緑色のミサンガがある。今日駅で会ったときに木乃香が渡したものだ。

「ああ。それは取ったらアカンよ」

杏子の様子を見た木乃香が横からそう指摘した。それに対し、何故？と杏子は小首を傾げながら木乃香を見上げる。

「ミサंगाはね、身に付けていた物が自然に切れたとき、願いを叶えてくれる物なんやよ」

まあ、ソレは材料やら着色料やら編み方なんかに気を配って、本来の用途とはちよつと違つんやけど。

そんなことを付け足してしまったからか、ますます杏子は混乱したようである。

「……願い事を叶えてくれるんですか？」

「うん。基本はそれでいいよ。あんずちゃんは何をお願いする？」

木乃香に問われると杏子は少し考え込んでから呟いた。

「……光の、向こう側に行ってみたい」

何かの比喩だろうか。その回答は少々要領の得ないもので木乃香は曖昧に相槌を打つのであった。

そして二人は服を脱ぎ終えると（杏子はミサंगाを付けたまま）脱衣場と浴室を隔てる扉を開ける。目の前に広がるのは寮の自慢にもされ、同時に百人近くが入れる大浴場。小さな市民プール程の大きさはあるだろう。建設費用や湯船の維持費なんかは考えたくもない規模である。その大きさを目の当たりにして杏子は感嘆の息を漏らした。

「あ、木乃香ーっ！ 最近会ってないと思ってたら、休み明けだからっていきなりサボリー？」

「その後ろの子どうしたの？」

新たに入って来た闖入者を目にし、既に風呂に入っていたクラスメイトたちが話し掛けてくる。

「親戚の子でね。今ちよつと預かってるんや」

「へー。ね、キミ。お名前はなんて言うの？」

早速杏子はこの場に居るクラスメイトたちに取り囲まれてあれやこれやと質問責めに遭ってしまう。まあ、全員根は良い人だ。ただその場のテンションなどについて行けなくなるときがあるだけで。

木乃香はその光景を微笑ましく見守りながら後にする。杏子からの救助を求める視線を振り切つて。後ろ髪を引かれる思いではあるが、やるべきことが他にある。

そして杏子を囲む輪には入らず、離れた場所で黙々と身体を洗っている友人の一人に声を掛けた。

「や。千雨ちゃん」

「学校サボって何をしてるのかと思つたら誘拐か。大丈夫。例えお前が鉄格子の向こう側に行くことになつたとしても、私たちは友達だから」

「ウチらの友情に乾杯」

「もしもし。警察ですか？」



「通報が早すぎるえ、千雨ちゃん」

電話を掛けるジュエスチャーをする千雨に、からからと笑いながら木乃香がツツコむ。意外と珍しい光景である。

さて、と気を取り直して、木乃香と千雨は少し真面目な話をし始める。

「それで？ なんなんだあの子。家出少女か？」

まず話を促したのは千雨。それに木乃香が答える。

「家出少女は間違いないやろうね」

「それは親への反発なんて有りがちなものなのか？ それとも家庭内暴力やらネグレクトなんて面倒な事件に発展するのか？」

そう言いつつ？ ちらり？ と千雨は杏子を見やる。一糸纏わぬ少女の身体はキレイなもので、生々しい傷なんて一つ足りとも存在しない。着ていた服も目立った汚れは無く、清潔なものだった。後者の線は薄いだらう。

「いや、他の事がほとんど何も分かってなくてね。でも初対面で言われたんよ。『陰陽師は大嫌いだ』って」

明らかに魔法関係者である発言に千雨は顔を顰める。そんな相手と行動を共にしているのかという意味も含まれているだろう。

「そこで千雨ちゃんにお願いが三つ程」

続けて喋ろうとする木乃香に向かって千雨は掌を翳す。これから先のセリフに待ったを掛けるように。

「朝のアレは『この後教室で』と言いつつ友人がいつまで経っても現れなかったから仕方なく調べたことだ」

「そこは普通に心配してと言おうよ」

「朝のアレは『この後教室で』と言いつつ友人が何か厄介事を引き起こしたのかと心配になって調べたことだ」

「せめて被害者側で心配されたかつたえ」

「まあ、つまりだ」

千雨は言葉を区切って、手に持ったタオルでボディソープを泡立て自身の身体を洗っていく。

「この件、私に関わる理由が無いんじゃないか？」

それを聞いた木乃香は？ハア？と溜め息をついた。

「オツケー。分かったえ。依頼します。まさか千雨ちゃんが友人から対価を迫るようになるなんて」

「ゴールドデンウィークにはその友人からの頼みってヤツで割り合わないタダ働きをしてな。その時から気を付けるようにしてるんだ」

「うわー。名も知らぬ千雨ちゃんの友人を恨むわー」

笑顔を作れなくなった木乃香と交代するように、シニカルな笑みを千雨は浮かべる。

「駅前に新しいスイーツショップが出来たらいいんだが、そこで奢ってくれればいいさ」

「え？ それだけ？」

「友人価格な」

確かにタダ働きではないだろうが安請け合いには変わりない。まだ詳しい内容も話していないのにその条件で請け負ってくれる千雨に感謝しつつ、木乃香は三つの頼み事について口を開いた。

「まず一つ目やけど、脱衣場にウチが着なくなった服があるから、あの子の寝間着とか仕立ててくれへん？」

これには大した労力も発生しないので、千雨も即答で了承する。

「二つ目にあの子の家庭環境とか調べれる？」

「構わないが。もしも黒だった場合は彩輝にも連絡すればいいの？」

「ややわー千雨ちゃん。プライベートでベツタリやからって、仕事でも兄様に依存するなんて思ってたほしくないわ。自分で出来る範囲のことで兄様に頼るつもりは一切無いえ」

まあ、どうしようもなくなったら頼るけどと、からからと笑いながら木乃香は続ける。

「そうやね。おじいちゃん辺りにでも教えたってよ。本業を忘れるなって忠告も兼ねて」

頷く千雨。今のところ服の造形と学生一人の家庭環境を調べるだけで、さして難しい内容でもない。

「それで、三つ目は？」

「……いや、三つ目は急ぎでもなければ重要でもないし。正直どうでもいいから事のついでってことで。部屋のことなんやけど」

予めそう断っておいてから、木乃香はその内容を口にする。

「ホント、どうでもいいな」

「だから二つ目の片手間でいいから」

聞いた段階でもう達成出来てしまいそうな、下手をすれば一つ目と同じくらいの簡単な用件であった。

「奢ってもらっただけで割に合う仕事だな」

そんな風に千雨は三つ全てを快く引き受けてくれる。話が終わるとクラスメイトから解放されたのか、はたまた隙を見て逃げ出してきたのか？すてて？と杏子が木乃香に向かって走り寄って来た。

「水場で走ると危ないえ」

月並みな注意をする木乃香を盾にして、杏子はクラスメイトたちの

様子を伺う。木乃香もそちらへ視線を送ると、その場を仕切つて友人たちを散らす明日菜と委員長の姿が。どうやら杏子は二人に助けられたらしい。しかしそれでもまだ聞き足りないのか、時折何人かはこちらに向かつて好奇の目を向けて来ている。

「災難だったね」

からからと笑いながら話し掛ける木乃香を杏子は涙目で睨んだ。

「……な、なんで一人で行っちゃうんですか……！」

少女にしてみれば、知らない場所で置き去りにされ、大勢の知らない人間に取り囲まれてしまったのだから、怖がりもするし怒るだろう。

それに謝りながら木乃香は杏子の頭を撫でる。特に最近は人の身体を撫でたりするには慣れてきたもので、途中からは杏子も気持ち良さそうに目を細めている。話を有耶無耶にした木乃香は、妹が居るというのはこんな気分なのか、と感慨に耽りながら更に優しく撫でてやった。

そんな姉妹のようなやり取りを千雨は隣で意外そうに見つめていた。『陰陽師は大嫌いだ』と本人に向かって言った人間には思えない懐きっぷりなので当然だろう。

千雨はそんな二人を横に、身体に付いている泡を流し落とすべくシャワーの栓を開く。シャワーの向きがよくなかったのか、勢いよく噴き出した水滴は千雨のみならず、隣に居た杏子の背中にも叩き付けられた。その瞬間

「きゃああっ！」

今まで幸せそうな顔をして頭を撫でられていた杏子が、悲鳴を上げて木乃香に飛び付いたのだった。固く目を瞑って僅かに身を震わせながら。

「あんずちゃん？」

そんな杏子の背中をあやすように木乃香は摩る。

「…………え？ あ、ご、ごめんなさい。いきなりでビックリしちゃって…………」

すぐに謝罪の言葉を口にした杏子に、木乃香は気にしないでと声を掛ける。そのときの杏子の表情は困惑の色が強かった。自分でも何故そこまで怖がったのか理由が分からないように。

「あんずっていつのか？ シャワーの向きをちゃんと確認してなかった私が悪かった。ビックリさせてゴメンな」

「…………い、いえ」

杏子は千雨の謝罪にも伏し目がちに答える。

「じゃあ、千雨ちゃん。さっきの件、頼んだえ」

「ああ。任された」

これで木乃香と千雨の話は終わった。木乃香と杏子がお互いの身体を洗いっこしている横で一足早く千雨は風呂から上がる。

身体を洗い終わった二人は、湯船に浸かって身体を温めたあと風呂から上がった。脱衣場で新品同様の寝間着と外着を発見し、杏子が驚いていたのは言うまでもないことだ。

そして寝間着に着替え二人は部屋まで戻る。

部屋には明日菜が先に帰って来ており、ふんだんに残っているネギの痕跡にも気に病むことはせず気丈に振る舞っている。

その後三人は夕食を取りに地下一階の寮生食堂へ。これは最近部屋を使っていなかった為、冷蔵庫の中に食材が入っていなかったからである。

再び部屋に戻ると時計の短針が目に見えて動いていると分かる程に三人は談笑した。杏子が漏らした欠伸が合図となって、今日はこのまま寝ることに。

明日菜は二段ベッドの上へ。杏子は木乃香の勧めで一緒に眠ることになった。電気を消し、三人は布団の中に潜り込んだ。斯くして、様々なことがあった一日は終わり三人は睡魔に身を委ねたのだが、日付が変わった深夜のこと。

もぞもぞと木乃香の布団の中で杏子が身を起こし、ベッドの外へ。足取りはトイレではなく玄関へと向かっている。

「何処に行くつもり？」

そんな杏子に寝たかと思われていた木乃香が声を掛けた。それに対する杏子からの返答は舌打ち。

「まったく。起きてんじゃねーわよ」

一片の光もない真つ暗な空間に二人の声と明日菜の寝息が響く。木乃香もベッドから起き出して、杏子のことを引き留める。明かりを点けるわけにもいかず、暗視の術を行使して。

「一応この女子寮は麻帆良で二番目に攻めるに難く守りの堅い場所  
で、余程の危険はないんやけど。匿うなら十分な条件やろ？」

「少しの間だって言ったでしょーが。もう必要ねーのよ」

暗視の術を使わずとも、今の杏子是不愉快そうに眉根を寄せていると判断出来るだろう。彼女の声色には隠そうともしない嫌悪が滲み込んでいるから。

「おかしなことを言うねアンズちゃん。ウチが依頼人の意向なんて  
気にするとも思つとるん？」

何当たり前のことを確認するのか、と宣う木乃香を無視して杏子は  
玄関へと足を向ける。木乃香は自分に背を向けた杏子を追いかけて、  
そして逃がさないよう抱きしめた。

「ひゃっ！ ど、どこ触って……！ 離せつてのー！」

杏子から抵抗を受けるとすぐに解放し、さり気なく木乃香は杏子と  
玄関との間に立つ。勿論、からからと笑みを浮かべながら。

「あのまま一緒に寝なかったのは正解だと確信したわ」



珍しく声を荒らげて狼狽する杏子。そのまま自身の身を抱いて後退するが、結果的に玄関からも遠ざかることになってしまう。

「そこにも誤解があるね。ウチは兄以外の人間に興味は無いえ」

碌でも無いカミングアウトにまたしても杏子は一步後退あしひざる。何故だか段々話が逸れてきてしまい、木乃香は話題修正を試みた。

「態々こんな夜中に出て行かなくてもええやろ」

「依頼人の指示を無視する不良少女にしては真っ当なこと言っじゃねーの」

「成績に優以外が付いたことのない不良少女の言うことは、ちゃんと聞くべきやと思うなあ」

「こんなサービスの行き届いてねー接客で優が付くとも思ってるわけ？」

「お客様は神様だなんて理屈は通用せんえ」

「お客様じゃなくてもワタシ自身が神様だからそこを開けるっての」

「神様なら口出しせず黙って偉そうにしてなさい」

「人間なら減らず口が許されると思っ  
てんじゃねーわよ」

笑みを絶やすことのない木乃香を見て、杏子は溜め息をついた。その直後には舌打ちもついた。

「もう匿わなくていいって言ってるのに、なんでアンタはまだ関わろうとすんのよ」

「うーん。存外、アンズちゃんのことを気に入ったからかな」

巫山戯んじゃねー、とでも言いたげに杏子は露骨に嫌そうな顔をす  
る。

「それじゃあ一言言っておくえ」

顔を顰める杏子とは対照的に、笑顔のまま木乃香は言葉を投げかけ  
る。

「分かりやすく嫌悪感を振りまいておけば他人と距離が取れるなん  
て甘い考えは、ウチら相手にはやめといた方がいいよ」

近衛彩輝を筆頭に相手の思惑やら都合なんでもものは考慮せず、好き  
勝手に動く集団に属しているのだ。依頼人にどう思われていようと  
その程度のことは木乃香にとって些事である。

そして杏子はその言葉を受けて一瞬だけ、たじろいだ。一瞬でも、  
たじろいでしまった。嫌がる素振りも見せず、嫌味も言わず、たじ  
ろいだ。これでは嫌っているという理由以外にも、離れたい訳があ  
ると告白してしまったようなもの。その一瞬の拳動を木乃香は見落  
とさなかった。

「さて、それじゃあ詳しい話を聞かせてくれる？ アンズちゃんは  
何から逃げてるの？」

「……ワタシは匿ってとしか頼んでねーし、これ以上は頼むつもり

もねーわよ。ああ、このミサンは貰うから」

杏子は簡潔に拒否を示すが、そんなこと木乃香は気にも留めない。

「うん。それはもうあげた物やし。恩着せがましく言うなら、ウチのおかげで監視の目から解放されたやろ、とか言うね。これはね、ウチが勝手にやりたいだけなんよ」

「何でそこまで関係ないことに首を突っ込みたがるわけ？ わけわかんねー」

「さつきも言ったやろ。アンズちゃんのこと結構気に入ってるんやえ。それに、この時期にアンズちゃんみたいな子と縁が合うのが問題なんや」

木乃香が指しているのは修学旅行のことである。東西の問題は多々あれど、一応魔法使いに好き勝手させないだけの均衡は取れていた。そのバランスを崩し、動く隙を与え、好きにさせる自由を与え、何よりも西洋魔術を貶め廃れそうな流派に希望を与えてしまった。

ならば、事の発端となった者としては、度の過ぎた行為に罰を与えるのは当然のこと。

何を言っても木乃香は引かないと察したのか、杏子はまたしても溜め息をつく。

「なら勝手にすればいいじゃねーの。何があったかなんて、どうせすぐに分かることだしさ」

諦めたように杏子は呟くが、更に続けて。



第六八話：Ring-a-Ring-o-Roses

幸せな日々はずっと続くかに思われた。しかしそれは呆気無く終りを迎える。

「お母さん今日はお仕事行かないでっ！」

それが朝目覚めた娘の第一声であった。母親に驚く暇も与えず、駆け寄ってしがみつくと娘は泣きじゃくる。

「どうしたの杏子<sup>アンス</sup>？」

背中を摩りながら声を掛けるも、娘は仕事に行かないでとの一点張りで一向に落ち着かない。

それでもどうにか時間を掛けて宥めると、何故そんなことを言うのか理由を聞く。

「お母さんが、頭からいっぱい血を流して……」

「大丈夫よ。私はどこも怪我なんてしてないでしょう？ 悪い夢でも見たのよ」

その後は娘に顔を洗ってくるよう促し、ちゃんと朝食を食べさせた。そして、支度をする二人揃って家を出る。

娘は学校が始まるまでには十分間に合うだろうが、母親は普段よりも遅くなってしまった。勤め先には少し遅れるとの旨を伝え、駅で娘とは別れる。

そして、娘が学校に着き級友と話していたときに？ぐラグラ？と校舎が揺れた。地震であった。揺れはかなり大きく、備品が倒れたりといった被害はあったが、幸い娘が通う学校で怪我人は居なかった。それから程なくして娘は担任から呼び出された。娘が何かしたという話ではない。先程の地震で母親が病院に運ばれたという連絡が入ったからだ。

手の空いている教師に連れられて娘は病院に向かう。嫌な予感がする。今朝母親に話したイメージが頭から離れない。

あれはただの夢。そう思い込もうとしても、これから授業を受ける自分が今病院に向かっている。その現実が娘をより不安にさせる。

病院に着くと受付で母親の病室を聞き、急いで向かう。病室に辿り着くとそこで付き添ってくれた教師とは別れた。

病室に入る。清廉な白色が支配する部屋の中で母親はベッドの上で眠っている。頭には包帯が巻かれており、数時間前の母親とはまるで別人だ。

娘はベッドの傍の椅子に腰掛け、母親を呼び続ける。どれくらいそうしていたらだろうか。やがてうつすらと母親の瞼が開いた。

「お母さん！ ごめんなさい。わたしが朝あんなこと言ったから…」

朝の再現であるかのように泣きじゃくる娘に、母親は大丈夫だと笑い掛ける。

「杏子が視たのは私が怪我をするだけなんでしょう？　なら、大丈夫。あなたを一人にさせるようなことにはならないから」

そう言つて、母親は娘の頭に手を伸ばす。優しく頭を撫でたのだつた。

「愛しているわ、杏子。あなたのおかげよ。あなたのような子をずっと待っていたの」

そうして母親はとても優しく、ひどく優しく、見たものを縛り付けるような温和な笑みを浮かべた。

この時だ。この時から始まったのだ。

麻帆良学園女子中等部女子寮643号室の朝は遅い。

比較対象として、部活の朝練がある人と比べているわけではなく、学生の平均的な起床時間と比べているわけでもない。そもそも登校するつもりがないのだ。

部屋の住人である神楽坂明日菜には新聞配達のアルバイトがあつたが、ゴールデンウィーク中に起きた事件の影響で当分の間は禁止されている。

二人部屋の相方である近衛木乃香は明日菜と共に文化系のクラブに

所属しており、朝練などはある筈がない。そして今日も昨日に引き続き、登校する気もない。

そのような気分です午前八時に悠々と目覚めた木乃香は、自分と同じ布団の中に杏子が、一段上のベッドでは明日菜が眠っていることを確認しベッドから起き上がる。

二人とも何だかんだ言って疲れが溜まっていたのだろう。

まず木乃香は洗面所に行って顔を洗うなどして身嗜みを整えると、私服へ着替えて近くのコンビニへ出掛けた。

冷蔵庫の中は相変わらず空と言って差し支えない状態で朝食を作ろうにも作れないのだ。昨日真面目に学校へ行っていれば放課後に材料を買う機会もあつたらうに。

擦れ違う寮監にまじない禁厭をかけながら寮を出ると、木乃香は歩きながら携帯を取り出す。刹那に連絡しようと思つて取つた行動だが、開いた画面には着信履歴が一件表示されていた。

画面に映し出されている名前は長谷川千雨。どうやら昨日頼んでおいたことが早速判明したらしい。その報告を睡眠中であつた木乃香は聞き逃したようである。

（相変わらず仕事が早いなあ。というか別にメールで送ってくれても構わへんのに）

木乃香は刹那への連絡を後回しにして千雨からの報告を優先する。履歴から千雨の番号を選択して発信。



今の時間だとHRはもう終わって、一時間目が始まるまでの休み時間中である。そのおかげか然程待つことなく呼出コールが途切れた。

「やつほー千雨ちゃん」

『よう。サボリ魔』

朝一番から辛辣な評価を頂いてしまう。何故だか最近は不良少女と呼ばれる機会が多い気がするが、今は依頼の報告を受けることが先決だ。

コンビニへと向かう足は止めず、改めて木乃香は千雨に昨日頼んだ件について尋ねた。

「それで結局どうなった？」

『楽な三つ目から言うぞ。まあ、ある程度予想してたと思うが、当分の間は誰にも使われないな』

そっか、と木乃香は相槌を打つ。出来る限り使わない方が良いのだろうが、転ばぬ先の杖として、もしものときの為に一応準備はしておく。

しかしこれは昨日も言ったが比較的どうでもいい部類の頼み事だ。続いて千雨は肝心な部分を木乃香に伝える。

『それで二つ目だが、ヤクオウジ薬王寺家は母子家庭で母親は高校の教師をしている。学園が把握出来てないからか、はたまた本当なのか、二人とも一般人ってことになってたよ』

「一般人ねえ……流石にそれはないな」

少なくとも杏子に限れば有り得ないだろう。初対面で護符タリスマンや呪物フェティッシュを  
所望する一般人の小学生が居るのならお目にかかりたいものだ。

『ああ。それについては同意する。少し前にその母親、ダイオラマ魔法球を購入してるんだよ』

「ダイオラマ魔法球ってエヴァちゃんの別荘のことよな？」

魔法球の外と内で時間の流れる速さが違い、外で一時間経過すると  
中では一日が経っているといった代物だ。少ない時間を引き伸ばし  
たいときに用いられるが、これ単体では悪用など出来る筈がない。  
しかし、千雨は薬王寺（母）を魔法関係者だと裏付ける証拠はこれ  
一つしかないと言う。触媒や呪物といったものは一切購入してない  
そうだ。

「じゃあ研究目的でダイオラマ魔法球を買ったわけやないってこと  
？」

『さあな。時間関係の魔法でダイオラマ魔法球そのものが研究対象  
ってこともあるかもしれないし』

意図はまだ判然としないが、学園に魔法関係者であることを隠して  
いると分かっただけでも儲けものか。

『そのあんずって子は「陰陽師が嫌い」って言ったんだよな？』

「正確には『大嫌い』やね。それがどうかした？」

『いや。勤めてる高校に気になることがあるっていうか……まあ、もうちょっと調べてみて、新しい情報が出てきたら教えるわ』

「お願いね。あ、それとおじいちゃんたちにはもう伝えてあったりする？」

『順番が逆になって悪いとは思ったが、母親の職業が教師だからな。朝の内に魔法先生が接触できるよう、深夜に情報流したぞ』

なら時間的にも、現在魔法先生は接触の真つ最中か既に仕事を終えているのか。その結果も千雨に頼むことに。

「じゃあ学校生活を満喫してね、優等生」

『はやく学校に出られるようになれよ登校拒否児』

千雨との通話を切る。程なくして視界にコンビニが見え始め、歩くペースを変えることなく入店する。店内ではおにぎりやパン、サンドイッチなどの軽食品を選び、エネルギー0kcal・脂質0g・タンパク質0g・炭水化物0gの清涼飲料水も手に取ってレジへ向かう。

レジに居た店員は平日の朝から私服姿の木乃香を見て一瞬怪訝な顔をするも、淀みなく商品のバーコードを読み取っていく。表示された金額と相応の代金を払い、コンビニ袋を手に提げて木乃香は再び寮に戻る。

帰り道で次は刹那と連絡を取る為に携帯を取り出した。木乃香は登録した番号の中から刹那のものを呼び出して発信する。

千雨同様こちらでもコール音が長く鳴り続くことはなく、すぐに刹那は電話に出た。

『今日もですかお嬢様』

「残念ながら今日もやね」

挨拶もそこそこに木乃香は先程千雨から聞いた話を刹那にも伝える。学園に魔法使いであることを隠している人物が今になって動き出したとなると一筋縄では行きそうにない。

刹那が気苦労なく登校出来るようになるのはもう少し先の話になりそう。授業内容など休んで遅れている分は話に上がったダイオラマ魔法球を使えばいいだろう。

不正の上塗りになっているが、その程度のことを気にする良心は何処かに置いてきてしまった。

『それで今日も何処かへ出掛けるんですか？』

「ううん。今日は寮周辺で過ごすと思うよ。寮監には誠心誠意ウチの気持ちを伝えてあるから寮の中を自由に歩いても平気やえ」

そうですね、と刹那は溜め息と共に疲れたような声音で答える。

『それでお嬢様。一体いつまで続けるんですか？』

刹那にしてみれば、木乃香の凶行を一刻も早くやめさせたいのだから。言ったところで木乃香が聞く耳を持たないのは自明の理だ。あ

まりに長引くようなら杏子の母親に直接会いに行ってしまうかもしれない。

「千雨ちゃんはスゴイからね。明日か明後日には終わると思うなあ」  
事情に関しては杏子から直接聞ければ早いのだが、彼女はおそらく話さないだろう。もしくは話せないだろう。裏表が激しいというか、最早人格が入れ替わっていると考えるのが妥当な豹変ぶりを思い出す。

それに昨晚の彼女の話では事情はすぐに分かるらしい。もしも千雨の報告よりも早く真相が分かったら、そのときは死刑宣告についても注意しよう。

杏子から殺人予告を言い渡されたことは刹那には伏せておく。言っ  
てしまえば、この幼馴染が杏子に対して昨日と同じように接するの  
は無理であろうから。

「まあ、多めに見積もっても来週からはちゃんと学校に出れるって  
それじゃあね、とこれを最後に通話終了。携帯を折り畳みポケット  
の中にしまっ。

コンビニ袋を空いた手で持ち直して、木乃香は悠々と寮への帰路を  
歩んだ。

五月の麗らかな春の陽射し。気温も大分暖かくなり、満開だった桜  
も葉桜に変わって夏の到来を予期している。

そんな一日の始まりで、木乃香が目覚めるよりも、学生たちが登校するよりも早く、一人の教師がある教師を訪ねようとしていた。

住所を書いたメモに従って道を進むのは、スーツ姿のガンドルフィ―二教諭である。

通り過ぎる家屋の屋根に止まっているカラスに見下ろされながら、彼が向かっている先は高校で教師をしている女性、薬王寺梢恵コクエという人の自宅だ。

同じ麻帆良学園で教師という職に就いている為、同僚と呼べなくはないのだから勤めている学校が違うので面識はない。

何故そんな見ず知らずの人の家を訪ねているのかというと、深夜の内に学園へタレコミがあったからだ。その内容は薬王寺という人がダイオラマ魔法球を購入した証拠。

結局タレコミをした人物が何者であるかは未だ不明であるが、事実確認の為学園も独自に裏を取ったところ本当のことだと判明した。

だとすれば、これを学園が黙って見過ごせる筈がない。その薬王寺という人物は魔法のことを知らない一般人なのだ。そんな人がダイオラマ魔法球を購入しているのならば、魔法を知った経緯や購入に至った動機、最悪の場合は記憶消去も考えなくてはならない。

何よりも現在学園は度重なる失態で、嘗ての権威を地の底にまで落としている。これ以上何か問題が起こるならば、少々強引な手を使つても事の解決、そして隠蔽にも辞さない所存だ。

当然だが、そんな方針に書いてこれない者も居る。元はといえば、こんな状況に陥ってしまったのは全て学園長の責任なのだ。

それなのに本国からは圧力がかけられ、給料が増えるわけでもないのにトップの所為で仕事は倍増。次の職を考えるなという方が無理な話である。

だからこそ一般人への魔法漏洩なんて重罪を、例え麻帆良の中であっても広めるわけにはいかない。

「だからと言って、こんな考え方は間違っている」

道中、ガンドルフィーニはそう呟いた。今現在このことを知っているのはガンドルフィーニと学園長を含めても極少数であろう。

隠し事が上手く、話す必要があることまで隠し、一度麻帆良を窮地に追いやった上司を信頼しろとは無理な相談である。

彼もまた学園へ　より正確に言うならば学園長へ　不満を募らせる一人のようだ。

しかし方針に納得しかねると言っても、魔法漏洩の件を放置していることにはならず、彼は薬王寺家へと向かうのであった。その足取りは重い。

普通の麻帆良に勤める教職員は学園から宛てがわれた教職員宿舎を利用する場合がほとんどのだが、薬王寺家は麻帆良近辺にあるかなり古い家で、彼女は実家から直接出勤しているらしい。最終学歴もこの麻帆良学園であるそうだ。

嘗て学生として過ごした街を、今は大人になり教師として過ごしている。本来ならば弾む話もあるだろう。時代と共に変わったもの。時を経て変わらないもの。そんな移り変わりを彼女はずっと見てきたことになるのだから。

しかし、それも今となつては一つの悩みの種でしかない。ずっと見てきたのならば、一体いつ魔法の存在を知ったのか。

先日のネギ・スプリングフィールドの従者の一件は行き過ぎにしても、万一普通の人間に見られた場合は記憶を改竄するなりして適切な処置を行っている。

その網をくぐり抜け、在学中には既に知っていたのなら、魔法を使って良からぬことを企んでいてもおかしくはない。

カーッ！

と、そんなガンドルフィーニの思考をカラスの鳴き声が遮った。もう一度メモを確認すると住所に大分近付いている。程なくして目当ての家が見えてきた。二階建ての木造建築で薬王寺との表札もある。到着したガンドルフィーニは早速インターフォンを鳴らした。

予め訪ねる旨は伝えてあるし、バックには学園長という一応麻帆良の最高権力者が居るのだ。適当な理由を作って一人の教師の出勤時間を遅らせるなど造作も無いだろう。

すぐに玄関のドアは開き、中から一人の女性が顔を出した。現れた女性は亜麻色の髪を靡かせ、温和な笑みを浮かべている。一分の翳りもない完璧な笑顔だ。



本人ならばとても一児の母とは思えないスタイルと若々しさを保っている。元が美人だからだろうか。その温和な笑みも相手に好印象を与える。

「はじめまして。私はガンドルフィーニという者です。朝早くにお邪魔して申し訳ありません。貴女が薬王寺梢恵さんでしょうか？」

「はい。そうですよ」

ガンドルフィーニの問いに彼女は首肯する。

「立ち話もなんですし、どうぞ中へ」

「お邪魔します」

温和な笑みを浮かべたまま、梢恵はガンドルフィーニを家の中へと招き入れる。その笑みは何も知らないから浮かべられているのか。それとも全て承知の上で笑っているのか。

玄関の戸を通り抜ける瞬間からガンドルフィーニはどんな事態にも対処できるよう警戒レベルを引き上げる。

学生の頃から魔法を知っていたとしても師事する相手が居なければ、魔法を使える筈がない。しかし、その相手がかもしも居たとしたら。

最近彼女はダイオラマ魔法球を購入している。時間ならば山ほどあるのだ。彼女が魔法使いなら、この家にも罫の一つや二つあったとしてもおかしくない。

ガンドルフィーニは客間へと通される。梢恵は一度お茶を淹れに台

所へと姿を消した。

窓の外を見ると今まで歩いて来た道を眺めることが出来た。そこから隣家の屋根に止まっている複数のガラスも。来るときもそうだったが、この辺りはガラスの数が異様に多く感じる。

「何か気になるものもありますか？」

声を掛けられ、視線を客間の入り口へ移すと、お盆の上に二つの湯呑みに乗せた梢恵が戻って来ていた。相変わらずこちらの警戒心を和らげるような温和な笑みを張り付けて。

「どうぞ」

梢恵はテーブルの上に湯呑みを置く。

「ありがとうございます」

ガンドルフィーニは礼を言うものの湯呑みに手を伸ばそうとはしない。梢恵はガンドルフィーニと対面するよう椅子に腰掛ける。

「それでガンドルフィーニさん。急な用件と伺っておりますが、私にどういった御用が？」

何故だか今日は、勤め先から出勤するなど遠回しに言われておりまして。

これまでの経験からくる勘であろうか。ガンドルフィーニは確信する。この女は自分が訪ねて来た用件を理解している。そうでなくとも予想している。

先程から何一つ変わっていない筈の温和な笑みが、今では得体の知れないモノに見えてしまう。

「つい最近ダイオラマ魔法球を購入したそうですね」

単刀直入。

何も取り繕うことなくガンドルフィーニは切り出した。

「ええ。そうですよ」

それに対する梢恵の答えも、また簡潔明瞭なものであった。温和な笑みは崩さずに、初めから用意していたかのような即答である。

「一体いつから魔法のことをご存知で？」

最早ガンドルフィーニに油断はない。ここは目の前の人物の家の中。何が起ころうともいつでも戦闘に移れるように気を張り巡らす。

「まあ、少し驚かせてくださいよ。あの子がお孫さんに接触したときからこうなることはある程度予測していたとはいえ、まさか次の日に訪れてくるなんて」

あの子はほとんど何も覚えていない筈なんですがねえ。

警戒を顕にするガンドルフィーニとは対照的に、梢恵は笑みを崩さない。余裕を失うことはない。逆に梢恵の言葉を聞いて更にガンドルフィーニが緊張した。

「あの子？」

そう。確か薬王寺梢恵は娘と二人暮らしだった筈だ。

「アンタ、自分の娘に何かしたのかッ！」

思わず想像してしまった内容を打ち消すように激昂する。事実なら正義だとか悪だとかそれ以前の問題だ。そんなことがあっていい筈がない。

魔法関係のことばかり考えていたからか。どうしてももっと早く気付かなかつたのだろう。本人は学校から行くことを止められているとはいえ、娘の方は登校の準備をしている筈だ。

子供が登校する前の母親が、こんな風に悠々と来客をもてなすだろうか。

そしてガンドルフィーニの激昂を梢恵は不思議そうに聞いていた。

「あら？ てつきり学園が保護しているものと思っただけで半ば諦めていたのですが。……ああ。信用されていないのね、貴方たち」

納得したように梢恵は頷くと椅子から立ち上がろうと肘掛けに手を付いた。

「動くな」

その挙動をガンドルフィーニは隠し持っていた拳銃を眉間に突きつけることで制止させる。

「物騒な物をお持ちですね。銃刀法違反の現行犯で警察を呼びますよ?」

銃を向けられても尚、彼女は温かな笑みを崩さない。笑顔を絶やすことはない。だがその表情はひどく歪なものに見える。きっとこの女は穏やかな笑みを浮かべたまま、人を殺すことが出来るのだろう。

「勘違いなさらしないで下さいね。別に私は学園の不利益になることをしたいわけではないんです」

「そうですね。ではそれも踏まえて、詳しい事情は場所を移してからするとしましょう」

拳銃を突きつけたままガンドルフィーニは席を立つ。彼女が魔法使いかは分からないが、念の為抵抗出来ないように魔力封印の呪文を唱えながら。

しかし、ガンドルフィーニが呪文を唱えきることはなかった。?ばタン?と客間の入り口である扉が勢いよく開いたのだ。

(協力者かッ!?)

ガンドルフィーニは梢恵から視線と銃を逸らし、開け放たれた扉へと注意を向ける。だが、そこには誰一人として存在しない。ただ、そこには黒色の塊が蠢いていた。

バリント

その次には窓ガラスが割れた。外側から圧力が掛かったガラスは部屋の内部へと破片を撒き散らし、侵入したモノを受け入れる。外の

景色は一面の黒色に覆われた。

「他人の工房に足を踏み入れた時点でそんな警戒は無駄なのに。ガンドルフィーニさん、貴方の姿はとても滑稽でしたよ」

こんな状況でも女の表情は温和な笑みを浮かべたまま。だが、その声色には確かに侮蔑が含まれていた。その顔も声もガンドルフィーニには届かない。

既に彼の視界は黒以外の色彩が失われているから。部屋を覆い尽くす程のカラスに全方位から襲われているから。

銃を乱射しようとも、取り出したナイフを乱暴に振り回そうとも、一匹二匹と少しずつ数を減らしたところで焼け石に水もいとこころ。

その身は嘴や爪で引き裂かれ、一分も経たないうちに武器を握っていらなくなる。カラスたちは眼球など柔らかい部位を重点的に狙ってきて、ガンドルフィーニは蹲ってただ嵐が過ぎ去るのを耐え忍ぶしかない。

「そういえば、私がいつ魔法を知ったのかお尋ねになられましたね。そんなもの、生まれたときからに決まってるでしょう」

彼女の独白も当然のようにガンドルフィーニには聞こえていない。けたたましいカラスの鳴き声に遮られ、耳障りな羽音に阻まれて。

「疾  
」

そんな五感の半分がカラスに向いているガンドルフィーニを次は真っ赤な紅蓮の業火が包み込んだ。業火は飛来した符から喚ばれたも

の。符を放ったのは薬王寺梢恵である。

部屋の調度品には焦げ目すら付けることなく、大量のカラスとガンドルフィーニを纏めて焼き払ったのだ。

「……生きてるかしら？」

服は焼け落ちて、肌は至る所が焼け爛れているガンドルフィーニを見て梢恵はポツリとそう漏らした。生死を確認すると、ガンドルフィーニは辛うじてまだ息をしている。

「もう色々と手遅れだけど、ここで殺してしまうと本格的に追われてしまうわよねえ。彼女から貰ったモノはほとんどダイオラマ魔法球の中だけど、諦めるしかないか」

本当はもう少し仕込みに時間を割きたかったわ。

未だ原型を留めているガンドルフィーニの携帯を踏み潰し完璧に破壊すると、次に梢恵は別室に安置されているダイオラマ魔法球を自らの手で破壊した。安々と持ち運べるものでもないし、自分がここを去れば学園が勝手に使うことになるだろう。これでこの中で何が行っていたか知る術は完全に失われてしまう。

「さてと。それじゃあそろそろ杏子の迎えに行きましょうか。無断外泊だなんて、しっかり叱ってあげないと」

温和な笑みを浮かべたまま薬王寺梢恵は自身の家を後にしたのであった。

寮部屋に着くと既に明日菜も杏子も起床しており、買ってきた軽食品類と飲み物をガラステーブルの上に並べる。

「ザツとしててゴメンね。出掛ける用が無いんやったら、昼は買出しに行つてちゃんとしたもの作るから」

そう言いつつ、木乃香はタマゴサンドを手を取って封を切る。

「寝過ぎしちゃったけど、今から学校行つた方が良くない？ 杏子ちゃんだって無断欠席になつてると思っただけど」

普通は親にだつて連絡入つてるだろうし、心配してるんじゃないの。

明日菜はそう言ってテーブルの上のおにぎりに手を伸ばした。明日菜がシーチキンマヨネーズを手取るのを見ながら、それはないと木乃香は考える。

昨日、駅で木乃香と杏子の接触を誰かに見られていたのは確かだろう。それが杏子の母親ならば、学園長の孫娘に匿われている程度の可能性は考える筈。別人だったとしても、ダイオラマ魔法球によって時間を提供している協力者の線もある。

最近の情勢を鑑みるに、ここで母親が全くの無関係とは考え難い。小学校の方は病欠などちゃんとした理由で休みになつていようだろう。

(流石にこれは千雨ちゃんでもどうしようもないだろうし)

あくまで長谷川千雨が情報収集で力を発揮するのは、画面の中のネットの世界でだ。まだアナログの出席簿にしか記されていない情報



を入手するのは困難であろう。

木乃香はタマゴサンドを一口齧り、杏子を見やる。

「……………」

流石にコンビニで適当に買ってきた朝食は味気なさ過ぎるのか、杏子はテーブルの上に置かれたおにぎりなどには見向きもしていない。というか、ボーッと窓の外を見つめている。

「あんずちゃん？」

「……………」

こちらから話し掛けても無反応。どころか眺めている方に向かって手を伸ばそうとする。そんな杏子に木乃香はテーブルの上を横切るように手を伸ばし、肩を揺らした。

「わっ！ な、なんですか木乃香さん？」

杏子は我に返ると？びクリ？と身体を震わせて、伸ばしかけた手を引っ込める。そして不思議そうに木乃香を見つめた。どうやら先程の呼び掛けには全く気付かなかったようである。

「こんな朝食で悪いけど、無いよりは食べた方が良いと思うえ。それともこういう物は嫌いだった？」

「…………い、いえ。どちらかと言うと、好きです。ありがとうございます。」

礼を言うと、杏子もテーブルの上に置かれているメロンパンを掴み取った。封を開けると小さな口で少しずつ咀嚼し始める。

「あんずちゃんって朝に弱いのかな？」

杏子が頬張った分を呑み込むと、次にメロンパンを口に運ばれる前に木乃香がそう尋ねる。

「……そんなにヒドくはない、と思います」

「そっか」

このような感じで取り留めのない会話をしつつ、三人は朝食を食べ終える。

空になった袋類をゴミ箱へ捨てると、木乃香は今日一日の予定を口にした。

「掃除しよっか」

最近はずっと部屋を空けていたし、昨日も掃除をしようなどそのよくな意気込みはした筈だ。既に学生として一番大切な用事を放棄している以上、他に急ぎの用もなく、午前中はこうして時間を潰すことになった。

明日菜は勿論、一泊した杏子も異議はなく三人は掃除用具を手にする。

木乃香と明日菜は高いところから埃を落としていき、床掃除はフロアリングワイパーで手軽にゴミを取る。埃を舞い上げてしまう掃除

機は、ワイパーで取れなかった大きなゴミを集めてから使用。

その間にも杏子は古新聞紙で窓ガラスの内側を拭くのに専念する。手を動かすだけの単純作業に慣れたのか、無意識であろうつ内に喉が動いたようで、そこから歌が流れた。

R i n g - a - R i n g - o ' R o s e s  
R i n g - a - R i n g - o ' R o s e s  
A p o c k e t f u l l o f p o s i e s ,  
A t i s h o o ! A t i s h o o !  
W e a l l f a l l d o w n .

杏子が口ずさんでいるのは、英国の伝承童話の総称、マザー・グースである。

「あんすちゃんって歌とか好きなん？」

そんな杏子の様子を見た木乃香は早速声を掛ける。声を掛けられた杏子は恥ずかしがるように顔を俯かせ歌うのをやめてしまうが、木乃香の問いにはちゃんと答えるのであった。

「……お母さんがよく歌ってて、それで」

身内から影響を受けてしまうのは、木乃香自身とても覚えのあることで、聞いているうちに自分も覚えてしまったという感覚はよく分かる。

「うちも兄が一人居ってな。よく楽器とか弾いとるんや。まあ、最近は口三味線に乗せることが多いんやけど」

口三味線には二種類の意味がある。口で三味線の伴奏を真似ることと、言葉巧みに相手を言いくるめて騙すこと。そのどちらかは今更言うまでもないだろう。

「じゃあ最近木乃香の舌がよく回るようになってるのは彩輝さんの影響なの？」

今まで話を聞いているだけだった明日菜もこれを機に会話に参加する。

「そんなことはないえ。一昨日は指で直接舌を回されたけど」

「えっ」

「……えっ」

「ん？」

聞かなかったことにされた。

床掃除が終わると木乃香と明日菜も窓拭きをし始め、他愛ない会話をしている内に掃除は一通り終えることが出来た。

時計を確認するともうすぐ正午に差し掛かるといったところ。起床が遅く掃除に取り掛かるのも遅かった所為だろうか。思っていたよりも時間が過ぎてしまっている。

連日続けて外食で済ますのも問題なので、宣言通りに木乃香は昼食と夕食の為に買出しへ出掛けようとする。

「あんずちゃんも昼食べたいものとかある？ 昨日は色々サボったからね。今日は腕を振るうえ」

腕を振るう前に勤勉に励め、と忠告してくれる人間はこの中に入る筈がなかった。杏子からの返答は何でもいい。遠慮しているのかわからないがメニューに困る回答である。

「最近は無駄に料理の上手い人たちと一緒に居たから、ウチの腕も多少上がってると思うえ」

取り敢えず、幾つか献立を見繕っておいて、実際に何を作るかはスーパーに行つて食材を見ながら考えようと木乃香は部屋を出る。それに続いて明日菜と杏子も。

道中には、これから買い物に行く刹那に連絡を入れ、昼食は一緒に食べようと誘い、作り終えるまで待つてくれるよう頼んだ。

学園都市の平日昼間。休日と比べると驚く程に人通りは少ない。同じように道を歩いている人も行き先はこの先のスーパーか駅に二分されるだろう。

駅は人の流れと土地の流れが交わる地点で、自然と霊脈が通つていたり竜穴があったりする。だから駅に沿っているこの道にも程度の差はあれ霊脈が流れているのだろう。

そんな風に兄から習ったことを復習をしながらスーパーに着くと、食品売り場を見て回る。後ろからは？すてて？と杏子も着いて回り、商品をカゴの中へ入れていく。

商店街ならば値段をまけてもらうことも出来るのだろうが、学校を

サボっている手前この時間帯では諦めるしかない。差額についても同様だ。

一通り見て回ると木乃香はレジへと向かい、会計を終える。買った商品を二つのレジ袋に詰め替えると、片方は自分で、もう片方は明日菜に渡し、寮への帰途に着いた。

その途中。木乃香の携帯が鳴り響いた。

三人で並んで歩いている中、木乃香は携帯を取り出して着信相手を確認する。画面には長谷川千雨と見慣れた文字が表示されていた。

学校に真面目に通っていれば、今の時間は昼休みだ。時間に空きが出来、また何か調査が進展したのだろうか。

携帯の画面から明日菜と杏子へ視線の先を変えると、木乃香は二人に先に帰るよう促した。

人通りが少ない道を歩いて行く二人の背中を見送って、木乃香は携帯の通話ボタンを押した。

「もしもし千雨ちゃん。何かあった？」

『ああ。色々あったな。取り敢えず、良くないニュースと悪いニュースの二つがあるけど、どっちから聞きたい？』

どちらも同じ意味で、良いニュースは無いようである。木乃香は溜息をつくると千雨に話の続きを促した。

「じゃあ、千雨ちゃんが言いやすい方からお願い」

電話の向こうで千雨が少しの間黙り込む。どちらも話し難い内容なのだろうか。僅かな沈黙でも木乃香のテンションを下げるには十分であった。

『……薬王寺（母）が勤めてる高校にはさ、去年の夏休みまでとあるスクールカウンセラーが働いてたんだよ』

「スクールカウンセラー？」

『関東魔法協会が出来る前まで麻帆良周辺を仕切ってた結社の一員な』

「つまり薬王寺（母）もその結社の一員ってこと？」

『いや、それはないな。その結社の相手をしたのが朱織だから』

それを聞いて思わず、ご愁傷さまと心の中で呟いてしまう。ならば結社に関しては関係ないのである。ただ薬王寺（母）に、学園に正体が知られていない魔法使いとの交友があったということ。

「呪物類はその人を經由して流れてたかもってわけやね」

『その可能性はあるな』

これで多少の人脈があったことは分かった。問題はその人脈を利用して、何をしていたかということ。早速木乃香は千雨に尋ねるが。

『そのことは二つ目のニュースになっちまうわけだが』

一旦前置きを言ってから、再び千雨は話し始める。

『学園の魔法先生、薬王寺（母）に接触して返り討ちに遭ってきた。そのときに証拠の塊であるダイオラマ魔法球はただの粗大ゴミになつたらしい』

そして木乃香は自分の失策を悟る。

昨日杏子と駅で会ったとき以降、妙な式は見ていない。あちらが警戒してか監視の目はなかった筈だ。つまりこちらの状況を薬王寺（母）は全く知らない。そこに焚きつけるように魔法先生を遣ってしまった。その魔法先生がどこまで喋ってしまったのか。まだバレていない杏子の居場所を見つけられる要素はないか。そう考えたところで。

「ところで千雨ちゃん。こんなに早く展開が進むとは思ってなくて、現在進行形で無防備に外出なんてしちゃってるんやけど。しかも電話中やかからあんずちゃんは先に行かせて、もう姿は見えなくなつたりする」

『あーあ。急いで追い掛けるよ』

千雨の声に被さるように木乃香の周囲からは？ばさばさ？と羽ばたきの音が四方八方から木霊する。

「ついでに千雨ちゃんの方からせつちゃんに連絡取ってもらっていいかな？」

『ああ。場所もちゃんと知らせといてやるから』



「千雨ちゃんが居てくれて、ホント助かるわ。じゃあね」

そして木乃香は通話を切って携帯をポケットにしまう。その次に周囲を見渡す。

平日昼間。ただでさえ少ない人通りはいつの間にか零になっていた。その代わりと言うように街路樹や電灯、建物の屋根からは大量のガラスのけたたましい声が落ちてくる。

「まあ、予想してなかったと言えば嘘になるけど。やっぱり空から探すよねえ」

何十匹居るのだろう。咄嗟には数えられない量のガラスが一斉に空へ舞い上がった。木乃香は向かってくるガラスたちを眺めながら、眼前に迫る数の暴力に魔法先生もやられてしまったのかと考える。この数を相手にするなら点や線の攻撃は無意味に近い。だからこそ、

「『庄』」

点や線ではなく、面で。羽ばたいているガラスたちは一匹たりとも例外なく？べしやり？と地面に叩き付けられた。

「一匹一匹を使役してるわけじゃなくて、力の強いヤツを分割して一群として扱ってるわけか」

淡々と黒に染まる道路を眺め、手近な一匹を踏み潰したりと検証しながら、木乃香はそう分析する。

「相手の特徴を言うならば、使役に特化した陰陽師やね」

折角買った食材が無駄になったなあ、って余裕を持って言える人になりたい。

木乃香は手に持ったレジ袋を投げ捨てて走り出した。

「ねえ、杏子ちゃん」

電話が掛かってきたらしい木乃香が離れて、明日菜は杏子と並んで帰宅している途中のことであった。

人通りが疎らな通りを歩きながら、明日菜は杏子に話し掛ける。少女が懐いているのは木乃香であるが、昨日からずっと一緒にいる明日菜にもそれなりに懐いてくれている。初対面のとときの言動が嘘のように。

「木乃香は聞こうとしないけど、本当に帰らなくてもいいの？」

木乃香が居ない今、二人が明らかに避けている話題を振った。朝のうちにも尋ねようか悩んだのだが、杏子が夢現だった為そのときは諦めたのだ。

だから杏子の意識がハッキリしていて、尚且つ二人きりになった今明日菜は杏子に尋ねる。

「……………」

やはり言いづらいのだろう。横を歩く杏子は顔を伏せ、返ってくるのは沈黙のみ。

「……本当は」

それでも、いつかちゃんと聞かれることだと分かっていたのか、少しずつゆっくりと小さな声量で話し始める。

「……家には帰りたくないけど、自分でも理由がよく分からないんです」

「どづいづこと？」

明日菜としては家出の理由を、最悪親との仲裁も出来そうならば視野に入れて、聞いたつもりだったのだが、この返答は流石に予想してなかったようだ。

「……最近ところどころ記憶が、あやふやになっててえ……」

段々涙声になりながら？グスン？と杏子は鼻をすすする。

「……木乃香さんは駅で会ったっていうけど、わたしには駅に行つた覚えが無いんです。目覚めたら刹那さんに背負われてて。それどころか会つたことのない人を知つてたり」

溢れそうな程涙を目に溜めて杏子は明日菜を見上げる。

「……わたしは、何を信じればいいんですか……？」

縋るような目で明日菜を見つめる。

昨日の自分が一体何をやってたのか分からない。それは確かに不

気味で、怖い。杏子から視線を外さないようにしながら、明日菜は一人の友人を思い出していた。

朝倉和美。

ネギと仮契約していなかったから、記憶を消されてしまった友人のことを。

一時的にでもそんな危険に晒された明日菜だから理解できる。それを目の前の少女は日常的に体験しているのだ。

今まで考えないように、思考に蓋をしてきたのだろう。その蓋を明日菜は開けてしまった。開けてしまったのに関わらず、明日菜にはどうすることも出来ない。

この子が木乃香に懐く理由も分かった気がする。何も聞かず、当たり前のように無条件で受け入れて、不安にさせないよう笑みを絶やすことをしなかった。

ならば自分はどうすればいいのだろう。踏み入ってはいけない領域に、深く考えずに足を踏み入れ。このまま何もしなければ、否、したとしても、少女の気持ちや踏み躪る結果になりはしないか。

「杏子ちゃん……」

言い淀む。ここから先へ続かない。何を言えばいいのか分からない。

その時だった。

「杏子ッ!」

遠くから少女を呼ぶ声が聞こえた。目を向けると杏子と同じ亜麻色の髪を靡かせてこちらに走って来る女性の姿が。

「……お母さん」

ポツリと漏らした杏子の言葉に明日菜は心底安堵した。母親が来たのならば、これで不用意なことを喋らずに済むと。

その女性は杏子の目の前まで駆け寄ってくると、地面に膝をついて杏子のことを力強く抱きしめた。

「ああ。良かった。こんな所に居たのね。ずっと探してたのよ」

杏子が帰りがたらない理由は分からなかったが、母親らしき女性は本気で杏子のことを心配しているように見える。

なのに。何故だろう。杏子が怯えるように震えているのは。

「あの」

そんな杏子を見てか、水を差すようについ横から口を挟んでしまった。

母親は明日菜を見やると立ち上がり頭を下げる。

「ありがとう。貴女がこの子を助けてくれたのよね？ 名前を教えてくださいませんか。何かお礼をさせて欲しいの」

「私は神楽坂明日菜といいます。お礼なんてそんな。本当ならすぐ

に連絡しないといけないのに、それを怠ってしまったってすみません」

「神楽坂さんが謝ることなんてないのよ。良かったわね、杏子。良い人に会えて」

母親は温和な笑みを浮かべると、もう一度膝について杏子と目線を合わせる。

「……………あ……………う……………」

「ごめんね杏子。もう少し時間を掛けてあげたかったのだけれど、あまり余裕が無いみたいなの」

明日菜には何のことを言っているのか理解出来ない。それでも杏子の様子を見るからに、嫌な予感がする。

そして母親は杏子の右足首に手を伸ばし、そこに結ばれていたミサングを引きちぎった。

「式を一目で見破られたみたいだったから注意はしていたけど、ここまでとはね」

そう呟いてから明日菜たちが今まで歩いて来た方向を見ると、次は自分の指を噛み切った。

「な、何やってるんですかっ!?!」

驚いたのは明日菜だ。一見優しそうな笑みを浮かべる母親が、突然自分の指を噛み切れれば誰だって驚くであろう。

そんな明日菜の声も、指から流れ出る血も構うことなく、母親は白い錠剤を取り出した。錠剤はすぐに血の色に染まる。

「ちょ、ちょっと!」

見かねた明日菜が母親の奇行を止めようとするが、

「『神楽坂明日菜、動くな』」

途端に身体が重くなって、動きが鈍くなってしまふ。彼女が放ったのはただの言霊だ。魔法というよりも暗示の色合いが強いのだろう。だからこそ魔法無効化能力も十全には発揮されない。何よりも、陰陽師相手に真名を教えた時点で、素人の明日菜にはどうすることも出来ない。

「貴女にはちゃんとお礼をしたいのだけれど、今は邪魔しなくてもらえるかしら」

そして母親は杏子に向き直る。杏子は蛇に睨まれた蛙ように動けないでいる。そんな杏子に母親は血に濡れた錠剤を口に運び、飲み込ませた。

「オン」

刀印を結び一言唱えると、杏子の変化は劇的であった。

「あ、あは、アハはハハはっ」

何を見ているのか分からない虚ろな目で、しかし恍惚とした表情で、宙に向かって手を伸ばす。

「綺麗な光い。ねえ、貴女はだあれ？」

そんな杏子の様子を気にすることもなく、温和な笑みを、優しさを通り越し、相手を縛り付けるような笑みを浮かべたまま、母親は声を掛ける。

「愛しているわ、杏子。だから、私の期待に応えてね」

そうして、母親は立ち上がり対峙する。致命的なまでに遅れて登場したもう一人の陰陽師 近衛木乃香と。



なんとなく思い付いた掛け合い。特に意味はないし、本編にはさして影響しない。

無駄に1000字もあるので注意。

千雨

「よう、クシナ。学校には慣れそうか？」

九

『もしもし千雨さん。おはよう御座います。怠惰な生活を送っている暇人のお話に付き合う時間は少ないのでさっさと用件を述べやがってください』

千雨

「相変わらずだなお前は。まあいいや。お前と同学年でA組に薬王寺杏子って子が居るんだけどさ、ちょっと出席状況とか聞いてみてくれないか？」

九

『うっわ。いいですよ』

千雨

「素敵な返事をありがとう。じゃあよろしくな」

九

『……他に聞くことはないんですか？ ちなみに私が今穿いているパンツの色は水色です』

千雨

「……誰得だよ」

九

『少なくとも、私の周りに居る男子は興味ありそうですよ？』

千雨

「うっわ。お前の将来がすごく不安」

九

『千雨さん千雨さん。手鏡はちゃんと持ってますか？』

千雨

「クシナクシナ。お前の携帯はこの通話が終わったら爆発する」

九

『ッ……！ 常々思っていました。密室殺人とかフルオートで仕掛けられるんじゃないですか？ 探偵泣かせもいいところですよ』

千雨

「近い将来『探偵殺し』とか呼ばれるヤツには逢うらしいけどな。ま、それはともかく、よろしく頼んだぞ」

九

『それと千雨さん』

千雨

「何だ？」

九

『私の性格を気にして周りや円滑なコミュニケーションを取らせようと算段を立てているなら、余計なお世話です。いらぬお節介です』

千雨

「ははっ。考えすぎだよ。ちょうど調べ物の適任が居たから頼んだだけだ」

九

『……そうですか。では、失礼します』

昼休みメール受信

千雨

「『どうやら薬王寺杏子という女生徒は四月三十日から学校を休み続けているようです。それとなくA組の生徒や担任に聞いてみたところ、二十九日から家族で旅行に出掛け、今は旅の疲れから風邪を拗らせてしまったと。』

こんな情報しか提供出来ず、大変心苦しくはありますが、他にも

お役に立てることがあればいつでもご連絡ください。貴女から受けた恩をこの程度で返せるとは思っておりません。この借りは必ず返させていただきます。貴女とは負い目のある恩人としてではなく、一人の友人として付き合っていきたいのです。出過ぎたことを言うかも知れませんが、これからも宜しくお願い致します』……………普段からこのくらい素直なら可愛い後輩なのにな」

茶々丸

「どうぞ、手鏡です」

千雨

「木乃香に連絡すんの、もうちょっと待ってた方が良かったかな」

第六九話：Ring - a - Ring - o - Roses 4

それは例えるなら、白い陶器のようであった。

どの方向から見ても曇り一つなく、なめらかな光沢は見る者の心を穏やかにする。

だが、形ある物がいつか壊れるよう、その陶器も壊れる日がやって来た。

一瞬で破片に変わったわけではない。まずは陶器に？ぴシリ？と小さな罅が入った。具体的な時期を言うならば、去年の夏から秋に変わる頃の話だ。

「どうして今頃になって。何か大きなことをやりそうな雰囲気ではあったけど、百人近くを一日や二日で処理するなんて」

この学園を侮っていたということかしら。

二学期の始業式が終わり、その日は普段よりも早く家に帰った。そこで娘は予想外にも自分より早く帰宅している母親を発見したのだ。

「ただいま。今日は早いね、お母さん」

母親は娘の帰宅に気付かず、机に向かって時折何かを呟きながら、深く思索しているようだった。

ここまで何かに没頭している母親の姿を見るのは娘にしても初めてのことだ。だから邪魔をしないよう傍で母親を眺めていた。

「時間が無い、かもしれないかしら」

ふう、と息を漏らして母親が気を抜くと、早速娘が話し掛けた。

「どつしたのお母さん？」

母親は驚いたように声のした方へと目を向ける。娘が帰って来たことに本当に気付かなかったらしい。それほどまでに思考に没頭していたようだ。

「おかえり杏子。<sup>アンス</sup>ごめんなさいね、すぐに気付かなくて」

「ううん。それより何考えてたの？ お母さんが何かのにめり込むの初めて見たよ」

「そうかしら？」

「そうだよ」

屈託なく笑う娘の顔を見て母親は苦笑を浮かべる。

「頃合いなのかもしれないわね」

「何が？」

疑問符を浮かべる娘に、母親は一息つくと言語り始める。この世界の裏側を。

「ねえ杏子。魔法って信じる？」

この日を境に穢れを知らない純白の陶器には罅が入るようになった。罅は段々大きくなり亀裂となって、今まで美しい外見の中に隠されてきた内容液を漏れ出させる。

汚泥のようなタールのような、長い年月を経て黒く黒く熟成しきつた妄執を。だが、それがどんなモノであるか知らなければ、ただの粘土細工でしかない。

それに加え、娘は浮かれていた。まだ小学生の時分で魔法という甘美な果実を口にしてしまったのだ。

同級生は誰も知らない。自分と母親だけが共有する秘密。その事實は娘の優越感を大きく満たした。

何よりも、子供心に理解したのだろう。母親は何かに没頭することはなかった。それはすでに自分の歩む道を見定めているからに他ならない。子が親の背中を追うのは当然のこと。

魔法というものに関われば関わるだけ、今まで知らなかった母親の一面が見えてくる。

母親は普段以上に厳しかった。一切の妥協も手を抜くことも許さなかった。時として命を懸けることもあるのだ。安全なことよりも危険なことの方が多い。しかしそれでも娘にとって学校の勉強に比べれば格段に楽しいものだった。

「杏子。今のは良かったわよ」

温和な笑みを浮かべ、優しく頭を撫でる母親。娘にはこれだけで十

分だった。母親の期待に込められるだけで満足だった。

こうして一年近くの間。ゆっくりと母親は下地を作っていたのだ。

？どろどろ？と純白の陶器がヘドロに汚れていく中、ついに陶器全体に広がった亀裂から、陶器そのものが瓦解する。

それはつい最近のこと。母親がダイオラマ魔法球という魔法具を購入したことが始まりだった。

外と内とで時間の流れが異なる魔法具。今まで触れてきた触媒とは一風変わったものに娘も興味を示した。

これで魔法に打ち込める時間が、魔法と向き合える時間が増えた。何よりも多くの時間を母親と一緒に居られる。娘は喜び、母親は温和な笑みを浮かべる。

今にして思えば、母親は何かが起こるとこの時から予見していたのかもしれない。

だが、それが娘に分かる筈もなく、暦はゴールデンウィークへと差し掛かる。

「ねえ杏子。昨日友達になった人から新しい呪物を貰ったのよ。それだね、これは私も初めて扱うものだから休みの間は魔法球の中でずっと試してみない？」

「いいの？」

「ええ。四月二十九日からずっと入りっぱなしでもいいのよ」

「えっ。それだと学校が」

「大丈夫よ。旅行に出掛けたことにしちゃいましょう」

普段から若々しい母親が、このときは本当に若返ったように生き生きとしていて、思わず娘は首を縦に振った。

そして二十九日が訪れると二人はダイオラマ魔法球の中へ入って行った。

魔法球の中は簡素なもので、木造の家が一軒に少し広い庭が付いているだけ。しかし装飾に拘らない分だけ、外界との時間の差異は大きくなっている。

家に入ると母親は早速友人に貰ったという呪物フエティッシュを取り出した。それは白い錠剤であった。

「これ、飲むの？」

不安気に見つめる娘に対し母親は首肯する。

「危険はないわ。飲んでみる？」

母親から差し出された錠剤を、娘は手に取るとしばらく見つめ、母親の顔と交互に見比べる。母親は大丈夫と言うように温和な笑みを浮かべていた。

そして最終的に好奇心が勝ったのか、娘は錠剤を口に運ぶと一息に



飲み込んだ。

母親が安全だと言うのだから間違いないだろう。ある種母親を信頼しきった言葉によって錠剤を飲んだと言ってもいい。その信頼関係はこれを機に崩れ去る。

錠剤を飲んだ娘の変化は著しかった。鼓動が早まり、身体は火照つて、気分が昂揚する。今ならば出来ないことは何も無い、と思える程に。

「しゅごいよお母ひゃん。ひかりがいつぱいで、あはっ、あははは」  
呂律は回らなくなっており、思考も混濁としていてどこを見ているか分からない。否。娘には見えているのだ。徒人には見えないモノが。母親が与えたクスリは一つのキツカケに過ぎない。

娘の視界には広がっている。色とりどりの光の粒が宙を舞い、時として集まって、弾けたと思えば大きな流れになって脈動する。そんな幻想的な光景が。

「感覚が鋭敏になってるのはいいけど、呂律が回らないのは問題ねえ」

うつらうつらとしている娘の安否を気に掛けることはなく母親は娘に向かつて禁厭まじないを施す。そうすることで水中を揺蕩うだけのようであつた娘の意識がほんの少し浮上する。

「さあ杏子。いつものようにやってみて」

それでも自分でものを考えているというには程遠い状況。疑問を挟

める筈もなく、言われるがまま母親から教わったことを繰り返す。

「『この手は我が手にあらず、この息は我が息にあらず、この声は我が声にあらず……』」

魔法を教わり今まで何百、何千と繰り返してきた行為。舌と喉だけは正常になった状態でもその行為は続く。

半ば自動的に身体が動いている中、娘は周囲の光景を見続ける。自分が一言唱えるたびに、光の粒子は命を吹き込まれたかのように踊り出す様を。

「『全ては高天原におわす、神の手、神の息、神の声……』」

光は段々と強くなる。粒子の動きが激しくなる。光量は最初に比べ何倍にも膨れ上がっている。眩しくて目を開けていられない。しかし、この光景をずっと見ていたい。矛盾するような想いが大きくなり、気付けば光の粒子は娘に纏わり付くように、娘の身体を覆っている。

そして娘は粒子がふんだんに付着した右手で刀印を結び、振り上げた。

「『天地玄妙、急々如律令』」

その瞬間、娘は確かに見たのだ。光に覆われた向こう側。粒子に囲まれた隙間に、この世のモノではない儂くも美しい世界を。

これで娘に限界が訪れ、余韻に浸る暇もなく事切れた。

「やっぱり器の方をどうにかしないとね。まあこれから一ヶ月近くじつくりとやっつけていきましようか」

母親は床に倒れた娘を抱き上げると、別室へと移動する。温和な笑みで愛しそうに娘を見る表情は紛れもなく普通の『母親』のそれであつた。

娘が目覚めたのは椅子の上。

ぼんやりとしたまま椅子から立ち上がろうとして自身の異変に気が付いた。背凭れの先端に後頭部が乗るようにされていて、天井を見つめる形になっている。そしてそのまま器具が何かで固定されおり頭の位置をズラすことが出来ない。

左手は右肩へ。右手は左の脇腹へ。服の布地と袖の部分がベルトで固定されている。俗にいう拘束衣を着せられていた。更にその上から椅子と身体を縛り付ける徹底ぶり。

娘には身じろぎ一つ許されていない。

「え……？ 何、これ……？」

呆然と呟くも、その呟きは瞬く間に静寂に呑み込まれた。どうにか動こうと抵抗してみるも、椅子と身体の間には隙間が出来ないよう？ギチリ？と縛られていて、娘は僅かに動くことさえ出来なかつた。

「お、母さん……」

声は恐怖に震えている。どうしてこうなっているのか理解が追いつかないままに娘は一番信頼出来る人を必死に呼ぶ。

「お母さん！ お母さんっ！」

目に涙が滲む。次々と涙が溢れ出る。堪え切れなくなった大粒の涙は、目尻から耳の方へと流れ落ちる。

しかし、そんな不快感も分からない程、混乱している娘は延々と母親を呼び続けた。そして呼び声が聞こえたのか？ぎイイ？と部屋の扉が開く音がした。

「目が覚めたのね」

足音と共に母親の声が娘に届く。すぐ近くに母親を感じることが出来、娘は少し落ち着いた。そんな娘の目尻を母親は指で拭う。

「お母さん。どうしてわたし縛られてるの……？ これじゃあ動けないよ」

この拘束を解いてくれるよう懇願する。何かの間違いだと、優しい母親ならすぐに解放してくれると信じて。だが。

「ごめんなさいね。これからやることは少しでも動かされると困るのよ。ほんの十分程度で終わるから我慢して」

そう言つて母親は娘の額の上に点滴を用意する。病院で使われている物とは違い、水滴の落下地点がブレないように固定されている。

そして母親が栓を少し開き、管から落ちた水滴が娘の額の中心で跳ねた。

ぴちよん

新たな音が室内に響く。

「怪我なんてしないわ。ずっと傍に居てあげるから、ちょっとした間我慢してね」

我慢しろと言われても、不満しかない。だが、ただ水滴が落ちてくるのを少しの間耐えるだけ。それだけならば、と娘はこれ以上口にすることをやめた。実際、特定の術を行使する方が余程危険だと思っただろう。

そして、三分も経たない内に後悔することになる。

次の水滴が落ちてくる。次の水滴が落ちてくる。次の水滴が落ちてくる。

ずっとずっとその繰り返し。終わらない。同じ箇所、同じリズムで、落ちてくる。寸分の狂いもなく、寸秒の狂いもなく、こっちの気が狂ってしまいそう。

「やめて……やめてよ、お母さん……」

ぴちよん

額の上で水滴が踊る。これは何十粒目だろうか。いや、何百粒目だろうか。そして何千粒目まで続くのだろうか。

全身の神経が額に集中する。頭の中が水滴のことではいっばいになる。固く目を閉じたところで意味はない。水滴は無慈悲に落ちてくる。

娘の目からも涙が零れ落ちた。

母親が傍に居るのは分かる。だがそれだけだ。流れ落ちる涙を拭ってくれることすらしてくれない。本当にただ傍で見ているだけ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ぴちよん

何度謝罪の言葉を口にしたか分からない。誰に謝っているのかすらも分からない。それでも水滴は落ち続ける。

娘の体感時間ではもう十分なんてとつくに過ぎ去っているだろう。ひよっとしたら一時間は優に超えているかもしれない。

次第に水滴が額を打つ感覚がなくなってきた。感覚が麻痺しているわけではない。水滴が一粒落ちる度に、殴られたような衝撃が頭蓋に響くようになっていた。

今度は痛みでどうにかなってしまいそう。がむしゃらに椅子の上で暴れようと試みる。しかし拘束が緩まることはなく、ほんの少し水滴の落下地点をズラすことさえ叶わない。

「ごめんなさい赦してお母さん。良い子にするから。何でもするから。はやく、はやく助けてえ……！」

ぴちよん

そして娘の耳に水滴が跳ねる音と、自分の叫び声以外の音が届いた。

十分も経っていない筈なのに随分久しく感じられる。それは聞き慣れた母親の声で、歌が流れたのだ。

R i n g - a - R i n g - o - R o s e s  
R i n g - a - R i n g - o - R o s e s  
A p o c k e t f u l l o f p o s i e s ,  
A t i s h o o ! A t i s h o o !  
W e a l l f a l l d o w n .

いつもと同じ抑揚。いつもと同じ優しげな声色。何一つ変わっていない。顔を見なくても分かる。きつと母親は温和な笑みを浮かべているのだろう。

その歌を聞いて、娘はなんとなく悟った。母親は助けたくない。まだ心の何処かで信じていたものが、縋っていたものが、音を立てて崩壊するのが分かった。

「いやあああああああああああああつつ!!」

嫌だ。もう嫌だ。限界だ。あと一滴。あと一滴で自分は変わる。狂ってしまうかもしれない。壊れてしまうかもしれない。でも、楽になれるのならなんだっていい。

もうすでに娘は自分から次の水滴を待ち望んでいた。そして 水滴は、落ちてこない。

「……え」

微動だにしなかった点滴は頭の上から遠ざけられ、今は母親が娘の濡れた額をハンカチで拭っている。続けて目尻から流れている涙を。

口元から垂れている涎を。普段通りの母親のまま、温和な笑みを浮かべて。

頭を固定していた器具を外す。椅子に縛り付けていたベルトを外す。拘束衣のベルトを外し、解放する。

「はい、今日はこれでお終い。ご飯作ってあるから一緒に食べようか」

普段と変わらず母親は温和な笑みを浮かべ、娘の頭を労るように優しく撫でた。

「……や……」

娘は母親にされるがまま。だが、いつものようにその掌に身を委ねるのではなく、石のように身を強張らせている。母親を見る目には恐怖がありありと浮かんでおり、無意識の内にカチカチと歯が鳴ってしまふ。

母親の手が離れると同時に緊張の糸が切れ、極度の精神的疲労から娘は意識を手放した。

一日の内に二度も気絶を繰り返し、次に目覚めたのは布団の中。

今度は自分で状況を確認するより先に母親が声を掛けてきた。どうやら気絶している間ずっと傍に居たらしい。

「おはよう杏子」

娘は母親の温和な笑みを見るなり、口の中が干上がって声を発する



ことが出来ないでいる。またしても緊張で身体が強張ってきた。

「お腹すいてるでしょ？ ご飯温めて持ってくるからね」

そう言つて母親は寢室から出て行つた。それでも？ガクガク？と身体の震えは大きくなり、悪寒と同時に吐き気まで込み上げてきた。

「うぐっ……」

耐え切ることは出来ずにそのまま嘔吐する。浅い呼吸の中、痙攣する消化器官を必死に宥め、言うことを聞かない手足に命令を送り続ける。

こんなトコロに居たくない。早く母親から逃げないと。あの母親は自分の知っている母親ではないと自分自身に言い聞かし、このダイオラマ魔法球の外へ出ようと藻掻く。

布団から這い出ると、壁に手をついて、震えが止まらない足で立ち上がる。たったこれだけのことにひどく時間を有した。十歩にも満たない部屋のドアまでの距離が遠く感じられる。

それでも一心不乱に足を動かす。ここに居れば何をされるか分からない。もうあの母親は信じない。覚束無い足取りで出口を目指す。

しかし娘の足よりも、母親が盆に食事を載せ戻ってくる方が早かつた。母親は部屋に広がる異臭に眉を顰め嘔吐物を確認すると、盆を床に置きすぐさま娘に駆け寄つた。

「杏子、吐いたのね。今は無理せずに休みなさい」

母親は娘を慮って優しく背中を摩る。行為の所為か、相手の所為か、  
またしても娘を嘔吐感が襲う。

「……や……いやぁッ！」

そんな母親を娘は力の限り突き飛ばす。しかしそれだけだ。力尽きたのか娘は床にへたり込む。逃げる体力はもう残っていない。

「杏子」

声を掛けられ娘は？ビクリ？と身を震わせる。

恐い。恐くて恐くてどうしようもない。それでも母親の手が自分に  
向かって伸びてくる。

叩かれるだけならまだいい。しかし先程のよりも、もっとキツイこ  
とをやらされたら。もっとヒドいことを強要されたら。恐くて恐く  
て、娘は固く目を閉じる。

その所為で自分の額に落ちてくる水滴がハッキリとイメージ出来て  
しまう。

ぴちよん

幻聴が耳朵を打つ。

ぴちよん

幻痛が額を叩く。

「……あ……ア……」

もう身体は娘の言うことを聞かなくなっていた。

そんな娘をあたたく優しい何か包み込んだ。母親が伸ばした手が娘を抱きしめたのであった。

「ご飯が食べれそうにないなら、今日はもう眠ってしましましょう。掃除は私がやっておくから」

そう言つて温和な笑みを浮かべた母親は娘を抱き上げて部屋を移す。

これが嘗ての母親ではないと言い切れればどれだけ楽だろうか。今までの生活が全部嘘で騙されていたとしたら簡単に割り切れたのに。

頭の中で母親は変わってしまったと自分に言い聞かせても、身体がそれを否定する。心が納得してくれない。

十年間ずっと寄り添ってきた母親の温もりが、そこから伝わる優しさは何も変わっていないと告げているのだ。

つまるところこの母親にとっては、鞭も飴も等しく同じ価値しかないのだ。娘を慮るのも、娘を拷問に掛けるのも、同じ原理で動いている。人が躊躇うような行為すら、当然のように温和な笑みを浮かべながらやっつてのけることが出来る人間。

「さあ、明日の為に今日はちゃんと休んでおきましょう」

娘はまず最初に、母親に逆らう気力をなくした。

あとはこの日の繰り返し。クスリを飲まされ、拷問を受け、他の時間は母親と一緒に居る。ずっと。ずっと。ずっと。この繰り返し。

母親と共にする時間が最も苦痛で、拷問を受けている最中は痛みで我を忘れることが出来、クスリを飲んだ後が一番穏やかな時間だった。

何度も何度も壊れかけた。幾度も幾度も狂いかけた。けれどその都度、絶妙なタイミングで母親が止めに入る。生かさず殺さず。生殺しのような毎日が続く。

完璧に壊れることは出来ず、完全に狂うことは許されない。ギリギリまで追い詰められ、ギリギリで留められ、その状態をずっと維持される。

当然、すぐに限界が来た。

優しい母親からの度重なる仕打ちが、ついに娘の許容量を越したのだ。今まで耐え続けた分の反動が娘を襲う。今まで応急処置で取り繕ってきた致命傷が一気に傷を広げる。その瞬間を、母親はずっと待っていた。

「『天地玄妙、急々如律令』」

母親が娘に向かって刀印を振り下ろす。娘には見えただろうか。彼女の精神が器の端に追い詰められ、空いた容量にいつも彼女に纏わり付いていた光の奔流が雪崩れ込んだことを。

そうして、ワタシが生まれたのだ。

ワタシを生み出す為だけに、ワタシを創る為だけに。薬王寺杏子という一人の少女は人柱になったのだ。

杏子は願った。『助けて』と。不条理な愛情から、不合理な環境から、不平等な現実から、助けてと。

薬王寺杏子を救うこと。それがきつとワタシがここに在る意味なのだろう。それがワタシが存在するたった一つのレーゾンデートル。

だからこそ。杏子を苦しめるものは全てワタシが請け負った。まずは記憶を。辛いものは、母親と一緒に居た時間だろうと自分が人を殺す悪夢だろうと区別なく。

彼女には楽しい記憶しか残らない。なのに、それでもまだ身体が覚えていた。母親と向き合うと必ず小刻みに身体が震えた。

杏子にはその原因となる記憶がない。何故自分が母親を恐れるのか理解出来ない。

混乱する。

苦しむ。

それをまたワタシが請け負う。なんて最悪な悪循環。なんて最低な負の連鎖。ワタシが助ければ助けられる程、杏子は更に追い詰められていく。

だけどワタシが請け負ったものを返せば、それに杏子は耐えられない。

これ以上は進めないし、これ以下は戻れない。そんなギリギリのところ、ボロボロになって立っている。ワタシには状況を悪化させることしか出来ない。

少女は助けると願った。ワタシは助けようと手を伸ばした。だけど、届かない。伸ばした手は空を切る。もどかしい。歯痒い。

進展も好転も見せないまま、母親はワタシに手を加え続けた。実際、この身体を動かしているのは杏子ではなくワタシの方が長くなった。

そして漸く母親から逃げ出せるチャンスが訪れた。休みが明けたのだ。

ワタシが請け負っているからか母親の前でさえなければ、杏子は比較的普通に振る舞える。所詮脳の中でしか起り得ない幻覚も中毒症状もある程度は押さえ込めた。

魔法使いの多くは世間の目に阻まれる。それは母親も例外ではなく、娘をずっと学校に行かせないわけにもいかない。

それまでは従順な式神を演じていたおかげか、いざとなれば直接パスを繋げばどうにでもなると思ったのか、ついに薬王寺杏子は母親の手を離れることが出来た。

当然学校には行かず、学校とは逆方向の電車に乗る為、駅で休憩をとっていた。監視があったのは気付いていたが、相手がカラスではどうしようもない。

正直賭けだった。母親が居る学校との距離が分からなかった為、遠隔地からいつパスを繋げられるかと戦々恐々だった。

そんなときにソイツと出会ったのは運が良かったのか悪かったのか。

『あはは。元気いいね、お嬢ちゃん。何か良いことでもあったんかな？』

『安心確実をモットーにあなたのご依頼承ります』

現実では初対面だけれど、夢で見知った相手と出会ってしまったのだ。それとほぼ同時に監視役の式は飛び立った。だから期待してしまっただろうか。何とかなるかもと樂觀視してしまっただのか。それとも杏子に一時的にでも安寧を与えてくれる人から離れたくなかったのか。

やはり昨晚の内に出て行くべきだった。そんなことを思っても、今となっては全て手遅れだ。

『 オン』

貰ったミサンガは引きちぎられ、母親とパスが通ってしまった。これでもかも元通り。

式神は術者に逆らえず、娘は母親に抗えない。もう二度と逃げ出す隙は生まれない。昨日今日の行いは一体何だったのだろうか。

『綺麗な光い。ねえ、貴女はだあれ？』

さーね。アンタにわかんないことがワタシにわかるわけねーでしょうが。

結局、本当に何がしたかったのか分からない幕引きだ。進展も好転も無いまま逃避行は終わりを告げた。

だから、今更アンタが出てきたっておせーのよ。

遅れてやって来た陰陽師に悪態をつく。　いや、意味ならあった。薬王寺杏子が視た夢を現実にする為に、こんな巡り合わせが起こったのだらう。先に結果が出ていて、それに合わせて過程が変化する。なんて、あべこべ。

だとすれば、やはり昨日の内に逃げるべきだったのだ。

この子の手を、血で汚したくはなかったのに。ワタシはただ、助けたかっただけなのに。

そうして、薬王寺杏子は近衛木乃香と対峙する。これ以上関わるならば命を奪うと、昨晚の忠告通りに。



第七十話：Ring-a-Ring-o-Roses

木乃香が駆けつけたときには、すでに請けた依頼は破綻していた。

友人である神楽坂明日菜の目の前で、杏子アンスに見知らぬ女性が接触している。おそらくあれが薬王寺（母）なのだろう。楽観的観測から親子の対面を許してしまった。

立ち上がった薬王寺（母）と視線が交わる。杏子はというと恍惚とした表情で何処かに向かつて手を伸ばしている。

伸ばした手はすぐに降ろされ、木乃香にとっては三度目となる、不機嫌そうな不愉快そうな眉根を寄せた表情になった。

「はじめまして。近衛木乃香さんですよ。杏子の母です」

毅然とした態度で三人に近づいていく木乃香に薬王寺（母）は温和な笑みを浮かべ、そう告げた。

「木乃香！ この人おかしいわよっ！ 自分の指を噛み切って杏子ちゃんに変なクスリを飲ませたの！」

明日菜が叫ぶ。それで自分が居なかった間に薬王寺（母）が杏子に何をしたのは理解出来た。パズルを完成させるのに必要な、今まで欠けていたピースが揃っていく。クスリという単語でピースを並べるまでもなく最低な絵が出来上がるのはこの時点で予想がついた。

木乃香は悠然と歩を進める。

「確かにはじめましてですけど、今は香乃木綾と名乗らせてもらいますよ」

からからと木乃香は笑う。顔のパーツだけが自分の意思を離れて笑みを作る。その笑みの下では凍てつくような殺気を滾らせて。こんな現状を作ってしまった自分の楽観視に怒りを覚えて。

「……香乃木さん。昔の同僚から聞いていた話とは随分違いますね」

「そんなことはどうでもいいやろ。お前、自分の娘を犠牲にしてまで何がしたかったわけ？」

両者は笑みを絶やさない。木乃香は殺意を隠さない。薬王寺（母）はそれを真っ向から受け止める。

二人の笑顔の睨み合いに、蚊帳の外である明日菜が退いた。

「私は、神様を創りたかったのですよ。杏子自身はその先にあるものに魅了されてしまったようですが」

木乃香の問いに薬王寺（母）は答えた。またひとつピースが揃う。母親の目的が分かり、木乃香には全体像が見渡せた。必要な知識から unnecessary 雑学まで別け隔てなく教えてくれる兄に感謝を。

想像できた絵を見て、くだらないと心の底からそう思う。こんなモノの為に、杏子は人生を台無しにされたのか。

「神様を創るって、何で、そんな、こと……」

二人の傍らで呆然と呟く明日菜に木乃香が概要を説明する。

「明日菜。動機なんて理解出来る筈もないから考えない方がいいえ。どうせ何代も前から取り組んで、途中で動機も変質してるに決まってるから。……それと、明日菜は正常な一般人から見、妖怪が見える人と幻覚を見る人、どこがどう違うと思う？」

「……幻覚はただの幻覚だけど、妖怪はそこに居るんですよ」

「違う違う。一般人から見たときの話。そこには、差なんて無いんやえ」

第三者から見れば、どちらも意味不明なことを述べているのに変わらない。真実なんて関係なく、どちらも同じように気が狂れているとレッテルを貼られる。

「低次元のモノが高次元のモノを創り出すなんて出来やしない。だから、クスリの幻覚作用で手頃に娘をトランス状態まで導いた。そして手の空いている母親は娘を媒介にして高次元のモノに干渉する」

間違っているか、と挑戦的な笑みを薬王寺（母）に送る木乃香。それに薬王寺（母）は首を横に振った。

「概ね合っていますよ。そのままやればこの子の器に入りきららないので、杏子には少々窮屈な思いをさせていますが」

「それで二重人格」

「ええ」

温かな笑みを浮かべたまま薬王寺（母）は頷いた。

解離性同一性障害。想像を絶する苦痛に見舞われた際に防衛機制として解離を起こす場合がある。繰り返し強いトラウマを受けた場合、自我を守る為に、自分ではない「別に誰か」に起こったことだと記憶や知覚などを高度に解離してしまうこと。

その交代人格を薬王寺（母）は神に見立てた。 否。白紙の人格に神を押し込んだというべきか。

「元々杏子には特技があつたのよ。いや、才能かしら？ 兎も角、異能があつた。夢を現にするなんて素敵でしょう。まあ、最後まで発現条件は分からなかったけれど」

私も予知夢に似たものは見たことがあるけど、まさか自分の娘がこんな逸材だなんて、思ってもみなかったわ。

薬王寺（母）は杏子の頭に手をのせる。慈しむ表情と仕草だ。だが言っていることとのギャップに明日菜の顔が強張る。

「人間、大脳の右脳の表面に弱い電流を流せば幻影を見るそうですね。『脳幹の橋を渡って出された電気信号は、神経の道を通り海の馬の背に乗り、瞳に届くと夢を見せる』。幻覚で見た神様を脳の中に閉じ込める。 ええ、趣旨は理解しました」

人が夢幻を見る条件は簡単だ。原因はドーパミンとエンドルフィンの過剰分泌。もっと詳しく言うならば、頭を強打することによる脳機能障害や重度の失血、病気の発熱、ストレス、アルコール、心の病、そして 薬物。

薬王寺杏子の見た夢は現実に来て作用するという。発現条件が分か

らなければ、それを延々繰り返すだけ。例えば、対象とよく似た形代に幾度も同じ運命を辿らせる。そうすることで対象の結末を一つに固定する、といった呪詛もある。強く願えば願いは叶う。

結果が出るまで繰り返し続けた末に、追い詰めた先に在るのが、今の薬王寺杏子。

「でも、何だろうな。圧倒的に経験が不足している若輩者の私には上手く言えませんが、その術式はどこか間違っている」

木乃香の指摘を薬王寺（母）は否定せずに受け止めた。

「そうでしょうね。元より大昔の陰陽師が途中で投げ出したものを、うちの先祖が引き継ぎ改善を重ねたものですから。杏子でなければ成功しないとは、まだ中途なんですよ。こんなモノではまだ足りません」

今まで歩を進めていた木乃香が足を止める。薬王寺親子と相対する適度な距離まで間合いを詰めたからだ。

逆に明日菜はそんな三人から一歩二歩と離れていく。木乃香と薬王寺（母）に明らかに気後れしているようではあるが、それでも我慢ならなかったのか声を荒げた。

「術式とかそんなのは私には分からないけど、その人が間違ってるのは全部でしょ！？ 自分の娘を実験の道具みたいに扱うなんて、そんなの、人間のやることじゃないっ！！」

一瞬だけ木乃香は薬王寺親子から目を逸らし明日菜を見た。それはまるで普通の感性を思い出すかのような、遠い目であった。

「うん。そうやね。人間のやることじゃない。魔法使いのやることや」

木乃香は指の間に符を一枚挟む。実に分かりやすい臨戦態勢である。

それを見て薬王寺（母）は嘆息する。

「先程も述べましたが私は研究を続けたいだけなんですよ。貴女にも学園にも不利益を与えるわけじゃありません。矛を収めてはくれませんか？」

自分の娘を研究の為に扱うのはやり過ぎではあるが、最低限の環境さえ揃えれば後のことは厭わない典型的な魔法使い。

「態々説明までして貴女の探究心と知識欲を満たしたでしょう？それにこれは家族の問題です。他人の貴女が立ち入っていい領域ではないですよ」

温和な笑みでそう告げる。彼女は本気で戦闘を回避したいのだろう。

それを木乃香は鼻で笑った。

「ハッ。お前の研究を論破するのは別の人に譲るとして、二つだけ言わせてもらおうか。

お前の妄執に、その子を巻き込むなっ！」

その瞬間、四人の視界を白銀の光が灼いた。木乃香が薬王寺（母）に向けて放った符が雷となって猛進したのだ。しかし、雷は弾かれる。木乃香と母の間に入った杏子によって。

「全く香乃木さん。貴女は一体何がしたいんですか？ 貴女一人が頑張ったってどうにもならないことはあるんですよ」

殺意を向けられ、殺気を込められた攻撃を受けても尚、薬王寺（母）の表情は変化しない。そればかりか諭すように木乃香に語りかける。

「それとも、自分になっていたかもしれない『もしも』を見ているようで気になりますか」

「そんな殊勝な心懸けはないですよ。高校で教師をしているなら分かるでしょう？ 最近の子どもは突然何を仕出かすか分からないんです。」

そして二つ目。ウチはただ、お前のツラが気に食わない」

それを聞いて薬王寺（母）は苦笑する。あまりにも単純な、明快な付け入る隙のない理由。そして敵対するのにこれ以上揺るがない理由もないだろう。

「逃がしてはくれませんか」

尋ねる薬王寺（母）への木乃香の返答は、二枚目の符。

次は攻術ではなく捕縛術を。対象は杏子。放たれた符は真っ直ぐ杏子へ飛んで行くも、杏子を縛ることは出来ずに呆気無く握り潰されてしまう。

人工で、つい最近生み出されたと言っても相手は神。手札には余裕があるが、それはあくまでも事前に準備をやっていければの話。即席で捕らえるとなると至難の業だ。

やはり、術者と繋がっているパスを断ち切るのが効果的。

方針を定めると地面を蹴って木乃香は駆け出す。両手に四枚ずつ、計八枚の符を指の間に挟んで、薬王寺親子の周囲を一周するように。

「疾！」

疾走中に符をばら撒く。薬王寺（母）の意識が他に向かわないように、自分を注視するように、あまり間を置かず立て続けに放った。

術が発動せずに手から零れ落ちる物もあるが細かいことは気にしない。

薬王寺（母）は今すぐにでもこの学園を去りたい筈だ。千雨の言うことが正しければ、彼女はすでに魔法先生を負傷させているのだから。教師などと聖職者の職に就いていようとも、同僚がやられて黙っている程出来た人間は多くないだろう。

現在進行形で包囲網は狭まっているに違いない。こうして魔術戦闘まで始めてしまつては人が集まるのは時間の問題だ。

だから薬王寺（母）は手段はどうかであれ、短期決戦に出てくる筈。それを木乃香は返り討ちにする心算で親子の周囲を走る。

粘れば学園の教師が駆けつけるだろう。だが時間を掛けたくないのは木乃香も同じ。人工的な神創りなんて存在を無闇に教えるわけにはいかない。

そして、今まで守勢を貫いていた薬王寺（母）が動いた。木乃香と



同様に符を取り出して、放つ。

しかし、縦横無尽に走り続けている木乃香を全く捉えきれない。符は白銀の軌跡を描き、木乃香が走り去った後を通過するだろう。

先程も研究を続けられればそれでいいと言っていた。薬王寺（母）は実戦経験が乏しいと判断する。

「……あつ！」

だが、背後から恐怖を押し殺したような声が風に乗って木乃香の耳に届いた。

「明日」

身体に掛かるベクトルを強引に反転さえ、明日菜と符の射線の間を飛び込む。刀印で五芒星を描き、「禁！」と言霊を放って障壁を築く。

符は障壁に阻まれ、何の結果も残さずに霧散する。

（ああ。そういえば明日菜は魔法無効化とか便利なスキル持ってたっけ）

符を弾いた直後、障壁の眼前に現れた、眉根を寄せた不機嫌そうな顔を見ながら思い出す。

どんな手を使っても早々に戦闘を切り上げようとするのは分かっていたのに、迂闊だった。

（まあ、話に聞いたただけで実物は見たわけやないし。勝手に身体が動くのは仕方のないことやね）

少女が掌底を突き出す。障壁が破られる。掌底は止まらない。尚も近付いてくる少女の手に対し、木乃香は僅かに後ろに跳んだ。

数センチ地面の上で杏子の掌底が木乃香を捉えた。そのまま背後に殴り飛ばされる。当然、木乃香の後ろに居た明日菜と激突し、二人は地面を転がる。

地面に倒れ伏す最中、薬王寺（母）の言っていた言葉が甦る。

『貴女一人が頑張ったってどうにもならないことはあるんですよ』

全くその通りだと思う。未熟な自分に出来ることなどたかが知れている。こうして木乃香の動きが止まってしまえば、薬王寺（母）はすぐさま身を翻すであろう。

「ぐっ  
」

だからこそ、呻き声押し殺し、その代わりに名を叫ぶ。

「刹那あ　っー!!」

その声に応えるように路地から弾丸の如き速さで人影が飛び出した。それに気付き、薬王寺（母）の顔色が微かに翳る。

千雨ならすぐ刹那と連絡を取ってくれるだろう。術式の説明も含め、あれだけ話を長引かせれば、寮からここまでの距離を移動する時間は十分に稼げる。そして相手に存在を知られていない刹那は伏兵と

してジツとチャンスを伺ってくれろと信じていた。

よく耐えてくれた。刹那が守るべき人が危機に遭っても、よく踏み止まってくれた。全てはこの好奇の為に。

「『縛縛縛、風縛』」

そして大立ち回りで注意を全て自分に向けさせていた木乃香は、最後の仕上げとばかりに杏子をこの場に縛りつけようとする。

だが、符を用いても封じきれなかった相手が言葉の縛めだけで捕らえられる筈がない。木乃香の言霊もほんの一瞬しか効果を発揮し得なかった。

その一瞬で刹那は薬王寺（母）との距離を確実に詰める。彼女の手に握られた白刃が煌く。いつから話を聞いていたのかは分からないが、ほとんど一般人と言って差し支えない明日菜を真っ先に狙った場面は刹那も目撃した筈だ。何よりも、薬王寺（母）は木乃香の敵。躊躇いなく刹那は刀を突き出す。振り上げる真似はしない。突進する体勢のまま、勢いを殺すことなく繰り出される必中の刺突。

「なっ　　！？」

だからこそ、避けられるとは思わなかった。いや、避けたという表現は適切ではないかもしれない。

杏子が刹那の刺突よりも疾く母親のもとに舞い戻り、先程の木乃香のように突き飛ばしたのだ。やはり戦闘経験は無いようで受け身も満足に取れてはいないが、はじめから突き飛ばされると覚悟を決め

ておけば、刀で斬られるよりはマシな怪我で済む。

刹那の刺突は杏子の矮躯に当たることではなく頭上を素通りした。同時に杏子は刹那の懐に入り込んでいることになる。杏子が刹那に肉薄する。

その隙に薬王寺（母）は新たな符を取り出して、式を喚び出した。翼を広げれば三メートル近くはありそうなカラスに似た怪鳥である。それに乗り、薬王寺（母）は空へと退避する。

「さっきので追いつくかあ。アンズちゃんのスペックがいまいち把握出来んな」

一連の光景を見ながら木乃香が呟く。

「木乃香、ごめ……私……」

そんな木乃香にすぐ真横から声が掛かる。明日菜からだ。

「まあ、魔法に関わるなら多かれ少なかれ、ああいう類の人ともお近付きになるってことを覚えておいたらいいと思うよ」

そして木乃香は自分の胸元に手を当てる。厳密に言うと、首に掛けられているネックレスを握る。チェーンを外す時間も惜しいのか、そのまま引っ張ってチェーンを切ると、瑪瑙のネックレスを明日菜に投げ渡した。

『アンタはワタシに殺される』

一瞬、昨夜杏子が言ったセリフが脳裏をよぎる。

「はい。お守り。それを持っておけば、まあ怪我はせんやろ」

先程杏子の掌底を受けたときも、これのおかげか傷は皆無と言っていい。あの女相手では、明日菜を人質にして逃亡、明日菜の死体を晒している間に逃亡なんて手段を取られるかもしれない。相手の弱い箇所を攻めるのは常套手段だし、そんな行為に罪悪感を持つてくれる程真つ当な神経はしていないだろう。

そう思つて、まず目の前の懸念事項から対処することに。

「ウチの宝物やから、ちゃんと預かつといてね」

「……木乃香は大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫。そうやねえ、帰ったら兄様に告白でもしてみるかな」

からからと木乃香は笑つ。

「ウチに何かあつたら事の顛末は明日菜が兄様に伝えてね」

「え、縁起でもないこと言わないでよ！」

「あはは。週末千雨ちゃんに色々と奢る約束してるから、そのときは明日菜も一緒に遊びに行こな」

あのまま上空に留まっていれば狙い撃ちされるのは目に見えているので、薬王寺（母）は建物の屋上へと姿を消している。

杏子はとうとうと何度も戦闘離脱を試みているようだが、刹那がそれをさせない。

親子が分断された今、刹那と杏子が一对一の構図になっている。このまま薬王寺（母）をより確実に隔離出来れば、杏子を止めるチャンスはある。

「さて。もう何も怖くないな」

嘯きつつ明日菜から離れて、刹那と杏子が争っている場へと歩いて行く。

戦況はどちらが有利なのだろうか。元々これは杏子を逃がさない為の戦いなのだから、勝利条件を満たしているのは刹那だろう。

だが刹那は刀の峰で応戦し、奥義を出すこともなく、創られたとはいえ神を相手に本気を出せないでいる。今やっている応酬もそう長くは続くまい。

一方で杏子は、見ていて不安定という印象を受ける。木乃香はスペックが把握出来ないと言ったが、全くその通りで兎に角判定がブレる。上がり下がりが激しいのだ。瞬間的には刹那を上回っているのにその状態を維持出来ないような。落ちるときは平均よりも少し上くらいだろうか。

刹那も杏子の身体能力が落ちたときに上手く立ち回っているに過ぎない。急場凌ぎでも薬王寺（母）が杏子に何か手を加えたら、それで今の関係は崩壊する。

だからこそ。それをさせない為に、木乃香が地面を蹴り、両手で印

を組む。

「『ナウマクサンマンドバザラダン、センドマカロシヤダソワタヤウン、タラタカンマン』」

走っている最中に落とした霊符を起点とし、足跡でそれらを繋ぎ合わせ、強固な結界を織り上げる。

これで外からの大掛かりな干渉は受けない。同時に杏子も逃がさない。結界内は木乃香の領域だ。これで多少は効果的な術が扱える。

「やあアンズちゃん。待たせたね」

からからと木乃香は笑う。

今までのような単発の魔術ではない。この結界を破るのなら、まずは起点となっている符の過半数を使い物にならなくしなくては。

この隔絶された世界から抜け出るのは時間がかかると判断したのか、刹那が杏子から距離を取り木乃香の隣まで移動する。言いたいことが山ほどある、と雄弁に物語っている目で木乃香を見つめながら。

「くだらねーわ。何もかもくだらねー。魔術戦闘がやりたいなら余所でやれ。ワタシを『わたし』を巻き込むんじゃねーわよ」

両腕から力を抜き？だらり？と腕を垂れ下げながら、相変わらず不機嫌そうな表情で杏子が喋る。

いや、短時間とは言え戦闘をした所為か、いつも通りの表情とは杏子もいかないようである。鼻や耳から一筋の赤い道が出来ているの

だ。

「まったく。最初に言ったでしょーが。ここでアンタらとガチバトル出来る程強靱な身体があったなら、電車待ちで駅で寝るわけねーでしょー」

成程、とそれを聞いて得心いったように木乃香は頷く。

「アンズちゃんは自分で力がセーブ出来ない、いや、させてくれないんやね」

だからあんなにも出力にブレが出たのか。幼い頃から気や魔力の運用をやっているのならば兎も角、基本人格の杏子にはそのような兆候はなかった。

先程の瞬間移動じみた加速を思い出す。何の訓練も受けていない普通の小学生が易々と耐えられるものではない。しかし、魔法使い然としたあの母親が、今は式神である杏子の身体を慮るだろうか。

人間の身体は普段から使っていない部分が多い。それを強引に使用させられているのなら、身体の内側へのダメージは計り知れない。

「アンタの選択肢は二つ。結界を解いてワタシを逃がすか、ワタシに殺されて結界を解くか」

時間が無いのは杏子も同じなのだ。それもこの中では一番切羽詰った理由で。無駄な戦闘をやればやる程、重ねれば重ねるだけ、着実に杏子の命は削られていくのだから。

「答えはもう知ってるやろ？」



「でしょーね」

からから笑う木乃香に、杏子是不愉快そつに眉根を寄せた。

「ちっ」

杏子が舌打ちすると同時に脱力していた腕に力がこもる。外部から内部へ大掛かりな干渉は出来ない。だが、術者と式神の初めから繋がっていたパスを断てる程のモノではない。

業を煮やした薬王寺（母）が急かしてきたのだろう。

「せつちゃん。頼んでいい？」

今更だが刹那と直に話すのは今日初めてのことではなからうか。突然千雨からこの場所に向かえと指示され、着いてみれば昨日行動を共にした少女を巡って剣呑な雰囲気。そして突如として始まった魔術戦闘。

とても細かい事情を把握しているとは思えない。それでも彼女は笑って言うのだ。

「お嬢様の道を阻むものは私が斬り開きましょう」

「彼女を止めて」

「はい」

難しい頼み事に刹那は即答で頷いてくれる。

「ありがとう」

万感の想いをこの一言に込めて、駆け出した刹那を見送った。刹那には感謝してもしたりない。

？拍手ッ！？

気分を切り替えて、木乃香は自分のすべきことに集中する。

「『天神地祇、辞別けては産土大神、神集獄退妖官神々、この霊縛神法を助け給え』」

杏子もすでに駆け出していた。この結界から出る為に。最も安易な方法を用いる為に。何よりも全ては少しでも生き長らえる為。それを刹那が阻む。

互いに守りたい人がいる。だからこそ、これだけは絶対に譲れない。

「『困々々、至道神勅、急々如塞、道塞、結塞縛』」

間合いに入った杏子に対し、刹那は刀を横薙ぎに振るう。しかし、そんな見え透いた攻撃はいとも容易く避けられる。

更に杏子は加速する。攻撃直後の刹那に一撃浴びせ、さっきから感じていた木乃香の術をやめさせよう。

それよりも早く、刹那が自らの刀を捨てた。それを嵌められたといった表情で見る杏子。土壇場で経験の差が出たのだろう。

「『不通不起、縛々々律令』」

速さだけでいうならば、人よりも速い妖怪などいくらでも居る。斬るだけならいつでも出来たのだろう。それをしなかったのは木乃香が望んでいないから。

杏子もまさか剣士が刀を捨てるとは夢にも思わなかったろう。目の前の剣士が修めているのは神鳴流。得物を選ばない流派である。

刹那は杏子の脇の下から腕を通し肩を掴むと足を蹴り上げて、宙に投げる。

神鳴流『浮雲・旋一閃』

空中で優に三回転はした後、杏子は地面に叩きつけられる。そして刹那は間髪入れずに押さえ込み技に移行。

全力で抵抗しようとする杏子に死力を尽くして刹那が押さえ込む。木乃香の術を弾く対魔力は大したものだが、基本的には十歳の少女瞬間的には刹那よりも力を発揮するが、長時間一定の力を出せない杏子に一度技を掛ければ十分に時間は稼げる。そして。

「『万魔拱服』」！

静謐な魔力と共に凜とした神呪が響き渡った。

「……………あ……………っ！」

刹那の腕の中で呻き声が漏れた。同時に杏子は？びクリ？と身体を震わせて抵抗もなく沈黙する。

二人からやや離れている位置で木乃香が大きく息をついた。

「鎮めたのですか？」

もう大丈夫だと判断したのか刹那は立ち上がって木乃香の傍まで移動する。

「まあね。効くかどうかは微妙やったけど、一応神様やし。さて、次にあんずちゃんが目覚めるまでに」

そこまで言ったところで？ユラリ？と幽鬼のように杏子が立ち上がった。

「せつちゃんっ！」

杏子が踏み出す。木乃香が叫ぶ。刹那が振り返る。その頃には杏子の掌底が刹那の身体を捉えていた。

失敗した。鎮めきれなかった。

「ぐっ　お、嬢」

鈍い音がした。苦渋に満ちた顔で刹那が地に伏せる。それを見届けることなく杏子は更に前へ。木乃香の眼前へ。

「ワタシを鎮める？　冗談じゃねーわよッ！　ワタシが居なくなってもこの子の心的外傷トラウマが無くなるわけじゃねーんだよッ！」

声は怒りに満ちている。だけど、その顔は悲しみに満ちていた。杏

子の左目から一筋の透明な涙が流れる。

理解しているのだろう。杏子を苦しめているのは交代人格の自分だと。自分が居るから現実だろうと夢だろうと嫌な記憶は失われる。そうして、夢現の境界があやふやになる。

交代人格なんて無い方が普通なのだ。杏子自身消えれるのならば消えたいと考えているのだろう。あの母親の下に入れば主人格が入れ替わってしまうのは想像に難くない。

ただ、消えるには請け負ったものが大きく、重くなりすぎていた。これ以上は引けず進めず、立ち往生するしかない。

心は停滞することを望んでいるのに、身体は術者の指示通りに動いてしまうのか。

木乃香は動かない。元より術は破られる。今この瞬間の杏子の力は刹那よりも上だろう。木乃香の身体能力では避けきれない。

あ。これは死んだな。自分を客観的に見下ろしている部分が冷静に告げる。

杏子は木乃香の胸の中央へ掌底を突き出し、その心肺を静かに破壊した。

掌底を受ける木乃香も、起き上がり木乃香の下へ駆けつけようとする刹那も、掌底を繰り出した杏子も、誰もがそう、確信した。

「『ところがぎっちゃん』」

そして、世界が覆る。

「『だーかーらー。霊脈沿いや竜穴周辺に出没するって昨日ちゃんと言ったじゃないですかー』」

『全く。昼間から何をやっているのかと思って眺めていたら、殺されかけてんじゃねえよ。それでも途中までは黙って見守ってようと思っただけだぜ？』

『俺のやり方をリスペクトするのは勝手だが、模倣するのはやり過ぎだろう。結局俺は好き勝手にやっただけって部分が多いから、お前の性格には合わないだろうさ』

『現にこういう状況に陥っているわけだしな』

『俺に何処かに行くなと言うのなら、その辺もうちよっと思って欲しかった。あーあ。兄不孝な妹を持って俺は悲しいよ』

『え？ 白々しい？ ていうかどこから見ていた？ おいおい。一体いつから、俺が鏡花水月を使っていないと錯覚していた』

『マジレスすると、とても繊細な儀式をやるって言ってるんだからあまり騒がないで』

『まあ、戯言は置いといて。そろそろ真面目な話をしようか』

『目視というには程遠いレベルだけど、お前の目にその子が神として映っているなら、その子は神だよ』

『ようは認識の問題だ。木乃香がその子を知っていて、そう信じれば、それが真実だ』

『神の対処法は知ってるだろ？ 修学旅行とかで機会はあったんだからさ』

『大丈夫。木乃香なら出来るよ。俺が保証してやる。だから最後に一言』

『がんばれ。』

「がんばるえ」

そう呟く木乃香の胸元に、掌底は届いていなかった。触れるか触れないかといった、文字通り紙一重のギリギリで杏子の掌底は止まっていたのだ。

「どっ、して……」

目を見開き、呆然と杏子が呟く。それに木乃香はからからと笑って答えた。

「だから言ったやろ。予言なんて力のある人には簡単に覆せるって。さあアンズちゃん、ここからはキミの知らない未来セカイや」

追いついた刹那がもう一度杏子を投げ、地面に伏せさせる。

「そして忘れんといてな。ウチのことを、依頼人の言うことを聞かない不良少女と揶揄したのは、アンズちゃんが初めてなんやえ」

心的外傷トラウマのことも、精神的ケアに特化した人が居るから安心して。

先程と違い、怪我をした刹那では杏子をpushさえ込むことは出来ない。そう思っていたのだが、杏子からの抵抗は全くと言っていい程無かった。

「『あはりや、あそばずともうさん』」

もう一度、木乃香は静かに神呪を唱え始める。だが、さっきとはモ

チベーションが段違いだ。

妹の手前、括弧つける兄が見ているのだから、自分も格好つけないわけにはいかないだろう。

何よりも。もう余力を考える必要がない。

「『八方神息、神感息徹、長全大分之一、六可之靈結』」

全身全霊を以てこの術に取り組むことが出来る。木乃香の言霊が大気を振るわせると同時に、結界内の閉じた世界に魔力が際限なく溢れ出す。

極東最大を誇る保有魔力を惜しみなく発揮する。それには杏子を組み伏せている刹那ですら、肌が粟立つほど。

以前木乃香は神を相手取るときにはどうすればいいか巫女サツジメに聞いたことがある。

そのとき零崎朱織は言ったのだ。

『一回声を掛けたくらいじゃあ、向こうに届かないかもしれないからね。え。こっちの主張が通るまで何度でも頼むことです』

『木乃香さんの場合、声が小さくて聞こえない、なんてことはないだろうからさ。あ』

ならば次はもっと大きな声で、より確かな意思をもって、術を成す。

「『水者形体之始、神者氣之始、水者精之本、神者生之本也。五火



四達長幸之堅、五木下立遠年之台、三土昇氣風感之速、八方金光入幸之全』」

風が吹く。空気が波立つのに対し、木乃香の心は恐ろしい程に澄んでいく。感覚を、神経を、限界まで研ぎ澄ませる。

自分の中の魔力を開放する。杏子の神様を解放する。

脳の中に神を閉じ込めたのならば、白紙の人格に神を押し込んだのならば、それを、解き放つ。

「『木火土金水の神霊、巖の御魂を幸給へ』！」

これで神呪を締めくくり、二度拍手を打つ。

まず引き絞られた弓のようだった魔力が弾けた。一つの方角性を与えられた魔力は大河の如く流れ出す。

杏子の身を浚い、中に入っているモノを漂流させるように。人として生きるのに不必要なモノを洗い流すように。

刹那の下で杏子が身体から力を抜くのが見えていても分かった。眠るように瞼を閉じている。刹那が杏子の上から退くと、すかさず木乃香が新たな符を数枚取り出して、放つ。

符は杏子の額や胸を中心に阻まれることなく張り付いた。数分前の木乃香の術を悉く無効化した対魔力は見る影もない。

今度こそ、これで終わったのだ。

「これで当分の間は目を覚まさないやろう」

杏子の顔から流れ出る血を拭いながら、そう木乃香は呟いた。

木乃香は人工の神を相手取り、確かに鎮めた。だが実際のところ今の杏子がどういった状態になっているのか想像もつかない。

少女を神としていた部分はこれで解決したろうが、あの不機嫌そうに眉根を寄せた交代人格が、残っているのか、いないのか。分からない。一つだけ確かなのは、鎮めたことによって薬王寺（母）とのパスが切れたこと。これで杏子は母親から解放されたと言っているだろう。

だが、今まで彼女が請け負っていた心的外傷トラウマがどうなるのか、判然としない。だから嚴重に、慎重に意識を奪う。少なくとも兄に診せるまでは起きないように。

意識を奪ったら次は身体の治療を。応急手当程度しか出来ないがしなりよりはマシな筈だ。

「お嬢様。母親は追いますか？」

尋ねてくる刹那に木乃香は首を横に振る。

「途中からアンズちゃんの抵抗がほとんど無くなったからね。多分、見切りをつけたんやろ」

引き際は弁えてるような人やったしね。

もうこの近辺からは離れているだろう。自分たちが今から追ったと

ここで追いつけまい。

それよりも、と木乃香は刹那の身体に優しく触れる。

「痛……っ!」

一度目の魂鎮めが失敗した後、杏子によって一撃浴びせられた箇所だ。

「せつちゃんの治療が先やる」

「そんな大袈裟なものでは……ただあばら骨が二本折られて周りに鈍い痛みが広がっている程度で」

「普通それは病院に行くレベルやえ」

ありがとうね。そう言いながら応急手当と快復の禁厭まじないを刹那に施す。

この場ですべきことは終わり、結界を解いてまだ近くに残っている明日菜を呼ぶ。そして携帯を取り出した。通話先はもちろん兄。

「兄様。ここからはウチの管轄外やから、手を貸してください」

直後、三人の目の前には円環が現れた。杏子は慎重に木乃香が背負い、四人で円環をくぐった。

そして同時刻。

それなりに人通りのある通りを薬王寺梢恵コスエは歩いてきた。手を自分の頬に当て、深く考え込みながら。

「どこを、間違ったのかしらねえ……」

彼女はそのまま人通りのあるところを駆使して学園外へと向かっている。電車やバスなどの交通機関は乗っていることがバレれば、待ち伏せされる可能性も十分にあるので、徒歩での移動だ。

逃げている最中、杏子とのパスが切れたことは感知している。アレはもう諦めるしかないだろう。娘を学園にくれてやるのは不本意だが、自分の頭さえ無事ならばまだ研究は続けられる。

今朝家で魔法先生を返り討ちしてからかなりの時間が経っているし、そろそろ学園から離れないと危ないだろう。

逃げながら考えるのは、当然杏子のことだ。しかし、世間一般での母親の思考とはかけ離れている。

「ちゃんと創れた筈なんだけど……」

学園長の孫は最後に魂鎮めをやっていた。それでパスが途切れたのだからやはり神創りは成功していたのだろう。しかし、だからこそ腑に落ちないことがある。

神創りをしてまで出来ることがあの程度なのか。戦闘経験のある普通の人間に翻弄され、あまつさえ押さえ込まれる。思っていた成果とは違いすぎる。

一括りに神と言っても、様々な種類があるが、娘が神懸りのなこと

をやったのけたことがあるだろうか。

思い出そうとしても、思い当たるふしはない。しかし失敗はしていないのだ。ならばどこを間違えたのだろうか。梢恵は冷静に分析を重ねる。この失敗を次の糧にしなければ、それこそ何の意味もなくなってしまう。

そうして通りを歩いている内に、向こう側から見知った人間が歩いて来ているのが目に入った。

大和撫子と形容したい顔立ちで、しかし脱色や染色をしたわけではないだろう金髪の女。なのに不思議と違和感がない。見た目の年齢は高校生とも大学生とも判断できる。

と言っても、見た目通りの年齢でないのは確かだろう。何故ならば、梢恵にクスリを与えたのはこの女なのだから。

この学園都市に違法なクスリを持ち込むのはほぼ不可能と言っている。モノがモノなだけに一般教師も魔法先生も区別なく目を光らせているから。

それをこの女は易々と、何の障害も無いようにやってのけ、仮にも教師である梢恵に与えたのだ。

他でもあんな捌き方をしているならば、すぐに捕らえられるのは目に見えている。なのに、当の本人はこうして自由を満喫していらっしやる。経験が年相応でないのは確実だ。

「やつほー。景気悪そうな顔してるね」

その女も梢恵に気付いたのか、へらへら笑いながら近付いて来た。立ち止まるわけにもいかず、梢恵は軽い挨拶だけをしてその場を離れようとする。しかし、女は梢恵が擦れ違う瞬間にUターンを決め、梢恵の隣を歩き出した。

「美弥子<sup>ミヤコ</sup>さん。まだ学園に残って居らしたんですか？」

仕方なく話を振る。と言っても、この話題が気にならないと言えば嘘になるだろう。

「そだよ。なんでも来月麻帆帆良祭つてのがあるらしいじゃん。面白そうだから、それまではここに居ようかなーって」

どうやら美弥子と美弥子と呼ばれた女は追っ手などは全く気にしていないらしい。今すぐここを去ろうとしている梢恵とは大違いだ。大きなイベントの前だからこそ警備も厳しくなるだろうし、一ヶ月近くもの間、無事に逃げ切れるとは思えないが。

「よくは知りませんが、最近は学園が魔法関係にナーバスになっているようで、目立つことはしないほうがいいと思われまますよ」

温和な笑みを浮かべてそう告げる。

「梢恵ちゃん、やっさしー」

へらへら笑いながら茶化すように美弥子は答える。予想通りだが、忠告なんて何処吹く風である。

「それより梢恵ちゃんの方はどうなったのさ。私が与えてあげたク

スリは有効活用してくれてる？」

飄々と話題を変える。「与えてあげた」という上から目線に少し思うところはあがるが、その実彼女は一切の対価を受け取らず、クスリを押し付けるようにして去っていったのだ。

既に数回会っているとはいえ、その度によく分からない人だと認識させられる。何を考えているのか分からない。いや、何も考えていないからこそクスリを無料で渡したりするのだろう。

「おかげさまで。研究はそれなりに捗りましたよ」

「はっはー。それはなにより。それで、その研究とやらは成就しそう？」

「ええ。美弥子さんのおかげで大きな成功と失敗を同時に出来たと思っっています。後十年もすれば完成に近付くでしょう」

梢恵は温和な笑みで告げる。それにへらへらと美弥子が返す。

「血つていうのは残酷だねえ」

「どづいという意味でしょう？」

「『薬王寺』。聞き覚えのある名字だと思ったんだ。私にしては珍しく懸命に記憶を掘り返してみたところ、どうやら光榮ミツヨシ最近じや五露イツユだったか　まあいいや。兎も角、あの馬鹿が途中で投げ捨てたものを卑しく拾ってしつこく追求している、正真正銘救いようのないバカ一族の名前じゃないか。

おいおい。そんなどづちの名前も聞いたことないみたいな顔はや

めてやれよ。一応君たち一族の理念を考えたヤツだぜ。それと私を殺そうとか殺気立つのもやめてくれないかな。私が君に勝てるわけがないだろう」

勝率0%さ。

誇り高く、堂々と敗北宣言をする美弥子を冷めた目で、いや、絶対零度にまで届きそうな凍てついた目で梢恵は見る。

温和な笑みは消え、能面のような無表情がそこにあった。

「何が仰りたいんで？」

「つまりだね。君の研究とやらは例え地球が静止する日まで続けたとしても完成することはないのだよ」

へらへらと美弥子は告げる。

おそらく梢恵の人生でこんなにも明確に、他者に対して感情を持たたのは初めてのことだろう。それでも僅かながらに残った理性が、身体の動きを止める。

言いたいのなら勝手に言わせておけばいい。次はそれを踏まえて改善すればいいだけのだから。

そんな梢恵を心情を見透かしてか、尚も美弥子の話は続く。

「えーっと、梢恵ちゃん。君がやったことってなんだっけ？ 二重人格作ってそこに神を押し込める？ まあ人間の脳は10%程度しか使われていないとも言っし、凡俗な考え方としてはいいんじゃないかな



いの。ただね、その部分は使われていないんじゃない。使えないのさ。これは漆原だつて言ってることだぜ。ん？ 『あまつき』を読んでないのかい。趣味が合わないね。

兎に角だ。使えない以上、そこに押し込んだって宝の持ち腐れでしかない。その部分を使いたいのならばそれは人の脳であってはならない。人よりも高尚な生き物じゃないとね」

一息つく。

「まあここまでは梢恵ちゃん、君がやったことに対するダメ出しだ。ここからは五露の馬鹿が完成させることなく投げ捨てた原因でも話そうか。

そもそも人間に神なんて創れるはずがないのさ。魔法や魔術は少なからず術者のイメージに左右されるところがあるからね。神様とは人智を超えたモノでなければならぬ。術者がイメージ出来てしまった時点でそれは神には成り得ない。そして矛盾するようだけども、人智を超えたなんて想像出来るものは、まだ人のイメージの範疇なのさ。

そして神様なんて不確かなもののイメージも十人十色、千差万別。誰もが一見して神だと分かるものは創り得ない。何万、何億と信仰してくれる人間が居るのなら別だろうけどね」

故に人に神は創り得ない。

今までへらへらと笑っていた目が、鋭さを持った眼光に変わる。

「先達として教えてあげよう、薬王寺梢恵。神は創るものじゃない。頼むものだよ」

美弥子の話が終わった。

そして梢恵は考える。改善すべき点は何処かと。何か得たものはあったかと。すぐに結論が出た。

そんなモノは無い。

ナンだコレは。根本的な部分が既に間違ってるじゃないか。いくら耐震工事をしようとも、地盤沈下が起こるのならば意味はない。まさしくそんな状態だった。

自分の代まで継がれてきたこの意思は？ この執着は？ この妄執は？ 一体どこにぶつけなければいい。

歩いていた地面が崩落する。足元が忽然と消えた。

落ちる。

墜ちる。

堕ちていく。

後は底に叩き付けられるだけ。梢恵の上から声が落ちてきた。

「ところでさ、梢恵ちゃん。目的を失っちゃった今の君に尋ねるけどね、これから君が選ぶ選択肢はなんだい？ 難しく考えなくていいさ。世の中には壊すか壊さないかの二択で判断するおっかない女僧だっただけ居るからね」

おちゃらけたように美弥子は話し掛けるが、それに対する梢恵の答えは単純極まりないものだ。

これから？ 次の選択肢？ そんなものは ない。

「えー、ないの。残念だねえ。ま、現実から逃げたいのなら夢でも見ていればいいさ。ちょうどここには素敵な夢が見れるおクスリがあるんだからね」

隣を歩いていた美弥子の手が梢恵の口に当てられる。いつの間にかその手には錠剤が握られていた。

梢恵が杏子に投与し続けたクスリである。

抵抗する気力もなく梢恵はソレを飲み込んだ。

「中毒性は比較的低いけど、相性の良い人は一発でイケるらしいから。数分後のお楽しみだね」

言っでなかったけど、これはどっかの国の軍のお墨付きなんだよ。

足取りが覚束無くなって、目の焦点もブレてきた梢恵にへらへらと笑いながら話し掛ける。

R i n g - a - R i n g - o - R o s e s  
R i n g - a - R i n g - o - R o s e s  
A p p o c k e t f u l l o f p o s i e s ,  
A t i s h o o ! A t i s h o o !  
W e a l l f a l l d o w n .

梢恵は一人歌い出す。笑いながら歌い出す。その歌声は高らかに響き渡り、周りの通行人はギョッと梢恵に目を向けて彼女から大きく

距離を取った。既に隣を歩いている女は居ない。

薬王寺梢恵。

彼女はクスリを与えられ、目的を奪われ、信念を奪われ、最後に人生を奪われた。

「あー楽しかったー。最後まで予定調和だったけど、つまらなくはなかったかな。ホント、この街は飽きないね。いつそのこと永住しちゃおっかなー」

おっと。この接触は誰かに見られてるんだった。そっちの視界と記録も奪つとかないとねー。

そして程なくして、完全にトんでしまっている薬王寺梢恵を魔法先生が発見し、すぐさま本部へ運んで治療を開始した。

当然、そこには金髪でへらへらと笑う女など影も形も痕跡すら存在しなかった。

第七一話：Ring-a-Ring-o-Roses 6

木乃香、刹那、杏子アンズと共に円環をくぐった明日菜の目の前には一軒のログハウスが鎮座していた。

先日訪ねたときには終ぞ見なかった光景だ。思わず振り返る。するとそこには確かに先日通った道が伸びていた。

住所を間違えていたわけではなかった。この前は発見出来なかったのに、今日はちゃんと家の存在を認識出来る。不可解だ。

そう思っている明日菜の前で、刹那が玄関の扉を開ける。杏子を背負った木乃香がまず一番に入り、続いて刹那も。

「神楽坂さん？」

家の中に消えてしまう直前に、刹那がいつまでも立ちっ放しの明日菜に声を掛けた。

「ああ、うん。今行く」

二人の後を追って、明日菜も家の中へ入って行った。

玄関で靴を脱ぐとき、ちゃんと入れたと安堵する。何の知識も持たない一般人に対して、現れたり消えたりする奇怪な家に警戒するなという方が無理であろうか。

先を歩く二人は廊下を渡って、どこかの部屋に入ったようだ。それを追って明日菜も移動する。入った部屋はリビングのようである。

杏子をソファに横たわらせ、木乃香と刹那が椅子に座って対面に座る男と話している。つまり、近衛彩輝とだ。

これまでの経緯や、杏子の容態について軽く話しているのだろう。どこもかしこも学校をサボっている生徒ばかりである。

要点をまとめて簡潔に説明したのか、大して時間も経っていない内に話は終わった。刹那に寄り添うように木乃香はリビングから出て行く。これから治療をするのだろう。

一人取り残された気分に限る明日菜だが、木乃香たちが出て行って間もなく彩輝が話し掛けてきた。

「取り敢えず座ったら？」

促され、言われたとおり先程まで木乃香が座っていた椅子に腰を下ろす。正面に座る彩輝の服装は白地の着流し。珍しいと取るべきなのか、木乃香の出身を考えれば普通なのか。

今はどうでもいいことが頭の中を駆け巡る。

「そのネックレスは返してくれる」

明日菜が椅子に座って早々に彩輝はネックレスの返却を求める。

「え？」

彩輝に言われ、明日菜は木乃香から死亡フラグさながらに瑪瑙のネックレスを与っていたことを思い出した。

ネックレスを手にとって、彩輝に渡す。その際に明日菜も彩輝へ質問を。

「杏子ちゃんは病院に連れていかなくていいの？」

そう言っつて明日菜はソファに横たわっている杏子へと視線を向ける。

「ま、木乃香が最低限の処置はしてるし、今のあの子は止まってると言っつても過言じゃない状態だから、多少急ごうがのんびりやろうが差は無いよ。それよりも」

けらけらと笑いながら彩輝は話題を変える。

「この家に来れたんだ。この前来たときは違って心境の変化があったんだろ。何かお願い事かそれに類するものがあるんじゃないの？」

例えば、これ以上魔法に関わりたくないとかさ。

そうして彩輝は、敢えて明日菜が触れないように、考えないようにしていた事柄へ向き合わせる。

魔法。魔法使い。

脳裏に杏子の母親の温かな笑みが甦る。そして素人の明日菜が見ても危険だと分かる術を、躊躇いなく人に向けて放った木乃香の姿が。

いつも朗らかに笑っている木乃香とはまるで別人。魔法に関わったから、いや、魔法に関わるなら自分もあんな風になるのだろうか。

最も親しい友人が殺し合いをする様は、ヘルマンの一件で揺れていた明日菜の楽観的観測を完全に打ち砕いたようだ。

ネギとは違う。学校の先生とも違う。修学旅行のときは僅かしか接点を持ち得なかった魔法使いたち。人殺しすら許容する人でなし。

出来ることなら忘れたい。今日あったことをなかったことにしたい。こんなものは知りたくなかった。

何よりも。母親が娘をクスリ漬けにしていると知ったときの尋常ではない嫌悪感。まるで自分も同じ目に遭ったことがあるような憎悪。自分の中にあれ程の負の感情が渦巻いたなんて初めてのことだ。

何もかもが初めての体験。それに伴う感情はどれもこれも総じて悪いものばかり。あんなものを見せつけられて、良い感情を持つと言う方が無理であろう。

そうして明日菜は？ぽツリ？と彩輝に向かって呟いた。

「……………あれが魔法、なの……………？」

絶るような声。今まで自分が見てきたものとはかけ離れていたからこそ、誰かに違つと否定して欲しかったのだろう。

「魔法だろ。自分で見たものを否定するなよ」

しかし、相手が悪かった。目の前に座っている男がそんなことを慮る筈がない。現実を叩き付けられる。現実を引き戻される。

だとすれば。今までの無知な自分は。何も知らず、魔法使いなんか



と契約してしまった自分は一体どうすればいいのだ。

世界すべての魔法使いが、ネギのような魔法使いだったならどれだけよかったか。魔法がお伽話みたいなものだったら良かったのに。そんな幻想は跡形もなく壊された。

なんだかんだ言って、エヴァと戦った時も、フェイトに襲われた時も、ヘルマンに拐われた時も、明日菜は比較的安全な場所から見ていただけなのだ。怖い目に遭っても怪我をしたことはない。それに争うと言っても殺し合いではないのだ。やり過ぎたところでヘルマン以上のことは無いだろうと思っていた。

いや、そう思い込んで目を逸らしていたのだろう。

怪我をしたところで魔法があるのだから。ネギやカモだって次会ったときは無事に治っているのではないか。そんな希望は全くなかったと言ったら嘘になる。

だが、そんなことはなかった。

もう一度ソファに目をやる。微かに胸を上下させている杏子を見やる。

いつ母親に殺されてもおかしくなかった女の子。そして文字通り、命を懸けて杏子を助け出した木乃香。

魔法なんてあろうと無かろうと、人は死ぬ。いや、魔法なんてモノに関わっているだけ普通の人よりもその機会は格段に多い。今まで見なかったことになってきた現実を直視させられる。

いまさらに理解した。

途端に、怖くなった。

明日菜には自分で自分の身を守れない。もし守ってくれる存在が居るならば、それはネギだ。

未熟な子供に守られながら、杏子の母親のような魔法使いに関わってしまえば、それこそ命がいくつあっても足りない。

「こんな、魔法がこんなのだって分かってたら！ 仮契約なんてしなかったわよッ！！」

今までの自分がどんな綱渡りを繰り返してきたのか理解する。ネギの従者である以上、これからもこの恐怖と付き合っていかななくてはならない。

そんなのは嫌だ！

不安と恐怖を打ち消すように怒鳴り声を上げてしまう。自分の愚かさか招いた結果を無関係の彩輝に当たってしまう。

それにけらけらと笑いながらではあるが、諭すように彩輝が話し掛けてきた。

「神楽坂が魔法を知ったのはつい最近だろ？ それまで魔法が無くて困ったことなんてあったか？」

明日菜は首を横に振る。困ったことなんて何一つ無い。寧ろ知らない方が普通なのだ。

「現代で魔法なんて必要無いのさ。魔法使いなんて多かれ少なかれ昨日に向かって全力疾走している輩だからな。やっぱり、どこかおかしいんだよ」

こちらの常識が通用しないのは、さつき嫌という程体感した。娘を実験台にするなんて狂っているとしか思えない。

「だから、そんな連中に人生を狂わされる人間も少なくはない。その例は上げるまでもないだろ」

母親が魔法使いでさえなければ、杏子は普通の家庭で何事も無く、まともな愛情を受けて育ったのだろう。自分自身もネギと関わらなければ普通に高校に上がり、普通の人生を歩む筈だった。

それが、今となっては見る影もない。

「だがな神楽坂。人生に取り返しのがつかないことなんてないんだぜ」  
これからの人生が終わってしまったかのような錯覚を抱く明日菜に、彩輝はけらけらと何も気負うことなくそう告げた。

「どつにかなるの？」

思わず聞き返す明日菜に彩輝は初めに言ったことを繰り返す。

「願い事があるなら叶えてやるが。魔法に関わりたくないでも可」  
表情はけらけらと笑っているが、彩輝の目はある種の鋭さを持っている。ジッとこちらを注視してくる彩輝に、明日菜は答える。

「私はこれ以上関わりたくない」

「担任とも？」

その問いに明日菜は？コクリ？と頷く。その後の彩輝の対応は迅速だった。

「じゃ、仮契約カード出して」

彩輝に言われるがまま明日菜はカードを取り出した。それを彩輝に向かつて差し出す。何をするのかと思う間もなく、カードの上半分がテーブルの上に落ちた。

気付いたら、カードは真ん中の辺りで真っ二つに斬られていたのだ。

「カードの方はコピーでも繋がっているパスは本物だからな。パスを殺してしまえば契約解消。おめでとう。これで君は自由の身だ」

あっさりと。呆気無く。ネギとの繋がりは断たれてしまった。突然すぎて実感が沸かなければ、感傷に浸る暇もない。

手に残ったカードとテーブルの上に落ちたカードを見る。取り出したときとは違って、いくつかの模様が消え、カードの絵柄が味気ないものになっている。

本当に契約は解消されたのか。

「さて。問題はここからだよなあ。一般人ならこれで終わりなんだけど……神楽坂。俺は面白くもないことに手間を掛けるのは嫌いだ。

短縮できる方法があるならば、出来る限りそつちを選ぶ」

どうやら彩輝の話はまだ続くらしい。明日菜自身、契約が解消されたことによって自分の願い事は叶ったと思っていたのだが。他に何があるのだろうか、彩輝の話聞き続ける。

「修学旅行初日だったか、意図的うつかうに喋っちゃったしなあ。全く、古い馴染みに小言をもらいそうな依頼だよ」

「ちよつと、何言ってるの?」

自分に関係あることかと思っただけ聞いていれば、ただの愚痴になっている。話題の修正も鑑みて口を出したのは仕方ないことだろう。

「あー。いや、こつちの話だ。ま、神楽坂は今日限り魔法関係とは縁を切った。そういう風にしたから、これ以降のことは自己責任だからな」

彩輝が喋っている最中に?トすつ?と胸に軽い衝撃が走った。明日菜は自分の胸元に目を向ける。するとそこには、奇妙なオブジェが生えていた。もっと詳しく言うと、小振りのナイフが二本、胸に突き刺さっていた。

「え?」

声を上げる暇もなく?ぐラリ?と身体が傾く。身体に力が入らない。そして、堪えることが出来ず床に倒れ伏した。

「ばいばい。アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア。……やっと思い出せた。お前のフルネーム、正直今の今ま

で忘れてたから」

意識が朦朧としている明日菜に彩輝の言っている意味は分からない。次に目覚めたときは何かを言っていた程度のことしか思い出せないだろう。

彩輝の投げたナイフは、正確に死の点を貫き、神楽坂明日菜に封印されているアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアに関する記憶・能力等を全て殺し尽くした。

そして二本目のナイフは明日菜を仮死状態へと仕立て上げる。

「しかし、神を創るねえ」

木乃香と刹那から聞いた話を思い出しているのだろうか、感慨深げに彩輝は呟く。

「神は創るものじゃなくて、頼むものだろうに。だからまあ、お前のことも一応頼んどいてやるよ」

成功したら俺が一番驚くな。

明日菜からナイフを抜いて傷口と服を縫い、論理魔術で仕上げをする。その作業中、彩輝の手からカードが零れ落ちた。真正正銘、近衛彩輝の契約カードである。

仮でも、一瞬でもいいから、取り敢えず死んでおけば対処してくれるんじゃないかなー、といったとても投げやりな対応の結果がこれであった。

彩輝は杏子をソファの上から退かし、代わりに明日菜を横にさせる。

「取り返しのつかないことはないけど、どうしようもない理不尽なことはあるから気を付けないかね」

嘯きながら彩輝は杏子を丁寧に別荘内へ運び込む。

さて、この子の異常を取り除き、真つ当な心身になるまでに何日かかることやら。

「彼の無計画性に呆れ、まさかの再登場にビックリ。

「いや、ほんと。まさかここで私にお鉢が回ってくるとは思ってもしなかったわ。突拍子も無い人間だとは思っていたけど、本当に見ていて飽きないわね。」

「考えてもみましようよ。あれが自分の妹なら、絶対に他人に任せるなんてことはしないでしよう。逆に他人だからこつもあつさり丸投げする。しかも動いてくれるかも分からない相手に。その辺りの手の平返しはいつそ清々しいわね。」

「『どうしようもない理不尽なことはあるから気を付けないかね』って、いやいや、君の心変わりと気分が最も身近にある理不尽なことだよ。そう思うなら気を付けてあげればいいのに。見ている側としてはこのままでいいけど。」

「閑話休題。」

「さて、本来なら別に私が施してあげる理由なんて無いんだけども、これがあったりするんだよ。厄介なことに。」

「ウチの元部下が彼を殺しに行ったりしているからね。まあ、本人は気付かずに返り討ちにしてるけど。でもこれは、借りとして換算すべきでしょう。もっと言うなら、出来る限り清算したい方がい

いでしょね。

「あの突飛な思い付きが私まで巻き込まないとは限らないわけだし、いつ元部下の犯行だと気付くか分からないし。」

「だからこそ。ここは無理矢理ポジティブに考えましょう。」

「物語終盤クライマックスで面倒極まりない後処理を丸投げされるよりは、このどうでもいい案件で借りを返しておいて、後は黙って見守っておく。」

「まさか世界の命運をかけて戦ってる時に、ご都合主義超展開が起こつて、わけがわからないまま無事解決。なんて展開が起こり得ないようにする為にも、私がここで借りを清算しておいた方がよくないかしら。」

「神楽坂明日菜自身の問題は彼が解決したからいいとして、彼は私に黄昏の姫御子」神楽坂明日菜という図式が成り立たないようにさせたんでしょう。」

「そうすれば神楽坂明日菜は名実ともに一般人になるのだから。なら、最近の流行に則つて。」

「あ。」

「それではみなさんご唱和ください。」

「『It's All Fiction!!』」

刹那の治療を終えた木乃香がリビングへ戻つて来ると、そこには明日菜が一人杏子と入れ替わるようにソファに寝かされていた。あれだけの体験をした後なのだから、疲れが出たのであろう。それでも寝返りを打つ頻度が多くなっているので覚醒は近いと思われる。

当の杏子はきつと兄が別荘へ場所を移したのだらう。流石の兄も杏子の容態には本腰を入れて取り組むようだ。これですべて一つ心配事がなくなつた。



木乃香はソファの前まで移動すると明日菜の胸の上に置かれているカードが目についた。手に取る。紛れもなく兄の契約カードだ。

何故コレがここにあるのか疑問に思いつつ、明日菜が目覚めるのを椅子に座って待つ。

そうすると、嫌でもテーブルの上に置かれているカードの残骸が目に入った。こちらは明日菜の仮契約カードであろう。それが二つに断たれていることから明日菜が何を選んだのかは想像に難くない。

木乃香は深く息を吐く。テーブルの上で腕を伸ばし、枕のようにして顔を伏せた。

結局、最初から最後まで自分の意地を通しただけ。落ち着くと、様々な反省すべき点が思い返さられる。

刹那の怪我は最初の魂鎮めが成功していればしなかったもの。杏子の容態ももつと上手く事を運べていれば、母親が接触する前に打てる手はいくらでもあった筈なのに。

結果良ければ全てよし。とてもじゃないがそんな風には考えられない。

出す必要のない被害を出した。原因は偏に己の未熟さ。同時に、これが今の自分の精一杯だと胸に刻み付ける。同じ轍を踏まないよう。同じ過ちは犯さないように。

「……遠いなあ」

？ぼつり？と一言呟くと、木乃香は上体を起こした。

後悔は術を鈍らせる。不必要なものだとは思わないが、ずっと引き摺って行くわけにはいかない。どこかで折り合いをつけなければ。

そういえば、と木乃香は椅子から立ち上がる。杏子の母親との遭遇ですっかり忘れていたが、元々は昼食の材料を買いに外へ出掛けた筈だ。

結局、あの騒動で木乃香はレジ袋を捨ててきたし、今持っていないところを見ると明日菜も途中で落としたらしい。

明日菜が目覚めるまで、ジツと待つ気にもなれず木乃香はキッチンへ向かう。部屋で安静にしているよう言っている刹那も、待つように言った為昼食はまだな筈。

冷蔵庫を開けて三人分の材料を取り出す。凝ったものを作る気力はなく、手軽で簡単なものにする。

それから少しの間は、包丁でまな板を叩く音や、野菜を炒める音が部屋に響く。

出来上がった料理を皿に盛りつけ、内一つを刹那のもとへ持って行く。あと二三時間程すれば刹那は別荘内へ移った方がいいだろう。

その頃には兄の治療も終わっているだろうし、刹那の傷の治りも早くなる。

リビングへ戻ると、丁度良く明日菜が起きており、何やら慌てふためいている。そんな明日菜に木乃香は声を掛けた。

「適当に昼食作ったけど、食欲ある？」

しかし、それに対する返答は突飛なもので。

「こ、木乃香！？ 私、ナイフで刺されて……！」

そう言われても、木乃香には首を傾げることしか出来ない。見ての通り怪我はないし、服に血が付いているわけでもない。唐突にパンツと手を叩いて混乱している明日菜の意識をこちらに向ける。

「はい。深呼吸して」

言われるがまま深く息を吸って吐く明日菜。落ち着いたところに木乃香が詳しく話を聞く。

「どこを刺されたって？」

「胸を……」

明日菜は自分の胸元に目をやるが、そこにあるべき傷はない。畳み掛けるように木乃香は尋ねる。

「誰に刺されたん？」

「彩輝さん……」

頭を抱えなくなった。絶対に、確実に、刺していると分かってしまったから。しかし、それはおくびにも出さず、からからと笑いながら勘違いという方向で話を流すことに。

そして初めの、少し遅くなったが昼食はどうするといった質問に戻る。大した量は作っていないので、明日菜は軽めに頂くことにしたらしい。

木乃香がテーブルに料理を並べる。二人で席に着く。箸をつける。食べ終わる。食器を片付ける。することがなくなると明日菜に関しての話になった。

「明日菜は、もう関わらないことにしたんやね」

二つに裂かれた仮契約カード。それが事実を雄弁に物語っている。間を開けることもなく明日菜は木乃香の問いに首肯する。

「明日菜の人生やし、ウチは明日菜の選択を尊重するえ。でもな」  
言葉を区切る。

「近衛木乃香は神楽坂明日菜の友達。これは変りないから」

香乃木綾としては関わらない。名前分けの便利さを実感する。仕事とプライベートはちゃんと分けるし、香乃木綾が学校生活の中で接点を持つことは殆ど無いだろう。

「うん」

と、明日菜ももう一度首肯してくれる。

ぎこちないときもあるかもしれないが、その内昨日のような関係に戻るだろう。

それよりも、明日菜が魔法に関わらないと決めたのならば、もっと他の懸念事項に気を配るべきだ。

木乃香は椅子から立ち上がり、明日菜を促す。

「それじゃあ、関係各位に説明しに行こうか」

あつ、と今気付いたかのように明日菜が立ち上がった。

契約解消は明日菜の独断なので、兎や角言われるかもしれない。木乃香も今回の一件でスキル不足だと実感した説得の練習を兼ねて付き添うことに。

「念の為に聞いておくけど、やっぱり記憶は失いたくないよな？」

「うん。多分忘れちゃったら、また成り行きでネギと仮契約しちゃうしそつな気がするし」

今まではネギの従者という理由で免れていたが、一般人になった以上その問題も解決しなければならぬ。まあ、こちらは学園長と対談すればどうにか出来るだろう。

明日菜から忘れたくないと言ったことだし、二人は彩輝の家を出る。最終的な行き先は関東魔法協会本部。しかしその前に一度二人の寮部屋に立ち寄ることにする。

そして、家から出て少し歩いたところで明日菜が振り返った。やはり、さっきまでそこにあった家は明日菜には感知出来なくなっていたらしい。

「もう来る必要がないってことやろうね。魔法に関わらないようにするため、とも取れるかな」

言いつつ二人の足は寮部屋へ向かう。あまり意味は無いかもしれないが、木乃香が兄からの贈り物を取りに行く為に。

大した用ではない為、寮への寄り道は短時間で終わり、二人は今度こそ関東魔法協会本部へと足を運ぶ。

木乃香は一度も行ったことがない場所なので、明日菜が先を歩く。そして着いた先は武蔵麻帆良にある協会。明日菜は協会の中を通り抜けると、地下へと続く通路に足を踏み入れる。

しかし本部という割には所々床や壁にヒビが入っており、擦れ違う人もほとんど居らず閑散としている。

まさかつい先日一柱の悪魔に侵入されたばかりで、ここで小規模な戦闘があつたとは木乃香でも予想できまい。

本部の修復は未だに終わっておらず、負傷した人間全員が完治したわけではない。

そこへ今回、ガンドルフイーニという腕利きの魔法先生が一般人相手に大怪我を負わされたのだ。犯人は行方知れず。ただでさえ少ない人員を更に割かれることになった。その結果が今の本部の姿と言えよう。

誰に見咎められることもなく、二人はネギが泊まっている部屋に辿り着いた。ノックをし、扉を開ける。

部屋に入るとベッドの上にネギが寝かされており、服の裾から包帯が巻かれていることが分かる。ベッドから離れたところに置かれている机の上には、彼がいつも持ち歩いていた杖の残骸が哀愁を誘う。しかし、ネギと一緒に居ると思われていた宮崎のどかの姿がない。その疑問を口に出す暇もなく、部屋に入った明日菜を見たネギが目には涙を溜めて明日菜の名前を叫ぶ。

「明日菜さんっ！」

その際、ネギの服の右袖の部分が肘の辺りで地面に垂れ下がってしまつのを木乃香は見た。

「何があったんですか明日菜さん！ さっきカードの絵柄が変わっちゃって、念話は出来なくなってるし、僕どうしたらいいのかわからなくなってる。今のどかさんに誰か先生を呼ぶよう頼んだところなんです」

どうやら、のどかとはちょうど入れ違いになってしまったらしい。これから話す内容を考えれば、こちらの方が好都合かもしれないが、木乃香がここに居ることは二の次にして、ネギは明日菜に何があったのか何度も何度も尋ねてくる。明日菜はというと短い期間であったが、仮にも主従関係でいた仲だ。返答に窮し沈黙を貫いている。

魔法関係での縁は切れたと言っても、今までの人間関係がリセットされるわけではない。やはりこう改まると話しづらいのだろう。

だからこそ、その為に木乃香は同伴したのだ。

答え倦ねる明日菜に変わって、ネギの問いには木乃香が答えた。

「落ち着いて聞いてねネギ君」

「木乃香、さん……？」

明日菜が醸し出している雰囲気からただ事ではないと感じ取ったのか、ネギは木乃香の言葉を待つ。

「いい？ ネギ君。明日菜はね、もう魔法とは関わりのない一般人になったんや。だからネギ君の従者じゃなくなったんよ」

そして、ネギだけの時間が停止した。凍結したように固まるネギ。？ギチギチ？と錆びた歯車が回るように、ネギの時間も再び緩やかに流れ出した。

「う、うそですよ、明日菜さん？」

ネギは懇願するように明日菜を見つめる。右腕の欠損。父親の形見の杖。自身の使い魔。立て続けに大切なモノを失って、次は最初の従者が居なくなってしまった。なんだかんだ言いつつネギが麻帆良に来たときから面倒を見てくれている明日菜が従者をやめてしまったとは考えたくないのだから。

しかし、明日菜は首を横に振る。

「な、何故ですかッ！？ 理由を、理由を言ってください！」

認めたくない現実にネギは必死にしがみつくが。



「もう、魔法なんかには関わりたくないのよ」

明日菜から直接聞かされる拒絶の言葉にネギは色を失う。これがネギ自身の問題なら弁明出来たかもしれないが、明日菜が言っているのは、ネギの根幹に関わっている部分を全て拒絶するもの。

魔法を一番に考えるネギとしてはあり得ない理由だろう。ネギの行動や性格が問題だったなら、改善の余地はあっただろうに。

そして、呆然とするネギに木乃香が優しく語りかける。

「なあ。ネギ君は将来何になって、何をやりたいかとか、ちゃんとイメージ出来て、その為がんばってるやろ？ 明日菜はね、ネギ君とは進む道が違うかったんよ。これは偶然、ネギ君が歩いている道と、明日菜が歩いている道が交わっただけの話や。ちょっとした交差点やね。」

一時的に交わったとしても、道はすぐに別れてしまう。ネギ君はウチらの担任やろ。だったらネギ君がすることは明日菜を自分の道で歩かせることやなくて、明日菜の背中を押してやることやない？ 担任なら自分のことばかりじゃなくて、生徒の進路もちゃんと考えてあげな」

ネギは黙って木乃香の言うことに耳を傾けている。

「ネギ君も大変なんは分かるえ。でもそれで『可哀想だから』って理由で明日菜が傍にいてくれて嬉しい？ もしもネギ君と同じ境遇の子が居ったら、その子にも同じように抱く感情やえ。ネギ君個人を見ているわけやない。」

ネギ君も最近色々あって気持ちの整理がついてないんと違う？

だったらここは明日菜と距離を置いて、じっくり考えてみる？」

そう言うと、木乃香はネギが寝ているベッドの傍まで近付いて、ベッドのサイドテーブルに一枚の紙とペンを置いた。

その紙には退寮届の三文字が。

ネギが学園に来た初日に学園長室で彩輝から渡されたものである。どんな些末なものであっても、この妹が兄からの貰い物を捨てる筈がなかった。

退寮届なんてものを見せられて戸惑うネギだが、それも木乃香は優しく諭す。

「明日菜やってなネギ君のことが嫌いになったわけやない。このまま強引に明日菜に迫ったら、今の関係やって壊れてしまうんはネギ君にも分かるやろ？ これは落ち着く為の小休止やと思ってくれればいいよ」

ネギにとってもここ最近の出来事は密度の高いもので、一度明日菜から離れてみるのもいいかもしれない。などと思ってしまったのだろう。

「……………分かりました。僕にも、明日菜さんにも、時間が必要ですよね」

そうして、ネギは頷いてしまった。初心者用の杖を左手で振るい、ペンを宙に浮かせる。利き腕で書くときと、なんら変わりのない筆跡で退寮届にサインした。

まあ、ここで距離を置こうが置くまいが、既に明日菜が仮契約を解消したことに変わりない。そして、ネギの身近で仮契約の魔方陣を描けるのは石になったオコジヨだけである。

相手を動揺させ、平常な判断を奪い、自分に都合の良い展開へ持っていく。詐欺師の常套手段である。

音使いや言霊使いの長口上ほど信用できないものはない。

薬王寺杏子のときも、もつと上手く話せていたら。彼女からの協力を得られるような依頼内容に誘導出来ていれば、また違った結果になっただけかもしれない。

そして、途中で木乃香の意図を察したであろう明日菜は、黙って見ている。ネギと出会ってからのことを思い返したのだろうか。この未熟な魔法使いと居ることの危険性を再確認したのだろうか。

その何もしないという行為が、明日菜の気持ちを如実に表していると言っても過言ではなかった。

「じゃあね、ネギ君。お大事に」

ここに来た目的を達成した木乃香はネギのサイン入り退寮届を持って颯爽と部屋を去る。退寮届を四つに折りながらポケットに入れる木乃香に明日菜も続く。

「じゃ、ウチはこれからおじいちゃんのとこ行ってくるから」

関東魔法協会本部を出て、協会からも出た後、木乃香は明日菜にそう告げた。明日菜に背を向けて、一人学園長室へと足を運ぶ。

「ごめん木乃香」

そんな木乃香の背に明日菜は謝罪の言葉を投げた。木乃香は足を止めて振り返る。

「木乃香が私のためにやってくれたのはわかってるんだけど……また、少し怖くなったかもしれない……」

明日菜が行っているのは先程の詐欺口上のことであろうか。依頼人に最善の結果をもたらそうと思えば、別の誰かが犠牲になってしま

う。  
今回の依頼人は明日菜で、犠牲者はネギだった。知り合いだろうと木乃香がやるべきことはまるでブレしていない。躊躇がない。

明日菜の言葉を聞いてからからと木乃香は笑った。

「まあ、これもウチやしね。気長に付き合って、ちよつとずつ分か

り合っていけばいいんと違う?」  
今度こそ木乃香は明日菜と別れ学園長室に向かった。

そろそろ授業が終わる頃だろうか。向かっている途中に、昨日から手を借りてばかりの千雨には事の顛末を書いたメールを送信しておく。

あれだけ調べさせておいて、肝心なことは何も知らせないというわけにはいかないだろう。

そうしている内に見知った校舎が見えてきた。

今の木乃香の服装は制服ではなく私服であるが、気にすることなく校舎に入って、外靴と上履きを交換。三年も通い、歩き慣れた廊下を進む。

幸いまだ授業中だったおかげで教師に見咎められることはなかった。誰とも擦れ違わないまま学園長室に到着。

ノックしてドアを？ぎィィ？と開ける。

ここのドアはこんなにも立て付けが悪かっただろうか、と疑問に思いつつも木乃香は部屋に入る。

「ふお。どうしたんじゃ木乃香？」

本日もサボタージユを満喫しているであろうと思われていた孫が突然現れて学園長は目を丸くしている。

「大した用はないえ」

そう言いつつ、木乃香は学園長が座っている机の前まで移動する。そして、四つに折り畳んで持っていた紙を広げて机の上に置いた。

勿論、ネギのサイン入り退寮届である。

「……………これは」

紙の用途と、それに書かれている名前を見て、一瞬言葉を失う学園長。

「まあ、ネギ君は教師やし、こついう退寮届は必要無い気もするけど、一応けじめとしてね。ウチも明日菜もネギ君も、全員が納得した上でサインしてもらってる。まさか学園長が受け取らないわけないよな？」

からから笑いながら告げる木乃香に、学園長は返答を渋る。

「しかしじゃな、ネギ君が木乃香たちの部屋を出たら、次に泊まる部屋が」

「瀬流彦先生の部屋」

学園長の言葉を最後まで言わず、木乃香はあらかじめ用意していた答えで遮る。

「もう暦も五月に入ったしね。今から赴任する先生は居ないし、ここに来るまでにそういう事情に詳しい人に聞いてみたら、瀬流彦先生の部屋は当分使う人が居らんって聞いたえ」

学園関係者に聞いたのではなく、昨日千雨に調べてくれるよう頼んでおいた二つ目の依頼である。

この受け答えを想定して、しっかりと用意されていた回答に学園長は言葉を詰まらせる。木乃香は確実に逃げ道を塞いでできていると理解したのだろう。

「……そうじゃな。分かった。ネギ君の部屋を移そう」

「荷物は一応魔法先生が取りに来てな。まとめておくから」

木乃香にも意外なことに学園長はあっさりと頷いた。ネギと同室になったのは何か理由がある筈で、もう少し粘るかと思っていたので拍子抜けだ。

しかしそれは仕方のないこと。木乃香は知る由もなかったが、学園長が拘るべき最も重大な理由が欠落しているのだ。耄碌したわけはない。他者によって、なかったことにされたから。

神楽坂明日菜は黄昏の姫御子という認識が、今となってはもう出来なくなっているのだ。

「それでもう一個、話があるんやけどな」

ネギに関する話はこれで一段落ついた。次は明日菜のことについてだ。

「明日菜はネギ君の従者やめたから」

「……そうか」

黄昏の姫御子とは分からなくなっているため引き留める理由はない。

ネギの従者が減ってしまうのは残念だが、一般人が悪魔に拐われたのだからそれも仕方ない、と学園長は納得する。

だが、木乃香にとってはこの報告だけで終わらせるわけにはいかないのだ。

「明日菜は一般人になったけど、記憶の方は残しとけれんかな？」

それを聞いてもう一度、学園長は答えを渋る。

今の学園の立場は非常に危ういものだ。木乃香も理解している。何が火種になって飛び火するかは分からないのだから、可能性のあるものは出来る限り排除したいという気持ちも分かる。

だからこそ、攻めるのならばそこしかない。

「ところで。これは関係ない話やけど、薬王寺梢恵さんはもう捕まっただんかな？」

学園長は魔法先生を返り討ちにし、先程騒ぎを起こしたばかりの魔法使いの名が孫の口から出て驚いた。嫌な予感がしたのか表情には出さなかったが、纏う雰囲気が一瞬変わった。

それで木乃香は学園長がある程度の事情は知っていると判断する。

「一時的に母親から娘さんを匿ったんやけどな、変なクスリ持ってるね。今は取り上げて兄様に預けてあるけど、こういうのは本職の人に任せた方がよくない？」

要訳すると、自分は証拠を持っているから警察に通報するぞ。もちろんブラフだ。

今は裏だけの問題だが、そんなことをすれば表の問題にも発展する。警察が動くとなれば、マスコミも動く。

情報化社会において学園の失態が日本中に広がるのは想像に難くない。



「木乃香。それは脅しているのかの？」

表情を硬くして、少々威圧的な態度で臨む学園長。しかし。

「まっさか」

からからと笑いながら木乃香はそれを受け流す。

「ああ、でも。クスリはクスリでも更に一線を画すモノだったら、父様にも言っておいた方が調べ物は捗るやろっね」

他の組織に自分の組織の弱みを握られるなどあつてはならない。しかも相手は数週間前まで睨み合い、今となつては日本を代表する最大結社になっている。

学園長はこのまま内々に処理したい筈だ。

「……分かった。明日菜君についてはこちらで例外的措置を取ろう」

学園長には初めからYESと答える以外の選択肢はなかったのだ。

用件を全て終えた木乃香は身を翻し、部屋の外へ向かう。そしてドアを開ける直前に振り返って、最後に一言学園長に告げた。

「そうそう。ウチも後で退寮届出すから受理よろしく」

そして木乃香は寮部屋に戻って荷造りをしていると、部屋の呼び鈴が鳴った。木乃香は作業を一旦中断して客への応対をすることに。

ちなみに明日菜はまだ帰って来ていない。

部屋のドアを開けると、そこには千雨が立っていた。学校が終わって直帰したようだ。帰宅部で用事がないとも言える。

「やあ千雨ちゃん。今ちょっと散らかってるけど上がってよ」  
からからと笑いながら木乃香は千雨を招き入れた。

荷造りの最中なので部屋の中にはダンボール箱が点々と置かれている。

「何だ？ まるで引っ越してもやるみたいだな」

部屋の有り様を見ながら千雨はそう言うが、お茶の準備をしながら木乃香は肯定の返事をする。

「うん。引っ越すつもりやし」

木乃香はお茶を淹れ、テーブルの上に二人分のティーカップを並べる。

「それでどしたん千雨ちゃん。荷造り手伝ってくれるん？」

「まあ、別に手伝ってもいいけどな。それより、他に聞く奴も居なさそうだから私が確認しておこうかなと」

「名探偵千雨ちゃん。犯人はウチ。二十四時間三百六十五日どんな質問にも答えるえ」

茶化す木乃香よそに、千雨はお茶を一口飲む。

「お前、こうなるって結果をいつから予想してたんだ？」

一言目から深く斬り込んでいく。シニカルに笑う千雨に、からからと笑いながら木乃香は答える。

「まさか。予想出来てたならもつとマシな手を打ってるえ」

「にしては随分と準備がよかつたじゃないか。瀬流彦先生の部屋の次の入居者を調べさせたり。これ、かなり初期の段階で私に頼んできたよな。少なくともその時から担任がこの部屋を出ていくことになるのは予想してたんだろ？」

「まあ、可能性としては、そういうこともあるかなー、と」

事が全て終わったとき、明日菜がこれからも魔法に関わっていくかどうかと単純に二択で考えれば、予想出来ないことはない。

関わるなら現状維持。関わらないなら、と考えて木乃香は部屋の口フトに目を向ける。つられて、千雨もそちらに視線を送る。

「あそこネギ君が使ってるスペースなんやけどな」

「飾ってある杖類も、置かれてる薬品系も全部魔法関連か」

「明日菜が関わらないんやったら邪魔になるやろ」

あっけらかんと木乃香は言う。個人の所有物を勝手にどうこうすることは出来ないので、個人そのものを部屋から追い出すという暴挙。

目につかない所へ片付けると言ったところで、魔力の暴発が多く秘匿意識の低いネギには注意し続けなければならぬだろう。

「それで、神楽坂が関わらない方を選ぶよう仕向けたと」

「人聞きが悪いな千雨ちゃん。選んだのは明日菜であって、ウチは何もしてないえ。選択したときに傍に居たのは兄様やし……正直、兄様が明日菜のことに口出しすると思う？」

「それは絶対にないな」

即答であった。

「だけど、お前は神楽坂に事前知識を与えなかったんじゃないのか？ あの時電話していたから分かるが、突発的な事態にお前自身が慌ててたんだ。神楽坂の方は心構えすら出来ずに巻き込まれたんだ。その状況なら、普通の人間は関わらない方を選ぶだろうよ」

「うん。あれは完全にウチの落ち度やったね。でも千雨ちゃん。計画通りというなら、その一点がウチの計画から外れたところやえ。しかも些細なミスやなくて、致命的なミス」

「いや、忠告する機会はいくらでもあった筈だ。出会ったときから魔法絡みだと理解していたわけだし。それに、メール読んだぞ。あの子二重人格なんだってな。解離性同一性障害が起こる最もポピュラーな理由は、幼少期の虐待。知らなかったわけじゃないだろう？」

木乃香は頷く。お互いに一息入れるため、木乃香も千雨もカップへ手を伸ばした。

「だからお前は、厄介事に発展する可能性が高いと知っていて、教えて情報を開示しなかった」

「バトルなんてするつもりはなかったから、解決編で一気に話すつもりだったよ。でもだとしたら、名探偵さん。その動機は？」

からからと木乃香は笑う。千雨は面倒そうに溜息をつく。「ああ、何で予想出来てしまうんだろう」と愚痴るように呟いた。

それも一瞬。千雨はすぐにシニカルな笑みを浮かべ直す。

「彩輝の家とこの寮部屋、往復が面倒とか考えてたろ。こんな事件起きなくても、近い内にここを出ていくつもりだったんじゃないのか？」

「うん。そうやよ」

あっさり木乃香は頷いた。

「そうになると、二人との接点は格段に減るからな。まあ、あの担任だ。これからを心配するなって言う方が無理だろう。で、お前は最後の最後に最大級のいらぬお節介を焼いたってわけだ」

シニカルに笑う千雨に、木乃香が言う。

「戯言やね、本当に」

からからと笑いながら。

「お前ら兄妹とは何があっても敵対したくないなあ」

「そのときは千雨ちゃん、地獄でまた友達になろうな」

「何言ってるんだよ。私はただの一般市民だ。しかも頭に？善良な？という単語が付くな」

地獄には行かぬーよ。と二人して笑い合う。

聞くべきことは終わって、カップに注がれたお茶を飲み干した二人は荷造りを再開する。千雨も手伝うことにしたようだ。

前々から考えていたのは本当のようで、初めから捨てるものと持っていくものがハッキリと区分されている。木乃香の荷物は比較的スムーズに作業が進んだが、問題はネギの荷物だ。

どうするか悩んだ挙句、面倒になって大まかにまとめることだけになった。ダンボール箱に薬品類・割れ物注意とマジックで書きながら木乃香が呟いた。

「それにしても。クスリを持ち込んだ人は捕まったんかな？」

「さあな。まあ、学園なんて閉鎖的な場所にそういうモノを持ち込む時点で碌でも無いヤツっていうのは分かるが。一応、調べといてみるよ」

ここが住みづらくなるのは勘弁だからな。

適当に荷物を詰め終わると、千雨は彩輝の家へ《門》を開いて、木乃香の荷物を運び込む。

その作業も終わると、千雨は自分の部屋に引き上げて、木乃香は新しい退寮届を貰いに行った。

別荘内のある一室。そこに居る人間は二人。他にはところ狭しと楽器が散乱しており？ぱちぱち？と一人分の拍手が室内に反響していた。

「ま、なかなか良い演奏だったんじゃないの。あと三年もすればそれなりの演奏家にはなれるさ」

手を叩きながら上から目線で話し掛けるのは薬王寺杏子。約三時間ほど前までは身体の内側がボロボロだったのに関わらず、今は軽口を叩けるくらいには回復しているようだ。

「あれ？ よく考えると、何で俺はただ働きなのに三日もぶつ通しで演奏し続けてるんだらう」

そして、その言葉を聞くのはぐったりと椅子に座り込んだ近衛彩輝。

「人が折角贅辞を送ってやったつてのに、ただ働きとは随分なことを言うじゃないの」

「うるせえよお嬢ちゃん。口を動かす暇があるなら、焼きそばパン買ってこいよ」

「お兄さん、お小遣いちょうだい」

このセリフを言う際に、杏子は今まで整った顔立ちを台無しにしてきた不機嫌そうな表情から一転、年相応の無邪気な笑みに切り替える。

自分の持ちつるものを最大限に発揮する強かさ。評価できるところではあるが。

「子遣いならやってるじゃないか。子供を遣わすという文字通りの意味で」

それがこの男に通用する筈もなく、杏子は？チツ？と舌打ちを漏らして、この雑談を切り上げた。しかし、会話自体を打ち切ったわけではない。彼女には、まだ聞くべきことがあるのだから。

「それで、何でワタシはまだ居るわけ？ もう目覚めないつもりで眠ったのに、当たり前のように翌朝が来られても困るんだけど」

またすぐ眉根に皺が出来る。杏子の問いに彩輝はけらけらと笑いながら答えた。

「何でと言われてもな。二次方程式が解ける人間には一次方程式も同じように解ける、といったところだよお嬢ちゃん」

「もっとわかりやすく言えっの。そしてお嬢ちゃん呼ばわりはやめやがれ」

「じゃあ何て呼べばいいんだよ？」

「一般聴衆」



「それで一般聴衆ちゃん、神なのか幽霊なのか別人格なのかイマジナリーフレンドなのかは知らないが、そんなものはどれにしたって同じだろ。自分よりも高次元のものには干渉することが出来ないんだから」

「フーかこのやり取りは昨日やったばっかなのよ。もう何でもいから普通の呼び方に戻せつての。……まあ、アンタが何か裏技を使ったのはわかったわ。その理由は？　ワタシはもう必要無い存在でしょーよ」

自分の意識があることを許せないような口ぶりで杏子は話す。自分が居れば基本人格を食い潰してしまうことを危惧しているのだろう。

「君は薬王寺杏子を助ける存在だろう？　不必要じゃないさ。解離性同一性障害の完治っていうのは日常生活に支障が出なければいいだけの話なんだ。君がその子の中で大きくなりすぎるのは問題だが、薬物依存なんて長い目で見ないといけない症状には流石に完治まで付き合っつてやれない」

だからと言ってこっちも何も手を打たないわけじゃないから、これで勘弁してくれ。

彩輝はあらかじめ用意しておいた音楽プレイヤーと巨大なヘッドフォンを杏子に向かって投げ渡す。

「……これは？」

「ネガティブな感情を軽減させて、ポジティブの方へ持っていく魔法の音楽。音っていうのは耳だけじゃなくて、その空気の振動を全身で感じて欲しいんだけど、無いよりはマシだろうさ。折角閉じた

傷も開いちゃったら元も子もないしな」

そういえば、と杏子は今に至って思い当たる。今まで自分が請け負っていた心的外傷が、分かりやすく言えば、傷が開かないように縫合されている。

勿論傷自体がなくなったわけではない。何かの拍子に傷が開いてしまいかもしれないが、不幸自慢を出来る程度には回復している。

「ちなみにこの学園は広いけど、俺はまだヘッドフォン属性を持つ人間には会ったことがないんだ」

激しく投げ返したい衝動を堪え、しびしび首にヘッドフォンをかける。彩輝が持つても大きいと感じたヘッドフォンだ。小学生の杏子が首にかけると、更に際立つ。初対面ではそれしか印象に残らないだろう。

後でイヤフォン買おうと誓いながら、杏子は本当に今更になってしまった質問をする。

「ところで、アンタは誰？」

「はじめまして。俺は近衛彩輝。木乃香の兄だ」

特に理由は無いけど、なんとなく納得した。先程の掛け合いは兄妹共通の感性なのか。

「ホントに『お兄さん』だったわけね。じゃあ一つ聞くわよ。アレは一体何がしたかったの？」

「きつと何かをしてあげたかったんだよ。多分動機の辺りでごちゃごちゃした理由を用意してると思うけど、君のことをどうにかしたかったのは本当だ」

「完ツ璧、余計なお世話じゃねーの」

「まあ、そう言ってやらないでくれ。あれでも陰陽師歴二ヶ月も経ってないんだ。術の方は兎も角、事件をどうという風に転がせばいいか経験が足りてないんだよ」

ちよつと待て。と、杏子は思う。

アレがたった二ヶ月で到達できる領域なのかと。

「出鱈目だわ」

しみじみと呟く。そんな呟きは無視して彩輝はまた新たな話題を振った。杏子のこれからのことについてだ。

「近い内にここの寮に移ってもらうことになると思うから」

この杏子にとっては比較的どうでもいいことであるが、それでも念の為に聞いておく。

「あの母親はどうなったわけ？」

「さあ？ 言ったろ。こっちは三日間ほぼ休みなしで君に付きつきりだったんだ。外で何が起こってるかなんて、そこまでは把握していない」

「……そう」

何故かは分からない。自分の感情が把握できない。杏子の口から歌が紡がれた。

R i n g - a - R i n g - o - R o s e s  
R i n g - a - R i n g - o - R o s e s  
A p p o c k e t f u l l o f p o s i e s ,  
A t i s h o o ! A t i s h o o !  
W e a l l f a l l d o w n .

母親から教わった歌。あんな仕打ちをされたとしても、まだ薬王寺杏子のどこかには別れを偲ぶ気持ちが残っていたのだろうか。

「ワタシはもう眠るわ」

「そうかい。薬王寺杏子が起きたら木乃香に丸投げするよ。そっちの方が安心できるだろ」

彩輝は椅子から立ち上がって、杏子を客間へと案内しようとする。その前にもう一言だけ杏子が喋った。

「髪を頭の横でまとめた剣士が居たわよね？」

「ああ。居るな」

そこで杏子は軽く目を瞑り、深く息を吸い込んだ。

「……じゅじゅめんなさい、って伝えておいて」

目に見えて葛藤しており、謝罪の言葉を口にするのは心底不本意だと言わんばかりの態度である。

その様子を見てけらけらと彩輝は笑う。

「君、実はすごい良い奴だろ。木乃香が気に入るのも分かるな」

「うっせーわよッ!!」

照れているのか、恥ずかしくなったのか、兎に角感情を隠そうと杏子は大声を出して誤魔化そうとする。顔はすっかり赤く染まってしまっているが。

そして杏子は客間へ案内されて、備えられているベッドに潜り込む。次目覚めたときは彼女の言う通り、基本人格の杏子が意識を保っているのだろう。

「さて、俺は俺でやるべきことをしますかねえ」

杏子を案内し終わった彩輝が呟いた。

まずは刹那の治療をして、いつ杏子が目覚めてもいいように木乃香を呼んでおかなければ。

そして、杏子の母親の行方と、この街にゴミを持ち込んだ者を処理しなくては。

「まったく。悪い意味で忙しくなりそうだ」

山瀬様とTOMOKICHI様が居なかったら、始まりもしなかった明日菜救済イベント（建前）終了。ちなみにエイプリルフルネタ×2字。燃え尽きたぜ。真っ白さ。たかがあの程度の文量で泣き言を言うなんて四月一日の作者は情けないにも程がある。

書き終わってみると、推敲が一番キツかったですね。皆様の誤字脱字の報告を心よりお待ちしております。

そんなわけで明日菜は傍観者から一般人にクラスチェンジ。黄昏の姫御子なんてなかった。今回採用した方法には皆さん言いたいことがあると思いますが、この作品での明日菜の扱いはこんなものです。

というか明日菜を殺すのはアニメがとくの昔にやってるんで、目新しくもないんだよなあ。原作の展開なんて知らね。

おそらく作者と読者の皆様との間には「救済」という言葉に大きな食い違いがあるような気がしなくもない。

記憶の封印を解くだなんて態々藪蛇みたいなことしなくてもいいじゃない。蛇が出るって分かってるなら、藪ごと焼き払うでしょ、普通。その代わりに死体<sup>アスナ</sup>が出てしまっただけの話ですよ。

もう既にお分かりだと思いますが、三十話の退寮届け、四十話の元部下、五九話の瀬流彦の解雇、六一話はその事件自体が、このイベントの為の伏線だったのさ！ 嘘かもしれない。

麻薬絡みにした理由は、今だから言っけど作者は去年の内から神メ

モがアニメ化すると確信していました。嘘だけど。

このサイトで一番最初に神メモネタを使った自信があります。割と本気。

どうでもいいけど予知夢の件は本当に作者の夢に出てきたんですよ。これは使えると思って生まれて初めて夢日記を書きました。

木乃香の引っ越しイベント（本音）が終わったんで、次回からはこれまで放置してきたキャラに焦点を絞ろうかなど。

## 第七二話：ヨスガにソラってる part 4

さらに翌日。五月八日木曜日。

昨日の残り時間は木乃香が持ち込んできた依頼の事後処理にあてがわれることになった。

取り敢えず、まず俺こと近衛彩輝は刹那の怪我の具合を診たあと、ジジイに新しく寮に入る学生ができたことを報告した。「次は入寮か」とか呟いていたけどその辺はスルー。

報告を終えると俺は薬物の入手経路を辿ることに。

ちうちちゃんと茶々丸にも声を掛け、情報収集をする際のいつもの布陣で挑んだのだ。

当初、ちうちちゃんらが学園外に逃げていると予想していた母親の行方は、割とあっさり見つかった。というか探してすらいない。学園が身柄を確保するのを放っておいた式が見ていたから。

どうやら少なくはない量のクスリを一気に飲んだということで、俺と茶々丸が関東魔法協会本部へ向かうことに。

ちうちちゃんには引き続き、売人の方を当たってもらった。

そして、本部へ着いたときには母親に施せる胃の洗浄やらすぐに処置できるものは粗方終わっていた。そこからはもう一度ジジイに連絡を取って、俺と茶々丸にも手伝わせるように指示を出させる。



精神的な部分には俺の方が一日の長があると理解しているのか、すぐに承諾してくれた。

学園としても明らかに違法な薬物を入手している人間が居るのだから放っておくわけにもいくまい。売人とそのルートを解明し、駆逐しておかなければ次は生徒間で流行りだすかもしれない。

良くも悪くも能天気な連中の集まりだからな、ココは。手遅れになるまでに大した時間は掛からないだろう。

茶々丸と二人がかりで母親の精神を安定させ、ノイズを懇切丁寧に取り除き、必要な記憶と不必要な記憶をより分けてまとめるところまでは上手くいった。ここで娘　杏子のことについては多少工作しておいた。これで杏子は何も理解していない哀れな被害者ということになっただろう。

そして、クスリを売買している部分に場面が移ると教員たちが色めき立った。母親の取引相手である男の顔をピックアップし、すぐに足取りを追ったのだ。

しかし俺としては記憶が妙に整理されているようで気に入らない。

……確か前にもあったような気がするな。

そもそも一気にクスリを摂取するという部分からして気に入らない。この部分は俺も式を通じて見たが、腑に落ちないものは落ちないのだ。

学園の教員は自棄になったんだろう、と言って深く考えていないが、このタイプの魔法使いがそんな短絡的な行動に出るとは思えない。

記憶を覗いた母親の人物像と噛み合わない。

そしてもう一つ気に入らないことが。クスリ自体のことについてだ。茶々丸がまだ残っていた薬物の成分やらを調べたところ、この世界には実在しないものだったらしい。つまり魔法世界産であるということ。

政府が管理しているゲートを通るのだ。魔法世界の物はこちらに原則として持ち込み禁止。それが違法な薬物なら運ぶのはさらに困難を極めるだろう。

学園の警備とは話が違う。嚴重なチエックをくぐり抜けたのにもかかわらず、それを一介の魔法使いに捌くだろうか。加えて、相手は正当な対価を受け取っていたかあやしいときた。

売人の男の行方はちうちやんと茶々丸に任せることにして、俺は— 先ず魔法世界へ。非常に残念なことに、零崎彩識の死亡説をまた一部でひっくり返して調べてみた。

その結果、出所はメガロらしいと判明。元を辿れば個人の保有魔力量を強引に増やそうと研究していたとか。

だが去年の八月辺りに研究所で怪事件が起きて、一度頓挫したらしい。建物の一部が風化したり消滅したり、栽培畑には氷山が出現したり、研究員は全身から血を吹き出して死んでいたとか。

こっちの事件に心当たりは幾つかあるが今回の事件とは関係ないの  
で割愛。

その後は施設を転々と変えながら研究を続けていたが、結局成果は得られず、ただの麻薬として他国にバラまいたとか。

製造元を辿ってみたが、ここから追うのは無理なので俺の成果もゼロということに。

引き上げてちうちちゃんと茶々丸の報告を聞いたが、一応男は見つかったらしい。だけどここまでだ。クスリがどこから湧いたのかは依然謎のまま。すでに教員が確保しただろうが十中八九男は白だろう。そうになると、俺が式から得た情報もあやしいな。

こつも完全な無駄足を踏まされたのは俺としても初めてのことだ。

わらえず  
不笑。

流石に今回ばかりは笑えない。最終的にこつちが手に入れることができた情報はゼロ。完膚なきまでにしてやられたよ。

逃げることに隠れることに関しては、あつちの方が一枚上手のようだ。鬼ごつことかくれんぼは絶対にやりたくない相手だな。

幸いなのは、売人の搜索は誰の依頼でもないということだろう。ただ働きの甲斐があった。こつちの損失は時間と労力だけだ。

自分の庭に薬物をバラ撒かれ、式に手を加えられたという不愉快な感情を消すことは出来なかったが。

「……………はあ……………」

溜息が漏れる。

現在の時刻は午前六時。気付いたら一緒に住むことになっていた妹の顔でも見に行こう。

部屋を出て昨日宛てがったばかりの木乃香の部屋へ向かう。木乃香が使う部屋は俺の部屋の隣。移動距離十歩でドアの前に立つ。

「カノコ  
KNOCK

「木乃香ー」

親しき仲にも礼儀ありと二度軽くノックを試みるも、反応はない。

ドアノブを捻ってドアを開けた。中はもぬけの殻だった。

「あれ？」

どうやら不在のようだ。部屋の中にはまだ開封されていないダンボール箱が散乱している。飾り気なんてまるでない殺風景な部屋。

今の状況を見る限り、昨日はベッドをしつらえるだけで終わってしまったようだ。木乃香は昨日連れてきた杏子の相手の手一杯だったようで、お互いに暇がなかったからな。

木乃香が学校から帰った後になるが、今日は荷解きを手伝ってやりたいものだ。

「しかし、ここに居ないとなると……」

一言呟いて部屋を出る。当然だが俺の部屋には居なかった。それほ

ど広くもないこの家で木乃香が使う場所となると　リビングぐら  
いか。

次はそちらに向けて移動する。

予想通りと言つべきか、リビングに入るとキッチンに立っている木  
乃香を見つけた。今日の朝食は茶々丸の代わりに作るようだ。

衣服の上にエプロンを着けるといふまともな格好に少し安心感を覚  
える。新婚生活が始まった夫婦でもそんなことはやらないだろう。  
逆にそんな想像が出来る時点で俺の方が終わっている。

「木乃香」

思考にリセットをかけるように背後から呼びかける。

「んー？　なにー？」

木乃香は振り返ることなく手元を見つめた声だけを返してくる。調  
理中なのだから当たり前だ。？トントん？と包丁を扱う小気味良い  
音が聞こえてくる。

俺はそのエプロン姿の背中に近付いて、包丁を握っている手を優し  
く抑え込み作業を中断させる。

「兄様？」

疑問符を浮かべる木乃香を無視して、俺は木乃香を抱き寄せた。

「ひゃっ………！」

小さく声を上げる木乃香は俺の腕の中に収まっている。構図的には妹を背後から抱きしめている兄の絵を想像してもらえれば概ね間違いないだろう。人としては間違いだらけの気がするが。

俺が人肌のぬくもりを味わっている間、突然のことに驚いてか木乃香は僅かに身を強ばらせている。突飛なことをしている自覚はある。こういった場合、自覚アリと無自覚では質の悪いのはどちらだろう。持ち合わせの解答はない。

が、取り敢えず口は出してみることにした。発言の代わりに唇を木乃香の頬へ。キメの細かい肌に口をつける。

「……えっ」

何をされたのか分かっていないのか木乃香は呆然と声を発する。しかし、すぐに頬への血液循環が良好となり、白い肌が赤みを帯びてきた。

代謝が良ければ発汗もスムーズに行われる。言ってみただけで特に意味はない。だからこうして？ベロリ？と木乃香の頬を舐めたのも特に理由はない。

味蕾が弾けた。人間の細胞の中でも格段に寿命が短い部位ではあるが、それが全て再生したのではないかと錯覚する。それほどまでに木乃香の反応は刺激的だった。

「じゃあっ!？」

舌の生温かい感触を押し付けた瞬間、木乃香は奇声を発し、飛び上

がって離れようとする。腕に力を籠めようかとも思ったが、これ以上は流石に自重。回していた手を放す。

木乃香は俺から少し距離を取ってこちらを見てくる。顔は完熟したトマトのように真っ赤だった。

それから二三度ぱくぱくと口を開閉させると、混乱やら羞恥やら動揺やらを全て飲み込んだようで、すぐに平静な精神状態に戻ってしまった。

「いきなり過ぎ。完全に徹夜明けのテンションでおかしくなってるけど大丈夫？」

気丈に振る舞う木乃香だが、上気した顔まではすぐに元通りとはいかないようだ。表情と態度のギャップがとても可愛らしく映る。

「大丈夫か、だなんて俺に掛ける言葉じゃないだろう。今一番危ないのは薬王寺親子だ。まあ、二人ともこれから妙なクスリを手にする機会はないだろうし、周りの目もある。薬物大量摂取による悪化はしないだろうさ。母親にはこの教員が、娘にはお前と俺と茶々丸が居る。寮で同室になった子は一目見たことがあるが、多分性質が似てるね。お互いすぐに馴染むだろう」

「あんずちゃんは大丈夫やと思うよ。吉夢を見るまじない禁厭は教えたし、夢の中なら何が起こってもおかしくはないやろ。……まあ、次母親と会うんやったら時間が掛かるやろうけどね。それと週末はあんずちゃんの携帯を買いに行くから。他の予定もあるし」

厄介な母親を持つ苦勞は察せられる。というかある程度は共感できる。それも含めて交代人格が何とかするだろう。夢の中ならば、対

話す席も設けられるだろうし。

元々夢に関する異能持ちと聞く。夢渡りとかそっち方面の技術を磨けばあの子も相当化けるんじゃないかなあ。

「……………ていうか兄様、ホントに大丈夫？ 無駄にセリフが長いえ」  
先程自分から距離を取った木乃香が今は心配そうに近寄って気遣ってくれる。

徹夜明けのテンションと木乃香は揶揄したが、そんなわけはないだろう。いくら薬王寺杏子の心身両方の治療に三日近くかけ、その後魔法世界で情報収集したとしても、ちゃんと仮眠くらいは取っている。

……………若いってすばらしい。

木乃香の料理を頂いたら今日はおとなしく寝よう。別荘に引き籠って情眠を貪ろう。そう固く誓った。

「今日は木曜日やけどね」

見透かしたように木乃香が忠告してくるが、最近は出席日数なんてどうでもよくなってきている。卒業は確実にできるじゃないか。何の問題もない。

「木乃香」

もう一度呼びかけて、背中に手を回す。とくんとくん、と木乃香の普段よりも少し速い鼓動を感じる。あたたかい。心地良い。離れて



しまうことを考えたくないほどに。

「もう。どしたん兄様。今日は全然らしくないえ」

木乃香の手が俺の背中に回された。あやすようにリズムよく背中を叩かれる。普段とはまるで逆。

傑作だ。と、一言で済ますこともできるのだろうが、今はそんな気分には到底なれそうもない。

「ところで兄様。明日菜をナイフで刺したらしいな」

途端、背中に痛みが走る。木乃香が爪を立てていた。

「あー。うん。刺した刺した。済んだことじゃないか。傷痕は残していないし、命に別状はない。このままなかったことにしようぜ」

言いつつ、知識と記憶に食い違いがあることを再認識する。楽観的観測に基づいたかなり杜撰な対応だったはずなのに、何故か成功している。

本当なら今日にでも『墓守り人の宮殿』に観光に行こうと思っていたのに。手間が省けたのはいいけど、何か重大な切り札を失った気がしてならない。

……まあいいや。元より正体不明の感覚だ。気にしたところでどうしようもない。

今はそんな些事よりも目の前の妹様を宥めることに専念しよう。

「それは必要なことやったん？」

「必要か不必要で言えば必要だったな。理由は聞かないでくれると助かる」

「……分かった。明日菜の頼みを聞くのに必要なことやった。そういう風に理解する」

俺に寄りかかって動けないようにしている木乃香が声を上げる。直後、鎖骨が熱を帯びたものに撫でられた。

咄嗟に一步足を引くも、合わせるように木乃香も一步踏み込んでくる。背中に回した手を放すつもりはないらしい。

理解したと言っても納得するのは別問題か。

この些細な応酬の間も木乃香は俺の鎖骨を口に含んだままだった。

そして舐めるだけでは飽きたらず？こりこり？と甘噛みを繰り返す。

元々肉なんてついていない箇所だ。咀嚼する感触が皮一枚を通り越し、直に骨に響く。

痛くはないが、こそばゆい。

初めてされる行為が、初めて味わう感覚が、妙に擦ったく感じる。なんて感じていられたのも最初の内だけだった。

木乃香が鎖骨を噛み締める力が徐々に強くなっていく。適度な痛みを与える、次は労るように優しく舐め始めるのだ。痛みが麻痺するとまた段々と噛む力を強くしていく。その繰り返しが続く。

「取り敢えず、言うべきことは言い終わったと思うんだが。料理の邪魔をして悪かったな」

肩に手をかける。この無限ループから早く逃れないと俺がどうにかなくなってしまいそうだ。この刺激が病みつきになってしまふ。

木乃香にこれ以上のことをしてやろう、と思考が切り替わるまでにさして時間は掛からないだろう。

そして木乃香からの返答は、一段と強く鎖骨を噛み締めることだった。

「ぐっ」

逆に俺は呻き声を噛み殺す。

口を離して木乃香は俺を見上げてくる。

「元と言えば兄様が、兄様がいきなりキスなんてするから、ウチはこんな気持ちになってるのに……」

ドンツ、と軽く木乃香に突き飛ばされた。

倒れそうになる身体を支えるため、足を踏ん張る。同時に木乃香の身体が少し右にズレた。その直後には着流しの裾を掴まれ、右足を払われる。

大外刈か！

バランスを崩す俺に、木乃香は必要以上に体重をかけてくる。現在進行形で背中から床に倒れているのが知覚できた。木乃香もバランスを崩して倒れているのも。

そして、床と木乃香とで衝撃をサンドイッチ。

「痛っ」

しかしこの痛みを木乃香は慮ってくれないらしい。俺に覆い被さるようにしなだれかかる。

「ウチの気が収まるまで、ちゃんと責任とってよね」

ツ、と首筋に舌を這わしてきた。手は胸に当てられ円を描くように撫でられる。逆の手は俺と指を絡めて握り合う。起き上がるうにも、足がもつれ合って俺にはどうすることもできやしない。

まだ片手の自由は奪われていないが、抵抗したところで無意味だろう。空いた手で木乃香の髪を梳く。

がぶり。

そんなオノマトペが正しく思える行動を木乃香は取った。俺の首筋に歯を立てたのだ。さながら吸血鬼の如く。

徐々に犬歯が肌に食い込んでくる。上歯と下歯の間では忙しく舌が蠢く。最近こんなことが多い所為か、ざらついた舌に不快感を覚えることはない。

またしても痛みと快感という別種の信号が同時に脳に送られる。

なんだかんだ言っつて、俺は木乃香とのこういうやり取りを結構楽しみにしているのかもしれない。不満は抱いていないのだから間違っ  
てはいまい。

だが朝から二人きりにはなれないと思いつつたのか、先日のように  
途中で邪魔が入ったことを思い出してしまった。

「なあ木乃香。首に齒を立てるのはいいが、本職の方が来るまでに  
自重しないか？」

「ぴたり？」と木乃香の動きが止まる。お互い後味の悪い思いはした  
くない。

「うー」

唸っている。首に噛み付かれて唸られると結構なスリルを味わえる  
ことを知った。まあ、木乃香になら殺されてもいいや。

髪を梳いていた手を背中に回して優しく摩ってやる。

自制心が働いたのか、木乃香は身体を離して俺の胸部に座り込む。  
文字通りの意味で息苦しい。

そして、妖艶に笑む木乃香の手が俺の首に。喉仏を両側から押さえ  
込むようにして親指が添えられる。他の指は首を包むようにして。

徐々に指に籠る力が強くなり、気管が圧迫される。

「……………ぐ……………あ……………」

十分な酸素が供給されないせいか、頭がぼんやりとしてきた。視界の中では木乃香が恍惚の表情を浮かべている。

すぐに首から手が放された。

軽く噎せながら大きく息を吸い込む。

「なんか最近、兄様のそういう顔を見たらゾクゾクするというか」

木乃香は突然首を絞めた理由を簡潔に教えてくれる。

「そっか。なら仕方ないな」

「仕方ないね」

あはは、と笑い合いながら木乃香は俺の上から退いて立ち上がる。続いて俺もいつまでも床に寝そべっている趣味はないので起き上がった。

「なんて一言で済ますと思ったか」

立ち上がった瞬間に木乃香を抱き寄せ、身体を密着させる。木乃香の肋骨の隙間に指を添えて。

「加減と限度は覚えてくれよ。俺にMの気があるとは言えないんだから。というか、されてゾクゾクする方に本気で調教するぞ」

耳元でそっと囁く。同時に爪を肋骨の隙間を縫うようにして食い込ませる。

「いいよ」

木乃香が呟く。まさか肯定の返事をしてくるとは思わなかった。

「兄様になら、何をされてもいいよ」

だから逆説的に俺は木乃香に何をされても仕方ないという意味ではないだろうが、嘘をついていないのは確信できる。

今度は木乃香が俺を離さないように抱きしめてきた。これ以上ないくらいに身体が密着する。咄嗟に爪を立てている手を引っ込めた。やり場を失った手を木乃香の背中に回す。

「ねえ兄様。ウチを兄様の色に染めてよ」

木乃香が耳元で囁いてくる。蠱惑的で妖艶な響きが耳朵を打つ。だ  
けど。

「それは無理」

腕の中で小さく木乃香が震えたのが分かった。その震えを打ち消すように木乃香の頬へキスをする。

「思いの外、俺はお前の色に染められてしまっているらしい」

そう言った瞬間、力の限り腕に力を籠められ、半ば絞めあげるようにして抱きしめられた。途中でセリフを区切ったのがかなり気に障ったようだ。

もう、と悪態をつくように木乃香は呟いて？「こっん？」と額を俺の胸に押し当てて。そして、

「大好き」

言葉が紡がれた。

なんだろう。心身共にあたたかい。愛しさが込み上げてくる。言葉ひとつでこころも変わるものなのか。

「木乃香。好きだ」

木乃香の心音に耳を傾ける。木乃香の体温を感じる。

出来ることなら、ずっと、ずっといつまでも、こうしていきたい。心の底からそう思った。

しかし、いつまでも抱きしめているわけにもいかず、一分間を空ける。

「お前が俺より先に死なないことを願うよ」

「兄様もそう簡単には死なないでね」

そして、俺の手には瑪瑙のネックレスが。木乃香の手には俺の契約カードが。

お互い預けっぱなしにしていたものを交換する。

けらけらと俺が笑い、からからと木乃香が笑う。嗚呼、本当にこの



時間が終わらなければいいのに。

「おい茶々丸。はやく朝食を作ってくれ」

「でしたらマスター。アレを止めてください。時には障害となるのが年長者の役目でしょう」

### 第七三話：敵情視察

早朝。学生どころか教師すら満足に揃っていない時間に学園長室の扉が叩かれた。

ほとんど人が居ない校内では扉をノックする音がよく響く。しかし、学園長が不在という可能性は極めて低い。近頃は休みなしで責務に追われ、もう学園長室に住んでいると言っても過言ではない状態だからだ。この日も普段通り、部屋の中に居た学園長は入室の許可を出した。

入って来たのは一人の女子生徒。麻帆良学園では然程珍しくない留学生の一人だ。

名は超鈴音。彼女の技術力は凄まじく、ある程度の情報を教えることを許してはいるが、同時に要注意人物としてブラックリストに名を連ねている。

『闇の福音』の従者の製造に関わったとして、良くない評価を抱いている魔法先生は少なくない。

と言っても、学園長までが彼女にそういった評価を下しているわけではない。エヴァンジェリンとは　少なくとも学園長は　友人であると思っているし、この年頃の子供が魔法なんてものに興味を持つのも仕方のないことだろう。

幸か不幸かは分からないが、彼女には魔法を調べられる技術と手段があった。それだけのことである。

当然、全てを教えるわけにもいかず、警告を無視した際は記憶消去など、それ相応の手段に出るだけだ。

だから彼女が訪れたときも学園長は普通の生徒と同じように接するつもりだった。超鈴音が爆弾を投下するまでは。

「おはようございます。学園長先生」

軽く一礼して超鈴音は学園長が座る机にまで近づいていく。

「うむ。おはよう。じゃが、どうしたのかの？ 登校時間にしては随分と早いようじゃが」

「それはあれネ。えー、お願い？ 頼み事？ なんとという力、兎も角、相談事があつて来たネ」

学園長はこの数週間の内に部屋を訪れた人物たち 特に孫と孫娘

を思い返す。最初はなんでもないかのように振る舞って、最終的に学園を危機的なまでに追い詰めかねない罫を張っていた。

その主な原因は、迂闊な発言をした自分にあるとしてもこれまでの条件反射か、学園長は超の言う相談事を聞くにあたって無意識の内に警戒心を少し高めていた。

そしてそれは功を奏した。

「ネギ先生の右腕、そちらで用意できないのなら私が作ってもいい  
三」

学園長は目を閉じて気付かれないように深く息を吐き出す。

どうして最近の子供はもつと純粹に素直に育ってくれないのだろうか。

そう思わずにはいられない。

「どうするネ、学園長先生？ 最近の魔法先生は何かと忙しそうだから私なりに配慮した結果なのだガ」

それを言葉通り信じるわけにはいかないだろう。ただより高いものはない。ここで領けば何かしら見返りを用意しなくてはならなくなる。

「ネギ君の右腕とは何のことかの？ 彼はただ、風邪が長引いて休んでいるだけじゃガ」

「あはは。とぼけなくてもいいネ。私は全てを知っている。昨日は学園内に麻薬が蔓延してないか徹底的に調べ上げてお疲れだと思っガ、そのせいでネギ先生への対応も随分と遅れているのではないカナ？」

当たっている。超の言っていることは正しい。だが、一体どこから情報が漏れた？ 学園長は彼女について知っていることを反芻する。そして、すぐにそれらしい答えに思い当たった。

絡繰茶々丸。

友人の従者であり、彼女が作ったガイノイド。昨日孫と一緒に本部へと足を踏み入れたのだった。情報が漏れたとすればそのときであ

ろう。だとすれば、白を切り続けることは難しい。

「私はクラスでもそれなりに信用されている方だし、ウチのクラスの大半はネギ先生に好意を抱いているネ」

彼女がクラスの人間に口を滑らせば、3・Aの生徒はネギに会わせると抗議するだろう。それも一般教員に。今は病欠で誤魔化せているが、一度疑念を持たれたら終わりだ。

同時にネギの生徒の一人を思い浮かべる。雪広あやかのことである。彼女自身ネギに多大な好意を寄せているようで、事実を知った際どういった行動に出るかは想像に難くない。

何よりも彼女の実家である雪広財閥に不信を抱かれることは避けなければならない。

政治も経済も、今は日本魔術相互扶助協会が中心になっている。学園にとって雪広財閥は蜘蛛の糸なのだ。断ち切るわけにはいかない。学園長は背筋に冷や汗が出るのを感じる。ネギの為にとまって手を回してきたことが、確実に自分の首を絞めている。知らぬ間に自分で退路を塞いでいたのだ。

「生憎じゃが、そんなことをしても部費の上乗せはせんぞ」

適当なことを言いつつ、学園長は思考し続ける。超よりも早く義手を用意できる伝手は一応あるにはあるのだ。

近衛彩輝。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。そして、本  
国。

だが、前者二名に限っては法外な額の対価を請求されるだろう。今の学園にそんなものを支払える余裕はない。

本国に対しては漸く麻薬製造という切り札を手に入れることができたのだ。この先も何が起るかわからない中、こんなところで消費するわけにはいかない。この情報を低価で孫から買えたのは奇跡に近いだろう。

「部費はいらないヨ。ただ、私のすること、実験や研究などを黙認してくれれば、それでいいネ。あ、あと記憶除去の免除もネ。他には何も要求しない」

「いくらなんでもそれは了承しかねるの。物事には限度がある。君が一線を超えた際にはそれ相応の対応をしなくてはならない」

「限度とは何カナ？ その基準を作っているのは貴方だろう？ 彼のインシュタインの相対性理論も僅か百年で覆された。今は正しくとも明日も同じように正しいとは限らないヨ」

「その言い方では違法行為をしようとしているように聞こえるが？」

「まさか。……でも、そうネ。今は役に立たなくても百年後には必要になるような、そんなぶっ飛んだ研究も悪くないかもしれないヨ」

「出来れば、今役立つものを作って欲しいところじゃがのう」

「だから義手を作ると言ってるネ」

元々、ネギの修行は日本で先生をすること。このまま休み続けさせ

るわけにもいかないのだ。

まだネギの病欠に不信を抱かれていない今、義手を用意するのならば出来るだけ早い方がいい。彼女の技術力の高さは今更言うまでもないだろう。

「そうじゃなのう……作ってもらったとしても、その条件なら多少お目こぼしをするくらいしか出来ぬが……」

「……まあ、それでいいネ。私だってこれでもネギ先生のことを心配しているのヨ？ 早く教壇に立って欲しいと思ってるのはクラスの総意だしネ」

そうか、と学園長は頷いた。

ここ最近では珍しく、ノーリスクで持ちかけられた取引だ。その成果も悪くはない。

「早い方がいいのなら今日にでもネギ先生の採寸をしたいのダガ」

「ああ。そうじゃの。すぐ連絡を取ろう。今からなら授業が始まるまでには終わりそうじゃな」

この発言には超が待ったを掛けた。

「ネギ先生は怪我人じゃないのか？ 放課後に私から伺うことにするヨ」

「いや、今すぐなら校舎にも人が集まっておらんからの。それに放課後は早速ネギ君の義手を作ることに専念して欲しいのじゃ」

そう言うと、学園長は超から視線を外し、机の上の電話に手を伸ばす。受話器を取って本部へと回線を繋ぐと、至急ネギを学校まで連れてくるように手配した。

これで一つ、高く積み上がった解決しなければならぬ事柄を処理できた。学園長は軽く胸を撫で下ろす。最優先で解決しなければならぬことが予想よりも遥かに安価で片付けられた為だろう。

それでも本国への対応や、それに続く各国支部への信頼回復。周辺結社との折り合いや、日本魔術相互扶助協会との付き合いなど問題はまだまだ山積みであるが。

何よりも一番の問題は麻帆良関係者の中に辞職を考え始めている者が居ることだろうか。こういうものは一人が辞めれば、現状に不満を持つ先生が続々と辞めていくだろう。それだけは何としても避けなければならぬ。

ただでさえ最近では、ハードワークが祟って過労で倒れそうな職員が居るといふのに。ここを去る理由ならば掃いて捨てるほど存在するのだ。

思わず疲れきった溜息が出そうになるが、生徒の前だと気を持ち直す。

「それじゃあ、私はこの後保健室でネギ先生を待っていればいいわけか」

「うむ。ネギ君の義手のこと、よろしく頼むぞい」



超は軽く一礼すると百八十度身体を回転させ、部屋の外へと出て行くようにする。

しかし、途中で立ち止まってもう一度学園長に向き直った。

「そうそう。最後に一つだけ。生徒視点から今の学園について意見を言わせてもらってもいいかな？」

「勿論構わんぞ」

生徒の目にはこの学園がどのように映っているのか。気にならないと言えば嘘になるだろう。それが学園の長ともなれば尚更だ。

だから続く超の発言がどのようなものであれ、学園長は真摯に受け止めようと心構えをするが、超の口から出た言葉は予想の範疇をやや超えていた。

「どうやら最近魔法関係のことで首が回っていないらしいが、生徒のこともちろんと見た方がいいヨ。委員会の会長サンや部活動の部長サン。勘の良い人なら学園で何かが起こっていることを察しているだろうからネ。これ以上体調の優れない先生が一時期に大量に出れば、疑念は確信に変わるかもしれないヨ」

そして、言うだけ言うと超は学園長室から出て行った。

今度こそ学園長は深く息を吐き出す。ハードワークが終わる兆しは全くと言っていい程見えないが、魔法先生には気丈に振る舞ってもらうしかないさそうだ。

一般教員に仕事を割り当ててもいいのだが、やり過ぎれば魔法先生

との仕事量の差が問題になる。

委員会や部活動に関しては、不安ではあるが魔法生徒にも声を掛けるしかあるまい。

良くも悪くもこの学園の生徒は、曲者に際者と一筋縄ではいかない者が勢揃いなのだ。下手に魔法生徒をけしかければ新たなボロを出すかもしれない。

逆にそんな者たちには絶対に問題を起こさせないようにする為、学園長の仕事と心労はまた増えるのであった。

今まで話していた女子生徒がその筆頭であるとは気付かずに。

自分の孫をも遥かに凌駕する荒唐無稽な計画を、胸の内に秘めているとは思いも寄らず。

そして、学園長室を出た超鈴音はポケットから携帯を取り出す。

登録されている番号から葉加瀬聡美の名前を選択し、通話ボタンを押した。長い時間呼び出し音が続いたが、それでも最終的に葉加瀬は電話に出てくれた。

「おはようハカセ。ひよっとして寝ていたカナ？　だとしたら起こしてしまつてすまないネ」

電話口の向こうで欠伸を噛み殺す声が聞こえる。

「いえいえ。それよりも、こんな朝早くからどうかしたんですか超さん？」

「私たちの今後の為に、さっき学園長と話して来たネ」

返答は無く、葉加瀬から返ってくるのは沈黙のみ。寝惚けた頭を正常に作動させるには十分過ぎる一言だったようだ。

「結果は、まあ上々といったところかな。いつバレるか分からないが、一応学園長室に盗聴器も仕掛けておいたヨ。流石にあちらの本部へ招待はされなかったが」

学園長が本部へ連絡を取るとき、僅かな時間だが超から目を離れたときがあった。その瞬間に予め用意しておいた盗聴器を仕掛けたのだ。

勿論折りを見て回収せねばならないし、教職員に発見される可能性が高いだろう。

だが、高いリスクを払う価値はあると考えている。目的は開催を約一ヶ月近くに控える麻帆良祭に関する情報。

学園の教職員はこの時期更に忙しくなるし、盗聴器が見つかったところで満身に調べられる時間はあまりないだろう。

会話中に超が自分から出向くと言ったのも裏があつてのことだ。出来ることなら本部の方へも何か仕掛けたかったのだが、そこまでの信頼は得ていないらしい。

本部へ足を踏み入れることは叶わなかったが、その問題はすぐに解

決することになるだろう。

『では超さん。ネギ先生の義手は……』

「ああ。私たちが作ることになったヨ。悪いがハカセ、今日中に義手に仕込む盗聴器を用意しておいてくれないか？」

『わかりました』

義手を調べるとなると、その間ネギには不自由な思いをさせることになる。魔法先生はその選択をなるべく避けようとするだろう。

「それじゃあハカセ。よろしく頼むよ」

そして葉加瀬に伝えるべき用件は終わった。通話を切り、超は義手について考えを巡らす。

構造は兎に角複雑に。自分と葉加瀬と茶々丸だけにしか整備が出来ないくらいに。万が一魔法先生が調べたとしても元通りにならないくらいが望ましい。

そもそも筋肉と神経を正確に繋げればいいのだ。神経系を繋いだ時点で迂闊な真似は出来まい。

重量は出来る限り軽く。反応速度は生身よりも格段に良くしておく。特筆する点が一つでも多ければ、それだけネギも恩を感じやすいだろう。学園長相手では少し譲歩させることしか出来なかったが、あちらが勝手に恩を感じてくれるのなら『お願い』もしやすくなる。

問題は学園内でのネギ自身の評価がかなり落ち込んでいるというところか。盗聴器を仕込んでも重要な話を聞かされないのなら意味が無い。

「ネギ坊主には復帰早々、職務に励んでもらうとする力」

保健室に向かう道すがら、誰も居ない廊下で超は一人呟いた。

ネギの信頼回復の為ならば、少しばかり手を貸すのも吝かではないと考えながら。普通の業務をこなす程度、麻帆良最強頭脳と謂わしめる彼女にとっては造作もないことだろう。そこから一般教員を味方に付ける。同時にネギにも多大な恩を売れる形になる。

そしてそれは超とネギとの繋がりを強くすることを意味している。超にしても英雄の息子を旗印に出来るのはメリットが大きい。

「まずネギ坊主には汚名を返上してもらわないとネ。その後、名誉も返上してもらおうことになるだろうが」

## 第七四話：未知との遭遇

関東魔法協会本部。

この日は早朝からネギにとって喜ばしいニュースを聞かされたのだ。つた。

内容はネギが受け持つクラスの生徒・超鈴音が義手を作ってくれているというもの。普段の起床時間よりも早く本部へ詰めていた魔法先生に起こされたネギであったが、そこに不満などがある筈もなく、指示通りに学校へ向かう準備をする。

最近是不運なことが立て続けに重なったネギである。漸く訪れた幸運をすぐにでも掴もうと、掴む腕を貰おうと、意気揚々とネギは魔法先生に着いて行く準備をするのだった。

しかし誰かの幸福は違う誰かの不幸であるということ、宮崎のどかはひとり本部に取り残される形になる。

教職に就いていると言っても、ネギはまだ十歳。自身のキャパシティを超える出来事に見舞われたばかりなのだ。そんな切羽詰まった状況で他人を気遣えというのが無理であろう。

この時もネギは自身のこと、頭がいっぱいになり、最後まで自分のそばに居てくれる、たった一人の従者を蔑ろにしてしまったのだ。

のどかが目覚めたときは、ちょうどこれからネギが出掛けようとしている最中のことだった。

起床したのどかは本部に泊まっている部屋から、ネギの部屋に向かうことが毎朝の日課になっていた。今日も同じようにネギの部屋を訪れると、いつもとは違って、背広に片方だけになった腕を通して

いる。

「ネギ先生、どこか行くんですか？」

部屋に入ってすぐに尋ねた。

出来れば着いて行こうとしたのだが、もうネギは今にも部屋を出ようとしている。対するのどかは目覚めたばかりで何の準備もしていない。

「はい！ 超さんが僕の義手を作ってくれるそうなんです！」

のどかの問いにネギは歳相応の無邪気な笑顔で答えた。

とてもではないが、自分も着いて行くから準備が終わるまで待つてくれ、などとはのどかには言えない。

「良かったですね」

代わりに出た言葉は当たり前障りの無い返答であった。

「それじゃあ、僕今から超さんに会ってくるんで、のどかさんはゆつくりしててください」

言うやいなや部屋を飛び出して行くネギ。その背中をのどかは見送るだけ。たった一人でのどかは主の帰りを待つ。

のどかが魔法に関わったときは二人と一匹だった。

だが、つい先日、人数は二人に減った。

そして昨日、一人になった。

だからだろうか。ついつい考えてしまう。同じ状況で神楽坂明日菜ならばどう行動したかを。

無駄な思考だ。

例え明日菜の行動を想像できたとしても、それを自分に適応させる度胸をのどかは持ち合わせていない。

ネギの従者として、自分よりも先輩に当たる存在。単純な優劣を付けるならば明日菜の方が上だろうとのどかは考える。

ネギからの信頼も厚く、常に前向きで、咄嗟に思い切った行動を取れる、自分とは何もかもが違う。

劣等感とも言うべきものを明日菜に対して抱いていた。

だが、その本人が昨日突然、何の相談もなくネギの従者をやめてしまったのだ。

ネギの傍に居るのは、もう自分しか居ない。

この状況を最初は喜んだものだ。自分しか居ないのだから、ネギを独占することができる。ネギが頼りにするのも、支えになるのも、自分しか居ないと。



だが、そう思った結果がこの置いてきぼりだ。何か変化はあっただろうかと考える。

良くなるどころか、寧ろ悪化したように思う。

先程明日菜ならばどうしたかと考えたが、逆にネギはどうしただろうか。

明日菜が居れば、きっと同行を求めたに違いない。

明日菜は選ばれる。のどかは選ばれない。

詳しい事情なんて何も聞いていないし、明日菜の心境の変化にどんな理由があったのかは、のどかには想像すら出来ないだろう。

だからこそ。何も知らない、無知であるからこそ、のどかは明日菜に恨みを抱く。

他人に言わせれば、そんなものはただの嫉妬からくる逆恨み。

だが、当人には周りの意見など関係ない。どうでもいい。明日菜はのどかが持ち得ないものを、平然と目の前で捨てたのだ。

ネギの信頼というのどかにとって何物にも代え難いものを。

ずぶずぶと思考が負の連鎖に嵌り込む前に、のどかはその感情を振り払うようにして部屋を出る。

どうせネギが居なければこんな部屋には用はない。しかし、次自分

が行きたいと思うような場所もなく、結局のどかは自分に宛てがわれた部屋へ戻るのだった。

「宮崎さん。ちょっといいかな？」

すぐに部屋に戻ることは叶わず、部屋に向かう途中、一人の魔法先生に背後から話しかけられた。

のどかは足を止めて振り返る。

視線を向けた先では先生がこちらに小走りで近寄って来ていた。

「あの、どうかしましたか？」

目の前まで近付いた先生にのどかは尋ねる。慣れない場所で初対面の先生から話し掛けられる。そんなシチュエーションにのどかは幾ばくか緊張した様子。

だが、そんな緊張はすぐにどうでもよくなった。否、緊張など感じる余裕がなくなった。

「宮崎さん。君もこれからの将来があるんだから、従者のことはちやんとよく考えた方がいいんじゃないかな？」

先生の気遣うような口調とセリフ。しかし、それはネギの従者をやめるよう言われているに等しかった。

状況が変わったのはネギやのどかだけではない。

魔法先生の間でも状況は日に日に変わっているのだ。それも、悪い

方へと。

この未熟な二人に時間を割ける教師が減ってきたというのが一番の理由だろうか。ネギの教育には、ただでさえ政治的な問題が絡んできて厄介なのに、その上従者の一般人にも色々教えなくてはならない。

はっきり言って手間なのだ。

今まではネギが選んだ従者ということで大目に見ていた。いや、目を瞑っていた。

しかし、それも神楽坂明日菜が従者をやめた昨日まで。本人からやめたいとネギに告げさせれば、それだけで問題は一つ減る。

魔法先生は限られた時間しかなくてもネギだけの教育に専念でき、魔法生徒をネギの傍に置いておけば教育はもつと捗るであろうし、その子が従者を選ばれるかもしれない。

関東魔法協会からしてみれば、そちらの方が効率が良い。

だからこうして魔法先生はのどかに話し掛けたのだ。ネギの居ないのどかが一人だけの時間には、今日だけではなく明日も明後日も明後日も明後日もこの説得は続くだろう。

こうなるのどかにとってここは針の筵だ。

ネギの近くしか逃げ場がない。なのに、ネギはのどかのことをちゃんと見てくれていると言えるのだろうか。いや、逆にネギが先に説得されてしまうかもしれない。

ネギの口から従者をやめろと言われれば、一も二もなくのどかは従者をやめるだろう。

本心ではネギの傍にずっと居たいと思っただけでも、そうならばただの教師と生徒の関係に戻ってしまう。ネギの中で教え子という一括りに埋没してしまう。この近い関係には二度と戻れない。

それだけは絶対に嫌だ。

「私はネギ先生の従者で何の不満もありません！」

目の前に立つ先生に向かって勢いよく主張する。その主張は通らなないと分かっていたとしても、それを押し通すためにのどかが持ちあわせる手段はこれしかないのだから。

「ネギ先生に肩入れしたいのは分かるけどね、ネギ先生だってこれからもつと忙しくなる。君に構っていられる時間は減っていくよ。そんなネギ先生を君は何か手伝えるのかな？」

言外に足手纏いだと言われている。

うるさい！ と心の中で絶叫しながら、のどかは踵を返しこの場から走り去る。

先生は追いかけて来ない。それがまたも、のどかにはどうでもいいと言われているようだった。

それでも逃げる。逃げる相手は魔法先生からか。先程の的を射ている言葉からか。はたまた、その言葉に同意しかけた自分の心からか。

のどかは本部の中を駆け抜ける。雑念を振り払うようにして。もうここには味方になってくれる人は居ないのだから。本部から教会へと到り、外へ。

早朝の朝日に一瞬だけ目が眩んだ。

こうして一人で外を出歩くのはなんだか久しぶりな気がする。

教会から離れるとそこで足が止まった。単に行く当てが無いことに気付いたのだ。普段ならば図書館島にも行って時間を潰すところだが、生憎と今は平日の朝。

図書館島に行ったところで係員に咎められるのは目に見えている。しかしだからと言って、学校へ行く気にもなれなかった。

行ってしまえば放課後までは学校から出ることは出来ない。行けば親友を巻き込む結果として相談することも出来るだろうが、同時に明日菜にも会うことになる。今彼女と会う気概はのどかにはない。

文字通り着の身着のまま飛び出したのだ。金銭の類も持っておらず、携帯電話すらも置いてきてしまった。持っているのはネギとの仮契約カードくらいのものだ。

ネギが帰ってくるまでの間、時間を潰す道具はないし、娯楽施設にも入れない。

よって、ぶらぶらと、ぶらぶらと街を彷徨うことに。

連続的に足を前に出す作業をのどかは無意識に続ける。目的地を定

めていない為か、考える事のなくなった頭の中では先程の想像が繰り返される。

今から学校に行けば、と。

そうすれば彼女の親友である綾瀬夕映は相談に乗ってくれるだろうか。自分の力になってくれるだろうか。

すぐに頭を振る。自分はそんなことはしない。

もしも魔法のことを相談すれば、自分とは違って従者でない夕映の記憶は立ちどころに消されてしまうだろう。のどかもそこまで頭が回らなくなっただけではない。

ならば、と。夕映もネギの従者に誘うという抜け穴も今までならあった。

カモが永久石化を受けた今、自由に仮契約を行える機会はなく。仮に手段があつたとしても、勝手に増やせば魔法先生から睨まれるのは必至である。

だがこれは、あくまで『もしも』の話だ。のどかの頭の中だけで完結する想像である。

実行できる機会が巡ってきたとしてもどこかはそれを行わないだろう。

自分が困ったときに頼りにしている親友だ。同じようにネギが頼らない筈がない。

ネギはのどかには頼らない。のどかがネギのために何か出来るわけでもない。そうなれば、のどかがネギの傍に居る意味が、本当に分からなくなってしまうのではないか。

交差点を曲がると道路は暫く直線が続いている。

今までの考えにリセットボタンを押して、のどかはその道を踏破しようと思わぬことなく足を踏み出した。

「宮崎のどか。主の名前はネギ・スプリングフィールド。アーティファクトは『いどのえにつき』ねえ。あはは。またかなりレアなものを持つてるじゃないか」

ギョツとのどかは隣を向く。突然隣から聞こえてきた声と、その内容に反応して。

いつの間にかのどかと並歩するようにひとりの女性がそこに居ただ。

年の頃は二十歳くらいであろうか。整った顔立ちは大和撫子との例えがしっくりくる。しかし、朝日を悠然と煌めかせる頭髪は金色に染まっていた。

それなのに、違和感と呼ばれるものがまるでない。

ただそこに在るだけで完成しているような自然な空気を身に纏い、彼女自身は軽薄そうな笑みを浮かべている。

そしてその手には、のどかの仮契約カードを扇ぐように？とひらひら？と振って。

「返してくださいッ！」

いつの間に盗られた、と思う間もなくカードを見た瞬間、反射の領域でのどかは声を荒らげていた。

ソレはのどかとネギを繋ぐ明確にして唯一の証。仮定では留まらず実害があると思ったのか今までとは打って変わって、のどかは飛びかかりそうな勢いで隣に立つ女性を睨む。

「あー、ゴメンゴメン。つい癖でさ」

のどかの気迫に気圧されたわけではないだろうが、彼女は早々に仮契約カードをのどかに返した。返されたカードをのどかは大事そうに胸に抱く。

「君はアレだね。？ツベルクスピッツ？みたいだね」

へらへらと笑いながら彼女はのどかにそう告げた。

言っている意味はまるで分からなかったが、今さっき自分の物を盗まれた手前のどかは警戒心を顕にして彼女と接する。

「誰なんですか貴女は」

仮契約カードが示す意味を彼女は理解していたのだ。魔法関係者であることは間違いないだろう。そしてそんな人物が他人の物を盗むなどと愚行に出たのだ。

のどかはネギが目指す『立派な魔法使い』のことを思い出す。



自分に捕まえることが出来るとは思わないが、彼女のような存在を知らせることはネギの役に立つのではないかと。

「私はただの通りすがりの旅行客さ。美弥子とでも呼んでちょうだい」

警戒するのどかとは真逆で、間の抜けた笑顔を美弥子は浮かべる。

その笑顔に毒気を抜かれたからか、向けていた矛先をあつさりと逸らされてしまったからか、のどかは次に発するべき言葉を詰まらせた。

僅かでものどかが黙った間を繋ぐように美弥子が喋る。

「なんだかかなり思い詰めた顔をしてるね。想い人が振り向いてくれないみたいに。親しい友人と距離を取らざるを得ないかのようによま、その年頃特有だけど、自分が生きている意味にでも真剣に悩んじゃってたり？ でも大丈夫。安心して。君は物語には何の影響も与えられない存在だから」

へらへらと軽薄な笑みを浮かべて、ずかずかとこちらの心に土足で上がりこんでくる。

何なんだこの人は。

初対面の善なのに、まるで前々から自分のことを知っていたかのような口ぶりだ。

少し話しただけなのに、今では仮契約カードを盗られた怒りよりも、

薄ら寒い恐怖心がのどかの心に巢食っていた。

「でもさ、それって悔しいよね。こっちはこんなに一生懸命頑張ってるのに、相手は見向きもしないときた。教えたら教えたで『えっ？ そんなことしてたんですか？』みたいに他人事で終わらされちゃうんだぜ」

今度こそのは返答に窮した。少なからず、そう思っていたのは確かだし、美弥子が言った通りの自分の姿が簡単に、はっきりと想像できてしまうのだ。

自分がネギに必死にしがみついているだけで、ネギは自分のことなど何とも思っていないのではないかと。

これ以上、彼女と話すのは危ないと思う。

のどかが今まで堪えてきた感情の蓋を開けられてしまいそうで、いや、実際はほとんど開けられているのではないか。

ネギにはちゃんと自分を見て欲しい。

「誰かに宮崎のどか個人として扱って欲しくないかい？」

軽薄な笑みを浮かべて、見透かしたような言葉を美弥子は発する。

どうかしている。

心の底からそう思う。こんな初対面の相手に、自分の大切なものを盗ったスリ同然の人物に、何故ここまで揺さぶられなければならないのか。

「貴女に、貴女に何が出来るって言うんですか」

どうかしている。

警戒はしても信頼には値しない相手の筈なのに、彼女の甘言に耳を傾けている自分がいる。

いや、初対面だからこそかもしれない。のどかを追い詰めている人間関係をいうものを彼女とは全く築いていないのだから。

「君が望むなら、君のアーティファクトを最も効果的に扱う知識と知恵を、与えてあげてもよろしくてよ」

そうしてのどかはスリをひとり見逃す代わりに、武器と防具を同時に手に入れることが出来たのだ。？人心？という限りなく強力な道具を。

さあ、見返してやろう。

今まで自分をネギの荷物のように扱っていた者全員。そしてネギに証明するのだ。自分はネギの役に立てると。

全てはネギのために。

のどかは物差しがそれしかないかのよう。それ以外の基準を奪われたかのよう。より一層ネギに固執する。

「これからは私がネギ先生を守ってみせます」

熱に浮かされたように、  
昏い笑顔を浮かべてのどかは関東魔法協会  
本部へと戻って行った。

## 第七四話：未知との遭遇（後書き）

これで取り敢えず、主人公とヒロインがイチャついている間に起こった話は終わり。

逆に作者は今日から後期が始まってしまふ。  
課題手付かずなんだけどな！。

第七五話・ヨスガにソラってるparts(前書き)

流れのリセットも兼ねてヨスガらせて。

## 第七五話：ヨスガにソラってる part 5

扉を開くと、そこには閑散とした部屋があった。

何年もの間、碌に使われることもなく、ただ定期的に掃除をする為だけに人の出入りがあつた部屋だ。

正直、物置と大差ないレベルだろう。

それでも頻繁にはいかずとも掃除をしていたおかげか埃が層を作っていることはない。本当に使っていない空き部屋なので、中は？伽藍？と空洞が広がっていた。それも昨日までの話となつたが。

この部屋は新たな入居者を迎え、物一つ無かつた室内には数個のダンボールとベッドが設えられている。

部屋の中にある物はそれだけなので殺風景なものには変りない。

早い話が、ここは我が妹、木乃香の部屋なのであつた。そして、これから荷解きを手伝うことに。

経緯を話すと至極簡単なのだが、俺こと近衛彩輝が学園を？ぐるり？と一周して自宅に帰ってきたとき、学校帰りであるらしき木乃香に捕まつたのだ。

捕まつたと言うと、まるで俺が一度は逃げたかのようなニュアンスを含んでいるが、そんな事実は一切無かつた。

まあ、これは仕方のないことだつて。

花は甘い蜜をエサにして虫に花粉を運ばせてるじゃないか。生態学的に見てもどこもおかしなところはない。

いや、自分のことを誘蛾灯の周りを飛び交っている無脊椎動物に喩えたいわけではないのだが。

木乃香のことを可憐な花に喩えるのは全然アリだけど！

「兄様、そろそろ手を動かしてよ」

何か木乃香に見合う花を脳内で検索していたら、凜とした声音が耳朶を打つ。鼓膜が震えるのは、果たして空気の振動だけが原因だろうか。なんて言っても喜びに身を震わせるとは流石に言い過ぎだろう。

元より荷解きは初めから手伝うつもりであった為、木乃香に言われた通り作業再開。そこに不満などある筈がなく。

手近なダンボールに封をしているガムテープを切って、中身を取り出す。

仮にも引っ越しである為、響きだけなら大変そうに聞こえるが、実際はそうでもない。運ぶのに手間取りそうな家具などは引き続き寮で神楽坂が使うであろうから持ってきていないのだ。

このダンボールの中身もほとんどが衣服・本・小物類に分けられるだろう。一番大きな荷物はすでに設置が終わっているベッドの筈だ。

机や本棚なんかはこっちで簡単に用意できる為、作業の大半は木乃



香の指示に従って物を配置するだけ。

この分だと思いの外早く終わるであろう。

そうして二人で雑談を交えながら、淡々とダンボールの数を減らしていったのだ。

すると、なんとということでしょう。

ほんの数時間前までベッドとダンボールが散乱していただだけの殺風景な部屋は、生活感溢れる小綺麗な部屋に早変わり。

訪れると部屋を彩る小物の中に、更にアクセントとして置かれている六壬式盤が目を引くことだろう。

本棚には教科書、文庫本ときて和綴じ本が並んでいる。作業机の上では学校から配布された宿題と共に白紙の符が置かれており、文字を綴る銀朱も完備されている。

特にこれと言って、匠の遊び心は感じられません。

「ふう……」

一息ついて、俺はベッドに座り込む。暗黙の了解というように、間を置くことなく木乃香が俺の隣に座り込んだ。

「しかし、変わるもんだなあ」

部屋の印象のことだ。自室では模様替えといった行為をした記憶は全く存在しない為、実はこういう作業をするのは結構久しぶりだっ

たりする。

達成感やら満足感やら、そんな感情があるのは確かだ。

「ありがと、兄様。おかげで思ってたよりも早く片付いたな」

「どういたしまして。妹様のお役に立てたようですねによりです」

茶化すように返事をする、木乃香は俺との間を詰めるように寄り掛かってきた。そして、ゆっくりと手を伸ばしてくる。

くしゃりと頭を撫でられた。

掌を通して木乃香の体温が伝わってくる。時に髪を梳くようにして、時に荒っぽくぐしゃぐしゃと頭を撫で回される。

「んー？　なあ。この行為にはどんな意図があるんだ？」

「特に無いけど。強いて言うならごく褒美的な？」

手を休めることなく木乃香は言う。拒む理由も必要もないので、撫でられっぱなしになる俺。

これが俺にとつての甘い蜜になるわけだ。こうされていると実に抗いがたいものだと思感する。俺にとつてはその内禁断症状が出てこないか心配になるレベルの精神安定剤になっているかもしれない。

洒落で済めばいいんだけどなあ。

自分で思っているよりも働きバチのポジションに近づいているので

はないだろうか。

なんてことを？ポロリ？と木乃香に漏らすと、

「ええんとちゃうん。兄様とウチは共存関係ってことやる」

言葉で賛同しつつ、俺の頭を撫でるのをやめた木乃香はこっちにしながらかかって身体を擦り寄せてくる。

「何人かには『依』が抜けてるって言われそうだけだな」

「……それはウチに衣を取れという意味？」

そう言うと、木乃香は自分が着ている服のボタンに手をかける。俺はそれ以上はさせないように木乃香の手を掴んで止めた。

「曲解しすぎだろ。そして、行動が速えよ。速すぎるよ。俺はお前の中でどんな人でなしになってるんだ」

いや、世間一般からは爪弾きにされる人でなしだけれども。裏社会からも敬遠される要素はそれなりにあるけど。

流石に木乃香から脈絡なく妹に脱衣を促すような人格に思われてるなら、俺は素行を改めるよ。割と本気で。

そんな思考をマイシスターは読み取れるわけもなく、俺に対して新たな提案をしてくるのであった。

「それじゃあ、あにーちゃん」

「なんだ？ にもつと」

「ゲームをしよう」

そう提案する木乃香に俺は「いいよ」と首肯し、木乃香の言うゲームの内容に耳を傾ける。

「まず、ウチが兄様に『好き』と言います」

「うん。それで？」

「次に兄様がウチに『好き』と言う。以上」

勝敗もなければ、ペナルティもない。とんだゲームがあったものである。というかゲームかコレ？ 告白のし合いの間違いじゃないだろうか。

例え拒否権があったとしても、それを行使するつもりは一切無いのでゲーム開始という運びになるのだが。

「好き」

と、木乃香が言った。

「好き」

と、俺が返す。

「……好きです」

少し間を溜めて、上目遣いで囁いてくる。軽く心がグラついた。

「好きだよ」

その感情を振り払うようにして木乃香の耳元で囁く。

「兄様、好き」

顔を俺の胸に押し当てて頬が赤くなるのを誤魔化すかのようにした木乃香の声が俺の耳に届く。

「木乃香、好きだ」

木乃香の首筋に頬ずりをしながら、俺の声が室内に広がる。

無限ループって怖くね？

勝敗条件が無いってことは、終了条件も無いってことだと、もう少し突っ込むべきだったかもしれない。

「なあ木乃香」

そして俺は初めてこのゲームの流れを止めた。

「時計の長針が百八十度回転しているように見えるんだが」

キツイわあ。このゲーム難易度高過ぎだろう。精神的に。ルール内容だけならお巫山戯で延々と続けられそうなのに、それが出来ない。

言葉には魂が宿る。魔術系統的に最も気を配らなければならない術者である俺たちが、お巫山戯で生半可な返事を出来るわけがなかった。

なので程度はあれど言葉の端々に本心が滲み出て、その言葉を放つても受け取ってもより一層お互いを意識する結果となり。

while(1); って怖くね？ break文のありがたみがよく分かる。

「うん。そうやね。ところで兄様」

木乃香も時間の経過を確認し、これで本当に終わると思っていたのだが。

「……もう、好きにして」

言うと、木乃香は両腕を俺の後頭部と背中へ回す。俺がアクションを起こさなければ、ずっとそうしているのではないかと思うくらいに力強く抱きしめられる。

嗚呼、妹君は完全に茹で上がっていらっしやる。発案はお前だろうに。

どうやら、このゲームの相手は向き合った相方ではなく己の心から出てくる感情だったようである。……締まらねえ。

適当にまとめようかと思ったけど、それすらも失敗してしまった俺は木乃香の肩を掴んで引き離す。

「うう……」

木乃香は逃げるように目を逸らした。目を逸らした程度では真っ赤になった耳や首筋は隠せていないのだが。

なんだか、ここまで羞恥に悶える妹を見るのは随分久しぶりな気がする。誰に似たのか、最近はそういう弱みのような部分を見せず、徹底的に隠そうとしていたから。

なので今の木乃香をジロジロと見てしまうのも仕方のないことだろう。

俺の視線から逃れるようにもじもじと木乃香は身をよじる。うん。可愛い。たぶん今の俺はすごくニヤついているだろうけど、自重は出来そうにないなあ。

滅多に見せなくなった木乃香の姿を少しでも長く俺は海馬に焼き付ける。

そうしていると、木乃香がベッドの上にある布団を掴んで投げつけた。視界が遮られる。

「ウチが悪かったよ！まさかここまでとは思ってなかったの！だから心を落ち着ける時間をください！」

布団越しに懇願された。しかし考えるまでもない。そんな勿体無いことは却下だ。

「いや、木乃香は何も悪くないって。だから別に平常心を保とうと

しなくていいんだよ。ありのままの木乃香が俺は好　痛っ

布団を剥ぎ取るうとしたら『言わせねーよ』とばかりに顔面に衝撃が。感触からして枕だろう。

木乃香が止めたかったのは言葉と行動、どちらだろうか。まあ、両方だろうけど。

「オーケー。分かったよマイシスター。俺はこれから何か飲み物を取りに行ってくる。要望はある？」

「……なんでもいい。とにかく冷たいもの」

「はいはい」

苦笑しつつ、布団を取ってベッドから立ち上がる。その際、木乃香を視界に入れないように一応注意。

出口のドアだけを正面に見据え、歩き出す。

「あ。そうそう木乃香。好「きゃー！　きゃー！」

もう飽和状態だからやめろと言わんばかりだ。イジれるうちにイジツとかないとなあ。

背後で大声を発しながら両手で耳を塞いでいる木乃香を想像しつつ、俺は本当に部屋を出たのであった。この想像はあながち外れてはいないだろう。直に見えなかったのが全く以て残念だ。

キッチンへ入るとコップを二つ取り出して、次に冷蔵庫から麦茶を。



お盆の上に並べたコップに内容液を注ぐ。

麦茶の容器を冷蔵庫内へ戻すと、俺はお盆を持って木乃香の部屋に向かう。

そうして木乃香の部屋まで戻って来ると、中には誰も居なかった。と言っても、ここに居ないのなら次に木乃香が居る場所は大体予想がつき、隣の俺の部屋へと足を向ける。

すると案の定妹様は俺のベッドに座っただけじゃある。

「部屋を変えるのに意味があるのか？」

「些細な時間稼ぎ。気にせんとして」

そういうことらしいので俺も気にすることはなく手に持ったお盆を机の上に置く。

「はい」

そして、麦茶の入ったコップを木乃香に手渡し、木乃香の隣に座り込んだ。

「ありがとう」

言って、木乃香は早速冷えた飲み物に喉を鳴らす。

それを見て俺も麦茶に口をつける。一口飲んでから俺は木乃香に話し掛けた。

「ていうかもう落ち着いちゃったの？」

「なんでそんな残念そうに言うかなあ」

事実残念だからじゃないだろうか。言ったところでどうにもならないので、言葉は麦茶と一緒に飲み込んだ。

そうして麦茶を飲みきり、空になったコップを机の上のお盆に載せる。

「それにしても」

と、木乃香が口を開いた。

「ウチばかりあんな恥ずかしい目に遭うのは不公平やと思う」

「いや、お前が墓穴掘っただけじゃん」

木乃香は完全に平常心を取り戻してしまっているようで毅然とした態度を貫いている。ほんの数分前まで火が点いたように顔を真っ赤にしてあたふたしていたのに。

今では何か考え込むように俺のことを注視して。

「兄様兄様。ちょっと窒息させて」

そう言うと、木乃香は俺の首に手を伸ばしてくる。当然その手は払った。

「断る。ていうか行き着いた結論がそれなのかよ」

「兄様が精神的に責めてくるなら、ウチは肉体的に責めた方がバランスがいいかなと」

そんなバランスは考慮しなくても構わない。この頃妹様が変な趣味に目覚めてないか心配。原因は十中八九俺だろうし。まあ、偶になら付き合っても構わないか、と思っている自分がいるのも確かかどうかだ。

なんてことを思っていると、木乃香は一度立ち上がって、俺の膝上に腰を降ろした。柔らかな感触と共に、舞い上がる黒髪から漂う香りが鼻孔を擦る。

そして俺の身体に凭れるように体重を預けてきた。

「おっと」

倒れ込まないように左手をベッドについて、右手は木乃香の腹部へ回す。右手には木乃香の手が添えられた。

「じゃあ、変な要求はしないから、ウチの気が済むまでこのままで居て」

背凭れにされている体勢からでは木乃香の表情は見えないが、その声にはどこか満足そうな響きがある。

まあ、これくらいなら。と、右手に少しだけ力を入れた。

しかし、木乃香の気が済むまでという時間は思っていたよりも長く、二人分の体重を支えている左手首に支障が出始めた。ていうか痛い。

「妹様。左手が痛くなってきたんで、右手を放してもらえると助かるんだけど」

「んー？」

返事をしつつも右手を放してくれる気配はなく、木乃香は九十度ほど身をよじると、左肘を狙って手を伸ばしてきた。

さっきとは違って手を払うことが出来ず、左肘はそのまま曲げられる。バランスが崩れる。二人揃ってベッドに倒れ込んだ。

すかさず木乃香は俺と向き合うように体勢を変えた。器用なやつである。木乃香は両腕を俺の後頭部へと回し、俺の頭を抱えられるように抱きしめる。

「んふふ」

満足気に笑んでいるのが分かる。何か言う気もなれず、俺も木乃香の背中へ両腕を回した。

結局、気付けば茶々丸が夕食に呼びに来るまで、絡み合うようになって、ほつれ合うようにして、ずっと抱きついていた俺たちであった。

第七五話・ヨスガにソラってるparts(後書き)

あと十話くらいしたら麻帆良祭が始まると思う。

## 第七六話：準備期間

宮崎のどかはまるで『DDD』3巻が発売されたかのような興奮と共にネギの元を訪れた。

彼女にとっても、ネギ自身にとっても、漸く待ちに待った物が完成したのだ。

即ち、ネギの義手である。

関東魔法協会本部に移り結構な日が経っているが、これ程意気揚々とネギが泊まっている部屋を訪れるのは初めてのことではないだろうか。

もう何度行き来したか分からない廊下を歩き、のどかはネギの部屋のドアを開く。

「ネギ先生」

窓から差し込む光は昨日と同じ。いつもと変わらない間取り。普段通りの光景だ。ただ一つ。部屋の住人であるネギを除けば。

「のどかさん、おはようございます!」

赴任当初は毎日聞いていた澁刺とした挨拶も、こうして聞くのはなんだか久しぶりだ、とのどかは思った。

ネギは絶好調と言わんばかりのハイテンション。あるべきものがそこにある。そんな当たり前のことが嬉しくて堪らないのであろう。

無意味なボディランゲージ。無闇矢鱈にネギは腕を振って、その存在をアピールする。

無邪気なネギの笑顔を見て、のどかは我事のように喜んだ。

つい昨日まで右肘から垂れ下がるだけだった服の袖からは何の変哲もない右腕が伸びている。

義手と聞いて、のどかはもつと無機質で機械のようなものを想像していた。最悪、物が掴めればいいのだからマジックハンドのような単純なアームになるかもしれないとも。

だが、その予想は大きく裏切られた。

ネギのために作られた右腕はどう見ても生身のそれと遜色ない。何も知らない人が見たら、きつと最後まで気付かずにネギと別れるであろう。

それ程までに右腕のクオリティは超然としていた。

のどかはネギの傍まで駆け寄って、右腕を握る。夢ではない。確かにここにあると証明するかのように強く、強く握りしめた。

ネギの肌の色と同じ。そして質感までも生身と比較できるレベルだ。本当に一見しただけではこれが義手だと分からないだろう。

「ネギ先生、本当に良かった」

感極まったようにのどかは言った。うつすらと目尻には涙まで浮か

んでいる。涙が？ほロリ？と零れ落ちるのも時間の問題であろう。

「の、のどかさん！　そ、そんな、泣かないでくださいよ」

「ご、ごめんなさい。なんだかすごく嬉しくて、すごく安心しちゃいました」

慌てふためくネギを見ながら、のどかは目尻の涙を拭う。その次には晴れやかな笑みをネギに向けた。

その笑顔を見て安心したのかネギも無邪気に笑う。

「そうだ！　聞いてくださいのどかさん！　これで僕も学校に行くことが出来るんです」

元とは言えば、ネギがこうして本部へ収容されているのは自身の秘匿意識の低さが原因だった。それ自体の問題は特に改善されたとは言えないが、度重なる不幸な出来事から少しでもストレスを緩和できればと考えた他の教師たちの配慮である。

生徒たちとの仲が良いネギのことだ。受け持った生徒たちとの久しぶりの再会には良い刺激が得られるだろう。

ネギに好影響を与えられるならば、それはのどかにとっても喜ばしいことで、自分も学校へ行く支度をしなくてはと考えるのであった。

「私もはやくネギ先生の授業を受けたいです」

紛れも無い本心から出た言葉である。



「そう言ってもらえると僕も嬉しいです」

ネギも素直に返事をした。

ネギはもう大丈夫なんだとのどかは悟る。短期間の内に様々な出来事があったが、少なくとも今のネギは良い方向へ向かっている。その実感に安堵する。

いや　ただ単に考えることを放棄し、忘却しているだけかもしれないが。それならそれでいいではないか。十歳の少年が背負うにはそれは少々重すぎる。

もしもここに神楽坂明日菜が居れば最善だったのだろうけど、去った人間のことを思ってもしょうがない。

だからこそ、最後に残った従者としてネギを支えて行かないと。

のどかは自分にも出来ることを考え、ネギに相談するのであった。

「あの　ネギ先生。私に魔法を教えてくださいませんか？」

「えっ！？　魔法を、ですか？」

突然の頼み事に驚いたネギはまじまじとのどかを見つめる。以前は恥ずかしがって目を覆うように前髪をおろしていたのどかだが、今は力強い意思と共にネギの瞳を見つめ返している。

その視線はどれだけ時間が経とうとも揺らぐことはなかった。ネギなりにのどかの心中を察したのである。

「分かりました。僕自身まだまだ未熟で、基礎的な部分しか教えられないかもしれませんが、それでもよければ のどかさんに魔法を教えます」

そしてネギはのどかの頼み事を快く引き受けた。

ネギから魔法を教わる。そのことにのどかは喜びを顕にして、礼を言った。

「ありがとうございます！ ネギ先生」

活き活きとした声であった。その返事に気を良くしたのか、ネギもまた破顔する。

善は急げ。

その言葉に従って、早速ネギはのどかに対し座学を始めるのであった。

宮崎のどかは考える。

自分がネギの傍に居られる方法と手段を。

このままではのどかとネギが魔法先生によって引き裂かれてしまう可能性があった。それを未然に防ぐために、のどかは何度も何度も思考を繰り返す。

ネギから魔法を教わるというのは、悪い案ではないだろう。

ネギが自分の従者に魔法を教えることは別にどこもおかしくはない。それにこのまま魔法が使えるようになれば、のどかは歴とした魔法生徒の一員である。

そうなってしまうえば、誰も反論は出来なくなる。

だが のどかが魔法を使えるようになるまでにどれだけの時間を要するだろうか。

のどかは今日のネギとのやり取りを思い返す。

あの後、一通りネギの話が終わると、初心者向けの杖を借り受けたのだ。

指示棒のようにコンパクトに伸縮できるタイプのもので、ネギがいっつも持ち歩いていた仰々しい物とは違う。

杖の件になると、ネギは些か意気消沈したようであったが、のどかの前だからかすぐに持ち直して、初歩的な魔法の呪文をのどかに教えた。

その機微を見て、のどかは何としても 何をしようともネギの支えになると改めて決心したのであった。

しかし、どれだけ意気込んだところで、そう易々と魔法が成功することはなく、そろそろ再開する学校生活の準備のために今日のネギの授業は終わったのだ。

のどかは一人部屋に戻る。

流石に簡単には会得できないだろうと考えていたが、魔法生徒になると言っても、本当にゴールが見えない道程だ。いや　スタートラインにすら立てていないのだと思い直す。

正攻法では時間がかかる。

分かりきっていたことだ。だから、のどかは部屋に戻ると魔法先生から借り受けたノートパソコンを起動させる。

パソコンが立ち上がるのを、呪文を唱え杖を振りながら待つ。

授業中に配られたプリントや課題等は簡単に渡すことが出来るだろうが、授業中の板書まではそうはいかない。

カメラ付き携帯電話が普及したと言っても、ノート一ページ分を撮影してその都度送るのは手間だ。手ぶれなどで文字が不鮮明になってしまうこともあるだろう。

ならば、と。一度ノートをスキャンで取り込んで、メールで送った方が簡単なのではないかと考えた。

画像を見るにしても、パソコンのペイントツールの方が携帯電話よりも多機能なのと言うまでもないことだ。

そうだった建前でのどかは教師を説得し、教師としても生徒が授業に遅れていくのは喜ばしくないことで、仕方なく許可を出したのだ。

初歩の呪文を唱え続けているうちにパソコンが立ち上がる。そして、Notepadのどかはメモ帳を開いた。次に「アデアット」と呟き自身のアーテ

イファクトを喚び出す。

本の中央部には意匠化された王冠が描かれており、題名下には鍵穴が描かれている。表紙の四隅にはスピード、ハート、ダイヤ、クローバーとトランプの各記号が。

書かれているタイトルは『DIARIUM EJUS』。彼女のアイファクト『いどのえにつき』である。

本を開くと、白紙だったページが次々とデフォルメされた絵と文字の羅列に染まっていく。それを見ながらのどかは内容をパソコンに打ち込んでいく。

カカカタ カタカタカタと部屋の中に打鍵音が広がる。

打鍵音は機関銃のような速さも勢いもなく、途切れ途切れ。亀のようなタイピング速度がパソコンに触れている期間を如実に表していた。

人によってはすぐに終わってしまうような行程も、彼女はつつかえつつかえで少しずつ片付けていく。

出来る人間からしてみれば、なんとも歯痒い光景である。その内『肩重い・C』などと言いつくすのではなかるうか。その状態もすぐに『日常』になってしまいそうだが。この状態は絶対に京ア二にはならないであろうが。

兎も角、のどかは延々とパソコンに向きあって、文字を打ち込んでいく。

画面から目を離し、ページを？捲る？。再びキーボードの上で指が踊る。画面上では指揮に合わせて文字列が浮かび上がる。

のどかは作業に没頭するが、作業そのものは見て写すだけの単純なものだ。やや余白のある思考は軽薄に笑う女性　美弥子との邂逅を、会話を思い出す。

『まあ、人の心が読めたところでそれは別に何のメリットにもならないんだけどね。多かれ少なかれ相手の機嫌を窺う程度のことは皆やってるしさ。』

『それに　おいおい。何だよコレは。範囲がたったの5メートル<sup>7.4メートル</sup>じゃあ　使用制限キツ過ぎでしょうよ。』

『そうだねー。使い方の前に魔改造した方がいいかもね。ところで？ツベルクスピッツ？ちゃんはこの本の原理分かってるの？』

『　　はあ。まるで分かってないって顔だね。自分の道具くらい把握しておけよ。　　は？　そもそも使ったことが一回だけって。へー。ふーん。それはそれは、面白いんじゃないかな。』

『まあ兎も角、コイツが他人の表層心理を文字や絵に出来るのは、この書物に人工精霊が宿っているからさ。』

『？ツベルクスピッツ？ちゃんは魔法使いじゃないようだしね。キミでも扱い易くて、そこそこ優秀なモノを容れてやればいいんだよ。そうすれば作業効率は上がるだろう？』

『候補があるのかい？　　靈魂に干渉するのは私的にはちょっと願い下げなわけだけど　　うん。面白そうだから少しだけ手伝ってあげるよ。』

会話というよりも一方的に相手が喋っていただけだったが　　それでも、彼女が言った通りに、彼女に頼んだ通りに、この本の性能は上がったのだろう。

のどかは彼女のことは何も知らない。主導権は終始あちらが握っていて、何かを尋ねる隙がなかったこともある。

そして、その本人は自分の仕事が終わりだと言わんばかりに言い出したことだけ好き放題言っつて、影も形も残さずに去ったのであった。

最後に、

『グノーシスについて調べておくと、きっと良いことがあるだろうさ』

と、意味深な言葉を残して。

本当にそんな人物と出会ったのか疑いたくなるような手際の良さと去り際だった。のどか自身も時間が経つにつれ、夢だったのではないかと考えてしまう。

「ふう……」

のどかが椅子の背に凭れ、大きく伸びをする。効率が悪く作業が遅くとも、一応は一段落ついたようである。部屋にある時計を見るともう少して日付が変わろうとしていた。

それほどまでの長時間、のどかは集中力を絶やすことなく本の中身をパソコンに写し続けた。書き写した文書を保存し、のどかはパソコンをシャットダウンする。

のどかはノートパソコンを閉じると、今度は愛おしそうに開かれていた本を胸に抱いた。

「おつかれさま」

のどかは微笑を浮かべ本に向かって呟くと、表紙を撫でる。傍から見ると薄ら寒い光景ではあるが、本人には何の疑問もないらしい。

次の瞬間にはのどかの手にあつた本はカードへと形を変えた。

そしてのどかは部屋の明かりを消し、ベッドの中へと潜り込む。ここ数週間の内に大分慣れてしまった関東魔法協会本部の一室に設えられたベッドへと。

それから程なくして、のどかは眠りに落ちたのだった。本の中の登場人物と同じように。

これが先日、へらへらと軽薄な笑みを浮かべていた金髪の女性と出会ってから出来た、宮崎のどかの新たな日課である。

こうしてのどかは順当に手札を補充していくのであった。



## 第七七話：脅迫

その日の麻帆良学園女子中等部3年A組はいつもとは違った空気に包まれていた。

三年間学校に通い続けている彼女たちにとって『いつも』とはどの時期のことを指せばいいのか分からなくなるかもしれないが、ここでは修学旅行が終わった数週間のごく短い期間のことだと考えて欲しい。

修学旅行が終わり、暫くは通常授業が続くと思われていた矢先担任であるネギ・スプリングフィールドと数名の生徒が長期に渡って休むようになったのだ。

十歳の身には負担が大きかったのだろうと、3-Aの生徒は妥当な理由と共に病欠だと聞かされていたが、問題はネギが休んでいる間のことだ。

担任が暫く休みであるからこそ、生徒が羽目を外し過ぎないようにと監督を買って出たのが、鬼の新田こと、新田教員である。

羽目を外すどころかデフォルト設定で枠からはみ出しているような彼女たちにとって、それは些か厳しすぎた。

別段彼が3-Aを悪い意味で特別扱いしているというわけではなく寧ろ学園で最も信頼の厚い先生と言っても過言ではなからう彼女たちが自由奔放過ぎるのだ。

個性的というよりも個性の塊である彼女たちには、些細な自重を促

すだけでも容易ではなく、彼女たちにとっても苦痛でしかない。

原因を自分たちで作っているとは言っても、教師からの説教が多ければ気も滅入ってくる。

しかし　そんな辟易とする学校生活が、今日になって変化したのだ。数週間前の3 - A独特の雰囲気に戻りしたのである。

ネギ・スプリングフィールドの復帰というニュースと同時に。

『快復おめでとう　っ！！　ネギ先生　ッ！！』

ネギが教室に入ってくるなり、この大合唱である。溜め込んでいた鬱憤を晴らすというか、際限を知らない声量だった。

久しく感じていなかった為かこれにはネギの方が苦笑を浮かべる。

そして、そんな風に空気が波打つ中に紛れて、宮崎のどかは自分の席に座ったのだった。

ガヤガヤと喧騒は収まることを知らず、どうにかネギが声を張り上げることでボリュームが下げられた。テレビのリモコンのように簡単操作といかないところが難儀なところだ。

静かになった教室で、ネギは久しぶりとなる出席を取る。

ネギとのどかが登校したからと言ってクラス全員が揃うわけではない。ちらほらと空席が見受けられる。　と言っても、ほとんどがサボりなわけだが。欠席者についてはご想像にお任せしよう。

そんな中、

「あれ？ 夕映さんも休みなんですか？」

と、ネギが言った。

ネギは出席簿を捲る。目を通しているのは自分が休んでいた間のページであろう。綾瀬夕映の過去の出席状況を見る限り、今日が今年に入って初めての欠席だと思われる。

「夕映さんについて誰か何か聞いていたりしていませんか？」

教壇から生徒に向かって尋ねるネギに対し、答えたのはのどかであった。

「あの、夕映ならちょっとした間休むって言ってました」

そうですか、とネギは返し、出席簿にペンを走らせる。先日設えられたばかりの義手は淀みなく動き、事実を知らなければとても義手だとは気付けないだろう。

風邪が流行っているわけではないし、ここ最近のクラスの出席状況を鑑みて、大事な判断したのか、久しぶりとなるネギのHRは淡々と終わったのであった。

放課後。

当然というべきか、恒例行事というべきか、イニシエーション通過儀礼というべきか、

兎も角放課後になると生徒が集まって本格的にネギの快気祝いをやり始めたのだ。

主役は職員室から引つ張ってきて、本日の3 - A出席者の全員が快気祝いに顔を出した。

結果から言えばネギ就任時に行った歓迎会よりも幾分かは派手になっただろう。久しぶりの再会ということで委員長こと雪広あやかが自重しなかったのだから。

他の者も飲み食いに応じて、終始騒ぎっぱなしであった。そして、この馬鹿騒ぎは下校時間ギリギリまで行われた。部によっては既に解散していてもおかしくはない時間帯。

そうして、快気祝いもお開きとなり、宮崎のどかが寮へ戻る頃には、寮の人口は結構な数になっていた。

のどかはすぐに自室へと戻ることはなく、寮の中を彷徨い歩く。

普段は滅多に訪れないフロアへ足を運んだのだ。目的地も漠然としていて、彷徨うという表現がしっくりくる。

擦れ違う生徒は皆見知らぬ者ばかり。のどかは顔を伏せ、おどおどと廊下を歩いて行く。

内向的な彼女が一人で生活圏の外へ出向くのはそれなりに珍しいことで、ここまで来るのにも幾ばくか勇氣も振り絞ったのだろう。

「えーっと……どう、だよな？」

そしてのどかは足を止めて、ある部屋の前で呟いた。

表札には『佐倉愛衣』と書かれている。関東魔法協会本部で寝食している間に知り合った魔法生徒の寮部屋であった。

いざ目的地を見つけたとなると、今までおどおどと周囲を気にしていたのどかは、そわそわと辺りを見回してしまう。

これ以上部屋を探す必要は無いのだが、インターフォンを押す決心がつかないのか、またしても廊下をうろろると彷徨う。

大丈夫。ちょっと話をするだけなんだから、緊張なんてしないでいいんだ。

知人の部屋を訪ねるだけだと、自分自身に言い聞かし、漸くのどかは部屋に備えられているインターフォンを押した。

「はい」

部屋の中から返事が聞こえ、？がチャリ？とすぐに扉は開いた。

扉の隙間から覗いた顔はのどかが用のある佐倉愛衣で同姓同名の人違いというケースは回避された。

「あれ？ 宮崎さん？」

来訪者がのどかであると知った愛衣は目を丸くしている。そんな愛衣にのどかは取り敢えず挨拶を。

「あの、こんばんは。ちょっと聞いてもらいたいことがあるんです

けど、今大丈夫ですか？」

「あ、はい。大丈夫ですよ」

愛衣はのどかからの申し出を快諾すると、のどかを部屋に招き入れた。幸いにして愛衣のルームメイトはまだ帰って来ていないらしい。愛衣にしてみれば、特に接点のないのどかが訪ねてきた時点で魔法関係の話がしたいのだろうと、想像するのは優しい。

近しい間柄ではないが、年が近く身近にいる関係者という点では、確かに愛衣が適任かもしれない。唯一のどかのクラスに居る真つ当な魔法生徒は正体を隠しているし。

「それでどうしたんですか宮崎さん？」

年齢的には愛衣が一つ下ではあるものの、魔法関係者の先達としてか話を促す。

「『人間の価値はどんな小さなことでも、人の役に立つことで決まる』って言うよね」

そしてのどかは答える。

その言葉はマザー・テレサであった。第一声から偉人の名言を流用するのどかに愛衣は生返事を返す。

「……えっと、『立派な魔法使い』のことについてですか？」

取り敢えず、愛衣は『人の役に立つ』という言葉からすぐに思いつ

いた単語を口にしたようである。

対するのどかは？コくり？と首肯で答える。

「世のため人のために力を使う。力のある者は力なき者のためにその力を使わねばならない。そういうことは先生からも聞いたんですけど、それは何故でしょうか？」

当然、佐倉愛衣は返答に窮した。

何故と言われてもそういう風に言われているし、世界にはそんな手助けが必要な人たちが居ることには変わらない。

愛衣がそう告げると、のどかは更に疑問を投げかける。

「魔法。そんな超常なモノがあるの？」

「え、いや　魔法って言っても万能なわけじゃないですし……」

「ええ。だから考えてみたんです。いつまで経っても世の中が改善されないのは前提が間違っているんじゃないかと」

「……前提ですか？」

「<sup>エイドス</sup>形相がどんなに優れていようと、それを構成する<sup>ヒュレ</sup>質料が不純物の塊なら世の中が善に向かうのは難しいことだと思いませんか？」

アリストテレスのアイデア論批判。

形相とは、ある普遍的な性質。質料とは、それを構成する材料。

たとえば鉛筆という事物は、木や黒鉛などの材料（質料）に、鉛筆の形や機能（形相）が与えられることによって成立する、といった考えである。

だが、材料に不良品が混じっていた場合、本来の機能が正常に作動するだろうか。

「だから愛衣さん。貴女がいつも真つ直ぐな目で正義を説く高音先輩のことを本当は煩わしく思っているのも、誠心誠意取り組まなくてはならない学園の修行が退屈になり適当に済ませているのも、先生からの指示も面倒なときは手を抜いて形だけはやっているとアピールするのも、全部仕方のないことですよね」

淡々と愛衣の心情を語るのどかに、愛衣本人は段々顔を青くしていく。

「か、勝手なこと言わないでください！ 私はそんなこと」

「思ってますよね？ 考えてますよね？ 実行してますよね？ それが貴女の本心なんですよね？」

「ち、違っ　！」

頭を振って否定する愛衣に、更にのどかは言葉を投げかける。  
かぶり

「でも、貴女は悪くありません」

追い詰める言葉ではなく、諭すような声で。



「仕方のないことですよ。貴女を構成している質料に不純物が混ざっていますから。貴女だけではなく、私にも、その高音先輩にも、魔法先生にも　そして宇宙にさえも」

『グノーシスについて調べておくと、きっと良いことがあるだろうさ』

のどかの脳裏には、先日軽薄な笑みを浮かべる女性から言われたセリフが想起される。

おそらく彼女はグノーシス主義について言いたかったのではないかとのどかは考える。

反宇宙的二元論的と呼ばれる世界観。

現実的に率直に真摯に迷妄や希望的観測を排して世界を眺めるとき、この宇宙は『悪の宇宙』である。

悪の世界は物質で構成されており、それ故に物質は悪であるという考え方。

「ですから、この世界に本当に必要なのは魂の全面的な方向転換ではないでしょうか」

『自分自身の魂がすぐれたものになるように配慮せよ』というやつですね。

そして、次にのどかの口から語られるのはプラトンのイデア論。

イデアとは、厳密な知識の対象と成りうる真の实在。

人間の魂はかつて天の外に存在してアイデアを見ていた。その後地上に墜落し、人間の身体に宿ることになる。だから人間は、かつての<sup>アイデア界</sup>真理の世界に対して恋焦がれる心を持ち、そこに上昇しようと努めるのだ。

「今のままでは私たちは名誉欲や金銭欲に囚われた洞窟の中の囚人に過ぎません。人々をこの洞窟の外へ連れ出してあげるのが、本当の『偉大な魔法使い』の役目なんじゃありませんか？」

「その通りかもしれないですけど、何なんですか！？ 宮崎さんは私に何を言いたいんですか？」

「うん。ちょっと私に協力してくれないかな？」

佐倉愛衣に問われると、今まで長々と小難しい話をしていたのが嘘のように、あっさりと単純極まりない理由をのどかは話す。

「あ。でも気をつけてね。私は今、貴女の秘密を人質に取っていますから」

戸隠の里首領兼人材派遣会社フオグブルー代表取締役社長のような交渉術を前にして、佐倉愛衣は首を縦に振ることしか出来なかった。

自室へと戻ると、のどかは深く息を吐き出した。

「はあ。緊張したあ……」

いくら『いどのえにつき』でカンニングしているといっても、そのときになって相手がどう動くかは分からないわけで。力尽くで口封じをされていたら、屈していたのはのどかの方であろう。

まあ、そういう人となりも考慮して佐倉愛衣に白羽の矢が立ったわけだが。

のどかは冷蔵庫の中から野菜ジュースを取り出すと、コップに注ぎスプーンを持ってベッドの傍まで移動する。

ベッドにはルームメイトである綾瀬夕映が眠っており、のどかはスプーンでジュースを掬うと夕映の口元まで持っていく。まるで介護をしているかのような光景だ。

「ごめんね夕映。今年の麻帆良祭には参加できないかもしれないけど、ちゃんと夕映の魂は返すから」

以前美弥子は言っていた。

魔法使いでないのどかには人口精霊ではなく、比較的馴染みのあるモノを使った方が効率が良いのではないかと。

それに選ばれたのが人魂であった。流石は親友というべきか、のどかとの親和性も高く『いどのえにつき』の性能は格段に向上した。

おかげで新しく学んだこともたくさんある。

「学園長先生はネギ先生をダメにする」

学園長はネギのことを考えてはいないと。

今の学園長には不満を持つ人が多く居るということも知っている。寧ろこれではネギの成長の妨げになるのが目に見えているではないか。

だからこそ、今日のどかは一石を投じたのだ。今はまだ佐倉愛衣ひとりだけだが、皆の不満を煽ればすぐにでも反学園長勢力と、ひとつの集団になることだろう。

グノーシス主義だのアイデア論だのを語ったのもこのためだ。

集団を纏めるには何か建前が必要になるだろう。それは学園長の掲げる信念よりも高尚でなくてはならない。

のどか自身に組織を纏めるなんてことは、出来もしないし、やるつもりもないが、下地さえあれば有能な先生が勝手に率いてくれるだろう。

こうしてのどかは佐倉愛衣を足掛かりにし、着実に学園長解任への道程を歩むのであった。

ただ、誤算があるとすれば、劣化素人ののどかには魔法使いの執念を理解出来なかったことであろうか。

学園長に不満を持つ関係者は多い。瀬流彦の件もあり、各々が外部組織とのパイプ作りに精を出している。

その中に、のどかですら思いつくような理念を掲げた組織が本気で魂の救済なんかを考えているような組織があるとは、のどかには想像も出来なかったであろう。

世界樹を利用できればもしかしたら  
処に行っても同じである。

この結論に行き着くのは何

第七八話：ヨスガにソラってるPart 6 (前書き)

すべては同次形微分方程式の所為。

## 第七八話：ヨスガにソラってるPart 6

『さて、時刻は八時を回ろうとしていますが、本日最後となる占いコーナー。学生のあなたも社会人のあなたも時間の許す限りお付き合ってください。』

では本日の12位から。12位はへびつかい座のあなた。やること成すこと全てが裏目に出ています。特に恋愛面では絶望的ですが、どうしようもなくなる前に早々に告白すると最悪は避けられます。ラッキーカラーは青。ラッキーワードは「奇跡も魔法もあるんだよ」。ラッキーアイテムはソウルジェムです。続いて第11位

』

朝のニュースでやる占いコーナーが打ち切りってどういうことだよ。なんて思っていたら、そりゃあ13星座でやってれば終わりもするわな。

寧ろどうして始めることが出来たのかが不思議でならない。

占いに対する感想など電荷一個分も湧き上がることはなく、俺こと近衛彩輝はリモコンを手に取りテレビの電源を落とすのであった。

ふわあ、と欠伸を噛み殺しながらリビングに置かれている革張りのソファの上でうつ伏せで横になる。

午前八時。一度完全に覚醒したはずなのに、またしても睡魔が俺に纏わり付いてきている。お前と改めて交友関係を築く必要はないだろうに。ところで睡魔って、実体があったらこの世で最も多くストーカーとして訴えられてるよね。

全く。最近は学園内外問わず誰も彼もが生き急いで、そんなに早く死にたいのかとさえ思ってしまう。

もうちょっとのんびりと急げばいいものを。そしてゆっくり焦ればいいのさ。夢現の境界をあやふやにして微睡みながらな。

切羽詰まった用事はなにひとつ無い俺は重くなってきた瞼を閉じる。

そうして少し時間が経ったところで？トスツ？と背中に重みが増された。どうにもこのまま二度寝はさせてくれないようだ。怠惰な生活は許容してくれているようだから我慢しよう。ばいばい、睡魔。

「やあ、妹君。ひとつ聞きたいんだけど今日は平日なのか休日なのか教えてくれ」

「さっきまでニュース見てたんやろ？音が聞こえてたえ」

それはそうだが、すごく断片的にしか見てなかったんだよ。携帯は自室に置いてきたし。それにああいうニュース番組って途中から見ると日付や曜日はまるで分からないだろう。

「まあ、八時を過ぎてるのにウチが普段着で兄様を尻に敷いて寛いでる辺りから判断してよ」

結局、予定無しという予定を覆すつもりのない俺は、どっちでもいっつかと結論付けることにした。

こうして呑気に自堕落に過ごせるのも後僅かだろうし。今は嵐の前の静けさを妹で堪能しよう。



「なあ兄様」

話しかけてくるのはいいが、お前はいつまで人をクッション代わりに使うつもりだよ。と、抗議しつつ、一旦立てと太ももを叩く。

「はいはい。兄様は仕方がないなあ」

やれやれと肩を竦めんばかりに木乃香は立ち上がった。まるで俺の方が聞き分けの悪い子供のような言い方には釈然としないが、木乃香がまた座るまでの間にソファに横になるのはやめ、普通に座る。そして隣に　肩がくつつく程度の距離を空けて木乃香が座った。

「それで？ さっきの話の続きは？」

「何か面白いニュースでもあった？」

「面白いニュースと言われてもなあ……。お前はニュース番組にどのくらいの期待をしてるんだよ」

「《冬木市でサーヴァント召喚、ただし狙いは半額弁当》みたいなっ！」

それは確かに見てみたいけど絶対に店に迷惑をかけるから実現は難しそうだよなあ。腹の虫の加護：EXを持つ空腹王が終始無双して終わりそうなのがするが。

「そういつ、ゆるゆりと生存戦略をする話はないな。ほら。嵐の前の静けさなんだから平和じゃないと逆に困るだろ。最近はペットの名前と子供の名前が同義で扱われているんじゃないかとか、そんな感じの話」

「ああ。キラキラネーム的な。時代は変わっていくよね。妙な方向に進むときは同じように妙な加速度が付くんかな？」

「寧ろ時代は遡っていると言っても過言ではないのではなからうか？」と、言いますと？」

「問一。江戸時代元禄期に出された天下の悪法と名高い多数のお触れの総称を何と言うでしょう？」

「答えはWEBで！」

「だからこそ今答えやがれ」

うーん、と木乃香は少し考え込むような仕草をして、

「答えの分かった人は〜、とか。抽選で一名様に〜、みたいな件で悩まなくていいから」

「解一。生類憐れみの令」

俺がそう言った途端に即答である。無駄に考え込んでいると思ったら本当に何言おうか悩んでいたのね。

「それで、生類憐れみの令がキラキラネームにどう繋がるわけ？」

その時代の名前に比べたら進化と言うよりもメタモルフォーゼと言った方が相応しい奇抜さやと思うけど。

と、妹様は仰るが、ゴメン、名前は全然関係なかったわ。

「いや、そのお触書の中に乳児の項目があったって話でしたかっただけ。当時は犬猫鳥魚貝虫とほとんど同列に扱われてたみたいだな」

「……あ。さつき兄様が言った『ペットと同義』って方にかかるわけやね」

そういつた無駄知識の話がキリよく途切れる頃には、密着して座っていた木乃香は頭を俺の肩に乗せるようにしなだれかかってきていた。

特に目くじらを立てることもないのでこのまま会話続行。

「しかし気の毒やよねえ。就職試験とか」

「だよなあ。もう少し時代が流れたら理解も得られるんだろうけど、大抵は履歴書だけで匆ねられてそうだよなあ」

「好景気ならまだしも、不景気になると『迷ったら落とす』みたいな空気が出来てるからね」

『総武銀座闇の帝王殺人ナンバーワンホステス逃走事件』のように捨てる神ありや拾う神あり、とは簡単にはいかない世の中だよ。

「ところで何でこんなにも名前の話を広げてるの？」

「そろそろ名付けをしないといけない時期でさ。知り合いに子供が出来たとか、そういう話じゃないんだけど　あの子年齢不詳だし

……まあ、すぐに分かるって」

ふうん、と木乃香は曖昧に相槌を打つ。要領の得ない会話にも幾分慣れたものだ。

やや唐突になるが、空いている手を木乃香の頭にのせ、さらさらと艶のある黒髪を優しく撫でてやる。すると猫のように身体を擦り寄せてくる妹君。癒しを与えてくれるという点ではお前も十分愛玩動物だよ。

撫で撫でられる。この相互関係を十全に堪能した後、木乃香が口を開いた。

「名前は生き方や運命を表し、司り、導くものって言うけど、どんな願いを込めるつもりなん？」

その名前って聞いてもいいの？

木乃香は僅かにでも興味を持ったようだ。しかし、あの子性別不詳だからなあ。見た目は女の子だけだ。

「出来れば木乃香やここに集まる皆の力になって欲しいとは思いますが……、最終的にお前の名前で縛ることになるかもな」

まあ、願いつかって言っちゃうと親の願望が直に出ちゃって、でも結局遺伝や環境で子は親に似るから名前とは正反対の方向に成長してしまうことが多々あるのではなからうか。

「交通課勤務の三日月しずかが姦しいように？」

「吉良綺羅の性格が案外地味なように」

好きな理由よりも嫌いな理由の方がハッキリしてると言っても過言では無いのだ！

「でもその理論でいくとウチのような名前の場合はどうすればいいのかな」

「個人的にパツと連想するのが木花之佐久夜毘売コノハナノサクヤビメとかになっちゃうんだけど」

そういえば天城雪子のペルソナじゃなかっただろうか。

「……まあ、兄様らしいっちゃ、らしいんとちゃうん」

でも、と一旦区切り、木乃香は俺の太ももに強く爪を立てる。

「もしもウチのことを石長比売イワナガヒメのように扱ったら」

注釈を付け加えるならば、この二人は姉妹なわけだよ。そして姉妹一緒に神の御子たる瓊瓊杵尊ニギノミコトに嫁ぐわけだが、イワナガヒメだけ家に返されてしまうんだ。

そもそも俺と木乃香の場合はその家と同じなわけだけでも。なんてことは言わずに俺は木乃香の肩に手を回す。

「そんなことはあり得ないだろ。木の花が散ってしまうくらい短い時間しか一緒に居られないとしても、その一瞬一瞬を大切に俺はお前と過ごしていくよ」

「名前が正反対のものを表すというならウチには『岩』の性質があ

るんやないかな？ なら、岩のようにいつまでも変わることもなくウチは兄様と一緒に居るよ」

えへへー、と少し照れたように木乃香は朗らかに笑った。かくいう俺の頬もかなり緩んでしまっているであろうが。

「ふと思った。？なごみ？とかのどかさうな名前ってどうなるんだろうね」

「みーみーかーきー」

そう俺が言うとは何処からともなく耳かきを取り出している木乃香。目を合わせる。

「……………しよつか？」

「あ、はい。お願いします」

銜いなく素直にお願いする。からからと笑いながら木乃香はソファの端へと移動して、俺はもう一度横になる。

先程とは違ってひんやりとしたソファの革ではなく、あたたかく柔らかい木乃香の太ももへと頭をのせる。

ひざ枕である。

木乃香の太ももなら以前、頬擦りしたり舐めたりしたことがあるけど、こうして改まってひざ枕となると、なんだか少し気恥ずかしいかもしれん。

「つか、ホントにあつたかいよな。人肌というより木乃香の体温つて落ち着くわー。今は服を着てるから布地越しだけど、あの時の柔肌の感触が蘇ってくる。」

「すべすべとしていながら触れると優しく押し返してくるあの弾力感。極上の絹だろうとなんだろうと、そんなものは手触り肌触りにおいで木乃香のキメ細やかな肌の前では霞んでしまう。」

「それにだ。この陶器のような白い肌にほんのりと朱色が混じるわけだ。そして上を見上げると羞恥に悶えている姿を決して見せまいと、顔を真っ赤にして気丈に振る舞っている木乃香の顔を堪能することが出来る。」

「うわー。ちょっとマイシスター、スカート脱いでくれないかなあ。とか洒落で済まないレベルで考えていると、」

「ぐさー！ だくだくだくー」

突然耳の軟骨辺りに耳かきを突き立てる妹様。

「やめてっ！ それ本気でやめてください」

マジ怖えー。鼓膜に穴を開けられるかと思った。

「いやー。やっぱり導入からしてこれはやっておくべきかなあと」

「やらなくていいから。どうしてお前がそのネタを知ってるんだよって流れになるから」

「ちょっとドキドキしてきた。心拍数が僅かながらに上がったよ。こ

れが彼女に初めてひざ枕をしてもらって緊張しているとかいうのならまだしも、この緊張の仕方は少々笑えないのではなからうか。多分健全な男子中学生なら冷や汗をかいてるところだろうさ。

そして木乃香は？ポンっ？と俺の頭に手をのせる。

「もう巫山戯んから動かんといてな。ホンマに鼓膜を破ることになるえ」

「分かった」

しかしこればかりは巫山戯ないでも良かったと思うんだ、とは口に出すことなく心中でそつと呟く。

その直後には耳の穴に異物が入り込む感触が。反射的に身を固くしてしまい、そこで俺は気が付いた。

木乃香ってこういった経験あるのかなー、と。いやまあ、流石になんとは思って、俺の鼓膜に穴が開きましたー、なんて理不尽な才チだけは勘弁な。

なんて思っていると木乃香が細やかに耳かきを動かす始める。

「……………んっ」

不覚にも声が漏れてしまった。結論から言うとすごく気持ちいい。嗚呼、こんな快樂が身近に転がっていたのか。発想はあつたんだからもっと早く頼めば良かった。スマン木乃香。たとえプランク時間でもお前の腕を疑った俺を許してくれ。



とか思っている間にも、木乃香は手を止めない。休むことなく手を動かし続けてくれている。

外耳道を丹念に撫でられ、皮膚の上をどの家庭にもあるであろう竹製の耳かき棒がなぞっていく。それはもう、一分の隙もないくらい丁寧。

全体的に満遍なく。手抜きなく。先程彼方へ追いやった筈の睡魔が戻ってくるくらいの気持ちの良さ。

木乃香のひざ枕で眠るのも偶には悪くないだろう。というか、悪い筈がない。出来ることなら人類滅亡の最後の日までずっとこうして居たいくらいだ。

「んっふふふ」

なのに十分重くなっている瞼を素直に閉じることが出来ないのは、木乃香が意地の悪そうな笑みを降らしてくるからだろう。

「ねえ兄様。気持ちいい？」

「ああ。とつても」

俺の偽りのない言葉に木乃香は「そっかそっか」と満足気に頷く。

「特にここらへんとかかな？」

言うやいなや、木乃香の手つきが少し変わった。今まで外耳道を満遍なく行っていた耳かきを、数ヶ所に場所を絞って重点的にやり始めたのだ。

「……うわっ……」

その瞬間、反射的に身体が跳ねる。

俺の反応にさらに木乃香は気を良くしたようで、からからと笑い声を上げる。

「うん。大体兄様の弱いところは把握したえ。そういえば今まで触れてこなかったけど、実は兄様って元々耳が敏感だったりするん？」  
知るかよそんなこと。こんなやり取りをするのは、こんなにも気を許しているのは、お前くらいしか居ないんだから。

「まあ弱点らしき部位を発見できたのは僥倖ということ。さて兄様」

ふうー、と耳に息を吹きかけられた。そして律儀にも俺の身体はそれに反応してしまう。

益々気を良くしたらしい木乃香は、耳かき棒を動かす速度をやや上げる。なのに皮膚に触れる感触はより繊細に。うっわ。マジで気持ちいい。

「っ、てかお前っ、もう耳掃除とかどうでもよくなってるだろっ」  
だったらもう終わってくれても構わないと。攻守交代、寧ろ代われ。そんな気持ちを入れて木乃香に言うが、本人は気にすることなく元気に頷くのであった。

「うんっ！ だからね兄様、 イイ声で啼けよ」

前半は無邪気に。後半は妖艶に。そんな不可思議な声が耳朶を打つ。今まさに滅茶苦茶に掻き回されている外耳道をくぐり抜け、木乃香の声が鼓膜を震わせる。

その声に多少なりとも？ゾクリ？としなかったと言えは嘘になる。

この瞬間に木乃香加虐者と俺被虐者のヒエラルキー上下関係が明確に決定されてしまったのではなからうか。

ところで、耳かき棒の後端に付いている鳥の羽毛の名前をご存知だろうか。

あれの名前は梵天と言う。俺にしてみても中々馴染みのある名前であるう。霊脈と梵と通力には大抵の場合お世話になっているからな。

由来としては、修験者が着用する梵天袈裟や御幣などではないかという説も。

御幣を使うとなると主流は神道だが、長い棒の先端に御幣を何本か取り付けた物のことを梵天と言ったりする。

それに幣とは神への供え物や罪を祓うために使用するものだ。よくテレビなんかでは神主が祓串を左右に振る光景を見るかと思うが、あれは対象の穢を大幣に移すためだと考えていい。

加えてキリスト教カトリック教会では、悪魔憑きはまず外から語りかけてくることから始まるとされている。つまり、悪魔や邪気は耳から体内へと入り込むというわけだ。現に世界各地で古くから耳飾

りは魔除けとして扱われている。

なので穢を祓うとされる梵天（これは御幣を複数取り付けた物）で耳を掃除するというのは、中々理にかなっているのではないだろうか。

「……………んんっ……………う…あっ……………」

「あははは。さっきからびくびく身体が震えて、随分可愛らしくなつたえ」

適当に無駄知識披露して気を逸らそうとしてみるも、失敗。妹様は執拗に耳を責め続けている。脊髄反射に逆らえるわけもなく俺の身体は幾度となく小さな痙攣を繰り返す。

そしてさり気なく、木乃香は耳かき棒を持っていない手を俺の首に添えるのだった。力は籠められていない。ただ触れているだけ。

しかし過去の経験というものが蘇るわけですよ。

「もう十分だから。そろそろやめてくれても俺は構わないんだが」

首に添えられた木乃香の手に、俺の手を重ねて進言してみる。

「ん？ 実は恥ずかしかつてたりするの？ 妹に耳を弄られて感じちゃって。声が出るのを我慢して、それでも無様に背筋を震わしちやって。んふふ。これからもっともつと、兄様を辱めてあげる」

誰だ！ うちの妹に変な影響を与えた奴は！ 俺だよバカヤロー！

「と言いたいところやけど。うん、安心してよ。兄様の言う通り耳かきはやめるえ」

木乃香はそう言うと、本当に耳かき棒を手放した。正直言ってとても胡散臭いので、俺は警戒したまま身体を起こそうとする。俺も人に言える立場じゃ全然ないけど、お前も日頃の行いを改めろよ。

「ぐッ！」

なんて思ったそばから気管が圧迫されました。

同時に起き上がろうとしていたところ、頭を押さえつけられる。強制的にひざ枕状態に逆戻り。

木乃香の手から力は抜けたが、テクニカルタイムアウトは無しか。半ば予想していただけに心が妙にグラつくことはなかった。俺の心は常にハイレベルのパルス信号かよ。

「はむり」

そして耳たぶを甘噛みされる。

「うつ、くう……」

ふふっ、と木乃香が笑みを漏らす。俺の反応を十全に愉しんでいますと言わんばかりの意地の悪い笑みだ。そして笑みと同時に漏れる不規則な吐息がさらに俺の耳を攪る。

「れろれる」

耳から直接湿った音が聞こえる。やつぱりなあっ！ 妹様なら耳の穴を舐めてくると思ってましたともさ。

「おい木乃香。そろそろ本当にやめなさい」

と、俺が警告したところで木乃香が止まる筈もなく。

さてさて。それでは、今更かよと思われるかもしれないが、ここに来て漸く、俺は木乃香に対し、言葉以外の抵抗を見せるのであった。眼と耳。この二つの器官は俺にとって、極力怪我を避けたいと思う程度には重要な意味を持つ。

怪我をしても常人よりは早く治るだろうが、時間を巻き戻すように元通りになるとは限らないからな。なら怪我なんて初めからしないに限る。

だから耳かき棒が外耳道に触れている間は、木乃香の好きにさせて俺はされるがまま弄られていたとも。

「そういうわけだから木乃香。ちょっと攻守交代しようぜ」

言い終える前に俺は木乃香が穿いているスカートの中に手を入れて？ぎユむ？と内ももを掴んだ。今までのお返しも兼ねてそれなりに力が入ってしまったかもしれない。

もしもここに第三者が居たならば弁解の余地なく有罪を言い付けられるだろう。

「ひゃうんっ！ー！」

そして、木乃香が声を上げて飛び上がる。

耳かき中にやらなくて良かった。竹製って言っても皮膚をざっくり抉ることは出来るだろうし。

しかしそれにしても、相変わらず滑らかでハリと弾力がある素敵な瑞々しい肢体だ。いくら触り続けていても飽きるということはないだろうと確信できる。

「あつ、ちよつ、待って兄様……っ！ んぁ、抓るな撫でるな揉むなぁあつ！」

いえー。下克上成功ー。

俺はすぐに束縛ひなせから解放される。手は止めないけど。

ほんの数秒前とは打って変わって、俺の手から逃れようとする木乃香。離れようにもソファの端なのでこれ以上逃げられるスペースはないのだが。

でもまあ、木乃香に窮屈な思いをさせるのは心苦しい。なので俺はソファから立ち上がってスペースを作ってやる。

そしていい加減スカートの中から手を抜いて、代わりに木乃香の肩を掴み、空いたスペースへ横たわらせる。別に押し倒してるわけじゃないですよ。いやホントに。信じて信じて。

ソファなんて人ひとり横になるのが精一杯の空間で出来るわけないじゃないですかー。だから俺はソファの横に立って、木乃香を見下

ろしているということになるのか。

木乃香を横にした際にスカート裾の裾が捲れ上がり、白いシルク地にレースをあしらったパンツとそこから伸びる肉付きの良い眩い太ももが鑑賞できる。

「うん。可愛くてよく似合ってる」

「……っ！」

俺の視線で察したのか、木乃香は慌ててスカートを手で押さえる。

こうして見ると、なんだかまな板の上の鯉のようになってるな。頬も真鯛のように真っ赤であるし。木乃香がその内サヨリみたいな人とか言われないか心配。

当の木乃香はというと、目を閉じて大きく息を吸っている。気を落ち着けようとしているのだろう。

そして俺は床に膝をついて、深呼吸中の木乃香のおでこへキスを降らせた。

「はふっ」

妙な息の漏らし方をしたが大丈夫だろうか。かと思うと目を開けて「うー」と、潤んだ目で睨んでくる木乃香。

「す、スカートの中に手を入れてくるなんて、兄様の変態」

「その発言はお前自身にも返るから十分に気を付けろよ。      とこ」



るでマイシスター。お世話になった相手に返礼はきっちりするべき  
だと思っんだ」

寝そべる木乃香の頬に手を添えて、俺は耳元で囁いた。

「今からお前の嬌声を聞く。とても楽しみだ。あははは」

「……………うう……………優しくしてね」

蚊の鳴くような声で木乃香は呟く。その言葉にこっちの息が詰まっ  
てしまう。仕草も含まれている所為かな。

木乃香、お前はとてつもなく可愛いよ。お前のような愛玩動物がペ  
ットシヨップに居たとしても、素通りしてしまう人間はまず居ない  
だろうさ。

俺は木乃香の頬に添えた手を後頭部へ回し、頭を少し持ち上げる。  
そして見つめ合う。永遠とも錯覚してしまうくらい長い時間を。ま  
るで強固な鎖で繋がれているかのように視線が外れることはない。

この視線が断たれたのは、木乃香が静かに瞼を降ろしたとき。

俺は、目を閉じ頬を赤らめながらも淡い微笑を浮かべている木乃香  
との距離を詰める。ゆっくりと顔を近づけていった。

そして、唇が触れる

「おっとそこまでだ色ボケ兄妹」

おでこに。閉じた瞼に。朱に染まった頬に。

何度も何度もキスの雨を降らす。今日はそんな心理状態ネウモチョウなのだから仕方がない。

雲ひとつ無い青空で世界をあたたかく照らしてくれる太陽のように、俺に温もりを与えてくれる妹様。お前になら身を灼かれても構わないと思う。

「……………むー」

妹様は小さく唸ると、俺の頬を包み込むように手を伸ばしてきた。小休止が挿まれる。

「どうした？」

俺がそう尋ねると、

「……………意地悪」

ちよっと拗ねたように木乃香は唇を尖らせる。

「嫌ならやめるけど」

「い、嫌じゃないえ！でも、その、もっとちゃんとしたっていうか……………ううう」

みるみるうちに木乃香の顔がより赤く染まっていく。耐え切れなくなったのか、俺の頬に触れていた手をズラし、視界を塞ぎにきた。

「おい。そのアホカップル！。聞こえてますかー」

木乃香の顔は見れなくなってしまったが、どれだけ羞恥に悶えているかは想像に難くない。

暫くの沈黙期間の後、意を決したように木乃香は口を開いた。

「こ、恋人みたいな、キスを……しよう」

段々と声が小さくなり、最後の方は聞きとるのがやっとといった音量にまで落ち込んだ。

木乃香の手が俺の後頭部へ回される。良好となった視界の中で、照れ隠しなのか、からからと笑う木乃香を認めた途端、力強く抱きしめたい衝動に苛まれる。

しかし 自重。木乃香の言葉を咀嚼して、噛み砕いて、噛み締め、ソレは今望まれていないと落ち着かせる。今真っ先に確認しなければいけないことは、

「舌入れていい？」

「……………だめ」

ちょっと悩んだようであるが、仕方ない。ここは妹様の意見を尊重しよう。

俺が顔を寄せるのがはやかっただか、木乃香が腕を引き寄せる方がはやかっただか。そんなものは些末な問題だろう。

「……んっ」

それは十秒にも満たない僅かな時間。でも、確かに俺と木乃香は唇を重ねたのだった。

キスをやめ、お互いに見つめ合う。軽く下唇を吸われたような気もしたが、気にしないことにしよう。

「えへへ」

照れたように木乃香は笑う。

「なんだか、こうして改まると思いの外気恥ずかしいな」

「うん。もっと恥ずかしいことされてるのにな」

「それはお互い様だろ」

けらけらと俺は笑い、からからと木乃香が笑う。笑い合う。

月並みな言葉になるが、幸せで胸が一杯。まさしくそんな感じ。余韻に浸るように今度こそ木乃香を力強く抱きしめる。

そして？ゲラリ？とソファが揺れて、木乃香が宙に投げ出された。

「きゅん」

「つと」

ちようと抱きしめていたおかげですぐに支えることが出来、床に立った俺たちは犯人らを見やる。

「何するんだよ」

「何してんだよ」

全く。いつから居たのか、そこにはちうちゃんとさよちゃんが冷ややかな目でこつちを見ていた。

「いえ、私たち結構前から呼び掛けてましたよ。全スルーされるとは思ってませんでしたけど。ていうか正直『うわぁ……』って思ってます」

ヒかれちゃってますかー、それは悪かったな。居候の影響でスルースキルには磨きがかかってるんだ。

「スルースキルを鍛えたいのはこつちだつーの。無駄に部屋の気温上げやがって、お前らみたいなのが居るから地球温暖化とか言われるんだよ。地球を見てみる真っ青になってるじゃねーか」

「すまない、地球」

「地球、ごめんなさい」

「その無駄な素直さは数分前に発揮して欲しかったです」

何故だかひどく疲れたと言わんばかりに深々と溜息をつく二人。休

めるうちに休んどいた方が良いのに、一体何の用だろうか。

「そもそも二人は何をしに来たん？」

俺も疑問を代弁するかのように木乃香が質問し、ちうちちゃんがそれに答える。

「あー、うん。私ら現在進行形でシリアスパート中なんだ。一時間  
でいいから静かにイチャついててくれないか？」

それは不運なことだな。今まで保っていた緊迫した雰囲気とかが、  
ここに立ち寄ったばかりに呆気無く崩壊してしまったのだろう。気  
の毒と思わないでもないかもしれない。

木乃香と目配せ。少々不完全燃焼な気もするが、ここは二人のこと  
を慮ってあげよう。

「分かったよ。おとなしくイチャついてるから二人はいちばんまえ  
の小魔王さんよろしくね」

何でお前がそのこと知ってたんだよ、と言いたげな、釈然としていな  
い表情をして二人はリビングから去って行った。

「誰？」

「テロリスト」

ふーん、と木乃香は一応聞いてみただけで興味なんて微塵もない反  
応を見せてくれる。

そして宛もふりだしに戻るかのようになり、俺たちは身体を寄せ合ってソファに腰を落ち着けるのであった。

さて、最低でも一時間は静かにしてあげないとなあ。これからどうやって過ごそうか考えていると、？つんつん？と木乃香が指で俺の背中を突付いてきた。

何だよ、と口を開きそうになるが、その前に木乃香の意図を把握。突付いているのではなく、背中を一定の間隔でなぞっている。一言で表すなら指書き文字であった。なんともこそばゆいやり取り。

『ねえさいききようはこれではなしてみいへん』ねえ彩輝。今日はこれで話してみいへん。

平仮名で書き綴られる文字を変換しつつ、木乃香に意思表示をするため俺は小さく頷いた。ていうか木乃香さん。

『名前は口頭で呼んで欲しいんだけど』

俺も木乃香の背に手を回して、インクも紙も使用しなければ何も汚すことのないエコな文字を書く。

『だつて恥ずかしいし』

そう言う<sup>書く</sup>と、？ふいつ？と木乃香はあからさまに目を逸らす。

そんな木乃香を俺は期待に満ちた目で見つめ続ける。

『呼んでくれたら俺はとても嬉しくなるな』

ある種、当然とも言うべきか、先に折れたのは木乃香であった。

『出来る限り、努力してみます』

そのときを心底から待ち望んでいるからな。もうこの瞬間からはその一言を聞くためだけに生きていつてやるよ。

それにしても、お互い無駄に指書き文字の読解能力が高いな。

今になって気付いたが、指書き文字って本当に素晴らしいコミュニケーション手段じゃなかつたか。言霊関係ない、故に言質取られない。メールみたいにデータに残らない。推理モノでよくあるメモ帳の二枚目に筆談の跡が残るといった事故もない。

なによりも、

『伝わればいいんだから身体のどこに書いてもよくないか？』

背中ではなく、木乃香の脇腹に書きなぞる。これ合法的に相手の身体触り放題になると思います。

「あははっ。こら兄様」

擦ったかったのか木乃香は軽く笑い声を上げる。そして怒られませんでした。



分かってはいたが、こんな早々に名前を呼んではくれないよなあ、と若干落胆しつつ気長に待とうと心に決め、俺は言い訳を指に乗せる。今度はちゃんと背中に這わせて。

『つい木乃香の魅力的な脇腹から目を逸らせなくて』

『せめてもうちょっと気の利いた言い訳はなかったん？』

『なんだよ。なんなら全身隈なく書きなぐってやるぞコノヤロー』

『じゃあウチは彩輝の首に絞って書く。爪で』

さり気なく「爪で」と書き足した木乃香は満面の笑みを浮かべている。

『時折力加減を間違えて引っ掻いてしまいかもしれんけど、堪忍な別にウチが彩輝の痛がる顔を見たいとか、痛みで引き攣る笑みが大好きとか、そんなことは一切無いけど』

指書き文字のもう一つの利点発見。うっかり本音を漏らしても、最終的に相手の誤読にすることが出来る。

『俺はそれでも構わないさ。ただし全身隈なくっていうのは取り消して、木乃香の胸を重点的に揉んでやる』

ぐっ、と言葉を詰まらせる木乃香。実際はどう返そうか指が宙を泳いでおり、逆の手はしっかりと胸のガードに回している。

『胸は、もうちょっと大きくなってからっ！』

エクスクラメーションマークの代わりに？バシんっ？と背中を叩かれる。世界遺産人間国宝級に可愛い妹が居て俺はとっても幸せです。とまあ、そんなこんなで俺と木乃香は雑談をお互いの身体に書き連ねていく。

予想以上に身体よりも心が擦ったくなる行為だ。程良い刺激のおかげで飽きることは今のところ考えられない。

そして俺も木乃香もある程度話題を書き込んだとき、「なあ」と敢えて言葉で前置きしてから木乃香が指を滑らせた。

『言霊が働くわけでもないし、今からちよつと書き違えるけど』

などと指書き文字でも、まず注意書きから書き始める。木乃香の表情からも深刻な話だと察することが出来るので、ここは巫山戯ずに続きを待つ。

『ウチと彩輝の関係って何なのかな』

兄妹。と言うには些か近すぎるんだらうな、俺たちは。

『ウチは彩輝にとって「妹」でしかないのかな』

ついに来たか。率直にそう思う。曖昧で、不確定で、確立なんてものではない、そんな心地の良い、だからこそ時折不安に駆られる戯言めいた関係。

グダグダと溜め込むのは実に俺らしからぬ思考ではなからうか。

さて、いつまでも選択から逃げるような真似はせずに 終わらせ  
ますか。全く。どれだけ時間がかかっているんだか。失笑を禁じ得な  
い。

「木乃香」

残念だけどこれは指書き文字なんかで伝えてはいけないことだろう。  
ちゃんと、しっかりと、声に出す。

「まあ正直言って、俺はお前が妹じゃなかったら見向きもしなかつ  
ただろう」

「うん。それはちょっと分かるえ。そもそも兄妹じゃなかったら兄  
様が麻帆良に来るところから疑問を浮かべざるを得ないし」

指書き文字終了。

木乃香が居なかったら縁のない場所だしな。当時の俺の心理状況か  
らして原作には関わろうとするだろうが、もしも原作よりも面白い  
ことをやれる連れが居たりしたら、途端に分からなくなってしまふ。

「だからさ、妹っていう前提を考えないようにするには、多分無理  
だ」

「……うん」

木乃香のことは好きだ。それは間違いない。でも、どういふ類の好  
きなのかと聞かれると、自分でも首を傾げてしまふ。

兄妹愛？ 家族愛？ 純粹な好意？ ほら。ずっと中途半端なぬる

ま湯に浸かってた弊害が出てくる。

「まあ、ウチも兄様としか呼べてないしね。どうやったって兄ってことを意識してしまううえ」

お互いに苦笑する。

この気持ちは何に根ざしているのかは分からないが、どうやら兄妹観みたいなのは根幹に位置しているらしい。

普通はいの一番に乗り越えるものじゃなかるうか。……乗り越えた時点で普通じゃないけど。

ここで溜息をひとつ。

「やっぱりグダグダ悩むのは性じゃないわ。結論言っていいい？」

「ぶっぞ」

「それがどうした？ 俺が木乃香に抱く気持ちは揺るがない」

「結論っていうか、暴論が出たえ」

からからと木乃香は笑う。自分だってそれなりに悩んでいたのにあつさり言うなよ、みたいな感じで。

「まあ、ちょうど良かったんじゃないか？ 正直、俺もいつまでお前の兄で居られるか分からなかったし」

「あはは。やっぱり妹相手に欲情してる。兄様の変態」

「お前はもう一度ブーメラン効果について勉強してくるといい」

「兄様と釣り合いの取れるように調教されたの。責任とってよね」

「はいはい。それじゃあ一生涯かけて、その責任を果たすことにするよ」

いつも通りのやり取りだ。結局、戯言めいた関係を終わらせたとしても、俺とこいつは何も変わらないということなんだろうか。それはそれで安心する。

「ところで兄様。指書き文字をやめたのに、一番大切な、口で言うて欲しいセリフを聞いてない」

木乃香の意図を察する。確かにこういうのは、はじめとしても大切だよな。

木乃香はソファの上に正座で座り直し、俺の言葉を待っている。端から見ると妙な光景だが、俺も佇まいを正し口を開いた。

「木乃香。妹として、家族として、そして女として お前のことを愛している」

「うん。兄として、家族として、男として。ウチは兄様のことを愛しています」

そして俺たちは本日二度目となるキスを交わした。

近衛木乃香。妹、家族兼 恋人。



第七八話：ヨスガにソラってるPart 6（後書き）

諸悪の根源は同次形微分方程式である。

でも指書き文字は個人的に好きなシチュ。流行れ。

いつになるか分からないけどPart 7の次から麻帆良祭開始。

## 第七九話：覚醒（前書き）

テスト最終日。午前で解散だったのに、午後に実習入れられた絶望感マジ絶望。

今回は五九話で言ったネギのリベンジマッチです。たった三週間話を進めるのに何ヶ月掛かってんだよと。

そしてサブタイが全てを物語っているのです、予想が簡単についてしまうという。



## 第七九話：覚醒

「誰だ貴様ら」

それは夕食時のこと。日々のルーチンワークに沿って今日も茶々丸が作った夕食に舌鼓を打っていた。

この家に住む木乃香やエヴァも同様にテーブルを囲み、普段通りに時間は流れていた筈のだが、唐突にエヴァが俺と木乃香に向かってそんなことを言ったのだった。

「エヴァ……大丈夫か？」

「どしたんエヴァちゃん。疲れとるん？」

思わず箸を置いて、俺の正面に座っている友人の心配を本気でする。主に頭を。

すると、エヴァは「フツ」と小さく笑みを漏らして、何故そんな結論に達したのか語り始めた。木乃香と共に憐憫の目で見ていた所為かもしれないが。

エヴァは深く椅子に座り直して背凭れに体重を預ける。テーブルで死角になって見えないが、おそらく足を組んで尊大な態度を取っていることだろう。

TPOを弁えれば犯人を追い詰める名探偵に見えないこともない。身体は子供、頭脳は大人といったバーロー的な意味で。これからどんな迷推理が聞けるのか実に楽しみだ。茶々を入れず、木乃香と共

に拝聴する。

「上手く化けたつもりだろうがな、この私の目は誤魔化せんぞ。食事中だからといって、あの兄妹が普通に距離を空けて座るわけがないだろう。姿形だけではなくもう少し内面を調べておくべきだったな。アイツらに化けるなら膝の上に座る、『あ〜ん』とか言ってお互いに食べさせあう、スープは口移し、ぐらいのことはしないと不自然極まりないぞ」

「木乃香さんや。後でちょっと反省会しようぜ」

どうやら食卓を囲む際、木乃香と距離を空けて座っていたから、俺たちは疑惑に満ちた目でエヴァに見られているらしい。どんな理由だ。

言う必要は全く無いだろうけど、一応念の為に言っておくと、俺と木乃香は口移したとかそんな奇抜な食べ方は一切していないから。全く。人のことを、歩く風紀紊乱みたいに言うのはやめてもらいたいぜ。

距離を空けたと言っても、世間一般じゃこれくらい普通だろうに。なのに、まさか入れ替わりトリックを疑われるとは。

双子の入れ替わりは定番とも言えるけど、俺たち異性ですよ。顔を潰した死体を用意したって入れ替わりは成立しないって。

「茶々丸。お前の主人に何か言っておいてくれ」

迷探偵の助手に話を振る。茶々丸はひとつ頷くと、朗々と喋りだした。

「指紋や皮脂、頭髪等は本人のものと一致。よく用意したものです。食事の中の細かい癖なんかも完璧に真似られています。最後の最後で詰めを誤りましたね。この兄妹に成り済ますなら一般常識は捨てるべきでした」

ホームズ  
ワトソン  
主がダメなら従者もダメだったぜ！　ところで、何で俺たちは距離を空けて座っただけで、こうも言われなれないといけないのだろうか。

日頃の行いの所為ですね。仕方ありません。

「『全ての不可能を消去して、最後に残ったモノが如何に奇妙なことであっても、それが真実となる』とホームズさんは仰っていますが、何で一番まともな結論を投げ捨てるかな」

「一番まともな結論だと？　フン。ここから言い逃れできるものならやってみるがいい」

「いや、指紋とかDNAが一致するなら本人じゃん」

「それはないな」「ありえない」

エヴァ主従からほとんど同時に否定された。え？　なに？　寧ろ今の状況を否定されるなら一生イチャついてるって意味に取れるんだけど。

隣に座っている木乃香に視線を送ると、木乃香は目を伏せて一人語りに入る準備をしていた。まるで船越英一郎に追い詰められた犯人のようく。

ミステリーなのかサスペンスなのかハッキリしないけど、取り敢えず空気読んでコナン君が事件解決したときに流れてるBGMを口笛で吹く。雰囲気作りは大切。

犯人が最初に分かるのがサスペンス。受け手にも推理をさせるのがミステリー。区別するならこんな感じだろう。

「とまあ、悪ふざけはここまでにしておいて、だ」

そう言うと、エヴァが今まで続いていたバカ話を切り上げて本題に入る。ひとときの口笛演奏タイム終了。一人語りをスルーされた妹様はちよつと不機嫌。

しかし、これから本題に入るエヴァに水を差すのも悪く、このまま黙って耳を傾ける。

「まあ……あれだ。人生相談くらいなら乗ってやらんこともないぞ」とエヴァは言う。木乃香と視線を交わして、兄妹揃って小首を傾げた。

「突然どしたん？ 差し当って相談事は特に無いと思うけど……」

俺も木乃香の言葉に同意する。エヴァに相談するようなことはないし、あったとしても既に適当に解決してしまっている可能性の方が高い。

だが、話を切り出したエヴァはどこか不服そうである。気のせいではないければ茶々丸も。

「突然どうしただと？ それはこっちのセリフだ！ 昨日まで私たちの存在自体忘れて散タイチャついていたくせに、急に許容範囲内の距離感に収まって！ 勘繰るなど言う方が無理に決まっているだろうがっ！」

「普段から騒がしい人が突然黙り込むと、逆に気になっていつも以上にイライラしてしまうアレです」

茶々丸が分かりやすい例を挙げてくれるが、それは今イライラしているということだろうか。行動を改めているんだから勘弁して欲しい。

「まあ、ちょっととした心境の変化というヤツで。それともウチらはずっとイチャついてた方が良い？」

「節度を守っていただければ」

「現在進行形で守ってます」

すると、エヴァンジェリンさんが精神的に一歩ヒいた位置からこちらの正気を疑うような目で見えてきた。

「……それもそうですね。では私からはこれ以上何も言いません」

茶々丸はスッパリと会話を切り上げてくれたというのに。

「おい！ 茶々丸、それでいいのか！？」

やけに食いつくなぁ。そんなエヴァを見ながら、俺と木乃香は黙々と箸を進めていく。

自分たちのことを話されてはいるが、自分たちのことを話すつもりはないのだ。まあ、相談に乗ってくれるというのなら必要になったときに頼むとしよう。

そして茶々丸の切り返しが続く。

「所詮対岸の火事ですし、黙殺を決め込むとしましょう。スルーイフですね。個人的には、もう『度の過ぎた兄妹のスキンシップ』なんて戯言めいた言い訳を使つつもりはない、と有り得そうな結論で納得することにします」

つまり茶々丸は人の恋路には無関心を徹されるようだ。

ところでその納得の仕方はどうなんだろう。余りにも正鵠を得ていないのではないだろうか。

「ああ、そうそう。言い忘れてたけどウチら生涯を添い遂げる的な意味で付き合うことにしたから」

はい、妹様の爆弾投下！。

そら見る。やっぱり明確な原因があるじゃないか、とエヴァはどこか納得した様子である。そして、無関心を決め込むらしい茶々丸は、

「……それはタイミングが悪いですね」

と、呟いた。

「何のタイミング？」

「いえ、夕食前に言っていただければ、赤飯を用意したんですが…  
…。まあ、兎も角、おめでとうございます」

無関心なのは恋路だけであって、祝福はちゃんとしてくれるらしい。  
茶々丸さんマジ聖母。

「やー、ありがとう」

茶々丸からの祝辞に木乃香は朗らかに応える。何だかんだ言っても、  
ここに居る面子は道德からは程遠い位置に居るしな。

「というかバカップルにしても順序が逆過ぎるだろう。何故付き合  
いだしてから距離感とかが落ち着くんだ」

そもそも今は本当に二十一世紀か？ 私が生まれた時代に戻ったか  
のような気分だ。と、エヴァは言う。

「いやいや。プロポーズした後にキスをして好きだと告白する人も  
居るし、そこまで言う程ではないだろ」

俺たちだって無駄に争う必要のない敵を作るつもりはないからな。  
本気で付き合っていくと決めたなら、人目があるところでは自重し  
ますとも。

しかし、どうやらこれは本当に収集がつかなくなりそうな話題なの  
で、代わりになる話題を提供するでしょう。

「ところで茶々丸。今日の深夜に学園の結界が破られたらすぐに張  
り直してくれない？」

「はあ。まあいいですが、何をするつもりなんですか？」

「じゃあさエヴァ。今日が何の日か覚えてる？」

それにしても、本当に無駄なことってというのは一体何なんだろうか。

役に立たないこと。物事を行っただけの効果や効用のないこと。な  
どと辞書には書かれているが、そんなことはないだろう。

人が行動し、考動したのだ。

誰かが何かを行うために動いたのだろう。考えた上で動いたのだら  
う。ならばそれが無意味に終わる筈がない。

確かに結果だけを見れば、成果を挙げられないときもあるかもしれ  
ない。しかし、人が動いたからには何かと出逢った筈だろう。

袖振り合うも多生の縁。それは瑣末な、ほんの些細な出逢いかもし  
れないけれど、ヒトを変えるには十分過ぎる。

そもそも『駄』という漢字には荷物を運ぶ馬といった意味がある。

無駄とは、荷物を積んでいない馬になるわけだ。成程、荷を積んで  
いない空馬をいくら走らせたところで駄賃はゼロ。しかし、稼ぎは  
ゼロでも馬にエサを食べさせないといけなわけだから、無駄飯と  
なるわけだ。



物事を行っただけでそこに成果はない。辞書に書いてある通りの無駄である。

けれど、それは無意味なことだろうか。

空馬を走らせる。道筋に沿って走る。人が往来する中を走る。

何か意味があるかもしれない。そう思うことこそが、重要なのではないだろうか。そして意味を見出せたら、それはきつと無駄じゃない。

長い人生、荷物を降ろして走った経験が、回り回って自分を助ける導しるべになるのではないか。

だから授業変更で、本来なら放課後になる時間に授業を詰め込まれたとしても、それは時間の無駄なんかじゃないんだ！ 最後には自分を導くための事柄になる筈なんだ、多分！

「そういうわけでスプリングフィールド教員。地べたに這い蹲る経験も決して無駄じゃないと思いなよ。世の中それでも思わないとやっついていけないことばかりなんだよ」

現在深夜一時過ぎ。場所は世界樹前の広場。ここに居るのは俺とエヴァと担任の三人だけ。

十歳児をこんな夜遅くまで起こしておいて、尚且つ座布団の代用品として使っているこの場面。何も知らない人に見られたらどう思われるのだろうか。

とは言っても、夜は冷えるし、時間潰しには飽きたし、地面に直に

座ると冷たいんだよ。仕方ないね。

これが木乃香となら、木乃香の体温が地面に奪われないように喜んで尻に敷かれるものなんだけどさ。

「というかハウル。お前一体何がしたかったんだ？ 児童虐待はい趣味とは言えんぞ」

「虐待とか人聞きの悪いことを言うなよ。怪我なんて一切させてないだろう。一応防戦しかしてないんだから」

単純な魔術戦をしながら近付いて足払いを掛ける。倒れたところを座布団代わりに使用する。日頃の行いと比べてみてくれよ。超親切設計だろ。

ちなみに木乃香や茶々丸やチャチャゼロは家に居る。夜も遅いしね。安全面を考慮して付いて来るのはやめてもらった。

さて、そろそろこっちの用件も始まるから、ネギ・スプリングフィールドにはお引き取り願いたいんだけどなあ。俺にはいい退屈凌ぎになったよ。連れ出されたエヴァはすごく暇そうだが。

なんて思っていると、真下から呻き声と共に「もう一度」という再戦を乞う声が聞こえてきた。

「じゃ、これが最後ね」

そうネギに告げると俺は立ち上がって、距離を取る。

ネギは起き上がって詠唱を開始する。今更だが、何故ネギと戦うこ

とになったのか、いまいち趣旨や過程を思い出せない。予定だけは覚えてたんだけど。

特に俺が詠唱の邪魔をすることもなく、呪文を完成させたネギは俺に向かって魔法を放つ。

「『白き雷』!!」

放たれた一条の光は大気を斬り裂き、真っ直ぐ俺へと向って来る。

対人戦で使うにしては少々物騒な魔法だが、まあ地面に転がされた回数からネギは徐々に強力な魔法を使うようになったよ。

そして俺は足で地面に一本の線を引き、

「くわばらくわばら」

と、一言呟く。

すると、俺に向かって直進していた筈の『白き雷』は突然進行方向を変え、足で引いた線の向こう側に着弾した。

初めて見るであろう現象に苦虫を噛み潰したような顔をするネギ。

菅原道真が大宰府に流された後、京都では頻繁に雷が落ちるようになったらしい。しかし道真の領地だった桑原という土地にだけは雷は落ちなかった、と姫神さん家の妹さんが言ってた。

この国には昔から避雷を主にした禁厭まじないが結構あって、レパトリーには事欠かないのだ。

こんな基礎的な魔術未満の禁厭は使う機会が限られているし、俺自身滅多に使わないから良い復習になった。

ネギはというと、次の魔法の詠唱に入ったようである。相対する俺は相変わらずの棒立ち。そして呪文が完成したようだ。

「『雷の暴風』!！」

新たな魔法を放つネギ。放たれた『雷の暴風』は周囲に若干の被害を及ぼしながら一直線に突き進んでくる。

散々ネギの魔法を無力化してきたからか、加減なんかは考えなくなつたらしい。

「おいおい。この俺に、まだその程度の魔法が通用すると思ってるのかよ。なら」

一応俺も、十歳の子供を自分の退屈凌ぎのためにこんな遅くまで付き合わせて悪いなあ、とは六ミリグラムくらいは思っているわけですよ。

なので最後と言った手前、今後滅多に見ることのない希少な体験をさせてやるう。

地面を蹴る。進行方向は前。『雷の暴風』にこちらから当たりに行く。そして、右手を振りかぶり、

「まずは、その幻想をぶち殺す!！」

『雷の暴風』を殴りつける。

右手が触れた瞬間ネギが放った渾身の『雷の暴風』は呆気無く消滅した。この空間で暴力の限りを尽くしていた魔法は、そよ風程度の名残を感じ取るのが精一杯だ。まだ線香に点いた火を消す方が、手応えがあるのではなからうか。

「おおっ」

自分でやっておいて何だけど、自然と感嘆の声が漏れた。右手を見つめながら、何度も開閉を繰り返す。違和感は無し。

いやあ、前々から出来るとは思っていたが、実際に試してみて、それが成功したとなると感慨深い。

今日から俺も超能力者かあ。嘘だけど。正直使い勝手は悪かった。

「おい待てコラ、その殺人鬼。今さっき何をした」

第一声は、退屈からくる欠伸を噛み殺しながらも、律儀に付き合ってくれていたエヴァが。

今までのような禁厭を用いた無力化ではなく、術の構成や魔力そのものを消してしまう無効化現象。

驚きのあまり当事者であるネギは固まってしまっているようだ。

そんな二人に分かりやすい説明。

「これは俺の一分の一のスキル『無効脛』ライフゼロ もとい、さして珍

しくもない普遍的な『イマジンブレイカー 幻想殺し』さ」

嘘ですよ。

今は亡きアスナ姫の『魔法無効化能力』がその正体。ねえ、知ってる？ ていうか覚えてる？ 俺って見稽古のスキルホルダーなんだよ。

一度見れば大抵の事は憶えられる。二度見れば磐石。

元ネタの鑢七実は肉体改造しないと出来ない忍法や、遺伝や血統による能力なんかも見取っていたしな。

ノリで魔法を右手で殴ってみたけど、そんな必要は一切無かったぜ。

「それじゃあ、時間が来たし、スプリング教員。最後の最後にちょっとした講釈垂れてやるよ。」

ユーリー・スコット教授の『さあ、諸君、授業を始めよう。あと十五分はある！』というセリフは、教授の人柄と、戦時中という特殊な環境、そんな中でも向学心を失わない熱心な生徒たちといった様々な要素が合わさって、心を動かす感動的な場面になってるんだ。

あれを現代社会でやられると、ただただ殺意が沸くだけだから、実際にやる場合は気を付けた方がいい」

言い終わると同時に、俺は縮地でネギの隣にまで距離を詰める。そしてネギの襟首を掴み、広場の隅へ退避。つーか、一旦始まるとネギは完全に邪魔なので《門》を職員寮に繋げて放り投げておく。

「『我は至高の代行者、暁の子、至上と下界を繋ぐ者なり。我はかの外にあらず、かの調和は我が内にあり』」

直後　空が落ちた。

学園結界を障子紙のように突き破った破壊の権化が、大気と大地を容赦なく揺さぶり、辺り一面を閃光と轟音と爆風とで呑み込んだのだ。

ここまで前座。そして、ここから真打ち。

エヴァには見えただろうか。月を中心として、夜空に浮かぶ黄道の牡牛座から双子座までが？ぐにヤリ？と歪んだことを。

実際、空が落ちるなんて杞憂なこと、現実にかかる筈がない。本当に降り注いだのは高密度の魔力である。

世界を廻る流れとなると霊脈が有名になってしまいが、なにも魔力は地中を走るだけではない。空気中にだって確かに存在している。

諸行無常ではないが、大気を漂う魔力もずっと同じ場所に留まり続けるというのは難しい。偏西風の如く、世界を廻る大きな流れになっっているのが常だ。

今回はその一つの流れを、丸々全て使用させてもらった。総量だけならば霊脈を一つ叩きつけるようなものだ。

普通なら年単位で仕込むであろう広域殺戮術式。十八年前、自宅を建てる時に麻帆良に立ち寄ったが、当時の俺は余程暇だったらしいな。

気付けば、舞い上がった砂塵は落ち着きを取り戻し、再び地面に積もっていく。

視界は良好。眼前では、見慣れた広場は既に消失しており、ぽつかりと大穴が口を開いている。世界樹の下ってほとんど空洞だったかな。

「エヴァやーい。生きてるかー」

木乃香や茶々丸を連れて来なかった理由をご理解いただけただろうか。不死身の吸血鬼なら、まあ大丈夫だよな。

すると、俺の声に応えるように、氷の礫が飛来した。

「馬鹿か貴様アツ!? ここは戦場じゃないんだよ! 何か派手にやるなら事前に言え! 久しぶりに死ぬかと思ったわツ!! とうか秘匿とかは一体どうするつもりだ!？」

礫を片手で払い落としながら、飛んで来た方向を見る。そこではエヴァが少し埃を被って仁王像のように立っていた。どうやら、かなり怒っていらっしやるようだ。

「おいおい。絵に描いたような品行方正な人格者であるこの俺が、何のためにここ最近、ずっと学校をサボっていたと思ってるんだよ」

「品行方正な奴は広場を消し去ったりしない」

そういえば、去年の夏休み最終日にも、ここを瓦礫の山にしたっけなあ。前回よりも入念に下準備をしているため、人払い、認識障害、



空間隔離、その他諸々は十全に仕込んである。

「まあまあ。カバラを基礎にヘルメス学の儀式術式を取り入れ、ソドムとゴモラを滅ぼした神の炎になぞらえて創られた広域殺戮術式の被害を、たったこれだけにまで抑えたんだ。広場の外じゃ精々旋風が起こったぐらいだろう」

今この事態に気付いているのは、俺とエヴァの二人だけではなからうか。破った結界はすでに茶々丸によって修復されているからな。

「何よりも腹立たしいのは、貴様がよく分からん能力で自分の安全だけはちゃっかり確保していたことだ」

「あー、無効化のこと？ これ思った以上に使い勝手が悪くてさあ、多分今後使用する機会は訪れないわ」

「……まあいい。ハウルを串刺しにして氷漬けにするのは家に帰るまで待つてやる」

別段、魔法無効化能力は必要ないけど、捨てるのはやめておこう。希少価値はあるし。

そして、エヴァは先程までとは打って変わって、僅かに逡巡しながら言葉を紡ぐ。

「それで、だ。この何とも言えない微妙な敵意は一体何だ？」

実はさっきから俺たちは敵意を浴びせられている。エヴァが微妙と称するのは、敵意はあっても悪意や害意といったものが感じられないからであろう。

「そりゃあ決まってる。熟睡してたのに不意打ちで叩き起こされてマジギレしてるんだよ」

誰がだ、とエヴァが問う。

竜、と俺は答えた。

そもそも去年、この広場を瓦礫の山にすることになった切っ掛けである。まあ、霊脈一つ分の魔力を使って刺激すれば、そりゃあ起きるわな。

そしてエヴァが何かを言う前に、空気を讀んだ一匹のワイバーンが大穴から顔を出した。

「アレのことか？」

「いや、違う違う」

指を差して確認するエヴァの言葉を、俺は即座に否定する。それにあんな雑魚と『彼女』を比べるのはどうかと思う。

「GYWAAAAAAA」

「!!!!!!」

その巨躯を俺たちに惜しみなく晒し、雄叫びを上げるワイバーンであったが、途中から雄叫びはただの断末魔に切り替わってしまった。

「おいハウル。私の目にはそこらの瓦礫が意思を持ってワイバーンを圧殺したように見えたんだが」

「……これはアレだよ。自然霊が力技でカタチを成そうとしたから、あの哀れなワイバーンは核にされたんだろう」

悠長にその光景を眺めていたら足元の地面が？ぐらリ？と揺れた。いや、ひよっとすると街が震えているかもしれない。怒りで。もしくは八つ当たりで。

エヴァと同時に跳躍してその場所から離れる。大穴から距離を取り、まともな足場があるところへ。

眼下には、石畳やアスファルト、電灯に鉄骨と、辺りにある素材を存分に活かした現代アートのような 竜 が居る。既にワイバーンの原型は留めていない。

「何だかんだ言って一年近く眠ってやがるくせになんて寝相の悪さだ。それとも地球の寿命で換算するとまだ0.3秒程度しか寝ていないとでも言うつもりか」

「冷静に考えると、あの起こし方はマジギレしていいと私は思うんだ」

そんなことより収集つくのかコレ？

と、呆れながらエヴァが呟く。まあ、無闇に被害を広げないよう、そろそろ『彼女』には大人しくしてもらいたい。

このままだと謝罪の言葉すら聞き入れてもらえなさそうだ。

その辺に落ちている小石を拾い、三角形にも似たルーン文字を刻む。

やれやれ、と肩をすくめるように詠唱を始めたエヴァをその場に残し、俺は 竜 に向かって跳ぶ。

「さっきのは俺が悪かったよ。反省してる。ごめんなさい。だからちょっと落ち着いてくれよ、お願いだから」

謝りつつ頭部に向かって小石を投げる。

「『汝は閉ざされた門。汝は死せる巨人。汝は茨。 汝は茨。 されば阻め、スリザス』」

小石を足で踏み付けるようにして頭部に着地。衝撃を殺すことなく次の跳躍に活用する。

そして 竜 の頭からは夥しい量の茨が 竜 を拘束せんと増殖していた。加えて

「『凍てつく氷枢』」

冷たい棺桶が 竜 のために用意された。茨と氷による二重の檻。地力は圧倒的にあっちの方が上だけど、目覚めたばかりの子供相手に抜けられるようじゃ、最強クラスの名折れだろう。

停止を余儀なくされた 竜 に対し、俺とエヴァは悠然と歩を進める。

「いや、ホントごめん。悪かった。最近コソコソ動き回ってる奴が居てさ、牽制も兼ねて派手に何かやっておきたかったんだ。お前だつて喰われそうになるのはもう二度と御免だろう？」

語りかけたところで、当然というべきか、反応は何も返ってこなかった。

少しばかり真面目に 竜 を見る。寄せ集めのカタチなんかなくても顕現できるように、こちらからも『彼女』のことを定義してやる。

膨大なエネルギーが抜けたからか、ワイバーンを核とした鉄屑の塊はただの現代アートに成り下がった。

そして？ユラリ？と陽炎のように目の前の空間が霞む。

「ほっ」

俺から一步下がった位置でエヴァの声が聞こえた。妙なカタチに頼らない純粹なエーテル体だからこそ、眼前の存在の凄さを改めて認識したのだろう。

尚も俺は見る。 視る。 観る。

注意深く観察し、余すところなく注視し、見極めるように見分する。

そして 竜 は童女の幻影へと姿を変え、その身を顕現せしめたのだ。初めて逢ったときと寸分違わぬ容姿である。だからだろうか、

「おいハウル。貴様この状況で惚気けるつもりか？ それともこれは貴様の趣味か？」

エヴァに冷ややかな目で見られているのは。

「いや、一応ちゃんとした理由があるから」

手っ取り早く結論を述べよう。竜 がとっている姿を一言で表すと　ロリ木乃香となる。

初めて逢ったとき。それはこの童女　俺が　竜　を『彼女』と呼ぶ理由　に決して楽観視など出来はしない生命の危機が訪れていたときだ。

つまり目覚めたばかりの『彼女』は安全な庇護下に入るため、本能的に最も適した容姿を選んだのだろう。

その対象が俺で、最も適した容姿というのが、今の『彼女』の姿であつたということだ。

「要約すると、その頃からお前は妹に対して並々ならぬ感情を抱いていたということだな」

「現状を考慮するに全く説得力のない言葉だが、そのセリフは否定させてもらおう」

去年の俺は、まさか妹と恋人関係なるとは予想だにしていなかったとも。

まあそんなこと今はどうでもいいんだ。一番単純明快な答えが出ている、問題にすらならないことだからな。

「叩き起こしたついてもう一度弁明させて欲しい。俺が君を名付けていいか？」

これが最も重要な理由になる。いつまでも呼び方が 竜 だの『彼女』だのでは味気ないだろう。それに名前は大切だしな。

『彼女』は幼い木乃香の姿で肯定の意を伝えてきた。少し安堵。容姿も相まって、拒否られたら地味に傷ついていた。

そして俺は考えていた名を告げる。

「 『綾乃』 」

思い切り妹の名前で縛ってるけど、本人は気に入ってくれた様子である。

「次はもつと穩便に起こすから、名前を呼んだら反応してくれると嬉しい」

じゃあな、綾乃。

別れの言葉を告げると、綾乃は再び眠りについた。

よし。それじゃあ帰って寝るか。忘れ物は何も無いはずだ。

エヴァと一緒に《門》をくぐって自宅に辿り着くと、そこからはお互いに自室に向かって歩き出した。

少しばかり疲れた。流石に眠い。欠伸を噛み殺しながら部屋のドアを開ける。

そしてすぐにベッドの中へと潜り込んだ。隣には妹様という先客が寝息を立てていたが、気にせずこのまま眠ってしまおう。

「おかえりー」

そう思っていた矢先、木乃香に声を掛けられた。

「あー、悪い。起こしたか？」

「うん。兄様がいつ帰って来ても起きれるように、浅い眠りを繰り返してただけだから」

「そこは素直に眠ろうぜ。睡眠時間とかは多少は気にしよう」

「別に睡眠時間なんてどうでもいい。それよりもっと気にするべきことがあるんと違うん？」

木乃香にそう言われると何があったか考えて、俺は一つの質問を口にした。

「俺の留守中にとてつもない異変が起こったりした？」

「うん？ 別に何も無かったけど。いつも通りやったよ」

十数分前に起こした災害クラスの魔術や綾乃の起床は、十全に隠蔽されていることが証明された。当分の間は関係者以外広場に立ち寄ることは出来ないであろう。

「そつやなくてな兄様、今二人つきりなんやから」



そう言うと木乃香は俺の肩に手をかけて身体を乗り出すようにすると、迷うことなくキスを交わしてきた。ちよつと吃驚。

「おやすみのキス。一回やってみたかった」

えへへ、と木乃香は照れたように笑うと、背を向けて布団の中に潜り込む。

うわー、何だこの愛おしい生き物。思わず後ろからハグして、うなじに顔をうずめて、首筋に唇を当てたくなるじゃないか。

善は急げ。そういうわけで即実行。

「兄様、擦ったい」

からからと木乃香は笑う。

そういえばと、以前俺がやられたように木乃香の耳たぶを甘噛みしてみる。

「ひゃんっ……!!」

「眠気が覚めてしまったからその意趣返しというわけでは決してないよ」

木乃香が身体を反転させ、向かい合ってきたので、今度はこちらから唇を奪った。

そして紆余曲折を経て、最終的に抱き合いながら俺と木乃香は眠りに落ちたのだった。

ちなみに、この日どこかの竜穴が溢れたらしく、天ヶ崎千草が魔力の波に攫われたのは余談。

後日、薬王寺杏子が夢に相当ヤバイモノが出てくるようになったと木乃香に相談してきたのも余談。

そして、世界樹前の広場に出来た大穴とワイバーンのミンチを処理する際、ついに関係者が過労で病院に運ばれたのは、完全な余談である。

## 第七九話：覚醒（後書き）

朝倉やのどかに白羽の矢が立った理由。試行錯誤というか迷走の原因。

「綾乃、やっちまえ」

てな感じで、キヨン君が長門をけしかけるよりも軽いノリで超の計画は崩壊してしまうから。

彩輝「調子に乗るな超鈴音。俺は生まれ変わったばかりだ。お前の計画など一言で潰せる」

超「あなたほどすごい人物に会ったことはナイヨ。でもいくらあなたでもそれは無理ネ」

彩輝「そう、一言では無理かも。 二言だ」  
てな感じで、ハリエツト・ジョーンズ政権のように呆気無く全てが終わってしまうから。

未来から来た中華風少女・超鈴音。少女は願う。世界の救済を。それに応えたのは神木の化身。眠りから醒めた元・リライト能力者は何を成すのか。

セカイの未来を護るため、書き換えさせるわけにはいくまいよ。これは『魔法の第三惑精 クリーミー あやのん』と共に魔神を討伐する物語。

なんて超展開には流石にならない……はず。

## 第八十話：関係者、盡く

一体いつ以来になるだろうか。こうして学園長室に呼び出され、実際に足を運ぶのは。

不明瞭になった記憶を辿り、修学旅行初日に来たのが最後かな、とおそらく最新であろう情報を思い出す。

切羽詰っているのか、時間がないのか、金銭に余裕が無いのかは知らないが、未だに学園長室の扉の立て付けが悪いことに、俺は半ば驚きを隠しきれない。

とまあ、原因も理由も俺が関わっているという点には目を瞑って、何故俺がココに呼ばれたのか説明しようか。

言わずもがな、世界樹前の広場が消え去って、代わりに地の底まで達しているかのような大穴が存在しているからである。

事が起こる直前まで俺とエヴァはネギと一緒に居たわけで。特に口止めもしていないし、そこからジジイの耳にも入ったんだろう。

徹底的に隠滅したわけではあるが、ここの職員にまで隠すつもりは最初からなかった。というか世界樹という魔術界の宝の真横に、普通では到底あり得ない異変が起きたのだから気付かない方が問題だと思っ。

麻帆良祭開催まで、あと大体一ヶ月程度か。今年は中止かなー。

あの凄惨で悲惨な惨状が一般生徒にも知れ渡ってしまえば、それも

やむを得ないだろう。

多くの職員の負担を強いたり、俺が張った結界に更に人払いなどを重ね掛けしているのが現状だ。去年と違って、万が一にも一般人が目撃することはない。

「……一体、どういってもりじゃ」

重々しく俺の眼前に座ったジジイが口を開く。部屋に居るのは俺とジジイの二人だけである。ジジイは目に見えて疲労が顔に滲んでおり、近頃の激務を連想させる。

逆にこちらは来客用のソファに身体を預けた状態で、リラックスしたまま声を発した。

「おいおい。いつもいつも人が悪巧みしてるみたいな言い方はやめてくれない？ 実の孫を偏見の目で見るなんて教育者のすることかよ」

「ならそう見られないような行動を取ってくれぬか。お前のやったことは一歩間違えれば無差別テロと何も変わらぬぞ」

「まるで虐められる側に問題があるみたいない言い方じゃないか学園長。大体、テロになんてなるわけないだろ。俺には実現させたい目的なんて無いんだから」

「じゃあただの無差別大量殺人になるって？ ははっ。一体誰に向かって言っている。」

一応、綾乃を起こすのが目的と言えば目的だから、すでに達成され

てるしな。これ以上、俺は特に何かをするつもりはない。他のテロリストたちは知らないけど。

「……そうだな。改めて考えてみても、一番動機としてじっくりくるのはこれしかないな」

「それは、なんじゃ？」

「特に意味はない」

「……人的被害はゼロじゃがな、どれだけの損害が出たと思ってる」

「人的被害はゼロだって？ 過労で運ばれた職員たちを忘れるなよ。お前の部下だろうが。何初めから居ないみたいに扱ってんだよ」

「喧しいわ。誰の所為だと思っておる」

「少なくとも、最近の激務はどっかの誰かの失言だと記憶している。これには言い返せないらしく、ジジイも少しの間黙り込むのであった。」

「じゃがな、今回はかりは派手にやり過ぎじゃ。一組織の長として、正式に代価を請求する」

中々の凄みや圧力を掛けてジジイはそう宣言した。よし。屈してあげよう。

「オーケー。任せてくれ。無償奉仕でも魔術理論の提供でも何でも

しようじゃないか。まずは手始めに広場の修繕費だな。

麻帆良学園所属の近衛彩輝が 日本魔術相互扶助協会 から金を借りてくるから、その金で賄ってくれ」

絶対にやめろ、とジジイの目が訴えている。

「じゃあワイバーンか。週末に黒竜生け捕りにしてきてやるから何だよ。いらないのか？ ならヘラス帝国に龍樹を頂戴しますって予告状出してくるから それもやめろって？

全く。アレもダメ、コレもダメ。もつと生徒の自主性を尊重しようぜ」

「……もうよい」

と、俺に代価を請求すると言ったときの怒気は綺麗に抜け落ちて、疲れきったような声でジジイは呟いた。

「何を言っても無駄なことはよく分かった。話は終わりじゃ」

「あつそ。でもまあ、倒れた人たちのフォローはちゃんとしてやれよ。じゃないと、次は広場じゃなくてアンタの足元が消えることになるぜ」

ま、ほとんど手遅れかもしれないけど。

そして、けらけらと笑いながら近衛彩輝は学園長室を去って行った。

学園長は溜息をつきながら、椅子の背凭れに体重を預け、自らの眉

間を揉む。ここ最近満足に休める日がなく、老体には疲労とストレスが溜まっているのだろう。

彩輝を呼び出したとき、学園長には彩輝を上手く使う考えがあったのだ。

今回は学園側に落ち度はなく、妙な後ろ盾もない近衛彩輝の単独犯。どう見てもこちらが被害者で彩輝が加害者である。

ならば順当に、被害に見合うだけの対価が請求できるだろう、と学園長は考えていた。実際に本人に会うまでは。

先程、ヘラスから龍樹を盗むなどと言っていたが、彩輝なら確実にやる。そして難無く成功させるだろう。

こちらにとってどんなに都合の良い条件を提示しようとも、最終的には学園のマイナスになる光景しか学園長には思い浮かばなかった。

利用しようとするだけ、関われば関わるだけ学園の損失は大きくなると判断したのだ。

大した理由も、大それた動機もなく、面白可笑しく学園を引っ掻き回すであろう。そんな人間を組織の内部に引き込みたくはない。相対してすぐに考え直した。

最初はそれとなくネギの面倒を見てもらおうとしていた筈だ。だが彩輝がネギに対する興味はゼロ。ナギの息子と言っても無関心を貫いている。

広場に大穴を空けた日も、文字通り時間潰し感覚で相手をしていた



のだろう。話を聞くに稽古や訓練と呼ぶにはあまりにも杜撰な対応だった。

ネギに教師業よりも魔法の修行を優先させないようにするため、言い含めるのにも結構な時間を割いたのだ。

例えネギの修行を完遂させたとしても、今までのような地位が元通りになるとは考えられない。英雄の息子というのは今の学園にとつてあまりにも巨大な足枷であった。

今の三年生が無事に卒業すれば、それでネギにはイギリスへ帰ってもらうことになるだろう。

自覚的に損害を与え続ける彩輝よりはマシだが、ただただ廻り合わせが悪かったとしか言いようがない。

そして、彩輝が退出時に告げたように、不祥事続きで職員の不満が高まっているのも理解している。

過労で倒れたとしても今の学園には十分な保証すら満足に出来ない。これを機に辞表を提出してくる者も出てくるだろうが、それはなんとしてでも引き留めたいところである。

この調子で魔法関係者が減っていけば、いよいよ麻帆良祭は外部組織に頼らざるを得なくなってしまう。

例年通りならそれでも問題ないのだが、京都で鬼神が復活したりと、僅か一ヶ月の間に霊的な事件が立て続けに起こっている。その影響か、来年起こる世界樹大発光の周期も、今年に早まるというのが主な観測結果である。

そんな状況で外部組織に協力を仰ぐことなど到底できない。ただでさえ窮地に立たされているのに、これ以上弱みを見せるわけにはいかない。

そして、最大の障害と成り得るのが、実の孫である近衛彩輝なのであった。

彩輝が動けば動くだけ、学園は弱みを露呈させる結果に繋がる。今までの言動からそう考えるのが妥当であろう。

最早英雄である零崎彩識を抱え込むメリットよりも、デメリットの方が大きくなっている。

裏での評判がガタ落ちしている学園にとっては、表側の大々的なイベントである麻帆良祭を失敗させるわけにはいかない。イベント中に不祥事が起こるなど以ての外だ。

「どうにか、彩輝を刺激することなく大人しくさせることが出来ればいいんじゃないか……」

気まぐれな現象に対し、都合の良い有効な手段を思いつくことは困難であった。

そして学園長室からの帰り道、俺は超鈴音と遭遇した。

「また随分と派手にやらかしたようネ」

初めから俺に用があるらしく、超の方から話し掛けてくる。久しぶりの登校だというのによくここに居ると分かったものだ。

「いつものように茶化すことから始めるのは今日はやめてほしいヨ。広場が跡形もなく破壊される直前まで、彩輝サンがあの方に居たのは知っているのだから」

「はいはい。分かっていますよ。お前の関心はただ一つ、世界樹の大発光だけだもんな」

「ウム。話が早くて助かるネ」

？にツコリ？と微笑む超ではあるが、目は全く笑っていない。そんな超に俺はけらけらと笑い掛ける。

「まあ、安心しろよ。大発光は必ず起こる。ちょっと刺激して 竜 を起こしてみたんだが、その結果があの大惨事だよ。怪我の功名 というか、そのおかげで本来の周期よりも早く大発光が訪れるらしいがな。おっと、入念に下準備が出来なくて超的にはここはマイナスになるか」

「心配御無用ネ。早まる可能性も考慮して去年の内から準備は進めているヨ。計画自体は滞り無く進んでいるネ」

それよりも、と超は言葉を区切って間を溜める。

「麻帆良祭開催が一ヶ月後に迫る中、どうして 竜 とやらを起こそうとしたのが、私としては気掛かりだ」

超は暗に述べている。『お前、私の邪魔をするつもりか？』と。言

葉の裏に隠された副音を正しく聞き取り、俺は超に言葉を返す。

「まさか。お前の計画になんて微塵も興味がないとずっと言ってきたらどう？ 今回の件はただ単に興が乗ったからだって。それに妨害なんてコントローラブルな真似がああんな惨状を見てもまだ言えるのか？」

「さあ？ それはどうかナ？ アナタのことだ。何か手綱代わりになる打開策を見出してるんじゃないカ」

「あのおさあ。俺だって一応人間なわけよ。対するあちらさんはこの星の一部なわけよ。無理だろ。常識的に考えて」

だが、俺の言葉で更に超は考え込んでしまう。一般論なんて持ち出してしまったからか、余計に疑いを濃くしてしまったようだ。

ワイバーンをハンバーグの下拵えみたいにしたのは綾乃だけど、破壊活動を行ったのは俺だから超の疑念は正しい。加えて、手綱なんて握るまでもなく綾乃とは友好的な関係だから、頼めば力を貸してくれるだろうさ。

しかし、俺はそんなことを一切やるつもりはない。本当に。真剣に本気で。いやホント、マジでマジで。

「俺は面白そうないイベントでも始まらない限り、お前の計画には指一本分だろつと触れてやらないから。基本的に傍観を貫いてあげるからさ」

なんなら十重二十重に契約を立ててもいいが、と最後に付け加える。

「いやいや。その必要はないネ」

言いながら超は制服のポケットからICレコーダーを取り出した。ですよねー。こういう場合、言質は取られるものと思って発言するのが普通ですよー。

まあ、こちらも言葉にした以上、言霊を放った以上、違えるつもりはないわけだが。

「折角の祭りだからネ。私もイベントを催すつもりではあるヨ。そこでなら、いくらでも暴れてくれて構わないから、彩輝サンも是非参加して欲しいネ」

「気が向いたらな」

主催者からお誘いを受けた。確かそのイベントは武闘会だったか。利用する気満々ですね。逆に好感が持てます。

さて、これで話は終わっただろう。俺は超の横を通り、この場を去ろうとする。が、超にはまだ一つ質問が残っていたようだ。

「ところで、これは純粋な興味なんだガ。私の知る近衛彩輝という人物はここまで学園に損害をもたらしてはいなかったヨ」

「それはアレか？ お前の知る過去と俺の行動が一致していないと？」

「まあ、そういうことネ。解釈は色々あるが、アナタ個人としてはどう考えるのか聞いてみたいヨ」

「知るか。そういうのを考えるのは未来人の仕事だろうが。俺はその時々で気分が動いているだけだからな。何ならお前が居たという、既に確定した未来を殺したとでも考えてくれよ」

今度こそ話は終わったらしく、俺はこの場から立ち去った。

近衛彩輝の後ろ姿を見送りながら超鈴音は考える。

一応、言質は取ることが出来た。が、先程の数々の言葉はどこまで信用できるものだろうか。

真偽の程は分からなくても超鈴音には 竜 という得体の知れないモノを呼び起こせるだけで十分脅威に値する。

以前は霊脈を造り変えたと言っていたが、その過程が副産物として生まれたのは確定だろう。

問題は、ソレが世界樹が内包する魔力にまで干渉できるかということだ。

傍観に徹すると言った以上、彩輝自身が超を妨害するために 竜 を起こすといった展開には成り得ない。

だが、起こすことの出来るキーを誰かに譲る可能性までは捨て切れない。

昔のアニメなどでよく見る自爆スイッチ。超からしてみれば、それを見知らぬ誰かに託される可能性があるのだからここは慎重に考慮

しなければならぬだろう。

もちろん一番良いのはこれらの考えが全て外れてくれていることであるが、そこまで楽観視できる相手ではない。

何よりも超鈴音は、こんなところで失敗するわけにはいかないのだ。彼女の失敗は未来で起こる戦争に直結してしまうのだから。

それに加えて、超は学園に居る全ての関係者を出し抜かなくてはならない。

と言っても、こちらは以前から念入りに下調べをし、何度も何度もシミュレーションを重ねてきたのだ。超は麻帆良祭三日目にしか使えない、とっておきの切り札を有しており、成功率は100%に近い。

さらに最近では、超が最も危険視する男の影響で、学園長と対立する派閥が出来始めているのが喜ばしい。

主に魔法生徒が中心になっているのが心許ないが、その流れは確実に大人も巻き込んでいる。

「これで警備に穴が空いて動きやすくなれば、彩輝サンにも感謝するんだがネ」

その後、彩輝が引つ掻き回した別の事件の余波を受けて、満足な成果が上げられないことを容易に幻視できてしまうのが問題であろうか。

そもそも彼に関わった人たちはどうやって利益を得たのだろうか、と超は疑問を抱く。

そして依頼という単純な答えに辿り着くが、

「向こうが関わる気ゼロなのだから、私には絶対出来ない手段力」

これは学園側にも言えることなので良しとしよう。

だが、不確定要素はなるべく排除したいことには変りない。計画の成功率を格段に引き上げるため、麻帆良最強頭脳は近衛彩輝を刺激することなく封じる手を模索する。

あ。パスが繋がった。

そう感じた直後、見計らったかのように一人の女生徒が俺に話し掛けてきた。

「あの。彩輝さん」

「ん？ 誰かと思ったら宮崎じゃないか。珍しいというか、木乃香たち抜きで話すのは初めてじゃないか？」

声を掛けられた方向を見ると、何か分厚い本を手にした宮崎のどかが立っていた。手荷物から察するに図書館島からの帰りだろうか。あそこラテン語の本まで置いてるんだな。

妙なところで感心していると、単刀直入に宮崎が俺に話し掛けた理由を喋ってくる。



「世界樹前の広場で起こったことなんですけど……」

この一言で大体のことは把握した。あの夜起こった出来事を、他の人間の視点からはどのように見えていたか聞きたいのだろう。

「そういえば、あれ以来会ってないけどスプリングフィールド教員は無事なのか？」

「はい。ネギ先生なら怪我ひとつ無いですよ」

「不幸中の幸いというか、あんな災害に見舞われるなんてツイてないよね」

アレをまともに受けてしまったら、なんて想像するとゾツとしてしまう。

「今のこの学園は色んなところから狙われている可能性があるんだから、ジジイにはもっとちゃんとしてもらいたいよ」

「偶発的な自然現象なのか、人為的な産物なのか、それすらもよく分かってないんですよね？」

「政治的にも戦力的にも弱体化してるからなあ。テロリズムみたいなものだったら相当に厄介だね。スプリングフィールド教員は修行を切り上げてイギリスに帰った方が良いんじゃないかな？」

「……………えっ」

最後まで修行をやり遂げてから帰ると思っていたのか、宮崎の表情が固まる。

「ああ。そういえば仮契約してるんだったね。もしも帰ることになったらジジイに直談判するしかないんじゃない？」

「……ネギ先生が帰っちゃうかもしれないなんて」

などと宮崎が小さく呟いているが、構わず、俺は思ったことを口にする。

「あー、でも。向こうにも都合があるだろうからねえ。神楽坂も居るんだろ？ 二人も受け入れてくれるかどうか」

そうなると残酷だよねえ。定員が一人になってしまった場合とか。

俺の不確かな記憶を手繰ると、神楽坂との仮契約は両者合意の下で行われたが、宮崎は修学旅行中に起こったアクシデントの所為なんだろう？

ネギ自身がどう発言しようと、周りに居る人間がどちらを選ぶかなんて分かりきっている。

仮契約を解消してネギー人がイギリスに戻るか、従者を一人連れて行くなら神楽坂か。選択肢としてはこの二つくらいなものだろう。

例え神楽坂が席を譲ったとしても、後の人生において劣等感がずっと憑いて回るわけだ。

いやはや、目の前に居る少女が不憫でならないね。

「おっと話が逸れ過ぎたね。まあ、あの夜のことは俺も逃げるのに

必死でよく分かってないんだけどさ」

「……そうですか。もう結構です」

また色々と考えなければならぬことが増えた、とでも言いたげな表情で宮崎のどかは立ち去っていた。

それと同時にパスを切断。

誰に憚ることもなく、俺はのんびりといつも通りの思考に戻す。

今まで言ったことと考えたことは基本的に嘘なわけですが、と。

全ヒロイン攻略後にルート開放される隠しヒロイン的ポジションに居る私こと美弥子さんは考えるわけですよ。

タチバナ イツユ  
立花五露のバカヤローは死んだんじゃないのかよ、みたいな感じのことを。

ないわー。やけに嚴重な結界が敷かれたと思って侵入してみたら、馬鹿でかい大穴が空いてるんだもの。ホントないわー。

おっかしいなー。ヤツが死んだのは去年の筈だから、まだ後二年くらいは日本国内に居座れると思ってただけだなー。出来ることなら永住したいんだけどねー。ここ面白いし。

さてさて、叶わない願望は置いて、これを行ったのは誰だったというのが問題だね。

こんな荒唐無稽なことを出来るのは一人くらいしか心当たりがないけれど、五露じゃない……等。万が一にも五露が犯人だったら私殺されてるしね。

ということはだよ。あれクラスの化物がこの街に居るってことになっってしまう。

出来る限りお近付きにはなりたくないかな。この街の住人は面白くて最近自重してなかったから、縄張りを荒らしたとかで恨まれてたらどうしようか。殺されるかなー。

……ん？ おやおや。私を呼ぶ声が聞こえたと思ったら、いつぞやの？ ツベルクスピッツ？ ちゃんじゃないか。元気だった？

……え？ 宮崎のどか？ ああ。君の名前でしょ。勿論ちゃんと覚えてるとも。私的にはこういう覚え方のほうが性に合ってるんだよ。別に君が名前を覚えるのに値しない人間だとか、そんな傲慢なことは考えてないから気にしないでちょうだいな。

それで私に何か用？ 探すの大変だったでしょうに。それとも偶然縁があつたのかな？

………会って欲しい人が居るねえ。

いやだよ面倒な。私だって暇じゃないんだ。こう見えても、殺されるか亡き者にされるかの瀬戸際に居るんだよ。

いやいや冗談じゃなくてね……ああ、もういいです。

兎に角？ツベルクスピッツ？ちゃん経由で縁も繋がってるのに会えないってことは、会うべき時期じゃないか、必要そのものがないんでしょ。

……だからさあ、その人の強さとか私には関係ないんだって。ていうかそれは最弱を謳っている私への嫌味？

……お金とかの問題でもなくてね。私そういう等価交換みたいなのは嫌いなものよ。深い意味はないんだけどさ。

じゃあ、そういうことだから。悪いけど他を当たって。

……… だったら君自身を強くして欲しいなんて、大人しそうな顔して意外と強欲だね。

オーケーオーケー。美弥子さん、今ちょっと名案を思いついた。これで私の目的も果たせそうだね。

経験上強いヤツってというのは、どっか大事なモノが欠落してたり、逆に何かの感情が抜きん出てたりするんだよね。

？ツベルクスピッツ？ちゃんの場合は愛情が飛び抜けてるとして……そこで照れんなよ。私が反応に困るだろ。

まあいいや。じゃあ都合の良さそうな感情を奪うから。異論はある？

………無し、と。

うん。それじゃあいくよー。いち・にー・さん、パチンツ！

おめでとう。これで君は重要な決断を下す際、一切躊躇わなくなった筈だよ。

心が軽くなった気がする？ 礼なんかいいって。それじゃあ帰り道に気をつけてね。バイバイ。

……にしても、あの子には前会ったときに面白そうな方向へ転がるよう、色々手を加えた気がするんだけどな。さらに破綻したいだなんて、最近の子は怖いよ！。

そのさらに帰り道。またしても見知った顔を発見した。

俺の前方を歩くのは二人組の少女。白髪を背中を覆うように伸ばした女の子と黒髪を肩口で切り揃えた女の子。

さよちゃんと我が愚妹である。

しかし客観的に見ると、巫女と幽霊のコンビというのは、些かアンバランスではなからうか。まあ、そんなことを言っても今更だけど。

「よし」

と、後ろから声を掛ける。まずさよちゃんが振り返って、ワントンポ遅れて朱織も振り返る。

「あれ？ 木乃香さんは居ないんですか？」

「……第一声で確認することがそれですか」

二人で一つじゃないんだからさあ。兄妹間でもプライバシーは守りたいよ。

そこへ？ふわあ？と欠伸を一つ漏らした後、朱織が口を開いた。

「私ってさ　あ、これまでの付き合いで結構貞操の危機を免れたりしてたあ？」

「ねーよ」

お前とはそんな桃色な展開になったことなんて一度もないだろ。俺の記憶じゃ全部血のような赤色ばかりだ。

「まあ兎も角さあ、彩兄。ぶっちゃけて言うけど、妹と付き合いつって、私まで手を出されたみたいで、マジきめ　え」

「お前に言われると結構グサツとくるなあ。出遭った頃はあんなに初々しかったのに」

「彩兄分かってる？　英雄補正が無くなったら、ただの人殺しだよ　う？」

「おまえが言うな」

「それは今日一日で、彩兄が関わった人全てが思ったことだろうね　え」

おかげで相手の思惑の再確認とかが出来て良かったよ。途中予想外の人物が話し掛けてきたりしたし。まあ、俺は関わらないわけです

が。

「ああ。そうだ。一応言っておくけど、俺今年の麻帆良祭は基本遊ぶから。各々が抱えている依頼等は自力で頑張ってね」

「え？ 色々陰謀や私欲が渦巻いてますけど、動かないんですか？」

「えっ。だって木乃香と回りたくないじゃん。流石に神様とか公爵級の悪魔が出たら呼んでよ」

「あー、はい。馬に蹴られて死にたくはないので極力呼ばないようにします」

半ば呆れたような声でさよちゃんが返事してくれた。さっきまで会っていた連中にもこれくらいの素直さを発揮して欲しいものだ。

寧ろ穿った見方をして余計なことをしないでだろうか。互いの勢力を牽制し合ってた方がずっと有意義な労力と時間の使い方だと思うんだけどなあ。

「まあいいや。途中でポッキー買っていこうぜ。今は細く長く生きたい気分なんだ」

「私はプリッツがいいな あ」

「チョコレート的な糖分を摂取したい」

「はいはい。トッポトッポ」

「最後までチョコたっぷり」



「最期までチヨコに塗れた甘い人生を過ごして笑いながら死ね」

「瞬時に話を合わせられる時点で朱織さんも大概ですよねー」

そんなこんなで、俺たちは三人で帰路につく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6741m/>

---

魔法先生ネギま！～最果てを紡ぐモノ～

2011年12月11日00時24分発行